

---

# 続・ダメ男依存症候群 ～二人で一つの愛のカタチ～

霧谷香住

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

続・ダメ男依存症候群 ～二人で一つの愛のカタチ～

### 【Nコード】

N7764C

### 【作者名】

霧谷香住

### 【あらすじ】

付き合って一年、奈津美と旬は、何だかんだでラブラブな日々を過ごしている。そんな二人に起きる、様々な出来事。奈津美はたくさん壁にぶつかり、悩んで、考えて、笑ったり、泣いたり、怒ったり……二人の愛の行く末は？『ダメ男依存症候群』の続編です。そちらをから先にどうぞ。

## 1 風邪っぴき（前書き）

お待たせしました！ ダメ男シリーズ続編です。初めての方は、先に『ダメ男依存症候群』をお読み下さい。

## 1 風邪っぴき

土曜日の午前九時。

奈津美は、朝食の後片付けをした後、化粧をしようと居間に向かった。

今日は旬とのデートの日だ。

カオルに、安くて美味しいケーキバイキングの店ができたと聞いて、それを旬に言ったら、案の定、旬は行きたいと言った。それで今日、行くことになったのだ。

奈津美が化粧ポーチからファンデーションを取り出した時、ローテーブルに置いていた携帯が鳴り出した。

着信音は、メールの方だ。誰からかは見なくても、多分旬だろう。旬は丁度起きたぐらいだろうから、おはようというメールに決まっている。

そう考えながら、奈津美は携帯を開いた。

受信ボックスを開くと、予想通り、旬からだった。

内容も予想通りだろうと思いながら、奈津美はメールを開いた。

メールを見て、奈津美は眉を寄せた。

「何……これ」

思わず呟いていた。

そのメールの内容は、こうだった。

『ナツ…

俺はもうだめだ。

もうすぐ死ぬんだ。

まさかいきなりこんなことになるなんて思いもしなかったよ。

俺、死ぬんらはナツのおっぱいに挟まれて窒息死するって決めてたのに…

最後に、ナツに会いたかったよ…

ナツとチューして、ナツのおっぱい触りたかった。

こんなんじゃ俺、この世に未練があって成仏できなさそうだよ…  
化けて出るなら、真っ先にナツのどこに行きたい。

ナツ。とりあえずそれまでは会えないけど元気だな

ナツの愛する匂より』

何だこれは……一体どこからどうツツコむべきか。

朝っぱらから、こんなふざけた内容のメールを送られてきても意味が分からない。一体何が目的なのか、というか、何を伝えたいのか、全く理解できない。

しかも、今日これから会う予定なのだ。言いたいことがあるなら、会ってから言えればいい。

とにかく、解説に試みる。

『もうだめだ。もうすぐ死ぬんだ』

どういう意味だ。まさかこの言葉の意味の通りではないだろう。もし仮に本当なら、こんなメールなんて送ってくる余裕なんてあるわけがない。

なのに何だ。細かい内容はともかく、これだと遺書と言うか、何と言うか……

考えていても、埒があかない。

奈津美は、匂に電話してみることに決めた。

リダイヤルで匂を呼び出す。

コール音が、一回鳴り終わる。ここで少しおかしいと感じた。いつもなら、鳴り終わるかどうかで出るのに、出ない。

二回目……三回目……コール音が切れたのは、三回目が鳴り終わってからだった。

「……………」

コール音が途切れて、通話中になったはずなのに、何も聞こえてこなかった。

絶対におかしい。

「もしもし、匂？」

奈津美の方から、声をかけてみた。

「匂、どうしたの？　ていうか、あのメールは何？」

「……………」

全く反応がない。

「ちょっと、匂？ 聞いてんの？」

痺れをきらし、奈津美は少し口調をきつめにして言った。

「……………ナツ……………」

やっと反応があった。しかし、奈津美はその声を聞いてぎよつとする。

電話の声は、ひどくかすれていて、いつもの匂の声とは違っていた。何となく匂っぱいという声と、奈津美の名前を呼ぶイントネーションがそうだということで、匂だということは判断できた。

「匂？ ちょっと……………大丈夫なの？」

奈津美は事態を悟って、緊迫した声になる。

「……………もう、だめ……………」

「え、ちょっと……………匂！？」

奈津美は必死に呼びかけたが、もう電話は切れてしまっていた。

しかし、電話をして、大体予想はついた。

匂はやっぱり風邪をひいたのだ。だからあんなひどい声になっていたのだらう。

なぜ『やっぱり』と思ったのか。

それは昨夜のことに遡る。

奈津美は、仕事が延びていつもより遅い時間に帰宅した。  
そして、翌日のデートの時間を決めるために旬に電話をかけた。

いつも通り、コール音が一回なるかどうかで旬が出た。

「もしもし、ナツ？」

相変わらずのウキウキした声だ。遅くなるから後で電話するとメールしておいたので、今か今かと待っていたのだろう。

「うん。ごめんね、遅くなって……今、大丈夫？ 何してた？」

奈津美が電話をした時のいつもの決まり文句を旬に言う。

「大丈夫！ 全然ヨユー！ 丁度風呂から出たところだから」

「そう。……明日、何時にする？」

元気のいい旬の返事に特に何も思わずに、奈津美は本題に触れた。

「んー……じゃあ十時にナツんちに迎えにいく！」

「分かった。十時ね。あんまり早く来ないでよ。こっちは十時に合わせて支度するんだから」

旬はデートの時間を決めても『ナツに早く会いたいから』と言って気持ちだけ先走って時間よりかなり早く来る。

待ち合わせの時はともかく、迎えに行くという時も、早く来るものだから、まだ準備ができる前に来られたりして、それはかなり困るのだ。



「分かってるって。そういやさあ——」

旬が喋りだし、それから暫くは電話で雑談をしていた。

そして、三十分ほど話した頃……

「……ぶえっぷし！」

旬がいきなり派手なくしゃみをしだした。

その大音量に、奈津美は思わず耳から携帯を遠ざけた。

「旬？ どうしたの、いきなり……風邪？」

携帯を耳に戻し、奈津美は尋ねた。

「いやー？ んなことは……あ」

涙を睨りながら答える旬の言葉は、まるで何かを見つけたように  
呟いて止まった。

「俺、マップ（真っ裸）のままだった」

「えっ……まさかお風呂出たままなの？」

「うん。服着んの忘れてた」

ハハハッ……と旬は暢気に笑っている。

丁度風呂から出た、というのは、本当に電話がかかってきて丁度  
だったらしく、旬は服を着るのも忘れてあんなに話し込んでいたと  
いうのだ。

「もー……やだあ。ちゃんと服着てよ」

一人暮らしとはいえ、家の中で真っ裸でいるなんて、だらしなさ

すぎる。

「あ、ナツ。今、俺の裸想像しただろ」

「してません!」

からかうような旬に、奈津美はムキになって言った。

そりゃあ、何度も見たことはあるから、ちらっと頭によぎったけれど……

「ハハッ……は……はつくしよえい!」

笑いながら、そのまま旬はくしゃみをした。奈津美はまた携帯を遠ざける。

「ちょっと……本当に大丈夫なの?」

もう三月とはいえ、まだ寒い。特に夜は冷えるのだ。簡単に風邪をひいてもおかしくはない。

「大丈夫だって。俺、風邪一つひいたことないって言ったろ?」  
電話の向こうの旬は、涙を啜りながらも至って暢気だ。

確かに、つい一ヶ月ほど前に、真冬の夜の外で奈津美を待っていても（前作・前々作参照）くしゃみこそひどかったが、それ以上悪化はしていなかった。それで考えたら今回も大丈夫なんだろうが、油断は禁物だ。

「ちゃんと服着て……あと、温かくして寝るのよ! 明日風邪ひいたなんて言ったら中止にするからね」

「そこまで言わなくても大丈夫だって」

ああ言っておいて、やっぱり大丈夫じゃなかったようだ。

奈津美は溜め息をついた。

しょうがない。電話の様子だと、一人で何も出来ない状態に違いない。

奈津美はとりあえず、旬の家に行くことに決めた。

インターホンを押しても、何の反応もなかった。

寝ていて気付いていないだけだろうか。気付いていても動けないぐらいひどいのだろうか……

奈津美は旬の部屋の合鍵でドアを開け、中に入った。

「旬ー？」

玄関で靴を脱ぎながら呼びかけてみるが、やはり何の反応もない。それどころか、部屋はまだカーテンを開けていないようで薄暗く、静まり返っていた。

「旬？ 居ないの？」

奈津美は部屋の中に入って足元に注意しながら奥に進んだ。

あれ以来（バレンタインの一連。再び前作・前々作参照）、旬は部屋を前ほど汚さないよう努力するようになった。……とは言って

も、最悪、足の踏み場もないという状態は免れているだけで、一週間前に掃除をしたばかりなのにもうゴミが散らかっている。足元に注意しなければ何を踏むか分からない。

奈津美は匂のベッドに近付いたところで、顔を上げてそこに居るであろう匂を見た。

……が、ベッドの上は、枕があるだけで、匂はおろか、掛け布団さえなかった。

どういうことか分からず、奈津美は首を傾げた。

匂の姿がないなんて、そんなことあるはずはない。奈津美は更にベッドに近寄った。

「ひゃっ……!?!」

踏み出した足元に変な感触がして、奈津美は飛びのいた。

何かを踏んだ。いつものように、散らかったゴミだとか、そんな感触ではなかった。

踏みつけた瞬間『グリッ』としていた。

一体何なんだ……

奈津美は薄暗い中で目を凝らして足元を見た。

グレイの布地に包まれた棒状のものが落ちている。太さはそこそこのものだ。

それだけでは何か分からず、その先をたどってみる。

「ひっ……!」

思わず小さく奇声をあげた。

先にあったのは、人の手だった。その手は、携帯が握り締められていた。

しかもそれは旬の携帯だった。

まさか……！

奈津美は更に全体像として見てみると、ベッドのすぐ下になかなり大きな布の塊があり、そこからそれは延びていた。

そして、その大きな布の塊というのは、消えていた旬の掛け布団だった。

「旬!？」

奈津美は、慌てて布団の塊に手をかけた。

間違いない。これは旬だ。さっき奈津美が踏んでしまったのは、旬の腕だったのだ。

「旬! 旬!？」

奈津美は旬の名前を呼びながら布団を引っ剥がした。

すると、中からゴロリと、探していた人物が出てきた。

「旬? 大丈夫？」

さっきから、腕を踏んづけてしまっても、何度呼びかけても、全

く反応がない。

旬はぐったりとした状態だ。

「旬……！」

旬の体に触れたら、思わず手を引っ込めてしまうほど熱かった。これは思った以上にひどい状況かもしれない。

「旬……旬！」

何度も呼びかけながら、重い上体を膝の上に乗せ、頬を叩いた。

「……うっ……」

旬は苦しそうに眉間に皺を寄せて、細く目を開けた。

「旬！？ 大丈夫！？」

明らかに大丈夫じゃないのはわかるのだが、意識があったことにほっとして、奈津美はそうきいてしまう。

「ナ……ツ……？」

目を細く開け、その中の黒目が奈津美と合った。

「これ……夢？」

かすれた声で、旬は眩き、震える手を奈津美に伸ばし、頬に触れた。

熱い。体もそうだが、手もものすごく熱かった。

「すっげーリアル……」

まるでうわ言のように呟いた旬の手は、奈津美の顔から首筋へ下りていく。

「……!？」

次の瞬間、奈津美は目を丸くした。

旬の手が、そのまま下に下りたと思ったら、奈津美の胸の膨らみを驚づかみにした。

そりゃもう、見事なまでに、がちりと。

「な……旬!？」

旬の行動に、奈津美は驚くしかできなかった。

「ナツーーー!!!!」

「……!？」

旬が突然叫んだと思ったら、奈津美の胸に顔を突っ込むようにして抱き付き、そのまま押し倒した。

「いたっ……ちょっと旬!？ 何を……」

奈津美は倒れた時に打った背中に痛みを感じながら、重みのある上半身を起こそうとした。

「ナツー!」

旬はそんなことはおかまいなしに、奈津美の胸にグリグリと顔を押し付ける。

「や……旬!」

「死ぬ前に一回でいいからナツとHしないと……」

旬は顔を離したと思ったら、真剣そのものの顔でそう言い、奈津美の服を脱がしにかかる。

「旬!」

次の瞬間、『バシンッ!』と乾いた音が部屋中に響いた。

「もう! 一体何考えてるのよ!」

ベッドに横になった旬に対し、奈津美は怒り心頭だ。

奈津美に平手を食らった旬は、すぐにぐったりとした状態に戻った。

とりあえず、奈津美は重たい旬を支えながらベッドに寝かせたのだ。

「そんな状態の時くらい大人しくできないの?」

奈津美こそ、こんな状態の時くらいこういう風に言いたくないのだが、旬の行動に、何も言わずにはいられない。

「……ナツ」

旬は苦しそうにしながら細く目を開けた。



「だって……俺、もうすぐ死ぬから」

「は？」

意味不明の発言に、奈津美は眉間に皺を寄せた。

そう言えば、メールでもそんなことを書いてあった気がする。

「朝……起きたら体がすっげー重いし、鼻で息できないし、喉も痛いし、関節も痛くて動けねーし……これはもう死ぬ直前なんだって直感して……」

奈津美は言葉を失った。

旬の言っていることは、丸っきり風邪の症状だ。それを死ぬ直前だと思ふなんて……

風邪をひいたことがないと分からないものなのだろうか。

奈津美は溜め息を一つついた。

「大丈夫よ。それ、ただの風邪だから」

「えっ……カゼ？」

驚いた様子で言った旬の声は、風邪のせいもあってか裏返っている。

「そう。だから死なないから大丈夫」

『風邪は万病のもと』というぐらいだから、百パーセント大丈夫というわけではないが、旬にそう言うと、大騒ぎしそうな気がする

から、黙っておく。

それに、重症そうなかであんなふざけた長文メールを送ってきたり、人を押し倒したりする元氣があるくらいなら絶対に大丈夫だ。

「でも……俺、死にそう……」

「口でそう言えるうちは大丈夫なの。でも、本当、熱は高そうね」

奈津美は旬の額に手をあてる。やはりかなり熱く、汗をかいていた。

「旬。体温計は？ どこにしまってる？」

「ないよ」

即答だった。

「え！？ ないの？」

思わず大声をあげてしまった。

「だって……普段熱測るようなことってないから……」

奈津美は言葉を失った。

本っ当に風邪をひいたり、熱を出したことなんてないらしい。

「てことは、まさか薬もないの？」

「うん」

またしても即答だった。

奈津美は溜め息をついた。

「じゃあ……買い物行かないと……薬とか色々買ってくる」

薬の他にも、体温計や氷枕や冷ピタなど、風邪のお供を買って  
る必要がある。

「え……行っちゃうの？」

旬が不安げな目で奈津美を見た。

「買い物したら戻ってくるから。大人しくしてて」

「……行かないで」

かすれた声で言い、旬は熱い手で奈津美の左の小指を掴んだ。

熱のせいで、目が潤んでいる。

その表情が小さい子供のようで、可愛らしく思ってしまった。

「旬、離して？ 出掛けられないから」

奈津美は出来るだけ優しい声音で、旬に言った。

「やだ……ナツが行ってる間に俺が死んじゃったらどうすんの」

まだそんなことを言っている。

「だから大丈夫だってば。旬が大人しくしてたら死なないから」

奈津美はそう言って聞かせようとする。

旬は、風邪で高熱なんて初めてだから、色々不安に思っているの  
だろう。

「すぐ戻ってくるから。ね？」

奈津美はそっと旬の頬を撫でた。

「……うん」

渋々、といった感じではあったが、旬は手の力を緩めた。

「ホントに……ホントにすぐ帰ってきてな？」

旬は一生懸命に奈津美を見上げてそう訴える。

「うん。分かってるよ」

奈津美が頷くと、旬はほっとしたような表情になって、とろりと  
瞼が落ちていった。瞼が落ちると、すぐに寝息が聞こえた。

奈津美は外に出た旬の手を布団の中にしまい、頭を撫でた。

いつもこれぐらいならいいんだけど、と密かに思う。

でも、やっぱり朝っぱらから変な内容のメールを送ってきたり、  
襲ってきたり、死ぬんだと大騒ぎされるのも困る。

やっぱり風邪をひいても旬は旬だ。大して変わりはない。

とりあえず、買い物だ。冷蔵庫の中のものを確認して、あと、出  
かける前に氷でも当てておいてやった方がいいだろう。

そう思って冷蔵庫の中を見てみたら、ほとんど何も入ってなかつ  
た。しかも、冷凍庫には氷もない。やっぱり普段、旬一人では、食

料品という食料品は買わないだろうし、三月というこの微妙な時期に氷だって作っておかないだろう。

奈津美は、製氷機に水を入れてセットして、とりあえず今はできるだけ冷たい水でタオルを冷やして旬の額においてから、買い物に出掛けた。

小一時間ほどで奈津美は旬の部屋に戻ってきた。両手にはスーパーの袋を掲げている。

冷蔵庫に何もないものだから、色々買っていたらこんなに荷物が多くなった上に時間もかかってしまった。

「ただいまー……」

奈津美はそつと声をかけながら部屋に入った。

旬はまだ寝ているのだろうか。

奈津美は部屋の中に上がり、荷物を台所に置いてからベッドで寝ているはずの旬のところへ行く。

「……ゴホッ……ゴホ……」

ベッドを覗き込むと、旬は目の下の辺りまで布団にもぐっている。額に乗せていったタオルは、寝返りをうったのか、落ちてしまっている。

「旬？」

咳き込んでいる音が聞こえる。

「旬……起きてる？」

奈津美はそっと旬の額に触れた。……さっきより熱くなっている気がする。

「ナツ……？」

旬が薄く目を開けた。

「旬……大丈夫？ 苦しくない？」

「ちょっと苦し……ゴホッ」

旬が喋ろうとしても声がかすれていて、すぐに咳き込んでしまった。

どうやらさっきより悪化してしまったようだ。

「旬、熱計ってみて」

奈津美は薬局の袋から体温計を出して旬に渡した。

「……ん」

旬は体温計を受け取りの中でもぞもぞと動いて腋に挟んだ。

大分汗をかいている。奈津美はタオルで旬の額を汗を拭いた。グレイのスウェットも、首周りが汗で色が濃くなっている。これは着替えた方がいい。

奈津美は、体温計が鳴る前に旬の服の収納ケースから新しいスウェットを出しておいた。

ピピッ

体温計が鳴った。旬が再びもぞもぞと動いて体温計を取り出した。

「何度……えっ……!？」

体温計を見て奈津美は眉を寄せた。

三十九度一分……かなりの高熱だ。

病院に行くべきなのか……

いや、今日は土曜日だから病院は午前しかやっていない。今はもう十一時を過ぎ……今から行ってもギリギリ間に合わないかもしれない。

それなら家で大人しくしていた方がいいだろう。

そう判断した奈津美は、今日は旬の看病に専念することに決めた。

「旬。まず着替えよ。汗すごいから……今着てるやつ脱げる?」

返事の代わりに旬がもぞもぞと動いた。しかし、その動きはぴたりと止まる。

……無理そうだ。

奈津美は、旬の掛け布団の中に手を突っ込んで手探りで旬のスウ

エットに手をかけた。

「旬、ちょっと体浮かして」

「ん……」

もぞりと旬が動いて体を浮かす。奈津美はその一瞬でスウェットの上を素早く脱がした。

同じようにして新しいスウェットを着せる。

さて、下はどうするか。

奈津美は躊躇ってしまふ。

「旬……下は頑張って自分で脱いで？」  
そう言ってみる。

「何で……？」  
かすれた声でそう返ってくる。

「何でって……」

「恥ずかしがらなくても、いつも見てるし触ってるし好き放題してるのに」

「な……してないわよ！ 何勝手に言ってるの！」  
奈津美は真っ赤になって言い返す。

「いいよ。俺、ナツになら犯されても……それなら本望だし……ブツ」



匂の顔にスウェットが投げつけられた。

「自分で着替えてね！」

「はい……」

匂が着替えを済ませたあと、奈津美は匂の額に冷えピタを貼ってやった。そして、氷枕を作って頭の下に置いた。

あとは薬を飲まなければ……なのだが、時間的にも昼食を取ってからにした方がいいだろう。

「匂、食欲ある？　ないならゼリーとかプリンとか買ってきたから、何か食べよ？」

奈津美が声をかけると、匂はうつすらと目を開ける。

「腹……減ってる。プリンも食べる……」

どうやら食欲はあるらしい。朝食をとってないからかもしれないが、これなら薬を飲んで寝ていれば熱は下がるだろう。

「じゃあちよっと待っててね。お昼作るから」

奈津美が台所へ行こう立ち上がった。

「ナツ……」

離れようとした奈津美を匂が止めた。

布団から手を出して、さっきのようにまた手を掴む。

「ナツ……ごめんな……今日、デートだったのに……」

旬のその言葉を聞いて、奈津美はそうだったことを思い出した。本当なら今頃、ケーキバイキングに行っているはずだった。

「いいよ。また今度行けばいいんだし。そのために今日はちゃんと大人しくして治してね」

奈津美はそう言って旬の頭を撫でた。

「うん……ナツ……」

「何？」

「チューして」

「……えっ……」

予想外の言葉に奈津美は固まる。

どうしてこんな時にまで……いや、部屋にきた奈津美を押し倒したぐらいだ。こんな時だからこそなのか。

「大人しくしてるから……チューして？」

旬は潤んだ目で言う。

その目を見て、奈津美は不覚にもときめいてしまう。

「……だめよ。旬の風邪うつたら困るもん」

何とか流されそうになるのを奈津美は誤魔化す。

「……チュー……」

匂はまだ物欲しそうに奈津美のことを見る。

奈津美は溜め息をついた。

「分かった……匂。目、つぶって」

しょうがない……という口調で奈津美は匂に言った。

「うん！」

匂はニツと笑って言われた通りに目を瞑る。

奈津美は、ベッドの端に片膝を乗せ、匂を上から覗き込むように見下ろす。

匂は、目を瞑っていても、瞼の裏が暗くなったことでそれを感じ、今か今かと奈津美の唇を待っている。

匂の顔に近付き、奈津美は素早く唇を押し付けた。

「はい。おしまい」

奈津美のその声で、匂は目を開ける。

「え……」

匂はきょとんとしていた。

「ナツ……今の何？」

「匂がしてっていうから、キスしたんでしょ？」  
奈津美はさらっと答える。

「……俺……ナツの唇の感触すらしなかったんだけど……」

「そりゃそうよ。だって、ここにしたから」

奈津美は旬の額の冷えピタを撫でる。

そう。奈津美は、旬の風邪がうつらないように、そこに唇をつけた。

よって、旬はそこに何かが当たった感覚はあっても、リアルな唇は感じることはできなかった。

「えー……せめてほっぺたとか……」

「だめよ。風邪うつるから」

「ケチー」

「旬」

奈津美は旬の唇にそっと触れた。

「大人しくしてたら、また今度ね」

奈津美としては無意識だったのだが、旬には十分効果があった。一瞬で旬は静かになった。

奈津美は、旬が大人しくなると台所へ行き、調理を始めた。

旬は布団にもぐり、ナツの表情と仕草を思い出す。

ああやって、不意に大人の魅力たっぷりなところを見せられるのに、旬は弱い。

あんなの生殺しだ……

旬は更に深く、布団に潜り込んだ。

「旬。できたよ」

奈津美はトレイにおじやの入った茶碗とプリンを乗せて運んでくる。

旬は目から上を布団から出す。

「旬、起きて食べられる？」

トレイをローテーブルに置き、奈津美はベッドの傍らに座った。

「食べらんなかったら、ナツが食わせてくれんの？」

じっと奈津美を見ながら、旬が言った。

「うん。まあ……しょうがないしね」

「口移しで？」

「……それだけ言えるんなら大丈夫ね。はい。自分で食べてね。あたしはもう帰るから」

奈津美は少し怒った口調で言い、立ち上がろうとした。

「冗談だって！ ……っと」

旬は慌てて体を起こしたが、その体はすぐにぐらりと体がゆれた。

「ああ……もう」

奈津美は、旬の体を支えた。

「急に動くから……ていうか、変なこと言うからよ」

奈津美は呆れた口調で旬に言った。

「だって、ちょっと言ってみたかったから……」

「もう……旬はこんなに体調が悪くても、口だけはいつもと変わらないわね」

奈津美は軽く笑った。

旬の体を起こし、枕を立てて、そこに旬をもたれるようにすると、奈津美は茶碗をもって、再度ベッドの端に座る。

「食わせてくれるの？」

匙でおじやを一口分をすくう奈津美を見て、旬は目を丸くする。

「今日だけ特別よ？」

そう言って、奈津美はふうふうと息をかけておじやを冷ます。

「はい。あーん」

奈津美は旬の口元に匙をもっていく。

「あーん」

旬は口を大きく開ける。

そこに奈津美は匙を入れた。

「大丈夫？ 熱くない？」

「うん。……うまい」

モグモグと口を動かしながら、旬は満足そうに頷いた。

「そう。よかった」

奈津美はそう言いながら匙で二口目をすくう。

「あーん」

今度は旬の方から口を開ける。

「ちょっと待って。冷ますから」

奈津美はまたふーっと冷ましてから旬の口元ももっていく。

「はい」

「あーん」

口におじやが入って、口を動かしながら、旬は満足そうに笑っている。

「あー……なんか俺、嬉しすぎて熱上がるかも」

口の中のものを飲み下してから、旬は言った。

「何それ？」

「へへっ。たまには風邪ひいたりするのもいいなあって思って。ナ

ツがこうやって看病してくれるなら」

「え！？ やめてよ。あたしが大変なんだから。今度また自業自得で風邪ひいてもあたしはもう知らないからね！」

奈津美は口を尖らせて言う。

「自業自得じゃなかったら看病してくれる？」

旬は首を傾げて奈津美を見る。

奈津美が弱い、ちよつと可愛い感じの角度だ。

「……まあ、仕方ない時はね」

それに負けて奈津美は思わずそう答えてしまった。

「やっぱナツは優しいなあ。大好きだー」

旬はそう言っているもののノリで奈津美にキスをしようとする。

「……モゴ」

奈津美は、旬の口におじやをすくった匙を押し付けて、それを阻止した。

「ちゃんと食べようね」

「ちえー」

旬は口を尖らせながらも、おじやを口にした。

旬はおじやも食後のプリンも綺麗に食べた後、菓を飲んでそのまま眠ってしまった。



その間に、奈津美は昼食の片付け、旬の部屋の掃除、旬が溜め込んでいた洗濯をして過ごした。

一通りのことが終わると、もう四時前になっていた。

奈津美はベッドの傍らに座り、眠っている旬のことを見た。

薬が効いているせいなのか、旬は相変わらずよく眠っている。

頬に触れてみると、まだ少し熱はあるようだが、さっきまでよりは下がっている。顔色も大分いい。

よかった。これならすぐ体調はよくなるだろう。

奈津美はほっと息をつくとき、旬の頬を撫でた。

旬はそれにくすぐったそうに寝返りをうって、奈津美の方を向いた。

「ん……ナツ……」

起きたのかと思ったが、旬は再び寝息をたて始める。寝言だったようだ。

「んー……ナツう……」

旬は眉間に皺を寄せ、唸るように奈津美の名を呼ぶ。

「旬?」

寝苦しいのかと思い、奈津美は旬の体を撫でる。

しかし、すぐに旬の眉間の皺はなくなった。そして、また一言。

「ケーキ……」

奈津美は一瞬キョトンとして、すぐに小さく吹き出してしまった。

一体、何の夢を見てるのか……

今日行けなかったケーキバイキングの夢でも見てるのだろうか……

奈津美はそっと旬の頭を撫でた。

「早く元気になってケーキバイキング行こうね」

微笑みながら、旬にそう言った。

旬はふと目を覚ました。

「んんー……」

寝たまま伸びをすると、背中の骨が小さく鳴った。

体を起こしてみると、ずっと寝ていたせいで少し体は重いが、それでも気分はすっきりしていた。熱も下がったように感じる。

「ナツ……」

小さく呼んで奈津美を探すと、すぐそこに奈津美はいた。

奈津美は、旬のベッドに伏せて、寝息をたてていた。

可愛い……

毎度毎度のことではあるが、旬は奈津美のその様子に胸を打たれた。

疲れて寝ちゃったのかな？

そう思いながら旬は奈津美の髪を撫でた。

でも、これじゃあ奈津美の方が風邪をひいてしまうんじゃないのか。旬に言っておきながら奈津美の方も体調を崩したらいけない。

旬は、そっと奈津美の体を引っ張り上げ、ベッドの上に乗せた。そして、布団をめくり、自分の隣に寝かせて、布団をかける。

旬も奈津美の隣で横になって、満足そうに笑顔になった。

何せ今日は満足に奈津美に触れられなかったのだ。

奈津美はスヤスヤと寝ている。たったそれだけなのに、旬はたまらなくなってしまう。

そっと奈津美の顔に自分の顔を近付けて、息がかかるほど近くで奈津美の顔を見る。奈津美は全く起きる様子はない。

試しに、旬は奈津美の額にそっと口付けてみる。それでもやっぱり奈津美は起きない。

気を大きくした旬は、今度は奈津美の頬にキスをした。さっき奈津美はしてくれなかったので、その分だ。

しかし、キスしてみると、旬の気持ちは高ぶってきた。

……いいよな？　ちよつとぐらい……

旬は奈津美に跨り、唇にキスをした。そして、手が、奈津美の服の裾から徐々に滑り込んでいく……

「ん……」

奈津美の眉間に皺が寄る。

あ、やばいかも……

瞬間的に思っ旬は手を止めた。

奈津美の目が、うつすらと開いていく。

「しゅ……ん？」

寝起きの声でそう言い、寝起きの目で旬を見上げている。

「何やって……！？」

奈津美は瞬時に何をされているのかに気付いた。慌てて体を起こそうとした。

「ちよつと……！　旬！　何考えてんの！」

「え……ナツがあんまり可愛いから……」

「何言ってるの！　意味分かんないから！　ちよつとどいて！　起きらない！」

旬の体の下で奈津美はバタつく。旬が跨っているせいで思うように動けないのだ。

「ちょっと……旬ー！」

奈津美は旬を押し返そうとするが、旬が少し力を入れると動かない。

旬の方は、先ほどまでと違って、いつものように体に力が入るところに気付いた。

そして、ニヤリと笑う。

「ナーツう」

奈津美の上にのしかかり、強く抱き締めた。

「やだ……何してんの！」

奈津美は足をバタバタと動かすが、旬はそれに上手いことに自分の足と絡めて封じる。

「俺、風邪治ったみたいだからあ……しよ！」

奈津美の顔の真上でにっこりと笑い、旬は言った。

「な……まだ熱下がってないでしょ！ 体熱いわよ！」

確かに、旬の体はまだ熱かった。さっきよりは大分下がっているが、微熱ほどはありそうだ。

「大丈夫だってー。多分、興奮して熱いだけだから。それに……」  
旬はそう言って奈津美の服の裾から入った手を進めて、胸まで到達させる。

「一汗かいたら下がるよ」

旬は奈津美の耳元で言った。

それに奈津美は顔を真っ赤にした。

「なっ何言って……あっ」

旬の手が敏感なところに触れ、奈津美は甘い声を出してしまった。

「ナツのH……もうこんなになってるじゃん」

そこを弄びながら、旬はクスリと笑った。

「だめ……風邪うつったら……」

体は抵抗できない状態で、奈津美は口でだけ抵抗した。

「うつったら俺が看病するから……な？」

「それは嫌……んっ」

奈津美の唇も塞がれ、もう抵抗できなくなってしまった。

翌日、旬の体は完全に元気になった。

しかし、奈津美にしっかりと風邪がうつってしまったのは、言うまでもない。

## 2 おかしなデート

四月末のこと。

それは、旬の一言が始まりだった。

「なあ、ナツ。ゴールデンウィーク中のことだけどさー」  
奈津美の部屋にやってきた旬が、話を切り出した。

「ナツ、ゴールデンウィーク中は何連休？」

「え？ 特に有給もとつてもないし、カレンダー通りに仕事行つて休みだけど……」

旬の質問に、奈津美は予定のままを答えた。

「じゃあ、五月の三日は、休みだよな？」

「うん」

「予定もない？」

「うん。今のところは……旬、どうしたの？」

いつもと違う旬の態度に、奈津美は首を傾げた。

この話の流れだと、ゴールデンウィーク中にデートをしようとか、そういう話題だと思う。

しかし、いつもなら単刀直入にデートしようだのどこに行きたいだのを言う。なのに今日の旬は回りくどい。

「え……いや、そのデートしたいっていうか、行きたいところがあるっていうか……」

やっぱり旬が言いたがっているのはそのことだ。でも、なぜか歯切れの悪いままだ。

「どこ？」

奈津美が尋ねると、旬はジープンの尻ポケットから小さく畳まれた紙を取り出し、広げていく。

「ここなんだけど……」

旬が出したのは雑誌か何かの切り抜きだった。

奈津美はそれを見てみる。

「あ、ここ知ってる」

「ホント？」

切り抜きに載っていたのは、ある遊園地だった。しかも、最近有名になってきた大規模の施設だ。

そこは元々は、子供向けのアトラクション中心の小規模なものだったらしい。

しかし、現在次々とキャラクターのテーマパークや絶叫系アトラクション中心の遊園施設が増えていく中で、売り上げは大幅に低下。一時は風前の灯だった。

その打開策として、絶叫系アトラクションの大量導入を試みた。それもスピードや高さを国内上位のものを増やした。

すると、それが高じたのか、売り上げは鰻上りで、現在では子供



から大人まで楽しめる遊園地として名を馳せているのだ。

奈津美も、先日その特集をテレビで見たところだった。

「でも、ゴールデンウィーク中だったら大分混んでるんじゃない？」

そのテレビ番組も、確か休日だったはずだが、大分混雑してる様子だった。ゴールデンウィークの混雑は簡単に予想できる。

奈津美としては、分かっててそんな混雑の中になんて、あまり行きたくない。

「いや、ナツがそう言うだろうなーってことは分かってたよ。うん。でも、その、この間中学の時からダチに会ってさ」

やはり挙動不審な様子で旬はまた違うことを口にする。

「このフリーパス付き入場券を貰ったかなんかで持ってて、それで余ってるっていうからさ、よかったら行かねえかーって話になったんだけど……ナツはこういうところあんまり好きそうではないし、どうかなーって思ってた……」

「……確かに特に好きってわけではないけど……でも別に嫌いってわけでもないわよ。旬が行きたいっていうならあたしは別にいいよ、行っても」

奈津美は少し考えてそう言った。

奈津美としては、高い入場料を払ってまで行きたいとは思っていない。だが、いやらしい話ではあるがタダで行けるのなら、行ってもいいか、と思ったのだ。こういう機会でもない、行くことはないだろう。

「ホント……？」

旬の目が輝いた。しかし、すぐにさっきまでの挙動不審になる。

「あと、さ。……一緒に行くの、そのダチとその彼女と一緒にでもいい？」

「え……？」

予想外の言葉に、奈津美は目を丸くした。

「友達って、チケットくれるっていう？」

「うん。そいつの彼女も俺と同じ高校で、仲良かった奴なんだけだな……一緒に行くかって……いわゆるWデートってやつ？ ……しねえかってことになって」

Wデート……

その言葉の響きに奈津美は懐かしさを覚える。

確か、元彼と付き合っていた時に、カオルたちのカップルと数回したことがあった。

だが、その時はいつも、一緒に食事をしたという程度だったのであまりWデートっぽくはなかったのだが……

いやいや、何を思い出してるんだ。

奈津美は眉間に皺を寄せて首を小さく横に振った。

「やっぱ、ダメだよな……」

奈津美の反応を見て、旬は肩を落とした。

「え、あ……違う！　そうじゃなくて……」

奈津美は慌てて否定をする。

旬は奈津美の様子を勘違いしてしまったようだ。

「いいの？　あたしが一緒で……」

問題はそこだ。

Wデートの、向こうのカップルのことを、奈津美は全く知らないわけで、それは向こうも同じだ。それに、旬の友達ということは、旬と同じ年ということだ。皆十九歳の中で、一人だけ四つ年上の二十三歳……一人だけ浮いてしまいそうな気がする……

「うん！　ていうか、ナツと一緒にじゃないと意味ないじゃん。いくらダチでも、俺一人とか、絶対居心地悪いし」

だったらわざわざ一緒に行く必要なんてないんじゃない……

そう思ったが、流石にそれを言うのは感じが悪くなってしまいそうだったので、奈津美は黙っておく。

というか、ここで断るのも感じ悪いかもしれない。せっかく誘ってもらってるのに、旬の友達にあんまり印象悪くさせたくないし……

『旬の彼女って、ノリ悪いんだな。ていうか、やっぱ年上って合わないんじゃない？』

会ったこともない旬の友人に、陰でそう言われるのが頭に浮かぶ。

「……うん。じゃあいいよ。Wデートで」

ネガティブな自分に負け、奈津美は匂に頷いた。

「ホント!? よかったー! 俺、マジでここ行ってみたかったんだー」

匂は目を輝かせ、急に浮かれ出してウキウキと切り抜きを見る。

まあ、匂と一緒にだし、匂の友達だし……大丈夫だよね?

やや不安に思いながら、とりあえず匂を信用しておくことにした。

そして、Wデート当日の五月三日。

「遅いなー、あいつら」

待ち合わせ場所に先に着いた匂と奈津美は、匂の友人カップルが来るのを待っていた。

待ち合わせ場所というのは、今日遊ぶ遊園地の入場ゲート前だ。

やはり、ゴールデンウィーク中ということがあって、混雑している。

時間を見ている匂に対し、奈津美は一人で緊張していた。

やはり、匂の友達といえど、あまり気が抜けない。

いや、匂の友達だからこそ気が抜けないと言わなきゃか。

ただでさえ、年齢差があるのだ。会話についていけるかどうか……いや、たかが四つでジェネレーションギャップはないと思うが……それに年上だからと言って変に気を遣われるのも嫌だし……

などと、その他諸々のことを考えてしまうと、かなり緊張してしまつて、昨夜はなかなか寝付けなかった。

今朝なんて、旬が迎えに来る前に、何度も無意味に手の平に人の字を書いて飲み込んだことか。

こんなに緊張したのなんて、就職の面接以来だ。

「あ、来た。涼介！ 加奈！ こっちこっち！」

旬がそう言って大きく手を振った。

奈津美は思わず旬の後ろに隠れた。

「おう。旬」

「旬ー。久しぶりー」

こっちに向かって、男女が歩いてくる。

「おー。加奈。ホント久しぶりだな。涼介はこないだ会ったばかりだけど、加奈は全然会うことなかったもんねー」

「ねー。高校卒業してからだから、一年ちょっとぶりだもんね」

「つうか悪い。遅くなって。駅で帰りの切符買うのが混雑しててよ」

「ホントだよ。俺ら待ちくたびれたっての」

三人は楽しそうに会話をしている。

この中に入れるのか……奈津美はさらに不安になる。

「つうか、旬の彼女は？」

旬の友人の声が聞こえて、奈津美はビクツとする。

「えー？ あれ、ナツ、何隠れてんの」

旬が後ろの奈津美に気付いて、手を引いた。

「じゃーん！ 俺の彼女！」

旬が大袈裟に口で効果音を出して、奈津美を前に出した。

「ごめんなー。いつもこんなじゃないんだけど、照れてるみたいで」

「ち、違うわよ！」

思わず大きな声を出してしまい、奈津美ははっとする。

いきなり素で大きな声を出してしまった。第一印象をよくしようと思っていたのに……

奈津美は恐る恐る旬の友人を見た。しかし、奈津美が思っていたより、気にしてないようだ。

というか、奈津美はここで初めてちゃんと旬の友人の顔を見た。

まず男の方。身長は旬と同じぐらいで、割と高い。自然な茶色で、長すぎず短すぎずの髪を、ワックスで無造作に立てている。旬の中学時代からの友人というだけあってなのか、服装などの雰囲気は旬と似ている。顔は旬と違ってしまりがあるというか、旬とはまた違うかっこいい部類に入るだろう。

そしてその彼女という女の方。身長百六十センチの奈津美と比べても小さい。明るめの茶色い髪を団子にしている、カジュアルな服がよく似合っている。若い今時の女の子を絵に描いたような、お洒落で可愛い子だと思った。

「初めまして。田辺涼介です」

「斉藤加奈です」

二人が笑顔で奈津美に自己紹介をした。

「あ……柏原奈津美です。初めまして……」  
奈津美も慌てて二人に合わせ、挨拶をした。

よかった。涼介も加奈も、いい人そうだ。二人ともとても第一印象がいい。

当たり前か。旬の友達なんだから。

奈津美はほっと胸を撫で下ろす。

そんな奈津美のことを、涼介と加奈はじっと見ていた。

「え……?」

視線に気付いた奈津美は戸惑った。

何? 何か変なところある……?

わけが分からず奈津美は自分の服装を確認したりした。

「旬がベタ褒めだったからどんな人かと思ったけど……本当に美人だな」

涼介の方が驚いた様子で言った。

「ホント。すごいきれい……」

加奈も涼介と同じような反応だ。

「え……」

「だっろー? 超美人だし、超可愛いし、超自慢できるだろ。俺の彼女」

旬が満面の笑みで奈津美の肩を抱いて言った。

「ちょ……旬!」

人前で堂々とこんなことをする旬を、奈津美は軽く睨んだ。

「まあな。おまえの彼女ってことが信じられないぐらいな」

「失礼な。こんなにラブラブなんだっての」

旬が奈津美をぎゅうっと抱き締めた。

「や……ちょっと……もう! 旬!」

べちんっ!



「って！」

奈津美に顔を叩かれ、旬はすぐに手を離れた。

「ひっでー！ 何でいきなり叩くんだよお」

鼻を押さえながら旬は奈津美を見た。

「いきなりは旬でしょ！ 何考えてんの、こんなところで！」

「スキンシップだし！ 愛情表現だし！」

「だからこんなとこでしないでって言ってるの！ 恥ずかしいですよ！」

言い争っているようだが、はたから見ればバカップルのいちやつきだ。そしてそれは、涼介と加奈にもそう映っていた。

「旬。お前、そういうとこ変わんないなー」

「うん。全っ然変わってない」

涼介と加奈が二人を見て笑いながら言った。

奈津美は笑われたことに恥ずかしくなって下を向いた。

絶対、向こうの第一印象最悪だ……こんなつもりじゃなかったのに……

「じゃ、とりあえず入るか」

「そうだなー」

涼介と旬のその言葉で、四人は入場ゲートに向かった。

「あ、ナツ。これ、渡すの忘れてた」

旬が思い出したように言ってポケットから出したものを奈津美に渡した。

「え？」

奈津美はそれを見て、目を丸くした。

旬に渡されたのは、この遊園地の入場チケットだった。

「旬がこれ持ってたの？」

「うん。何で？」

何でも何も、奈津美は、チケットは旬の友人が持ってるから、こうして待ち合わせてるのだと思っていた。

しかし、実は旬が持っていたのなら、わざわざこうして待ち合わせて行く必要なんてなかったのではないか。というか、そもそも本当にWデートをする必要なんてあったのだろうか……

「……ううん。別に、何でも……」

今更になってそれをここで旬に直接言うわけにもいかず、奈津美はそう言って誤魔化した。

「そう？　じゃ、早くいこー！」

旬はご機嫌な様子で奈津美の手を引いて入場ゲートへと行った。

こうして、どこかすっきりしないまま、おかしなWデートは幕を開けたのだった。

## 2 おかしなデート（後書き）

Wデート編、次回に続きます。

### 3 デートの理由

「おおー！ すっげー！ でっけー！ 色々あるー！」

旬が中に入るなり興奮した様子で周りを見回し、目を輝かせている。

「ホントー！ テレビとか雑誌より迫力あるー！」

加奈も旬と同じ様子で浮き足だった様子だ。

「なあ、どれから行く？ ナツ、どれから乗りたい？」

旬は加奈と涼介に対して聞いたあと、改めて奈津美に聞く。

「えーっと……何でもいいよ。皆に任せるから……」

奈津美はついていけずにそう言った。

「ねえ。涼介は？ 涼介は何乗りたい？」

加奈は涼介の方に意見を聞く。

「何に乗りたいって、どうせ順番とかもちゃんと決めてきてんだろ？」

涼介は笑みを浮かべながらそう答える。

どうやら涼介は、旬とは違って落ち着いた性格らしい。

「うん！ まあね！」

加奈は大きく頷いた。

そして加奈は、旬に性格が似てるようだ。ノリが似ているという

か、加奈のふとした言動は、匂を思わせるところがある。

やっぱり匂ってどちらかというとなの子に近いのかな……  
いや、そうでもないか。『おっぱい星人』だし。

奈津美はぼんやりとそんなことを考えていた。

「待ち時間とかあるからねー、ネットとかで調べて色々考えてきたんだ」

パンフレットを見ながら加奈が言う。

「すっげーな、加奈。下調べまでしてきたのか」  
匂も感心した様子でそれを見ている。

「で、どれからがいいんだ？」

涼介が加奈に尋ねる。

「んーとねー。あ、これ！ 『コメット・トラックス』……ここからだとー……こっちだ！」

加奈が周りを見回して、率先して歩き出した。

そのの半歩ほど後を涼介がついていき、匂と奈津美がそのあとについていった。

『コメット・トラックス』とは、所謂室内コースターで、並ぶ列は建物の中に進んでいく。

加奈の情報のおかげか、すんなりと進んで、三十分ほどの待ち時

間で順番が回ってきた。

そして、丁度涼介と加奈が一番前で、奈津美と旬はその後ろだった。

加奈は『やった！ 一番前だ』と喜んでいる。

「安全バーをしっかり下まで下げてくださーい」  
係員がそう声をかけて、一列ずつ確認していく。

「あー！ ドキドキするー！」

そう言いながらも旬は笑っている。ドキドキというより、わくわくと言う方が、旬の今の気持ちに合っているだろう。

「旬、こういうの好きだったのね」

奈津美はそう声をかけた。

「うん！ でも超久しぶりだから楽しみ！」

満面の笑みで旬は答える。

「そっか。あたしも久しぶりだな。高校の時以来かな？」

「へー。あ、ナツ。今更だけど、ナツは高所恐怖症とかじゃない？  
こういうの大丈夫？」

本当に今更なことを、旬が言い出した。

それにしても、今、旬の言葉に何かひっかかりを感じたような……

「別に平気よ。苦手だったらこんなとこ来てもいいなんて言わないわよ」

ひっかかったことは気にしないことにして、奈津美はそう答えた。

そうだ。もし高所恐怖症で絶叫系が苦手だったとしたら、こういう絶叫系がメインの遊園地に来たいだなんて思うわけがないだろう。

「うーん。そりゃそっか」

旬の返事としてはすっきりしなかった。

「それではお氣をつけて。いつてらっしゃーい！」  
係員の明るい声と共に、前へと動き始めた。

「お、動いた！」

そういう旬はいつもの様子……いや、いつもより楽しそうだった。

ガタガタと音をたて、急斜をのぼっていく。

「おおー！　ここが一番緊張するよな！」

「うん」

確かに緊張する。奈津美は緊張している。だがやっぱり旬は笑っていて、緊張してるのか、それともその緊張感を楽しんでいるかのように見える。

ガクンッ……と体に衝撃が走り、一瞬体が浮いた。

「きゃあああああー！ー！ー！ー！」

暗い空間の中、悲鳴が響きわたった。



「あー、面白かったー」

「なー。ホントスツとしたし」

『コメット・トラックス』をあとにして、加奈と旬はもり上がっていた。涼介は落ち着いて二人を見ている。

そして奈津美は、ふらふらになっていた。

『コメット・トラックス』とは、直訳で『彗星の軌跡』という意味らしく、宇宙をイメージした暗い空間を、上に行くのか下に行くのか、右に曲がるのか左に曲がるのか、それが分からない状態で猛スピードで駆け抜けていくものだった。それをよく知らず、何も考えずに乗った奈津美は、酔ってしまったようだ。

しかも、星をイメージしたライトがチカチカと眩しくて、頭がくらくらする。

「加奈。次は何に乗ったらいいんだ？」

旬は全然平気のようで、同じく元気な加奈にそう聞いている。

「えっとねー。次は……あれ！」

加奈が指さす先には、この遊園地の目玉の一つとでも言えるだろうという、大きなジェットコースター……

かなりの高さから急降下し、コースを見てみると、大分上下に激しく動くらしく、乗っている客の悲鳴がここまで聞こえる。

「おおー！ すっげー！！」  
旬は早くも興奮している。

……無理。

奈津美は自分でも血の気が引くのが分かった。  
今この状態であんなのに乗って、耐えられる自信がない。

「じゃ、早速行くかあ！」

「あ、あの……」

出発モードの一行に奈津美は声をかけた。

「あたし……さっきので気分悪くなっちゃったから……みんなで行  
つてきて。あのベンチで待ってるから」

奈津美は近くにあったベンチを指さして言った。

「えー！？ うわ！ ナツ、ホントに顔色悪いじゃん！ 大丈夫？」  
さっきまで薄暗い室内だったために、旬は今改めて見て奈津美の  
様子に気付いた。

「大丈夫ですか？」

加奈も心底心配そうに奈津美の様子を窺う。

「うん。ちょっと休んだら治まると思うから……だから皆心配しな  
いで行って」

こんな中で気を遣わせてしまうなんて申し訳ない。奈津美は辛い  
ながらも、必死に笑顔を作って三人に言う。

「じゃあ俺も残る！」

旬の発言に奈津美はぎよっとする。

「いいよ。旬も行ってきた。あたしは大丈夫だから……」

「でも……」

旬は心配そうな顔をしている。

「いいから。行ってきた。旬、楽しみにしてたんだし。本当は行きたくてしょうがないんでしょ？」

奈津美は優しく旬に言う。

「……それは……そうだけど……」

旬はぐっと押さえ込まれる。奈津美と天秤にかけて、迷っているようだ。

「旬」

奈津美はじっと旬を見つめる。

「……分かった。ナツ、何かあったらすぐに連絡してな？」

まだ不安そうな顔をしながらも、旬は頷いて、確認のように奈津美に言う。

「うん。分かってる」

「……じゃ、奈津美さん。すみません、あたし達だけで……」  
加奈が申し訳なさそうに言った。

「ううん。あたしこそごめんね。みんな楽しんできてね」

そういつて三人と別れたあと、奈津美はベンチに向かい、座った。  
座ると大分楽だ。これならすぐに回復できそうだ。

それにしても、体力の衰えだろうか。いや、これでも体力に自信はある方なのに……

若い中に混じるとやっぱり年が浮き彫りになってしまうのだろう  
か……

「はぁ……」

奈津美は小さくため息をついてうなだれた。

「どうぞ」

頭の上あたりで声がして、奈津美は顔を上げた。

目の前に缶入りのミルクティーが映る。奈津美は更に視線を上げた。  
た。

「あ」

そこにいたのは、涼介だった。涼介が、奈津美に缶を差し出している。目が合うと、涼介はニコッと笑った。

「コーヒーの方がいいですか？」

涼介は、恐らく自分用の缶コーヒーを見せて奈津美に尋ねた。

「う……ううん！　ありがとう……」

とりあえず、奈津美は差し出されたものを受け取った。

「涼介君……何でここに……？　みんなと行ったんじゃない……」

「奈津美さんのことが気になったんで、戻ってきました」

涼介は笑顔で言い、奈津美の隣に座った。

「え……」

涼介の言葉に奈津美はきょとんとしてしまう。

「……なんて、嘘です」

そう言ってまた笑う。

まあそうだろう。別に本気だとは思わなかった奈津美はただ呆気にとられる。

「じゃあ、何で戻ってきたの？」

奈津美が改めて聞くと、涼介は黙って、下を向いてしまった。

「涼介君？」

奈津美は首を傾げた。

「……俺……実は、高所恐怖症なんです。それも極度の」  
下を向いたまま、涼介は呟いた。

「えっ……そうなの？」

奈津美は目を丸くした。

「でも……さっきのは乗ってたじゃない」

極度の高所恐怖症というのなら、さっきのだってかなり激しかった。あれも怖かったのではないだろうか。

「さっきのは……一応室内だし、暗いから大丈夫だと思って……」

暗いからと言って変わるものなんだろうか。……あんまり変わらない気もするが……

「かなりギリギリ……ていうか、限界でしたけど……」

やっぱり……

そういえば、『コメット・トラックス』をおりた後、涼介はほとんど喋っていない。

落ち着いているように見えたから、平気なのかと思っていたが、それはただ恐怖のあまり口が動かなかったということだろうか。

「それならどうして今日ここに來たの？」

これは疑問だ。遊園地なんて、高所恐怖症の人間が乗れるものなんてほとんどないだろう。ましてや、ここは絶叫系を売りにしてるところだ。それが分かってるはずなのに、何てわざわざ來たのか……

「加奈が、來たいって言ってたんで……だから……」

涼介は目線を下にしたまま答えた。

「え……加奈ちゃんは知らないの？ 高所恐怖症ってこと……」

「はい。加奈と出かける時にこういう類のところなんてきたことな

かったし、わざわざ言ったことなんてなかったんで……それに、もし知ってたら俺に行きたいなんて言わなかったと思います」

「加奈ちゃんには本当のこと言わなかったの？」

奈津美が尋ねると、涼介は頷く。

「情けないじゃないですか。男のくせに、高いところが苦手なんて……」

そこまで言い、涼介の耳が赤くなった。

「それに……加奈がこういうの好きで、行きたいって言ったから……」

奈津美には分かった。

どうして、高所恐怖症なのにこんなところにきたのか。それは、加奈に対する涼介の想いだ。加奈のために、本当なら苦手なところに来た。

涼介は本当に加奈のことが好きなのだ。奈津美にも伝わってくる。

「今日、旬と奈津美さんと一緒に来てもらったの、俺が旬に頼んだからなんです」

ここで涼介は今回、Wデートを企画した真相を話し出した。

数日前、加奈とのデートが決まり、一人焦りながら、コンビニで雑誌を立ち読みしていた。

それは所謂地域情報誌で、ここのアトラクションにどのようなものがあるかを下調べしてたわけだ。

やはり、絶叫系は自分の限界を超えるものばかりだと知り、愕然としていた。

その時だった。

「あれ？ 涼介じゃん」

聞き覚えがある声がして、その方を向いた。そこには、旬がいた。

「やっぱり。久しぶりだなー」

旬は買い物を終えた後らしく、袋を持っていて、懐かしそうに言った。

「おう、旬。久しぶり」

涼介も懐かしく、そんな挨拶をした。

「全っ然会わねえからなあ。大学どうよ？」

「ああ。まあまあだな。お前は？」

「俺もまあまあバイト生活がんばってるかなー」

「それ頑張ってるって言えるのか？」

頼りない返事に涼介は笑った。



「頑張ってるっての。一応生活かかってるんだからな」  
胸を張っているが、胸を張っていいことなのか……

「あ、そういえば、加奈は？ 続いてんのか？」  
旬が思い出したように言う。

「ああ。一応な」

「おー。なげえなあ。もう二年半か？」

「先月で二年半だよ。でも、聞いたぞ。お前も彼女出来たんだって？  
しかも年上の」

「え！？ マジで！？ そんな噂になってんの！？」  
驚いた口調になりながらも、彼女の話題が出た途端、旬はニヤけた。  
「だした。」

「うわ！ キモイってその顔！」

「キモイっていうなよ！ ちょっと思い出し笑いただけじゃねえか」

そんな言い合いをしながら、二人は笑った。

「ん？ 涼介、何見てんだ？」  
ふと旬の視線が涼介の手に行き、雑誌を覗きこんだ。

「あ、こっつてテレビでよくやってるとこじゃん！ 俺、行ってみ  
たいって思ってたんだ」

子供のように目を輝かせながら、旬が言う。

「ああ……実は、ゴールデンウィークに加奈と行くってことになってさ……」

「へえー……いいなあ………て、あれ？ お前こういうの苦手じゃなかったっけ？」

その瞬間、涼介の頭にある考えが浮かんだ。

「旬、頼む！ ここ、一緒に行ってくれ！」

涼介は手を合わせ、深く頭を下げた。

「へ……？」

旬はただきょんとしていた。

「……それで、今日の、この入場料も、昼飯代も、俺が旬と旬の彼女の分も払うからって言って、無理に頼んだんです」

そうか。そういうことか。

やっと奈津美は今回のことに納得がいった。

誘われる時も、どこか態度が変わったのは、こういう理由があったからだ。

それに……

『ナツは高所恐怖症じゃない？』

さっき言った旬の言葉に感じた引っかけりも理由が分かった。  
旬は、涼介が高所恐怖症ということを知っていたから『ナツは』  
と、区別するような言い方をしたのだ。

「本当にすみません……俺の都合に合わせちゃって……しかも、奈津美さん、気分悪くなっちゃったし……」

涼介が申し訳なさそうに言った。

「ううん！ そんな……あたしのは多分、久しぶりだからこうなっちゃっただけで……涼介君は全然悪くないから……」

奈津美は首を横に振った。

そんな、奈津美が勝手に気分が悪くなったのに謝られると、むしろこっちが悪いことをしてしまったようだ。

「そう言ってもらえると……ていうか、正直、奈津美さんが休んでるっていつてくれたおかげで俺は助かったんですけどね」

涼介は苦笑した。

確かに、一人外れたおかげで、涼介は自然に抜けてこれたのだ。

いや、自然でもないか。友達の彼女とはいえ、あくまで初対面の人間を気にして抜けてくるなんて、不自然だったか……

加奈は、変な誤解をしてなかったのだろうか……でも、こうして涼介が平然としているのだから、大丈夫か。加奈だって、そんな人を疑ってかかるようなコではないだろう。

奈津美は勝手に自分の中で解決させる。

「でも、もしあたしが気分悪くなったりしなかったらどうするつもりだったの？」

奈津美がこうしてみんなから外れることなんて、予想できなかったはずだ。むしろ、旬と同じで絶叫系が好きだったら、振り回されていたはずだ。

「もともと旬にはフォローしてもらおうと思ってたんです。ああいうのに乗り続けて、俺、喋れる自信ないし……二人だったら絶対間が持たないだろうけど、旬が居ればなんとかなると思って……それに……」

涼介はそこまでで言葉を止めた。

「それに？」

奈津美は首を傾げ、鸚鵡返しに聞いた。

「それに……旬も居れば加奈が楽しめると思ったんです」

「え……？」

奈津美は目を丸くした。

そんな奈津美に、涼介はある事実を話し始めた。

## 4 微妙な立場

そのことを聞いた後、奈津美はただ呆然としていた。

「あっ……すみません！ 奈津美さんにこんなこと言って……普通言うことじゃないですよね」

涼介は今になって気付いたように慌てだした。

「ううん。それは別に……いいんだけど……」

微妙な気持ちになりながらも奈津美は首を横に振った。

「でも……加奈ちゃんは涼介君のことが好きだから付き合ってるんでしょう？」

奈津美が確認するように聞くと、涼介は寂しそうに笑った。

「分からないです。正直……今、ちょっと上手くいってないっていうか」

「そうなの？ でも普通に話したりしてたよね？」

涼介は、上手くいってないと言ったが、奈津美には信じられない。今日初めて二人に会って、話したり隣に並んで歩いているところを見たが、二人はどこからどう見ても仲のいいカップルで、上手くいってないようになんて全く見えない。

「会ったら案外普通にできるんですけど……でも、加奈はどう思ってるか……」

「どういうこと？」

「最近……ていうか、大学に入ってからあんまり会えてないんです。学校違うし、お互い忙しくて都合つかなくて、連絡もあんまりしょっちゅう取れなくて……今日の前に会ったのなんか春休み中で、もう一ヶ月ぐらい前だし……だから、加奈に寂しい思いさせてるんじゃないかって思うんです。……でも、加奈は結構平気そうだし……」話しながら、涼介の声のトーンが落ちていく。

「なんかすみません。男のくせに、グチグチ言っ……」  
落ちたトーンのまま涼介は奈津美に対して謝る。

「ううん。それは別にいいんだけど……」

こんなに落ち込んで……真剣に悩んでいる。それも、普段あまりこういうことを他人に話したりもしないんじゃないだろうか。だからこうして、一言言うと芋づる式に出てきてしまうのだ。

「男だからってこと、ないと思うよ」  
奈津美はそう口にした。

「男だからグチグチ言ったらダメとか、高所恐怖症なのが情けないとか、そういうのはないと思うよ」

涼介は奈津美のことを見た。奈津美は正面を向いたまま、言葉を続ける。

「誰にだって好きなものと嫌いなものはあるし、それは人によって違うんだし……あ、でも、あたしの場合、旬と付き合い始めてそれに気付いたんだけどね」

そこまで言って、奈津美は涼介の方を向いて笑った。

「旬に会うまでは、男の人は……ていうか、自分の彼氏には苦手なものとかあって欲しくなかったんだ。男の人って、あたしより大きい人がほとんどだし、力だって強いし……それこそ、涼介君みたいに高所恐怖症でビビッてる人とか、なんか、男として情けないって思ってた。でも……」

次を言い始めて、奈津美は思い出し笑いをした。

「それを言ったら旬なんて、甘いものが大好きだし、コーヒー飲めないし、男のくせになってことの塊じゃない。……でもね、それは別に嫌じゃなかったの」

「それって、旬だからですよ。奈津美さん見てたら何となく分かります」

涼介は、口元を緩めながら言った。

奈津美の顔は、本当に優しく綻んでいて、それが旬のことを話してるからだというのは、涼介にも分かったのだ。

「ううん。多分、旬だからってことはなかったよ。……あたしね、旬が甘いもの好きだっていうの、まだ旬のことをよく知らない時に知ったの。ケーキバイキングのお店をじっと見ててね、甘いもの好きなの？　ってきいたら、恥ずかしそうだったけど、すぐに頷いて……旬は、そういうことを全然隠さなかったから、あたしもすんなり受け入れられたっていうか。旬は苦手なことも好きなことも、一つも隠さないから、旬のことを見損なったりはしたことはないかな」

旬は、どんなことでも堂々と口にする。羞恥心というものがないのかというくらい、どんなことでも堂々と。

多分旬は、嘘をついたりできない性格なのだ。実際、今回のダブ

ルデートの話を持ち出した時も、明らかに不自然だったから……

「やっぱり、隠されるよりは、正直に言って欲しいのよね……だから涼介君も、加奈ちゃんに正直に言ってみたらどうかな？」

旬のは性格だし、特殊だから、旬のようにはいなくても、正直に言うことは大事だと思う。

特に。話を聞いていたら、二人はなかなか話をする事が無いよ。うだ。それなら尚更、必要なのではないだろうか。

「……て、あたしが偉そうに言えることじゃないんだけど」

大きな口を叩いておいてなんだが、これは旬と付き合い始めて、ごく最近気付いたことであって、奈津美も人のことをいえない。笑って誤魔化しておく。

「……ありがとうございます。奈津美さん……」

涼介は、奈津美に向かって微笑んだ。

「何か、奈津美さんって本当に旬にはもったいないですよね」

「え……」

奈津美は目を丸くした。

「そ…そんなことないわよ！ あたし、そんなできた人間じゃないし……これでもあの旬がいないとダメなところだってあるし……」

「そういうのが、羨ましいです」

涼介の表情は、少し曇っていた。



「ナツー！ 涼介ー！」

すぐに誰のものか分かる声がして、奈津美と涼介はすぐに反応した。

やっぱり、旬が笑顔でこっちにやってきている。加奈も隣にいる。

「ナツー！ 会いたかったー！」

ナツの目の前まできた旬は、奈津美の頭を自分の腹に押し当てるようにして抱き締めた。

「やだ……もうっ！ 旬、大袈裟よ。ちょっとだけじゃない」

奈津美は恥ずかしくて、旬の腕をほつきながら言った。

「そうだけどー。あ、ナツ、大分顔色よくなってるな。よかった」

旬は奈津美を見下ろして、頬を撫でて言った。

そういえば、涼介と喋ってるうちに、体調はよくなってきたようだ。

「なあ、そろそろ昼飯行こーぜ。俺、腹減った」

旬が三人に対して言った。

「うん」

「そうだな」

加奈と涼介が頷いた。

「じゃ、行こ」

旬は奈津美の手を引いて歩き始めた。

その後ろから、涼介と加奈が並んでついてくるのを、奈津美はちらつと振り返って見る。

二人は、普通に接し、話しているように見える。

あれのどこがうまくいってないのか……

「なあ、ナツ。涼介から聞いた？ 今回のこと」

旬が声を潜めて言った。

奈津美は旬を見上げる。旬はいつものちよつと碎けすぎたような表情ではなかった。

何のことを聞いているのかすぐに分かった。

「うん。一応ね」

奈津美は旬にそれだけ答える。

「ごめんな？俺から勝手に何か言うの、ダメかと思ったからさ？」

旬は奈津美の反応を窺いながらそう言う。

「いいよ。……最初から、何かおかしいって思ってたから」

「え！マジで？」

旬は心底驚いた表情になっていた。

旬はあれで何にもバレていないと思っていたらしい。

「分かるわよ。旬、態度に出すぎなんだから。……でも、涼介君か

ら話聞いて、旬らしいと思ったけど」  
少し呆れながら奈津美は言った。

「ナツ……以心伝心だな！」  
満面の笑みで旬は言った。

「……何が？」  
突然意味が分からず聞き返す。

「だって、俺はナツのこと何でも分かるし、ナツは俺のこと何でも分かるじゃん」

旬は自信満々の様子だった。一体、何を根拠に言っているのか……

奈津美はそれがおかしくて笑った。

「何でそこで笑うんだよー」  
旬は口を尖らせていた。

四人は、ファーストフードのチェーン店に入った。こういう店は、大抵どこの遊園施設にもあるらしい。

「開いてる席はー……と、あそこだな」

昼時のため、店の中は混雑していたが、端の方に丁度四人が座れる席があいていた。

「じゃ、俺と涼介で買ってくるから、ナツと加奈、座っというて」

「うん」

「分かった」

そうして、二手に別れ、旬と涼介はカウンターへ、奈津美と加奈は空いてる客席へと向かった。

奈津美と加奈は向かい合って座り、旬と涼介が来るのを待つ。

奈津美は、何となく居心地の悪さを感じていた。

加奈が全く喋ろうとしないのだ。さっきから、ずっと携帯をいじっている。その表情というか、雰囲気は、とても機嫌が悪そうにも見える。

いや、黙っているからそう見えるだけで、何ともないのかもしれない。

「か……加奈ちゃん。えっと……ど、どのくらいアトラクション回ってきたの？」

とりあえず、奈津美は声をかけてみる。

「……一応、一通りは乗りました」

加奈は携帯から目を離さず、冷淡に言った。

「そ……そう……どうだった？ 楽しかった？」

加奈の反応にビクビクしながらも奈津美は質問を重ねた。

「……まあ、それなりに」

加奈の様子は変わらない。

「……そう。よかったね……」

奈津美は確信した。

加奈は、本当に機嫌が悪い。しかも、恐らくは奈津美に対してだ。それは奈津美の勘だが、強ち外れてはいないと思う。

でも、そうだとすると、何でそんな態度を取られるのか……

今日初めて会って、最初は普通だったはず。むしろ、とても優しい子だったはず。

奈津美が気分悪いと言った時も心配してくれた。

というか、今日はほとんど一緒に居なかったのに、どうしていきなりこういう態度なのか……

ふと、涼介に聞いた話を思い出す。

もしかして、奈津美が匂と付き合ってるから……

いや、でもそれなら最初から奈津美に対して冷たいだろうし……むしろ、今日最も匂と共にいたのは加奈の方だし……大体、加奈は今涼介と……

そこまで考えて、奈津美は気付いた。

もしかして……加奈は奈津美が涼介といたことが気に入らなかったのでは……

そうだ。それが一番考えられる。  
さつきは、別に加奈は疑ってきたりしないだろうと思っていたが、  
こうなると話は別だ。

涼介が抜ける時に何と言ったかは知らないが、その言い方次第で  
は変に疑われてもしようがない状況だ。

でも、あたしは何もしてないのに……

自分も女ながら、女というものは怖いと、奈津美は思った。

「お待たせー」

旬の明るい声がして、奈津美はあからさまにほっとした。

旬が奈津美の隣に座り、涼介が加奈の隣に座る。涼介が来ると、  
加奈は携帯をしまう。

「ナツ、どっちがいい？ 新しいのあってさ、気になったから買っ  
てみたんだ」

旬はウキウキと二つのバーガーを奈津美に見せる。

「じゃあ、こっち」

新製品というその二つは、ただチーズが入ってるかどうかの違い  
だ。奈津美はチーズが入ってない方を選ぶ。

「じゃあ、はい。いっただっきまーす」

奈津美の前にハンバーガーを置き、旬は早速包みを開いて食べ始

める。

奈津美も包みを開き、食べようとした。……が。

ボト……

隣で旬がテーブルに何かを落とす。

見てみると、バーガーにはさまっているソースのついたレタスだった。

「旬。こぼしてる」

「むあ？」

旬は口いっぱいにはお張って奈津美の方を向く。

その拍子にまたレタスが落ちる。

「もー……こぼさないでもっときれいに食べてよ」

奈津美はため息をつきながら紙ナプキンでレタスを拾う。

「違うって。これ、何かやたらレタスはさまってるんだって」

「何が違うのよ。旬の食べ方が悪いんでしょ……って、ああ、もう。」

口の周りもベタベタだし……何で鼻にソースがつくのよ」

奈津美は更に紙ナプキンで旬の口周りと鼻の頭を拭う。

「鼻が高いからかな」

「だから食べ方が悪いんだってば。……もう」

「……旬。お前は幼稚園児か」

これまでのやり取りをまん前で見ていた涼介が呆れたように言った。

その声で奈津美はハツとする。目の前に涼介と加奈がいるのに、なんて恥ずかしいことをしてしまったのか……でも奈津美の性格上ほっとけないことだった。

「奈津美さん。こいつ、昔っからこうなんですよ。何するにも手がかかるっていうか」

涼介が笑いながら言った。

「何だよ。その言い方。今は別にそんなことねえし」

「今はって、昔のは認めるのかよ。つうか、今の見てたら全っ然変わってねえだろ」

「変わったって。俺は日々進化してんだからな。なっ！ ナツ」  
そう言っつて匂は笑顔で奈津美にふる。

「……さあ」

奈津美は曖昧に返す。

なっ！ と自信満々に言われても、そうだねと言えるほどの変化があったとは思えない。

「ほら。やっぱダメなんじゃん」

「えー！ 何でだよー。俺頑張ってるじゃん！」

「ホントに頑張ってる奴は自分で頑張ってるって言わないだろ」



「確かにそうよね」

涼介が言ったことに納得し、奈津美は笑った。

「何だよー」

口を尖らせる匂を見て、涼介も笑っていた。

笑いながら、奈津美はふと加奈の方を見た。そう言えば、加奈はほとんど喋ってない。

加奈と目が合った。加奈も奈津美の方を見ていたらしい。そしてその瞬間、加奈は奈津美をキッと睨んで、すぐに視線をそらした。

………え？ 何？ ……今、睨まれたの？

この一瞬での奈津美の認識は、それぐらいだった。でも、確実に分かった。

奈津美は、加奈に嫌われてしまったということが……

食べ終えた後、奈津美はトイレへ行った。

用を済まし、個室から出たところで、はっと立ち止まる。

「加奈ちゃん……」

洗面台の鏡に向かい、加奈が化粧を直していた。

「どうも」

鏡越しに奈津美を見ると、加奈は小さくそう言った。

ここの洗面台は二つしかない。

必然的に、奈津美は加奈の隣に並ぶことになる。

……気まずい。どうしようもなく気まずい。

自分を嫌っていると分かっている相手の前で、嘘でも明るく振舞えるほど、できた人間じゃない。どうすればいいのか、対応に困る。

「……やらしい……」

手を洗っている奈津美の隣で、ボソリと声がした。

「え……?」

奈津美は驚いて加奈の方を向く。

加奈は奈津美の方を見ず、マスカラをポーチにしまっている。

「そんな胸の谷間チラチラ見せて、彼氏いるのに、男誘ってるんですか?」

加奈の冷たい言葉に、奈津美は固まってしまった。

その様子を尻目に、加奈はさっさと鞆にポーチをしまい、トイレを出て行った。

奈津美は、呆然としながら、自分の胸元を見下ろした。

今日は、黒のタンクトップに、白い七分袖のブラウスを羽織っていた。

胸元がぎっくりと開いているというわけではないが、奈津美の豊かな胸は、ふとした瞬間に谷間を覗かせるのかもしれない。

でも、別に誘っているわけではない。彼氏が居る居ないに関わらず、そんなつもりは一切ない。

加奈は、勘違いしている。涼介は、加奈のことをあんなに好きでいるのに……

あたしって、加奈ちゃんにとっては嫌な存在なのかな……

そう思い、奈津美はため息をついた。

## 5 過去の恋と友情と

「あ、ナツ来たー」

トイレから出てきた奈津美を見て、旬が笑顔になる。

「ごめん、待たせちゃって……」

奈津美は力なくそう言った。

「どしたの、ナツ。元気くない？」

旬は首を傾げて奈津美の顔を覗きこんだ。

「あれ？ ナツ、ボタン閉めてたっけ？」

奈津美が答える前に、旬は更に質問を重ねた。

さすが旬。気付くのが早い。

奈津美は、さっきまで全部開けていたブラウスのボタンを、第二ボタンまで閉めていた。

それは言うまでもなく、加奈に言われたこと意識してだった。

「ちょっと……肌寒かったから、閉めたの」

奈津美は笑顔を作ろうと努力しながら答えた。

まさか、本当のことなんて言えない。

「え、そう？ 寒い？ 俺は暑いぐらいだけど……」

「旬は長袖だからよ。あたしは暑くなるかと思って七分袖着てきちゃったから」

そう言って、奈津美は誤魔化す。

「ふーん。そっか」

「……あ、あれ？　　そういえば、涼介君と加奈ちゃんは？」

話題を他に変えようとして、二人が居ないことに気付いた。奈津美は辺りを見回す。

「ああ、外だよ」

旬は店の外に視線を向けた。

確かに、ガラス越しに二人が話してるのが見えた。

「そうだ、ナツ。今からゲーセン行くかって話になってたんだけど、いい？」

「ゲーセン？　　あるの？　　ここ……」

「うん。俺と加奈は一応全部乗りつくしたし、涼介は乗れないだろうし……あ、でもナツ、乗りたいのとかあった？」

「ううん。……あ」

首を横に振った奈津美の視線が、旬とは違う方で止まる。

「何？　　ナツ」

「観覧車……」

「え？」

匂が奈津美の視線の先を追うように見る。

店の外の、その更に遠くに七色のゴンドラによってできた観覧車の輪が見えた。

遊園地の定番と言えるそれは、ここにもあったのだ。

「ナツ、乗りたいの？」

「ううん。あれも、涼介君は無理かなあって思って。観覧車はスピードもないし、そんなに怖くないし」

「あー。無理だな。本当に高所恐怖症の奴って、観覧車みたいにつくりじつくり高いところにいる方が怖いんだって」

「そうなの？」

「少なくとも涼介はそうだって言ってた。でも、何で？  
匂は首を傾げた。

「何だかんだで、涼介君と加奈ちゃん、二人きりになってないじゃない。久々に会ったみたいなのに……でも、無理なら乗らないだろうね、涼介君は」

もし、涼介が大丈夫というのなら、せめて観覧車の中では二人になれるだろうと思った。しかし、無理だというのならしょうがない。

「あ、そうだ。いいこと思いついた」  
唐突に匂が言った。

「え……何？」

奈津美が尋ねると、旬はにっこりと微笑むだけで何も言わなかった。

ゲームセンターの中では、旬がクレーンゲームに夢中になっていて奈津美は数歩離れたところから、それを見ていた。

そして、涼介と加奈も、旬とは別のクレーンゲームをやっている。

加奈がガラスケースの中のぬいぐるみを指さして、涼介がそれを取ろうとチャレンジしている。

持ち上がったと思ったら落ちたり、隣のぬいぐるみが邪魔をしていたり、なかなか上手くいっていない。

一体いくら使ったのかという何度目かの挑戦で、何とか穴にぬいぐるみが入った。

涼介がそれを取り出し、達成感に満ちた笑顔で加奈に渡す。

加奈は、それを受け取って、本当に嬉しそうに笑っていた。

やっぱり、奈津美には信じられない。あんなにお互いがお互いのことを好きなのに、上手くいってないなんて……

そんなことを考えていた奈津美の頬に、何か柔らかいものが触れた。

振り返ると、旬が満足そうな笑みを浮かべてそこにいた。

「ナツ！ 取れたよ！」

なんだか誇らしげにいう旬の手には、二つのぬいぐるみがあった。

何かのキャラクターというわけではなく、完全にオリジナルであろうそれは、円錐のような形をしていて、可愛い目と口がついていた。色は真っ白と薄い茶色だ。

全体的にはまあ、可愛いだろうというそれは正体不明だ。

「何？ これ」

「ましゅまるん」

奈津美が尋ねると旬はすぐにそう答えた。

「ましゅまるん？」

「そう。こっちがマシユマロ色で、こっちが栗色。すっげー触り心地いいんだ、ほら」

旬は奈津美にそれを差し出す。

「ホントだ。気持ちいい」

生地はサラサラしたもので手触りがよく、硬すぎず柔らかすぎない程よい弾力があった。

よく見れば、このぬいぐるみの形は、円錐というより、栗の形だったのだ。それで、このマシユマロのような感触。だから『ましゅまるん』というわけだ。

「だろ？ これさあ、ナツのおっぱいそっくりなんだよな。形とか。だからこうするとナツのおっぱいに挟まれてるみたいで幸せな気分」



旬は二つのましゅまろんで両頬を挟み、至福の笑みを浮かべた。

「なっ……何言ってるのよ！　こんなところで……」  
奈津美の顔は真っ赤に染まっている。

「だって気持ちいいんだもーん。そりゃ、本物の方が俺は好きだけ  
ど」

「もう！　バカ！　知らない！」  
奈津美は旬に背中を向けて離れていこうとする。

「じょっ冗談だって！　これ、一個はナツのだから」  
旬は慌てて奈津美を追いかけて正面に回りこむ。

そして、真っ白の方を奈津美に差し出した。

「……あたしの？」

「うん。俺とおそろい」  
旬がにっこりと笑った。

ぬいぐるみと旬を見比べて、奈津美は思わず笑ってしまった。  
ぬいぐるみがおそろいで喜ぶのなんて、普通は女の子だけだ。で  
も、なぜか旬だと違和感がなかった。

「ナツ？」

笑った奈津美に対して、旬は首を傾げる。

「……ありがと。旬」

笑顔のままそう言って受け取ると、旬は更に満足そうに笑った。

「なあ、ナツ。あの二人のことだけどさ」

旬がいきなり話題を変えて、ちらりと涼介と加奈の方を見た。

奈津美もそっちに視線を向けると、二人はまた違うぬいぐるみに挑戦していた。

「大丈夫だよ。別に心配しなくても」

続けて旬はそう言った。

「え……？」

「何か、気になってるみたいだったから」

奈津美は目を丸くした。

旬は、見てないようで結構みていたのだ。

「それに、俺に考えはあるし」

「考え？」

奈津美が聞き返すと、旬はまた笑顔になるだけで、何も言わなかった。

気付けば、四時前になっていた。知らないうちにゲームセンターでかなりの時間を過ごしていたらしい。

「なあ、そろそろ出ないか？」

旬がそう言い出した。

「そうだな」

さすがにもう飽きてきた涼介もすぐに頷いた。

外に出ると、旬は奈津美の手を取った。奈津美はいつものことなので、特に何も気をかけなかった。

「今からさ、観覧車いかね？」

旬は、三人に対して言った。

「え……？」

予想もしなかったことに、奈津美は目を丸くした。

「あれだけ乗ってなかったし」

旬は奈津美の様子など気にしていない。

さっき奈津美が観覧車の話をした時、涼介が乗れないと、旬が言っただけなのに……

奈津美が涼介の方を見ると、涼介は奈津美以上に驚いたようで、目が泳いでいる。

必死に旬を見て何かを訴えているが、旬は明らかに分かってて気付いていないフリをしている。

「うん。行こっか」

加奈が笑顔で頷いた。

その瞬間、旬の顔が僅かにニヤリと緩んだのを、奈津美は見逃さなかった。

「じゃ、別れて乗ろう。俺とナツで乗るから、そっち、涼介と加奈な」

「え!?!」

もう隠すことなく、涼介は大声をあげた。

「じゃーな。また後で」

旬はそれだけ言い、奈津美の手を引いてさっさと歩きだした。

「しゅ……旬」

振り返って見てみると、涼介はあんぐりと口を開けていた。

「ねえ、旬。いいの?」

奈津美が聞くと、旬は笑顔で頷いた。

「いいのいいの。だってこれで二人つきりになれるだろ。涼介と加奈が」

「え……」

旬のしたり顔を見て、奈津美はすぐにピンときた。

「もしかして、そのために……?」

「そっ。いい考えだろ?」

旬は満足気だった。

旬が思いついた『いいこと』とは、旬が言っていた『考え』とは、このことだったということだ。

奈津美は言葉を失っていた。

「お足元にご注意してお乗りくださいーい」

係員にそう促されながら、旬と奈津美は観覧車のゴンドラに乗り込んだ。

「俺、観覧車も久々なんだよなー」

狭い密室に向かい合って座り、旬は窓の外の景色を見ながらそう言った。

「ねえ……涼介君、大丈夫なの？　こういうのが一番無理なんじゃないの？」

奈津美は確認するように旬に言った。

「うん。でもまあ、乗れないなら乗れないでいいと思うけどな」  
旬は正面に向き直りながらそう答えた。

「何で？」

「どっちにしても俺らがこれ降りるまでは二人でいられるわけだし。それに、乗らないってことは、涼介が自分でホントのこと言っていたことだろう？」

「あ……」

旬に言われて、目から鱗だった。

旬はそこまで考えていたのだ。今日は、旬の意外なところに驚かされてばかりだ。

「まあ、どっちにしろ大丈夫だよ。あの二人、お互いに自分達は上手くいってないって思ってるけど、ただ単に一緒にいる時間が少ないだけだから。二人になってちゃんと話せば分かるよ」

「そうよね……」

旬の言葉を聞いて、奈津美はほっとしながら頷いた。

「旬。加奈ちゃんがまだ旬のことを好きなんて、ありえないわよね」

「……へ!？」

一瞬間があいて、旬は間拔けな声をだした。

「何それ。ありえないし。何でそんなこと……って、え? 『まだ?』」

目を丸くして否定する旬だが、奈津美の言葉に引っかかりを感じて、きよとんとしている。

「旬。高校の時に加奈ちゃんに告白されたんでしょ?」  
奈津美はさらりと言った。

「え……何で知って……」

「涼介君に聞いたの」

涼介と二人で話していた時、こんなことを言っていた。

「加奈は、旬のことが好きだったんです。それで高二の時に告って、でも、振られて……その時、すっごく落ち込んでたんです。本当に好きだったみたいで……俺と付き合ってるけど、それでも、まだふっ切れてないのかもって思う時があるんです。……だから、今日、旬と一緒にいたら、少しでも楽しめるかなって思ってた……」

「涼介、そんなこと言ってたの？」

奈津美の話を聞いて、旬は目を見開いた。

「うん」

奈津美が頷くと、旬は腕を組んで首を傾げた。

「涼介……何でそこまで勘違いしてんだ？」

「何かあるの？」

「だって……本当にありえねえもん。加奈が俺のこと好きなんてさ。確かに……俺、だいぶ前に加奈に告られたけど……でも、俺は加奈のことダチだと思ってたから、断ったんだ」

旬は少し決まりが悪そうに下を向きながらそこまで言った。

「でもさ！ もうありえないんだって！ つうか、加奈と涼介が付き合い始めたの、俺が加奈に告られた五日後ぐらいだったし！」  
旬が顔を上げて必死に奈津美に訴えかける。

「そうなの？」

奈津美も流石にそれには驚いた。

「うん！ それに……加奈だって今日、ずっと涼介のこと言ってたんだ」

「涼介……あたしのこと、もう好きでもないのかな……最近、何か冷たい気がするし……今日だって、久しぶりに会えるのに、急に二人じゃなくなったし……あ、別に匂達と一緒になのが嫌なわけじゃないよ？ ……でも、今も急にあたしから離れて行っちゃうし……もう、あたしと一緒に居るのが嫌なのかな……？」

「そんな感じでずーっと言ってたんだ」

「そう……」

「涼介に今日のこと頼まれた時、上手くいってないって言ってたから……俺はてっきり加奈が……こんなこと言ったらダメかもだけど、別れたいって思ってるのかと思ってたんだ。でも、全然そんなことなかった。二人とも、何か思い違いしてるだけだったんだ」

奈津美には、何となく二人の気持ちが分かった。

奈津美も、こんなに匂の近くにいたのに分からなかったことだった。勘違いして、相手の気持ちを悪い方に思い込んでしまったことだってあった。

涼介と加奈の場合、離れている時間が多いせいで尚更だろう。



「俺さあ、二人には別れて欲しくないんだ」  
旬が真剣な顔をして言った。

「涼介も加奈もすっげー大事なダチだし……っつか、涼介のおかげなんだよ。加奈と今もダチでいられるの。俺、加奈とは結構話合うから仲良かったんだけどさ……加奈に告られてからしばらく話せなくなってる……でも、涼介と付き合ってから、また話せるようになったんだ。前と同じくらいに。……だから……涼介には感謝してるっつか」

そういう旬は、ほんの少し照れ臭そうだった。

分かっていたことだけれど、旬は、優しい。人との関係を大事にしている。

それを改めて知って、奈津美は和やかな気持ちになった。

「……だから、今日のこと引き受けたのね」

「うん……うーん？」  
旬は最初は頷いたが、すぐに首を傾げる。

「何？」

「いや……確かにそれもあるんだけど……その……俺も、ナツと来たかったから……」

「え？」

「……ナツ、こういうトコ、あんまり好きそうじゃないから、今まで誘ったりできなかったし……だから、今日は何気に楽しみにして

て……ごめんな？」

旬は奈津美をじっと見て謝る。

「何で謝るの？」

「だって……俺の勝手だったし……結局ナツ、気分悪くしちゃってさ？」

奈津美の表情を伺いながら旬はポツポツと答える。

奈津美は、そんな旬の様子を見て笑った。

「別に……気にしてなんかいいわよ。旬が勝手なのはいつのもことじゃない」

「え！？ 俺いつもそんな勝手だった！？」

旬は奈津美の言ったことを真に受けて目を丸くする。

「嘘。冗談よ」

奈津美はそう言って笑った。

「何だよー」

むくれる旬を見て、奈津美は笑った。

それにつられて、旬も笑った。

「ナツ。こっち来て」

旬は自分の座っている隣を軽く叩いて言った。

「あたしがそっちいったら傾いちゃうわよ？」

「大丈夫だよ。ナツ、軽いし。つうか、今だってちょっと傾いてる

んだから変わんないって」

奈津美は小さく、もうっ、と呟き、匂の隣に腰を下ろした。

「ナツ」

横に座ると同時に、匂は奈津美の体を横抱きにした。

「何？ 匂……いきなり……」

「別にー？ 俺達も何だかんだで今日はあんまり一緒にいなかったから」

そう言って、匂は奈津美に頬を寄せた。

「あ！」

そのままの状態で匂が叫んだ。

奈津美の肩がビクリと動いた。

「びっくりした……匂、いきなり耳元で叫ばないでよ」  
奈津美は顔を匂の方に向けた。

「だってだって！ もうてっぺん過ぎてたし！」

「え？」

「観覧車がつっぺんに来たときにナツとチューしたかったのに……」

匂は心底悔しそうにそう言った。

奈津美はポカンと匂のことを見た。そしてすぐに笑った。

「何？ ナツ、何で笑ってるの？」

旬は奈津美を見てきょとんとしている。

「だって……それぐらいのことで悔しがることないじゃない」

「何だよー！ 俺にとっては大事なことのー！」

「いいじゃない。別に。また今度、来た時でも」

その言葉が意外だったのか、旬は目を見開いた。

「何？」

「だって……ナツからそんな台詞が出るとは思わなかったから……」

「あたしそんな変なこと言った？」

「ううん。超可愛いこと言った」

旬はそう言って笑顔になり、奈津美を抱き締める腕に力を込めた。

「もっ……もう！ 旬はまた変なことばっか言う！」

奈津美は真っ赤になって言い返した。

「へへっ。ナツー……」

旬は、奈津美の頬に唇を寄せた。

頬に唇があたった瞬間、二人の間に言葉がなくなった。

今度は、どちらからともなく目を閉じて、お互いの唇を合わせた。

旬の望みの頂上ではなかったけれど、そんな条件なんて関係なかった。

どんな条件であろうと、その瞬間の特別な気持ちは、変わらない。

唇を離すと、奈津美は旬に体を預け、その余韻に浸る。

半分を過ぎて徐々に地上に近付いてきている時になってやっと、奈津美は観覧車の外の景色を見た。

「綺麗……」

オレンジ色になった太陽が、空も地上も染め上げていく。

滅多にない光景というわけでもないのに、奈津美の口からは、自然とその言葉が出た。

「ん……」

旬は返事ともつかない言葉で反応をする。

奈津美の胸のしたに巻きつけられていた旬の腕が、もぞりと動く。

何をするのかと思ったら、旬は片方の手で奈津美のブラウスのボタンを外していく。

「えっ……ちょっと……やだ、旬！ 何してんのっ」

奈津美が焦りながら言っても、旬は手を止めない。

ブラウスのボタンが全部外されると、旬はタンクトップの胸元に指を突っ込んで引っ張る。

「うん。絶景」

その中を覗き込んで、旬は満足そうに頷いた。

「……！ 旬……！」

バシンと乾いた音と共に、ゴンドラが揺れた。

観覧車から降りたあと、奈津美はさっさと歩き出す。旬とは並んで歩かない。

「待って。ナツ……ごめんて……ちょっとふざけすぎて……」  
頬に手形をくつきりとつけた旬は、奈津美の背中を追いかけて話しかける。

しかし奈津美は答えない。

「でも別に誰も居ない場所だったんだし……」

これも無視する。

「ナァーッうー！ 許してよー……！」

旬は少し泣き声になって奈津美に向かって叫ぶ。  
その声の大きさに、奈津美はぎよつとする。

「ちよ……もうっ！ 分かったからそんな大声出さないでよ！」  
奈津美は旬を振り返って慌てながら言った。

「だってナツが無視するからー……」

「自業自得でしょ！」

むくれる旬に対して、奈津美は厳しく返す。

「でもー……あ」

何か言い返そうとした旬の視線が、奈津美から外れて一点でとまる。

「何？」

奈津美もつられて旬の視線の方を向いた。

「あ……」

奈津美も旬と同じように、声を漏らした。

そこには、涼介と加奈が並んで歩いてくる姿が見えた。

二人は奈津美と旬が歩いてきた方向と同じ……観覧車のほうから歩いてきている。

ということは、乗ってきたのだろうか……いや、乗ってきたのだ。それは、二人を見て分かった。

二人は、しっかりと手を繋いで、歩いている。それを見ただけで……

「ほら。大丈夫だったろ？」

旬がニッと笑いながら言った。

「うん……」

奈津美は静かに頷いた。

二人が、奈津美と旬の方に気付いて、加奈が手を振ってくる。その表情は、とても幸せそうな、笑顔だった。

「よし、涼介。楽しかったか？」

旬は笑いながら言う。

「旬……」

涼介は、恨みがましく旬のことを見ている。

やはり、観覧車に乗るはめになったことは、相当嫌だったらしい。

「いいじゃん。結果オーライだろ？」

旬がそう言うと、涼介は加奈と顔を見合わせた。そして、恥ずかしそうに顔を赤くして、

「まあ……」

と、小さく呟いた。

「……涼介。自分が悪いんでしょう？ 本当のこと、言ってくれなかったんだから」

加奈が怒ったフリをしながら、涼介に言う。

この口ぶり。二人きりの間に何があったのかは分からないが、涼介はちゃんと加奈に本当のことを伝えられたということだ。そして、それは、ちゃんと加奈に受け入れられた。

「……悪かったな」



それでも涼介はまだ恥ずかしいらしく、それを誤魔化すようにぶつきらぼうに言った。

それを見て加奈は笑うと、旬と奈津美の方に向いた。

「旬。ごめんね。気、遣わせちゃって」

「全然。俺、気にしてねえから」

旬は笑顔で答えた。

「……あと、奈津美さんも……ごめんなさい」

加奈は奈津美の方に向き直って頭を下げた。

そこまでされて、奈津美は一瞬驚いたが、すぐに何のことを言っているかが分かった。

加奈は、奈津美に対して嫌な態度をとってしまったことを謝っている。

それに気付いて、ほっとした。

「ううん。あたしも、全然気にしてないから……大丈夫だよ」

加奈に本当に嫌われていたわけではなかった。加奈は、ただ一途に涼介のことを思っていただけだったのだ。それがはっきり分かって、奈津美は顔が緩んでいた。

「じゃあ、俺らは帰るから……」

「おう」

「奈津美さん、今日はありがとうございました」

「ありがとうございました」

涼介と加奈が揃って頭を下げる。

「えっ……そんな、あたしは全然大したことしてないし……」

「おいー。俺にはないのかよ」

旬が口を尖らせる。

「ああ、忘れてた。サンキュ、旬」

「ありがとうね」

笑いながら、また二人揃って旬に言う。

「おう！ まあ、大したことはしてないけどな」

「何よそれ」

奈津美が言って、四人で笑った。

「それじゃあな。旬、奈津美さん」

「また今度、時間があったら遊びに行こうね」

「おう！」

「うん」

涼介と加奈、二人が帰っていく背中を、旬と奈津美は見えなくな

るまで見送っていた。

「本当によかった。ちゃんと、話できたみたいで……」

二人が見えなくなると同時に、奈津美は落ち着いた口調で言った。

「うん」

旬が静かに頷いて、奈津美の手に触れた。

「俺らも帰ろっか」

そのまま指を絡めて旬が言った。

「う……」

頷こうとして、奈津美の動きは途中で止まる。

「ナツ？」

「そういえば旬。話の腰が折れたけど、あたしは許したわけじゃないからね」

「へ？」

「さっきのこと」

「えっ……そんな、ナツ……」

旬の表情が情けなく歪む。

「……また今度、外で同じことしたら本当に怒るからね」

元々怒るつもりではなかったのだが、旬の顔を見たらさらにそん

な気は失せた。

旬はすぐにほっとした表情になる。

「ナツ」

そのまま感極まったという様子で旬は奈津美に抱きついてくる。

「ちょっと旬！ もう！ 言っただそばから……」

「へへっ」

無理矢理引き剥がされながら、旬は笑っている。

「もう……帰るわよ」

呆れながら、奈津美は吹き出してしまう。

「うん！」

こうして、他人の恋の仲介という形になったWデートは幕を閉じた。

## 5 過去の恋と友情と（後書き）

次回は、Wデート特別編です。

## **6 Wデート特別編・心の距離（前書き）**

Wデート特別編は、加奈が主役の話です。

## 6 Wデート特別編・心の距離

最初から、おかしいと思っていた。

「加奈。三日のことなんだけどさ……旬とその彼女と一緒にでもいいか？」

加奈はデートの一週間ほど前に、涼介に電話でそう言われた。

「何？ どういうこと？」

初め、何のことか分からずに加奈は聞き返した。

「昨日、偶然コンビニで旬に会ってさ、色々話してて、今度加奈と新しくできたところ行って話したら、旬も丁度彼女と行くところだって言ってさ……しかも同じ日に。だから、それなら一緒に行かねえかって言われて……旬と、旬の彼女と……そういうわけで……どうだ？」

どうだ、と言われても、加奈には何と言っていいか分からない。でも、言いたいことは山ほどある。

いくら旬とはいえ、何でいきなり一緒に行く流れになったのか……それも、加奈が、涼介だって会ったことのないはずの旬の彼女も一緒に。

旬には暫く会っていないから、友達として、久々に会いたいという

気持ちがないこともない。でも、涼介との久々のデートの日に重ねてまでそんな気持ちにはならない。

涼介は違うのだろうか……

久々だから、二人だけで会いたいとか、そうは思わないのだろうか……

「加奈……？」

電話の向こうで涼介の窺うような声が聞こえて、加奈は我に返った。

「あ……うん。いいよ、別に」

加奈にはそう言うしかなかった。

涼介に言われて断れない。それに、今回のことは匂が言い出したらしいのだから、責めるにも責められない。

「分かった。じゃ、匂にも言って……時間とか、決めとくから」

「うん……」

そうして加奈は、モヤモヤした気持ちを抱えたまま、デート当日を迎えた。

涼介とは駅で待ち合わせて、そこから一緒に目的地まで行き、匂達と合流するという事になっていた。



「加奈！」

待ち合わせ時間の一分前に涼介が現れた。

久しぶりの涼介に、加奈は少し緊張した。

いつもそうだ。大学に入ってから、会える時間が少なくなって、実際に遠くに離れたわけではないのに、遠くの存在になってしまったように感じる。

いつも一ヶ月に一回ぐらいの頻度で会うのだが、一ヶ月も会えないと、変わっていたりする。髪を切っていたり、違う色に染めていたり、見たことのないアクセサリをつけていたり……

些細なことでも、違って見える。

そして、そのことを指摘すると『結構前に変えた』と言われることだってある。

そうされると、会えていなかった時間が本当に長かったのだと、その間の涼介は自分の知らない空間にいたのだと、思い知らされて、切なくなる。

「涼介、ちょっとやせた？」

今日気付いたことは『大分前に』と返ってくることはないと思い、加奈は口にする。

こうやって、言葉を選ぶのも、加奈の習慣になってしまっていた。

「そうか？ 体重は量ってねえから知らんけど……でもまあ、最近バイトばっかだからなあ」

「そっかぁ。大変だね。あんまり無理しないようにね」

「何言ってるんだよ。それは加奈もだろ？」

「え？」

「最近、実習ばっかなんだろ？俺よりむしろ加奈の方が大変じゃないのか？」

劣わるような、優しい言葉だった。

加奈は今、保育系の短大に通っていて、今年卒業の二年生だ。だから、実習や就職活動に追われている。

そのことは涼介にメールでチラリと伝えただけなのに、気にして貰えてた……単純にそれだけで加奈は嬉しくなった。

「実習先で加奈よりちびっ子にいじめられんなよ？」

涼介が笑みを浮かべながら言った。

「なっ……いじめられません！しかも何よ。あたしもちびっ子だっというの？」

「ちびっ子だろ？」

涼介は加奈の頭にポンと手を置く。

身長が百五十センチ前半の加奈の頭は、百七十センチ後半の涼介の肩の下ほどの位置にある。軽く手を置かれると、その身長差が歴然となる。

「もー！やめてよー！縮むでしょー！」

「悪い悪い。気にしてるんだもんな」

涼介は笑いながら手をどかした。

「涼介えー」

むくれたマネをしながら、加奈は嬉しかった。

こうして涼介と触れ合えることが……

「ねえ、旬の彼女ってどんな人？」

電車の中で加奈は涼介に尋ねた。

「さあ……俺も会ったことはないけど……でも年上で、噂だとかなり美人らしい」

「えっ……そうなの？ 何か意外……旬と年上の人なんて……」

「だよなあ……でも、一年以上続いてるらしいぞ」

「へえー。そうなんだ」

加奈は、高校時代、旬のことが好きだった。

本当に好きで、告白して振られた時は、ショックでずっと泣いていた。

それなのに、今はそのことを思い出して、旬の今の彼女のことを聞いたりしても、ちっとも痛くもかゆくもない。複雑な気持ちにもならない。

それは、涼介がいるから……涼介のことが、その時の旬への気持ちよりもっと大きいから……

そういうことだと、加奈は気付いていた。

「じゃーん！ 俺の彼女！」

旬と久々に会って挨拶をして、いよいよ彼女のお披露目ときた。

「ごめんなー。いつもこんなじゃないんだけど、照れてるみたいで」

「ち、違うわよ！」

加奈と涼介の前に現れた旬の彼女は、旬の言葉に強く反応し、ゆつくりと二人の方を向いた。

「初めまして。田辺涼介です」

「斉藤加奈です」

涼介に続いて、加奈も自己紹介をする。

「あ……柏原奈津美です。初めまして……」  
彼女の方も軽く会釈して返してくる。

旬の彼女・奈津美の第一印象は、やっぱり『大人の女』だった。服装や髪型もそうだが、それだけでなく醸し出される雰囲気も落ち着いてる。

しかも美人だ。スタイルも抜群だ。

特に、胸の二つの膨らみは、女の加奈でさえ、つい目がいつてしまふ。足や腕や胴回りは細いのに、そこだけは豊かだった。

「旬がベタ褒めだったからどんな人かと思ったけど……本当に美人だな」

涼介がそう口にした。涼介も同じように思っていたらしい。

「ホント。すごいきれい……」

加奈も涼介の意見には共感する。

「え……」

奈津美が戸惑ったように声を出した。

「だっろー？ 超美人だし、超可愛いし、超自慢できるだろ。俺の彼女」

旬が奈津美の肩を抱く。

「ちょ……旬！」

奈津美がそれだけで強く反応した。

「まあな。おまえの彼女ってことが信じられないぐらいな」

涼介が旬の様子に呆れた様子で言う。

「失礼な。こんなにラブラブなんだっての」

「や……ちょっと……もう！ 旬！」

べちんっ！

抱き締められて、奈津美が旬に平手を食らわす。

「って！ ひっでー！ 何でいきなり叩くんだよお」

「いきなりは旬でしょ！ 何考えてんの、こんなところで！」

「スキンシップだし！ 愛情表現だし！」

「だからこんなとこでしないでって言ってるの！ 恥ずかしいですよ！」

きつく言い合っているようだけれど、奈津美と旬は楽しそうだ。

仲がよくて、お互いが本当に好き同士だということは丸分かりで、加奈は羨ましく思った。

「旬。お前、そういうとこ変わんないなー」

「うん。全っ然変わってない」

加奈も涼介も笑った。

旬は、昔からそうだった。

何に関しても真っ直ぐで、本能的だ。でも、それは周りの空気を和ませる。

だから、今も友達として、好きだと言える。

「じゃ、とりあえず入るか」

「そうだなー」

そう言って、一先ず園内へと向かった。

「おおー！ すっげー！ でっけー！ 色々あるー！」

「ホントー！ テレビとか雑誌より迫力あるー！」

久々の遊園地に、加奈は胸を躍らせていた。

小さい頃からこういう場所が好きで、遊びに来ることが多かった。特に高い所が好きで、絶叫系のアトラクションなんてたまらない。近場にこういう場所ができたと思った時から、行きたくてしやうがなかった。

涼介に、ゴールデンウィークにどこに行きたいかと聞かれて、即答したほどだ。今日になるのが、待ち遠しかったのだ。

勿論、久々に涼介に会えるというのが大前提であつたけれど。

「なあ、どれから行く？ ナツ、どれから乗りたい？」

「えーっと……何でもいいよ。皆に任せるから……」

「ねえ。涼介は？ 涼介は何乗りたい？」

旬が奈津美に意見を聞いたので、加奈は涼介に意見を聞く。

「何に乗りたいてって、どうせ順番とかもちゃんと決めてきてんだろ？」

涼介はそう言って笑った。

「うん！ まあね！」

涼介には、お見通しだった。それが嬉しくて、つい元気よく頷いた。

「待ち時間とかあるからねー、ネットとかで調べて色々考えてきたんだ」

加奈はパンフレットを見て、調べてきたものを確認する。

「すっげーな、加奈。下調べまでしてきたのか」

「で、どれからがいいんだ？」

「んーとねー。あ、これ！ 『コメット・トラックス』……ここからだとー……こっちだ！」

そうして、最初のアトラクションに向かった。

「やった！ 一番前だ！」

丁度次に回ってきたのが四人からで、前に並んでいた加奈と涼介が先頭にのることになる。

「運よかったねー」



「……ああ。そうだな」

加奈が笑顔で言っても、涼介はたったそれだけしか返してこなかった。

そういえば、涼介はさっきから急にそっけなくなって、話さなくなった。

どうしていきなり……

「ねえ、涼介。どうかした？」

流石におかしいと思って加奈は涼介に聞いた。

「えっ……何が？」

「何か……さっきから様子変だし……」

「ど……どこがだよ！ 別に普通だし」

どもっているし、目が泳いでいて加奈とは目が合わない。

明らかにそれは普通じゃなかった。

「それではお気をつけて。いってらっしゃーい！」

「ほ……ほら、動くぞ」

係員の声に反応して、涼介が慌てた様子で言った。

加奈はどうも釈然としなかったが、アトラクションが始まると、それに意識を持っていかれて、その場ではもう気にしてなかった。

「あー、面白かったー」

久々の刺激に、加奈は大満足だった。

「なー。ホントスツとしたし」

それに大きく頷くのは旬だ。

降りた直後も、今も、涼介の反応はない。

元々、涼介はこういうものではしゃぐような性格ではないけれど、流石にデートでそれは寂しかった。

「加奈。次は何に乗ったらいいんだ？」

「えっとねー。次は……あれ！」

旬に言われ、加奈は気を取り直して言った。

次に乗るはこのメインの一つのアトラクション。目立つところにあるそれを加奈は指さした。

「おおー！ すっげー！！」

それを見るなり旬は予想通りの反応をする。

「じゃ、早速行くかあ！」

旬がそう言って、次へと向かおうとした時。

「あ、あの……」

奈津美が口を開き、三人は奈津美に注目する。

「あたし……さっきので気分悪くなっちゃったから……みんなで行ってきて。あのベンチで待ってるから」

「え!？ うわ! ナツ、ホントに顔色悪いじゃん! 大丈夫?」

「大丈夫ですか?」

旬の言う通り、奈津美の顔色が青白くなっていた。

「うん。ちょっと休んだら治まると思うから……だから皆心配しないで行って」

そう言って無理して笑顔を作っているのが見え見えで、そうすると更に辛そうだ。

「じゃあ俺も残る!」

奈津美を見て、旬がそう言い出す。

「いいよ。旬も行ってきて。あたしは大丈夫だから……」

「でも……」

「いいから。行ってきて。旬、楽しみにしてたんでしょ? ていうか、本当は行きたくてしょうがないんでしょ?」

「……それは……そうだけど……」

「旬」

ごねる旬を奈津美がじっと見つめる。

「……分かった。ナツ、何かあったらすぐに連絡してな？」

たったそれだけのことで、旬が引いた。

「うん。分かってる」

「……じゃ、奈津美さん。すみません、あたし達だけで……」

「ううん。あたしこそごめんね。みんな楽しんできてね」

奈津美はそう笑顔で言って、三人を送り出した。

「……大丈夫かなあ……ナツ」

旬が何度も後ろを振り返りながら言った。

「やっぱり心配だな……でも、こういう時に氣い遣ったら嫌だろうしなあ……」

旬はブツブツとそう言いながら悩んでいる。

旬は、本当に奈津美のことが心配だけれど、それでも奈津美の性格を理解しているから残らずに来たようだ。

奈津美は奈津美で、こういうところが好きな旬のために、旬には楽しんで欲しくて行けと言ったのだらう。

加奈はお互い分かり合えている二人のことが、またしても羨ましく思った。

「旬。じゃあ俺が奈津美さんについててやろうか」  
今まで黙っていた涼介が急に口を開いた。

「え？」

反応したのは加奈の方だった。

「旬と加奈で回ってこいよ」

何でいきなりそんなことを言い出すのか、加奈には理解できなかった。

「それなら奈津美さんを一人にするわけじゃないし。いいだろう？」  
旬

『何で？』

そう涼介に言いたいのに、口が動かなかった。

その代わりに必死に視線で涼介に訴えたけれど、涼介の方は旬をだけを見て加奈の方に向こうとしない。

でも、いくら旬でも何も言わないでそれでいいっていうはずなし……

「……わかった」

少し間を空けて旬が言った。

「え……？」

これには流石に驚いて声に出してしまった。

「涼介が言うんだったら任せる」

旬はあっさりと涼介の言ったことに同意してしまった。

「おう。任せろよ。それじゃ後でな」

涼介はそれだけ言って、そそくさと今来た道に戻っていった。

「涼介……」

加奈は、ただ啞然としていた。

順番待ちの行列に並んでる間、加奈は悶々と考えていた。

どうして涼介は、いきなりああ言って戻るなんて言ったのか……

優しさというか、氣遣いだったのか……

でも、奈津美とは今日始めて会ったのに……そこまですうと思  
うのだろうか。

まして旬の彼女で、旬も残りたくても残れなかったのに……

大体、旬は旬でどうしてあんなにあっさりと涼介に任せたのか……

「ねえ、旬。涼介さ……何でいきなり奈津美さんについてるなんて  
言ったのかな……」

加奈は隣にいる旬に話しかけた。

「え？」

旬はきょとんとしていた。

「だって……こういう言い方しちゃったら失礼だけど、奈津美さんとは初対面だし、あんまり話してなかったのに……涼介がそこまですることないじゃない」

そこまで言って、加奈の頭に嫌な思考が働いてしまった。

「もしかして、涼介、奈津美さんに一目ぼれとかしちゃったのかな？」

「……へ？」

目を点にしている。

「だって、ありえない話じゃないよ。奈津美さん、美人だし、スタイルいいし……あたしがもし男だったらいいなあって思っちゃうよ」

「マジでー？ それほどでもあるけどー」

何故か匂がデレデレとしながら頭を搔く。どうやら、加奈の言ったことを褒め言葉として受け取ったらしい。

「そうなんだよなー。でも、ナツは美人なだけじゃなくて、可愛いところもあるし、優しいし、何でもできるし、いい匂いだし、抱き締めたらホント柔らかくて気持ちいいし、男だったらたまんないだろうなー。あ、でもそんな奴、目の前にいたら許さねえけど。何てったって俺がそんなナツの彼氏なんだし」

一気に自慢され、加奈は言葉を失う。

「……ちょっと！ そんな話じゃないの！ 大体、それが涼介かもしれないんだよ！？」 匂は心配じゃないの？」

「心配？ 何の？」

デレデレした顔が、再びきよんとする。

「だから、もし涼介が奈津美さんに一目惚れしてたりしたら……」  
今一度口にして、加奈は不安になって俯いた。

もしそうだったら、絶対に勝ち目がない。勿論、奈津美は匂と付き合っているけれど、それでも……

「大丈夫だよ」

匂のはっきりとした声を聞き、加奈は顔を上げた。

「大丈夫だよ。涼介はそんな奴じゃない」  
きっぱりとそう言い、ニツツと笑った。

匂の自信有り気なその言葉……何を根拠にそう言ってるのか、分からない。

「つうか、それは加奈が一番よく分かってるだろ？」

匂にそう聞かれても、加奈はしっかりと頷くことはできなかった。

「確かに、奈津美さんに一目惚れは極端かもしれないけど……でも、不安なんだもん」

加奈は俯いた。

「涼介……あたしのこと、もう好きでもないのかな」

「え？」



加奈は、匂を前に、自分の気持ちを吐露していく。

「……最近、何か冷たい気がするし……今日だって、久しぶりに会えるのに、急に二人じゃなくなったし……あ、別に匂達と一緒になのが嫌なわけじゃないよ？ ……でも、今も急にあたしから離れて行っちゃうし……もう、あたしと一緒に居るのが嫌なのかな……？」

普通なら、会う時間が少なくなったら、少しでも多く一緒にいたいと思うはずなのに、涼介は迷うことなく行ってしまった。加奈の方は、見ることもなく……

「そんなはずねえよ」

匂がまたさっきのようにはつきりと言った。

加奈は顔を上げた。

そこには、また自信に満ちた……というより、確信を持っているともいえる匂の表情があった。

「涼介は加奈のこと、すっげー好きだよ」

匂のその言葉を、加奈は信じたかった。でも、そうだという自信がなかった。

それから、加奈の予定通りにアトラクションに乗りこなしていた。

アトラクション自体は楽しかった。でも、どこか寂しかった。

隣に涼介がいない。それだけでぽっかりと穴が開いてしまったみたいだった。

「ナツー！ 涼介ー！」

涼介と奈津美が待っているベンチが見えてくると、旬が二人を呼ぶ。

加奈は、並んで座っている涼介を見て、さっき押し込めたはずの不安がぶり返してきてしまった。

涼介の隣には、自分じゃなくて、奈津美みたいな女の方が似合うんじゃないか。そこまで考えてしまう。

「ナツー！ 会いたかったー！」

旬は奈津美の前に立つとすぐに奈津美を抱き締める。

「やだ……もうっ！ 旬、大袈裟よ。ちょっとだけじゃない」

「そうだけどー。あ、ナツ、大分顔色よくなってるな。よかった」  
旬は優しい仕草で、奈津美の頬を撫でる。

旬がどれだけ奈津美のことを大事にしてるか、一目瞭然だった。

「なあ、そろそろ昼飯行こーぜ。俺、腹減った」

「うん」

「そうだな」

旬の提案に涼介と加奈は頷く。

「じゃ、行こ」

旬は、当たり前のように奈津美の手を引いて歩き始めた。

今日会ってからずっとそうだ。旬と奈津美は、歩く時は必ず手を繋ぐ。何の照れもなく、とても自然だ。

でも、涼介と加奈は、繋がない。

いくら旬とはいえ、友達の前だから、恥ずかしいと思うのだ。特に、涼介の方がだ。

だから、加奈は、旬と奈津美が羨ましかった。

「加奈、楽しかったか？」

旬と奈津美の少し後ろに涼介と並んで歩くと、すぐに涼介が話しかけてきた。

「え……？」

「え、って、結構回ってきたんだろ？」

「あ、うん。楽しかった」

加奈は精一杯笑顔を作って答えた。

「そうか。よかったな」

涼介も笑顔になって満足そうに頷いた。

「……涼介も来ればよかったのに」

「えっ」

加奈の言葉に、涼介は明らかに様子が変わる。

「で、でも、奈津美さん一人置いとくのも……旬、かなり心配してたし」

目を泳がせながら涼介が言った。

「でも、せっかくきたのに……退屈じゃなかった？」

「いや、そんなことはなかったぞ。奈津美さんと色々話してたし……」

涼介の口から奈津美の名前が出たことに、奈津美は反応してしまった。

「奈津美さんってかなりいい人でさ。ホント、旬には勿体無いぐらい。何であの二人が付き合うことになったのかちよつと気になるよなー」

笑いながら、涼介が言った。

加奈には、どう返したらいいか、分からなかった。

何で……何で、そうやって他の女の人のことを笑顔で話すの？

それだけが、加奈の胸を締め付けた。

## 7 Wデート特別編・嫌な気持ち（前書き）

すみません。またまた長くなってしまったので次にまたぎます。  
次で特別編完結です。

## 7 Wデート特別編・嫌な気持ち

「じゃ、俺と涼介で買ってくるから、ナツと加奈、座っというて」  
ファーストフード店に入り、空いている席を指差して匂が言った。

「うん」

「分かった」

そうして頷き、二人は席を取りに向かった。

向かい合って座り、加奈は早速携帯をいじり始めた。

こんなことをするのは感じが悪いのは分かっている。  
でも、普通にしていなんていられなかった。

違うだろうと思っていっても、涼介が奈津美のことを気に入っているような気がしてならない。そして、そんな相手と、仲良く話してなんていられなかった。

「か……加奈ちゃん。えっと……ど、どのくらいアトラクション回ってきたの？」

奈津美の方が何かを話そうとして口を開いた。

「……一応、一通りは乗りました」

奈津美の方を見ることもできず、加奈はそれだけ言って返した。

「そ……そう……どうだった？ 楽しかった？」

奈津美は明らかに困惑した様子で

「……まあ、それなりには」

「……そう。よかったね……」

それきり奈津美からの返事はない。

最悪……

加奈は心の中で毒づく。

それは、奈津美のことではなく、自分自身のことだった。

こんなの、ただ勝手に奈津美のことを妬んでるだけだ。そんなこと分かってる。

奈津美は何も悪くない。

なのに、幼稚な自分が、ただ態度に出すだけの嫌な行動をさせる。

間違ってることなんて分かっているのに……

「お待たせー」

旬の声がして反応すると、注文に行った二人が、トレイを持って戻ってきた。加奈は携帯を鞆にしまった。

「ほら、加奈。これでよかったか？」  
涼介が加奈にハンバーガーを渡す。

加奈が前に食べて、美味しいと言ったことのあるものだった。

「うん。ありがとう」

覚えててくれたんだ……

心にじわりと涼介の優しさが広がっていくのを感じながら、加奈はそのハンバーガーを食べ始めた。

ボト……

斜め前の旬の口元から何か落ちるのが加奈の視界に入った。間にはさまってるレタスだ。旬は気付くことなく口を動かしている。

「旬。こぼしてる」

すかさず奈津美が言った。

「むあ？」

旬が奈津美の方を向くと、またレタスがボトリと落ちる。

「もー……こぼさないでもっときれいに食べてよ」

奈津美は紙ナプキンを取って落ちたレタスを拾う。

「違うって。これ、何かやたらレタスはさまってるんだって」

「何が違うのよ。旬の食べ方が悪いんでしょ……って、ああ、もう。

口の周りもベタベタだし……何で鼻にソースがつくのよ」

奈津美はもう一枚紙ナプキンを取り、汚れた旬の口周りと鼻を拭く。



「鼻が高いからかな」

「だから食べ方が悪いんだってば。……もう」

「……旬。お前は幼稚園児か」  
隣の涼介が口を開いた。

「奈津美さん。こいつ、昔っからこうなんですよ。何するにも手がかかるっていうか」

涼介が笑いながら奈津美に話しかける。

「何だよ。その言い方。今は別にそんなことねえし」

「今はって、昔のは認めるのかよ。つうか、今の見てたら全っ然変わってねえだろ」

「変わったって。俺は日々進化してんだからな。なっ！ ナツ」

「……さあ」

「ほら。やっぱダメなんじゃん」

「えー！ 何でだよー。俺頑張ってるじゃん！」

「ホントに頑張ってる奴は自分で頑張ってるって言わないだろ」

「確かにそうよね」

「何だよー」

加奈は、そうやって楽しげに話す三人の間に入っていけなかった。別に、入りづらいわけではない。笑いながら会話に入れば、自然にできる。

でも、入れない。

涼介が、楽しそうに奈津美に話しかけるところを見ながら、自然でいられる自信なんてない。

涼介……何で他の人とそんなに楽しそうに話すのよ……

その時、奈津美の視線が加奈の方を向いた。

とても楽しそうにしている奈津美を見て、加奈は無性に腹が立った。

そして、奈津美に自分でも分かるぐらいの鋭い視線を向けてしまった。それですぐに視線を外す。

こんなことしちゃダメだって分かってる。でも、嫌だった。

涼介が容易く他の人に取りられてしまうみたいで……

「ごめん……」

加奈は、高2の秋に、旬に振られた。

「俺、加奈のことはダチとしては好きだけど……加奈のこと、そういう意識してなかったっていうか……」

理由は簡単なことだった。

旬は、加奈のことを異性として見てなかった。それだけだった。

「でも、加奈のことはすっげー大事なダチだって思ってる！　それはマジだから……」

旬は必死に言葉を繕って、加奈のことを少しでも多く傷つけないようにしていた。

「……いいよ」

加奈は、それがたまらなくて旬の口を止めた。

「何となく、分かったから。あたしこそごめんね。変なこと言うて……でも、ありがとう。すっきりしたから」

そう言いながら、加奈は笑っているつもりだった。

でも、笑えてないのか、目の前の旬の顔は、どんどん歪んでいく。

「加奈……」

「じゃあね、旬。また明日！」

旬が何かを言う前に、加奈は旬に手を振って、その場から逃げた。

その翌日から、加奈は旬と話すことも、目を合わせることもでき

なくなった。

朝、教室で『おはよう』とだけでも言いたくて、でもそれができなくて……匂を避けるようになってしまった。

そんな風になって、加奈は毎日一人で泣いていた。

学校は、匂がいるから泣けなくて、他の友人の前でも明るく振る舞っていた。

そうしていたら、家で一人になると、涙がこらえられなくなってしまった。

そんな日が続いていた時、携帯が鳴った。

涙を拭きながらディスプレイを見ると、涼介からの着信だった。

こんな時にどうして……

今出たら、泣いていることが声で丸分かりだ。加奈は、電話には出られなかった。

着信音は暫く鳴り続けて、ピタリと止んだ。

そして一分もしないうちに、今度はメールの着信音が鳴り響いた。

それも、涼介からだった。

何か急用だったのかな……

そう思い、加奈は涙を噉りながらメールを開いた。

涼介からのメールの本文は、とても短かった。

『大丈夫か？』

その文字が目に入って、加奈はドキリとする。

まるで、加奈の今の状況を見透かしてるかのようだった。

……そうだ。匂に何か聞いたのかな……

匂と涼介は、仲がいい。だから、加奈が匂に告白したことはもう知っているだろう。

涼介には、前に少しだけ匂のことが気になっているのだと言ったことがあった。でも、告白してダメだったということは、言っていない。

ここはしらばっくれよう。

そう思い、加奈は返信メールを作成する。

『大丈夫って何が？』

それだけを入力して、送信する。

メールなら、大丈夫だ。何を言われても、明るく誤魔化せる。

涼介からの返信は、すぐにきた。

『旬に話きいたから。大丈夫なのか？』

やっぱり、そのことだった。

これ以上聞かなくても、涼介が何を聞いてきているのかは分かる。

メールの本文に『旬』と入ってるのを見ただけでまた涙がこみ上げてくる。

加奈はティッシュでそれを拭い、メールを打つ。

『そっか。聞いたんだ。』

でも大丈夫だよ！

すっきりしたから！

もうふっきれたし。

心配させた？ それならごめんね

ホントに大丈夫だから』

できるだけ明るい絵文字を選んで、本当の気持ちを隠したメールを、加奈は送信した。

その返事も、すぐに返ってきた。

『嘘つけよ。電話も出れないくらいのくせに』

そのメールを見て、加奈ははっと気付く。

ついメールを返してしまったものの、電話がかかってきてすぐに来たメールに返してしまったら、電話は無視したと丸分かりだ。

それでも、加奈は誤魔化そうとする。

『何いってんの？』

電話は出ようとしたら切れちゃっただけだよ』

送信し、今度は少ししてから返ってきた。

今度のメールは、少し長かった。

『無理すんなよ。バレバレなんだよ。』

俺はお前が匂のことでどんだけ悩んでたのか知ってるから分かるんだよ。

学校でも無理矢理笑ってんだろ。

見ててこっちまでつらくなるっつーか……

だからせめて俺ぐらいには愚痴ってくれよ。

電話が無理ならメールでもいい。

ちゃんと全部聞くから』

全部読んだ後、加奈の涙腺は崩壊して、ボロボロと涙が落ちた。

そして、泣きながら、それでも迷うことなく、電話をした。

勿論、涼介に……

「もしもし？ 加奈？」

涼介はすぐに出た。

「涼介えー……」

加奈は、匂に振られてから初めて、人前で泣いた。

正確には電話越しではあるけれど、でも、涼介に初めて弱い部分を見せた。

それから暫く、加奈は泣くだけで何も言えなかった。涼介は、ただ黙って加奈の言葉をじっと待っていた。

「りょ……涼介っ……」

「ん？」

「旬は……あたしのこと、友達だとは思ってるけど……付き合えないって……」

「うん」

「それって、あたしのことは、女として、見てなかったってことだよね……あたしは今までもこれからも、旬にそういう対象に見られることはないってことだよね……」

旬に振られて、そういうことだと気付いた。

今までは友達だと思われていてもよかった。でも、告白して、ほんの少しでも旬に振り向いてもらえればと思った。

だけど、そうはいかなかった。はつきり『ごめん』と断られたということは、旬には加奈が女として見られて、旬の彼女になることではないのだと、そう言われたことと同じだった。

「でも……自分勝手だけど……振られたなら振られたでいいから、友達として、旬と付き合っていきたいの……そう思ってるのに……旬の顔見ると……辛い……」

自分でも、言ってることがめちゃくちゃで、ただのわがままだということとは分かっていた。でも、こうして口に出さないと、辛かつ



た。

多分、電話の向こうで涼介は呆れているだろう。そう思いながら、加奈は、自分の心の内を涼介にぶちまけていった。

そうして、もう散々喋ったという時だった。

「加奈……俺じゃダメか？」

涼介が静かに言った。

「え……？」

「俺が、旬の代わりになれないか？」

加奈は言葉を失った。

「俺……加奈のことが好きだ。加奈が旬のことを好きだって聞いても……それはずっと変わらなかった……」

加奈は、気付いてなかった。そんな涼介の気持ちなんて……

涼介にはずっと、旬のことに関しての相談をしていた。涼介は、その時、何の素振りも見せずに応援してくれていた。

「俺……加奈に落ち込まれてると辛いんだよ……加奈には、笑ってほしい。……俺がずっと加奈のことを笑わせるから……悲しませたりしないから！ だから……俺と付き合ってくれないか……？」

いつの間にか、加奈の涙は止まっていた。

驚きと、何か、よく分からない感情で……

「な……何言ってるの！？　そんなの、無理に決まってるでしょ！　涼介と付き合ったら……あたしズルイ女になっちゃうよ？　涼介のこと利用して付き合うことになっちゃうんだよ？」

涼介のことは嫌いじゃない。でも、付き合えない。まだ旬への気持ち吹っ切れてない。

今、涼介と付き合うのは、加奈がその気持ちを紛らわすためのようになってしまう。そんなの、お互いを傷つけるだけで、間違ってる。

「別にいい。加奈になら利用されてやる。……それに、俺、頑張るから。絶対に、旬じゃなくて、俺でよかったって思われるようになるから！」

そうやって言われて、加奈は涼介と付き合い始めた。

あれから二年七ヶ月か……

加奈はトイレの鏡の前で化粧を直しながらぼんやりと昔のことを思い出していた。

涼介は、あの時言ったこと、もう覚えてないのかな。

でも、加奈にとっては、あの時の言葉は、忘れられないものになっている。

涼介は、もう旬の代わりという存在ではないから……

水の流れる音がして、個室のドアが開いた。

そこから出てきたのは、奈津美だった。

「加奈ちゃん……」

少し驚いているような、怯えているような、そんな反応をされる。

「どうも」

加奈はとりあえずそれだけ言った。

さっきので、警戒されているようだ。

沈黙の中、隣で無言で手を洗う奈津美を鏡越しに見た。

奈津美は手を洗うために前傾姿勢になっていた。そのせいで、胸が寄せられて、黒のタンクトップから谷間が見える。

おっきい……

加奈は、おもむろに自分の胸元を見下ろした。

すーん……

加奈の胸のラインは、奈津美のものに比べれば、その表現がぴったりなぐらいに小さい。

谷間なんて影も形もない。無理矢理寄せて上げたって、あるのか

ないのか微妙だ。

……そう言えば、匂って胸の大きな人が好きなんだよね。男の人って、皆そうなのかな……

もしかしたら、涼介だって本当はそうなのかもしれない。  
こんな見飽きた貧乳より、新鮮な巨乳の方が……

そう思うと、奈津美の巨乳が恨めしく思えてきた。

「……やらしい……」

加奈はわざと聞こえるように呟いた。

「え……?」

奈津美は加奈の方を向く。

「そんな胸の谷間チラチラ見せて、彼氏いるのに、男誘ってるんですか?」

奈津美の方は見ずに、加奈は言った。

奈津美の反応は見るまでもなく分かった。

この場の空気も凍ってしまう。

最っ低……

この場にいられなくなって、加奈は逃げるようにトイレから出ていった。

## **8 Wデート特別編・観覧車の告白（前書き）**

これでWデート特別編完結です。

## 8 Wデート特別編・観覧車の告白

「あれ？ 加奈が先？ ナツの方が先に行ったのに……」

涼介と旬が待っている場所に行くと、旬が首を傾げて言った。

「う……うん」

何となくばつが悪い。

その奈津美に対して、悪態をついてしまったばかりだ。

「ごめん。あたし、外に出てるね」

「え？」

加奈はそこからも逃げるように店から出て行った。

最低……

加奈は一人でため息をついた。

これじゃあ本当にひがんでるだけになってしまう。

自分にないものを兼ね備えている奈津美のことを……

そんなつもりじゃない……こんなこと、したって何の意味もないのに……

加奈はもう一度ため息をついた。

「加奈」

息を吐ききったところで声をかけられ、加奈は息が止まってしまいそうなぐらいに驚いた。

声の方を見ると、涼介がいた。

「どうした？　なんかあったのか？」

そう言われて、加奈はドキッとする。

昔から、涼介は鋭いところがある。でも、今、どうしてなのかは、分かっていないようだ。

「別に……」

加奈は小さな声で返した。

いっそのこと、全部伝わってしまえばいいのに……  
そうすれば、きっとこんなことで悩まないのに……

「何だよ？　何もないってことはないだろう？　……はしゃぎすぎて  
疲れたか？」

涼介は加奈の顔を覗きこむ。

「加奈は昔から色々溜め込むからな。しんどいなら言えよ」

そう言って、涼介は加奈の頭を撫でた。

それだけの言葉が、触れ合いが、泣きそうになってしまうぐらい  
嬉しかった。

「あ、今からゲーセン行くかって話になってたんだけど、どうする

「？」

「……うん。行く」

ゲームセンターへ行くと、自由行動といった感じで各々遊んでいる。……というか、匂が子供のように勝手に行動しているので、それに奈津美も付いて行って、結果こうなったと言える。

涼介は両替をしに行き、加奈はクレーンゲームを見て回った。

……あ。

加奈はその中の一つの前で止まった。

可愛い……

ガラスケースの中には、加奈が好きなキャラクターのぬいぐるみがあった。

欲しいなあ……でも、無理っぽいな。穴から遠いし、ちょっと埋まってるし……

そう思うと尚更欲しくて、加奈はガラスケースに釘付けになった。

「加奈？ 何かほしいのあるのか？」

涼介が加奈の隣にやってきた。

「あ、加奈が好きなヤツじゃん。あれ、ケータイにつけてたよな。」



待ち受けにもしてたか？」

「う……うん」

覚えてたんだ。と、加奈は感動してしまう。

「……でも、あれって脇役じゃねえの？　可愛いのか？」

「可愛いよ！　脇役なんかじゃないもん！　涼介には分かんないの！」

加奈はついムキになって言い返す。

「そんな怒るなって。取ってやるから」  
そう言って、涼介は百円玉を入れた。

「え……いいよ、別にっ……難しそうだもん！」

「大丈夫だって。俺、こういうのは得意なんだからな」  
余裕の表情で、涼介はボタンを押してクレーンを動かす。

加奈はその動きを食い入るようにして見守った。

狙いのぬいぐるみの上でクレーンが止まる。そのまま下がって……  
ぬいぐるみは全く持ち上げらずにクレーンだけが上がった。

「……」

やっぱり無理じゃん。

という意味を込めて加奈は涼介を見る。

「……まあ、久しぶりだからな！ 流石に一発じゃ無理だな」  
言い訳のように言って、涼介はまた百円玉を入れる。

「えっ……まだやるの？」

「当たり前だろ。そう簡単に諦めるかっての」  
涼介は真剣そのものの顔でクレーンを動かす。

「あ！ クソ！ お前邪魔すんなよ！」  
隣のぬいぐるみが邪魔をして取れずに、涼介はそのぬいぐるみに  
向かって怒っている。

「んにやろー。絶対取ってやる」  
また懲りずに涼介は百円玉を入れた。

見事にゲームセンターの戦略にはまっている。

意地になって小銭を費やしていく涼介の横顔は、子供のよう  
に無邪気で、楽しそうだった。

そんな涼介を見て、加奈は思わず笑みをこぼした。

そして、それが無駄遣いになってしまっていることも忘れて、  
涼介の応援をしていた。

もう使った金は千円を超えようとしている。いや、もう超えたの  
か……それすらも分からないくらいの数回目……

「おっ。いいとこいったんじゃないの？」

クレーンが上手い具合にぬいぐるみの隙間に埋まる。アームが閉じ、持ち上がっていく。

しっかりとぬいぐるみは掴まれていた。

「落ちんなよー」

穴へと向かうクレーンを二人で見守った。

その願いが通じたのか、ぬいぐるみは穴へと落ちた。

「おし！」

涼介はガッツポーズをして、取り出し口からぬいぐるみを取り出した。

「やった！　すごい！」

加奈も嬉しくて拍手をする。

「ほら。加奈」

涼介がぬいぐるみを加奈に差し渡す。

「え……いいの？　せっかく涼介が取ったのに……」

加奈はぬいぐるみを受け取りながらも聞いた。

「欲しかったんだろ？　つうか、そうじゃなかったら何のために俺は頑張ったんだよ」

「そっか……ありがと！」

加奈はぬいぐるみを大事に抱き締めた。  
それを見て、涼介は満足そうに笑った。

『何のために俺は頑張ったんだよ』

それは遠まわしに『加奈のために頑張った』ということだ。

嬉しい。嬉しすぎる。

このぬいぐるみは、絶対に大切にする。

それから、涼介と加奈は、今日始めての二人のデートらしくして楽しんだ。

それこそ、時間を忘れてしまいそうになるくらい、楽しかった。

「なあ、そろそろ出ないか？」

時間が随分経った頃、旬が言った。

「そうだな」

涼介が頷き、一同は外に出た。

「今からさ、観覧車いかね？」

外に出るなり、旬が提案する。

「え……？」

奈津美は何か驚いた様子だ。

「あれだけ乗ってなかったし」

言われてみて、加奈はそう言えば、と思った。

今日は、折角こういう場所に來たのに、涼介と楽しんだのはさっきのゲームセンターだけだ。

最後に一つだけでも、涼介と一緒に楽しみたい。

「うん。行こっか」

加奈はそれだけを思って頷いた。

「じゃ、別れて乗ろう。俺とナツで乗るから、そっち、涼介と加奈な」

「え!?!」

旬の言ったことに、涼介が大声を出した。

理由が分からず、加奈は驚いた。

「じゃーな。また後で」

旬は涼介の反応を気にすることなく、さっさと奈津美の手を引いて行ってしまった。

「しゅ……旬」

涼介が何か言いたそうに旬の背中に声をかけたが、もう旬は遠くに行ってしまった。

「何? どうしたの?」

加奈が不思議に思って涼介に尋ねた。

「えっ……いや、その……行くんならそこまで一緒に行けばいいの

になって思っ……」

涼介は明らかに何かを誤魔化す様子だった。

「……別にいいんじゃない？　いくら旬でも子供じゃないんだし。それよりあたし達も行こうよ」

「えっ!？」

「何？　どうしたの？」

「なっ……何でもない！　マジで何でもない！」

「……本当に？」

加奈は疑いの目で涼介を見る。

今日何度目かのこの挙動不審。何でもないと言われる方が怪しい。

「本当だって！　だからほら！　行くぞ！」

涼介は半ばムキになった様子で加奈の手を掴み、観覧車へと歩きだした。

この行動に、加奈は驚いた。

今日初めて、久しぶりに、涼介と手を繋いだ。

旬達がいなくなったからだろうか……それは分からなかったけれど、そんなことは関係ないぐらいに、加奈は嬉しかった。

しかし、その嬉しさは観覧車の中で半減してしまった。

観覧車で向かい合って座り、二人を包むのは沈黙だった。

涼介は、乗るなり前傾姿勢で両肘を両膝についた体勢でずっと下を向き、黙り込んでいる。加奈はずっとそんな涼介を見ていた。

「……ねえ、涼介」

痺れを切らし、加奈が話しかける。  
しかし、何の反応もない。

「涼介………涼介ってば」

反応はない。

何？ シカト？

いくらなんでもあんまりな態度に、加奈はイライラする。

「りょうす………」

加奈が再度声をかけようとした瞬間、僅かな風でゴンドラが揺れた。

「うわああー！！」

突然涼介が叫び体が動き、意味もなく窓枠にしがみついた。

加奈は驚いて、口をポカンと開けている。

「りょ………涼介？」

涼介の表情は、真っ青で額には冷や汗が浮かんでいる。

加奈と目が合うと、やっちまった、という表情が浮かんだ。

「……もしかして……涼介、怖いのか？ ……高所恐怖症？」

今更になって気付く。そうなら、色々と辻褄が合うことも。

「だから、奈津美さんに付いてるって言って、ジェットコースターに乗らなかったのか？」

思えば、最初に乗った『コメット・トラックス』の時、乗る前も乗った後も、涼介は一気に口数が少なくなった。

それも、涼介が高所恐怖症だったから。そうに違いない。

涼介は、暫く視線を泳がせた後、観念したように下を向いた。

「ああ……そうだよ……それに、今日、旬達も一緒に来たのは……俺が頼んだから……なんだ。旬に言われたとか、全部、嘘で……」

加奈は啞然とした。そんな理由でWデートになったんだなんて……

「何で……何で言ってくれなかったのか？ あたし、涼介が高所恐怖症って知ってたら、ここに行きたいって言わなかったよ！ 涼介が嫌だって言ってくれたら……やめたのに！」

「……んなの……言えるわけねえだろ」

大声を出す加奈と対照的に、涼介は小さな声で答える。

「何だよ！ どうせかっこ悪いとか思ってたんでしょ！？」



「ちが……！ いや、確かにそれもあるけど……」

否定しようと涼介が声を上げたが、すぐにまた小さな声になって下を向いた。

「……でも、加奈が来たいって言ったから……だから……連れてきたかったんだよ！」

最後は恥ずかしそうに、それを隠すように涼介は言い放った。そうしても、耳が真っ赤になっている。

「……バカ……！」

加奈は今日一番の大声で叫んで立ち上がった。

涼介が驚いて顔を上げた。加奈を見て、目を丸くする。

加奈が、泣いていた。眉間に皺を寄せて怒った表情をしながらも、目からはボロボロと涙を溢していた。

「あたしは……涼介に無理させてまで……Wデートしてまで来たかったわけじゃないもん！ 涼介と一緒にならどこでもよかった！ あたしは……涼介と二人がよかったんだもん！」

止まらない涙を拭いながら、加奈は涼介に自分の気持ちを言った。

まるで小さい子供のわがままだ。こんな風にしたら、涼介に嫌われてしまうかもしれない。

そうわかってても、止まらなかった。

「……マジで？」

涼介はポカンと口を開けて言った。

「何で嘘でこんなこと言わないといけないのよ！　当たり前でしょ！」

「……加奈は……旬のことが好きなんじゃないのか？」

「え……？」

驚きで加奈の涙がピタリと止まる。

「何で旬……」

「好きだっただろ？　昔……」

「なっ……何言ってるの！？」

加奈は目を丸くする。

「確かに……昔は好きだったけど……でも、二年半も前のことでしょ！　そんなに未練がましくないもん！　……もしかして、今日、旬と一緒にだったのって……それもあったから……？」

ふと気付いて、聞く。すると、涼介は、声に小さく頷いた。

「ああ……そうだよ」

「……バカア！！」

加奈は再び叫んだ。

「何でそんなことするの！？　あたしはもう旬のこと、友達としてしか好きじゃないもん！　もしまだふっ切れてなかったら……こんなに長い間涼介と付き合えないよ！」

止まっていた涙がまた溢れ出した。

「大体！ 涼介が言ったんでしょ？ 『旬じゃなくて、俺でよかったって思われるようにするから』 って……あたしにとっては、もうとっくにそうなってたよ！ 涼介は、旬の代わりなんかじゃないんだよ！」

加奈にとっての涼介は、誰かが代わりを努められるような存在じゃない。涼介は涼介しかない。誰よりも大事な人になっていた。

「うう……涼介のバカあ……」

加奈は下を向いて、ぽろぽろと涙を溢した。

「……ごめん」

その声と共に、加奈の体は何か温かいものに包まれた。

この感触は知っている。涼介の、腕の中だった。

涼介が、立ち上がって、加奈のことを抱き締めていたのだ。

高所恐怖症の涼介には、こんなところで立ち上がるなんて、怖いはずだ。それなのに、そんなことは忘れてしまったように、涼介は加奈をしっかりと包んでいた。

「ごめん……泣かせた。泣かせないって、約束したのに……」

加奈の頭の上で、そんな涼介の声がした。

涼介は覚えてた……あの時のこと……

加奈はそれだけで胸を締め付けられていた。

「でも……俺、何か寂しかったから……大学入ってから、加奈とあ

んまり会えなくなつて……だから、だんだん不安になつてきて……」  
涼介から、初めてそんな弱い言葉を聞いた。

「そんなの……あたしもだもんっ」

加奈は、涼介の背中に腕を回し、抱き締め返した。

涼介と加奈は、感じていたことがほとんど同じだった。

こんなことなら、もっと早く言っていればよかったと、加奈は思った。

「ねえ、涼介……大丈夫？」

涼介の腕の中から加奈は尋ねる。

「何が？」

「こんなところに立ってて……」

「え……」

その時、ゴンドラは頂上に達したぐらいだったようだ。  
強風でゴンドラが音をたててゆれた。

「うおわあああ!？」

奇声を上げ、涼介は加奈を放してその場にしゃがみこむ。

どうやら、高いところだということを思い出したらしい。

「りよ……涼介……」

「……見んなよ。かっこわりい」

しゃがみこんで立ち上がれないまま、涼介は呟いた。

加奈は、そんな涼介のことを見下ろし、口を開いた。

「本当だよ。かっこ悪い。あたしにそんなこと隠してるからだよ」  
わざと冷たい口調にした。

そうすると、涼介は更に下を向く。

「……でも、かっこ悪いけど……あたしはそういうところだって好きだよ」

加奈もしゃがみこみ、涼介の頭を抱えこむようにして抱き締めた。

「か……加奈？」

「下に着くまでこうしてるから。これなら、ちょっとはマシでしょ？」

ほんの少し大胆だけれど、これが加奈にできる精一杯だった。

「……あー……マジでかっこわる」

涼介はそう言いながら加奈の胸元に顔を埋め、腕を背中に回した。

顔を埋めた、と言っても、加奈の胸は浅すぎて、胸板に顔を押し当ててるという方が近い状態だ。

「ごめんね。奈津美さんみたいに胸おつきくなくて」  
何かを思われる前に加奈は言った。

すると、涼介はきょとんとして顔だけで加奈を見上げた。

「……何でいきなり奈津美さんが出てくるんだよ？」

意味が分からない、という顔だった。

……何だ。勘違いだったんだ……

涼介からは、奈津美のことを意識していたなんて、微塵も感じられなかった。

勝手に思い違いをしていたことが恥ずかしい。

「……何でもないよ」

加奈は、そう言って、涼介を抱き締める腕に力を込めた。

地上に降りるまで、ずっとそうしていた。

「旬達……どのへんにいるんだろうね」

観覧車を降りたあと、加奈と涼介は歩きながら旬と奈津美を探す。

「……まさか先に帰ったとかはないだろうな」

「それは多分ないでしょ。もしそうなら連絡するだろうし」

「確かにそうか」

「うん」

話しながら、加奈の神経は左手に集中していた。

涼介の左手と繋がった右手……

観覧車から降りる時に、涼介が怖がらないように（というと涼介は怒るだろうけど）加奈から繋いだ手が、降りてからも、離れなかった。

「……旬と奈津美さんに謝らないと……あと、お礼も」

「ああ……」

加奈は、特に奈津美には、謝らないといけない。

ただ涼介とのことに巻き込んだだけなのに、嫌な態度を取ってしまったことを……

「あ」

旬と奈津美を見つけた。

加奈は二人に向かって手を振った。

「よし、涼介。楽しかったか？」

涼介の顔を見るなり、旬が笑顔で言った。

「旬……」

そんな旬に対し、涼介が恨みがましく旬を見る。

「いいじゃん。結果オーライだろ？」

旬はまるで全てを見透かしているように言った。

涼介と加奈が同時にお互いを見た。観覧車の中でのことを思い出すと、顔が赤くなる。

「まあ……」

涼介は小さく答えた。

「……涼介。自分が悪いんでしょう？ 本当のこと、言ってくれなかったんだから」

少しからかうつもりで、加奈は涼介に言った。

「……悪かったな」

涼介はぶっきらぼうに返した。

今までに見たことのない涼介を見て加奈は笑った。そして、改めて旬と奈津美の方を向く。

「旬。ごめんね。気、遣わせちゃって」

まずは旬に謝った。

「全然。俺、気にしてねえから」

旬は笑顔で首を横に振る。

「……あと、奈津美さんも……ごめんなさい」

次は奈津美に頭を下げた。

勝手に勘違いをして、嫌な態度を取って、失礼なことを言ってしまったことを、心の底から謝った。



でも、これこそ本当に勝手だよね……

「ううん。あたしも、全然気にしてないから……大丈夫だよ」  
奈津美の返事で加奈は頭を上げる。

奈津美は、加奈に向かって、優しく笑いかけていた。

女である加奈でさえ、思わず見とれてしまいそうぐらい、綺麗だった。

匂がどうして奈津美にベタ惚れなのか、なんとなく分かった気がした。

「じゃあ、俺らは帰るから……」

涼介がそう言い出した。

「おう」

「奈津美さん、今日はありがとうございました」

「ありがとうございます」

涼介に続き、加奈も奈津美に頭を下げる。

「えっ……そんな、あたしは全然大したことしてないし……」

「おいー。俺にはないのかよ」

謙虚な奈津美に対して、匂は口を尖らせて主張する。

「ああ、忘れてた。サンキュ、匂」

「ありがとね」

「おう！ まあ、大したことはしてないけどな」

「何よそれ」

奈津美の呆れた声のツツコミに、四人で笑った。

「それじゃあな。旬、奈津美さん」

「また今度、時間があったら遊びに行こうね」

「おう！」

「うん」

そうして、旬と奈津美に手を振って別れた。

「楽しかったね？」

出口に向かいながら、加奈は涼介に言った。

「ああ……いや、俺はそれは微妙だけど……」

頷いて、すぐに涼介は首を傾げた。微妙というのは、ここが涼介にとって苦手な場所だからだろう。

しかし、すぐに真っ直ぐ前を向いた。

「でも……来てよかったと思う。ホントに」

「うん……」

加奈は頷いた。

確かに、楽しかったというよりは、来てよかったというほうが大きい。

今日来なければ、涼介と加奈の距離が、こんなに近づくことなんてなかっただろう。

「また来ようね」

加奈は笑顔で言った。

「えっ……ちょ……それは勘弁してくれ」

涼介はかなり狼狽えた様子だった。

予想通りの反応に、加奈は笑った。

「えー。来ようよー。そのうち怖くなんてなくなるよ？」

「無理だって……て、俺も乗ることになってんのか!？」

「当たり前でしょ！ 涼介と一緒にいいんだもん！」

加奈が言うと、涼介は目を丸くした。そして、次にため息をついた。

「お前……んなこと言うなよ」

「何？」

「乗らないといけなくなんだろ……」

今度は加奈が目を丸くした。

「涼介……ありがとう!」

加奈は涼介の腕に抱きついた。

「か……加奈?」

今まで見たことのない加奈の大胆さに涼介は驚きを隠せない。

「えへへ」

笑顔の加奈を見て、涼介も照れ臭そうに笑った。

今日は、二人にとって忘れられない一日になった。

そして、二人の次のデートがまた遊園地だったことは、言うまでもない。

## 9 『結婚』

結婚とは、人生の一大イベントであり、特に女性にとっては、それが人生を左右することにもなる。

「おめでとう！ 恵里！」

「ありがとうー！」

今日は、会社で奈津美やカオルと同期である恵里の結婚式だ。

奈津美とカオルは、式が始まる一足前に花嫁の控え室に行き、祝福の言葉をかける。

「恵里、すごい綺麗！ ドレスすごい似合ってるよ！」

純白のウエディングドレスに身を包んだ恵里を見て、カオルが興奮気味に言った。

「ありがとう！ なんか、これ着たらいいよなんだなーって……  
感極まってきちゃってー」

恵里は涙ぐんでいる。

「ちょっと、早いよ。まだ式も始まってないのに」  
奈津美は笑いながら恵里に言う。

「そうだけどー……」

「ほら、化粧落ちるでしょ？ それに旦那さんも待ってるんだから、笑わないと」

「うん……」

まだうつすら涙を浮かべながら、恵里は微笑んだ。  
幸せいっぱいだということがその笑顔だけで分かった。

そうして、幸せムードの中、ほんの少し感動ありの結婚式、披露宴は終わり、帰りのタクシーの中。

「恵里、本っ当に綺麗だったよねえー」

「うん。幸せそうだったし」

途中まで道が一緒の奈津美とカオルは、さっきの式のことを振り返る。

「いいよねー。結婚って」

「うん」

「そういえばさあ、あたしの高校の時の友達なんだけど、去年結婚してね。できちゃった婚だったんだけど、この間子供産まれたって」  
カオルが思い出したように言う。

「へえー……あ、でもあたしの友達にもいるよ。できちゃった婚ではないけど……そのコは二十歳で結婚して、それで、今二人目を妊

娠中なんだって」

「やっぱり多いわよねえ、ていうか、年々増えていってるっていうか」

「あたし達もそういう年になってるのね」

今日結婚した恵里も奈津美やカオルと同一年だし、それ以外にも昔の友人は結婚し、もう子供がいて、家庭を持っている同級生は増えていく。

結婚なんてまだまだ遠い話だと思っていたが、そう考えると、他人事でもないような気がする。

結婚かあ……

ぼんやりと考えながら窓の外を見ると、もう奈津美の自宅コーポの近くだった。

「あ、運転手さん。そのコーポの前で止めて下さい」

「はい」

運転手が言われた通りにコーポの前で止まる。

カオルはまだ家が遠いので、そのまま乗って帰るので、奈津美はここまでの料金を精算し、タクシーを降りた。

「じゃあね、カオル。また月曜日」

「うん。おやすみー」

そう言って別れ、タクシーがすぐその角を曲がるまで見送ると、奈津美はコーポの中に入った。

結婚かあ……

階段を上りながら、奈津美は改めて考える。

今が適齢期っちゃあ適齢期？　ちょっと早いぐらいか。

適齢期といったら、二十代後半から三十代前半のことをいうのだろうか。

今年二十四の奈津美で考えてみたらまだ早い。

それでも、世間では女性は晩婚化しているいうのに、周りは早婚が多い気がする。

そうになると、奈津美も女としてプレッシャーのようなものがないこともない。

でも、あまり考えたことなんてなかった。というか、あまりピンとこない。

例えば、今付き合っている、旬との結婚とか……

「あ、ナツ！」

三階に上がると、聞きなれた声がした。

「え……旬？」

奈津美は目を丸くする。



「もう来てたの？　まだ八時半なのに……」

今日は、旬が泊まりに来る予定だった。

帰りが何時になるかは漠然としていたので、多分九時頃には帰ってると言っていたのに、旬はこんな時も早い時間に来ていた。

「うん！　でも来たのは十分前ぐらいだよ。全然待ってないし。ナツも早かったな」

「うん。思ったよりね」

「よかった、早く来てて。ナツに早く会えたし」

旬は笑顔で言った。

「もう……旬ったら」

旬の表情に、奈津美の表情も緩んだ。

「旬の合鍵、作っというた方がいいかもね」

奈津美はそう言いながら、バックから鍵を出し、部屋のドアの鍵穴に入れる。

奈津美は、旬の部屋の合鍵を持っている。旬が一人暮らしを始めた時に旬の部屋の合鍵を渡されたのだ。

しかし、旬は奈津美の部屋の鍵は持ってない。奈津美の部屋の鍵の予備は、実家の両親に預けているのだ。

「え？　本当？」

旬は嬉しそうだ。

「だって、匂、多いんだもん。こういうこと。近所の人にとって迷惑かもしれないし」

ドアを開けて中に入りながら奈津美は言った。

「それは大丈夫だよ。顔見知りになってるから。最近は挨拶もしてるし」

匂も奈津美のあとに続いて入り、そう返す。

「え……何それ。初めて聞いたわよ」

靴を脱ごうとしたまま、奈津美は目を丸くして匂を見た。

「だって初めて言ったし」

「……じゃあ合鍵は別にいらないわよね。大丈夫そうだし」

奈津美は靴を脱ぎ、部屋の中に入る。

「え！ いる！ 絶対いる！」

匂は慌てて奈津美を追いかけるように靴を脱いで部屋に入る。

「ナーツー」

匂が甘えた声を出して、奈津美を後ろから抱き締める。

「もう……分かったから。じゃあ、作っとくからね」

「やった！ ありがと、ナツ」

そう言って、匂は軽く音を立てて奈津美の頬に口付けた。

慣れたといえ慣れたけれど、未だにその感覚には胸をくすぐられる。

「旬、ごはんは？」

「食ってきたよ。ナツも食ってきてるだろうと思って」

「そう」

奈津美はリビングに入り、引き出物の入った紙袋をローテーブルの横に置いた。

「でもいいなあ。結婚式って。美味しいもん食えるし」  
旬はベッドに座りながら言う。

「別にそのために行ったんじゃないってば。確かに料理は美味しかったけど」

奈津美は笑いながらアクセサリを外していく。

「いいなあ……あ、ナツ。これ何？」

旬が紙袋に気付いてベッドから下りる。

鋭い。鼻でもきいたのかと奈津美は思う。

「引き出物よ。確かお菓子だったかな」

「え？ お菓子？」

旬の顔がぱあっと明るくなる。予想通りだ。

「開けてもいいよ」

「うん！」

旬はまるで子供のように、嬉しそうな顔をして袋から箱を出し、

その包装紙を外していく。

「おおー！ 美味しそー！」

箱を開けて、匂は目を輝かせる。

引き出物の中身は、クッキーとマドレーヌのセットだった。

「本当だ。美味しそう」

奈津美も座って箱を覗き込む。

「ナツ……」

匂は、じっと奈津美を見つめる。

「…いいよ、食べても」

「やった！ いただきまーす」

匂はマドレーヌの方に手を伸ばした。

まるで待てをさせられていた犬のようだ。奈津美は匂を見ながら笑った。

そして、奈津美はクッキーの方に手を伸ばす。

「…ヒデキ……エリ……」

匂が袋から出したマドレーヌを見て呟いた。

「ナツ、今日結婚した人って、ヒデキさんとエリさん？」  
確認するように匂が言った。

「うん。そう……何で分かったの？」

「ほら。ここに書いてる」

旬がマドレーヌの表面を奈津美に見せる。

そこには、ローマ字で新郎新婦の名前と、今日の日付が焼印されていた。

「ホントだ。……あ、こっちも」

奈津美もクッキーを一枚取り出して旬に見せる。

こっちには、ハート型に二人の名前がかいてある。

「へー。今ってこういうのがあるんだなー」

「なんかいいね。こういうの」

奈津美は感心しながら口元にクッキーをもっていく。

「そうだなー。俺らの時もこういうのにしよっか」

旬はさらりと言い、そのままマドレーヌを頬張る。

「え……」

奈津美は、クッキー口に入れようとしたところで固まった。

「あ、美味い。これ」

旬は、そうやって何事もなかったかのようにマドレーヌに対しての感想を言う。

「旬？ 今何て言ったの？」

奈津美は聞き間違いだったのかと確認する。

「え？ これ美味いって。あ、ナツも食う？」

きよとんとした顔で言い、食べかけのマドレーヌを奈津美に差し出す。

「そうじゃなくて。その前」

「……ああ、俺らの結婚式でも引き出物、こういうのがいいかなーって思ってた。ナツは嫌？」

「嫌って……そういうんじゃない……何でいきなり……」

「あ、そっか。その前にどこで式挙げるかだよな。そう言えば前にテレビで見たんだけどさ、最近沖縄で式挙げる人が多いんだって。招待客にも観光がてら楽しんでもらうって感じで。そういうのもいいよなー」

まるで雑談でもしているかのように、いつものように旬は楽しそうに話す。

そういう意味じゃなくて。

言いたいことが、心の中だけであふれ出す。

何でいきなりそんな話なの？

当たり前のように言ってるけど、何、もう旬と結婚することは決定なの？

あたし、プロポーズすらされた覚えはないんだけど……

「――でさ、ナツはどういうのがいい？」

「え……」

いきなり話を振られ、奈津美は我に返った。

「やっぱナツはドレスの方が似合うだろうけどー、白無垢とか十二単も見てみたいし」

奈津美は哑然としてしまう。

いつの間にそこまで話が発展してるのか……

「そ……そんなことよりっ」

奈津美は思い出したようにクッキーを口へ放り込み、立ち上がった。

「旬、お風呂は入ってきた？」

それ以上発展する前に奈津美は無理矢理話を変えた。

「ううん。それはまだ」

旬は首を横に振って答える。

「そう。今日はシャワーだけでいい？　今からお湯張ってたら遅くなっちゃうし」

「うん」

「じゃあ今日はあたしが先に入っていい？」

「……んー。一緒に入る」

旬は満面の笑みで返してくる。

「えっ」

奈津美は目を丸くする。

「たまには一緒に入ろ？」

甘えた目で旬は奈津美を見上げた。

「い……嫌！ 恥ずかしいもん」

「えー？ 今更じゃん。恥ずかしがることないじゃん」

「恥ずかしいのは恥ずかしいの！ だから嫌！」

奈津美はそう言いながらパジャマと下着を引き出しから出す。

「ちえー。いいけどさ。後でいっぱい見て触れるから」

旬はニツと笑った。

「……旬のエッチ」

奈津美は顔を赤くしてそう言ってから脱衣所に向かった。

旬の目の届かないところにきて、奈津美はため息をついた。

なんとか、結婚の話をもてなした。

でも……それはそれで微妙な心境だった。

奈津美の話題変更に、旬はあっさりと結婚の話をやめた。

あのまま食らいつかれていてもそれはそれで困るけれど……

奈津美はもう一つ大きなため息をついた。

「ん……」



いつも通りの旬の口付け、旬の愛撫、旬の動き……

それに神経を集中させると、頭の中は真っ白になって、何も考えずに、ただ幸せを感じることができた。

「あー……一週間ぶりだー」

奈津美の中で果てた旬が、そのまま奈津美の上に体重を預ける。

「旬。重い……」

そう言いながらも、その重みは嫌いじゃない。そっと旬の汗ばんだ背中に手を回す。

「へへっ」

旬は笑いながら奈津美のすぐ横に転がる。

「今日のナツも超よかったよ。ナツの中、めっちゃ気持ちいい」  
そう言って、奈津美を抱き締めて頬にキスをする。

「そんなの言わないでよ……」

褒められているけれど、本音は嬉しいけれど、内容が内容だけに、恥ずかしい。奈津美は顔を赤くして、布団の中にもぐり込んだ。

「かーわいい。照れてるー」

旬も奈津美を追いかけるように布団の中に頭を入れる。

布団の中でもぞもぞと動いて、旬は奈津美の胸に顔を埋めた。

「あ……」

旬の指が奈津美の下半身を撫で、思わす声が出てしまった。

「ナツ……」

ごろりと寝返りをうって、旬が奈津美の上にくる。

「旬……またするの？」

奈津美は布団から顔を出して布団の中に話しかける。

「うん」

旬の上機嫌な声な返事を聞いて、今どんな表情をしてるかが大体想像できた。

「一週間もしてなかったからもうナツ切れだし。いっぱい充電しとかないと」

「んっ……」

旬の指が粘膜に埋まって、ビクリと体がはねる。

「ナツも俺切れ？　ここ、すっげー動いてる」  
布団の中から旬が顔を出し、笑いながら言う。

「エッチ……」

奈津美は旬から視線をそらした。

「へへっ」

旬はいたずらっこのように笑って、その口で奈津美の胸に口付けた。

甘い感覚に、意識がとんでいきそうになる……。

「結婚したら毎日エッチしような」

奈津美の胸元で旬が言った。

奈津美は、その言葉で現実に戻された。

また結婚って……何でそう軽々しく言えるの？

ひとしきり奈津美のことを堪能すると、旬はこてんと眠ってしまった。

奈津美は、その旬の寝顔を見る。

旬は、満足そうに、気持ちよさそうに眠っている。それを見ているだけで、奈津美も自然と笑みを溢す。

しかし、胸の中を掠めたことが、奈津美の表情を変える。

それは、結婚のこと。

思えば、旬は今までも結婚という言葉を口に使っていた気がする。

例えば、奈津美の料理を食べて美味しいと言いながら、

「結婚したら毎日ナツの作ったもん食えるんだなー。すっげー楽しみ！」

と、笑顔で言い、なかなか会えない日が続いたりすると、

「結婚したらこういうこともないのになー」  
と、電話の向こうで嘆く。

奈津美は、それに対して、恥ずかしいような感覚で、適当に聞き流すか誤魔化すかしてきた。

これもまた、付き合ったらするお約束の話だと、深く考えてなかったのだ。

しかし、今日はやたらと反応してしまった。結婚式に行って、意識し始めたからだ。

今思うと、大事なことを考えてなかったような気がする。

『結婚したら』

そう仮定形で旬は言うけれど、旬の頭の中ではすでに奈津美と結婚することが決まっているようだ。そして、それは着々と発展している。

「んー……」

旬が小さく唸り、手探りで奈津美の背中に手を回し、抱き寄せた。寝ている間の無意識な行動らしく、すぐにまた一定のリズムの寝息が聞こえる。

奈津美はそんな旬の胸に額をつけ、目を閉じる。

自分のことを何よりも大事にしてくれる旬のことを、奈津美は、きっと旬が思っている以上に好きで、こうして抱き締めってくれる旬の腕の中は、どんな場所より心地いい。

できればずっと旬といたい。ずっとこうしていたい。

でも、結婚は、それだけじゃできないんだよ……

それが現実だと、奈津美には分かっていた。

## 10 見えない先

翌月曜の昼。いつものように社員食堂で奈津美とカオルは昼食をとっていた。

「ねえ、カオル。カオルは塚田さんと結婚の話したりする？」  
向かいでうどんをすすめるカオルに、奈津美は聞いた。

ちなみに、塚田というのは、カオルの彼氏だ。

「何、いきなり」

カオルは目を丸くしている。

「んー……別に、どうなのかなって思ってた」

奈津美はうまい言い訳が思い浮かばず、そう言いながら自分の天ぷらそばのかき揚げを一口食べる。

「ていうかさ、カオルは塚田さんと結婚するつもりでいる？」

奈津美は質問を変えてみる。

「うん」

カオルは、即答ではっきりと頷いた。予想外の早さに、奈津美はあぜんとする。

「え……それって、いつ？」

「別にいつっていうのは決まっていなわよ。まあ、丁度いい頃合に向こうから言ってきたらしようかなって」

さらりとカオルは言う。

「何？ 奈津美。恵里の結婚で焦ってるの？」

「えっ」

ズバリと言われ、奈津美は言葉に詰まってしまふ。

「奈津美は彼氏君とそういう話しないの？」

今度は奈津美が聞いたことを聞き返された。

「しないっていうか……むしろその逆っていうか……」

奈津美は小さな声で答える。

「してるの？ それならいいじゃない」

「そうじゃなくて……そういうんじゃない……結婚のことって言っても旬との場合……リアリティーがないっていうか」

「リアリティー？ どういうの？」

「結婚したらこうしようとか……どうしたいとか……そういうのを具体的に言ったするの」

「いいじゃない。それぐらい」

「ことあるごとに言うのよ？ 結婚したら結婚したらって」

あっさりとしたカオルの反応に、奈津美は強調するように言い足す。

「それだけ本気で奈津美のことを好きだってことでしょ。それに普通じゃない？ 結婚に対してのそういう願望って、意外と男の方が

あるもんよ？」

やっぱりカオルはあっさりとした態度で言い返す。

「……じゃあ、カオルも塚田さんとするの？ 結婚式は神前式か教会式とか、引き出物は何にしようとかか」

奈津美は実際に匂が言っていたことを例にして聞いた。

「そういうのはないけど……ていうか、あたしらがそんな話したって現実的すぎて楽しく話せないでしょ」

「ほら。やっぱり」

「あ、でも結婚したら一戸建てに住みたいって言ったことはあったけど。それであたしが冗談半分で、それなら○○（高級住宅街）がいいって言ったら、頑張るよって笑いながら言ってたな」

カオルの半分惚気が入った話に、奈津美は黙ってしまふ。

「……カオルだって……それならいいじゃない。塚田さんならそれぐらい本気で買えそうだし。……匂は、そうじゃないもん」

奈津美は独り言のように呟いて下を向いた。

「奈津美？ どうしたの？」

いつもと様子の違う奈津美に、カオルは真剣な顔になって尋ねた。

奈津美は下を向いたまま、口を開いた。

「……今まで、まともに考えたことなんてなかったけど……このままだったらダメなんだなーって思っ。あたしと匂……」



「つていうと？」

「旬は……フリーターでちゃんと安定した仕事してないから……今はよくても、ずっとこのままでもいいわけじゃないじゃない」

「ああ……そういうこと」

奈津美は黙って頷いた。

「彼氏君で、浪人とかじゃなくて働くって言ってるんだっけ。就職活動っていうか、そういうのはしてないの？」

「ううん。何も言わないし、あんまりそういう素振りはないから、多分してないと思う」

旬の様子を見ると、就職に対してのことは何もしてないようだった。

就職の情報誌などを見るでもないし、部屋からもそういったものは見つからない。それどころか毎日バイトに勤しんでいて、それで楽しそうなのだ。

「もしかしたら、今のバイト生活で満足してるんじゃないかって感じもするのよね。ちゃんとした職に就いてなくても、なんとか生活はできてるわけだし。……でも、それで生活はできても何の保障はないわけじゃない」

「うん。確かに」

「そんなので……結婚なんて言われても……どうしようもないって  
いうか……」

もしも、奈津美が旬と同じ年だったなら、旬が話す結婚に対しての願望にも、笑いながら、自分の願望も話すことができただろう。でも、実際はそうじゃない。奈津美は旬よりも四つも年上で、旬よりも現実が見えている。

現実とは、口で言えるほど簡単なものじゃない。夢のようになんていかない。それは分かっている。

「なるほどねえ……」

カオルは、奈津美が言っていることを理解したようで、二、三度頷いた。

「でも、そう言うってことは、奈津美は彼氏君と結婚したいってことなんじゃないの？」

カオルに聞かれ、奈津美は黙ってしまった。

どうなんだろうか。自分でもよく分からない。

結婚自体をしたいのかと言われれば、いずれしたいと思っている。平凡でいいから家庭を持って、子供も産んで、幸せになりたい。

しかし、それは旬となれるのだろうか……

少なくとも、今のままなら、今のままが続くのなら、それは無理だ。それだけは分かる。

それでも、奈津美はやっぱり旬のことが好きで、旬と別れること

も、旬以外の誰かと一緒になるということも、考えられない。まして、旬がいなくて幸せになるなんて、できない。

つまり、奈津美は旬と結婚したいと思っているということなのだろう。でも、先が見通せない現状に、そう願うことさえためらってしまう。

数年後……五年後、十年後には、一体どうなっているのだろうか。旬とはどんな形でいるのだろうか。それが全く予想もできないことに、不安を覚えてしまう。

「……まあ、今はまだそんなに真剣に考えることはないんじゃない？ 彼氏君、まだ未成年なんでしょ？ まだまだどうなるかなんて分からないわよ」

カオルが奈津美を励ますように明るく言った。

「うん」

奈津美はとりあえず口の端をあげて、笑顔を作った。

「お疲れさまでしたー」

奈津美は、定時で仕事を終え、心持ち急いで更衣室を出た。

エレベーターを待ちながら時間を確認する。五時十九分……これなら閉店までに間に合うだろう。

今日、奈津美は部屋の合鍵を作りに行く予定だ。勿論、匂のための合鍵だ。

エレベーターの扉が開く。乗っていたのは数人で、奈津美はその中に入り込んだ。

エレベーターの中でも、奈津美は思考にふける。

こうやって部屋の合鍵を渡してもいいと思うのは、匂のことをそれだけ信用して、プライベートな空間を共有してもいいと思ってるからだ。

いや、すでに共有してると言ってもいいかもしれない。週で一回はどちらかの家で過ごしていて、お互いの家の勝手はよく知り尽くしているわけだ。

それぐらいはその辺のカップルにとっては普通かもしれないが、奈津美は、それはそう簡単なことじゃないように感じている。今まで付き合っていた男とは、ここまでの関係になれなかった。

奈津美にとって、匂が初めてだ。こんなに大事にされているのも、大事にしたいと思うのも、ずっと一緒にいたいと思うのも……

エレベーターが一階に着き、扉が開く。他の降りる社員の流れに乗って、奈津美も降りた。そしてロビーを通過してエントランスに向かう。

ずっと一緒にいたいってなると……やっぱり結婚？

思考はやはりそこに戻ってしまう。

でも、結婚となると、違う気がする。いまいちピンとこない。

というか、旬はいつかちゃんとした職に就く気はあるのだろうか。

いや、この考え方はやめよう。カオルが言っていたように、まだ旬は十九なわけだし、仕事がどうのこうのというのは、昨日今日でなんとかするような話ではない。

あたしと同年として考えるからダメなのよね。意思さえあれば旬には可能性がないわけじゃないんだし。

奈津美はエントランスから外に出る。鍵屋に行くために、いつもと反対方向に歩き出す。

奈津美は小さくため息をつく。

それでも、いつまでこのままなのだろう。

旬とは、このままで付き合う方がいい形なのかもしれない。でも、このままでいられるわけではない。

何度も何度も、同じことを考えていて、埒があかない。

でも、答えを出さないと不安になってしまう。見えない先を見ることができないと、安心できない。

どうしたらいいの……？　ねえ、旬……

その時、フツと視界が暗くなって、何も見えなくなった。

「え!？」

突然のことに、奈津美はパニックになる。

ちよつと……将来だけでなく一歩先も見えなくなってる!？

「だーれだ！」

後ろからそんな声が聞こえる。

奈津美は一瞬で冷静になった。そうすると、目を生温かいもので覆われていることが分かった。

「……何やってんの、旬」

「当たり前！」

その声と共に視界が明るくなり、予想通りの姿が奈津美の目の前に現れた。

「流石ナツ！ 声だけで分かるんだな！」

満面の笑みで、突然現れた旬が言った。

「声でっていうか……あたしが知ってる限りでいきなりこんなことするのは旬ぐらいしかないの」

奈津美は呆れながら旬に言い返す。

「それってナツが俺のことよく分かってるってことじゃーん」  
旬は嬉しそうに笑っている。

それを見て、奈津美はさらに呆れながらため息をついた。

「それで、何で旬がここにいるの？」

「バイトの帰り！ ……ていうか、四時半ぐらいに終わったからさ、丁度ナツと一緒にになれるかなーって思ってたんだ。そしたら、ナツ、俺に気付かないでいつもと反対に行っちゃうから焦ったー」

「え……それならメールとかしてよ！」

「だって驚かせたかったからさ？」  
そう言って、旬はおどけた表情を見せた。

「もし残業とかだったらどうしてたのよ」

「それはそんな時にメールしようと思って」

「……もう」

本当に、旬は奈津美を呆れさせることばかりする。きっと今日だって、平気で何時間も待ち続けていただろう。

「それより、ナツはこれからどっか行くつもりだったの？」

「あ、うん。鍵屋に行こうと思って……合鍵つくり」

「え……それって俺の？」

「うん」

旬の顔がぱあっと明るくなった。

「俺も行く！ 早く行こ！」

急に張り切りだして、旬は奈津美の手を引いて歩き出した。

奈津美は嬉しそうな旬の横顔を見上げた。タイミングよく現れた旬を見て、思考はさっきまでのものに戻る。

……旬は、どう思っているのだろう。口では結婚のことを言ったりするが、どれぐらい本気で、どれぐらい現実的に考えているのだろうか。

奈津美には見えない先のことが、旬には見えているというのだろうか。

「…ねえ、旬」

「何？」

旬が笑顔で奈津美の方を向いた。

「旬は……十年後の自分はどうなってると思う？」

「ん？ 何それ」

奈津美の問いかけに、旬は首を傾げている。

やはり、唐突過ぎた質問だ。いくら旬でも、おかしいと思うに決まってる。

「えっと……その、心理テスト！ 今日、友達に聞いたの」  
奈津美は苦し紛れにそう言った。



「ふーん？」

「それで、旬はどうなってると思う？」

「んー……そうだなあ」

少し考える素振りを見せてから旬は口を開いた。

「十年も経ってるんだったら、とりあえず結婚しててー、子供もいるんだろうなあ。俺とナツの子供だったら絶対可愛いよな。男でも女でも」

旬は想像の中なのに、とても嬉しそうに話す。

そして、やっぱりその話も言わずもがな奈津美と結婚することは大前提で、今度は子供ができることも決まっているようだ。

質問することを間違えたかなと奈津美は思った。

奈津美が聞きたかったのは、そういうことじゃなかった。仕事はどうしているのかとか、旬自身のことを聞きたかったのだ。

もしかして、旬は本当に仕事のこととか、何も考えてないのかな……

そう不安にもなってしまう。

奈津美の思っていることをよそに、旬は更に話を続ける。

「でもさ、何にしても、ナツと一緒に居て、幸せになってることは確かかな」

その言葉に、奈津美は今一度旬の方を向いた。すると、旬も奈津美の方を見て、にっこりと微笑んだ。

旬のその顔を見て、分かったことがある。

旬が見つめる先には、奈津美と一緒に未来がある。

結婚がどうか、口にしてはいるけれど、それは形だけのことであつて、旬には関係ないことのように思える。

奈津美さえ居れば十分だ。旬の顔がそう言っていた。

「それで？」

「え？」

旬の声に奈津美は我に返った。

「テストの答えは？」

「え……あ……」

ここで奈津美はまた言葉に詰まってしまう。

「わ……忘れちゃった」

ぎこちなく笑って奈津美は誤魔化す。

「えー？ 何だよー。すっげー気になるし」

「ごめんね？ ちょっと、ど忘れして……」

「ふーん？ 別にいいけどさあー」

旬の答えで分かったことは、旬と結婚するとなると、それは大分先のことになってしまうだろうということ。

旬の中のプランは、まだ夢の中のものだ。

何か、あたしだけが現実的に悩むのはバカバカしいかも。

そう思い、奈津美は小さくため息をついた。

## 11 彼氏と友達

「奈津美、今日は急がなくてもいいの?」

金曜日の仕事終わり。更衣室で着替える奈津美に、同じく着替えるカオルに言われた。

「え? 何で?」

「だっていつもいそいそと着替えて出てくじゃない。彼氏君のために」

「な……別にそんなことないから!」

奈津美は顔を赤くして言い返した。

「そーお?」

カオルはニツと笑っている。

「そうよ! 大体、カオルだっていつも急いでるでしょ! 今日  
は急がなくてもいいの?」

「今日は急に無理になったのよねー。彼、仕事入ったからって」

「そうなの?」

「うん。で? 奈津美の方は?」

「……今日はバイトが入ってるから」

「なんだ。あたし達ってば、週末に寂しい女同士？」  
そう言ってカオルは笑った。

「別にあたしは寂しくないもん！」  
ムキになって奈津美は言い返す。

「まあ、そういうことにしてもいいけど？ ……じゃあ、今日は久々にご飯食べて飲みに行く？」

「あ、いいね。何食べに行く？」  
カオルの提案には奈津美も賛成だった。

「久々に焼肉とかよくない？」

「うん！ じゃあそうしょ！」

そうして、二人は着替えを終えると、一緒に更衣室を出た。

「そう言えば奈津美」

エレベーターを待っている間、カオルが思い出したように口を開いた。

「彼氏君とはどうなの？ 先行き不安みたいなこと言ってたけど」

「……んー」

カオルの問いに、奈津美は首を傾げる。

「どうだろ……まあ、相変わらずっていったらそうだけど……」

エレベーターが到着し、奈津美とカオルは乗り込んだ。丁度、その中は二人だけだった。

「でも、何となくだけど、匂ってあんまり本気で結婚のこと考えてないんじゃないかなーって思うの。結婚結婚って言うけど、それは付き合ってる時の常套句っていうか」

「あー……なるほどねー」

「だから、あたしだけ現実的に考えたってしょうがないし……それに、やっぱり匂はまだ十九なんだし。今は何とも言えないかなーって。なるようにしかならないしね」

「確かにそうかもねー」

カオルは深く頷いた。

「それに、あんまり結婚だの将来だの考えてたら気が滅入るだけだしね。今からそんなこと考えなくても問題はないわけだし」

「何？ 珍しくポジティブじゃない」

エレベーターが一階に着き、ドアが開く。

「どういう意味？」

先に降りるカオルの背中に奈津美は言った。

「奈津美って、いつつも否定的っていうか、ネガティブ思考だから」

「そ……そんなことないから！ ……あ」

言い返すと同時に、鞆の中の携帯電話が振動しているのに気付き、奈津美は携帯を取り出す。

携帯を開いて見てみると、メールが来ていた。操作をし、受信メールの画面にする。

旬からだ。

送信者の名前は、旬だった。今からバイトのはずなのに、何かと思い、メールを開いた。

『バイトなくなった！』

今日はナツんち行けるよ！

今、ナツの会社の前にいるから一緒に帰ろ♪」

「……え！？」

メールを読んで、奈津美は思わず声をあげた。

「何？ どうしたの？」

カオルが不思議そうにきいてくる。

「旬が来てるって……」

二人は急いで外に出て、奈津美は旬の姿を探した。

「ナツ！」

旬の声がして、奈津美は振り向いた。

先にあっちの方が気付いたらしい。

「ナツうゝ！」

奈津美が旬の姿をはっきりと確認する前に、奈津美は抱きつかれた。

「しゅ……旬！ ちょっと……」

側にカオルもいるこの状況で、しかも会社のまん前でこんなことをされてはたまらない。

「今日さー、居酒屋の方のバイトだったんだけど、他の人に代わってくれて言われて喜んで変わったんだー」

旬は、場所や状況なんて全く気にせずに、奈津美を抱き締めたまま、嬉々として話す。

「だから今夜はナツと一緒に！ 今夜は寝かさないぞー」  
きわどいことを口にしながら、旬は奈津美に頬ずりする。

「ちょ……！ 旬！ 何言って……」

奈津美は真っ赤になって、旬の腕を解こうとする。

「……あれ」

旬の視線が奈津美から離れてカオルに行く。やっとカオルの存在に気付いたらしい。

勿論、カオルの方は全部見ていた。

「ナツ、知り合いの人？」

今更になって旬は奈津美に尋ねる。

「うん……友達。同じ職場の……」

奈津美はカオルの視線を恥ずかしく思いながら答えた。



「初めまして。三枝カオルです」  
カオルの方は全く気にしない様子で笑顔を作り、旬に対して自己紹介をする。

「初めまして。ナツの彼氏の沖田旬です。ナツがいつもお世話になってます」

旬の方も、カオルにつられたように笑顔で自己紹介をした。

「いいえ。こちらこそ。……奈津美の彼氏君ね。話はよく聞いているわ」

クスクスと笑いながらカオルが返す。

「え？」

「ちょ……カオル！」

余計なことを言うカオルに対し、奈津美は顔を赤くした。

「なにになに？ ナツ、いつも俺の話してるの？」  
旬が嬉しそうに奈津美の顔を覗きこむ。

「べ……別にしてないわよ！ ていうか、離して！ 暑苦しいですよ！」

奈津美は旬の腕を無理矢理振りほどこうとした。

「照れちゃって」

カオルがまた笑いながら言った。

「照れちゃって。ナツってば可愛い」  
旬も同じように言い、更に強く抱き締めた。

「ちょっと！ 二人とも……」

初めて会ったはずなのに、二人の性格のせいなのか、旬とカオルは一緒になって奈津美をからかう。奈津美の方が押され気味だ。

「じゃ、二人の邪魔しちゃ悪いし、あたしは帰るわね」  
笑顔のままカオルが言い、二人から一歩離れる。

「えっ……帰るの？」  
奈津美は目を丸くしてカオルを引き止めた。

「あたしだってそんな野暮じゃないわよ。折角会えたんだから二人で過ごしたらいいじゃない」

「でも……」

そんなやりとりをする奈津美とカオルを、旬は交互に見る。

「……もしかして、二人でどっか行く予定だった？」  
旬は控えめに奈津美に尋ねる。

「え……あ、まあ……」  
奈津美は小さく頷く。

「いいのよ。あたしはまた今度で」

「いや、でも……カオルさんの方が先約だったんだし……」

言い合う二人を前に、奈津美は立場的に口を出しづらい。

彼氏を取るか、友達を取るか……

恐らく、どっちを取っても二人とも何も言わないだろうけど、だからこそ奈津美には選べない。

「あ、それじゃあ三人で行く？」

カオルがさも名案を思いついたように言った。

「え？」

奈津美と旬の声が重なる。

「勿論、旬君がよければだけど。あたし達、焼肉行こうって話してたの。どう？ 旬君の分くらいなら奢るわよ」

「焼肉……」

旬は、明らかに焼肉と奢りの言葉に反応している。

「ちょっと！ あたしには選択権ないの？」

一切話を振ってこないカオルに、奈津美は主張する。

「だって奈津美は決められないんでしょ？」

「それは……」

そうやって言われると、奈津美には返す言葉はなかった。

「そういうわけだし。行こうよ、旬君」

どっちにしる奈津美の意見なんて全部無視といった様子で、カオルは話を進めていく。

「はい」

旬は迷うことなく笑顔で返事をした。

「じゃあ決定ね」

奈津美が口を挟む隙もなく、カオルが言った。

「いいわよ。もう別に……」

もう何を言っても無駄だと分かった奈津美は、小さくため息をついた。

友達と彼氏と一緒にというのは気恥ずかしいが、それほど嫌がるほどの理由はない。どうせ食事をするだけだ。たまにはこういうことがあってもいいかもしれない。

奈津美がそう思っていた時だった。

「あ」

カオルが思いついたように声をあげた。

「何？」

奈津美が聞くと、カオルはニッと笑った。

それを見て、直感的に嫌な予感がした。

「ねえ。やっぱり行くところ変えない？」

何かを含んだ笑顔のままカオルが言う。

「どこにですか？」

旬はきょとんとしてカオルに尋ね返す。

「んー……居酒屋とか。旬君のバイト先の」

カオルのその言葉を聞いて、奈津美の思考は一瞬止まる。

「……はあっ!？」

次に出たのは、生まれて初めてじゃないかというくらいの素っ頓狂な声だった。

「なっ……何言ってるの!？ カオル!」

「奈津美から話聞いて一回行ってみたいなーってずっと思ってたのよねー。今日、丁度いいし、折角だから三人で行かない?」

嫌な予感は的中した。カオルは、面白がっている様子だ。

旬のバイト先の居酒屋は、奈津美と旬が出会った場所だ。しかし、それと同時に、奈津美が酔って店員に醜態を晒した店でもあるのだ。奈津美にとって、旬のバイト先の居酒屋というのは、行きたくない場所ワースト1に輝いているのだ。今までだって勿論、行こうと思っただけでも、その近くを歩くこともしなかった。

そんなこと、カオルは知っているはずなのに、絶対にわざとだ。

「いいっすね! 行きましょっか!」

旬が乗り気で賛同した。

「ちょっと……旬! 焼肉は!？」

「いいよ。また今度で」

焦る奈津美に旬は笑顔であっさりと答えた。

さっきは焼肉で反応してたくせに……！

「あたしは嫌！ 行かない！ 絶対対行かない！ 行くんなら二人で行って！」

奈津美は首を大きく横に振って断固拒否する。

「明らかにそれはおかしいでしょ。何で今日会った友達の彼氏と居酒屋に行くのよ」

「それなら場所変えたらいいでしょ！」

「無理よ。もう二対一で決まってるんだから。ねー、旬君」

「ねー」

今日会ったばかりだというのに、すでに旬とカオルは奈津美にとって強力なタッグとなっていた。

「い……嫌ー！ あたしは絶対行かないから！」

「いらっしやいませー……て、あれ、沖田君。今日はシフト変わって休みじゃなかったっけ」

店に入っただけに、女性店員にそう声をかけられた。

「今日は客として来たんです」

旬は笑顔で答える。

「そうなの？ 珍しいね」

「亜紀。これ、一番と五番」

カウンターの内側から、中年男性が女性に声をかける。

「あ、はい」

彼女はカウンターの中に入っていき、言われた器を持って客席へ行く。

「店長。どうもです」

旬がカウンターの中の男性に声をかける。

「沖田？ 今日はいらないんじゃないのか？ それともボランテ  
イアできたのか？」

「違いますよー。今日は客です。彼女と来たんですよ」  
旬が笑顔で言う。

「……お前、いつの間に彼女変えたんだよ。一年ちょっと前に来て  
た子と違うじゃねえか」

店長は旬の隣に視線を向けると、訝しげな視線を旬に戻す。

「え？」

旬は自分の隣に視線を向けた。そこには、カオルの姿しかない。

「あれ？ ナツは？ さっきまでいたはずなのに」  
旬はきよろきよろと奈津美を探す。

「あのコったらまだ店の前でこねてるみたいよ」  
カオルは店の引き戸を指差す。

「えー？」

奈津美は結局、二人に引きずられるようにして来てしまった。あの問題の居酒屋に……

二人は中に入ったけれど、奈津美は一步が踏み出せず、店の前で立ち往生していた。

……どうしよう。

もう帰りたい。というか、帰ってしまおうか。嫌ならそこまでして店に入る必要なんてないわけだし。

「ナツ」

抜群のタイミングで引き戸が開いて、匂が顔を出した。

奈津美の逃亡を見透かしたかのようだ。

「何してんの。入んなよ」

「い……嫌」

ここまで来ても、奈津美は抵抗を試みる。しかし、弱気なせいかわ、物凄く細い声だ。

「ほら。おいで」

「ちょ……匂っ」

匂が奈津美の手を引いて、いとも簡単に奈津美は店の中に入って



しまった。

店に入って、すぐにカウンターの店の店長と目が合った。

かなり久しぶりだが、奈津美は店長の顔を覚えているし、店長も奈津美のことを覚えている。

「ど……どうも」

奈津美は、目を泳がせながらとりあえずそう言った。

「いらっしゃい。随分久しぶりなんじゃないか？」

店長は口元に笑みを浮かべて言った。

わざと意地悪く言われた言葉に、奈津美は何も返せなかった。

だって……だって！　ずっと避けてたんだから来るわけないじゃない！

そう心で叫ぶだけだった。

「沖田君。ここ、丁度空いたからどうぞ」

さっきの女性店員がテーブルの上のジョッキや器を下げ、台布巾でふきながら言った。

「あ、はい。ありがとうございます」

旬が奈津美の手を引いたまま女性店員に案内されたテーブルに向かう。そしてカオルもそれに続く。

「いい雰囲気のお店ね。アットホームな感じで。あたし、こういうところ好きよ」

旬と奈津美の向かいに座りながら言った。

「ありがとうございます。よかったらこれからも来て下さいね」  
旬がここのバイト店員としてカオルに言う。

「勿論。また奈津美と来るわ」  
笑顔でカオルがお答えた。

「ちょっとっ……勝手に決めないでよ!」

「さ。何頼もっか」

奈津美の反論はあっさりと無視し、カオルは壁にかかっている品書きに目を向けた。

「へー。お好み焼きとかあるんだー」

その言葉につられて奈津美も品書きに目を向けた。

「ホントだ。前もあつたっけ……」

「わりと最近増えたんだよ」

旬が二人に説明する。

「さっきの女の人、店長の娘さんの亜紀さんっていうんだけど、亜紀さんが関西の人と結婚してさ。実家がお好み焼き屋らしいんだけど、作ってくれたお好み焼きが美味いんだ。試しで店に出したらかなり好評だったから、もう定番メニューになったんだ」

「へえ……そうなの」

全く知らなかった。本当に来てなかった期間が長かったのだと改めて感じた。

「じゃああたしはそれにしようかな。食べてみたい。あと、ビール」  
カオルが一番に注文を決める。

「あたしも同じにする」

奈津美もカオルと同意見で決めた。

「オッケー。亜紀さーん！ お好み三つとビール三つお願いしまーす」

旬が少し離れたところにいる亜紀に向かって叫ぶ。

「はーい。お好み三つと、ビール二つと、沖田君はウーロン茶ね」  
確認のための繰り返しを、亜紀はわざと変えて言った。

「えー！ 何ですかー」

「当たり前でしょ。未成年にはお酒出せないの」

そう言って、亜紀はカウンターの中に入ってしまった。

「ちえー」

旬は唇を尖らせて呟いた。

「いいじゃない、別に。それで普通なんだから。ていうか、ここに来たから飲めないんでしょ」

奈津美の言葉には、無意識に棘が含まれていた。

もしこの店じゃなかったら、酒を頼んでも誤魔化せたのに（どっ

ちにしてもしてはいけないことだが）、と遠まわしに言う。

「何？ 奈津美、根に持ってたんの？」  
カオルがからかうように言った。

「別にそうじゃないもん」  
奈津美はふいっとそっぽを向いた。

「かーわいいなあ、ナツは」  
何のタイミングなのか、旬は奈津美の肩を抱き寄せようとする。

そうされる前に、奈津美は旬の手を掴んで、無言で旬の膝の上にその手を置く。旬は寂しそうに奈津美を見るが、奈津美はそれに気づかないふりをして話を変える。

「そういえば、ここの店長って娘さんがいたのね。あたし、見たことなかったけど……」

「ああ、亜紀さん、大学行ってたから、その間はあんまり手伝いとかしてなかったらしいよ。俺も去年、亜紀さんが大学卒業して店を手伝うようになってから知ったから」

「そうなの……」

その話を聞きながら、奈津美はまた違うことに思考を働かせる。

去年大学卒業ってことは、あたしと多分同い年？ それで結婚してるのね。

……何で周りの同い年の人は早く結婚するのよ。

そのつもりはなくても、なぜかそこに考えがいつてしまう。

気にしすぎよね。考えないって決めたくせに……

「おまちどうさーん」

十分ほどで、注文したものがテーブルに運ばれてきた。亜紀ではなく、また違う男性店員だった。

「わっ！ 美味しそう！」

テーブルの上に置かれた三つの皿の上のお好み焼きを見て、カオルが声をあげる。

「うん。いい匂いー」

食欲をそそるソースの香りに奈津美も笑顔になっていた。

「嬉しいなあ。そないに喜んでもらえると」

関西の訛りがある口調で男性店員が言った。

「コウさん。いいんですか？ わざわざ出てきて」

旬が慣れ親しんだ様子で男性店員に話しかける。

「今日はお前の彼女が来てるっていうからわざわざ出てきたんやないか。……で、別嬪さんが二人もおるけど、どっちが沖田の彼女なん？」

ビールとウーロン茶をそれぞれ置きながら男性店員は奈津美とカオルを交互に見る。

「こっちでーす」

旬は奈津美の腰に手を回して抱き寄せた。

「ちょっと、旬！」

奈津美はすかさず旬の手の甲をつねった。

「いててっ」

旬はぱっと手を離す。

「そんならこちらのお客さんは？」

男性店員はカオルの方を見る。

「彼女の友達です。今日は成り行きで一緒に来たんです」  
カオルが笑顔で答える。

「そうですか。俺はこの婿養子で主にお好み担当の浩平っていい  
ます」

笑顔で男性店員、浩平が自己紹介をする。

関西弁を聞いて何となく予想はできていたが、亜紀と結婚したと  
いうのが彼のことらしい。

「いやー。沖田の彼女さん、やっと会えましたね。噂には聞いたつ  
たけど、なかなか来おへんから」

まるでテレビの中の芸人のようなノリで浩平は話す。

噂ってなに！？ まさか、あの時のこと、話したんじゃないでし  
ょうね？

旬を見たが、旬はその視線に気付いていない。まあ、旬が話して  
いないにしても、店長が話した可能性はあるのだが。

「これからもうちの店、ご最良に頼んます。お友達さんも」

「勿論です。ね、奈津美」

カオルはからかい半分の顔で奈津美に振った。

「え……あ、はあ……」

奈津美は曖昧に返事をした。

旬にならともかく、店員の前でさっきのようにあからさまに嫌がることはできない。

「コウ！」

「ぐえっ！」

浩平が蛙のような声を出して後ろにのけぞった。

「なに油売ってんのよ。注文入ったわよ！」

亜紀が浩平の後ろからTシャツの首を引っ張っていた。

「何しよんねんな。首絞まるやろ」

軽く咳き込みながら亜紀に言う。

「真面目にしないのが悪いんでしょ！ ほら、さっさと戻る！」

「分かったて！ ほんじゃ、ごゆっくり」

最後に笑顔を向けて、浩平はカウンターの中间に戻っていく。

「すみません。迷惑かけて……」

申し訳なさそうに亜紀が言った。

「いえ。全然」

奈津美とカオルは笑顔で答えた。

「あ。好み、冷める前にどうぞ。作ってる人間があんなんですけど、味は保証しますから」

ニコツと微笑んでそう言い、亜紀も仕事に戻っていった。

「面白いだろー。コウさん」

旬が笑いながら言った。

「うん」

奈津美も笑みを浮かべて頷いた。

「やっぱり関西人ってああいう人が多いのねー。テレビで見た通りだわ」

カオルもクスクスと笑っている。

「ですよねー。俺も最初そう思いました」

「じゃ、食べよっか」

奈津美は割り箸を三本取り、カオルと旬に渡す。

「ありがとう」

「ありがと、ナツ。……いっただっきまーす！」

旬が一番に割り箸を割って、お好み焼きに手を付けた。

「いっただっきまーす」



「いただきます」

旬につられて、二人もきちんと合掌してから箸を割ってお好み焼きを食べ始めた。

「あ。美味しい！」

一口食べて、すぐに感想が出た。

「ホントー。生地フワフワしてるー」

カオルもそう言いながら箸を進める。

「だろー？ これならまた何度でも食べに来たくなるよな？ ナツ？」

旬が笑顔で奈津美に向かって言う。

箸を銜えたまま、奈津美の動きは止まる。

「……まあ、たまに……ならね」

口の中でもごもごとさせながら奈津美は言った。

「うん」

旬は満足そうに頷き、奈津美の髪を撫でた。

「ラブラブねー」

二人の向かいでカオルは笑う。

「はい！ ラブラブです！」

旬は嬉しそうに答える。

「そ、そんなことないし！ 普通よ、普通！」  
奈津美は顔を赤くして否定する。

「ナツ、照れるなよー」

旬は笑いながら奈津美の頬を指でつつく。

「照れてない！」

奈津美はプイっとそっぽを向いた。

「ねえ、旬君。奈津美って旬君の前だとどんな感じ？」

「ちよっと、カオル！？ 何聞いてんのよ！」

「えっとー。ナツはー」

「旬も答えなくていいから！」

奈津美のことを関係なしで話を進める二人に、奈津美は忙しく反応する。

「何してても可愛いし、いつでも優しいから大好きです」

照れる様子なんてなく旬は満面の笑みではっきりと言った。

それには奈津美の方が赤面してしまう。

「へーえ。そうなんだあ」

カオルはチラリと奈津美の方を見た。一瞬目が合って、奈津美はすぐにそれを逸らした。

何で友達にそんな恥ずかしいと言うのよ！

横目で旬を睨むが、旬は全くそれに気付かない。

「カオルさん。仕事の時のナツはどんな感じなんですか？」  
逆に旬の方がカオルに質問をし返す。

「そうねえ……」

「ちょっと！ あたしのことばかり話さないでよ！」  
勝手に話を進める二人に奈津美は声を上げた。

## 12 旬とカオル

「亜紀さーん。お好み焼き追加ー」

旬が亜紀に向かって注文をする。

「旬、まだ食べるの？ もう三枚目じゃない」

店に入って、もう一時間近く経っていた。

何だかんだと話しながら、奈津美とカオルはお好み焼きの他に軽くつまみ系のものをとった程度だが、旬はそれに加えてお好み焼きを追加している。

「うん。だって美味しいし。すっげー腹減ってるし」

「食べ盛りなのねえ」

旬の食べっぷりに、カオルも感心している。

「旬君って、まだ身長伸びそうよね。男は二十過ぎても伸びるって言うし」

「そうなんですか？ やったー！ 百八十まで伸ばすぞー」

旬は嬉しそうに張り切る。

「そんなになくてもいいんじゃないの？ 今だって十分高いじゃない」

「えー？ ナツは俺が百八十なくてもいいの？」

「別に変わらないわよ。大きいことには違わないから」

「ふーん。じゃあ別に伸びなくていいや」

「何それ」

旬の単純さに、奈津美は小さく笑った。

そんな二人のやり取りを、カオルは黙って見ていた。

「あたし、ちょっとお手洗い行ってくる」

奈津美がそう言って席を立った。

「あ、店の方のトイレ、今修理中なんだ。だから、奥の従業員用のトイレまで行かないと……」

旬が思い出したように奈津美に言った。

「そうなの？」

「うん。あ、亜紀さん」

丁度テーブルにお好み焼きを持ってきた亜紀に、旬は声をかけた。

「何？ 沖田君」

テーブルに皿を置きながら亜紀は返事をする。

「彼女、トイレの場所まで案内してくれませんか？」

「ああ。うん。わかりました」

「すみません……」

「いいえ。こちらこそすみません。ちょっと遠いんですけど……こっちです」

奈津美は亜紀の後ろについて、その場を離れようとする。と、足を止め、匂とカオルの方に向いた。

「二人とも。あたしがいない間に変な話しないでよ！」  
釘を刺すように奈津美は強い口調で言った。

「何よお、変な話って。そんなのするわけないでしょ。ねー、匂君」

「はい。カオルさん」

「……絶っ対によ！」

笑顔の二人に一抹の不安を覚えながら、最後に更に強調してから、奈津美は離れていった。

「さて、と……匂君」

奈津美が見えなくなると、カオルはテーブルに肘をついて匂の方を見る。

「はい？」

匂はお好み焼きを口に運びながら返事をする。

カオルは匂に向かってニコツと微笑んだ。

「やっと二人きりになれたわね」

「ゴフツ…！」

旬は思わずむせ返った。喉の奥のほうにつまったらしく、喉の下を叩き、ウーロン茶で飲み下した。

「か……カオルさん！？ 何をいきなり……」

「やあね。変な意味があるわけじゃないじゃない」  
カオルは旬の様子を見ながら笑った。

「友達の彼氏取ろうなんて思ってないし。第一、あたしも彼氏いるし」

「あ、なんだ。そうなんですか」  
旬はほっと胸を撫で下ろす。

「どっちにしても、旬君は口説いても奈津美以外には揺れないんでしょう？ 奈津美のこと、大好きだもんね」

「はい！ 大好きです！」  
旬ははっきりと頷いた。

「どれくらい好き？」

「すっげー好きです！ 結婚したいくらいです。ていうか、結婚します」

これを聞いて、カオルはなるほど、と納得した。

奈津美の言っていた『付き合っている時の常套句』そのものだとカオルは感じた。

「ねえ、旬君。それって、今まで付き合ってきた彼女にも言ったことあるでしょ」

「え？」

旬はきょとした表情で固まった。

「ずっと一緒にいたいね、とか、絶対結婚しようね、とか」

「そんなこと……」

言い返しかけて、旬の口が止まった。

何か考えるような表情になって、すぐに目が泳ぎだす。どうやら、思い当たることが出てきたらしい。

「で……でもっ！ ナツには本気で思ってます！ 絶対に嘘じゃありません！」

まるでやましさを誤魔化すように旬は言い返した。

「分かってる。別に旬君が本気で言っていないとか、そういう意味じゃないの。でもね、そういうのって、言わない方がいいのよ？ 本気でそう思ってるなら尚更ね」

「そうなんですか？」

旬は目を丸くさせる。

「だって、口で言うのって単なる絵空事じゃない？ 言わなくても現実になるんだって思ってたら、そんなわざわざ口に出すこともないじゃない」



「なるほど……」

旬は納得したように頷いた。

カオルが言ったことをあっさりと鵜呑みにしてしまっている。

素直で可愛らしいけれど、それで大丈夫なのかとも心配になる。

何で奈津美がいつも旬のことについて不安になっているのかが分かった気がする。

「旬君てさ、いつぐらいに奈津美と結婚したいと思ってる？」

「今すぐにでもです」

はつきりとすぐに返事は返ってきた。

やっぱり、奈津美が不安がる通りに、旬はあまり本気で考えてないのかもしれない。

そう思うカオルを余所に、旬の言葉は続いていた。

「でも……出来るなら今すぐにしたいですけど……でも、無理なんですよ。俺、ちゃんと仕事してるわけじゃないし」

旬は、今までのあっけらかんとした様子でなく、少し落ち込んだ声になっていた。

「それでも仕事探してるんですけど、あんまりいい仕事ないし……俺に向かないようなのだったり、給料がかなり安かったり。親には何でもいいからちゃんとした仕事しろって言われるんですけど、妥協はしたくないし」

「そうなの？ 何で？」

「だって……俺、男だし、ただでさえナツより年下なのに、シヨボイ仕事とか給料じゃ嫌なんです。せめてナツを食わせていけるぐらいの……甲斐性っていうんですか？　そういうのがほしいんです。……ただの意地だってことは分かってるんですけど……」

カオルは少し驚いた。

奈津美から聞いていた旬の人間性でも、カオルが今日始めて会った時の印象でも、旬は楽天的というか、物事をそんなに深く考えなさそうなのに、そうじゃなかった。旬は思った以上にちゃんと奈津美との未来を考えている。

何だ。大丈夫じゃない。

「いいと思うよ。意地でも頑張ろうって思ってるんでしょ？　奈津美のために」

旬はきょとんとしてカオルを見る。

「ね？」

カオルは旬に向かって微笑んだ。

「はい」

旬も、照れ臭そうに笑った。

「でも、奈津美は甲斐性とか……そんなの求めてないと思うよ。旬君が奈津美のために頑張ってくれてるんならね」

「……そうですか？」

「奈津美はね、旬君のことに關しては自分で言う理想と違っても、その違つてるところも好きみたいよ」

「ホントですか？」

旬の目がぱあっと明るくなった。

「ふふっ。あたしがこんなこと言つたって、奈津美には内緒ね」  
カオルは笑いながら言つた。

「はいっ。あ、俺が言つたことも、ナツには内緒にして下さいね。  
恥ずかしいですから」

「うん」

「あたしは何？」

不意にした声に、旬とカオルは同時にその方を向いた。

「あ、ナツ」

トイレから戻ってきた奈津美が、訝しげに二人を見ていた。

「何の話してたの？ ……ていうか、またあたしの話してたんでしょ！」

話の内容は聞こえなかったが、自分の名前を口に使っていたのをはつきりと聞いた奈津美は二人に詰め寄つた。

「別にしないわよ。ね？ 旬君」

「はい」

二人は顔を見合わせて頷きあう。

「嘘！ 絶対してたでしょ！」

「してないってば。それより、旬君がそれ食べ終わったらそろそろ出ましようか」

カオルはまたも奈津美の言うことを無視する。

「あ、はい。そうですね」

旬は皿の上の残り三分の一ほどの好み焼きを食べる。

「もうっ！ 何なのよお！」

奈津美は一人事情がわからないままだった。

「じゃあね。色々楽しかったわ」

居酒屋を出て、カオルを駅まで送った別れ際にカオルは笑顔で言った。

「色々って何よ」

気になる発言に奈津美は反応する。

「色々は色々。ね、旬君」

「はい」

カオルと旬はまた顔を見合わせる。

「じゃあ、頑張ってたね。二人とも。またねー」

カオルは笑顔でそう言って、手を振って駅の方に向かった。

奈津美と旬はそれをカオルが見えなくなるまで見送った。

「俺らも帰ろっか。今日は俺んち来る？」

旬が笑顔で奈津美に尋ねる。

何も言わず、奈津美はじつと旬を見上げた。

「ナツ？」

旬は首を傾げる。

「カオルと何話してたの？」

問い詰めるような少し強い口調で奈津美は言った。

「へ？」

旬はきょとんとしている。

「何かあたしのことで変な話してたんでしょ」

「ああ。別にしてないよ。変な話なんか」

旬は笑いながら首を横に振った。

「じゃあ何の話してたのよ」

「それは内緒。恥ずかしいから」

「恥ずかしいって……」

「もういいじゃん！ 気にすることじゃないしさ」

旬はそう言って、奈津美の手を引いて歩き始めた。

「もう……わけ分かんない」

奈津美は口を尖らせて呟いた。

そんな様子も、旬には愛おしく映っていた。

これからもずっと、奈津美のことを大事にしていきたいと、そう思った。

「マジで頑張らないとなー……」

旬は小さく、独り言のように言った。

「え？ 何？」

はつきりと聞き取れず、奈津美は聞き返した。

旬は、奈津美に向かって、ニッと笑った。

「今夜は頑張らないとなって。ベッドの中で」

悪戯っぽく旬は言った。

旬が何を言っているのかは、奈津美にも伝わった。

「なっ……何言ってるのよ！」

奈津美は真っ赤になって旬に言った。

奈津美が、旬が本当に言ったことの意味が分かるのは、もう少し先の話になる。

### 13 甘い事件

「そうだ、ナツ。聞いて聞いてー」

夜に、旬と電話をしていたら、何気ない会話から、突然何かを思い出したように旬が言い出した。

「俺がバイトしてるカフェあんじゃん。そこ、今度雑誌に載るんだって」

「へえ……すごいね。……あれ？ でも前も何回か載ってたことなかったわけ？」

「うん。でも前に載ったことあんのは全部ローカル誌だったけど、今度は全国版の雑誌なんだって」

「あ、そうなんだ。じゃあ、本当にすごいね。あのカフェ、すごく人気上がってるんだ」

旬がバイトしているカフェは、地元ではかなりの人気店だが、全国誌に載るほどにまでになったとは驚きだった。そして、そうなることで、更に人気は高くなっていくのだろう。

「みたいだなー。俺、あんまりそんな感じしてなかったけど。忙しいうっちゃあ忙しいし」

「旬。一応自分がバイトしてるところなんだから、それぐらい把握しておきなさいよ」

「ハハッ。そうだなー」

旬は能天気笑い飛ばしていた。

そして、旬とそんなやりとりをした、一週間後。

「ねえ。これって旬君じゃない？」

カオルが雑誌のあるページを奈津美に見せた。

「え？ 何？」

奈津美はその雑誌に目をやる。

カオルが見せたのは、グルメ雑誌だった。奈津美同様に飲食店で美味しい店を探すのが趣味のカオルがよく買う雑誌だ。そして、開いていたのは、『スイーツ特集』と題されたページだった。

「あ！ ここ……」

見出しが一番大きく取り上げられているページを見て、奈津美は反応した。

見たことのある店の外観の写真だと思ったら、そこは旬がバイトしてるカフェだった。

「知ってる？」

カオルの問いに、奈津美は頷いた。

「うん。旬のバイト先」



「やっぱり。その写真、旬君じゃないかと思ったのよ」

「え？」

奈津美は、改めてそのページを見る。

「その店員が何人か写ってるところ」

カオルが横から雑誌を指さした。

「あ！」

指された写真を見て、奈津美は目を丸くした。

その写真には、数人の店員が並んで写っていて、その中には笑顔の旬もいた。

「やっぱり。そうだと思った。旬君、何も言ってなかった？」

「お店が雑誌に載るとは聞いてたけど……でもまだまだ先かと思ってたし」

旬がその話をしていたのはつい先週だ。雑誌名もいつ発売なのかも言ってなかった上に、旬が載ってるなんて、全く聞いていない。

奈津美は、食い入るように雑誌に映っている旬を見ていた。

その写真の下には

『雰囲気の良いスタッフの対応も◎ 素敵な笑顔に癒されます（笑）』

と、書かれていた。

……確かに癒し系よね。

奈津美は雑誌の旬を少し臆目で見、そう思った。

「そんなに見惚れちゃって。そのページあげよっか？」

カオルがニツツと笑いながら言った。

「べっ……別に見惚れてなんかないわよ！」

奈津美は赤面しながら雑誌から目を離し、カオルに返す。

カオルはその様子を見ながらクスクスと笑う。

「でも雑誌に載るだけあって、美味しそうよね。ここって奈津美の家の近くよね。行ったことあるの？」

「ううん。お店の場所は知ってるけど、店の中までは……。でも、旬がたまにケーキ買ってきてくれるから、食べたことはあるよ。やっぱり美味しかった」

実は、奈津美はそのカフェに行っことがあるのは店の前までで、客として行ったことはなかった。

奈津美の誕生日やクリスマスなどのイベントの時、金欠の旬がプレゼントとして買ってくるので（店員だから少し安くしてくれるらしい）その時に食べたことはある。人気があるだけあって味は確かだ。

「へえー。いいなあ。……あ、そうだ。今日仕事終わったら行かない？」

カオルがそう提案した。

「えっ……」

奈津美はカオルを見て固まる。

「何？」

「今日は……確か匂がカフェの方で夕方から夜までバイトだって言ってたから……」

「そうなの？ それなら丁度いいじゃない」

「え！？」

奈津美は、遠まわしに今日はやめておきたいと言ったつもりなのだが、カオルには伝わっていない。……いや、カオルの場合、気付いていてわざと言ってているのだ。

「それじゃ決定ね」

カオルは笑顔でそう言った。

居酒屋の時と同様に、奈津美には選択権はなかった。

しかし、居酒屋の時と違って、カフェは特に行きたくない理由がない。匂と顔を合わせたら何となく気恥ずかしいというだけで、どちらかというと、奈津美も行ってみたいと思っていたので、一人でいく必要がなくなったといえそうだ。

まあいっか。たまには行ってみても。

奈津美は気軽に考えて行くことに決めた。

そして仕事を終えてから、二人は旬のバイト先へ行った。

「やっぱり混んでるわねー。雑誌効果？」

「多分そうじゃない？」

店内に入り、二人はその賑わいに溜め息をつく。ざっと見回してみると、ほぼ満席だ。

「これじゃ席ないかもねー」

「うん……」

「いらっしやいませ」

聞き覚えのある声がかかって、奈津美とカオルはその方に向いた。

「……あれ？ ナツ？」

そこには、目を丸くした、カフェの制服姿の旬がいた。

「どしたの？ ナツ。ここにくるなんて珍しいじゃん。つか、初めて？」

旬は驚いた様子でありながら、更に嬉しそうな顔をして奈津美に近寄る。

「う……うん」

「旬くーん？ ついでにあたしもいるわよー」

カオルが横からひらひらと手を振って旬に存在をアピールする。

「あ、カオルさん。こんばんは」

旬はその時に初めてカオルの存在に気付き、挨拶をする。

「こんばんは。……本っ当に旬君って奈津美のことしか眼中にないのねー」

カオルはクスクスと笑いながら言った。

「いやあ……そうですかあ？」

旬はなぜか照れ臭そうなリアクションをする。

奈津美はなんとなく赤面してしまう。

「あ、旬君。雑誌見たわよー」

カオルが思い出したように言った。

「ホントですか？ あ。だから二人で来てくれたんだー」

「そうよ。でも、旬。もう雑誌出てるなんて何も言ってなかったじゃない。ていうか、雑誌のこと言ってたの先週でしょ？」

奈津美は確認するように旬に言った。

「ああ、うん。でも、取材されたのは先月ぐらいだよ。そのことナツに話そうとして忘れててー。思い出したのが先週だったんだ。しかも俺、発売日とか全然知らなくてさあ、昨日発売だったらしいんだよなー。昨日はバイト入ってなかったから今日来て知ったし」  
旬はそう笑い飛ばした。

なんて大雑把な……

いくらアルバイト店員だからとはいえ、自分が働いている店のこ

となのだから、もう少しちゃんと知っていたらどうなんだ。

奈津美はマイペースな匂に呆れてしまう。

「まさか写真まで載ってるとは思わなかったし。記念に一枚撮りま  
すって言われて撮ったやつだったし」

「へえー。でも、匂君って写真写りいいわよね」

「そうですか？ 多分プロが撮ったからだと思いますけど」

「それでもよかったわよね？ 奈津美なんかあたしが持ってた雑誌  
の匂君の写真に見入っちゃうし、さっきここ来る前にわざわざ自分  
で買ったのよ」

カオルが笑いながら言った。

「ちょ……カオル！ 何言ってる……」

奈津美は顔を赤くしてカオルを見た。

何を勝手に言い出すのか……確かに事実ではあるが……

「ナツ。マジで？」

匂は目を丸くして奈津美の方を見た。

「べ……別に……その……」

奈津美はどもりながら手に持っていた本屋の袋を後ろに隠した。

そんな動きをしたら却って目立ってしまい、匂にカオルが言った  
ことが本当だという確信を与えてしまった。

ぱあっと旬の表情が輝く。その後の行動が奈津美には手に取るように分かってしまった。

「ナツ……！」

旬は腕を広げて奈津美を抱き締めようとする。

それを予期していた奈津美は旬の腕を掴んでそれを阻む。

「仕事中でしょ！　ちゃんと仕事して！」

奈津美は強く言い放った。

「ちえー……」

旬は口を尖らせて腕の力を緩めた。

それと同時に奈津美の手の力も弱まった。

「すきあり！」

旬は奈津美が油断したのを見逃さずに、今度はしっかりと奈津美に抱きついた。

「きゃあ！」

奈津美は不意打ちに思わず叫んだ。

「へへへー。ナツ可愛いー」

旬は満足そうに笑う。

「何やってんだてめえは！」

「いでー」

突然違う声と『ゴンッ！』という鈍い音が聞こえて、旬の手が奈

津美から離れた。

「いってー……先輩、何するんですかー！ 今思いつきグーで殴りましたよね」

旬が頭を摩りながら後ろを振り返る。

そこには、旬とは違う男性店員がいた。名札を見ると、大川と書かれていた。

「何じゃねえ！ 仕事サボって客に手えだすんじゃねえよ！」

大川は拳を握りしめ、鬼のような形相で旬に怒鳴る。

「客じゃないです！ いや、客ですけど！ でも俺の彼女なんです！」

「彼女？」

大川はちらりと奈津美の方に目を向けた。

「申し訳ありません。折角来て頂いたのに迷惑かけて……」  
大川は奈津美に対しては店員として旬の行動を詫びる。

「い……いえ……こっちこそすみません」

何となく奈津美も謝ってしまう。

「別にいいじゃないですかー。彼女なんだし」  
旬は口を尖らせて大川に言う。

「彼女だろうがなんだろうが客に変な誤解招くようなことするな！ 仕事でしろ！ 店長に言って給料減らすようにぞ」



「あつ……それだけはマジで勘弁してください！ ホント、軽はずみな行動だったって反省しますから！」

旬は必死になって大川にすぎる。

「……ったく。いいから席に案内しろよ。二番開いたから」

大川は呆れた様子で客席を顎で杓った。

「はい！ じゃ、ナツ、カオルさん。こっちにどうぞ」

旬は笑顔で二人を客席の方に連れて行く。

「……旬、ダメじゃない。バイト先の人に迷惑かけたら……」

奈津美は小声で旬に言った。

「あー、ごめんな。あの先輩、彼女いないから僻みっぽくて」

旬は、さっき反省すると言ったことはどうしたのか、笑いながら小声で奈津美に返す。

「そういうことじゃなくて……」

「おい。聞こえてんぞ」

少し離れている距離のはずなのに、大川は目を光らせて旬のことを見ていた。

「あははー」

旬は笑って誤魔化そうと引きつった笑みを浮かべ、さっさと客席の方に向かった。

「はい。メニューどうぞ」

客席に案内されると、旬は奈津美とカオルにメニューを渡す。

「じゃああたしはフルーツタルトとアイスストレートティー」

カオルはメニューを見て早々と決める。

「あたしは……モンブランとアイスマルクティー」

奈津美もメニューを見てすぐに決める。

「はい。かしこまりました。少々お待ち下さい」

旬は笑顔でそう言い、その場を離れた。

「何か変な感じ」

旬の背中を見ながら奈津美はぼんやり呟いた。

「何が？」

「旬がちゃんと働いてるのが。まあ、働いてるっていつでもバイト  
だけど」

旬を見ていると、割とてきぱきとスムーズに、そしてほぼ完璧に動いている。いつものだらしない生活をしているところばかりを見ていたら、テーブルをきちんと拭いたりしてるところなんて、奈津美にとっては不自然でならない。

「流石にそのへんはちゃんとしてるんじゃない？ 接客だし」

「確かにそうだけど……っていうか、しっかりしてくれてないと困る

し。でも普段もあれぐらいしてくれたらいいのに……」

奈津美はため息をついた。

家でもあれぐらいのことをしていたら、旬の家はあんなに汚れないんだろうに……少なくとも、奈津美の苦労も減るはずだ。

「その辺はオンオフしっかりしてるってことじゃない？」

「……しっかりしすぎ」

奈津美はまた大きなため息をついた。

「やっぱり沖田さんじゃない？」

隣の客席からそんな声がして、奈津美は思わず反応した。

通路を挟んだ隣の席には、四人の制服姿の女子高生がいた。

「あー。確かに優しそうだよねえ。でも、あたしは大川さんが一番かっこいいと思う！　すごい頼れそうだしー」

「分かる分かる」

「島崎さんもいいよね。可愛い顔してない？」

彼女達は、店の中の店員を見て、そんな感じの会話を繰り広げている。

「あれは店員目当てで来てるわね」

カオルが冷静に分析するように言った。

「え？ 何それ……」

奈津美は首を傾げる。

「あの雑誌に載ってた店員の写真、男の店員のレベル結構高かったじゃない」

「そうだった？」

カオルに言われても、奈津美には何の印象もなかった。

「……そうだった？ って……ああ、奈津美は旬君しか見てないからね。見てたにしても旬君以外は皆同じだもんね」

「べ……別にそんなこと……！」

奈津美は赤面して否定する。

確かに、あの雑誌では旬の方にはばかり気を取られていたけれど……

「まあ、とにかく……それで店員に釣られて客も増えてるんじゃない？」

そう言われて店内を見ると、女性客、それも女子高生や大学生ぐらいの年齢の客が多い。

元々ケーキを売りにしているカフェだから女性客は多いものだと思っただけでなかったが、確かに男性店員をちらちら見ている客も多くて、それ目当てのような気がする。

「でも、やっぱりあたしは沖田さん！ めちゃくちゃ好みだし」  
隣の女子高生達の声が聞こえる。

「彼女いるのかなー」

「ここにいまーす」

女子高生の声に対して、カオルがボソリと答える。

「ちょっと……カオル！」

「どうせ聞こえないでしょ」

焦る奈津美にカオルはあっさりと言う。

「彼女いないんだったら本気で頑張ろっかなー」

「ホントにー？」

隣がきやつきやと盛り上がる。

「可愛そうに。旬君にはもう奈津美がいるから頑張られないわねえ  
そう言ってカオルはクスクスと笑っている。

「……カオル。何でカオルがそんな反応するの？」

「嫌いだから」

奈津美の問いにカオルはすぐに返してくる。

「ああいう、若いことを武器にしてちょっと騒がしいくらいが明るくて可愛く見えるって計算してる小娘。あたし、大っ嫌いなもの」  
カオルはにっこりと微笑んだ。しかし、目は笑っていない。

「しかも男はそういうのにコロッと騙されちゃうから質悪いわよね」

カオルは過去にそういうタイプの女と男関係で何かあったのだからか。

気になったけれど、奈津美には怖くて聞けなかった。

「お待たせしましたー」

旬が丸いトレイを持って奈津美達のテーブルにやって来た。

あ、沖田さん。という、隣の女子高生の黄色い小声が聞こえた。

「フルーツタルトとモンブラン、それからアイストレートティーとアイスマルクティーになりまーす」

女子高生の声には気付いていないらしく、旬はいつもの仕事通りにトレイの上の注文の品をテーブルに置く。

「わっ。おいしそ」

ケーキを見てカオルはちゃんとした笑顔になる。

それを見て、奈津美はばれないようにほっと息をつく。

「旬君、奈津美がちゃんと働いてるって旬君のこと褒めてたわよ」  
カオルが旬に言った。

「ホントっ？」

旬は笑顔で嬉しそうな顔を奈津美に向ける。

「カオル……別に褒めたわけじゃないでしょ。いつもの旬と比べたらちゃんとしてるって言っただけでしょ」

旬が調子に乗らないように奈津美ははっきりと言う。

「えー。ナツ、俺だってやるときはちゃんとしてんだぞー？」  
旬は口を尖らせて言い返す。

「出来るんないつもちゃんとしてよね。それに、さっきはちゃんとしてなかったでしょ」

「さっきはナツが来て嬉しかったからじゃん。もう我慢してるからしないよ。先輩にも怒られるし」

「ああ、そう。じゃあ早く戻らないとまた怒られるわよ」  
屁理屈を言う旬に奈津美は呆れながら言った。

「分かったよー。じゃ、ごゆっくり」  
少し名残惜しそうにしながら旬はそう言い、テーブルを離れた。

「すみませーん」

旬が三步ほど歩いたところで、隣の女子高生が甲高い声で旬のことを呼んだ。

「はい」  
旬は呼ばれたままにそのテーブルに向かう。

「お呼びでしょうか」  
営業スマイルで旬は女子高生達の注文を待つ。

「あのお。沖田さんてー彼女いるんですかー？」

「……え？」

旬は予想外の質問に旬はきょとんとしている。

勿論それは、奈津美とカオルのところにも丸聞こえだった。

「やっぱりきたわね」

カオルは横目で見て、アイスティーにガムシロップを入れて混ぜながら言った。

「やっぱりって……」

「今までの話の流れだったら予想できたでしょ。まあ、どっちにしても結果は一緒だけどね」

そう言いながらカオルは面白そうな顔をしている。

「えっと……すみません。そういうことには答えられないことになってますので」

旬は何とか笑顔で返す。

「えー」

女子高生達の不服そうな声が聞こえる。

「なんだ。そういうもんなのね」

カオルも女子高生とは違う意味で不服そうだ。

「さっさと奈津美が彼女だって言っちゃえば黙るのに」

「……カオル。女子高生が気に入らないだけなの？ それとも人のことで楽しんでるの？」

先ほどから奈津美よりも過剰反応しすぎなカオルに対して、奈津



美は聞いた。

「両方」

カオルは即答ではっきりと答えた。

「あっそう……」

奈津美はがくりと肩を落とした。

「教えてくれないんですかあ？」

女子高生の可愛く見せようとしている典型の喋り方が耳についた。

「はい。ちょっと……」

旬の方も苦笑いだ。

「じゃ、アド交換してくれませんか？」

女子高生は笑顔でジャラジャラとストラップのついていてデコレ  
ーションされた携帯を取り出す。

「いやー……それはちょっと……無理です」

旬はやりわりと断ったつもりだった。

「えー。ダメですかあ？」

女子高生の方は、簡単には引こうとしない。

「何でダメなんですかあ？」

「あ、バイト中だからだとか？」

「それなら待ちます！ 沖田さん、何時に上がりですか？」

旬は何も言っていないのに、女子高生達で勝手に話を進めている。

「いや、そういうんじゃない……」

旬はたじろぎながらちらりと奈津美の方を振り返った。

一瞬だけ、旬の方を見ていた奈津美と目が合い、奈津美の体は思わず固まった。

「悪いんですけど……言えないです」

女子高生の方に視線を向けると、旬はゆっくり口を開いた。

「え……」

様子の違う旬に、女子高生は口を噤む。

「俺、彼女がいるんで」

そう言い、旬は振り返って奈津美の側にやってくる。

「え……旬……?」

奈津美が小さく声をかけると、旬はにっこりと笑い、奈津美の座ってる椅子の後ろに立った。

それにつられて、奈津美は旬を振り返ろうとした。

「ひゃっ!？」

奈津美が振り返る前に、後ろから旬の手が伸びてきて、奈津美の体に巻きついた。

「これが俺の彼女です。流石に彼女の前でそういうことできないんで。ていうか、彼女の前じゃなくてもしませんから」

旬は女子高生に向かってにつこりと微笑んだ。

女子高生は哑然としている。

そして奈津美は、一気に顔が熱くなるのを感じた。

「ちょ……ちょっと旬っ」

「おーきーたー！」

困惑する奈津美の声と重なって、旬の後ろからおどろおどろしい声が聞こえた。それと同時に奈津美に巻きついていた旬の腕がビクッと動く。

「お……大川先輩？」

旬はゆっくりと奈津美から手を離しながら後ろを振り返る。

その視線の先には、鬼のような形相をした大川が立っていた。

「あ……あははー。すぐ戻りまーす」

旬は笑いながら誤魔化している。

それを見て、大川は小さく「ったく……」と言い、その場を離れていった。

「焦ったー……」

旬は小声で言いながらほっと息をついた。

「まあ……そういうわけなんで、アドレス交換とかも無理なんです。すみません」

旬は改めて女子高生に向かって笑顔で言った。

女子高生の方は、何も言葉が出てこないように黙ってしまった。

「それじゃ、ごゆっくりどうぞ……あ」

女子高生達に営業スマイルを向けると、旬は思い出したように奈津美の方を向いた。

「ナツ、今日はこの後予定あんの？」

奈津美の方にだけ聞こえるトーンで旬は言った。

「え……？ 特にないけど……」

奈津美はただ聞かれたことに対して答える。

「じゃ、一緒に帰ろ。俺、六時に上がりだから」

旬の表情は、にっこりと接客用ではなく、奈津美にとっての極上の笑顔になっていた。

奈津美は、その笑顔に簡単に胸を射抜かれてしまった。

「うん……」

赤くなる顔を隠すように、奈津美は頷いた。

「やった！ それじゃ、六時に店の前で待ってて。すぐ行くから」

「うん……わかった」

「じゃ、また後でね」

満面の笑みを浮かべて、旬は仕事に戻っていく背中を、奈津美はじっと見送っていた。

「ラブラブねー」

向かいからカオルの声がして、奈津美ははっと我に返る。  
カオルはニヤニヤと笑っていた。

「もう、二人ともあたしの存在なんかすっかり忘れてるし」  
からかいながら、カオルはアイステイーをストローで一口飲む。

「まあ、あたしのことは忘れてもいいけどね。周りの状況は忘れないようにね」

「え？」

きょんとする奈津美に対し、カオルは顎で軽く隣をしゃくった。  
奈津美はそれにつられて、特に何も考えずに普通にそっちへ向いてしまった。

「……あ」

向いた瞬間に、奈津美は後悔した。

この状況を忘れてた……

奈津美が向いた先には、女子高生達が、それも、旬にアドレス交換を断られた一人が、鋭い視線を奈津美に向けていた。

そして奈津美と目が合うと、さっと目を逸らし、ヒソヒソと何か話し始めた。

きっとそれは、奈津美に対することに違いない。

「気にすることないわよ」

カオルの声で、奈津美は正面に視線を戻す。

「どうせ負け惜しみなんだし。ていうか、旬君、よく言ったわね」  
カオルは面白そうに笑っている。

「あれぐらい言わないと小娘どもは黙らないでしょ」

「カオル……他人事だと思って……」

「何よー？ 奈津美だって旬君にうっとりだったくせに？」

「べっ……別にうっとりなんてしてないわよ！」

そう言い、奈津美は自分のミルクティーをストローで吸った。

「顔赤いわよ？」

カオルは口角を上げてニッと笑った。

奈津美は、それに対しては何も言い返せなかった。

なぜなら、嬉しかったからだ。

旬が、女子高生にはみせなかった笑顔を奈津美には見せたり、女子高生には教えなかった上がりの時間を奈津美には言ったり、奈津美のことを特別扱いしてくれた。それが、奈津美には単純に嬉しかったのだ。

一応、匂は仕事なのだから、抱きついてきたりという行動はあまり感心できたものではないということとは分かっている。それでも簡単に喜んでしまう奈津美は、実は匂よりも単純なのかもしれない。

それにしても……

奈津美は横目で隣を見る。

女子高生達がチラチラとこちらを見ながら話している。話の内容は分からないが、奈津美にとっていいことでないのは分かる雰囲気だった。

その視線を感じると気になってしまい、いつもは美味しいと感じるケーキの味も分からなくなってしまうた。

「そろそろ出る？」

カオルが店の時計を見て言った。

「あ、うん」

奈津美も時間を見て頷いた。

いつの間にか、もう六時を五分ほど過ぎていた。店内を見てみると匂の姿も見当たらない。もう上がったようだ。

奈津美とカオルも伝票を持ち、会計に向かった。

「ごめん、カオル。結局つき合わせたみたいになって……」  
店を出る時に奈津美はカオルに謝った。

「いいわよ、そんなの。もともとあたしが誘ったんだし、別に今日は予定ないし。それに、面白いものも見せてもらったしね」  
そういつてカオルはにんまりと笑った。

「だからカオル……人で勝手に楽しまないでよ」

「奈津美も旬君にいい思いさせてもらったんだからいいじゃない」

「いい思いつて……全然そんなのしてないわよ。むしろ嫌な方が多いし」

奈津美は女子高生達のことを思い出して言う。

「別にもう過ぎたことでしょ。二度と会うことはないんだろうし」

女子高生達は、奈津美達が店を出ようとするよりも大分前に店を出て行った。

それまでにやたらと視線を送られ、奈津美のことを何か言ってる風だったので、その瞬間に奈津美はほっと胸を撫で下ろしたのだ。

「そうだけど……」

だからといって、嫌な気分が晴れるわけでもなかった。

早く旬の顔見たいな……

旬の顔を見たら、嫌な気分もなくなれると思う。だから、奈津美はそう思った。



「あ、旬君」

カオルが少し遠くに視線をやって言った。

「ホント？」

奈津美も素直に反応した。

「それと……なんか余計なものもあるわよ」

カオルは顔をしかめる。

「え……？」

奈津美はカオルが向いている方向に旬を見つけた。

そしてその周りには、先ほどの女子高生達もいた。

「な……何で……」

「大方聞こえてたんでしょ。旬君が奈津美に言ってたこと」

つまり、女子高生達は一旦店を出たが、また頃合を見計らってここに來たらしい。

「ほら、行くわよ」

カオルが先導きって旬の方に向かう。

「えっ……何で……」

「何でって、奈津美が彼女なんだから横入りしてやればいいじゃない

い」

「そうじゃなくて……」

何でカオルがそんなに張り切ってるのよ……

そう思いながらも、奈津美はカオルについて行く。

「いや、だからそういうのは無理なんですって」

近付いていくと、匂がそう言ってるのが聞こえた。

「ええー。もう仕事終わってるんだからいいじゃないですかあ」  
女子高生が言い返してるのも聞こえる。

「さっきも言ったけど、俺、彼女いますんで」

「別にそれでもいいです！ メル友になって下さい！」

やっぱり……

さっき匂が断ったのに、懲りずにまたアドレス交換を迫っている。

「いいじゃないですか、アド交換ぐらい。さっきの彼女って、それぐらいも許せないくらい心狭いんですか？」

一緒にいる一人がそんなことを言い出す。

「そんなわけ……あ」

旬の視線がふと奈津美達の方に向き、旬に存在を気付かれる。

「ナツっ……カオルさんも……」

こんな状況なのに、旬は反射的になのか、いつものように顔を綻ばせている。

そして、女子高生達の視線もこっちに向いた。あからさまに嫌そうな顔をで、特に旬のメールアドレスを聞きたがっている一人の視線は鋭い。

「ナツー」

旬はふらりとその場から奈津美のもとへ行こうとする、

「ちょっと待って下さい！」

その旬を女子高生が呼び止める。

「その人のどこがいいんですか！」

女子高生は奈津美に一瞬キッと視線をやり、旬に強く言った。

「どこがって……全部だけど……」

旬はきょとんとしながらもそう返す。

「何ですか！ その人、明らかに沖田さんよりも年上だし、どうせ沖田さんのこと弄んでるに決まってるんだから！」

女子高生の言ったことは、旬というより、奈津美の方に向けられている。

「……は？」

あまりの言い様に、奈津美は眉をひそめた。

何を勝手にそんな言いがかりをするのだ。わけが分からない。

「あたしなら沖田さんのこと、ちゃんと好きでいられるし！　ねえ、沖田さん。あたしの方がいいですよ？　年上より年下の方が絶対上手くいきますから」

女子高生は一方的に言い、旬の腕に絡みついた。

「え……ちょっと」

旬は慌ててそれを解こうとする。

「困りますって、こういうの……」

「いいじゃないですかあ」

「ダメ！」

予想もしないところから声がした。

旬も、女子高生達も、カオルも目を丸くした。  
いきなり口を開いたのは奈津美だった。

「旬はダメなの！」

奈津美はそう言うと、女子高生に掴まれている旬の腕の反対の方の腕を引いて、旬と女子高生を引き離した。

「言っとくけど」

キッと女子高生を見て奈津美は口を開いた。

「あたしは弄ぶためだけなら、絶対に旬と付き合ったりしないからきっぱりと奈津美は言い放った。

「ていうか、旬にそんな価値ないし！ あたし年下は好みじゃないんだから！」

更に続いた奈津美の言葉に、奈津美以外は目を点にする。

「ナツ……」

旬に至っては、あまりにもはっきりと言われて、泣きそうな表情になっている。

「……それなら何で沖田さんと付き合ってたの？」

「そーよ。意味分かんない」

女子高生は負けじと言い返してくる。

「分からなくても別にいいわよ！ でもね、旬はそんな意味分かんないあたしのことが好きだって言ってるの！ 旬みたいな物好きは、あたしみたいな意味分かんないのとか付き合えないの！ あなたたちみたいな並大抵な人とは付き合えるわけないでしょ！」

ものすごい勢いでまくし立てた奈津美に、女子高生達は啞然としている。

……て、あたし何言ってるのよ！？

はっと我に返った奈津美は、自分の発言が信じられなかった。

何で女子高生相手にこんなムキになってんのよ！？ しかも、自分とは変わり者だって自分で言ったみたいじゃない！

奈津美はあまりの恥ずかしさに下を向いた。

穴があつたら入りたい。

それはこういう状況のことを言うのだろう。

「……そういうことだから」

その声が聞こえたと同時に、奈津美は温かいものに包まれた。

「しゅ……旬？」

奈津美が顔を上げると、そこは旬の腕の中だった。

「俺は、彼女のことしか興味持てないし、好きにはなれないんです。だから、すみません」

そう言って旬は女子高生達に笑顔を向けた。

その表情を見て、女子高生は悔しそうな顔をした。

「……もういい。帰ろ」

「…うん」

女子高生達は、旬と奈津美の方には何も言わず、背中を見せて去っていった。

「じゃ、あたしも帰るわね」

今まで黙って見ていたカオルが口を開いた。

「えっ……」

奈津美は、はっとしてカオルを見た。

「二人ともまたあたしのことを忘れてるし。ていうか、そんなラブラ

ブな二人の邪魔出来ないしね」

そう言ってカオルはニンマリと笑った。

「ラブラブって……ち、ちょっと匂！ 放してよ！」

奈津美は顔を赤くして、思い出したように匂の胸を押して離れようとする。

「えー？ 何でー？」

匂は口を尖らせて放そうとしない。

「何でじゃないでしょ！ こんなところで……」

言い合う奈津美と匂を見て、カオルはクスクスと笑っている。

「じゃあね、二人とも」

「か……カオル……」

「はい。さよならー」

引き止めようとしたのに匂がヒラヒラと手を振ってカオルを見送ってしまった。

「ナーツちゃん」

カオルが見えなくなると、匂が満面の笑みを奈津美に向けた。

「な……何？」

嫌な予感がしつつも平静を装い、奈津美は返事をする。

「さっきのさあ、ナツが言ったこと、嬉しかったなあ」

予想通りの話題に奈津美は焦る。

「さっ……さっきのって何よ？ あたしは何も言っていないわよ！」  
そう言って奈津美は誤魔化そうとする。

言われると思った。だからカオルが帰って匂と二人になるのが嫌だったのだ。

……いや、しかし、カオルがいたらいたで匂と一緒にってからかいそうなのであまり状況は変わらない気もするが。

「さっき言ってくれたじゃん。『匂はあたしのだ』って」

「そっ……そんなこと言っていないでしょー！」

奈津美は再び顔を真っ赤にして言い返した。

「でも似たようなこと言ってただろ？」

「言っていない！」

「照れちゃって〜」

匂はそう言って指で奈津美の頬をつつく。

奈津美はフィツと横を向いてそれをよけた。  
それを見ながら匂は笑う。

「ナツは俺のこと、よく分かってくれてるよなあ」

「どこがよ」

奈津美はそう言ってみられる。



「分かってくれてるじゃん。俺はナツとしか付き合えないとか。ホントその通りだし」

奈津美が匂を見上げると、匂はニコツと笑った。

「帰ろっか」

匂はそう言って奈津美に手を差し出した。

「……うん」

奈津美は頷いて匂の手をとった。

『分かってくれてるじゃん』

匂は分かっている。

あの時、奈津美が言ったことは、匂のことを分かっていると言ったわけではない。

匂がそうであってほしいという、奈津美の願望で、本当は、奈津美の方が、匂に対して思っていることだ。

奈津美の方こそ、匂じゃないと付き合えない。

きっと、匂はそのことに気づいてはいないのだろう。

## 14 女の悩み

そろそろ夏本番となってくる、六月半ば。

今年の六月は、空梅雨らしく、ほとんど雨が降っていない。それでも日本の夏は湿度が高く、地球温暖化も原因なのか、天気予報によるともうすでに気温は七月初めぐらいのものらしい。

「おはよ、奈津美」

朝、会社に出勤した奈津美は、更衣室の手前あたりで声をかけられた。振り向くと、カオルがいた。

「あ、おはよ」

奈津美も挨拶を返す。

「今日も暑いわねー。あたし、今日から夏用の制服持ってきてちゃった。今週は頑張ろうかと思ったけど、耐えられないし」

「あたしも。うちの会社、冷房弱いし、昨日までも辛かったしねー」

「ホント。クールビズだって、うちの会社だけしだって大差ないと思わない?」

「確かにねー」

そんな話をしながら、二人は更衣室に入った。

「思っただけどさあ、これって、クールビズだとか言いながら、男達が女の肌見たいだけじゃない？」

半袖のブラウスに腕を通してながらカオルが口を開く。

「流石にそれはないでしょ。もしホントにそうだったら問題よ？」

第一、別に夏用の制服は強制じゃないんだし」

奈津美はスカートを履き替えながら答える。

「そうだけどさ。それでも課長とか、少しでも冷房の温度下げようとしたら怒るでしょ。昨日とか、何も知らないみちるちゃんがちよっと冷房調節しただけで『そんなに暑いんなら長袖なんが着るな』って。言い換えれば半袖着て来いってことでしょ？ セクハラすれすれじゃない」

「ああ、そういうえ言ってたわね。でも、課長がそんなこと言うのって今に始まったことじゃないでしょ」

奈津美はスカートのファスナー手をかけ、上げようとする。しかし久しぶりに履くせいなのか、ファスナーが引っかかっているようにスムーズに動かない。

「奈津美が一番被害受けてるんじゃない。ムカつかないの？」

「もう慣れたわよ。ていうか、いちいち真に受けるから課長は調子乗るのよ」

カオルと会話をしながら奈津美はファスナーと格闘する。

と、やっと何か引っかかっていたものが取れて上がった。

「あんなの、適当に受け流しとけば別に気にならない……」

奈津美の動きが途中で止まった。手がファスナーにかかっている、その姿で……

「奈津美？ 何、どうしたの？」

カオルが不思議そうな顔をして奈津美を見る。

奈津美は、急激に冷や汗をかくのを感じた。

「ヤバイ……ファスナー上がんない」

深刻な表情で奈津美は言った。

スカートのファスナーがなかなか上がらないのは、久しぶりに履くから糸か何かが絡んでしまったからだろうと思ったら、それだけでもなかったようだった。

上がったと思ったファスナーは、半分ぐらいまでで止まって、上がらない。上げようとしたら、ウエストがきつく締め付けられてしまう。

「は？」

カオルはポカンと口を開けている。

「……太ったの？」

「え……でも、去年はちゃんと履けたし……」

「だから、去年と比べて太ったんじゃないの？」

あまりのショックに無意味なこと言い返す奈津美に、カオルは冷静に諭すように言う。

「ふ……太ったかな？」

奈津美は確認するようにカオルに聞いた。

「どうだろ……毎日顔合わせてるからあんまり分かんないけど……」  
カオルは奈津美のことを上から下まで見る。

「あー、でも、去年とかに比べたら太ったかもねえ。顔とか、丸くなった感じ」

「え!？」

カオルに言われ、奈津美は両手で頬を挟んだ。

嘘……ホントに太った!？

上がらないスカートのファスナーに、丸くなったという顔……太ったというのには、十分な状態だ。

「でも奈津美、今まで履いてたスカートは別に履けてたんでしょ？」  
カオルが確認するように聞いてくる。

「あたし、冬用のスカートはワンサイズ上にしてるから……」

冬は、防寒対策にインナーを着込む奈津美は、そのためにサイズを大きめになっている。夏用はジャストサイズだ。

そういえば、昨日までのように温かくなってきたから冬スカートを履いている時は、冬のようにあまり着込んではいないはずだ。しかしウエストにあまり余裕がなかった気がする。今までは、履けないほどではなかったので気付いていなかった。

だが、今のこの状態は、気付いていないなんて言ってもらえない。  
去年は普通に履けたスカートが履けなくなってしまったということは、  
去年よりも太ったということだ。

奈津美には認められない、いや、認めたくない事実だった。

「別に大丈夫よ、奈津美。全然気にするほどでもないから。ていう  
か、奈津美って胸のわりには細いんだからもう少し太ったぐらいが  
丁度いいわよ」

カオルが落ち込む奈津美に対してフォローする。

実際そうなのだ。奈津美は、去年より太ったとはいえ、目に見え  
て分かるというほどではないし、世間一般でいったら十分痩せてい  
る方なのだ。だから、特に問題にするほどのことはない。

「でも……」

「気にしないの。とりあえず暫くは冬用のスカートで耐えるしかな  
いし。でも別に同じ色なんだし問題ないでしょ」

「……うん」

カオルに言われて、奈津美は頷くしかなかった。

奈津美のその日の夕食はかなり質素なものだった。

白米にネギとワカメの味噌汁、そして野菜サラダ。

いつも家で一人で食べる時も質素だが、それでももう一品、炒め物や煮物を作っている。

別に今日は手を抜いているわけではない。カロリーやら脂質やらをできるだけ少なくしようと考えての献立なのだ。

カオルには気にするなと言われたが、気にするなと言われて、太ったことが気にならない女なんているだろうか。

と言っても、奈津美だって普段は特に気にしない。太りたいとは勿論思わないが、特別痩せたいとも思わない。

現状維持が目標で、食事なども栄養バランスを考えて摂っていたつもりだ。

……そう言えば……何で太ったんだろ。

今更になって奈津美はふと疑問に思う。

ここ暫く、生活に目立った変化はない。生活リズムはちゃんと整えているし、食事だってちゃんとしているから便秘だとかいうこともない。

至って健康的で、特に問題もないはずだ。

それなのに何で……

『――それにしても○○さん、お綺麗ですよねえ』

つけていたテレビの音声が入る。

トークバラエティーで関西芸人の司会者と数人のゲストで盛り上げていく番組だ。

そしてその時にテレビに映ったのは、人気女優だった。

『いえ、そんなことはないですよ』

女優は司会者の賛辞を謙虚に否定する。

『いやいや、綺麗ですって。それにお若いし……失礼ですけど、今、おいくつなんですか？』

『三十六です』

『ええー！？ 三十六う？』

司会者のオーバーリアクションと共に、番組の観客からも驚いたリアクションの声がする。

へえ……この人そんなになるんだ。

奈津美もそう思いながら見ていた。

『えー。まだ二十代やと思ってましたー。ていうか、二十代で通用しますでしょ？』

『いえ、そんな、流石に二十代は……』

『そんなことないですてー。でも何か特別なこととしてはるんですか？  
めちゃくちゃスタイルもいいですし』

『特別にってほどのことではないですけど……でも体型とかは気に



していますよ。ストレッチとか体操したり』

『へえー。やっぱりそういうのしてるんですねー』

『やっぱり年を負う毎に太りやすくなってるんですよ。前にかなり太ったことあって』

『えー。太ったって言うてもそんな変わらないでしょ？』

『ホントに太ってたんですよ。二十四、五ぐらいの時だったんですけど、体重がいきなり五、六キロ増えたんです』

『そんなに！？』

『はい。お腹とかもすっごい出てて、服のサイズが合わなくて衣装さんに怒られたりしたんです』

この話題に奈津美は反応する。

この女優が言っていることが、今の奈津美の状況に似ている。

『私、それまでって特に運動とかしてなくて、若いうちはそれでも太りにくい体質だったんですよ。でも、何か二十代半ばになっていきなり衰えてきたみたいで』

『衰えたって言うても……二十代じゃ全然大丈夫なんじゃないんですか？』

『そんなことないのよ』

他のゲストの女性が口を挟んだ。彼女は個性派の大御所タレントで、人生経験が豊富な年齢だ。

『女ってのはね、二十代前半までが花なの。何もしないで綺麗でいられるのはそれまでなのよ。あとは自分で何とかしないと衰える一方よ』

そう説得力のある口調で言う。

二十代前半まで……

奈津美は、今年で二十四。それで言うと、もう女としての折り返し地点間際ということだ。

『ほおー……ちなみに○○さんはどういうことに気を使ってるんですか？』

『そうですねー……』

テレビのその話題に、奈津美は食いついた。

『私、もともとかなり甘党でケーキとか大好きでかなり食べてたんですよ。だから食べたくても我慢して……それだけでもかなり変わりましたね』

……甘い物……ケーキ。

このワードで、奈津美には無意識に浮かぶものがあつた。

それは、超甘党の旬の顔。もう奈津美にとって、切っても切り離せないものになっていた。

もしかして……そのせいで太った？

今更になって奈津美は気付いた。

そういえばそうだ。奈津美は旬と付き合い始めてから、頻繁に何か甘いものを食べるようになった。ケーキバイキングにだって、月1ペースで行く。それまでは、大して食べなかったのに……

その生活が当たり前のようになっていたせいで分からなかったが、太ってもしようがない生活をしていたわけだ。

てことは……このままだったらもっとヤバいつてこと？

奈津美は脱衣場で自分の裸体を見下ろした。

おもむろに脇腹の肉を掴んでみる。

……こんなに掴めたっけ？

今までもある程度は掴めるほどだったが、現状は、奈津美の中の許容範囲を超えていた。

奈津美は、更に鏡の前に立ち、横を向いた。

こんなに出てたっけ？

いつも意識して見ていないので、今までがどうだったか分からない。それでも腹部が、特に下っ腹の方がポッコリと出てしまってい

る気がする。

あれ？ お尻の方も……

今度は後ろを向き、首から上を鏡に向けて、後ろ姿を試みる。

やだ……たるんでる？

奈津美は自分で撫でるように触ってみる。

ここも前はどうか分らないが、そんな気がしてならない。

あ、そうだ。体重……

奈津美はふと思い出して、最近使っていなかった体重計を引っ張り出し、デジタル式のその電源を入れ、上に乗った。

……二十……三十……

表示の数字がどんどん上がっていくのを、奈津美はドキドキしながら見つめる。

確か、前に測ったのは、半年ほど前だった。

四十一……四十二……四十三……

ジワジワと数字が増えていき、ピタリと止まった。

え……？

表示された数字を見て、奈津美は目を丸くした。

嘘っ……四キロも太ってる!?

半年で四キロ。

増えているのは大体予想出来ていたのだが、実際に数値にしてみると、太ったということがよりリアルになってしまった。

測るんじゃないかった……

今更になって奈津美は後悔した。

(自分で何とかしないと衰える一方よ)

さっきテレビで言っていたことが頭によぎる。

流石にこれはヤバいわよ、あたし! 本気でなんとかしなきゃ……!  
…!

そうして、奈津美はダイエットを決意した。

その翌日の夜。

フライパンの上では、ジュウーっと食欲をそそる音がする。

今夜はハンバーグだ。

なぜ、ダイエットを決めた翌日から、いきなりハンバーグなのか。それは、今日は旬が泊まりに来ていて、その旬がハンバーグを食べたいとリクエストしていたからだ。

……もしかして、これも原因なのかも。

フライ返しでハンバーグを裏返しながら、奈津美は思った。

食事のメニューを考えるのが面倒くさくて旬に聞くと、大概返ってくる答えは肉系や油系の、高カロリーなものだ。

食べ盛りの旬だから、こってりしたもののでもがつつりと食べたいようなのだ。

そして、それと同じメニューを奈津美も食べている。これも大体週に一回ぐらいのペースだ。

これからはちゃんと考えて作ろう。旬にもあんまりよくないだろうし。

奈津美は密かにそう決めた。

「旬ー。出来たよ」

奈津美はトレイに出来た料理を乗せてローテーブルに持って行く。

寝転がってテレビを見ていた旬はすぐに反応して起き上がった。

奈津美は、旬の前に旬の分の皿を置く。

「おおっ！ すっげー！ 目玉焼き乗ってるー。俺、これ好き！」  
旬は満面の笑みで、嬉しそうに言った。

「しかも黄身、いい感じの半熟だし。やっぱハンバーグにはこれだよなー」

そうやっていいながら、旬は目玉焼きの黄身を指でつつく。

「旬。行儀悪いでしょ」

「へへっ」

まるで母親のように注意する奈津美に対し、旬は子供のように笑って手を引っ込める。

ハンバーグを見てはニコニコと笑って、本当に嬉しそうだ。

それを見て奈津美も嬉しくなる。旬が喜んでくれたなら、こちらも作った甲斐があったというものだ。

奈津美は微笑みながら、自分のハンバーグを置き、食卓の準備をしていく。

「あれ？」

旬は奈津美の皿を見て不思議そうに声をあげた。

「ナツ、俺のとは違うの？」

旬は首を傾げて奈津美に尋ねた。

奈津美はそう言われることを予想していながらも、ドキツとする。

今夜のハンバーグは、旬の方には目玉焼きを乗せ、デミグラスソースをかけている。前に目玉焼きが乗ってるのが好きだと言っていたことがあったのでそうした。

しかし奈津美の方は、そうじゃなく、目玉焼きなしでデミグラスソースではなく、おろしポン酢をかけてある。

「うん……ちょっと、胃の具合が悪いから……さっぱり系にしたの」  
奈津美はぎこちなく笑顔を作って言い訳した。

もちろん、それは全くの嘘である。

本当は、ほんの少しでもカロリーを少なくするためだ。何気にハンバーグの大きさも、旬の分より一回り小さくしたりしている。

そのことを言わないのは、旬にはダイエット中だということは内緒だからだ。

奈津美に対して何も言わないということは、おそらく、旬は奈津美が太ったということに気づいていない。

気づかれる前になんとか痩せないといけない。だから今も言わないのだ。

「えっ……マジで？　大丈夫？」

旬は奈津美が言った嘘を信じて、心配そうに言う。

「でもそれだったらハンバーグじゃなくてもよかったのに……」

「ううん。もうお肉買っちゃって……それが今日までだったから」



「そっか……ごめんな。俺がハンバーグ食いたって言ったから……」

旬は申し訳なさそうに謝った。

奈津美の胸がちくりと痛んだ。

奈津美の言ったことを信じて、旬に心配をかけてしまった。そして、旬は悪くないのに謝らせてしまった。

ただでさえ、旬に嘘をつくのは心苦しいというのに、旬が素直だからそれも尚更だ。

「ううん。本当に大丈夫だから。それに旬に食べて欲しくて作ったんだから、食べて？　ね？」

奈津美は笑顔を作って言った。

これは本当だ。旬が喜ぶだろうと思ったから、ハンバーグにしたのだし、わざわざ手間をかけてまで目玉焼きを乗せたのだ。これは本当に純粋な気持ちだ。

「うん……いただきます」

奈津美の気持ちは伝わったのか、旬は顔を綻ばせて箸を取った。

「いただきます」

奈津美もほっとしながら手を合わせ、食べ始めた。

「んまい！　ナツ、すっげー美味しいよ！」

旬はハンバーグを絶賛しながら、箸を進める。

「本当？ よかった」

単純に嬉しくて奈津美は笑顔になる。

「今度また作って。あ、でも、ナツの調子が悪くない時な」

「うん……」

笑顔を崩さないように心掛けながら奈津美は頷いた。

本当、次までには痩せないと。

旬に気づかれないように、奈津美は決めていた。

しかし、それがちょっとした波乱を巻き起こしたのは、それから二時間ほどあった。

奈津美と旬は、風呂も済ませ、いよいよ寝ようとしていた。

「電気消すね」

「うん」

奈津美が部屋の電気を消し、部屋はオレンジ色の薄暗い電灯のみになる。

そして、旬が既に入っているベッドに向かうと、旬は夏用の掛け布団を半分あげ、奈津美の受け入れ体勢をつくっていた。

「ナツ。おいで」

ベッドをポンポンと叩き、にんまりと笑う。

まるで旬のベッドのようにそこに居るが、そこは自分のベッドなのに、と奈津美はいつも思う。

そしてそう思いながらも、いつものように奈津美は旬の隣に横になる。

「ナツ」

旬は奈津美の額に唇をつけた。

そこからはいつもの流れだから、もう慣れている。そのままスムーズに旬が奈津美を跨いで覆い被さる。

奈津美の額から頬、そして唇に旬の唇が降りてきた。

唇には、何度も角度を変えて、次第に舌が割って入ってくる。

じつくりとした口づけに奈津美も応えた。

奈津美は、口づけを交わしながら、旬の二の腕の辺りに触れた。

そこは、今、奈津美の体の横に肘をついている状態のため、力が入って固くなっていた。

旬はバイトで、特に居酒屋の方では力仕事が多いから、鍛えられてるんだと言っていた。だから、腕の辺りは結構がっちりしている。

奈津美は、旬の腕から肩、そして胴回りに手を滑らせていく。

そして触れてみて改めて思ったが、旬には余計な肉はついていない。腹の辺りも撫でてみると、Tシャツごしにうっすらと腹筋が割れているのも感触でわかった。

旬は、所謂『ガリマッチョ』な体型だ。

何であんなに食べて太らないのよ。

奈津美はそんな風に思いながら旬の腹を撫でていた。

旬の食生活は、はっきり言ってめっちゃくちゃだ。

普段、奈津美がいなくてころではコンビニ弁当やカップ麺で済ませていたようだし、食後にプリンやアイスなどのデザートもよく食べている。

ケーキバイキングでは奈津美の倍以上平らげるし、普段の食事量だってそうだ。

今日だって、ハンバーグなど、奈津美が出したおかずはきれいに食べた上、ご飯は三杯、味噌汁は二杯、おかわりをして食べた。

その形跡は、今の旬の体を見ると残っていない。一体どこに消えたというのか。

「……なんか今日のナツ、エロいな……。いつもはそんな風に触れないのに」

唇を離れた旬が、奈津美を見下ろして言った。

「え……あっ」

奈津美は我に返って、慌てて旬の体から手を離れた。

恥ずかしい。全く違うことを考えていたとはいえ、いつもと違う、物凄く大胆なことをしていたような気がする。

「止めないでいいのに……」

旬はそう言ってニヤリと笑った。

そして、続きを始める。

奈津美の首筋に唇をつけ、手がパジャマ越しに胸を触る。その膨らみを確かめると、指がボタンにかかり、外そうとする。

……ヤバイ！

奈津美はとっさに思った。今更になって気づいたのだ。

このまま、旬に裸を見られたら、直に触れられてしまったら……  
太っているということがバレてしまうかもしれない。

「だっ…ダメッ」

奈津美は両手を胸の前でクロスさせ、旬の手を止めた。

「え……？」

いきなりの奈津美の動きに旬はきょとんとした目で奈津美を見下ろしている。

「あの……旬。今日は……止めない？」

奈津美はおずおずと旬に尋ねる。

止めると言うのは、勿論、これからされるであろう恋人同士の交

わりを、だ。

「えっ……何で？」

旬は目を丸くして聞き返した。

旬がそう言うのは無理もない。ここまできて、突然そんなことを言われても、素直に頷くことなんてできるわけないのだ。

「えっと……その……」

奈津美は、言葉を詰まらせた。

この場を切り抜けられる言い訳なんてなかった。

「今日は……ちょっと……ダメなの」

何か言わないといけないと必死に考えながら、奈津美は曖昧に言った。

「何で？ 今日は大丈夫なんじゃないの？」

旬が更に聞いてくる。

確かに、大丈夫だ。旬はそれを分かっている。

先週も、旬が奈津美の部屋に泊まりに来て、その時は、奈津美の月のものの都合でできなかったのだ。

だから、旬に今日もそれを言い訳にできないとは言えないのだ。

「えっと……その、あのね……やっぱり、体の具合がよくなって……」

必死に考えて、出た言い訳がこれだった。

食事の時に胃の具合がよくないとは言ったが、これで旬は納得するだろうか。

「……一回も無理？」

旬が、じっと奈津美の目を見て言う。

そうやって見られると、胸が痛んでしまう。本当のことを見透かされてしまいそうだから目を逸らしてしまいたい。  
しかし、そうする方が怪しいのでじっと視線は外さない。

「……うん。ちょっと……」

奈津美は、小さな声でそう答えた。

旬は何も言わずに口を尖らせた。

「……ごめんね？」

「いいよ。ナツができないんなら」  
少し拗ねたような声の調子だったが、旬はごろんと奈津美の隣に横になった。

「ごめん……」

奈津美はもう一度謝った。それ以外の言葉が思いつかない。

「いいって、ナツ。ナツの為だから我慢できるよ」  
旬は優しい声でそう言って、その声以上に優しく奈津美の頭を撫でて抱き寄せる。

胸の痛みが更に強くなる。

ごめんね、匂……これも匂の為だから。

そう奈津美は心の中で呟いた。

「じゃ、おやすみ」

匂の腕が動き奈津美の体に巻きついてくる。

そしてその手はそのまま奈津美のパジャマの裾から入ってこようとする。

「やっ……」

奈津美はとっさに匂の手首を掴んだ。

「ナツ？」

手を掴まれ、匂は不思議そうな顔をする。

当たり前だ。いつも、何もせずに寝る時は匂は奈津美のパジャマの中に手を入れて素肌に触れながら眠る。奈津美も、別にそれは嫌ではないから、そのまま眠る。

しかし、今日はそういうわけにはいかない。

匂に触られたら、バレてしまうかもしれない。

「ナツ？ 何したの？ 何か今日、変じゃない？」

流石に匂に気付かれてしまった。

「な……何でもないよ？」

奈津美は必死に隠そうとする。



「ホントに？」

「うん」

「……ならいいけど」

そう言って、旬は止められた手を動かす。

あ……

旬の手が、奈津美の脇腹に触れた。

「さ……触らないで！」

奈津美は大きな声を上げて体を起こした。

「え……」

旬は驚いてポカンと口を開けている。

「あっ……」

思わず出てしまった言葉に、奈津美は焦った。

よりにもよって、こんな、体中で拒絶するような言い方をしてしまった。

旬の表情が、目に見えて悲しそうに歪んでいく。

「ち……違うの！ 今のは……えっと……」

必死に言葉を探すが、焦るせいで尚更言葉が出てこない。

「ごめん……ナツ、嫌だったんだよな」

沈んだ声で言い、旬は奈津美に背中を向けた。

「何もしないから。ごめんな」  
背中を向けたまま旬は言い、それを最後に、旬は何も言わなかった。

奈津美は、もうその場で旬に言うことが思い浮かばず、そのまま旬の隣に横になって目を瞑った。

## 15 疑心暗鬼

おかしい……

旬は悶々と悩んでいた。

土曜日の今日、旬は午前中からカフェのバイトだった。開店からのシフトだが、正確には開店前の店内の準備がある。

店長をはじめとする厨房担当はケーキの品出しとチェックをし、旬のようなホール担当は客席や店前の掃除をする。

「沖田君。そろそろ椅子下ろしていこ」  
同じシフトの美奈子がモップをかけていた旬に声をかける。

「あ、うん」  
旬は返事をして、モップを壁に立てかける。

そして旬が椅子を下ろし美奈子がテーブルと椅子を拭いていく。その作業を黙々とこなしていった。

「……なあ、なるちゃん」  
旬は椅子を下ろしながら美奈子に話しかけた。

「何？」  
美奈子も手を動かしながら返事をする。

「変なこと聞くけどさ……」

「うん？」

「……なるちゃんて、彼氏とのH拒否したことある？」

「……は？」

美奈子は手を止めて顔を上げた。目を丸くして、匂に言われたことに驚いている。

「本っ当ごめん！ 女の子にこんなこと言うのすごくデリカシーないって分かってるんだけど……」

匂は両手を合わせ、深く頭を下げた。

「え……ていうか、何？ 何でいきなり？」

美奈子は匂が言ったことに対して、恥ずかしさより驚きの方が勝つたらしい。

「それは……その……」

「あ、もしかして彼女さんに拒否られたの？」

匂が答える前に美奈子が言い当てた。

匂は返事の代わりに肩を落とす。

「俺、何かしたかな……」

匂はそう言って頭を抱えた。

昨夜の奈津美の『触らないで』という発言から、匂はずっと悩ん

でいた。

奈津美に背中を向けて目を瞑って、奈津美から何か言葉はないか待ってみたが、そのまま何も言わずに、ただ隣に横になった気配だけは感じ取った。

奈津美に背中を向けたのは初めてで、奈津美に触れずに寝るのも初めてで、旬は落ち着かずになかなか寝入ることができなかった。

そして今朝、浅い眠りから一人で旬は目覚めた。

隣は既に空で、台所から、何か音がする。それはいつもと一緒だった。

旬は体を起こし、ベッドから降りて台所に向かった。

台所では、奈津美がコンロに向かって朝食を作っていた。

「ナツ……」

旬は小さな声で奈津美を呼んだ。

奈津美はすぐに振り返る。

「あ……旬。おはよ」

奈津美はニコツと笑顔を向けて旬に言う。

「うん……おはよ」

笑顔を向ける奈津美に対し、やや戸惑い気味に旬も返す。

「朝ご飯ね、ホットケーキにしようと思ったんだけど……いいよね

「？」

奈津美の後ろを見てみると、フライパンの上にホットケーキの種が丸くしかれていた。

「うん」

ホットケーキという響きは単純に嬉しくて、旬は自然と笑顔になって頷いた。

「じゃあ焼いてるからその間に着替えてきてね」

「うん！」

旬は機嫌をよくして奈津美に言われた通りに着替えようと台所から出て行こうとした。……が、ふとその足を止めて奈津美を振り返った。

「ナツ」

奈津美はコンロの方を向いてホットケーキを裏返そうとしている。

「何？」

作業の途中なので奈津美は旬の方を向かずに返事をした。

ホットケーキはフライ返しでくるりと綺麗に裏返された。その面にはきつね色で丁度いい具合の焼き色がついていた。

そんな様子を視界に入れながら、旬は口を開く。

「朝のチューしょ」

奈津美は目を丸くして匂の方を見た。

「……ダメ？」

昨夜のように断られたら……そんな不安と、今朝はいつも通りにしているから、大丈夫じゃないかという期待とが混ざり合い、複雑な心境だった。

匂は奈津美の表情を伺う。

奈津美は、目を丸く見開いている。

「何言ってるのよっ」

ほんの少し頬を赤くして、昨夜のような拒否ではなく、いつものような照れの反応を見せた。

「いい？」

「いい……けど……」

奈津美はそう言って視線を下にやった。

これは、奈津美のいつも通りだった。

いつもの奈津美を見て、匂は安心して奈津美に近寄った。

奈津美は匂を見上げるように顔を上げ、匂は奈津美の高さに合わせてかがむ。

そして二人の唇が重なった。

いつも通りに、何度も角度を変えてみると、奈津美もそれに応えてくる。

そこで旬はそつと舌を入れてみると、それにも、奈津美は応えてきた。

何だ。大丈夫じゃん。

そう気を大きくした旬は奈津美のことを抱き寄せようとした。

……が。

旬が奈津美の方に伸ばした腕は、がっちりとな津美に掴まれ、奈津美に触れようとすると押し返される。

それに負けじと旬は力を入れると、今度は奈津美が、重なっている唇を更に押し付けるようにし、さり気なく奈津美の体から旬を遠ざけていた。

そしていつもより二人の隙間が開いたところで、奈津美の方から唇を離した。

「……ほら。もう、すぐに着替えて。旬、バイトだから急がないとダメなんですよ?」

奈津美は、何でもなかったかのように旬を促した。

「……うん」

旬はやはり少ししっくりこなかったが、そのまま言われた通りにした。

その後も、朝食を済ませて準備をして、旬がバイトに向かうのを



奈津美は笑顔で送り出してくれた。

そう。今朝は普通だった。

いや、普通といってもやはりどこかで拒否されているような感じもある。

……俺、マジで何かしたっけ。

旬は真剣に悩んだ。

「おい、二人急げよ。もうすぐ開店時間になるだろ」  
旬と美奈子にそう声をかけてきたのは、大川だった。

大川は店先の掃除を済ませたところのようだ。

「あ、はい」

美奈子は返事をして手を動かし始める。

「沖田も急げよ」

大川も手伝い、椅子を下ろしながら言った。

「はい……」

旬は消沈したまま返事をして椅子を下ろしていく。

「何だよ、沖田。辛気臭い……って、何となく理由は分かるけど」  
大川は旬の様子を見て小さなため息をつく。

「沖田君、彼女にH拒否られちゃったらしいんです」

「やっぱり彼女絡みか。……つうかお前ら、朝から何の話してんだよ」

さらりと言う美奈子に大川は呆れたように言う。

「俺にとっては一大事なんですよ!」  
旬はムキになって言い返す。

「別に、一回拒否られただけだろ? 気分じゃなかったとかじゃねえのかよ」

大して相手にせずに、大川は椅子を下ろしていく。

「多分そうだよ。そういう時あるもん。だから気にしちゃダメだつて」

美奈子は励ますように言いながら、テーブルと椅子を拭いていく。

「……でも、今まで本当に一度も拒否られたことないのに」

旬は、まだグチグチ言いながら、それでもちゃんと椅子は下ろしていく。

「今までがそうだからって、これからも絶対にそうだとは限らないだろ」

「そんな……だとしたら一体何がナツを……彼女をそうさせたっていうんですか!」

旬はまるで大川がその元凶のように強く言った。

「俺が知るか!」

勿論、何の関係もない大川は、牙を剥くような勢いで言い返した。  
「つうか、そんな風に思うんだったら原因はお前にあるんじゃないのかよ」

「ないですよ、そんな……」  
旬の動きがピタリと止まる。

「まさか……」  
旬の表情に焦りが始まる。

「何だよ。やっぱりあるんじゃないか」

「いや、でももしそうならバレたってことだし……」  
旬は独り言のようにぶつぶつと呟く。

「バレたって、浮気か？」

「違いますよ！ 何で浮気しないといけないんですか！」

「じゃあ何がバレたの？」

美奈子が聞くと、旬は深刻な表情になる。

「……あの……でかいサイズのアイスあるじゃん。これぐらいの大きさを」

そう言って、旬は両手で円を作り、大きさを表す。

旬が言ってるのは、お徳用とか、ファミリーサイズとか、一人用ではない大きさを売られているアイスのことだ。

「それが彼女の家にあって……ていうか、一緒に食べよーって、よく買ってきてくれるんですけど……」

突然、アイスの話をし始める旬を、大川と美奈子は、理解できないような表情で見る。

「俺……それを内緒で食べちゃったんです……」

旬はまるでこの世の終わりのような絶望的な顔でそう続けた。

「……は？」

少し間を置いて、大川は顔をしかめた。

その隣で美奈子もポカンと口を開けていた。

「でも、バレたら嫌だから大した量じゃないけど……それでもやっぱり……」

二人のリアクションは関係なく、旬は不安そうに言う。

「……いや、ないだろ」

呆れきった視線を旬に向けて大川が言った。

「うん……」

流石に美奈子も大川に同意して頷く。

「食べ物への恨みは怖いんですよ!？」

旬は至って真剣に二人に訴える。

「いや、そうかもしれないけど……そうだとでも気付いた時点で言うだろ」

「そうだよ。それに、アイスくらいで怒るって、よっぽどの子供だ

よ？」

大川と美奈子が否定的に意見する。

「そうかなあ。……あっ！」

旬が突然何かを思い出したかのように声を出す。

「まさか……あれか？」

「何だよ？」

「アイスのことじゃないとしたら……」

「何か他に心当たりあるの？」

美奈子が聞くと、旬は黙って頷いた。

「前に……彼女の部屋に行った時に……小腹がすいて……彼女がちよっとトイレに行ってる時に冷蔵庫の中見てたんです。そしたら開いてないハムがあって……」

そこから先は、何となく想像できた。大川と美奈子は、何とも言えない表情になる。

「俺……それ全部食べちゃったんです……」

予想通りの話のオチに、大川は深くため息をついた。

「お前……俺らが言ったこと聞いてねえのかよ。また食いもんがらみじゃ一緒だろ」

そう言った大川の表情は、もううんざりしているともとれる。

「一緒じゃないですよ！ その時は、彼女がハムないのに気付いて、聞かれたんです！ 『ハム食べた？』 って。……それで俺、食べてないって答えちゃって……」

「何で嘘言うんだよ？」

「いや、だって……一枚ぐらいならともかく、全部食べちゃったし……しかも勝手に開けちゃったし……」

旬は語尾を小さくしながらバツが悪そうに言う。

「そんなら食うなよ」

「だって……ハム、好きだからつい……」

「小学生のつまみ食いか……」

「でも沖田君。やっぱりそれはないと思うよ？ さっきも言ったけど、沖田君が食べたって気づいたんなら言うでしょ？ もし怒ってるにしても」

美奈子は必死に旬を納得させようとする。

「……じゃあ、食べ物絡みじゃないってこと？」

旬は腕を組み考える。

「うん。彼女さんが何も言ってこないなら、多分」

「んー……じゃあ、ないかなあ」

その言葉を聞いて、大川と美奈子は、じゃあ食べ物絡みではあるのか、と思ったが、ややこしくなるのが面倒だったので、もう言わなかった。

「……あ」

旬は再び何かを思い出したかのような表情になる。

「……食べ物絡みじゃないとしたら……」

「何かあんのか？」

「は……いや、でもバレようないし。ていうか、別に大丈夫なことか？」

頷きかけて旬は首を傾げる。

「何？　どんなこと？」

「うん……歯ブラシなんだけどさ……なるちゃんは、彼氏と一緒に歯ブラシ使えるよね？」

旬は真面目な顔で美奈子に聞き返した。

「えっ……」

美奈子は突然で固まった。

「なんだそりゃ」

大川も突然わけが分からず眉間に皺を寄せる。

「俺……俺の家にある彼女の歯ブラシ、使ったことあって……」

「え……」

大川と美奈子が同時に眉を寄せ、少し引いた目で匂を見る。

「あ、勿論わざとじゃないですよ！ 朝寝ぼけてて……それで気付かなくて……」

二人に対して匂は必死に弁明する。

「いや、気付けよ」

「全然気付かなかったわけじゃないです。歯磨き粉つけて銜えようとした時に気付いて……まあいつかって思ってた……」

匂の声が小さくなる。

「思うな……つうか、今更悩むぐらいなら使うなよ」

「俺は別に使おうが使われようが気にならないんですよ。だから別にいっか、って、その時は思ってた……」

「彼女さんにも因るよね。彼女さんもそういうの気にしない人だったら問題ないだろうけど……」

美奈子は女側からの意見を述べる。

「ちなみになるちゃんは？」

匂は参考までに尋ねた。

「えっ……」

美奈子は顔が引きつった。

聞く前に、どういう答えか分かった。

「で……でもさ！ ベロチューできるなら、平気じゃない？」  
匂は焦ったようにそう主張する。



「……うーん……あたしは、ちょっとね……」

美奈子はそんな旬に対して気を遣ってか、やんわりと反対する。

「そりゃそうだな。俺だって、いくら彼女でもあんまり使おうって気にはなれねえし」

大川が美奈子の代わりのように自分の意見を述べる。

旬は、何となく予想はしてたものの、はっきりと言われて肩を落とした。

旬の意見としては、彼女の歯ブラシを使おうが、その逆に使われようが、全く関係ないのだが、やはり一般的なことではないようだ。

「……でも、世の中には普通に歯ブラシ共有できる人だっているんだし。彼女さんが気にしないなら大丈夫だし。それに一回ぐらいなら……」

美奈子はフォローするように意見を付け足す。

「や……一回じゃなくて……もう既に何回か……」

旬がぼそぼそと言うと、その場の空気が凍る。

「お前……最悪だな」

大川は気遣うこともなく、はっきりと言う。

「だって……一回使うと、使いやすい場所にきちやうんですよ！何気なく取ったら彼女のやつで……」

「だからって使うなっつうの」

「だ……大丈夫だよ。彼女さんも平気なら、それで問題ないだろうし」

「鳴海。んな無理矢理フォローすんなよ」

引き気味ながらも旬を弁護しようとする美奈子に、大川は言った。

「つうか、話の要点ずれてるだろ」

「あ……」

大川に言われ、旬はそのことに気付く。

初めは、奈津美が何故旬との営みを拒否したのか、その原因について話していたはずだ。しかし、話すうちにどんどん逸れてしまっていた。

「で、原因はそれなのか？」

大川が話すことにうんざりしたような言い方で言う。

「俺が彼女に何かしたかっていうと、それぐらいしか……」

旬は、はつきり言って、大雑把で、細かいことは気にしない。それは旬自身も自覚している。恐らく、そんな性格もあって、歯ブラシのことも気にならないのだろう。

しかし、奈津美はその逆で、几帳面で細かいことが気になるような性格だ。

それを考えると、今更ながら、奈津美もダメなのではないかと思う。なぜバレてしまったか、それは定かではないが……

でも、キスが平気なら、歯ブラシだって平気なんじゃないのか……

そう思った時、ふと旬の頭に引っかかる。

昨夜、奈津美はキスまでは普通にいつも通りにしていた。今朝だってそうだ。

それなのに、昨夜、奈津美に触れようとしたら『触らないで』と言われ、今朝も、奈津美を抱き寄せようとしたら、さり気なく突き放された。

何でキスはできて、抱きしめたり、触れることはダメなのか。今更になって、旬は不思議に思った。

「つうか、沖田。お前、それが問題なんじゃねえのかよ」  
大川に言われ、旬は、はっと我に返る。

「えっ？」  
意味が分からず尋ね返すした。

「内容はともかく、そうやって何かしたんじゃないかって心当たりが何個も出てくるとだよ。その時点でお前に問題あるってことだろうが」

「えっ……」  
旬は言葉に詰まってしまった。

言われてしまうと、確かにそうだ。

奈津美が旬に対して何か思っているのには間違いない。

そして、旬にはその原因の心当たりがある。むしろ、ありすぎる。

これは明らかに旬に原因があるとしたか思えない状態だ。

「別れ話切り出されるのも時間の問題かもな」

どんどん悪い方に考えてしまう旬に、大川がトドメの一言を口にする。

「そんなあ……」

旬は大川の言ったことを真に受けてショックを受ける。

もし冗談でも、笑えない。本当のような気さえするのだ。

旬は、ちゃんと否定できない自分が情けなかった。

「……沖田君。そんなに気になるんなら彼女さんに聞いてみなよ。ね？」

美奈子は旬にそう言って慰める。

「うん……」

旬は、力無く頷いた。

## 16 悶々

「かあっわいそー」

電話の向こうのカオルが言った。

これは『可哀想』というのを、力を込めて言ったのだ。

「そんな理由で『触らないで』はないでしょ。絶対、旬君、シヨツク受けてるって。かわいそうに」

カオルはまた力を込めて、可哀想、と言った。

奈津美はぐうの音も出ない。確かに、悪いことをしたという自覚はあるのだ。

昨夜、勢いとはいえ、旬を全力で拒否してしまったのだ。しかも、旬はその理由も分からないのだから、尚更傷つけてしまったかもしれない。

流石に罪悪感を感じて、奈津美は朝食に、旬が喜びそうなホットケーキを焼き、罪滅ぼしをしようとした。

そして、できるだけいつものように、むしろいつもより旬に優しくしようと思い、努めて笑顔を作った。その笑顔が引きつっていないかと、内心ヒヤヒヤしていたけれど。

旬に朝のキスを迫られた時、色々な意味でドキリとした。いつも言われていて、その時も多少なりともするのだが、今朝は、

それとは違った。

そして、匂に捨てられた子犬のような目で見られた。

その目を見て、自分が悪いことをしたということが、はっきりと浮き彫りになったように感じた。

ここはまた嫌だとは言えない。そう思ったから、奈津美はいつものように匂とキスをした。

いつも通りの、朝のキスと言うよりは少し濃厚に唇を交わし、少しすると、匂の手が奈津美に伸びてくるのを感じた。

奈津美は、とっさにヤバイ、と思いその手を押さえた。

しかし、匂の手は奈津美の手に反発するように力が込められる。

それに対し、奈津美は匂に唇を押し付けて、体を離そうとする。

端から見ると、まるで奈津美から激しい口付けをしているようだが、実際は力の反発をしている。

このままだと埒があかないし、今以上に匂に不審に思われるので、奈津美はさっさと唇を離し、匂にバイトに行く準備をするように促した。

それから朝食を済ませ、匂をバイトに見送ったのだが、やはり、匂はどこか納得しきれない、といった表情を浮かべたままだった。

流石に気になり、胸の中のもやもやとしたものが消えない奈津美は、相談も兼ねてカオルに電話したのだ。

事情を話し、カオルからどのような返ってくるか、それは何となく予想はしていた。そして実際、ほぼ予想通りに言われてしまった。

「奈津美さあ。正直に言えば良かったんじゃない。言えばそんなややこしいことにならなかったでしょ」

カオルは更に続けてそう言った。

「……だって、太ったって思われるのが嫌だったんだもん」  
奈津美はやっと言い返す。

「いいじゃない。バレたって。ていうか、旬君も気付いてないんならそんなに気にしてないってことでしょ。ていうか、そもそも奈津美、言うほど太ってないし」

「太ったの！ このこと旬に言ったら絶対そういう風に見られるじゃない」

言わなければ、気づかれないまま、やり過ごせるかもしれない。しかし、言ってしまうと、意識されて余計に太って見られてしまう。奈津美はそれが嫌なのだ。

それをカオルに言うと、

「言わないでやり過ごせてないじゃない。それどころか、ややこしくしてるし」

その通りのことを言われ、再び、奈津美は何も言えなくなってしまう。

「大体さあ、奈津美は何が嫌なの？ 別に太ったって、旬君は全然気にしないでしょ」

「……そうとは言い切れないじゃない。旬だって、若い男なのよ。体型が崩れていきつつある女より、若くてこれから花って女の子の方がいいに決まってるじゃない」

そう言うのと、電話の向こうで深いため息が聞こえた。

「奈津美……何でそう悪い方にしか考えられないのよ。旬君はそんなことないでしょ。ちょっと前に旬君がバイトしてるカフェ行った時だって、女子高生に見向きもしなかったじゃない」

確かにそうだった。あの時、旬は女子高生にしつくメールアドレスの交換を迫られていたけれど、一切ふらつくこともなく、彼女がいるから、と断っていた。

そんな旬のことを、信じていないとかではない。ただ、あの時は、女子高生達が旬の好みじゃなかっただけで（といったら女子高生達に失礼かもしれないけれど）もし、旬にとって魅力的だったならば、どうだったか分からないのではないか。奈津美はそう思うのだ。

旬はまだ若いのだし、フラリと気持ちが変わってもおかしくない。元々、旬は奈津美と違って、お互いによく知らない状態で、勢いのように告白してきたのだ。だから、同じようなことがあるかもしれない。

そして、その時は、奈津美が旬に捨てられてしまう。



情けないけれど、それを考えるだけで泣けてしまいそうだ。

多少太ったぐらいで大げさだと思われるかもしれないが、奈津美は必死なのだ。

「ていうかさあ、ダイエットするのは勝手だけど、簡単に痩せられないわよ。成果出るのなんて一カ月は先よ？」

分かってる？ とカオルは言った。

「分かってるわよ」

奈津美は口を尖らせながら答えた。

「じゃあ、その間ずっと旬君はお触りなし？」

「お触りって……」

「そっちの方がヤバいんじゃないのー？ 旬君、奈津美がかまってくれないから欲求不満になって、他の女のところにふらーっちやうかもよ？ それこそ、こないだの女子高生とかさあ」

「え……」

奈津美の頭に、嫌なイメージが浮かぶ。

この間の女子高生が旬の腕に絡みつき、その旬は、嫌がる素振りも見せずに、むしろ楽しそうな笑顔を見せている。

有り得ない話ではない。

「だっ……大丈夫よ！ 徐々に拒否しないようにするから！」  
流石に不安になって、奈津美はそう言った。

「……拒否するしないの問題じゃないでしょ」

それは奈津美にも分かっている。

旬は、夕方からは居酒屋のバイトだった。これも、開店前の準備からだ。

カウンターテーブルを拭きながら、気分は、朝よりも沈んでいる。大川にあんな風に言われてからだ。

奈津美に、振られるかもしれない。そんな不安だけが、旬の胸の中を掻き回す。

勿論、旬は嫌に決まっている。しかし、どうしたらいいのか、分からない。

下手に謝ったらいけない気がする。とりあえず、何が原因かはつきりさせた方がいい。

しかし、思い当たる節が多すぎる。そうすると、全部か？　となってしまう。

もしそうなら……謝っても謝りきれないのでは……

この思考のサイクルが、ずっとぐるぐると回っている。

「沖田。何呟いどんねん」

カウンターの向こうから声がして、旬は我に返る。  
そこにいたのは浩平だった。

「コウさん……俺、呟いてました？」

旬には全く自覚のなかった。

「おお。何や腹でも壊しとんのか？」

それを聞いて、旬はため息をついた。

「壊れかけてるのは心ですよ……」

「は？」

浩平はポカンと口を開けた。

「……頭でも打ったんか？」

次に怪訝な顔をする。

「氣分的にはそんな感じですけど……でも、多分そっちの方がマシです」

旬がぶつぶつと言うと、浩平は更に怪訝な表情になり、再び、はあ？ と、声を漏らした。

「回りくどいな。何やねん。何かあったんか？」

「はい」

旬は隠すことなくすぐ頷く。

「何があってん？」

「聞いてくれます？」

旬はカウンターから身を乗り出し、浩平に迫る。

「おう。聞いたる聞いたる」

浩平は大きく二回頷く。

旬はそれを見ていくらかほっとした顔になり、今悩んでいることを浩平に打ち明けた。

昨夜のこと、今朝のこと。そして、その原因がたくさん思いあたること。それらをすべて話した。

「ほー。なるほどなあ」

話を聞いて、浩平は腕を組んで考える。

「でも一回拒否したぐらいで別れるいうんは極端ちゃうか？」  
美奈子と同じようなことを浩平は言った。

「そうなんですかねえ……」

「そうやろ。別れたいて彼女が思てたらとつくに言うてるやろ」

「……でも、だとしたら何で拒否したのか分かんないし……」

「だから、気分ちやうかったとか」

「それで、触らないで、って言いますか？ その後に何の弁解もなく」

「あー……確かにそれはないかもなあ」

結局、浩平との問答も、今までの思考と一緒に変化はなかった。

「あ、単純に、するのが嫌やったんちゃうか？」

浩平が思いついたように言った。

「……へ？」

旬は首を傾げた。

浩平はあたかも新しいことを思いついたかのようにだったが、それならさっきから言ってることではないではないか。

「だってそうやろ？　すること以外は普通なんやったら、沖田のことは嫌ちゃうけど、するのが嫌なんちゃうか？」

「どういうことですか？」

まだ意味がよく分からず、旬は浩平に聞き返す。

「だから……まあ、例えば、ヤッてる時のお前の何かが嫌とかな。平たきいうたら気持ちよくないとか。そういうことや」

「そんな……俺の技量不足!？」

旬は心の底からショックを受ける。

「でっ……でも！　彼女はすっげー気持ちよさそうですし！　毎回、終わったらすごく良かったよって……言ってくれたことはないですけど」

「ないんかい」

「でも俺、彼女が喜んでくれてる自信ありますよ！ 彼女の体のことは俺が一番よく知ってるんですから！ それに、マンネリにならないように色々努力もしてますし！」

旬は真剣な表情だ。

「俺にそない自信満々に言われてもな……じゃあ、逆にそれがしつこいんじゃないか？ 彼女が嫌がることまでしてないんか？」

「そんなこと……」

言い返しかけて、旬ははっとする。そして、ちょっと待てよ、と口の中で呟く。

「なんや。思い当たることでもあるんか？」

旬の反応を見て浩平がきくと、旬は黙って頷く。

「何回か……恥ずかしいからやめてとか……それだけは嫌！ って言われたことがあって……」

「……何をしてん、お前。いや、別に言わんでもええけどな。あんま聞きたないし」

際どい言い回しに、浩平は少し引き気味に旬を見る。

「……これって、やっぱり俺に原因があるってことなんですかね？」  
旬は不安げに言う。

話が少しズレてしまったが、これまでの話をまとめると、結局はそういうことになってしまう。

「まあ、そうなるな」

浩平も、頷いた。

奈津美が匂を拒否したのは、匂が原因ということ。思い当たるその原因が、増えてしまった。

「どうしよう……」

匂は頭を抱え込む。

まさか、奈津美がそんな風に思っていたなんて、予想もしていなかった。……本当の事情の方が、匂にとって予想できないことではあるが。

「謝ったらええやん。仕事終わってからでも会いに行つて」

浩平が軽くそう言った。

「そうですよね……それしかないですよ。でも、コウさん」

「何や？」

「あくまで仕事終わってからなんです」

「当たり前やろ。今すぐにも行きたかったら行ってもええけどな。一応、俺にもバイトのクビをどないするかって権限はあるんやで？」  
浩平はさらりと言い、さり気なく、この店の次期店長の権限を振りかざす。

「……ですよ」

匂は大人しく引き下がった。

どちらを優先するか、それは勿論奈津美なのだが、バイトをクビになってまで会いに行ったりすると、それこそ奈津美に見損なわれてしまいそうだ。

結局は奈津美のために、旬はバイトを終えてから奈津美に会いに行こうと決めた。



## 17 ギクシャク

結構キツイ……

奈津美は体を捻ったポーズをキープしながら思う。  
十秒数えて、体を元に戻すと、雑誌の次のページを見る。

次は……下っ腹引き締めストレッチ。

雑誌を見ながら、書いてある手順で、載っている写真通りのポーズをとる。

これは今日から始めた、奈津美の地道なダイエットだ。

夕方、食品品の買い出しに出かけた。その時、奈津美は、いつも行ってるスーパーの雑誌売り場に並んだ『ダイエット法』という文字について目が行ってしまった。

これから露出が増える夏本番ということで、そういった特集を組み込んだ雑誌が多いようだ。

奈津美はいくつか立ち読みした後、一番効果がありそうなものを選び、つい買ってしまった。

そして今、実践中なのである。入浴後にやるのが効果的と書かれた、その条件通りにして。

奈津美がストレッチに専念していると、ローテーブルに置いた携帯電話が鳴った。

電話の方の着信音だ。

ストレッチを中断して携帯を見ると、旬からの着信だ。

もう二十時をとくに過ぎている。

居酒屋の方のバイトが終わったのだろう。

奈津美はすぐに電話に出た。

「もしもし」

「もしもし、ナツ？ 旬だけど」

「うん。バイト終わったの？」

「うん」

「そう。お疲れ様」

そこまで話したら、急に話が途切れた。

いつも色々と喋り出す旬が黙ってしまったからだ。

「……旬？」

奈津美は不安になりながら声をかける。

もしかしたら、まだ昨夜のことを気にしてるのではないか。いや、  
気にしていて当たり前と言えるのだが。

「……ナツ。あのさ……」

ややあつて、匂から言葉が返ってくる。

「……何？」

何を言われるのか、奈津美の胸はドキドキしている。

「今から、ナツんち行っている？　つうかもうすぐそこまで来てるんだけど」

「……えっ!？」

一瞬間を開けて、奈津美は大きな声を出してしまった。思い切り素だった。

「ダメ……?」

匂はこちらを伺うように聞いてくる。

ここで、今からはちょっと……などと言えるだろうか。

明日は日曜日だし、特に断れる理由はない。

「ううん。いいよ」

奈津美は明るく、平静を装って言った。

「今どの辺り？　あとどれぐらいで着くの？」

「もうコーポが見えるところ。五分かかんないかな」

「そう。分かった。じゃあ待ってるね」

「うん。後でな」

電話を切ると、奈津美は慌ただしく部屋を片付ける。

片付けると言っても、ストレッチや筋トレをするスペースを作るために動かしたローテーブルを元に戻したり、雑誌を目立たないところに置いたりするぐらいだ。

キョロキョロと部屋を見回して他にしておくことがないか確認していると、チャイムが鳴った。

「早っ……」

予想以上の早さに、奈津美は思わず声に出して呟いた。

五分どころか、三分も経っていない。

奈津美はバタバタとしながら玄関に行く。

念のためドアスコップを覗いてみると、そこに匂がいたので、奈津美はドアチェーンを外し、鍵を開け、ドアを開けた。

「いらっしやい」

奈津美は、何もないかのように取り繕い、笑顔で匂を出迎えた。

「ごめんな、急に……」

匂が、申し訳なさそうに言う。

その匂の態度に、奈津美は面食らってしまう。

「何？ 珍しいじゃない。匂がそんな風に言うなんて」  
思ったことを口にした。

「え……そう？」

「いつもいきなり来るって言うし、何の連絡もなしに来る時だってあるじゃない」

「あ……」

奈津美は何気なく言ったつもりだったのに、旬はものすごく落ち込んだ表情になった。

「そうだよな……ごめんな、いつも勝手に」  
かなりしおれた様子だった。

旬は旬で、そういうことも、昨夜の奈津美の行動の一因なのではないかと思ったのだ。

しかし、旬が考えていることなんて知らない奈津美は、旬のその態度に戸惑う。

「べ……別にそういう意味で言ったんじゃないわよ？　ただ珍しいっただけ。それよりほら。上がって」

奈津美はフォローをして、旬を部屋の中に促した。

「うん。お邪魔します」

旬は、まだ少し落ち込んだ様子でありながらも、奈津美の部屋に入った。

旬が部屋に入ると、奈津美はドアを閉め、鍵とチェーンをかける。

そして、振り返ると、旬はまだ靴を履いたままそこに立っていて、じっと奈津美の方を見ている。

「何？　どうしたの？」

奈津美は首を傾げて尋ねる。

「ん……珍しいって言えばさ、ナツがそんな格好してるのも珍しいなって思っ」

旬に言われて、奈津美はハツとする。

今の奈津美は、ピンクのTシャツに、太ももが半分見える丈の黒のショートパンツという格好だ。

しかも、ノーブラで、ぴったりとしたTシャツは、奈津美のボデイレインがはつきりと分かる状態になっている。

「ちょ……ちょっと暑いからっ。お風呂上がりだしね」

奈津美は慌ててそう言い訳した。

本当は、ストレッチや筋トレをするのに、いつものパジャマよりこの格好の方がやりやすいだろうと思ったからだ。

「ふーん……なんかいいかも。その格好」

旬は、ニツと笑ってそう言った。

昨日の夜は、奈津美の肌に触れることも、それを拝むこともできなかったのだ。普段、奈津美はそれほど露出のある服を着ない。だから、旬にとっては、久々に生の奈津美の体を見たのだ。

こんな状況ではあるが、嬉しくて堪らない。

「も……もう！　やだ！　そんな見ないでよ」

奈津美は匂の視線を感じ、顔を赤くする。

単純に恥ずかしいというのもあるが、あまり見られて、太ったと気づかれても困る。今してる努力も水の泡だ。

奈津美は、密かに腹筋にも力を入れて、意識して腹を凹ませる。

「もう。早く入って」

そう言って匂の背中を押そうとすると、奈津美の足に何かが当た  
り、ガサツと音をたてた。

視線を下に向けると、匂は手に白い袋を提げていた。

「匂、買い物してきたの？」

「あ、そうだ」

匂は思い出したように袋を持ち上げた。

「これ、お好み焼き。コウさんがくれたんだ」

匂は笑顔で言った。

そのお好み焼きは、浩平が、今から彼女に謝りに行くのに手ぶら  
じゃなんだろうから、と言って、特別に焼いて持たせてくれたのだ。

「まだ温かいしさ、一緒に食べよ」

奈津美の鼻には、匂が持ち上げた袋からするソースの匂いが届い  
た。

今日の食事も、あっさりとした低カロリーのもので済ませた奈津  
美にとっては、それだけでかなり食欲をそそられる。

「……うん。あたし、ご飯食べたからもうお腹空いてないし……  
旬、食べられるなら食べていいよ」

気持ちとは裏腹に、奈津美は言った。

本当は食べたい。でも、もう十時を過ぎている。

今までは、大して気にしていなかったのだが、夜遅くの食事が一番太ると聞いたことがある。そして、それを抑えるだけで大分違うらしい。

だから、奈津美は八時以降は何も食べないと決めたのだ。ここで負けてしまうわけにはいかない。

「そっか……」

奈津美が断ると、旬は少し落ち込んだ表情になる。

それを見ると、また胸が痛む。

リビングに行くまで、何の会話もない。

旬と二人でいて、こんなに静かなのは、バレンタインの一件以来ではないだろうか。

「お……お茶いれるね」

必死に笑顔を作り、奈津美は台所へと言った。

「あ、旬。お箸いるの？」

食器棚からグラスを取った時に目に入ったので、奈津美はリビングの旬に声をかけた。



とりあえず今は、何でもいから何とか間を持たせることに必死だ。

「……うん。割り箸入れてくれてるから、大丈夫」  
旬は袋の中を覗いて言った。

「そう……」  
冷蔵庫から麦茶を出しながら奈津美は返した。

そして、それからまた言葉がなくなる。

グラスに麦茶を注ぐ、コポコポという音だけがうるさく聞こえた。

さっさと麦茶を入れて、奈津美はリビングに持って行く。

「はい」  
旬の前に置き、奈津美は座ろうとする。

すると太ももがむき出しになってしまうので、少し裾を引っ張って下げてから、座り直した。

「ありがと。……いただきます」  
旬は割り箸を割り、お好み焼きの入っている紙の箱を開けた。

ふわりと、お好み焼きの匂いが立ち込める。

美味しそう……

見ているだけで胃が音をたててしまいそうだ。

ヤバイ……

お腹が鳴ってしまいそうな寸前なのを感じて、奈津美は焦った。

「て……テレビ見よっか」

少し大きな声を出して、奈津美は腰を浮かせた。

テレビでも点いていたら、お腹が鳴る音も目立たないだろうし、間が持つだろうと思ったからだ。

「何かやってないかなー……」

テレビを点け、リモコンを持ってチャンネルを変える。

旬は、その姿を見ながら、お好み焼きを口に運ぶ。

なんだか色んな気持ちで一杯一杯になっていて、味なんて分からなかった。

テレビの方は、あまり面白そうなのはなかった。

ニュース番組は、連続殺人事件のことを話していて暗い感じだし、映画はマイナーな内容の洋画で見る気がしないし、サスペンス劇場は、始めから見ていないから話が分からない。たまに見ているお笑い番組は、全く知らない芸人がネタをやっていて、ちっとも面白くない。

やっぱり消そうかと、指を電源ボタンに置いた。

『俺の何が悪いってんだよ!』

テレビから男の声でそんな言葉が聞こえ、奈津美はボタンに力を入れるのを止めた。

『だから全部よ!』

『全部って俺がお前に何したよ?』

『何もしないのが嫌なのよ! あんたのこと、いつつも全部あたしがやってんのよ!』

何の番組かと思って見てみると、画面の左下に『恋愛ガチバトル・二年間同棲中のヒモ男と別れたい』という文字が出ていた。

そういえば、知ってる番組だ。

ジャンルでいえば、バラエティー、特に、恋愛バラエティーという番組だ。毎週、視聴者から寄せられる恋愛に関する悩みを、番組のパーソナリティーが力になって解決していくという内容だ。

奈津美が高校生の時から始まった番組で、初めは、好きな人に告白したいだとか、初恋の人に会いたいだとか、少しほろりとするような内容で、奈津美も周りの友人達もよく見ていた。

しかし、そのうち、そんなありきたりな内容だと面白くないでもなったのか、彼氏の浮気現場を押さえたんだとか、街でナンパをしたいだとか、ドロドロしていたりあまりにもウケ狙いの下らない内容が多くなった。

それで奈津美は見るのを止めたのだが、今久しぶりに見て、まだ

やってたんだと思った。この手の類の番組は、すぐに終わるだろう  
と思っていたのだが。

奈津美は、久しぶりだからと言って、見ようとも思わなかった。  
画面の文字を見ただけでも分かるが、今日の内容もドロドロしてい  
そうだ。

やっぱり消そうと指に力を入れようとする。

『ずっと家にいるのに掃除とか何もしてくれないじゃない！ この  
部屋、あたしのなのに汚すし！ その上あたしのものを勝手に使っ  
てダメにしちゃうし！』

「ゴフッ……！」

テレビの中の彼女の台詞に、旬は思わずむせてしまった。

「大丈夫？」

奈津美は驚いて旬の方を向いた。

「ゲホッ……大丈……ゴホッ」

旬は涙目になりながら咳込んでいる。

飲み込もうとしたお好み焼きが、喉の奥の変なところへいつてし  
まったようだ。

「ちょっと……もう。何やってんのよ」

奈津美の注意は旬の方へいき、テレビを消さないままリモコンを  
ローテーブルに置いて、旬の背中をさすった。

旬は麦茶を一気に口に流し込み、ごくんと喉を鳴らして飲み干した。

「ごめん……なんかむせちった」  
旬はぎこちなく笑った。

「もう大丈夫？」  
奈津美はまだ背中をさすってくれている。

「うん。平気」

そこまでで、何故か会話が途切れる。

「あ。旬、まだお茶飲む？」

奈津美は空になったグラスを見て言った。

「うん……飲む」

「じゃあ、おかわり入れるね」  
奈津美はグラスを持って立ち上がった。

「あ……ありがとう」

奈津美は旬に僅かな笑みで返し、台所へ行った。

テレビの方は、どのタイミングだったのか、スタジオでタレント達が、今のカップルについて話している。

旬は小さくため息をつく。

さっきのテレビの中の彼女の言葉に、思わず反応し、動揺してむせてしまった。

彼女のものを勝手に使うなんて、旬にも心当たりが有りすぎる。

やっぱり……気にする人はするんだよな……

もし、奈津美も気にするのだったら……今も口に出さないでいるだけで、心の中は嫌悪感でいっぱいなのではないだろうか……

そして、それが積もりに積もっていったら……

『では、二人はどうなってしまうんでしょうか。続きをどうぞ』  
司会者のフリをきっかけに画面が切り替わる。

旬はつい画面に食いついて見てしまう。

『――しょうがねえだろ。俺は家事なんか出来ねえし。大体、家のことは全部お前がやるって条件じゃなかったのかよ!』

『は!?! 何それ、条件って。そんな風に言った覚えないし! 大体、あたしは家政婦じゃないのよ!』

どこかで聞いたことのあるフレーズだった。

奈津美にも、同じことを言われたことがあった。あの時、奈津美

が言ったのは、家政婦ではなく、母親だったが。

もしかして、この男は自分と同じような境遇なのではないかと思っ  
てしまう。

『別にそんなつもりねえよ！』

『じゃあ何？ あたしは金ヅル？ あんたしょっちゅうあたしに金  
せびってくるもんね』

『せびってねえし！ そのうち返すって言ってんだろ』

『そのうちっていつ！？ あんたまともに仕事もしてないくせにい  
い加減なこと言わないで！ しかもあたしが渡したお金でパチンコ  
ばっか行ってるでしょ！』

そこまで聞いて、旬はほっとした。

金銭の貸し借りでは、奈津美にともめたことはない。パチンコと  
か、ギャンブルもしない。

何だ、全然違うじゃん。

旬は、胸をなで下ろす。しかしはたと思い止まる。

でも、奈津美の家のものを勝手に食べることは、似たようなこと  
ではないか。

奈津美の家のものは奈津美が奈津美の金で買っている。それを勝手に食べることは即ち、旬が奈津美の金で食い潰しているということではないか。

それなのに、更に奈津美の家のものを食べるなんて……

旬には、自分がしたことが、悪い意味でとても大それたものだったという風に感じた。

旬が悶々としているところへ、奈津美が戻ってきた。

点いたままのテレビを見て、あ、消してない、と思った。

テレビの中では、依然さっきのカップルが言い争いを続けている。

『ていうか、あんた他にも女いるんでしょ！』

その言葉にドキッとして、奈津美は立ち止まってしまう。

『たまに帰って来ない時、他の女のところにでもいるんでしょ！』

『……居ねえよ。何言ってるんだよ』

否定する男は、明らかに動揺の色を見せていた。

『あたしが気付いてないでも思ってるの！？ 他の女からメールとか入ってるんだからね！』



『何勝手に俺の携帯見てんだよ！　つうかただの女友達だっ！』

『何でただの女友達からのメールが『次はホテルでしようね』って内容なのよ！』

『はあ！？　有り得ねえ！　何でそこまで見てんだよ！　お前、最悪だな！』

『最悪なのはそっちでしょ！　逆ギレしないでよ！』

『ああ分かったよ。別れてやるよ！　それでいいんだろ！　こっちだって別にお前じゃなくなったっていいんだからな！』

別に奈津美に言われたわけではないのに、その言葉が、ぐっさり胸に刺さった。

もしかしたら、旬もそんな風に思ってる？  
あたしじゃなくてもって、思ってる……？

奈津美は、旬のことを見た。旬はテレビに見入っているのか動かない。

「な……なんかテレビあんまり面白くないね」  
何気なく言おうとしたら、少しわざとらしくなってしまった。

旬は、奈津美の声ではっと我に返る。

奈津美はテーブルにグラスを置き、テレビのリモコンを取る。

「もう消しちゃおっか」

そう言って、奈津美は匂の返事がある前に、テレビの電源ボタンを押した。

予想していたことだが、テレビを消すと、しんと静まり返る。

しかも今度はあんな番組を見たせいで、互いに気まずい。

とりあえず、奈津美はさっきと同じように座った。

何か、何でもいいから喋らないと。そう思うが、そうやって考えてしまうと、尚更何も思い浮かばなかった。

## 18 解決、そして……

「……ナツ」

旬が不意に声を出した。

「……何？」

心臓が飛び出るんじゃないかというほど驚いてしまったが、奈津美は何もないように返事をした。

しかし、旬はすぐには何も言わず、まず箸を置いた。

何を言われるのか、ドキドキしながら奈津美は旬の次の言葉を待つ。

旬は、体ごと奈津美の方に真っ直ぐ向き、崩していた足をピシッと正座に変えた。

「ナツ……」

もう一度奈津美の名前を呼ぶと、旬は両手を床につけた。

「ごめん！」

と、旬は勢いよく頭を下げた。

「え……？」

奈津美は、啞然として、何の言葉も出てこなかった。

この状況で土下座で謝られるなんて、思ってもいなかった。しかも何の『ごめん』なのか分からない。

「俺……色々ナツに悪いことしちゃって……それに、相変わらずナツに頼ってばっかだから、ナツが怒っても仕方ないと思うよ」  
頭を下げたまま、旬は言った。

何のことか、奈津美にはさっぱりだ。

「でもっ……これからはマジでしないから……しっかりするって誓うから……だから許して！ この通り！」

旬はもう下げようのない頭を、床にこすりつけるようにした。

奈津美は、何も言えなかった。驚きすぎて、言葉が出てこない。

そして旬は、土下座をしたまま固まったように動かない。

「……旬？」

奈津美は恐る恐る声をかけた。旬の肩がピクリと動いた。

「あの……何言ってるかよく分からないんだけど……でも」

旬は、内心ビクビクしながら奈津美の声を聞いた。

「あたし、怒ってないよ？」

奈津美が言った後、しんと静かになった。

「……え？」

旬は顔だけを上げ、奈津美を見た。

「怒ってないの？」

「うん」

奈津美が頷くと、旬は目を丸くした。

「で……でも」

旬はガバツと体を起こした。

「昨日、エッチしなかったのって、怒ってたからじゃないの？」

予想外の流れで、その話題になった。奈津美は息を呑んだ。

「……それは……怒ってたんじゃないって……」

そこまで言って、奈津美は口を噤んだ。

本当のことは、やっぱり言えない。言いたくない。

「何？ 何でダメだったの？」

しかし、何も知らない旬は、ストレートに聞いてきた。

その目は、真剣で、不安の色も混ざっていた。

奈津美は、それを見ていられなくて、俯いた。

なんて最低なんだろう。

本当なら、昨日の奈津美の言動は、旬を怒らせてもしょうがない。それなのに、旬は、奈津美が怒っているからだと思って、自分が奈津美を怒らせたんだと思って、必死に謝っている。

前にも、同じ様なことがあった。その時に比べたら、その原因はより自分勝手に、より下らない。

そして、旬は、原因がはっきりしない分、自分を責めてしまっている。

旬は全然悪くないのに……

「ナツ……？」

何も言わず、俯いたままの奈津美に、旬は伺うように声をかける。

「……………たの」

下を向いたまま、奈津美が何かを言った。

「え？」

聞き取れずに、旬は聞き返す。

「……太ったのっ！ あたし……」

はつきりと奈津美は言った。恥ずかしくて、太ももの上の手を強く握り締めた。

「……へ？」

旬は、今度は間拔けな声を出した。

「太ったって……ナツ？」

ポカンとしながら、旬は奈津美を見る。

「どこが？ 全然じゃん」

見る限りでは、旬には、奈津美の体の変化なんて分からなかった。

「太ったの！」

奈津美は顔を上げた。

「去年まで履けたはずのスカートが履けなくなっちゃったし、カオルに顔丸くなったって言われたし……それに体重が……半年で四キロも増えたの！」

何故かムキになって、奈津美は旬に全てを暴露した。

「そーなの？ ……でも何でそれでエッチ拒否ったの？」

旬には、そのことが何で関係あるのか、奈津美の複雑な気持ちが分からなかった。

「だって……嫌だったから……」

再び下を向いて、奈津美は小さな声で言った。

「旬に……太ったってバレたら……太ったって思われたら……嫌だったの。だから……痩せるまではって、思って……」

旬は、呆然としていた。昨日の言動の理由を、やっと知ることができた。

「な……なんだぁ……」

一気に脱力して、旬はその場にうつ伏せに倒れ込んだ。

「そんなことかぁ……」

旬はほっとしたようにため息をついた。

「そんなことって……あたしにとってはそんなことじゃないもん！」  
真剣に悩んだことじなのに、そんなこと、と言われた。奈津美はムッとして言い返す。

「だってさ、ナツ、別に太ってなんかないよ？　むしろ折れちゃいそうなぐらい細いじゃん」

旬は体を起こしながら言った。

「そんなことないもん！」

奈津美は一切引くことなく言う。

「……何でそんな否定するかなあ」

「本当のことだからしょうがないでしょ」

いつになく頑なな奈津美を見て、旬は小さく息をついた。

「んじゃ、確かめてみよっか」

旬はそう言って、立ち上がった。

何なのかとビクビクしながら、奈津美は旬を見上げた。

旬は、奈津美の目の前でしゃがみ、奈津美に手を伸ばして、肩を抱き寄せた。

「しゅ……旬？」

いきなり何の行動かと思ったら、奈津美の膝の裏に、旬のもう片方の腕が滑り込んできた。

「……よつと！」

旬の声と同時に、奈津美の体がふわりと浮いた。

「えっ……」



奈津美には、一瞬何が起きたのか分からなかった。

「何だ。めっちゃ軽いじゃん」

そう言う旬の顔がすぐ近くにあった。

奈津美は、すぐに今の状況を理解した。

旬に、お姫様だっこをされている。

「ナツ。太ったっていうのは、こんな風に軽々持ち上げられないぐ  
らいのことをいうんだよ。分かった？」

旬は奈津美に言い聞かせるように言った。

「やだっ……下ろして！」

奈津美はバタバタと動かし抵抗しようとした。

「ナツ、暴れたら危ないよ。大人しくしてて」

旬はそう言いながら歩いた。

「きゃっ……」

バランスを崩しそうになり、奈津美はとっさに旬の首に抱きつ  
いた。

「おおっ。ナツのおっぱいが当たってる」

旬は嬉しそうに声を出した。

「もう……旬っ！ 下ろしてよっ」

「はいはい……よいしょっと」

旬はゆっくりと腰を落とし、奈津美をベッドの上に下ろした。

「ちょっと匂！」

文句を言おうとしたら、匂は奈津美の上半身を倒し、奈津美が起き上がれないように覆い被さった。

「匂！？ 何すんの？」

奈津美が匂を睨むように見ると、匂はにんまりと笑った。

「本当にナツが太ったのか、調べるの」

「え……」

「失礼しまーす」

匂は奈津美のTシャツの中に手を突っ込んだ。

「やっ……やだ」

奈津美が抵抗しようとしても、匂は奈津美に体重を預けるようにしているので、思うように動けない。

「んー……別に変わらないと思うけどなあ……」

Tシャツの中で、匂の手が奈津美の腹周りを撫で回している。

「言われてみれば、一年前よりは柔らかくなったかなあ」

匂に言われて、奈津美はショックを受けた。

「だから……だから言ったじゃない……」

何だか悲しくなって、奈津美の目からは涙が出てきた。

「な……ナツ？ 何で泣くの？」

旬は驚いて体を起こした。

「旬が……旬が太ったって言ったあー……」

まるで小さい子供がいじめられた時のような言い方だ。

「言っていないじゃん！ 柔らかくなっただって言ったんだよ。それにナツは元がすごい細いんだからちよつとぐらい太ったって変わんないよ！ つうか、もっと太った方がいいぐらいだし」

旬がそう言っても、奈津美は泣いたまま、顔を横に向けた。声は出さないようにしているが、何度も涙を吸っている。

「ナツ……何でそんな気にするの？ そりゃ、女の人はずっと普通気にするのかもしれないけど……でも、そこまで気にしなくてもいいじゃん」

旬は頭を掻きながら言った。

「……だって」

横を向いたまま、涙声で、奈津美は口を開いた。

「だって……太ったら……今はよくても、そのうちたるんできちゃうんだもん」

「……え？」

奈津美の口から出てきたことが予想外過ぎて、旬はきよんとしている。

「それだけじゃない……肌だって、皺とかシミとかできて……今よ

りハリも艶もなくなってくるし……あたしは……旬よりも早く、おばさんになっちゃうから……」

自分で言ってる、更に悲しくなってきた。涙がどんどん出てくる。

「そしたら旬は……絶対、あたしなんかより、若い子のほうがいいってなるから……だから……」

少しでも長い間、若くいられるようにしようと思った。旬が好きだと言ってくれた体を維持しようと思った。

言い方を変えれば、ただの若作りだ。まだ二十代で必死になってやるのは、少しみっともないのかもしれない。

それでも、旬をつなぎ止めるためだと思ったら、しないではいられなかった。

「……ナツ」

優しい声で呼びかけ、旬は両手でそっと奈津美の頬を包み込むように触れた。

奈津美が恐る恐る顔を正面に向けると、旬の顔がすぐ側にあった。

ふうっと小さくため息をつく、旬は奈津美の額に軽く自分の額を当てた。

「悩み過ぎだよ、ナツ。ナツにとっては『そんなこと』じゃなくても、俺にとってはやっぱり『そんなこと』だよ」

旬はそう言うと、そっと額を離し、間近に奈津美の顔を見下ろす。

「ナツ。俺には、ナツがおばさんになるとか、そんなの関係ないよ。」

俺は今のナツだけが好きなんじゃない。これからのナツだって、ずっと好きだよ」

旬はそう言って、優しく微笑んだ。

「だって、ナツは絶対にずっと可愛いもん。他の人とは比べられないよ」

旬の親指が、涙で濡れた奈津美の目元を拭った。まるで、大切なものを扱っているかのような、丁寧な仕草だった。

「おばさんになってもおばあさんになっても、俺は絶対ナツのそばにいるよ。ナツのそばで、俺もおじさんになっても、おじいさんになってもいいから」

それを聞くと、せっかく旬が拭ってくれたのに、また涙が出てきてしまった。

「旬……ごめん……ごめんね」

奈津美は、旬の背中に両腕を回し、力一杯抱きしめた。

「うん」

旬は再び奈津美の額と額を合わせ、頬を撫でた。

そのまま唇を重ねた。

今朝交わしたように深い口づけだったが、今朝とは違い、二人の体はぴったりとくっついていた。

「ナツ」

やがて唇を離すと、息がかかるほど近くで、旬が囁いた。

「今日は……いいよな？」

そうやって聞きながらも、旬の右手は、既に奈津美のTシャツの中に入ろうとしていた。

しかし、全く抵抗はなかった。

「うん……いいよ」

何の迷いもなく、奈津美は旬を受け入れた。

「よかった……ナツが俺のこと怒ってたんじゃないくて」

ベッドの中で、旬が言った。

今、二人は、生まれたままの姿で、上に夏布団を掛けたただけである。

「それに、エッチもできてよかった」

旬はそう言い、奈津美にいたずらっぽく笑いかけた。

「……ごめんね。あたし、旬にひどいこと言っちゃった……」

奈津美は、昨日からの言動について、改めて旬に謝った。

しかし、旬はきょとんとして、すぐには何のことか分からなかったようだ。

少し間を開けてから、何のことか分かったようで、優しく笑う。

「いいよー？ もう理由も分かったことだし。ちゃんと解決して、ナツとエッチもしたことだし」

旬は、体ごと奈津美の方を向き、奈津美の髪を撫でた。

「な？」

小さい子供に言う時のように、旬の言い方は優しかった。

その旬の表情は、本当に言葉の通りのもので、奈津美は安心する。

「……優しいね、旬は」

奈津美は、旬の胸元に額を寄せた。

「もっと怒っててもいいのに……」

本当なら、旬はそういう立場なのではないだろうか。

それなのに、簡単に許して、こんなにも優しくしてくれる。

それでいいのだろうか、奈津美は思うのだ。

「怒る？ 何で？」

不思議そうな声で、旬は言った。

何で、とまで聞かれて、奈津美は言い返そうと旬を見上げた。

するとそこには、より一層優しく顔を緩めている旬の顔があった。

「怒るわけないじゃん。……ナツは、俺のためにダイエットしようとしてたんだろ？ そんな可愛い理由だったら、怒れないよ」

そう言って、旬は奈津美の額に口づけた。

そして、両腕で奈津美の体をしっかりと抱き締めると、ごろりと

仰向けになった。奈津美は、匂の上に俯せになった状態だ。

「やだ……重いのに」

奈津美は匂の体から降りようとした。

しかし、匂は奈津美を離さず、更に体が密着するように力を込める。

「ぜーんぜん。軽い軽い。これならナツが上で激しく動いても苦しくないよ。つうか、俺の方も余裕で動けるし。あ、試してみよっか」  
匂はにんまりと笑った。

「やだ……何でそっちにもっていくのよ」

奈津美は顔を赤くして、匂の顔の横の枕にうずめた。

耳元で匂が声を出さずに笑ったのが分かった。

「……あ。これ、いいかも」

匂が奈津美の下で体を振りながら言った。

「何が？」

奈津美は顔を少し匂の方に向けて言った。すると、匂の耳が奈津美の口元にあって、直接声を入れるようになっていた。

「ん。ナツのおっぱいが俺の上に乗っかるから。いつもと違う感触で気持ちいいの」

匂は、子供のように笑いながらも、僅かに動くことで胸が擦れる感触を楽しんでいる。

奈津美は耳まで真っ赤になった。



「もうっ……匂……」

きゅるるゝ……

奈津美が怒りの声を上げると同時に、布団の中から子犬が鳴くような音がした。

「あ……」

奈津美は更に首まで赤くなった。

「……ナツ。お腹鳴った？」

匂が確認するように聞いてくる。

今のは、明らかに匂にも聞こえただろう。

いや、聞こえたというより、俯せと仰向けになって二人の腹が密着しているせいで、匂の腹の辺りに僅かな振動が伝わってしまったに違いない。

「な……鳴ってない」

誤魔化しきれないと分かっているながらも、奈津美は首を横に振った。

すると、匂は口角を上げてニヤリと笑った。

「えー？ マジでー？ じゃあ、ナツ、腹ん中で犬でも飼ってんの？」

匂はからかうような言い方をした。

本当のことは分かっている、絶対にわざとだ。

「うん。そうよ。最近飼いだめだの」

何となく悔しくて、奈津美は少し演技がかった口調でそう応じた。

「ふーん。んじゃ、その犬触らせて」

匂はそう言って、奈津美の脇腹に触れた。

「どの辺かなー」

そう言いながら、匂は奈津美の脇腹をくすぐった。

「やつ……ちょっとダメっ！ ひやはっ……匂！ いやーっ」

くすぐられ、奈津美は体を振り、たまに変な笑い声を上げて、奈津美は抵抗した。

「だって、犬見てみたいしー」

匂は、まだそのことを言い、止めようとしなない。

「匂っ……ごめっ……犬はいないからあ！ さっきのは、お腹が鳴ったのっ」

奈津美が言うと、匂の手はピタリと止まった。

「ナツー。何でまたそんな嘘つくんだよお」

匂は奈津美の頬を指でつついた。

「……だって、恥ずかしいもん」

奈津美は口を尖らせて呟いた。

「こうやってすっぽんぽんでいる方が恥ずかしくないの？」

「はっ……恥ずかしいけどっ！ でもそれとこれとは違うの！」  
奈津美はムキになりながら言った。

きゅるるるー……

奈津美が、再び音をたてた。

「あ、また犬鳴いてるよ」

今度もしっかりと聞こえていた旬はにやりと笑った。

「もうっ……それはいいから！」

奈津美は、拳で軽く旬の肩を叩いた。

「ナツが先に言ったんだろー？ つうか、ナツ。腹減ってるんだろ」  
奈津美の頬を指でつつきながら、旬は言った。

「ナツのことだから、ダイエットの為に何も食べなかったりしたんだろー」

旬は、更にグリグリと奈津美の頬を指で押す。

奈津美は、言い当てられて、罰が悪そうに旬から視線を外した。

どうして、旬はたまに鋭いのか。

正確に言えば食事を抜いたのではなく、いつもより少なくしたのだが、今の空腹の理由は、どちらでも大差ない。

「あ、そうだ」

旬は何かを思い出したかのように言い、寝返りを打って奈津美を

隣に寝かせて、自分は体を起こし、ベッドから出た。

「旬……どうしたの？」

奈津美は半身を起こした。

すると、隠そうともされない旬の局所が、奈津美の顔の高さにあった。

「やだ、旬。何か着てよ」

奈津美は目を逸らし、自分はとりあえず、掛け布団の上で裏返しになっていたTシャツを着て、足元で丸まっていたパンツを履いた。

「気にしない、気にしない。俺とナツの仲なんだし」

旬はそう言い、本当に隠そうとしない。

「あー。流石に冷めたな」

ローテーブルの上から、置きっぱなしだった食べかけのお好み焼きを取り、旬は言った。

「まあ、いっか。食べれないことはないし」

旬は、それを持ったまま、ベッドに腰掛けた。

「旬。ベッドで食べないでよ。こぼしたら大変なんだから」

そう言いながら、とりあえず、ベッドの横に落ちていた旬のTシャツを、旬の下半身にかける。

「俺が食べるんじゃないよ。ほら、ナツ。こっちきて」

旬は左手に器を持ち、右手で自分の隣をポンポンと叩いた。

「何……」

奈津美は、旬がどうしたいのか掴みきれず、とりあえず言われた通りに、旬の隣に腰掛けた。

旬は、器の上で箸を動かし、一口大にお好み焼きを取った。

「はい」

笑顔でそう言って、旬は奈津美の口元に箸で摘んだお好み焼きを持っていく。

「え……」

奈津美は目で旬とそのお好み焼きを交互に見た。

「え、じゃなくて。あーんして」

旬は更に箸を奈津美の口に近付ける。

「い……いいよっ。いらない！」

奈津美は首を横に振って、旬とは反対に顔を向けた。

きゅるるるる……

タイミングが悪く、奈津美の腹が今までで一番大きな音で空腹を主張した。

奈津美は腹を押さえ、赤面した。

旬には奈津美の表情は見えなかったが、耳まで赤くなっているのを見て、それを可愛らしく思った。

「……ほら、腹減ってるんだろ？」

頑なな奈津美に対しても、旬は優しく微笑んで言う。

奈津美が、ゆっくりと顔をお好み焼きに向けた。

……食べたい。……でも……

奈津美は、チラリと部屋の時計を見る。もう十一時半過ぎだ。

旬に太ってないと言われたからといって、やっぱり、こんな遅くに何かを口にするなんて、気が引けるのだ。

「……分かった。そんなに食べたくないのなら、俺が口移しで食べさせてやろうか？」

旬はそう言って、お好み焼きを口に運んだ。

「い……イヤ！ 普通に食べるから！」

奈津美は再び顔を真っ赤にして、首をブンブンと横に振った。

それを見て、旬はお好み焼きを含んだ口でニヤリと笑う。どうやら、奈津美が何を考えて躊躇っていたか、分かっていたらしい。

「初めからそう言ったらいいのに」

口の中のものを咀嚼しながら、旬は新たに箸でお好み焼きを一口大に分ける。

奈津美は、むうっと口を尖らせて旬を見る。

その視線に気付き、旬は手を止めてきよんとする。

「あ、やっぱり口移しがいい？」

自分の口を指差して、旬は言った。

「嫌！ それなら食べたくない」  
少し冷たく奈津美は言い放つ。

「なんだよー。そこまで嫌がなくてもさあ……」

今度は旬が口を尖らせて、ぶつぶつと言いながら再び箸を動かす。

「じゃあ、はい。あーん」

旬は自分の口の中のはすっかり飲み下し、再び奈津美の口に箸を近づける。

食べると言ってしまった手前、また食べないと言ったら、同じことの繰り返しになってしまうような気がする。

これだけ。この一口だけ。

奈津美は、そう自分に言い聞かせて、口に入れた。

すると、口の中に、しっかりとしたソースの味が広がった。

「美味しい？」

旬が尋ねてくる。

「うん……」

奈津美は素直に頷いた。

お好み焼きは、すっかり冷め切っていた。

しかし、元がよいものだというのと、久々の数日ぶりの油もの解禁と、今の空腹の状態があっただけか、とても美味しく感じられた。

「だろ？」

旬はそれを見て満足げに微笑んだ。箸を器に置くと、右手を奈津美の肩に回し、抱き寄せる。

「俺はさ……ナツがいくら太ってもいいんだよ」

旬は奈津美の肩から腕を撫でながら口を開いた。

「ナツは細くて、綺麗で……それも好きだけどさ。でも俺は、ナツと一緒に同じものを食べて、同じものを美味しいねって言ったりする時の方が好きだよ。そっちの方が俺は楽しいし、ナツも楽しそうだから」

奈津美は、旬のことを見た。旬は、奈津美を見てニコツと笑うと、言葉を続ける。

「ナツがダイエットして、食べるの少なくなっちゃったらさ、俺の楽しみがなくなっちゃうの。だから、ナツが太っちゃうよりも嫌だよ」

奈津美は、目を丸くした。

旬が、そういう風に思っていたなんて。

奈津美がしようとしていたことは、本当に、自分だけの都合で、旬の為には全くなっていなかったということだ。

「旬……ごめん。……ごめんね、本当に」

奈津美は、旬の肩に頭を乗せ今一度謝った。

さっきの『ごめん』は昨日の言動についてだが、今の『ごめん』は、旬のことをちゃんと考えていなかった、奈津美の勝手な思考に



ついてだ。

旬は、肩に乗った奈津美の頭に、そっと頬を擦らせた。

「ナツ。これからは……ダイエットは別にいいけどさ、食事制限とか、無理なのはしちゃだめだよ」

「うん」

頭のすぐ上から聞こえる声に、奈津美は素直に頷いた。

「あと、エッチも拒否らないこと。これ、結構凹むから」

「……うん……ごめんね」

少し顔を赤くしながらも奈津美は頷いた。

「ナツ、謝ってばっかだなー」

旬は、笑いながら奈津美の頭を撫でた。

「いいんだよ、ホント。あ、でも、これからはダメだけだな」

奈津美が旬の肩から頭を上げると、そこには、笑顔の旬があった。

分かった？ と、言い聞かせるようにでいて、優しい口調で言った。

「うん」

奈津美が頷くと、旬も満足したように『よろしい』と言って歯を見せて笑った。

「まだ食う？」

そして旬が目でお好み焼きを見て言った。

「うん。食べる」

奈津美はすぐに頷いた。

さっきまでは、躊躇っていたのに、今はもう悩まなかった。

そして、旬は、一口一口を、たまに自分も摘みながら、奈津美に食べさせた。

奈津美は自分で食べると言ったのだが、旬が、たまにはいいじゃん、と言ったので、そのまま、食べ続けていた。

「そういえば……」

最後の一口を食べ終えたところで、奈津美はふと思い出して口を開く。

「ん？」

旬は、空になった器をローテーブルに置き、再び奈津美の隣に腰を下ろす。

「旬、何か言ってたじゃない？」

「何を？」

旬はきょとんとしている。

「ほら、さっき……あたしに色々悪いことしちゃって……とか、言ってたじゃない」

旬が、奈津美は自分に対して怒っているのだと勘違いして、謝っ

た時のことだ。

あの時は、ただ唾然として聞き流していたのだが、今になって頭に引っかかったのだ。

「あ……ああ……」

旬は、思い出し、そう言えば言っちゃったなあ、と頭を掻く。

「……何したの？」

奈津美が訝しげに瞬間を見た。

「いやっ……別に？ 何もしてないよ？」

そう言いながら、笑顔は引きつっているし、目も泳いでいる。

奈津美はそれを見逃さなかった。

「本当に何かしたの？」

奈津美が詰問すると、旬は首をブンブンと横に振った。

「し……してないって！」

「じゃあ何であんな風に言ったの？」

「そ……それは、その……な、ナツが怒ってんだと思ってたから……その、俺が気付かないうちに何かしたのかと思って……」

旬の言い方は、しどろもどろで、何か隠していることは、一目瞭然だ。

旬の嘘がつけない性格が仇となったようだ。

「本当に何もないの？」

旬の態度でバレバレなのだが、あえて奈津美はそう詰め寄る。

「うん！ 当たり前じゃん！」

旬は力強く頷く。

「じゃあ何であたしの方を見ないの？」

奈津美は、じいっと旬の顔を見る。

「み……見てるよ、ちゃんと」

旬は、奈津美の顔を見て、目を逸らすまいとした。

しかし、真面目な瞳でまっすぐ見られると、旬の目は、文字通り、泳いで奈津美の目から離れてしまう。

「……旬」

奈津美はいつもより少し声のトーンを低くする。

その声も奈津美の視線も、まるで旬を突き刺すようだった。

やがて、観念したように、旬は脱力した。

「……だって、ナツ、絶対怒るし」

口の中で呟くように旬は言った。

「何したのよ、一体」

旬がこんなにひた隠しにするような悪事(?)をしていたなんて、奈津美には、何の心当たりもない。

「……怒んない？」

旬はチラリと奈津美の方を見た。

「聞かないと分からない。でも、隠される方が怒るよ」

奈津美は強気な態度で、さっきまでとは立場がまるで反対だ。

少し間を置いて、旬は言い辛そうに口を開いた。

「……えっと、まあ、色々あるんだけど。……前に、ナツんちの冷凍庫にあったおっきいアイス、勝手に食べちゃって……」  
そこまでで、ひとまず旬の言葉が止まった。

「……それで？ 食べちゃって？」

奈津美は話の先を促す。

「あ……あと、勝手にハム食べちゃって……ナツに食べたか聞かれても、食べてないって言っちゃって……」

「……それで？」

「それから……ゼリーとかプリンも食べて……」  
思い出す限り旬は口にする。

考えてみると、

思った以上に奈津美のものを勝手に食べていた。

旬にとっては、それが罪を重くし、奈津美の怒りを更に買ってしまいう気がする。

そしてそれを覚悟し、旬は俯いた。

「……まさか旬。それであたしが怒ってるって思ったの？」

「……へ？」

怒気を感じられない奈津美の声に、旬は拍子抜けし、顔を上げた。

そこにあつた奈津美の顔にも怒ったような感じはなかった。

「ナツ……怒んないの？」

「怒るも何も……知ってたから」

「……へえっ!？」

旬は目と口を大きく開けて驚いた。

「知ってたの!？」

旬はずいっと奈津美に迫る。

「だって旬。アイス食べる時、手で食べてたでしょ」

「う……うん」

奈津美の言うとおり、旬はアイスをこっそりと食べる時、スプーンを使わず、直接カップに手を突っ込んで人差し指ですくい取るようにしていたのだ。

「指の跡。綺麗に残ってたから」

「あ……」

言われて、旬ははっとした。

「それに、ハムも、ゼリーもプリンも、旬が食べたものは全部ゴミ箱から見つかってるわよ」

「あっ……」

旬自身、気付いていなかった。旬はしっかりと証拠を残していたのだ。

「お……怒ってない……の？」

旬は、恐る恐る奈津美に聞いた。

「怒るわけないでしょー。そんなことで」

奈津美は半ば呆れたように言った。

「あたしは食べ物勝手に食べられたぐらいで怒ることも思ってたの？」

「思っていないよ！」

旬は必死に首を横に振る。

「ナツがもし怒ってるとしたら……それぐらいしか理由が思い浮かばなくて……なんだあー」

旬は脱力して、ベッドに仰向けに倒れ込んだ。

「あー。何かすっげー悩んで損したかも」

少し、奈津美の良心が痛む。

ここまで悩ませてしまったのは、奈津美が中途半端なことをしてしまったせいなのだ。

「あ。てことはさー」

旬はふと思い出し、体を起こして奈津美の方を見る。

「俺がナツの歯ブラシ使ってたことも知ってたってことだよな」

旬の笑みさえ浮かんでいる調子に対し、奈津美の表情は強張った。

「何それ」

「え？」

奈津美の反応に、旬の方が聞き返してしまった。

「あたし知らないわよ」

「えっ!？」

予想外のことに、旬は急激に焦った。

「何なのよ、旬! 説明して!」

奈津美は強く言った。

「じ……事故なんだって! ちょっと間違えて……俺んちにあるナツの歯ブラシ、何回か使っちゃって……」

「何回か!?! 一回や二回じゃないの!?!」

「いや……そのー……」



「……そういえば、旬の家にある歯ブラシ、何でかすぐに広がるな  
って思ってたのよ。そのせいだったのね！」

奈津美はきつと旬を見た。

「最低！」

旬の顔からさつと血の気が引く。

「違うって、ナツ！」

「違うんでしょ！」

「さ……さっきはそんなことで怒らないって言ってたじゃん」

「それとこれとは話が別よ！」

どうやら奈津美は、一緒に歯ブラシは使えない派の人間だったらしい。

余計なことを言うんじゃないかと、旬は今更になって後悔する。

「な……ナツ……」

「知らない！」

泣きついてみようにも、あっさりと突っぱねられた。

その後しばらくの間、旬の情けない声が、奈津美の部屋で絶えず聞こえていた。

## 19 元カノ

それは、何てことのない、日曜日の出来事だった。

奈津美と旬は、街中を手を繋ぎながら歩いていた。

「腹減ったなー」

旬がぽつりと呟いた。

「えっ、もう？ お昼食べたばかりじゃない」

時刻は午後三時過ぎで、昼食は、一時頃に摂ったのだ。

「食べたばっかじゃないよー。もう消化されたし。なあ、ナツ。サ  
店かどっか行こー？」

旬が何となく甘えを含んだ言い方で言う。

「……もう。しょうがないなあ」

そんな風に言いながらも、本心は行ってもいいと思っている。

今日は特に目的のないデートだし、この暑い中を歩くより、どこか涼しいところでのんびり休むのもいい。

「やった。じゃあ行こ」

旬は本当に嬉しそうに笑う。

それを見て奈津美も笑みを浮かべた。

「俺、パフェにしよっかなー」

「まだお店も決まってないのに？　今から行くところにはないかもしれないよ？」

「んじゃパフェがある所にしょ。今、俺すっげーパフェの気分だから」

まるで女の子のような発言を聞いて、奈津美は思わず笑った。

そんな風に、取り留めのない会話をしながら歩いていた時だった。

「……旬？」

二人が歩いている前方から、不意に呼ばれた。

「え？」

旬は反応し、顔を横の奈津美から正面に向ける。

奈津美もほぼ一緒に、声の方に向いた。

そこには、奈津美にとっては初めて見る女が立っていた。

二十歳前後ぐらいの、一目で可愛いと思う風貌の女だ。

白い肌に、垂れ目気味の大きな目が印象的で、自然な茶色のボブヘアが顔の小ささを際立たせている。

彼女は、デニムのミニスカートに膝丈の黒のレギンス、それに黄色地にピンクの蝶のプリントされたTシャツというシンプルな恰好だった。余計な肉のついていない体つきと、そうでありながらTシ

ヤツを押し返す胸の膨らみは、彼女のスタイルの良さを引き立てているようだ。

「……ミキ」

小さな声で、旬が呟いた。とても驚いたように目を見開いて、ほんとんど、無意識のようだった。

「久しぶり。……元気だった？」

彼女は、ぎこちなく笑みを浮かべて言った。

「うん。……ミキは？ どう？ 大学」

珍しいことに、旬も、何だかぎこちない。

こんな旬を、奈津美は初めて見た。

「うん。楽しくやってるよ」

「そっか……よかった」

ぎこちない雰囲気醸し出しながら会話をする二人を、奈津美はもやもやとしながら見ていた。

そして『ミキ』という名前に、何か引っかかっていた。

聞いたことがあるような気がする。でも、どうして聞いたことがあるのか……

奈津美はすぐには思い出せなかった。

「旬は……デート中？」

『ミキ』はそう言って、チラリと奈津美に視線を向けた。

「あ、うん」

「そっか。……じゃあ、あたし、行くから。じゃあね」

「うん……じゃあな」

ミキは去り際に奈津美に軽く会釈をした。それに合わせて、奈津美も頭を下げた。

ミキはそのまま、奈津美達が来た方に歩いていった。

その後ろ姿を見たまま、奈津美は何も思い出せなかった。

「ナツ、行こ」

旬が奈津美の手を引いた。

その顔は、いつもとなんら変わりのない笑顔だった。

それから丁度いい喫茶店を見つけ、一息ついた頃。

「……あっ」

奈津美は思わず声を上げてしまった。

「何？ ナツ。どしたの？」

旬はパフェのスプーンを銜えたまま、きょとんとして奈津美を見た。

「ううんっ。何でもない」

奈津美は慌てて首を横に振り、ストローでアイスティーを一口飲んだ。

「えー？ ホントに？」

流石に怪しく映ったのか、旬はじつと奈津美のことを見る。

「うん、ホントに。……えっと、その……そう。帰りに、スーパー寄らないとって思い出して。食料品買わないと、ないから」  
奈津美は苦し紛れに適当に言い繕った。

逆に不審に思われただろうか……

「ふーん？ そっか」

旬は特に何も思わなかったらしく、パフェを食べることに意識を戻した。

よかった。一先ずほっとしながら奈津美は胸を撫で下ろす。

思い出したのだ。さっき会った『ミキ』の名前をどこで聞いたのか。

確か、冬に、カオルと一緒に行った居酒屋で。偶然隣に座っていた、旬の知り合いの話を盗み聞きしていた時に出た名前。

その時の話の重点はそこではなかったし、奈津美自身、他のことに意識がいていたので、すぐには出てこなかった。

思い出してみると、複雑な思いが更に募る。

さっき会ったミキが、旬の元彼女。

可愛い子だった。そういえば、旬が付き合うのは、皆いい女なのだと、旬の知り合いは言っていた。

当たり前だが、奈津美は、自分もその中に入っているとは思えない。

さっきのミキは間違いなく『いい女』に含まれている。そして、そう言われるだけあって、万人受けするような美少女だ。おそらく、ミキ以外の、旬が今まで付き合っていた彼女も、同じようなものなのだろう。

……いや。今、気になるのは、そんなことではない。

さっきの、旬とミキのぎこちないような妙な雰囲気だ。

あの感じだと、二人は別れてから一度も会ったことがないようだ。そして、これは奈津美の推測でしかないが、別れ方も、あまりすっきりしたものではなかったのではないだろうか。

今までに、街中で旬と歩いていて、何度か旬の知り合いに会ったことがある。それも男女関係ない。そして、決まってデート中かとか、彼女かとか、聞かれる。今日のミキもそうだった。

それに対し、旬も決まったように、デレデレして、嬉しそうに奈津美の肩を抱いたりして、奈津美のことを自慢する。

今日、ミキに対してはなかった。

そりゃそっか。普通、元彼女に今の彼女を自慢なんて出来ないよ

ね。あたしもしてほしくないし。

奈津美はそう思うけれど、何だか変だった。いつもなら、奈津美は恥ずかしくて嫌なのに、今日はそれがなかったことが、違和感があった。少し、嫌だった。

奈津美の知らない匂を、ミキが知っているような気がして。奈津美とはなく、ミキと匂だけが共有する何かがあるような気がして。

でも、当たり前なのかもしれない。

匂とは、ずっと一緒にいるような気がしているけれど、まだ一年と数ヶ月しか付き合いがない。

分かりやすい匂だから、匂のことは、何でも分かるように思っていたし、知っているような気がしていた。

それでも、奈津美は、匂のことを何も分かっていないし、何も知らないのだ。

今だって、分からない。夢中でパフェを食べているように見えるけれど、さっきのことがあって、どのように感じ、何を思ったのかなんて、奈津美には分からない。

じっと匂を見ていると、匂が気付いて顔を上げる。

「ナツ？　どしたの？　あ、食べたいの？」

匂はスプーンでパフェのアイスを掬って奈津美に口元に差し出す。

「いいよ。あげる」

無邪気に笑う匂を見て、奈津美は少しときめく。奈津美の好きな



旬の顔の一つだ。

でも、その顔は、ミキや、今まで付き合ってきた彼女にも見せてきた顔なのだろう。

いつもは、こんなこと思わないのに、今日はなぜかそういう風に思ってしまった。

「ナーツー？　溶けちゃうよ？」

旬の言葉にはっとする。

「え……あ」

奈津美が口を開けた瞬間、冷たいものが入ってくる。

「ん！」

驚きで目を見開いたが、次第に口の中にバニラの味が広がっていく。

旬が奈津美の口にスプーンを差し込んだのだ。

「おいし？」

スプーンを取りながら、旬が嬉しそうに尋ねてくる。

奈津美は今更ながら真っ赤になる。恥ずかしいことをさせられてしまった。喫茶店で堂々と、彼氏にパフェを食べさせてもらったのだ。

「しゅ……旬！」

口の中のものを飲み下し、奈津美は匂をキツと見た。

「エヘヘ。ナツ可愛いー」

匂はとろけそうなぐらいに顔を綻ばせた。

「もうっ……何言ってるのよ」

照れ隠しに、奈津美は顔を横に背けてアイステイーを飲んだ。

匂の、奈津美に対する『可愛い』は、いつもなら、照れながらも嬉しい言葉だった。

この『可愛い』は、世間一般の褒め言葉ではなく、匂のたくさんの愛情が凝縮されたようなものを感じるからだ。

でも、今日は喜べなかった。

勿論、嬉しい言葉であることには変わらない。

それでも、今日は、違うことまで考えてしまう。

この言葉も、きっと今までの彼女に言ってきたことなのだろう。さっきのミキだって、十分可愛いと言えるのだから。

こうやって、匂の一言に、一挙一動に、匂の今までの彼女との付き合いを垣間見ているような気がするのだ。

そんなことを気にしていたらキリがないことは分かっている。

匂と奈津美は、お互いがお互いに、初めての相手ではないのだ。それに、奈津美の方が四年長く生きている分、匂よりその相手は多いだろうし、奈津美は、絶対に匂に言えないこともしてきた。

それなのに、奈津美だけ旬の過去に口出しをするなんて勝手なこととはしてはいけないのだ。

「ナツ？」

旬の手が奈津美の顔の前でヒラヒラと動く。奈津美はやっと我に返った。

再び意識が飛んでしまったようだ。

「どしたの？　ぼーっとして」

ここで奈津美が『何でもない』と言ったところで、旬には何かあると分かってしまうだろう。それは今までのことで大体分かる。

だから、今日は、言ってみよう。

あまり核心に触れないように、遠まわしに聞けば大丈夫だろう。

「……ねえ、旬」

「ん？」

「さっき……会った女の子って」

そこまで言いながら旬を見ると、ほんの少し、目を見開かれたような気がした。

「……旬の……元カノ？」

聞いてしまった。

いきなり核心に触れてしまったようであるが、これで旬がどういう反応を見せるのか。

奈津美はさっきのミキが、十中八九旬の元彼女だということは分かっている。

だからここで旬が否定するのか、どうなのか、反応を見たい。

こんな試すような言い方は気が引けるが、気になるのだ。

旬が昔の彼女とどのような関係を持っていたのか。そして、今はどうなのか。

「……うん。そうだよ」

旬が今までとは違う声の調子で、淡々と答えた。

「でも、何でわかったの？」

「えっと……」

逆に旬に聞き返され、奈津美は言葉に詰まった。

正直に、前に偶然同じ居酒屋に居た旬の知り合いらしき人の話を聞いた、なんて言うのは、まわりくどくてややこしいから、いちいち言う気にはなれなかった。

それに、分かっているという事もバレてしまう。

「な……何となく。何となく思ったから……」  
しどろもどろに奈津美は答えた。

でも、さっきの二人を見たら、もし何も知らなくても、誰だってそういう風に思うのではないか。……と思う。

別に、不自然じゃない……よね。

「へー。すごいな。女の人の勘ってやつ？」

旬は奈津美の言ったことに特に疑問も感じなかったらしく、むしろ感心したように言う。

そうして旬は、再びパフェを食べ進める。

何だか、意外にあっさりとしているようだ。ミキの話題を出した時には驚いていたような気がしたけれど。

考えてみれば、今の彼女から前の彼女の話が出れば、動揺してしまふのが普通だ。

だから、これで自然なはず。

でもどこか不自然な感じもする。

何が不自然なのか、どうしてそう思うのかは、分からないけれど。

「……ねえ」

「ん？」

「何で別れたの？」

奈津美が聞くと、旬はスプーンをくわえたまま固まった。

ここまで聞かなくてもいいとは思っている。旬にだって色々あるだろうし、あまり突っ込まない方がいいだろう。

それに奈津美自身のためにも、聞かない方がいいんじゃないか。そう思っているのに、聞いてしまった。

「なに？ ナツ、気になるの？」

旬が口元にわずかに笑みを浮かべた。

「きっ……気になるっていうか……その……」  
そう聞き返されると、言いよどんでしまう。

確かに、気になるから聞いてしまったのだ。  
そのくせ、いつもの奈津美の性格で、素直に気になるとは言えない。

「ミキには……さっきの元カノにはさ」  
奈津美の返事の前に、旬が言葉を紡ぐ。

「俺、振られたんだ」

旬は、奈津美の方は見ずに、パフェをスプーンでつつきながら言った。

「俺が、バカだったから」

そこまで言って、旬はもうそれ以上は話そうとはしなかった。

奈津美ももうそれ以上は聞くことが出来なかった。

## 20 モヤモヤするもの

「じゃあな、ナツ」

「うん……バイト、頑張ってね」

四時過ぎに、旬は居酒屋のバイトがあるので、今日のデートはここまでだ。

「うーん……行きたくねえなあ……」

旬は口を尖らせて言った。

「せっかくのデートだったのにさあ……もうちょっとナツと居たいのに」

そんな言葉に、奈津美の胸はキュンと締め付けられる。

「もう……そんなこと言わないの。会えただけでもよかったじゃない」

奈津美は少し余裕ぶってそう言ってみる。

「ナツは、寂しくない？」

旬は小首を傾げ、まるで子犬のような目で奈津美を見つめる。

「寂しくないわけじゃないけど……でも、会えただけでも十分よ？  
旬が時間作ってくれたんだから」

これは、本当の気持ちだ。旬に会えるだけでも、奈津美は満たされる。

ただ今日だけは、ほんの少し強がりも含まれているけれど……

「……へへっ。そっか。それならいいや」

旬は単純に嬉しそうに顔を綻ばせた。

「バイト終わったらメールする」

「うん」

「んじゃ行ってきます」

「行ってらっしゃい」

そうして、お互いに手を振って別れた。

旬が見えなくなるまで見送ろうとしていると、少し離れたところで、旬は振り返った。

奈津美としっかり目が合うと、にっこりと笑って手を振ってくる。

奈津美も頬を緩ませて手を振り返した。

旬はそれで満足したように歯を見せて笑い、また歩き始めた。

今度は振り返ることなく、姿が見えなくなる所まで行った。

……帰ろう。

奈津美も、家に向かって歩こうとする。

あ、でも本当にスーパー行っとかないと。



あの時、旬にはその時の思い付きで、言ったことだったが、本当に食料品を買っておかなければならない。

そう思い直し、奈津美は目的地を変えて歩き始めた。

歩きながら、奈津美は今日のことを振り返る。

まさか、旬の元彼女と鉢合わせすることになるとは思わなかった。

そして、旬があんな反応を見せるなんて、思いもしなかった。

旬にミキとの別れの理由を聞いた後、お互いに話題を変えようとして他愛のない話をして、いつも通りに笑おうとしていた。

それでも奈津美は、どこかうわの空だった。

旬の言うことに反応し、ちゃんと言い返してはいたけれど、それをしていたのは体だけで、頭では違うことを考えていた。

旬とミキのことが、気になってしょうがないのだ。

もう終わったはずのこととはいえ、悪い方へと考えてしまう。

旬が振られたということは、旬は少なからずもミキに未練があったということではないのだろうか。

奈津美と付き合っていて、その間は未練なんて感じていなかったとしても。今日会って、その気持ちがぶり返してしまうことだって

あるんじゃないのか……

いや、そんなことはない。

もし、誰かに未練がある状態で、旬が奈津美に笑いかけてくれるはずはない。

奈津美は、旬の優しい笑顔を思い出す。

奈津美がそれを信じないでどうするのだ。

……そう思っても、いくら旬が奈津美に向けてくれる笑顔を思い出しても……

『俺が、バカだったから』

ミキとの別れの理由を話す時の、あの何とも言えない表情が奈津美の不安をかき立てる。

そして、気になる。どうして別れることになったのか。

前に、居酒屋で旬の知り合いの話を聞いた時。

確か、旬とミキは、旬が大学受験に失敗したことが原因で別れたと言っていた。

それなら、もし旬が大学に受かっていたのなら、二人は別れていなかったのだろうか。

もし別れて居なかったら、奈津美と出会っていても、今のような関係にはなっていなかったのだろうか。

……やっぱり、あんなこと、聞くんじゃないかった。

奈津美は小さくため息をついた。

旬に別れの理由を聞いたから、こんなにすっきりしない気持ちになってしまったのではないだろうか。旬が、はっきりと言わなかったから尚更だ。

色んなことが気になって、不安になって、頭の中がパンクしてしまいそうだ。

——コンコン

奈津美の右側から、何か硬いものを叩くような音がした。

反射的に、奈津美はその方を向く。

「あ」

一人だったけれど、思わず声を出してしまった。

奈津美が歩いていた右側には、コーヒーショップがあり、その窓に面した客席に、久々に見た顔……涼介と加奈がいた。

二人は笑顔で奈津美の方に手を振っている。奈津美も二人に手を振り返す。

すると、加奈が横に振っていた手を縦に振り、おいでおいでをするような仕草をした。

奈津美は少し驚いて『私が、そっちに?』と、口パクと指を指して尋ねてみた。

加奈はニコニコと笑って、大きく頷いた。

涼介も笑顔で加奈に同意しているようなので、奈津美は、とりあえず言われたように店内に向かった。

「奈津美さん。久しぶりですね」

奈津美が店内の二人が座っている席に向かうと、まず、涼介が言った。

「うん、久しぶり。前に遊園地に行った以来だもんね」

GW以来だから、ほんの二ヶ月ぶりのはずだが、遊園地でのWデートが、もうずっと前のことのようなだ。

「あ、涼介君。高所恐怖症は治った?」

「いやー……それは……」

涼介は渋い顔をして言葉を濁す。

「聞いて下さいよ、奈津美さん。涼介ったらね、あれ以来、また行こうねって約束したのに、全然行ってくれなくて」

涼介に対し、加奈が口を尖らせて言った。

「俺は別に約束してない。ていうか、一回行っただろ」  
涼介はブスツとしながら言い返す。

「一回なんて行っただちに入らないよ。涼介、ほとんど乗ってないし」

「あれで十分だったの」

二人の言い合いを、奈津美は微笑ましく見ていた。

前に会った時は、互いに勘違いをしていたが、今はそんなことは全くないようだ。

むしろ、前以上に仲睦まじくなったのではないだろうか。

もしそれが、あのWデートがきっかけだったのなら、奈津美は何もしていないけれど、なんだか嬉しい気持ちだ。

「あ、奈津美さん。座って下さい」  
立ったままだった奈津美に対し、加奈が隣の椅子に置いていた鞆をどけて『どうぞ』と微笑む。

「えっ。いいよ、あたしは……二人の邪魔したら悪いし」  
当然ながら奈津美は遠慮する。

今は、挨拶程度にやってきただけなのだ。デート中の二人に混ざって長居はできない。

「いいですよ。邪魔なんかじゃないです」

加奈は笑顔のまま首を横に振る。

奈津美は正直、少し驚いた。

前に会った時、加奈は奈津美が涼介と一緒にいただけで、奈津美に敵愾心というか、嫌悪感というか、とにかく悪いように感じていた。

それなのに、今日はそれがない。

加奈の方にも、それだけ気持ちに余裕ができてきたということなのだろう。

「じゃあ……少しだけ」

奈津美は、加奈の言葉に甘え、少しだけ、一緒にさせてもらうことにする。

「何か頼んできますか？」

涼介がカウンターを指差して言った。

「うん。大丈夫。あたし、さっきまで旬と喫茶店にいたから」

「旬とデートだったんですか？」

奈津美が答えると、今度は加奈が尋ねる。

「うん。旬はこれからバイトだから、さっき別れてきたところなんだけど」

「そうなんですか」

「奈津美さん、旬とは相変わらずですか？」

涼介はニツと口角を上げて笑う。

「相変わらずって……まあ、別に、特に変わりはないけど」  
そう答えながら、奈津美はまた今日のことを思い出した。

丁度今日、旬の元彼女に会ってしまった。特に、何か問題があったというわけではないけれど。

「奈津美さん？」

黙って、動きも止まってしまった奈津美の顔を、加奈が不思議に思っ  
て覗き込む。

「あ、ううん。何でも」

ないと言いかけて、奈津美は止まった。

「ねえ、加奈ちゃんと涼介君って、旬と昔から仲いいのよね？」  
ふと思いついたことを、奈津美はそのまま口にした。

「え？ あ、はい。昔からって言っても、私は高校からですけど」

「俺は中学から一緒ですよ。それがどうかしたんですか？」

「うん……その、大したことじゃないんだけど」

迷い、躊躇いながら奈津美は、言葉を紡いだ。

「涼介君達は……旬が前に付き合ってた彼女のこととか、よく知っ  
てるのかなって思ってた……」

言った後に加奈と目か合い、その瞬間、奈津美はハツとする。

「……ごめん！ こんな、聞いていいことじゃないよね」

奈津美は慌てて謝った。

すっかり忘れてしまっていた。

加奈は昔、旬のことを好きだったのだ。

いくら今、涼介とうまくいっていても、昔のことを思い出す話は、したくないだろうに……

何も考えずにこんな無神経なことをしてしまうなんて、気持ちに余裕のない証拠だ。

「何でそんなに謝るんですか？」  
加奈は、奈津美がそこまで慌てるのを、不思議そうに首を傾げている。

これだと、もしかしたら、加奈は奈津美が旬と加奈の昔のことを知ってるとは思っていないのかもしれない。

「あ、あー……別に昔の話ですし、今は関係ないですよ」  
涼介も少し焦った様子でフォローする。

広い意味で取れる言葉だから、旬と旬の元彼女のこととも、旬と加奈のこととも取れる。この場合は後者だろう。

しかし、涼介まで慌てるのを加奈は訝しんでいる。

そしてすぐにピンときたようで、目を見開いて涼介を見た。

「涼介っ……まさか奈津美さんに高二の時のこと言ったの？」



なかなか鋭い勘をしている。その通りだ。

「いや……その……」

涼介の目は泳いでいて、何も言わなくても凶星だということが丸分かりだ。

「もうっ！ 涼介え！」

「ご……ごめんね、加奈ちゃんっ。あたし、別にそんなつもりじゃなくて……」

涼介に怒る加奈に、奈津美は、フォローに入る。

奈津美が余計なことを言ったばかりに、二人の仲がまたこじれてしまったら、申し訳がたたない。

「奈津美さん、気にしないで下さいね」

加奈は奈津美の方を向いた。

「あれ、もう二年も前のことですから。あたしには一応涼介がいますし」

「一応ってなんだよ……」

「でも奈津美さん。何でそんなこと聞くんですか？」

涼介が呟くように言うが、加奈はそれに対して何も返さない。

加奈に無視されて、涼介は少し落ち込んだようにいじけていた。

「えっと……今日、偶然会っちゃって」

加奈の隣の涼介を気にしながら、奈津美は言った。

「会ったって、元カノに？」

「うん……ミキって子なんだけど」

「あ、ミキちゃんですか」

知っている風に加奈は言った。

「知ってる？」

「はい。同じ高校ですから。あ、でも、あたしはクラス一緒になったことないから殆ど喋ったことないですけど……涼介の方が知ってるんじゃない？」

加奈は涼介の方に話を振る。

無視されたと思っていた涼介は、一瞬不意を突かれたようだった。

「……え？ あ、ああ。知ってるには知ってるけど。……俺もクラス同じになったことはないけど、ミキは部活のマネージャーだったから」

「涼介君で、サッカー部だったの？」

「はい。中学から旬と一緒になんです」

「そうなんだ……でも、旬、高校では幽霊部員だったんでしょ？」

以前に、旬が中学、高校とサッカー部に所属していたというのは聞いたことがある。

しかし、高校では、バイトもしていてあまり部活に出ておらず、殆ど幽霊部員のようなだったと、笑いながら言っていたが……

「いや、そんなことはないですよ。旬は自分ではそういう風に言ってますけど、試合前とかはちゃんと毎日出てきてたし。そりゃ普段から毎日出てる奴と比べたら不真面目かもしれないですけど」

「そうなの？」

涼介の言葉に、奈津美は少し驚く。

「そりゃそうですよ。別に部活は強制じゃなかったし、旬だってサッカーしたくて入ってたんですよ」

涼介が笑いながら言った。

奈津美は更に意外に思う。

旬が、高校時代の部活は特に真面目にしていなかったという風に言ったから、奈津美は本当にそうだったと思っていた。今の旬のいい加減な性格を考えると、それはそれで納得できたのだ。

高校時代の旬は、今とはまた違うのだろうか。

またしても、奈津美は旬のことを何も知らないのだと思い知らされる。

「ねえ、話ズレてない？ ミキちゃんのことでしょ？」

加奈が涼介に言う。

そういえばそうだった。

しかし、もう聞きたくないような気もしてきた。

「あ、そうか。……そういえば、ミキって、初めは別に旬のこと好きではなかったと思うけど。見る限りでは部員として仲良かったみたいだし……付き合うきっかけって言ったらあれだな。俺らの最後の試合かな」

「あー。あれは凄かったね」

加奈には涼介が言っていることが分かるらしく、頷いている。

「何？ 何が凄かったの？」

一人置いてきぼり状態になって、奈津美は二人に説明を求める。

「高三の時の、俺らの最後の試合です」

「あたしも応援に行ったんですけど、旬、凄かったですよ」

「旬が？」

奈津美には意外に思えて、思わず目を丸くした。

「最後の試合の対戦相手、結構手強くて、後半の半分過ぎたくらいで一对三で、負けてたんです。それで、もう最後だからって、控えだった旬が出たんですよ。そしたら、すぐに旬が一点決めて、旬のアシストでもう一点決まって……あっと言う間に同点になったんです」

「へえ……すごいね」

奈津美にはサッカーのルールはいまいち分からないのだが、要は旬が短い時間で、二点分チームに貢献したということだ。それなら、

単純にすごいことであるということは分かる。

「でも、そんなにすごいことできたくらいなのに、旬はレギュラーじゃなかったの？」

「別に旬は上手くなかったわけじゃないですよ。むしろ、レギュラーでもおかしくないぐらいで。旬は運動神経はいいし、ろくに練習に出てこなくても上手かったんですよね。まあ、ちゃんと部活に出てこないからレギュラーから外されてたわけですけど。旬自身も、別にそんなにこだわってなかったみたいなんで」

「そうなんだ……」

「でも、最後の試合であそこまでやるとは思ってなかったですよ。部員も顧問も」

「ねー。あたしもあそこまで負けちゃうのかと思ってた」

苦笑いにも似た表情を浮かべる涼介に、加奈も共感して頷く。

「結局、その試合には勝てたんだ？」

奈津美もつられて口元を緩め、確認するように言った。

「いや、勝てませんでした」

「……え？」

予想外の涼介の返答に奈津美は目を丸くする。

「旬が入って同点になったんですけど、逆転はできないまま後半が終わって。結局PKにまで持ち込んだんですけど……そこで負けちゃって……」

「そっか……」

折角いいところまでいったのに、最後の最後に負けてしまったなんて、悔しいんだろうな。奈津美はそんな風にしんみりと思った。

「まあ、そこでミスったのは旬なんですけどね」

「えっ!？」

「何かもう、笑えるでしょ」

そう言いながら涼介は笑っている。

「でも、何か旬らしいっていえばそんな感じの試合だったよね」  
加奈も笑いながら言う。

「確かにな」

奈津美はその場に居なかったが、何となく分かる気がする。

旬はそういう、器用貧乏なところがあるのだ。

「それで……試合が終わってすぐくらいだったかな。旬とミキが付き合い始めたの」

不意に出てきたその名前に、奈津美はぎゅと胸を締め付けられた。

「結果はあんなんだったけど、ミキはあの試合で旬のこと意識し出したって、他の奴に聞いたから……何でかは謎だけど」

「私は分かるよー。何か輝いてたもん、試合の時の匂。いつもより  
かっこよかったし」

加奈が揚々とした調子で言った。

「……それ、俺の前で言うか？」

「あっ……違うって！ 涼介だってすごかったよ！ すごいかったこ  
よかった！」

涼介に対し、加奈はフォローする。

「別についてに言われても嬉しくねえし」

「ついでじゃないってばー」

そんな言い合いを、仲良くする二人を見て、奈津美は、なんと表  
現をしているのか、青春時代の爽やかさというか、そんなものを感じ  
る。

そう言えば、涼介と加奈は高校からの付き合いだと言っていた。

同級生との恋愛で、こんなに長く続くなんて、奈津美には経験が  
ない。

というより、奈津美は、学生時代に学生らしい恋愛をしてこなか  
ったような気がする。

だからだろうか。涼介と加奈のやりとりに、爽やかさを感じるな  
んて……

匂とミキだって、付き合い始めたきっかけが、部活の最後の試合、

なんて、ありがちなことだけれど、奈津美にとっては、新鮮に思える。

奈津美と付き合うきっかけを考えて比べてみると、何だか恥ずかしい。

元々、旬にとっては、奈津美との出会いのほうが特殊だったのかもしれない。

酔った女に絡まれ、付き合う云々の前に男女の関係になるなんて、当時十八歳の旬にとっては、有り得なかったことだろう。

しかし、どうして……

「奈津美さん？」

「……え？」

加奈に呼ばれ、顔を覗き込まれて、奈津美は我に返る。

「どうしたんですか？ ……あ、奈津美さんまで気にしないで下さいね！」

「え？」

「あたしは別にそういう意味でかっこいいって思ったわけじゃないですから」

加奈が何やら必死になって訴えている。



一瞬何のことか分からなかったけれど、そういえば旬の話をして  
いたのだ。きっと、奈津美が加奈の発言を変に思ったのではないかと  
心配したのだろう。

「ううん……違うの」

奈津美は、小さく首を横に振った。

「ただ、ね……何で、二人は別れたのかなあって、思ってた」

気になることはたくさんあるけれど、やっぱり一番気になるのは  
そのことだった。

「そう言えば何で？ 何がきっかけで別れたの？」

加奈も詳しくは知らないらしく、答えは涼介に求められる。

「えーっと……俺もそれはよく知らないって言うか……俺が、旬と  
ミキが別れたって知ったの、少ししてからだったから……旬は別に  
詳しく話したがらなかったし」

涼介はそう言いながら頭を掻いた。

「でも、多分旬が大学落ちて、それで気まづくなって……って感じ  
で別れたんだと思います。旬のやつ、ミキと同じ大学受けたんです  
けど、旬だけ落ちちゃって」

そうか。そういうことか。

前に居酒屋で聞いた、旬が大学落ちたのが原因でミキと別れたと  
言っていたのが、何となく分かった気がする。

でも、旬は振られたと言っていた。それなら、それを機に愛想を尽かしたのはミキの方というわけで、旬は別れたと思っていたわけではないのではないか。

……て、あれ？

考えていて、奈津美はふとしたことに気付く。

奈津美が旬と付き合い始めたのが二月半ば。

私立だったら、大学入試やその結果発表もそれぐらいではないだろうか。

ということは、旬は、ミキと別れてかなりすぐに奈津美と付き合い始めたということか……

『彼女って、ミキ？』

『違う違う。ミキのすぐ後』

断片的に、居酒屋での会話が蘇る。

あの時、確かにそう言っていた。

『すぐ後』というのは、本当に『すぐ』であったということだろう。

なんだ。そうだったんだ。

奈津美は、妙にがっかりしたような気持ちになった。

……いや、前の恋人と別れてからの間でいうと、明らかに奈津美の方が短い自信があるが。何て言っても別れて翌々日だ。

そんな奈津美が今更、旬の元彼女のことをどうこう言う資格はない。

それは分かっているけれど……

「奈津美さん？」

再び加奈から声を掛けられる。

また黙り込んでしまった。

「……ごめん、何でもないの」

奈津美は、表面上だけでも笑おうとしたが、顔の筋肉が上手く動かなかった。自分でも上手く笑えていないのが分かる。

「あたし、そろそろ帰るね」

奈津美は力無く言っ立ち上がった。

「ごめんね、色々聞いちゃって。でも、ありがとう」

「……いえ」

涼介と加奈は、心配そうに奈津美を見ている。しかし、掛ける言葉も見つからないようで、ただじっと見つめているだけだ。

「じゃあ、またね」

「はい……さよなら……」

軽く二人に手を降って、奈津美は店を出て言った。

「……あたし達、余計なこと言ったのかな」

「……言っちゃった……のか？」

涼介と加奈は顔を見合わせ、二人してうーんと唸った。

奈津美はぼんやりとしながら歩いていた。

何をそんなに気にしているのだろうか。自分でもよく分からない。

ただ漠然とした焦燥感が胸に残っていた。

## 21 再会

数日後の夕方。

旬はカフェのバイトをしていた。

前に雑誌で宣伝された効果もあって、ここのところ、そこそこの忙しさだ。

「いらっしゃいませー」

店の扉が開き、手の空いていた旬が客に声をかける。

「……あ」

その客の顔を見て、旬は思わず素の声を出してしまった。

「げっ！」

客の方も、旬の顔を見ると、眉間に皺を寄せた渋い顔になった。

「田中じゃん！ 久しぶりー」

旬は、笑顔で声をかけた。

田中とは、旬と同じ高校で、三年の時に同じクラスだった。

会うのは、数ヶ月前に、旬が田中に借りたCDを返した時以来だ。

「旬……ここでバイトしてんの？」

「おう。言ったことなかったっけ？」

「……最っ悪」

田中は深く息を吐きながら、強調して言った。

「ねえ、友達？」

田中の陰から、ひょっこりと女が出てきた。

旬や田中と同じ年くらいの可愛らしい娘だ。

旬は彼女に目をやり、口を『おっ』という形にした。

そして、視線はその二人の繋がれている手にいく。

視線に気付き、田中は手をさっと後ろに隠した。

それを見れば一目瞭然だ。

旬はにんまりと笑う。

「……なあ、やっぱやめねえ？ この店」

田中は嫌そうな顔をして隣の彼女に言う。

「えー。やだあ。ずっと来たかったのにー」

彼女は猛反対している。

田中は彼女には敵わないらしく、深くため息をついた。

「じゃあ二名様ですね。こちらのお席にどうぞ」

旬はマニュアル通りの接客を、必要以上に丁寧に言った。

「……何かムカつく、この店員」

田中は匂に聞こえるように舌打ちをして言った。

二人を席に案内し、メニューを渡して、匂は他の仕事をする。

そして、五分ほど経った後。

「おい、店員。注文」

近くを通りかかったところで、田中が声をかけた。

「はい。……ていうかさ。そんな呼び方するなよ。感じ悪いだろ」  
席に向かうと、匂は、他には聞こえない声のトーンで言った。

「うっせえ。こっちは客だぞ。店員をどう呼んだっていいだろ。クレームつけんぞ」

どうやら田中は、さっきのことを根に持っているらしい。機嫌が悪い。

匂は、本当にこんな客がいたら嫌だなあと、口には出さずに思った。

「……あれ？ 彼女は？」

今更ながら、匂は田中の正面の席に誰も居ないことに気付いた。さっきは、そこに座っていたはずだ。

「トイレ行ってる。それより注文。アイストレートティーとアイスコーヒート、ミルフィーユ一つ」

「はいはい。かしこまりましたー」  
旬は伝票に注文を書き込む。

「……なあ、旬」

突然、田中が神妙に話しかけてくる。

「ん？ 何」

旬は伝票から顔を上げて言った。

「旬ってさ、ミキと、別れてから会ってるのか？」

「え……」

予想もしなかったことを聞かれ、旬は目を丸くした。

「何だよ、いきなり」

すぐに質問には答えられず、旬は聞き返してしまった。

「いや、別に深い意味はないけど……俺の彼女、ミキのツレだから、何となく思い出したんだよ」

「へえ。んじゃ、田中の彼女って、ミキの紹介？」

田中は、旬がもし受かっていたら進学予定だった大学に行っている。そしてその大学は、ミキと同じだ。

「紹介とは違うけど……まあ、大体そんなところか。んで、どうなんだよ？ ミキと会ったのか？」

話の論点がズレそうになるのを、田中が元に戻す。

「いや、会ってな……あ。違うわ。こないだ会ったんだ。めちゃく



「ちゃ偶然だったけど」

「思わず、会ってない、と言いつつになつたが、先日のことを思い出し、そう言った。」

「偶然？」

「うん。俺、彼女と一緒に歩いてて、道でばったり。軽く挨拶して終わりだったけどな」

「ふーん。今カノと元カノが会ったのか。……修羅場か？」  
最後の方には、若干の冗談が含まれてるようだ。

「んなの、なるわけないじゃん。ミキとは終わってるんだし」

「ふーん。そりゃそうか。ま、今カノが元カノだって分かることもないしな」

「うん……あ。でも、後で、さっきの元カノ？　って聞かれたけど。だから、そうだって言ったし」

「へえ？　やっぱり女は勘が鋭いんだな」

奈津美がミキのことを感づいたのは、実は田中達の話聞いたからなのだが、そんなことは知る由もない。

「……ていうかさあ」

田中が少し迷いながら、話を変える。

「ミキ、匂と別れてから、誰とも付き合っていないみたいだぞ」

「……え？」

匂は、まさに鳩が豆鉄砲を食ったような顔になった。

「俺も学部違うからミキに会うこと少ないけど、俺の知ってる限りでは全然噂も聞かないし。俺の彼女が言うには、何回か告られたりしてるらしいけど、全部断ってるって」

田中が何を言いたいのか、鈍い匂でも何となく感づいた。

自惚れているようであるが、ミキは匂にまだ未練があるのではないかとということだ。

しかし、それはないはずだ。

あの時、別れを切り出したのはミキの方なのだから。

匂が何も言えないでいると、田中の彼女が戻ってきた。

彼女には、二人がしていた会話が分かるはずもなく、きょとんとして匂と田中を見比べている。

「……悪い。余計なこと言った。気にすんな」

田中は気を使ってか、苦笑混じりに言った。

「あ……うん。それじゃ、戻るから」

そうして匂は、田中の彼女の方に『少々お待ち下さい』と無意識に笑顔を作って言い、その場を離れた。

（ミキ、旬と別れてから、誰とも付き合っていないみたいだぞ）

旬の耳には、田中のその言葉が残っていた。

カフェのバイトが終わり、旬はぼんやりとしながら家までの道を歩いていた。

「私、沖田君のこと好きになったの」

ミキにそう言われたのは、高三の夏。部活を引退して少し経ったぐらいの時だった。

ミキに言われて、最初は驚いた。

まさかミキが自分のことを、というのが勿論一番だったけれど、告白の台詞が少し変わっていたから。

今までにも数回告白されたことはあって『好きなの』とか『付き合ってほしいの』などと言われた。

しかし、告白で『好きになったの』は、聞いたことのない言葉だった。

だから呆気にとられた。

でもそれ以上に、可愛いと思った。

必死の表情で、頬を赤くして、じっと自分を見ている。

そんな彼女を、単純に可愛いと思った。

以前から、男子の間で可愛いと言われているということは関係なく、ミキという存在が、可愛いと思った。

この時は、ミキのことは、恋愛対象として特にどうとも思っていなかった。

ただの同級生、ただの部活仲間としか思っていなかったけれど。

単純かもしれないけれど、この瞬間に旬の目には、ミキが特別に映った。

きっと好きになるんだろうな。

直感的にそう思い、旬はミキの告白を受け入れて、付き合い始めた。

勿論、いい加減な気持ちではなかったし、むしろその時で一番の気持ちだった。

ミキと付き合い合っている間は、楽しかった。

受験生だったから、あまりしょっちゅうはデート出来なかったけれど、学校から一緒に帰ったり、ミキの家で勉強したり……そんな付き合い方の中で、キスもしたし、体も重なるような関係にもなった。

もし、旬が大学に受かっていたら、まだミキと付き合い合っていたかもしれない。

そんなことを考えても、今の旬には奈津美がいるので、そうとは言い切れないけれど。

そうだ。奈津美と付き合い始めて今まで、ミキのことを思い出したことなくってなかったのに……

この間ミキと会ったからだろうか。

それとも、田中にあんなことを聞いたからだろうか。

こんなことを考えていると、やましいことはないはずなのに、何だか奈津美に対して悪いことをしているような気がする。

奈津美と付き合い始めてからは、旬の頭の中の大半は奈津美のことで占められていた。そのせいなのか。

「あ……」

ぼんやりしてした視界が急にはっきりとした。

旬の視線の先には、歩く奈津美の後ろ姿があった。

後ろ姿でも、旬には、それが奈津美だということはちゃんと分かる。

旬は、歩く速さを上げて、奈津美を追い掛けた。

「ナーツっ」

旬はいつものように、後ろから奈津美に抱き付いた。

「きゃっ」

奈津美は肩を震わせ、小さく叫んだ。

「旬!？」

奈津美はすぐに後ろに振り返る。

「へへー。ナツう」

旬は笑いながら奈津美を抱き締める。

「もうっ。いきなり抱きついたりしないでって何回言ったら分かるの……ていうか、離して! 人居るから!」

奈津美は旬の腕から逃れようとする。すると、その前に旬の腕の力が抜けて、奈津美が解放される。

「へへっ」

旬はいつもの、気が抜けるような笑い方をする。

しかし、いつもはしつこいぐらいにくつついて、なかなか放そうとしないのに、何だか調子が狂う。

だからと言って、いつも通りにしてほしいわけではないが。

「ナツ、今帰り?」

不思議に思う奈津美を余所に、旬は笑顔で聞いてくる。

「う……うん」

「じゃあ、送ってくよ。俺も今日はもうバイトないし」  
そう言いながら旬は奈津美に手を差し出す。

「うん……」

奈津美が匂の手を取ると匂が指を絡めて握ってくる。  
そして、何かを確かめるように、ぎゅっぎゅっと何度も奈津美の手を握り直している。

歩き始めてからも、いつも以上に距離が近い。繋いだ手が匂に当たるぐらいだ。

嫌なわけではないけれど、何だか違和感があった。

しかし、結局そのまま、何てことのない話をしながら奈津美のコーポへと歩いていった。

「送ってくれてありがと。ここまででいいよ」

コーポの前まで来て、奈津美は立ち止まった。

「いいの？ 部屋まで送るのに」  
匂が残念そうに言う。

「うん。大丈夫よ。もう階段だけだし」

「そう……？」

匂は少し寂しそうな目をする。

奈津美との別れ際、そんな目になるけれど、何となく今日は違う気がする。

「んー……じゃあー」

旬は何かを確認するように周りを見回すと、両腕を奈津美の体に回し、抱き寄せた。

「ちょっと……旬！　こんなところで……」

突然の旬の行動に、奈津美は驚きを隠せない。

「大丈夫だよ。誰も居ないから」

旬はそう言って離そうとしない。

「だからって……」

確かに、今は他に人影は見当たらない。しかし、こんなところでは、いつ人が現れてもおかしくはない。

「あー……落ち着く」

旬は奈津美の頭に頬をすり寄せて独り言のように言った。

「旬……？」

やっぱり、変だ。

何がどうというのは分からないけれど、直感的にいつもと違うのではないかと感じた。

何かあったのだろうか。

「……旬、どうかしたの？」

奈津美は旬を見上げて言った。



「ん？ 何もないよ？」

旬はニツコリと笑っている。しかし、それすらも不自然に見える。

「……んじゃ、もう帰るな」

旬はそつと奈津美から手を離れた。

「旬……やっぱり、ちょっと寄ってく？ あ、ご飯食べていかない？」

奈津美はそう言って、旬の様子を伺った。

旬は一瞬だけきょとんとして、すぐにニンマリと笑った。

「いいの？」

そして奈津美の耳元に手を添えて、まるで内緒話をするかのように続ける。

「俺、ナツも一緒に食っちゃうよ？ 我慢できないから」

「なっ……」

奈津美の顔が一気に真っ赤になった。

「何言ってるのよ！ もういい！」

奈津美はぷいっと横を向いた。

「怒んなよお。つか、怒っても可愛いだけだよ？」

旬は指で奈津美の頬をつつく。

「知らない！」

奈津美はムキになって、旬の方は向こうとしない。

旬はそんな奈津美を見ながらニヤニヤと笑い、素早く奈津美の頬に唇を寄せ、ちゅっと音を立てて触れた。

「なあっ……!?!」

奈津美は手で頬を押さえ旬の方を見る。

「何考えてんのよお！」

あまりの恥ずかしさに耳の方まで熱くなっている。

「照れんなってー。嬉しいくせにい」

「嬉しくない！」

奈津美はムキになって言い返した。

「もうっ！ 帰るんでしょ！ それならさっさと帰る！」

「ナツ！？ そんな怒るなよお。あとでちゃんとラブコールすっから」

そう言っ、旬は指先で奈津美の頬に軽く触れた。

奈津美がじっと旬を見上げると、旬は『な?』と、まるで小さな子供に言い聞かせるように言う。

奈津美は何も言わずに頷いた。

しかし、別に旬が後で電話をくれると言って、それに納得して頷いたわけではない。

「んじゃ、そろそろ帰るな」

「うん……」

優しく奈津美の髪を撫でながら言った旬に、奈津美は今度はちゃんと声に出して頷いた。

「んじゃあな」

旬は笑顔で手を振り、奈津美もそれに応えて手を振った、と思う。

その辺りの記憶は曖昧になっていた。

他のことが気になって、旬の背中を見送っているということしか、今の奈津美には感覚がない。

旬の背中が見えなくなっても奈津美はぼんやりとそこに立ち尽くしていた。

ついムキになって、追い返すようなことを言ってしまったが……

きっと何かあったはずだ。

ああやって、誤魔化された気がする。

いつもなら、奈津美が部屋に来るかと言えば、尻尾を振って（あくまで例えだが）喜ぶはずだ。

それなのに、こっちが嫌がるようなことを言うし、帰れと促すと、割とすぐに引いて、帰ってしまった。

絶対に、おかしい。

奈津美の方からこうなることを言っておいて矛盾しているが、そう思ってしまう。

でも、奈津美には何でも話すような旬が、何も言わないなんて、よっぽどのがあったのだろうか。

いつも奈津美にべったりとしてくる旬が、一人になりたいと思うほど……

それなら、待とう。

旬が、話してくれるまで。旬が、奈津美を頼りにしてくれるまで。

旬が一人になりたいのなら、そうさせようと思う。

本当は、気になるし、直接聞き出したい。

でも、旬が話さないのなら、聞かない。

年上としての意地とも言うべきか……いや、それよりも、彼女として、旬のことを信用して、待ちたい。

奈津美はふうっと息をつき、コーポの中へと入った。

旬は、マンションへと向かいながら、自分がしたことを少し後悔している。

折角奈津美が家に寄って行くかといったのに……しかも、珍しく平日に。

でも、何となく今日はそんな気分になれなかった。

自分でも不思議なくらいだ。

それでも……今は奈津美と居ない方がいいのではないかと思った。

旬の気持ちが中途半端だと、奈津美を傷付けてしまいそうな気がする。

勿論、奈津美が旬の一番であることには変わらないけれど。

それでも今は、ちゃんと自分の気持ちを整理することが大事だと、旬なりにそう判断したのだ。

もうすぐ、旬のマンションに着く。その時だった。

「え……?」

旬は無意識に声を漏らして、立ち止まっていた。

マンションの入り口のすぐ横に、ここには居るはずのない人物がいた。

見間違いなのではないかと思った。

しかし、そうではなかった。

間違はなく、ミキだった。

## 22 過去の清算

どうしてミキがここにいいのか、分からなかった。

ミキと別れてから一度も会ってなくて、連絡も取っていなかった。ミキは、旬が一人暮らしをしていて、ここに住んでいることなんて知らないはずだ。

それなのに、何で……

今、二人の間には五メートル少しの距離が開いている。

旬は、その距離をどうしたらいいのか分からず、立ち尽くしたまままだ。

しかし、動きがあったのは、ミキの方からだった。

ミキの顔がふとこちら側を向き、目が旬のことを捉える。

声は聞こえなかったけれど「あ」と言った気がする。

ミキはゆっくりと旬の方に近づいてくる。

旬はぎゅっと口を引き結んだ。緊張して、変な風に、体に力が入っていた。

「……旬」

ミキが、旬との間に少し間を開けて立ち止まった。

「ミキ……何で、ここに？」

やっと声に出せたのがそれだった。

でも、色々考えて、言えることはこれしかなかった。

ミキは、少しバツが悪そうに斜め下を向いて、匂から視線を外している。

「ごめん……その、田中君に聞いたの。匂が、このマンションで一人暮らししてるって」

田中に……

ああ、だからか。田中がミキのことを聞いてきたのは。

どんな経緯かは知らないが、ミキが田中に匂のことを話題として持ちかけたということだ。そして、田中は匂がここで一人暮らしをしていることを話した。そういうことだろう。

「あっ……でも、部屋がどこなのかまでは聞いてないからっ。今日も、少しだけ待ってみて、会えなかったら、もう諦めるつもりで……」

言い訳をするように、顔を上げて必死に言う。しかし、最後の方はまた声が小さくなり、顔も下に向いていく。

待ってた？ 俺を？

ミキが言ったことに匂は混乱してしまう。



「電話とか、メールにしようとも思ったんだけど……でも、やっぱり直接話したかったから」

ミキはもう一度、しっかりと顔を上げた。じっと真剣な目で匂を見上げている。

「少し話せないかな？ 本当に少しでいいから……もう、これ以後だから」

泣き出しそうにも見えるミキの顔を見て、匂はすぐには返事はできなかった。

まず頭に浮かんだのは、奈津美の顔だった。こんな場面を見たら、こんなことを知ったら、奈津美はどう思うだろうか。また嫌な思いをさせて、傷つけてしまうだろうか。

彼女がいる身で、今まで連絡も取っていなかった元彼女と二人きりで会うなんて、非常識だろうか。

でも、目の前のミキを放っておくこともできなかった。

それに、別れる時も、電話で話ただけで、ミキとはきちんと話していないのだ。

今更かもしれないが、ここで話をつけるべきかもしれない。

そしてそうすることで、今の中途半端な状態も、解消できるような気がした。

だから、今日だけ……

「うん……分かった」

これが最初で最後だからと、何度も言い聞かせ、旬は頷いた。

二人は、歩いて近くの公園まで来た。

あのままマンションの前で話し込むのは落ち着かないし、旬の立場的に部屋に上げるわけにもいかない。

そうになると、思いつくのは公園しかなかった。

もう6時前という時間だからか、遊んだりする子供の姿は見えなかった。

公園にたった二人だけで、やけに静かだった。

「なんか、懐かしいな」

ミキがぼつりと呟いた。

「え？」

旬がミキの方を向くと、ミキの口元には、僅かな笑みが浮かんでいた。

「旬、覚えてる？ 私達が付き合い始めた時のこと」

旬の方は見ずに、公園全体を見渡しながら、ミキは言った。

「ここじゃないけど、あれも公園だったよね。時期も丁度今ぐらいで」

「……うん」

旬は静かに頷き、その時のことを思い出そうとした。

確かあの時は、何か、偶然のことでミキと一緒にになり、二人で帰っていた時だった。

高校から最寄りの駅に行くまでに、公園があった。通学路ではないけれど、近道として、この横切って帰る。

この時の旬とミキもそうで、この公園を通っていた。

ミキから告白されたのは、その時だ。

どうしてその話の流れにかったのかも、記憶が曖昧になっている。

人の記憶とは意外といい加減なものだ。旬だって、ミキと付き合いっていた時は、ミキに告白された時のことなんて、わざわざ思い出そうとしなくても、はつきりと覚えていたはずだ。どれだけ経っても、忘れるはずのないことだと思っていた。

それなのに、今は少ししか覚えてない。

これは、ミキへの気持ちの薄れを表しているのか。それとも、自分のいい加減さが原因なのか、旬には分からないことだった。

「ミキは……何であの時、俺に告ってくれたんだ？」

こんな時に、こんな状況でそれを聞いてはいけないのかもしれないかもしれない。

だけど、聞くなら今しかない。もうこれで最後なのだから。

ミキは口元に僅かに笑みを浮かべた。

「覚えてないの？ あの時、私達の少し前にカップルが歩いてて…」

「あっ……」

ミキに途中まで言われて、旬の記憶は蘇る。

あの時、旬とミキの前を、同じ高校の男女が歩いていた。見たことがなかったから、おそらく他の学年の生徒だ。

しかし、手を繋いで歩く二人を見ていたら、カップルであるということは一目瞭然だった。

それを見て、旬から聞いたのだ。ミキは好きな奴はいないのか、と。そしたら、ミキは急に黙り込んで、次の時には真剣な顔をして、旬のことが好きなのだと言った。

そして「好きになったの」と、告白された。それが始まりだ。

「……私ね、正直言うと、旬のことあんまり好きじゃなかったの」

ミキの声で、旬は我に返った。

「……え」

ミキの意外な言葉に、旬はきょとんとしている。

「だって、しょっちゅう部活サボってたし。しかも、トレーニングの日なんか殆ど来たことなかったでしょ」

ミキの言い方には、多少の棘があるように聞こえる。

「それは……その……」

今更こんな話をして、別に誰に咎められるわけでもないのに、旬は何となくバツが悪かった。

高校時代の部活は、本当にいい加減だったと、今になって旬は自分でも思う。

でも、やりたいことがたくさんあって、それを同時にやろうとしたら、部活の方がおざなりになってしまっていたのだ。そして、そのせいでサボり癖がついて、部活はキツイトレーニングの日はあまり来ないようにしていたのだ。

「そんなに練習に来ないくせに、それなりに上手いし。毎日来てる部員からしたら嫌味だよ」

ミキは尚も棘のあることを言う。

「別にそんなつもりはなかったんだけど……」

なぜか、昔の部活のことで旬の方が圧倒的に立場が弱くなっている。

「うん……分かってるよ」

口元には笑みを浮かべて、ミキは目を伏せた。

「最後の試合の時、旬が試合に出たでしょ」  
ぽつりぽつりと、思い出していくようにミキは言った。

「その時ね、私、外から見てて思ったんだけど、旬が入る前と入った後だったら、コートの中の雰囲気違ったの」

「……そりゃ変わるだろ？ メンバー変わったらさ」

旬はどうしてミキがそんな話をするのか不思議に思いながらも、思ったことを言って返す。

「ううん。そんなんじゃないかったよ。旬が入ってから、皆の動きが良くなって、雰囲気もぐっとよくなったもん。コートの中だけじゃなくて、控えとか、後輩達も」

ミキは視線を上げ、遠くを見つめた。その先には、当時の光景が見えているかのようだ。

「旬って、それまでちゃんと試合に出たの、練習試合だけだったでしょ？ だから分からなかったんだけど……私、その時初めて気付いたの。旬は、周りの人を一つにすることができるんだって」

「そ……そう、かな？」

そんな風に言われると、照れ臭くて、旬は頭を掻きながら言った。何だか調子が狂う。いつも、どのようにしていたのだろう。自分でもそれが分からないくらいだった。

「そうだよ。……それで私は、旬のこと見直して……好きになってた。告ったのは、話の流れで、勢いだったけどね。今しかないって思ってた……緊張して変な言い方になっちゃったけど」

ミキはそう言って苦笑する。

あの時のミキの「好きになったの」という言葉には、そんな気持ちがあったのか。別れて一年以上経って、やっと知ったことだった。

「旬にOKもらって、凄く嬉しかったよ。付き合い出してからも、旬は私のことすごく大事にしてくれて……すごく楽しかった。だから……ありがとう」

ミキはそう言って旬に笑顔に向けた。

しかし、笑顔の瞳が、どんどん潤んでいき、溜まりきらなかったものが溢れて、ミキの頬を伝った。

「ミキ……」

旬は目を見開いて、ミキを見つめた。

ミキはすぐに下を向いた。その拍子に、地面にポタリと雫が落ちた。

「ごめん……ごめんね。こんなつもりじゃなかったのに……絶対にウザくなるから、ダメだって分かってるの。……だけど、ごめん」  
ミキは手で顔を隠すようにしながら何度も謝った。

泣いてしまったことに対してなのかと思ったら、それだけではないようだった。

「旬は、私のこと大事にしてくれてたのに……私、酷いこと言った」  
ミキは涙声で続けた。

「旬が大学落ちた時、私、凄い勝手だった。旬は、誰よりも私のこと応援してくれて、喜んでくれてたのに……私は酷いことしか言えなかった」

そこまでで、ミキは小さくグスツと涙を啜った。

「旬が……専門学校行くのやめたって聞いて……もしかしたら私が言ったことが原因なのかもって思ったら……私、取り返しのつかないことしちゃったから……」

旬には、すぐに何を言ったらいいのか分からなかった。

ただ信じられない気持ちだった。

ミキが、別れてからも旬のことをそんな風に思っていたなんて……ミキの方から別れようと「旬と付き合える自信がない」と言っただけなのに。

ミキは、一年以上の間、ずっとそんなことを思い悩んでいたのか。

旬はそんなことは考えていなかった。

旬にとっての、ミキと別れてから今日までは、奈津美と出会い、奈津美と付き合い始めた時間と殆ど等しい。

だから、ずっと奈津美でいっぱいだった。

それは、ミキだって同じなのだと思っていた。もうとっくに旬のことなんか忘れていて、旬よりも好きな人がいて、幸せにとまではいなくても、もう過去は過去のものとして進んでいっているのだと……

「ミキ……」

旬が呼んでも、ミキは顔を上げない。きっと、上げられないのだ。

それでも、旬は言葉を続けた。



「ミキが謝ることなんてない。俺……あの時は本当に自分のことしか考えてなかったから……だから、ミキのこと怒らせて……だから、ごめん」

あの時の自分は、幼くて、浅はかだった。

物事は自分が思う通りに進むと思っていて、ミキの為にと思っていたことが正しいと、信じ込んでいた。

それが結局、一方通行のまま、ミキを怒らせるだけのことになって……だから別れた。

ミキの為にと思ってやるのが、ミキの為にならないのなら、きつとこれからも同じことが起こるような気がしたから。

「……旬だって、謝ることないのに」

ミキが顔を上げた。まだ涙目で、赤く充血していた。

「あーあ。本当に、こんなつもりじゃなかったのになあ」  
ミキは独り言のように言い、苦笑する。

「……私ね、ちょっとだけ期待してたんだよ」  
くるりと旬に背中を向けて言った。

「え？」

突然何のことか分からず、旬はきよんとする。

「私が別れるって言ってから、旬の方から、やり直したいとか、言ってくれるんじゃないかって。……調子いいよね、本当に」

最後の方の声は、再び震えていた。

「でも、そんな風に期待してる間に、旬には彼女ができちゃうんだもんなあ……変に試すようなこと、しなきゃよかった」

ミキは、笑おうとしているのだろうか。もしそうだとしたら、その後ろ姿は痛々しかった。

「ミキ……ごめ」

「謝らないで」

旬が言い終わる前にミキが言い放った。

「お願いだから、謝らないで……謝られると、しょうがなかったって、思えないから……」

今までよりは冷たい口調で、今までよりも一番声が震えていた。

「ミキ……」

旬は思わず『ごめん』と続けそうになって、寸でのところでやめる。

本当は、謝りたい。たくさん謝らなければならない。

でもそれは、きっとミキのことを多少なりとも傷つけることになる。それは旬にだって分かった。

「……あー、すっきりした」

ミキは、ふうっと息をついて言った。

「ずっと気になってたから、それがなくなった感じ。ありがとね、

旬

ミキはくると旬を振り返った。  
やっぱり目には涙が溜まっていて、頬にはそれが流れた跡が残っている。

「……あーあ。私も早く彼氏作らないとなあ」

ぐっと腕を伸ばして、伸びをする姿勢でミキは言った。

「……ミキなら、すぐにできるよ。俺よりいい奴なんて、いっぱいいるんだからさ」

何を言っているのか分からない旬は、控えめに言った。

「うん。知ってる」

ミキはそれに対して、笑みを浮かべて言った。

それにつられて、旬はやっとミキに対して笑えたと思う。きっと、ほんの少し口元が緩んだだけだっただろうけれど。

「じゃ、私帰るね」

一歩旬から離れてミキは言った。

「時間取らせてごめんね。でも本当にありがとう」

最後の『ありがとう』は、たくさんの意味があった気がする。少なくとも旬は、そう受け止めた。

「じゃあ……ね。ばいばい」

「うん……じゃあな、ミキ」

ミキは匂に背中を向けて歩き始めた。

一歩一歩遠ざかっていく背中を、匂はじっと見つめていた。

やがてミキが公園を出て行き、見えなくなっても、匂はじっとそこに立っていた。

そして、匂は思い立ったように歩き出した。

## 23 懺悔

遅い。

奈津美はさっきから、何度も時計と携帯を見比べていた。

匂とコーポの前で別れてから、もう三十分以上は経っている。

もう匂はとくにマンションに着いているはずだし、いつもなら電話がかかってくるはずなのに。

珍しい、では済まないことが起きてる。

帰ったら電話する、と、匂の方から言ったのに。

何かあったのだろうか。というか、何があったのだろうか。

匂の様子がいつもと違ったのはさっき分かったけれど、それと関係あるのだろうか。

じっと携帯を見つめていたら腹の虫が空腹を訴えた。

帰ってきてから、ずっと匂からの電話を待っていて、夕食の準備がストップしている。

いい加減ご飯食べよう。

奈津美は立ち上がって台所に向かい、食事の準備を始めようとした。

と、そこで携帯の着信音が流れた。

奈津美はすぐさま反応して、リビングに戻る。

ローテーブルに置いた携帯を見ると、着信で、匂からだった。

やっとかかってきた。

匂からの着信にほっとすると、奈津美はまず深呼吸し、気持ちを落ち着けてから通話ボタンを押した。

「もしもし」

「あ、ナツ？」

電話に出た瞬間、違う人かと思った。勿論声は匂のものだけれど、その声の調子はいつもと大分ちがった。さっき話した時とも、全く違った。

「匂……遅かったね。今家に着いたの？」

怒ってる、というニュアンスにならないように気をつけて、奈津美は言った。

「ううん……つうかさ……やっぱ、ナツんち行っている？」

「え？」

予想外の返答に、奈津美はきょとんとしてしまう。

「今、下まで来てるんだ」

「えっ……」

さっきから『え』しか言っていない。

返す言葉がそれ以外見つからなかった。

「ダメ……?」

奈津美の反応が良くないからか、旬は不安そうに尋ねてくる。

「ううんっ」

旬には見えてもいないのに、奈津美は必死で首を横に振った。

「来てもいいよっ。あ、旬、ご飯まだよね?」

「うん」

「じゃあ、用意しとくね。一緒に食べよ」

いつもの旬のように、奈津美は明るく言った。

「うん。ありがと、ナツ。んじゃ、今から行くから」

「うん。待ってるね」

電話を切ると、奈津美は台所に戻る。

やっぱり、何かあったんだ。

もし旬が、旬のマンションまで行って、そこから引き返してきたとしても、こんなに時間はかからないはずだ。

それに、いつもの旬なら、一度帰りかけてから戻ってくるなんてことはしない。

奈津美と一度別れてから、何があったのだろうか。そして、それを奈津美に話してくれるのだろうか……

もしも話してくれないのなら、今度はこっちから聞いてみようか……

ピンポーン……

考えているうちにインターホンが鳴った。奈津美は急いで玄関へと向かう。

ドアスコップを覗き、旬の姿を確認すると、ドアチェーンを外して鍵を開け、ドアを開く。

「いらっしやい。旬」

笑顔を作って、奈津美は旬を出迎えた。

「ごめんな、ナツ。いきなり……」

「ううん。元々私が誘ってたんだし、いいよ。それよりちょっと嬉しいから……」

自分で言ってみて、恥ずかしい。

普段言わないようなことを言ってみたけれど、思った以上に恥ずかし過ぎた。



でも、旬にいつものようになって欲しいと思った。

こんなことで機嫌がよくなると思うなんて、自惚れだろうか。でも、情けないが、こんな時に奈津美が旬にできることなんて何もない。だから、どんな些細なことでも、旬のことを支えられるようなことをしたいのだ。

「マジで？ 俺もやっぱナツと居たかったんだよ。だから戻ってき  
ちった」

旬はそう言ってニコツと笑った。

だけど、いつもより力がなく、無理矢理作った笑顔というのは、  
奈津美にも見て分かった。

何の効果もなかった。それどころか、無理をさせてしまっている。

「……ねえ、旬。何かあった？」

奈津美は遠回りをするのをやめて、はっきりと旬に言った。

旬は目を見開いている。しかし、すぐにまた笑顔を作る。

「何もないよ？」

小首を傾げているが、それがわざとだということは流石に奈津美  
にだって分かる。

「……嘘。何か今日の旬、変よ。いつもと違う」

奈津美が言うと、少し旬の笑顔が引きつった。奈津美はそれを見  
逃さない。

「さつき会った時もそうだったけど……今はもっと変。何かあったんでしょ」

そんなつもりはないのに、つい詰問するような形になってしまう。

「……別に、何もないって……」

「何もないってことはないんでしょ？ 見てたら分かるわよ」

……違う。こんな風に言いたいんじゃない。

「もし……もし何もないって言うんなら、分からないようにして。そうじゃないと、不安になるから……」

そう言って、奈津美は俯いた。

何を言ってるんだろう。

旬の気持ちを聞く前に、奈津美の気持ちを言ってしまった。

旬のことを支えたいだとか、そんなことを思っておきながら、こっちが先に弱音を吐いてしまっては、旬だって言いづらくなってしまうのに……

しかし、次の瞬間、奈津美の体は温かいものに包まれた。

気づいたら奈津美は旬に抱きしめられていた。

まだ靴を脱がずに玄関に立っている旬とは、段差のせいでいつもよりも身長差が縮まっていて、奈津美の顔は旬の肩の上にあった。

「ナツ……ごめん」

旬の顔が近い。すぐ耳元で声が聞こえる。

「旬……？」

奈津美はそっと旬の背中に腕を回した。

「どうしたの？」

いきなり謝られると、不安になる。

旬がどんな表情をしてるのか見ようとしたけれど、旬に力強く抱きしめられて、旬の顔が近くにありすぎで、見られなかった。

「……本当は、ナツには言うべきことじゃないんだ。俺が一人で抱えないといけないことなんだ」

旬が言うことの意味が分からない。

何が奈津美に言ってはいけないことなのか……

「ナツ……俺、さっきミキに会った」

静かに言った旬の言葉に、奈津美はただ目を見開いた。

「でもっ……誤解しないで。別に、やましいことはなかったから」

奈津美の心臓が大きく脈打っている。旬にまで伝わってしまったないだろうか。

「……どうして、会ったの？」

何の感情もない声で奈津美は聞いた。

こんな時、どんな感情がふさわしいのか、分からなかった。

怒ればいいのか、悲しめばいいのか……

どちらも、正しいとは思えなかった。

「話したいって言われたんだ。これで最後だからって……」

「……うん」

言うことが思い浮かばず、奈津美はただ頷いた。

「俺、ずっとミキのこと傷つけてたんだと思ってた。俺が、自分のことしか考えてなかったから……ミキのこと考えてなかったから……」

旬は唐突にそんなことを言い始めた。

「だけど、ミキは、ミキの方が俺のことを傷つけたって、ずっと悩んで……」

旬の声が震えている。

「俺は、やっぱり俺のことしか考えてなくて……別れてからも、知らない間にミキのこと傷つけてた」

旬の腕に力が入った。

「今更どうにもできないって、どうしようもないって分かってるけど……俺、どうしたらいいか分からなくなって……」

「旬……」

はっきり言って、奈津美にとっては要領の得ない話だった。

旬が元カノであるミキと会って、そこで色々話したのは分かる。でも、具体的にどんな話をしたかは全く分からない。

ただはっきり分かるのは、話をする旬が辛そうなことだけだ。

こんな時は、どうするべきなのだろう。何を言うべきだろう。

ずっと考えているのに、ただ何もできず、何も言えないままだった。

「……ごめん、ナツ。こんなこと話して」

旬の腕の力が弱まった。奈津美の体が旬から離れる。

「本当にごめんな」

一体旬はどれだけ謝るのだろう。

「……どうして、旬が謝るの？」

今度は奈津美から旬に手を伸ばした。

「謝らなくていいよ？」

奈津美は旬の背中に腕を回して、そっと抱きしめた。

「あたしが聞いたことだから、いいよ？ 旬は、あたしが聞いたから話してくれたんだよね」

小さい子供にするように、奈津美は旬の背中を優しく叩いた。

「話してくれてありがとう」

もしも奈津美が何も聞かなかったとしても、素直な旬の性格のこ

とだから、きつと秘密にしておくことは出来なかっただろう。

それに、人の気持ちを大切にしている旬だからこそ、こうして真剣に考えている。

普通なら、彼氏が元彼女と会ったことに、憤りを感じるのかもしれない。

奈津美にだって、全くそんな気持ちがないのと言えは嘘になる。

だけど、優しい旬を、どうしても責めることはできなかった。

「ナツは、怒らないの？」

旬が恐る恐るといった感じで奈津美に聞いてくる。

「怒らないよ。……怒ると思った？」

少し微笑混じりに奈津美は言った。

「……だろう。怒るかどうかとは考えてなかったけど……でも怒らないわけないだろうなって」

本当に特に考えてなかったらしく、言ってることが曖昧になっている。

しかし……

「……それ、結局怒るってことじゃない」

「そっ……そうじゃないよ！」

少し声の調子を変えて奈津美が言うと、旬が慌てた様子になる。

「もう……怒ってないし、怒らないから」

奈津美は少し苦笑しながら旬を抱き締める力を込めた。

そうすると、旬からも抱き締める力が返ってきた。

「……ナツの方が優しいじゃん」  
まるで眩くように旬が言った。

「え?」

「前にナツ、俺のこと優しいって言ったけど……ナツの方が優しいよ」

旬の言葉に奈津美は目を丸くした。

「どうしてよ。旬の方が優しいじゃない」

今回のことも、旬の優しさ故のことだったと奈津美は思っている。  
それなのに、どこが奈津美の方が優しいとなるのか。

「ナツのが優しいじゃん」

「そんなことない! 絶対」

「俺だって優しくないよ」

「旬が優しくないんだったら、あたしなんか優しいわけじゃないじゃない」

「そんなことない」

「そんなことあるの！」

お互いに引かないまま言い合って、間が開くと、どちらからともなく笑いがおきた。

「俺達、何言い合ってたんだろうな」

「本当にね」

お互いに、優しい優しくないの言い合いなんて、端から見たらバカプルの褒め合いにしか見えないだろう。

「ねえ、匂」

奈津美はそっと片手を匂の頭に持っていく。

「匂は、元カノの……ミキちゃんのこと、どう思った？」  
優しく頭をなでながら、匂に尋ねた。

「え……」

匂は戸惑ったように言葉に詰まっている。こんなことをきかれては、しょうがないだろう。

「本当のこと言って。私のことは関係なく」

そう言うと、少し間を開けて、匂が言葉を紡いだ。

「好きだったよ。……めちゃくちゃ好きで、大事にしたくて……  
その時の一番の気持ちだった」

匂の言葉を聞いた時、勝手ではあるけれど、奈津美の胸がちくり



と痛んだ。

だけど、少しほっとしている。

奈津美の立場から言えることではないけれど、ミキの気持ちが少し分かる気がする。

同じ女として……いや、同じ匂を好きになったからこそ分かる気がするのだ。

「それなら大丈夫。……あたしが言うのはおかしいけど……でも、匂が一番大事に思ってたんだったら、きつとミキちゃんは幸せだったから」

奈津美も今そうだから、分かる。

匂が、奈津美を一番大切にくれている。それが奈津美にとっての幸せだから。

「でも、ナツ。俺は今はナツが一番好きだよ」

丁度奈津美が考えていたこととリンクして、匂が言った。

「調子いいこと言ってるみたいに聞こえるかもしれないけど、でも、本当に好きだから。今までにないぐらい、大好きで、大切だから」  
ぎゅっと奈津美の体が抱き締められる。

「うん……」

奈津美も旬の体を抱き締め返した。

「ミキにも、早く、ミキのことを大切にしてくれる人が現れて欲しい。俺に、ナツが居てくれるみたいに……ミキにも誰かが居て欲しい」

「うん……」

旬の言葉に頷きながら、奈津美も、旬のことを大事にしたいと思った。

今まで思ってた居なかったわけではないけれど、改めて誓うように思ったのだ。

旬は当たり前のように奈津美の側に居てくれる。だけど、それは当たり前なことではない。

旬が奈津美を選ぶと同時に、奈津美以外は選ばれなくなる。

例えばそれが、どんなに旬のことを想っている者だとしても、選ばれることはない。

だから奈津美は、大切にしないといけない。旬のことも、旬への気持ちも。

今の奈津美と旬の関係は、誰かの想いを犠牲にして成り立っているものであるということを忘れてはならない。

奈津美は、自分の新たな気持ちと共に、旬のことを大切に抱き締めた。

## 23 懺悔（後書き）

更新が遅くなって申し訳ありません（汗）  
これで、旬の元カノ編は完結となります。

さて、別サイトにて新連載を始めました。  
タイトルは

「彼と私と×××」

ブログにリンクを貼っているので、良かったら読んでみて下さい☆

## 24 嵐の前の静けさ

「後ろはこんな感じでよろしいですか？」

美容師が奈津美の後ろで二面鏡を開き確認をする。

「はい」

奈津美も鏡に映った二面鏡を見て、奈津美は返事をする。美容師はとても綺麗にまとまったスタイルにしてくれていた。

「お疲れ様です」

美容師が落ちた髪を払い、ケープと首元のタオルを取った。

奈津美は椅子から立ち上がり、受付で預けていた鞆を受け取る。

「お疲れ様です。本日はカットとカラーで一万二千八百円になります」

受付の女性のが言った丁度の金額を出し、奈津美は会計を済ませた。

「ありがとうございました」

美容院を出て最初に受けた風が心地よかった。涼しい風が、首周りをそっと撫でていく。

今日、奈津美は髪を切った。

本当はカラーだけのつもりだったけれど、季節も夏になって暑いし、毛先が痛んでくるかもしれないので、カットもした。

それで、梳いてもらうだけでずっと伸ばしていた背中まであった髪を、肩に少しかかるほどの長さに切った。それから、カラーはいつものダークブラウンではなく、夏なので少し明るめのブラウンにして貰った。思った以上にしっとりきた色なので、奈津美は気に入っている。

髪も気分も軽くなったところで、奈津美はレンタルビデオショップに行った。

まだ残ってるかな。

土曜日の夕方という時間を気にしながら、奈津美は店内に入った。最後にこの店に来たのはいつだっただろう。棚の配置が変わっていて、新作DVDの場所を探すのに苦労した。

案内の表示を頼りに辿り着くと、奈津美は目当てのものを探す。目立つところに並んでいて、すぐに見つかった。

ほとんどが借りられている。しかし、最後の一つだけが残っていた。

ギリギリセーフだ。寄ってみてよかった。

奈津美はラストワンのDVDを手を取った。以前、匂と見に行つたことのある洋画だ。

数日前にテレビCMでレンタル開始ということを知ったので、も

しもあれば借りてみようと思ったのだ。丁度今日は旬が来る予定だし、旬と一緒に見よう。

他に何かないか、店内を一周してみて、結局当初の目的のDVDだけを持って、奈津美はカウンターへと向かった。

「いらっしやいませ」

男性店員の応対だった。

「貸し出し期間はどうされますか？　こちら、新作になりますので、最大で二泊三日になりますか……」

丁寧な応対で、奈津美の方をじっと見て店員は尋ねてくる。

「じゃあ、二泊三日で」

奈津美は答えながら、この店の会員カードを出した。

「あ、お客様。こちらは古い方のカードになりますが……こちらの新しいカードに作り直しましょうか」

店員がレジの横にある会員カードの見本を指して尋ねる。

どうやら、奈津美が暫く来ていなかった間に変わったのは、店の中だけではなかったようだ。

「はい」

奈津美はとりあえず返事をした。今はしょっちゅうに来るというほどではないが、金を取られるわけでもないし、カードぐらい作っておいても支障はない。

「ではお手数ですが、こちらの用紙にご記入いただけますか？」

「はい」

用紙とボールペンを渡されたので、奈津美は、名前、住所、電話番号など、必要事項を記入した。

用紙を渡して少しするとカードができ、会計を済ませてDVDを受け取り、奈津美は店を出た。

その後、スーパーに食料品を買いに寄ってから、家に帰った。

夕飯の準備をしながら匂を待ち、大体六時半を回った時。

ピンポーン。

インターホンが鳴ったので、奈津美はコンロの火を止めて、玄関に向かう。

ドアスコープで確認すると、匂の姿があったので、奈津美はドアを開けた。

「いらっしやい、匂」

「ナツー……」

出迎えた奈津美に、匂が笑顔を見せるが、奈津美の姿を見た途端固まった。

「……匂？」

おかしな旬の様子に、奈津美は首を傾げた。

「な……ナツ、髪切った？ 色も変えた？」

何故か、うろたえた様子で旬が聞いてくる。

「あ、うん。今日行ってきたの。……もしかして、変？」

旬の反応を見ると不安になってしまう。

奈津美は気に入った髪形だけれど、傍から見たら、旬から見たら、おかしいのだろうか。

すると、旬はものすごい勢いで首を横に振った。

「ううん！ その逆！ めちゃくちゃ似合ってるし！ うわー。ナツが可愛くなり過ぎててめちゃくちゃ焦ったし」

「何それ」

奈津美は笑みを浮かべながら旬を中に促した。

「ナツ可愛いー」

中に入ってドアが閉まった途端、旬が奈津美に抱きついた。

「ちょっと、旬……」

奈津美が驚いて顔を上げると、唇が旬の唇によって塞がれた。

ややあって唇を離すと、旬はニコニコを笑いながら奈津美の髪を撫でた。

「前もずっぱー可愛かったし、前の髪型も好きだったけど。俺はこっちも好き」



奈津美が気に入った髪形を、旬も好きだと言ってくれて、嬉しくないはずがない。

「ありがとう」

奈津美は素直にそう言った。

「何、ナツ。可愛すぎー」

旬は奈津美の体をぎゅっと抱き締め、頬に唇を押し付けた。

「ちょっと……旬っ。もう！」

奈津美は少しは怒った素振りを見せるが、今日は本気で怒る気にはならない。

「へへっ」

緩みきった旬の顔を見て、奈津美の表情も緩んだ。

「今、ご飯作ってるから、ちょっと待っててね」

「うん」

満面の笑みで、旬は頷いた。

夕飯を食べた後、DVDを二人で見た。

一度見た内容でも、ラブコメディーだから面白くて、時折二人で声を上げて笑った。

いよいよ終わりというところになると、旬が奈津美の肩に頭を乗せてきた。そして奈津美の方にすり寄ってくる。

「旬、くすぐりたい」

旬の髪が首筋を掠め、奈津美は首をすくめた。今まではそんなこともなかったが、髪が短くなったせいだろう。

「うわあー」

奈津美が首をすくめた拍子に、旬はわざとらしく声を上げて、奈津美の肩から胸元の方に転がるようにして顔を埋める。

「やだ、ちょっと、もう……」

いつものことではあるが、奈津美は呆れたように笑う。

「ふふん」

くぐもった声で笑うと、旬は奈津美の太股を枕に、ごろりと寝転がった。

「ナーツ」

寝転がったまま、旬は奈津美の腰に腕を回す。

「なーに？ 今日、甘えんぼじゃない」

奈津美は旬の頭を撫でながら言った。

「んなことないよー。いつもと一緒に」

「それもそうかもね」

奈津美は笑って言った。

実際、旬がベタベタしてくるのはいつものことだ。今日は、それが少し可愛らしく思える。

旬が仰向けになり、奈津美のことを見上げてくる。

「可愛いなあ……ナツ」

惚れ惚れした表情で、旬は奈津美の頬に手を伸ばす。

「俺、この色好きかも」

奈津美の頬にかかった髪に触れて、旬が言った。

「そう？」

「うん。俺もこの色にしたいな。俺、そろそろプリンになってきてるから」

そういいながら、うつ伏せになって奈津美に髪を見せるようにする。

「……ホントね。前に染めてからそんなに経ってないんじゃないの？」

旬の髪の生え際を見ると、もう黒い部分が大分伸びていた。

「そうなんだけどさ。俺、エロいから伸びんの早いんだよな」

「エっ……！？ 何言い出すのよ！ そんなの関係ないでしょ！」

奈津美は真っ赤になりながらペチンと軽く音が鳴る程度に旬の額を叩いた。

「てっ……関係あるって。何かできいたことあるし。気持ちイイー」

って快感がそういうホルモン刺激して伸びんのはやくなるんだって」  
旬は口を尖らせて、真剣な顔で解説する。

「もうっ！ そんなの言わなくていい！」

「……ホントのことなのにー」

旬は不服そうだった。

「でも、どうするの？ 染めるの？」

髪が伸びる速度云々のことは置いて、奈津美は聞いた。

「染めたいけどー。金がないんだよなあ」

ため息をつき、奈津美の太股に顔を伏せながら旬は答える。

「……そういえば旬って、いつもお店でやってもらってるの？」

ふと思いついて奈津美は尋ねた。いつも、旬はこまめに染めに行っているようで、見た目に大した変化がないように思うが、それは旬が自分でやっているという印象がない。

旬が自分の部屋でやってるとしたら、奈津美が掃除した時にでもその形跡が残っていそうなものだが、今までは一度も見ることがない。

「そうだよー。いつも前髪とか切るついでにやって貰うから。そういう前髪も伸びたなー」

旬は仰向けになり、今度は前髪をつまんで見せた。

「えっ……旬って、前髪もお店で切ってるの？」

奈津美は目を丸くした。

初めて知った。奈津美でさえ、前髪くらいなら自分で切る。匂の性格だと、前髪くらい自分で適当に切っていそうなのに、わざわざ美容院にまで行ってるとは思わなかった。

「だって、自分で切ったら失敗するから。俺、昔自分で切って失敗してサルみたいになってさー。学校でめちゃくちゃ笑われたし」  
よっぽど嫌だったのか、匂はむくれて話す。

「学校でだけならまだいいけど、バイト先でも客に笑われるし」

「それが嫌でお店で切ってるの？」

「うん。だって、居酒屋なんか酔っ払いが遠慮なくサルサル呼んでくるんからさあ。流石にあれば腹立つっての」

珍しく匂が腹を立てている。でもそれも仕方ないのかもしれない。客相手には言い返すわけにもいかないのだから、ストレスになってしまうだろう。

「せめて染めんのは自分でできたらいいけどさー。それも失敗するんだ。根元の方が上手く染めらんないから、染めた後もプリンになっちゃまってさ。だから、どうせ失敗すんならそれはそれで勿体ねえし、店でやって貰ってんの」

「そうなの……。でも、あたしはそっちの方が勿体ないと思うけど」

確かに、店でプロにやって貰った方が正確だし、仕上がりもいいだろう。しかし、カットとカラーを合わせたら大体一万近くはかかってしまうのではないだろうか。

市販のカラーリング剤だったら千円もしないものだってあるのだし、それを考えるとやっぱり勿体無い。

「んー……そうだけどなー。……あ、そうだ。じゃあナツがやってよ」

思いついたように旬が言い、体を起こした。

「えっ……あたしが？」

奈津美は目を丸くする。

「うん。俺の髪染めて、前髪切って」

旬はにっこり笑いながら旬は頷いた。

「無理よ。あたし、人のはやったことないから」

髪を切るのも染めるのも、自分で自分のをやるのなら失敗してもいいと思ってできるが、他人のならそうはいかない。そんなの失敗するのが怖くてできない。

「いいよ、それでも。俺が自分でやるよりはいいもん」

「そんな、あたしだって失敗するだろうし……」

確かに旬の言う通り、髪を染めるのは自分一人より誰かにやってもらった方が上手くいくかもしれないが、それでもやったことのない奈津美には上手くできるか自信はない。

「うん。いいよ。ナツがやってくれるなら失敗しても。ていうか、んな上手くやろうとしなくてもいいよ。俺のなんだし」

「……いいの？ 本当に失敗しても」

「うん」

旬ははっきりと頷く。

「じゃあ、いいけど……でも、本当に失敗して変な風になっても知らないからね」

「うん。じゃ、明日な。明日やって」

「えっ……明日？」

突然の発言に奈津美は目を丸くする。

「うん。だって、別に明日は特に予定ないだろ？」

明日は、旬もバイトが入っていないので、どこかにご飯でも食べにいかうか、という程度の予定だった。具体的にどこでどうしようとか、そんなことは決まっていけないので、別に明日でも構わないのだが、それでも急すぎる。

「いいじゃん。明日の朝にでも色々買いに行ってくるからさ」

奈津美はふうつとため息をついた。

「旬がそうするっていうならいいけどね、別に」

「うん！ じゃ、明日で決てーい」

上機嫌でそう言うと、旬は再び奈津美の膝に寝転んで顔を擦り付けて甘えてくる。

どこまでもマイペースな旬に苦笑しながら、奈津美はその頭を撫でた。



## 25 前兆

「ただーいまー」

旬が帰ってきた。

奈津美は台所で昼食を作ろうとしていた時だった。

「おかえり」

部屋に入ってきた旬に、奈津美は声を掛けた。

「ただいまー。なんかさあ、久々に買うからどれがいいかとか全然分かんなくてさー」

旬がドラッグストアの袋から、買ってきたカラーリング剤を出して言う。

「これがナツの色に一番近いかなーって思って」

箱に書いてある仕上がり見本を奈津美に見せた。

「でも、俺がやったらどういう風になるか分かんないし」

「んー。確かにそうね。でも、別にあたしと一緒にじゃなくてもいいでしょ？　ただ染め直すだけなんだから」

「うん。まあ、それはそうなんだけど」

「……あれ？　旬、他にも何か買ってきたの？」

奈津美が、旬の持つてる袋の中にまだ何かが入っている風なのを見て気付いた。

奈津美が言うと、旬はニヤリと笑った

「ナツ、手、出して」

旬が袋に手を入れながら言った。

「え？ 何？」

わけが分からずだと言われた通りに奈津美は手を出した。

「おみやげ」

そう言いながら旬は奈津美の手のひらに何かを置いた。

「なっ」

それを見て奈津美は目を見開いた。

丁度、奈津美の手のひらサイズの長方形の箱には『極うす』とデカデカと書かれていた。

それが、一目で避妊具だと分かってしまう自分が、更に恥ずかしい。

「いやー。昨夜もうなくなりそうだなーって思ったからついで買ってきたんだ。それ、よさそうだなーって思って。ちよつと高かったけど、奮発して買っちゃった。あ、それ、ナツんちのストックな。これ、俺んちのやつ」

嬉々としながら、もう一つ同じものを奈津美に見せる。

奈津美は顔を真っ赤にして、何も言えない状態だ。

こんなもの買ってくるな、と思わず言いそうになってしまいが、それは言っではいけないことだ。

「おっ……お金ないのに奮発しなくてもいいの！」  
訳が分からず奈津美はそんなことを言ってしまった。

「えー。いいじゃん。これは気持ちよくするための奮発なんだから。  
俺もナツも」

その言葉に奈津美は耳まで真っ赤にする。

「今夜試しに一つ使って比べてみような」  
ニツと笑って旬が言った

「……もう！ バカ！」  
あまりの恥ずかしさにそれしか言えなかった。

それでも、旬の買い物物が奈津美のためのものであると思って、少し嬉しく思ってしまった。

これだと奈津美の方がバカなのかもしれない。

昼食を済ませてから、旬の髪の毛のカラーの準備をする。

洗面所に一番大きな鏡があるので、洗面所に椅子をもってきてやることにする。

「じゃあやるよ」

全ての準備を終えて、手袋をして、カラーリング剤の入ったボトルを持った奈津美が緊張しながら旬に声を掛けた。

「おうっ。どんとこい！ ……ていうか、そんな緊張しなくてもいいよ、ナツ」

旬が笑いながら言った。

「だって自分のやるよりも緊張するっていうか……初めてだし」

「別に失敗してもいいってー。……でも、初めてだから緊張か。何かいい響きだな」

鏡に写っている旬はにんまりと笑っている。

「え？ 何が？」

「いや、こっちの話」

へへっと笑って旬が何か誤魔化している。

奈津美は何となく聞きたくない気がしたので、何も追及しなかった。

「じゃあ、やるからね」

改めて言って、奈津美は旬の髪にカラーリング剤をつけていった。

ボトルの櫛の形になっているキャップから液が出てきて、髪を梳かしながら満遍なくつけていく。

「あ、そういえば、旬、パッチテストとかしてなかったけど大丈夫なの？」

今更ながら気付いて奈津美が言った。

「パッチテスト……？ ってなんだっけ？」

匂はキヨトンとしている。

「なんだっけて……この液でアレルギーが出たりとか、かぶれたりしないかって使う前にテストするんですよ。少しだけ肌に塗った  
りして」

「あ、そっか。そんなんするんだっけ」  
「やっと思ひ出したように匂が言った。」

「説明に書いてなかった？　ちゃんと見たの？」

今までの工程は、匂が順序の説明書きを読んで、奈津美がそのの  
通りにやっていった。

「書いてなかったと思うけどー」  
匂がケープの下から手を伸ばして説明書きを取り、目の高さまで  
上げて見る。それを奈津美ものぞき見た。

「……ここに書いてあるじゃない。『本品を使用する前に』って」  
奈津美が説明書きを指さして言った。

最初の工程の説明の、更に前にそれが書いてあった。

「『本品が肌に合っているか確かめるために、付属のテスト用液で  
必ずパッチテストを行って下さい』って、ちゃんと書いてあるじゃ  
ない」

「へ？　付属の？　そんなん入ってたっけ」

「知らないわよ。箱の中身全部出したのは匂でしょ」

匂は箱を取って逆さにした。すると、ポトツとパウチが箱から落ちた。

『パッチテスト用』と書かれている。

「もう……ちゃんと見てよ、怖いから」  
奈津美は呆れてため息をついて言った。

箱から中身を出したのも匂だった。それを任せてしまったことが間違いだったのかもしれない。

「大丈夫だって。俺、別に肌弱いことないし。なんのアレルギーもないから」

そう言って大した問題でもないように笑う。

そんな匂に対して、奈津美はもう一つため息をついた。

「……これぐらいでいいかな。それで、次は何？ あ、ちゃんと見てよ」

全体的に馴染んできたところで奈津美は言った。

「えーっと。『髪全体に馴染ませたらそのまま一時間おいておきます』だってさ」

「一時間ね。じゃあ、その間に買い物行ってこようかな」  
手袋を外しながら奈津美は言った。

「えっ。何で？ 俺、出かけらんないのに」

旬が後ろを向いて、目を丸くしている。

「うん。だからあたし一人で行くの」

「ええー！？ 俺一人で暇じゃん」

不服そうに旬は口を尖らせている。

「だって旬の髪が終わってから行ったら遅くなるでしょ？」

旬の髪は、一時間待って、それからシャワーで洗い流したりしないといけない。それから買い物に行くとなると、かなり時間が遅くなる。それよりは、今のうちに行っておきたい。

「昨日買い忘れたものがあるんだもん。今日行かないと……。向こうでテレビでも見ててよ。すぐ帰ってくるから」

「それならそうと言ってくれたらいいのに。そしたら俺が買いに行くのと一緒に行けたし」

「ごめんね。旬が出かけてから気付いたから」

「じゃあしょうがないか……。んじゃ待ってる」

旬は納得したようで、椅子から立ち上がった。

「壁とか床に頭つかないようにしてよ」

旬にそう言い、二人で部屋に行った。

「あ、洗濯物しまわないと」

ベランダで風に揺られてるのを見て、奈津美は思い出した。

旬はテレビを点けて床に座り、奈津美なベランダに出て洗濯物を取り込む。

「あ、ナツのブラジャーだ」

旬のそんな声が奈津美の耳に届いた。

「え……」

部屋の中に目をやると、旬の顔がこっちに向いていた。その視線は、風に揺られている奈津美の下着に注がれている。

「ちょ……ちょっと！ 見ないでよ！」

奈津美は慌てて取り外し、他の洗濯物で隠す。

「何で隠すんだよー。今更そんな恥ずかしがるような関係じゃないじゃん」

「見られたら恥ずかしいの！」

「そんなん言ったらナツだって俺のパンツ見てんじゃん」

丁度その時奈津美が外していたのが旬のトランクスだった。

「男と女は違うの！」

奈津美はそういう切って、素早く旬の下着を外した。

「何でー？ 俺だって恥ずかしいよ。ナツが俺のパンツ触って色々してるんだって思うと」

「色々って……洗濯以外何もしてないわよ！ もうっ！ そんなこ



と言うんならもう旬の洗濯はしないから!」

奈津美は顔を真っ赤にして旬の下着やTシャツを乱暴に部屋に投げ入れた。

「じよ、冗談だって! 俺、いつも俺のパンツまで洗ってくれるからすっげー嬉しいんだよ? 俺がパンツになってナツに洗われたいくらい」

「何言ってるのよ。意味分かんない」  
つんと言い返し、奈津美は洗濯物を持って家に入る。

一人分の量なので、その場で畳んでまとめてしまう。その時には、さっき放り投げた旬の分もきちんと丁寧に畳む。

「……ナツ、可愛すぎ」

奈津美の行動を見て、旬はデレッと鼻の下を伸ばして言った。

「何がよ?」  
怪訝な顔をして奈津美は言う。

何だかんだ怒ったようなことを言ったりしても、最終的にはこうしていつも通りにしてくれる。それが旬のツボにはまっている。

「何かもう、全てが」

「は?」

いつものことではあるが、突拍子もない発言に奈津美はきょとんとするだけだった。

「とにかく、買い物に行ってくるから。別に買うものはない？」  
財布を鞆に入れ、買い物へ行く支度をし、台所に向かう。

「うん。ないよー」

「そう」

冷蔵庫を開けて見て、奈津美は必要なものを確認する。

「……じゃあ行ってくるね」

確認をした奈津美は、匂に声をかける。

「うん。行つてらっしゃーい」

匂に見送られて、奈津美は買い物に出かけていった。

この時にはもう『見られている』ということには、気付いていなかった。

「ただいまー」

買い物袋を提げ、奈津美はコーポに帰ってきた。

「あ、ナツ。おかえりー」

匂がすぐに反応して、部屋から玄関に顔を覗かせる。

「ナツさあ、携帯忘れて行っただろー」

パンプスを脱いで部屋に上がる奈津美に対し、旬が言った。

「あ、うん。鞆に入れ忘れてたみたい」

奈津美はそう返しながら、部屋に向かった。

携帯を忘れたのに気付いたのは、買い物に行って会計をしようと鞆から財布を出そうとした時だった。

常に携帯のチェックをする習慣のない奈津美は、ずっと鳴ってないだけだと思って持っているつもりでいたのだ。

「あ、もしかして連絡したの？」

旬が気付いていたということは、そういうことなのかもしれない。そう思ってきたのだが……

「ううん。俺はしてないよ。でも、ナツの携帯鳴ってたから」

旬は首を横に振って答えた。

「あ、そうだったの？」

「うん。ナツが出かけて割とすぐに鳴ってー。その後も二回くらい。多分メールだと思うけど」

「ホントに？ えっと……あたし携帯どこに置いてたっけ」

部屋のローテーブルの上にはない。部屋を見回して携帯を探す。

「そっちの方で鳴ってたよ」

匂が台所を指さした。

「え？ こっち？」

どうしてそこにあるのか分からないまま、奈津美は台所に向かう。

買ってきたものを床に置いて、ふと見ると、冷蔵庫に隣の食器棚のところに、奈津美の携帯が置いてあった。

あ、そういえば。と奈津美は思い出した。

出掛ける前に冷蔵庫の中身を見ようとした時に、手に持った携帯を何気なく置いてしまっていたのだ。そして、それを忘れたまま出掛けてしまった。

奈津美の携帯は、ライトが点滅していてメール受信があったことを知らせている。

携帯を手にとって開くと、新着メールのアイコンに3という数字がついている。匂が言っていた通り、奈津美が出掛けている間に三通のメールがきていたようだ。

操作をして受信ボックスを開くと、奈津美が全く知らないアドレスが三つ並んでいた。

誰かからのアドレス変更だろうか。だけど、三通も？

不思議に思いながら、奈津美はメールの一番最初に来たメールを開いた。

「えっ……」

メールの文面を見て、奈津美は思わず声を漏らしていた。

『窓開けたまま出かけてるよ』

いきなり何のことか分からなかった。

窓の方に目をやった。網戸だけ閉めた状態で、風がカーテンを揺らして部屋に入ってくる。確かに、奈津美は窓を開けたまま買い物に出かけた。しかし、それは匂が部屋で留守番をしていたから、わざと開けていったのだ。

次のメールを見してみる。

『さっきのメール見てないの?』

更に次のメールを見る。

『君が帰ってくるまでに何もないか、見張っておいてあげるよ』

……何これ。

誰かと間違えているんじゃないだろうか。いきなり、さも知り合いのようにメールを送ってこられても、奈津美にはこのメールの文面に、思い当たる人物はいない。

迷惑メールなの？

何にしても、気持ちがいいものじゃない。

奈津美はそのメールを削除しようとした。

「ナツ。そろそろ髪、一時間経つよ」  
匂がこっちを向いて声をかけてきた。

「あ、うん。先にお風呂場行って。すぐ行くから」

奈津美は携帯を閉じ、またその場に置いて、買ってきたものを急いで冷蔵庫に仕舞った。

風呂場のシャワーを使って、奈津美は匂の髪のカラー剤を落としていく。

服を着たままなので、匂は湯を張ってない浴槽の中に入り、頭だけを洗い場の方に出して、奈津美がシャワーにかけて洗い流す。

「ちゃんと染まってる？」  
匂が下を向いたまま聞いてくる。

「まだ途中だからわかんないよ。それより、大丈夫なの？ 頭痒かったりしない？」  
パッチテストをしなかったことを気にして、奈津美は匂に聞き返す。

「別にそれはないよ。それより今は、ナツの手がくすぐりたい」

奈津美の手は、匂の耳の裏に触れていた。

「ちゃんと洗わないとダメなんだから、しょうがないじゃない」

「へへっ。何か人に頭洗ってもらうのって気持ちいいな。いつも店では思わないけど」

「人に洗ってもらって気持ちいいのは分かるけど……あたしがやるよりはプロの方が気持ちいいんじゃないの？ あたし、人のは上手くできないから」

「んーん。ナツがやってくれてるってだけで気持ちいいんだよ。だから、全然違うよ」

旬は満足そうに言う。

「あー幸せ」

しみじみとした声で旬は呟いた。

「これだけで？」

あまりに大げさな言い方に、奈津美は笑った。

「これだけでも。俺、ナツに会ってから、幸せじゃなかったことなんてないよ」

「……それは嘘でしょ」

「……確かにそうかも」

そう言って旬は軽く笑った。

今まで付き合ってきて、流石にいつもうまくいっていたわけではない。

むしろ奈津美は自分勝手なことで何度も傷つけてしまっているのに、ずっと幸せなんて言い過ぎだ。

「でも、色々あったのに、ナツが側にいるから、やっぱり俺は幸せ者だなあって思うよ」

しみじみと旬が言った言葉に、奈津美は赤面する。

「もうっ。旬はオーバーなんだから」  
誤魔化すように奈津美はそっけなく言った。

「あれ？ ナツ、照れてる？」

「照れてない！ ……はい！ もうこれでいいかな」  
奈津美はシャワーを止めて話を切ろうとした。

風呂場の戸を開けて、外に置いてあったバスタオルを取って、旬の頭にかけて軽く水気を取る。

「……ナツ」

「何？」

突然旬が顔を上げた。そして素早く奈津美に顔を近づけると、チユツと音をたてて軽く唇に触れた。

あまりにも早業過ぎて、奈津美は一瞬何をされたのか分からなかった。

「へへっ。すきあり」



旬は奈津美との距離が近いまま、旬はニツと笑った。

「……なあ!？」

奈津美の顔はさっき以上に赤くなる。

「何ふざけてるのよ!」

「ナツ可愛いー!」

ニコニコしながら旬は奈津美に体に腕を巻きつけた。

「ちょっと……抱きつかないでっ。服濡れるでしょ!」

「んー。ナツー」

奈津美の言うことには構わずに、旬は奈津美に頬ずりする。

「もうっ、旬ってば!」

旬の髪の毛の水滴で、奈津美の顔にも水滴がついて、奈津美の肩も濡れた。

それについては奈津美は怒っていたけれど、旬に対しては、毒気が抜けるのか、本気で怒ることはできなかった。

この時すでに、悪夢のようなことが起こりつつあったなんて、二人には、知る由もなかった。

## 26 忍び寄る影（1）

奈津美は慎重に、旬の前髪にはさみを入れていく。集中しすぎるあまり、自然と息が止まって、旬の顔に近付いてしまう。

「ナツ」

旬がじつと奈津美を見つめる。

「何？」

奈津美は集中したまま返事をする。旬の視線はその動く唇に釘付けた。

「言つとくけど、はさみ持ってる時にふざけてきたらどうなるかわからないからね」

旬が口を開く前に奈津美はビシッと言った。

「うん……」

旬は大人しく引き下がった。

「これでいいかな……」

奈津美はふうっと息をついた。

「どんな感じ？」

旬はローテーブルに置いてある鏡を覗き込む。

「……あれ？ そんなに変わってないかも……」

奈津美は改めて見てみて、切る前とあまり変化のないことに気付いた。

切り過ぎないように切り過ぎないようにと意識して、少しずつ切っていたのだが、思った以上に変化がない。

「ううん。結構違うよ。前より邪魔になってないし」

旬は自分の前髪を上目使いになって見ながら、言った。

「ホント？ それならよかったけど……」

「うん。ありがと、ナツ。……でもさ、ナツ、前髪切るのも緊張しすぎ」

旬は鏡を置いてケラケラと笑っている。

「しょうがないでしょ！ 失敗したくなかったんだから！」

奈津美はそう言い返しながら片付けをする。

「もー。俺のためにそんな頑張っちゃってー。ナツってばホント俺のこと好きだな」

「そんなんじゃない。失敗して変な前髪になった人と外歩きたくなかっただけ」

冷たく言い放ち、奈津美はガムテープで落ちた髪の毛を取る。

「んなヒドい言い方するー？」

旬は不服そうに口を尖らせた。

「だって、旬も嫌でしょ？ 失敗したら」

「ううん。ナツが切ってくれたんならどんなになってもいいし。多分、自慢して回ると思う」

旬はひょうひょうとして言う。

「……やっぱり失敗しなくてよかった」

独り言のように呟いて、奈津美は旬のTシャツに付いた髪の毛をガムテープでペタペタと取っていった。

旬は目の前にいる奈津美の頭を、ポンポンと軽く叩いた。

「なーに？ 旬」

旬の方は見ずに、奈津美は手元の作業を続ける。

「んー。ちょっと色違ったなーって思っ。俺とナツの髪」

右手で奈津美の髪を一束とり、左手で自分の髪を摘んで見比べている。

旬の髪の仕上がりは、意外と明るい色になった。今までに比べて明るい茶色になった奈津美の髪色よりも、明るい色になった。

「いいんじゃない？ その色も旬には似合ってると思うし」

奈津美は顔を上げて旬の髪に視線をやって言った。

旬には、あまり落ち着いた色のイメージがないからか、明るい色の方が似合うと思う。

「ホント？ んならよかった」

旬は満足そうに笑った。

奈津美がガムテープを捨てて、片付けていると、旬は後ろから奈津美の体に腕を回してくる。

「な。俺、男前になった？」

旬が期待に満ちた目で奈津美のことを見る。

「えー？ 何、いきなり」

「髪の色変えてー、前髪切ってー、ちょっと男前になった？」  
奈津美の右肩に顎をちゃんと乗せて、奈津美の顔に直接話しかけるように旬は言った。

「さあ、どうだろうね。あんまり変わらないと思うけど」

「えー。こういう時は『かっこよくなったよ。あたし、ドキドキしちゃう』っていうもんじゃないの？」  
台詞の部分をやたら女っぽく、ナヨツとして、オカマみたいだった。

思わず奈津美はふき出した。

「何それ。あたしがそんなこというわけないでしょ」

「……でも俺はナツに言って欲しい」  
流石に奈津美の性格も分かっている旬だが、懲りずにむくれている。

「俺は言ったのにー。ナツのこと可愛いって、いつも言ってるけど、言ったのにー」

旬は更にブーブー文句をたれてくる。

「はいはい。かっこよくなったよ、旬。すごいカッコいい」  
しょうがなく、奈津美は棒読みで言った。

「……何か言わされてねー？」

満足しないだろうと思ってはいたが、旬は不服そうだ。

「だって言わされてるもん。言っただけいいっていったのは旬でしょ」

「そんなんじゃないってー！ もーいい！ 怒った！ おしおきしてやるー！」

「きゃあ！」

突然胸を鷲掴みにされ、奈津美は悲鳴をあげた。

「ちょっと、旬！ そんなことで怒らなくてもいいじゃない」

「別に怒ってはないしい」

旬の顔を見ると、怒っているというよりは拗ねているようだ。

その顔を見て、もう少し優しくした方がいいかなと思った。

「……そんな、髪染めたり前髪切ったぐらいで変わらないよ、旬は」

奈津美は右手でそつと肩に乗っている旬の頭を撫でた。

「あたしは、別にどんな風でも、旬だったら……いいもん」  
最後の方の言葉は、尻すぼみになってしまった。

「ホント？」

旬が奈津美の顔を覗き込もうとする。

しかし、奈津美は左を向いて顔を背けた。

その時に、耳までが真っ赤になっているのを、旬は見逃さなかった。

「……ナツ、可愛すぎー！」

旬は感極まって、奈津美を押し倒した。

「きゃあ！」

どちらにしても、結果は同じだった。

翌朝、奈津美はいつもの時間に起きて、朝の用事をこなしていた。

旬は、まだ気持ち良さそうに眠っている。

今日は、ゴミの日だ。普段は夜のうちにゴミをまとめておくのだが、昨夜は旬に押し倒されたまま流されて、何もできなかった。

旬ってば強引なんだから……

毒づくつもりで思ったことだが、昨夜のことを思い出しで、奈津美は一人赤面する。

「んんっ……ナツ」

奈津美は肩を震わせて振り返ったが、旬はまだ眠っている。どうやら寝言だったらしい。

「んんっ……ダメだよ、ナツ」  
うつ伏せになって枕に顔を擦りつけながら旬は、モゴモゴと言葉を発する。

こちらに向いた顔は、眉間に皺が寄って、苦しそうに見えた。

一体何の夢を見ているのか、夢の中での奈津美は旬に何かをしているらしい。

「……ダメだって。それ、俺の……オモチャじゃないから」

何の話だ。一部が不明瞭で聞こえなかった。

「……もう。ナツってばやらしいなあ」

その言葉と共に、旬の表情がふにゃっと緩む。

よく分からないが、奈津美にとっては何だかとても不快だった。

「旬」

「あ、ダメ。そんなに強くしたら……」

「旬！」

バシン！

奈津美は旬の背中を叩いた。裸だったので、思った以上に痛そうな音が響いた。



「……いってえ」

流石に夢から覚醒し、旬は眉間に皺を寄せながら細く目を開けた。少し強く叩き過ぎた。旬の背中が、奈津美の手の形にうつすら赤くなっている。

「……あれ？ ナツ、いつの間に服着たの？」

枕から顔を上げ、寝起きのぼーっとした顔で旬は奈津美を見ている。

「何言って……あー！ 旬！ また涎たらした！」

旬の顔を見て、奈津美は悲鳴を上げてしまった。

旬の口の端から奈津美の枕に、旬の涎が糸を引いていた。

「んあ……おおっ」

旬は言われて初めて気付いて、ズルッと涎を吸った。

「やだもう、汚い！」

奈津美は枕をひったくるように取ると、そのカバーを外した。

カバーには、ベツタリと旬の涎のシミができている。

「やー。夢ん中が気持ちよすぎてさあ。すっぱんぽんのナツが俺の――をにぎにぎするもんだから」

まだ眠そうに、体を起こして顔をこすりながら旬が言った。

包み隠さない発言に、奈津美の顔が耳の方まで真っ赤になる、

「あつ、朝っぱらから何言うのよ！ 大体、そんな理由でそれを許すわけないでしょ！」

「そんなん気にする仲じゃないじゃん。俺はナツが涎たらしめても全然平気だよ」

「あたしは平気じゃないの！ ていうか、私は涎なんかたらしません！」

「ええ」

旬は不服そうに口を尖らせた。

「えーじゃなくて……あつ、ゴミ捨て！ あたし、ゴミ捨てに行ってくるから、旬、ちゃんと起きててよ」

「はい」

旬の声を背中で聞いて、奈津美は部屋を出て行った。

ゴミステーションは、コーポの隣にあるので、三分もしないうちに奈津美は部屋に戻ってきた。

「あつ！ 旬！ 何やってんのよ！」

そこには、パンツ一丁でローテーブルの前にしゃがみこみ、朝食にと置いていたジャムサンドをかじる旬がいた。

「いやー。美味そうだったから、つい。でも一個だけだし」  
殆ど悪びれる様子もなく、旬はもぐもぐと口を動かす。

「もう。ついじゃないわよ。早く服着て」

「ふあーい」

サンドイッチを口に放り込み、指に付いたジャムを舐めた。

その指がべたついてようで、旬はティッシュで指を拭い、それをゴミ箱に捨てた。

「あ」

その光景を見て、奈津美は思い出したように声を出した。

「どしたの？」

旬はきょとんとして奈津美を見る。

奈津美はゴミ箱を覗いた。

「あ、やっぱり……ここのゴミ捨てるの忘れてた」

今日は、バタバタとゴミをまとめていたためにすっかり忘れてしまったようだ。ゴミ箱の中には、半分ぐらいゴミが入っていた。

「ああ、昨日と一昨日頑張っちゃたもんなあ。それで増えたんかな」

旬がしみじみと言う。

ちなみに、このゴミ箱は、ベッドサイドに旬が置いたものである。

「そっ……そういうわけじゃないでしょ！」

旬が言うことの意味を悟り、奈津美は真っ赤になる。

「もうっ。捨ててくる。今なら間に合うだろうし」

奈津美はゴミ箱にかけてあった袋を取り、立ち上がった。

「行くの？ 別に今度でもいいじゃん」

「いいの。行ってくる。旬、ちゃんと服着ててよね」

そう強めに言って、奈津美は部屋を出て行った。

もう。旬っては何でいつも朝っぱらからあんなこと言えるのよ。

階段を降りながら、奈津美は機嫌を損ねていた。

しかし、旬が具体的な物言いをしなくても、すぐに分かってしまうようになった自分が恥ずかしい。

確かに、奈津美はもう二十三だし、色々経験はある。だから、逆に知らないふりなんてしたって白々しいけれど。

一番下まで降りて、ゴミステーションに向かった。

このゴミは、さっき捨てたゴミの袋の中に入れておけばいいかと思いつながら、奈津美はカラスよけのシートを上を持ち上げた。

……あれ？

そこのゴミ袋の一带を見て、奈津美はおかしなことに気付いた。  
なくなってる。

奈津美がさっき置いたはずのところは、置く前の状態と同じよう  
になっていた。

見間違えることはない。奈津美が持ってきたゴミ袋は、白の半透  
明のもので、奈津美が置こうとしたところの周りは、偶然にも全て  
青の半透明の袋だった。だから、何気なく捨てただけでも、はつき  
りと覚えている。

さっきゴミを置いて、五分ほどだ。極端に回りのゴミが増えてい  
るわけでもないし、埋もれていることはない。それに、周りにはま  
だゴミがあるのだから、収集車が来て持っていたということもな  
いはずだ。

どういうことだ。

首を傾げたまま、奈津美にはわけが分からないままだった。

「おはよー」

出社した奈津美はロッカールームで着替えている奈津美に声をか  
けた。

「おはよ、奈津美……あ、髪切ってる」

奈津美を見るなり、カオルはすぐに気付いた。

「うん。土曜に切りに行ったの。あと、カラーも」

「へー。何か奈津美が髪短いのって始めて見たかも。ずっと長い印象しかなかったし」

「そうね。あたし自身、これぐらいの長さにしたのすごい久しぶりだから」

確か、短大入学時ぐらいだっただろうか。その時に短くしたけれど、それからはずっと長くしていたのでカオルにはそうかもしれない。

「でも、すごくいい。その髪形も色も似合ってる」

「ホント？　ありがとう」

カオルにも好評だ。やっぱり切ってよかった。

「なーに？　ニヤニヤしちゃって」

そう言いながらカオルはニンマリと笑っている。

「べっ別にニヤニヤなんてしてないわよ！」

「まーた旬君のことでも思い出した？　旬君、奈津美のこと見て『可愛いー！』て抱きついてきたんじゃないの？」

「なっ！？」

何で分かるの！？　と思わず言いそうになった。

「ふーん……そう。やっぱりねえ」

何もかもを見透かしているかのように、カオルは何度も頷いた。

「何がやっぱりなのよ！　あたしは何も言っていないでしょ！」

「顔見れば分かるわよ。奈津美もすぐ顔に出るから」

「そんなことないわよ！　しかも奈津美『も』って何なのよ」

「そりゃ、匂君を筆頭にとってこと。いいじゃない。似たものカップルで」

「匂と一緒に嬉しくない」

奈津美はふいっとそっぽを向いた。

「照れない照れない。本当は嬉しいくせに」

「嬉しくないってばー！」

ついムキになってしまいが、全く嬉しくないといったら嘘になる。

自分でも複雑だと思うぐらい、微妙な心境だった。

## 27 忍び寄る影(2)

「……でもさあ、髪型の変化とかに気付いてくれるのっていいわよね」

「は？」

昼休みのカオルの何の脈略もない発言に、奈津美の箸が止まる。

「何、いきなり」

「朝の話。旬君は髪型の変化とか、すぐ気付いてくれるんでしょ？」

「別にすぐってわけでもないけど……まあ、大体は。……何？ 塚田さんは気付かない人ってこと？」

カオルがこんな風に言うのも珍しい。少し変な感覚で奈津美は尋ねる。

「気付かないっていうか……あれは宇宙人よ」

「は？」

カオルの不思議発言に、奈津美は目を丸くする。

「何それ、どういうこと？」

「例えば、髪型変えるでしょ？ 何も言ってくれないのよ。まあ、そこまでならよくあることだからいいの。でも、こっちだって何か言っしてほしいからね、言うのよ。そしたら『あれ？ 変わったのっってもっと前じゃなかったっけ？』って意味不明の発言するのよ」



「えっ……それって……」

それ以上の言葉は、言う前に止めた。

「うん、私も最初は思ったわよ。まさか他の女と間違えてるんじゃないかって」

奈津美が言おうとことを感じ取ったらしく、カオルは頷きながら言った。

「でも、私の分かる限りではそんな素振りなかったし、どうなのかは微妙だったの。だから、遠まわしに何と間違えてるのって聞いたのよ。そしたら、ちよつと考えて『あ、何か夢で見たことあるんだ』とか言うのよ。ちよつと怖くない?」

「怖いって……それってどういう風にいうの?」

「普通に言うのよ。別に浮気を誤魔化すための言い訳でもなく、キザにかっこつけて言うわけでもなく。まるで、昨日道ばたで友達と会ったんだ、って話をするみたいに」

「へえ……塚田さんてそういうこと言う人なんだ」

奈津美の中でのカオルの彼氏のイメージは、真面目で、しっかりしてて、どこから誰が見ても完璧な男、だった。まさかそんな不思議発言をするとは思わなかった。

「意外とすつとぼけたところがあるのよねー。まあ、完璧すぎるのも面白くないからいいんだけどさ」

「……カオルって、塚田さんのことまでそんな風に見てるの?」

普段、奈津美と旬の話を面白いと言うカオルだが、まさか彼氏のことまでそんな風にいうとは。

何となく同情してしまう。

「そりゃ面白くないよりは面白い方がいいでしょ。その方が飽きないだろうし。でも、大丈夫よ。旬君だって十分面白いから」

「大丈夫って……何が」

「柏原さん」

奈津美の後ろから、声を掛けられた。

振り返ると、そこには同じ部署の、今年入社した二人の男性社員がいた。

今年入社で後輩ではあるが、奈津美やカオルは短大卒で入社しているのに対し、彼らは四年制の大学卒で入社しているので、同い年である。

「何？」

飲み会の時ぐらいしか話さないのに、こんな昼休みに話しかけてくるなんて珍しかった。

「あの、いきなり失礼だと思うんですけど。柏原さんって、お姉さんとかいます？」

「え……？　いないけど……あたし、一人っ子だから  
質問の意図が分からないまま、奈津美は答える。」

「そうなんすか……」

「あ、じゃあ、夢咲まいみって知ってます？」  
もう一人が口を開く。

「え？」

「おい！」

首を傾げる奈津美を余所に、今質問した方は肘でつつかれていた。

「何？　誰って？」

「いやっ、分からないならいいんです。すみません。気にしないで  
下さい」

奈津美はわざわざ聞き返したのに、そう言って、二人はそそくさ  
とその場を去っていった。

「何なの？　あれ……」

奈津美は二人の背中をめて追いながら、独り言のように呟いた。

「さあ……でも、夢咲まいみって……何か聞いたことあるような……  
…」

カオルが、何か考えるような仕草をする。

「何？ 知ってるの？」

「何だっけ……」

そして、二、三秒考えたところでぱっと何か思いついたようだ。

「そうだ。アレよ。夢咲まいみて」

「アレって？」

「AV女優」

奈津美の表情が固まった。

「はっ！？ 何？」

カオルがあまりにもさらっと言うので、聞き間違いかと思った。

「だから、AV女優だってば。アダルトビデオに出てる女優さん。知ってるでしょ？」

カオルは丁寧すぎるほどに説明する。なんてこともないという様子だ。

「わっ……分かってるわよ！ ていうか、そんな普通の声で言わないでよ」

奈津美は真っ赤になりながら声を潜めて、周りの目を確認する。

「大丈夫よ。逆にそわそわする方が不自然でしょ」

カオルがサバサバしているのはいつものことではあるが、ここま

で気にしないのもどうなのだろうか。

「でも、何でカオルがそんなの知ってるの？」

「昔付き合ってた男がね。大量にA Vを隠し持ってるのを見つけたやつね。その中にその人のもたくさんあったのよ。しかも、映画だと思って再生したらいきなり『夢咲まいみ・お外でもイッきまゝす』ってタイトルが出たら覚えるでしょ」

「……なるほどね」

できれば共感したくないことだが、似たような経験がある奈津美には、納得できすぎて頷くしかない。

「でもさ。何でさっき、私がその人のこと聞かれたの？」

結局分らないのはそれである。

今初めて知ったA V女優について、どうしていきなり聞かれたのか。しかも、女である奈津美にだ。

「さあ……あ、でも……」

カオルは奈津美のことをじっと見つめる。

「何？」

「……なんかさあ。奈津美、その夢咲まいみに似てる気がする」

「はあっ？」

カオルの発言に、奈津美は思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

「ちょっと待って」

カオルが携帯を取り出し、操作をし始める。

「何それ。全然嬉しくないんだけど」

A V女優に似てると言われて、心から嬉しいと嬉しいと思える女なんているのだろうか。

確かに、ルックスとしては、褒められているのかもしれないが、それが嬉しいのかどうかというのは別の話だ。

「あ、出た。夢咲まいみ」

カオルが携帯の画面を見ながら言った。

どうやら、検索にでもかけていたらしい。

「……あー。似てるっちゃあ似てるのかなあ」  
携帯画面と奈津美を見比べながらカオルが言う。

「でも、今の髪型が似てるからかも。雰囲気は何となく似てるかなーって感じ」

そういいながら、奈津美に携帯を差し出した。

奈津美はそれを受け取って画面を見る。

その画面は、DVDのパッケージが映っていて、その夢咲まいみが水着姿で映っていた。

「……似てる？」

初めて見る夢咲まいみに、奈津美は首を傾げる。

似てるのか？

客観的に見たら、可愛いというか、セクシーというか流石だな、という容姿だが……それと自分が似てるとは、何とも言い難い。

「だから、その髪型はなんとなく今のに似てるかもってぐらい。あと、輪郭とか、角度的に似て見えるかなって。簡単に言えば、雰囲気？」

「雰囲気が似てるっていうの？」

奈津美は複雑な表情を浮かべてカオルに携帯を返す。

「うーん。だから、似てるって言われればそうかなーって感じ」

カオルは携帯を受け取ると、再び操作をしている。

「似てるって言ったのカオルでしょ」

「それはそうだけど……って、あ、大丈夫よ」

カオルは携帯の画面を見ながら言う。

「この人、上から84・59・85だって。奈津美の方が十分いい体してるって」

プロフィールでも見たらしく、カオルはそんなことを報告してくれる。

「……別に嬉しくないんだけど。張り合ってるわけじゃないし」

そんなことで勝ったって、何の自慢にもならない。

「そりゃそうよねー」

全くの他人事のように言いながら、カオルはカチカチとボタンを押している。

「ていうか、引退してるって。夢咲まいみ。『熱狂的なファンが多く惜しまれながらも、一昨年AV業界を引退し、現在の活動については公になっていない。一部では、元・同業界人と結婚したという噂もある』ってさ」

「ふーん」

最早奈津美にはどうでもよくなってきた。

「それより、なんでさっきあたしがその人のことを聞かれたの？」

脱線したが、元々はその話がきっかけだ。

どうして、さっきの二人は奈津美にそのことを聞いてきたのか。

「さあ……あれじゃない？ 奈津美が夢咲まいみに似てるなーって思ったから、血縁関係でもあると思われたんじゃない？」

カオルの言う通りかもしれない。だからいきなり姉がいるかどうかなんてきかれたのか。

「……じゃあ、あたし、今までそんな風に見られてたってこと？」

そうだとしたら、全くいい気分のものではない。



男性にとっては魅力的であるこの体型のせいで、今まで散々嫌な思いをしてきたのに、更にそんな風に見られたら、一体どうしたらいいというのか。

「それはないでしょ。今まで何も言ってきたことなんてないんだし。今日奈津美の髪型変わってるのを見てそう思ったんでしょ。あたしだって、別に前までの奈津美見ても特に何も思わなかったし」

「ホントに？」

「うん」

そう言われても、ほっとしたような、そうでもないような、複雑な心地だった。

「あーあ。これなら髪切るんじゃないかったかも」  
ため息混じりに奈津美は言った。

「何だよ。似合ってるのに」

「似合ってたって、こんな風に言われるんだったら嬉しくない」

「旬君にだってべた褒めされたんでしょ？」

「……べた褒めっていうか、まあ、似合ってるって言うてくれたけど」

「ならいいじゃない。旬君はそんな目で奈津美のこと見てないだろうし」

「そうだけど……あ」

話の途中だが、背中の方に置いていた鞆から、携帯の振動が伝わってきた。

奈津美は鞆の中から携帯を取り出した。

「なーに？　噂をすれば旬君からのメール？」

カオルがニンマリと笑いながら奈津美を見ている。

「ちっ違うわよ！」

「違うの？　いつもこの時間にメールがくるのって、旬君からじゃないの？」

確かに、いつもではないが旬は奈津美の仕事中には時間を見計らって、メールが来る。だから、奈津美も旬からだと思って携帯を取り出した。

「……旬からだとは限らないし」

何でもないように装いながら、きつとこの時間にメールしてくるのは旬からだろうと思いつながら、奈津美は携帯を開いた。

しかし、待ち受け画面に表示されたアイコンを見て、奈津美は目を丸くする。

メール受信のアイコンに5という数字が表示されている。

朝から今までの間に五通のメールがきていたらしい。

ここ暫くそんなことなんてなかったのに……と、不思議に思いながら奈津美は受信メールを確認した。

受信メール一覧は、奇妙なことになっていた。

登録していないアドレスがいくつも並んでいる。朝から来ていたメール全てがそのアドレスからだった。

そしてそれは、昨日来た送り主不明のメールのアドレスとも、同じだった。

昨日のメールも、削除し忘れていたから分かったが……また来たのだ。

とりあえず、奈津美は古いものから内容を確認してみた。

朝の七時半前のメール。

『おはよう。今日はゴミの日なんだね』

理由が分かる前に、背筋に寒気が走った。

何、これ……

『今から仕事？』

『ここで働いてるんだね』

『今、仕事中かな？』

『今は昼休み？休憩ってあるのかな？』

メールは全てそんな内容で、流石に尋常でないということは感じ

取った。

こうまで同じアドレスから続いてメールがくると、ただの間違いではないことが分かる。

「どうしたの？」

奈津美の様子にカオルが不思議そうに尋ねてくる。

「……なんか、昨日から変なメールくるの」

奈津美はありのままに話す。

「変なメール？」

「うん。全然知らないアドレスから、昨日から合わせて八通も」

「えー……登録してないだけとかじゃなく？ 前に削除した人からとか」

「そんな人いないよ。削除したのっていつでも……元彼ぐらいだし。今更くるわけないし」

今まで付き合ってきた彼氏とは、あまり言い別れ方をしなかったパターンが多く、別れたら即アドレスは消去し、それ以来は疎遠なままだ。

誰一人として、今になって連絡をよこそうとする男がいるなんて考えられなかった。

「それに、こういう内容なんだよ？」

奈津美はカオルにそのメールを見せた。

カオルは奈津美の携帯を受け取り、画面を見る。

「左押ししてって。続けてきてるから」

奈津美の言うとおりカオルがカチカチとボタンを押している。するとみるみるカオルの表情が変わる。

「……これって……奈津美は返信してないのよね？」

カオルが確認するように聞いてくる。

「うん。誰からかも分からないのに、返信なんかできないよ。最初はその間違いだと思ってたし」

「……これって、もしかして全部奈津美の行動？」

「え……？」

一瞬どういう意味か分からなかったが、奈津美はすぐにはっとしてカオルから携帯を受け取った。

それで改めて見てみると、そうだった。

昨日の『窓開けたまま出かけてるよ』というメールは、奈津美が買い物に出かけてすぐのことだし、その後の二通は、奈津美が買い物をしている間だ。タイミング的にはちょうどピッタリくる。

そして、今朝『ゴミの日なんだね』というメールは、細かい時間までははっきりしないが、確かに奈津美が一度ゴミを出した頃の間だ。その後も、奈津美が家を出た時間、出社した時間ぴったりにメールがきていた。

これらは全て、ただの偶然といえるものなのだろうか……

「奈津美……変な男にでもつきまどわれてるんじゃない？」  
カオルが親権な顔で言った。

「え……これって、男？」

何故か出てきた言葉は、そんなことだった。

「男だとは限らないけど……要は変な奴に私生活覗かれてるんじゃないかってことよ。平たくいうと、ストーカー」

「ストー……」

奈津美の言葉が詰まってしまう。

普段、自分には関係ないと思っていて、あまりにリアリティーのないワードに、思考が追いついていかない。

「……て、え？ あたしに？ そんないきなり？ そんなストーカー  
ーされる心当たりないし」

「あのねえ、予告あつてのストーカーなんてあるわけないでしょ。  
それに、相手が分からないからこそストーカーって言うんだし」  
間抜けな奈津美の発言にカオルは呆れている。

「あ……そっか」

カオルがため息をついて言葉を続ける。

「まあ、メールが来るってことは、奈津美の連絡先知ってる人って  
ことなのか……どこからそういう情報が漏れて知った人なのか……  
どっちにしても、ストーカーするんだから、奈津美の行動範囲の

どこかしらにいる人よね」

カオルは落ち着いた様子で推測をしている。

奈津美の方は、やっぱり現実味がなくて、当事者だというのにそんな考えは浮かばない。

「……でも、本当にストーカーだとして、何がしたいの？　こんなメール送ってきたって、明らかに怪しいんだから相手にされるはずがないのに」

最もなことを、奈津美は疑問として口にした。

「そういう感覚がないからストーカーなんですよ。真っ当な考えがあるんならしないって。困ってるところが見たいとか、変わった趣向でもあるもんじゃない？」

「やだ。何それ……」

奈津美は眉を顰めた。

そんな異常な趣向の人間に見られてるのかと思うと、鳥肌が立つ。

「……でもまあ、まだメールぐらいしか被害ないんですよ？　それならまだストーカーじゃない可能性もあるし」

あまりにも脅し過ぎたと思ったのか、カオルは明るく言った。

「うん………あ」

ふと、奈津美の頭に朝のことがよぎった。

その瞬間、血の気が引いた気がする。

「奈津美？　どうしたの？　顔色悪いよ？」

奈津美はおもむろに顔を上げた。

「ねえ、カオル。ストーカーって、ゴミまで持ってたかな」

今朝、無くなっていた奈津美の家のゴミ。あれがもし誰かに持っていたのだとしたら……

『今日、ゴミの日なんだね』

このメールの送り主と同一であるという可能性がある。

「持っていかれたの？」

カオルが眉をひそめる。

「……多分。今朝、一度ゴミ出しに行って、まとめ忘れたのを捨てに行った時には無かったの」

それを言うと、お互いに黙ってしまふ。先に口を開いたのはカオルだった。

「それ、ストーカーだとしたらかなり深刻よ？」

カオルはより真剣な顔をしている。

「……どうしよう。あたし、ストーカーなんてされたことないし」  
カオル表情を見て、奈津美の不安は掻き立てられる。



こんな時の対処方なんて、ぱっと思いつかばない。

「まあ、そりゃ何回もあっちゃたまないけどね。とりあえず、用心することね。人通りのないところを一人で歩かない。メールはすぐ削除する。ていうか、拒否するかアドレス変える方が早いかもね」

「うん……」

奈津美も考えてみたが、今のところ、対処はそれぐらいしかない。それで何とかなればいいけれど……

「奈津美。もし不安なら旬君にも相談しときなよ？　それでどうにかなるとは限らないけど……言っとかないと余計な心配かけるかもしれないよ」

カオルに言われて奈津美ははっと旬の顔を思い出す。

しかし、旬にこのことを言う方が、心配をかけることになるんじゃないだろうか……

「……うん」

頷いたものの、旬に話すにはためらいがあった。

……大丈夫。すぐに何とかなる。というか、何とかする。

奈津美はそう決め込んでいた。

しかし、それが甘かった。

## 28 忍び寄る影(3)

早く帰りたい。

歩きながら奈津美はひたすら思っていた。

仕事が終わってから、すぐに家に帰りたかった。

でも、今日はレンタルしていたDVDを返さないといけない。

昨日は見ることはなかったし、こんなことなら、一泊にして昨日返しておけばよかった。

今日は定時で終わり、夕方の街中なので、人は多い。店もそんな中にあるので、何かあるという心配はないだろう。

しかし、そうになると、人の目が多すぎて、恐怖だった。

この中に、ストーカーがいるかもしれない。この大勢の人間に紛れ、奈津美のことを見ているかもしれない。そう思うと、その他大勢の人間全てが奈津美にとっては容疑者となってしまう。

早く帰りたい。

自然と歩く速度が早くなり、やっとのことで店に着いた。

奈津美は自動ドアから中に入ると、すぐにカウンターに向かった。

丁度タイミングよく空いていて、奈津美は鞆からDVDを出すと

そこにいた店員に渡す。

そこにいた店員が受け取ると、中身を取り出し、チェックをする。一枚だけなのですぐに済んで「結構です。ありがとうございます」と、営業スマイルを向けられた。

奈津美はすぐにカウンターを後にして、店から出ようとする。

自動ドアまで一直線に行こうとしたら、商品棚から出てきた人とぶつかった。

「きゃっ」

奈津美が思わず叫んだのとほぼ同時に、がしゃがしゃと床に何かが落ちる。DVDのケースだ。

「申し訳ございません」

ぶつかったのは、男性店員だったようだ。慌ててしゃがみ、ケースを拾っている。

「あ……すみません」

奈津美もしゃがんでケースを拾う。

早く帰りたいが一心で、周りに注意が払えてなかった。

こんなところで人に迷惑をかけてしまうなんて、恥ずかしい。

「本当にすみませんでした」

奈津美は拾ったものを渡すと、店員の顔も見ずにすぐにその場を後にした。

かなり構えていたのに、夜八時を過ぎても、気がつく限りの異変はなかった。メールも今のところきていない。

昨日と今日の大量のメールや、ゴミを持っていかれたというのは気のせいだったのだろうか。

あれだけおかしいことが続いている、こうもぴったりと治まるのも不自然で気味が悪いような気はするが、もうこれで心配ないのならそれでいい。

心配しただけ損だったかも。

そう思って奈津美は緊張を緩めた。

その時だった。

ローテーブルに置いた携帯が震えた。

テーブルを伝った振動が思った以上に大きな音をたてて、奈津美は肩を震わせた。

すぐに止まったので、多分メールだ。

嫌な予感がした。

奈津美は恐る恐る携帯を手に取り、パチンと音を立てて開いた。

待ち受け画面には、メール受信のアイコンに1の数字。

携帯を操作し、奈津美は受信メール一覧の画面にする。

そこに表示されたのは、登録されていないアドレス……今までと同じアドレスだった。

また来た……

安心したところだったのに、奈津美の背中に再び悪寒が走る。

ここで、読まずに削除すればいいのに、奈津美はそのメールを開いてしまった。

「……！ 嫌っ！」

奈津美は携帯を放り投げた。

ゴトンと鈍い音をたてて携帯が落ちた。

手が震える。気味が悪い。

『今日は会えて嬉しかったよ。君すごくいい匂いするね』

何……何なの……

見られていただけじゃない。奈津美のすぐ近くにまで迫られていた。

あれだけ神経質になっていたはずなのに、全く気付かなかった。それが尚更気味が悪い。

奈津美はぐっと自分の腕を抱き締めた。

携帯がまた震えた。フロアリングの床を伝って、振動の音が大きくて、奈津美は肩を震わせた。同時に恐怖も感じる。

振動は、すぐに止まった。恐らくはメールだ。

また、メールが来た。

奈津美がそっと携帯に手を伸ばすと、自然と手が震えていた。

携帯を手に取り、画面を見る。

さっきと同じように、メール受信のアイコンに1の表示がされている。

奈津美はゆっくりとそれを押し、受信メール一覧を表示する。

しかし、そこに新たに並んでいたのは、旬の名前だった。

奈津美はそれを見て、あからさまに安心した。すぐに震えも止まって、メールを開いた。

『ナ〜ツ〜』

もう仕事終わった？

俺は今からバイト行くところだよー！』

絵文字が使われて、男の割にはカラフルなメールの文面だ。

いつも通りの匂からのメールなのに、奈津美は落ち着く。

匂からでよかった。

そして、奈津美はメール受信画面をけして、リダイヤルに切り替える。

一番上の匂の番号を表示して、通話ボタンを押した。

出るかどうかと思ったが、匂はいつも通り、ワンコール鳴り終わる前に出た。

「はい、もしもし」

テンションの高い匂の声がする。

「あ……匂。今、大丈夫？」

いつも通りの匂に気圧されてしまいそうな感じがした。

いつもと違うのは、奈津美の方だけだ。それを忘れてしまいそう  
だ。

「うん。今、居酒屋向かってるところだから。でも、珍しいな。ナツ  
がメールに電話で返してくるって。俺は嬉しいけどさ」

匂の言うことに、奈津美はそういえば、と思う。

「今日は……匂の声聞きたかったの」

奈津美は恥ずかしいながらも誤魔化すために言った。

特にこれといった理由なんてなかった。突発的に、電話しようと思っ  
て旬にかけたのだ。

いや、あえて言うのなら、心を落ち着けて、安心したかったとい  
うことだけだった。

「んー？ 何い？ 可愛いこと言っちゃってー」  
旬がからかう時の声色で言った。

「だ……だって……」  
何かを言おうとしたが、その後は続かなかった。  
ここで今、何を言えいいのか、分からなかった。

「……ナツ、どうかした？」  
旬の声が急に真剣なものになったような気がして、奈津美はドキ  
ッとした。

「えっ……何で……」  
とっさにそう返すことしかできない。これでは様子がおかしいの  
はバレバレだ。

「何か……わかんないけど……やっぱ珍しいし」  
やっぱり、旬には不自然さを隠せない。

カオルが言っていたことが頭に浮かぶ。

『――不安なら旬君にも相談しときなよ？』

旬に言うべきだろうか。



昨日から変なメールが来ていて、今朝はゴミを持っていかれたように、それがストーカーの仕業なのではないかという疑いがあること。

正直に言えば、とても不安だ。言ってしまったって楽になれるのなら、言ってしまいたい。

しかし、言ったところでどうなる。

まだ、直接的な被害があったわけではなく、ストーカーだと確定したわけでもない。それに、もしそうだとしても、なんとか対処できる範囲なのではないのか。

もしも今、旬にこのことを言ったら、旬にいらぬ心配をかけてしまうだけではないのか。旬のことだから、今すぐこっちに来るなんて言い出しかねない。今からバイトに行くというのに。旬のバイトには、生活がかかっているというのに。

今の段階で、不必要な心配はさせるべきではない。だから、今はまだ言うべきではない。

「……電話したらダメだった？」  
誤魔化すために奈津美は言った。自分でもずるいと分かってはい

る。  
「えっ……ううん！　そういうんじゃないくて……つうか、電話くれたのは嬉しいし」

きつと電話の向こうの旬は、首を大きく横に振っているのだろうと安易に予想できるほど、旬の声は必死な様子だった。

旬だったらそう言って、もう聞いてこないというのは、大体分かっていた。

やっぱり、最低だ。

だけど、本当のことは旬には言えない。

「……ごめんね」

殆ど無意識に奈津美の口からその言葉が出た。

「ナツ……?」

「ごめんね。バイト前なのに。時間大丈夫?」

奈津美の口は、信じられないくらいあっさりと言い訳のように言いつくろっていた。

「あ、うん。大丈夫だよ。もうすぐ着くけど……でも、ナツの声きけてよかったかも」

「そう……?」

そんなことはない。奈津美の方が、旬の声が聞けてよかったと思ってるはずだ。

「うん。じゃあ、そろそろ着くから……バイト終わったらまた電話……あ、メールの方がいいか。今日は十二時過ぎるし」

「ううん。まだ起きてるだろうから、どっちでもいいよ。旬ができる方で」

十二時過ぎたころのやり取りといったら、きっと『おやすみ』ぐらいになる。いつもなら、無理してメールも電話もしなくていいと言っている。

しかし今日は、それで連絡が無かったらと不安になって、それは言わなかった。

「わかった。じゃ、とりあえず、連絡はするから」

「うん。バイト、頑張ってね」

「ありがと。ほんじゃ行ってきます」

「行ってらっしゃい」

電話を切ると、寂しく感じた。

いつもならなんてことないはずなのに……奈津美が思っている以上に、神経が参っているのだろうか。

……大丈夫。大丈夫だから。

奈津美は自分に言い聞かせるようにして、携帯を握りしめた。

それからの怪しいメールは、おさまることはなかった。

朝、起きるのを見計らっているようにメールが入り、会社に着い

て確認すると既に二通ほどメールが来ている。

昼休みの時点で数件入っているのも当たり前になっていて、帰る夕方から夜にかけてが一番メールがくるようになった。

月曜日から、今日の金曜日までに、明らかに悪化していった。

「それ、もう確定じゃない？」

朝の更衣室で、カオルがすっぱりと言った。

何がと言わなかったが、それは聞くまでもない。

「ていうか。なんで拒否なりアドレス変更なりしてないの？ そんなだったらおさまるわけないでしょ」

「拒否ならしたよ。火曜日に家に帰ってから。そしたら、その夜はメール来なかった。……でも……次の日にはアドレス変えて送ってきたの。しかも、携帯とパソコンとから送ってきてるみたいで、何回か間違えて開いちゃった」

そのメールに書いてあった内容を思い出して、奈津美は肩を震わせる。

奈津美の行動を逐一報告する内容が主であったが、それに加えて『今何してるの？』『一人じゃ寂しくない？』だとか、家に居る奈津美のことを窺うもの『僕がいるからね』などという、自己主張をしてくる内容も増えた。

だんだんと、ストーカーの存在の色が濃くなってきた。これはも

う、認めざるを得ない状況になってきた。

「でも、アドレス変更もしてないみたいだけど、何でしないの？」

カオルが言うとおりに、奈津美はまだ自分のアドレスの変更をしていなかった。

しかし、それはしなかったわけではない。できなかったのだ。

「それは私も、しようと思ったよ。流石に気持ち悪かったし……それで、水曜の夜に、変えようかなって思って、変えようとしたの。そしたら、電話がかかってきて……非通知だったけど、ずっと鳴りっぱなしだったから、出たの。そしたらすぐに切れて……最初は何か思わなかったけど、それが何回も続くから……」

「もしかして、携帯の番号も知られてるの？」

「そうかもしれない」

奈津美が頷くと、カオルは息を呑んだ。

「……そっか。確かに、アドレス変えたって変わらないかもね」

メールアドレスは簡単に換えられても、携帯の番号までは簡単には換えられない。

「……そろそろ行こう。時間だし……」

奈津美はため息をつき、ロッカーの鍵を閉めた。

「……でもやっぱり、アドレス変えたほうがいいのかなって思うことはあるんだけど……でも、アドレス変えたら、それをまた周りに知らせないといけないでしょ？　それが不安なの」

オフィスに続く廊下を歩きながら、奈津美は話の続きをする。

「不安って？」

「ストーカーが誰なのか分からないままで、どこからあたしの番号とアドレスが知られたのかも心当たりないから……また知られるかもしれないし……」

「知り合いの可能性は高いの？」

「多分低いけど……ないわけじゃないから。……少なくとも、会社の人ではないんじゃないかと思う。メールの内容だと、あたしがここで働いてるっていうのは知らないみたいだし、あたしの仕事中的ことは送ってこないから」

見当がつかず、考えだした結果がそれだ。

元々、奈津美のメールアドレスなどを知っている男性社員は、同じ部署の人間で同期の数人しかいない。そもそも全く知らないアドレスから来ているのだから、そのためにわざわざアドレスを作ったなど、特殊なことがない限り、可能性としてはかなり低い。

「なるほどね……でも、そうになると、ストーカーは、奈津美が全く知らない赤の他人って可能性が高いんじゃないの？」

「うん……だけどそうになると本当に誰か分からないし……大体、何

であたしに付きまとうのか……全然知らないのに」

「知らないから、知ろうとして付きまとうんでしょ。しかも、知らないから勝手に色々想像して偶像化して……って」

カオルがふと何か思いついたように表情を変える。

「そういえばさ、そのストーカーって匂君の存在知ってるの？」

そのカオルの質問に、奈津美は一瞬固まって、それから考える。

「……多分、知らない……んじゃないかな。そんな内容のメールは一回もきたことないし……っていうか、メールがくるようになってから一度も匂と外歩いてないし」

「でもゴミ持ってかれたんじゃないの？　その中に男がいるって形跡の残るものはなかったの？」

「……分かんないけど……思い浮かぶ限りでは、なかったと思う」

カオルの言う、一目で男の形跡と分かるものは、特に無かったと思う。敢えていうのなら、あの前夜の二人の交わりの処理に使われたゴミはあるが、それを捨てに行こうと思ったら既にゴミは無くなっていたので、本当にはないはずだ。

「なるほどね。それで尚更なのかもね、ストーカーが奈津美を狙ってるのも。多分、彼氏なんていないって思われてるんじゃない？」

「……じゃあ、匂のことが分かったら、やめてくれるかな」  
ほんの少し、期待を持って奈津美は言った。

「さあ。どうだろうね。元から恋人が居るって分かってもストーカーする奴だっているだろうし」

「……だよね」

現時点で特異な行為をしてくる人間だ。常識が通じるとは思わない。

しかし、もしストーカーに匂の存在がバレたら、一つ不安なことがある。

以前、テレビでストーカー被害についてまとめたものを見たことがあった。

さまざまなケースについての被害を再現VTRを交えた映像で報告されていた。

その中の一つには、こんなものもあった。

ストーカー被害に遭った女性が、ストーカーを諦めさせるために、男性の友達に、恋人役としてのカモフラージュを頼んだ。

しかし、それを見たストーカーが、男性のことを恋人だと思い込んだままではよかったものの、逆恨みをして、その男性を刺したというのだ。

これが実際に起こらないことだとは言いきれない。もしも起きてしまった場合、被害者になるのは匂だ。

それだけは怖かった。



自分のせいで、匂にまで危険な目に遭わせたくない。

「ていうか、奈津美は匂君にストーカーのこと話したの？」  
嫌なタイミングでカオルが聞いてきた。

奈津美は何も言えずに黙ってしまう。これでもう答えたようなものだ。

「奈津美。いいの？　話さなくて。……まあ、この話の流れで言うのも悪いけど」

「ううん……なんか、匂には言い辛くて……」

そのことを考え出すと、言えなかった。

自分の我慢ですむのなら、匂に余計な心配も、迷惑もかけたくない。

「奈津美の気持ちも分からなくはないけどね。あたしだって、もし同じ境遇なら言えるか分からないから……」

不思議なことに、言おうとしても、言えないことがある。心の中では、大したことないだろうと、言えるだろうと思ったことでも、いざ口にだそうとすると、ためらってしまう。特に、こういうことを異性には、たとえ恋人でも言うことができない。

「とにかく、早くなんとかした方がいいのには変わりないし、対策とかはした方がいいわね。携帯とかも、替えたほうがいいんじゃない？」

カオルはそう言って、色々提案してくれる。

「うん……ごめんね、カオル。あたしのことなのに、色々言ってくれて……」

旬には全く言えないことなのに、カオルに対してはもう多すぎるくらい心配も迷惑もかけている。

それに頼りっぱなしの自分が情けない。

「いいよ。しょうがないって。こんなこと、普通は人に言いづらいことなんだし。当事者なんだから、一番困惑してるんでしょ」

「そうかな……」

「そうよ。だから奈津美は自分がこれ以上の被害に遭わないことだけ考えてたらしいのよ」

「カオル……」

奈津美は、カオルの男前とも思える優しさに、泣きそうになった。この場ではなくわけにはいかないので、ぐっと堪える。

「つていっても、あたしも、何も出来ないから……ごめんね」

「ううん！ カオルがいなかったら……あたし、多分、本当にどうしたらいいか分からなかっただろうから……だから、ありがとう。カオル」

丁度二人の部署の入り口近くまできて、カオルが立ち止まった。それを見て、奈津美も立ち止まった。

カオルは奈津美の正面に向き直ると、ポンポンと頭に手を置いた。

「よしよし。素直でよろしい。旬君にもそれくらい素直だったらいいのね」

「なあ……!？」

子供扱いしたような仕草と、少し皮肉の混じったカオルの発言に、奈津美は大口を開けた。

「ひっ……人が真剣に感謝してるっていうのにつ」

「はいはい。じゃあそろそろ仕事しないとー」

カオルは軽くあしらうと、くるりと方向転換して、オフィスに入っていた。

「もうっ……」

奈津美は小さく呟いたが、ちゃんとわかっている。

これは、カオルなりの励ました。奈津美の気持ちが沈まないように、元気付けてくれているのだ。

……ありがとう、カオル。

改めて心の中で感謝しながら、奈津美はカオルに続いてオフィスに入った。

いくらカオルが励まして、気持ちが軽くなっても、現状は変わらない。

帰宅した奈津美は、携帯の画面を見てため息をついた。重い気持ちがぶり返す。

今日も、大量のメールがきていた。もう携帯を見るのも嫌だ。

でも、携帯をチェックしないと、旬からの連絡が入っているかもしれない。だから、容易に電源を切ることもできないのだ。

朝、仕事の前に最後に携帯を見てからの受信メールが十四件。着信が五件。

履歴を削除すると、奈津美は携帯をローテーブルに置いた。

明らかに、日に日に増えている。最初は、メールが入ってこない時間帯というものが、日によって違ったが、あった。それが段々となくなつて、一時間に何件もメールや電話が入っていることになる。

アドレスを拒否してもまた違うアドレスになってメールがくる。もし奈津美がメールアドレスを変更したら、その分が着信に集中しそうな気がする。

カオルの言うように、携帯を替えるということも考えておいた方がいいかもしれない。

その時、奈津美の携帯が鳴った。

最近の条件反射で、肩が大きく震える。

携帯の方の着信音だ。

もう嫌……

奈津美は目をかたく瞑り、耳を塞いだ。

着信音は鳴り止まない。

やめて……もう……

しかし、奈津美ははっとする。

この時間帯だと、匂からかもしれない。

画面を見たらすぐに分かることなのに、それすら躊躇してしまう。

匂だったら出たい。出なくてはならない。だが、もし違って絶望するのも嫌だ。

奈津美は恐る恐る携帯に手を伸ばした。

着信を確認するだけなのに、心臓が大きく震えている。

決心して画面を見ると、そのに表示されていたのは、匂の名前だった。

あからさまにホッとして、奈津美はすぐに通話ボタンを押した。

「……もしもし」

「あ、やっと出た。ナツ？ 旬だよー」

明るい旬の声が聞こえて、ぐっと胸が締め付けられた。

「うん……」

「どしたの？ 電話出るの遅かったけど」

「ごめんね……ちょっと、手が離せなくて  
上手い言い訳が出来なかった。かといって、電話におびえていた  
なんて、本当のことを言えるわけもなかった。

「そっか。もう夕飯の支度とかしてたの？」

「うん、そう」

旬の言うことに、適当に合わせる。

どうして、好きな人の電話にも怯えないといけないのだろう。

着信音の設定をしておけばよかったのかもしれない。いつもは、  
かかってくる電話の殆どが旬からだったから、わざわざ設定はして  
いなかった。

今日、旬からの電話にこんなに怯えてしまった自分が情けなかつ  
た。

何でこんな思いしないといけないの……？

「――ナツ？」

旬の声が聞こえて、奈津美ははっとする。

「ん？ 何？」

「明日、行っている？」

「え……？」

旬が何の話をしていたのか、奈津美は全く聞いてなかった。

「ごめん、何の話だった？」

「だから。明日の話。明日のデートさ、携帯の機種変に行っている？」

明日は、旬と会う約束をしていた日だ。旬はその話をしていたらしい。

「あ、うん！ いいよ！」

話を全く聞けなかったのを申し訳なく思いながら、奈津美はすぐに頷いた。

どっちにしても、明日は特にどうしようという予定もなかったのだ。

「携帯変えるの？」

何でもなかったことを装うように、奈津美の方から話題を振った。

「うん。今の携帯電話が持たなくてさー。もう電池パックパンパンだし、今だって充電差しながら電話してっから。そうじゃないとすぐなくなるし。やっと二年経ったし、給料も入ったから替えようと思ってる」

「そっか……」

タイムリーなことに、旬から携帯の話が出た。

「……ねえ、旬。じゃあ、ショップに行くのよね？」  
思い切って、旬に確認した。

「うん。そうだよー。駅前んとこの。何で？」

「……うん。あのね、あたしも携帯替えようかなって思ってた……まだどうしよっかなって思ってるんだけど」

少し迷った末に、奈津美は言った。

奈津美がと旬が今使っている携帯の会社は、同じである。自分一人できなり替えに行くとなると躊躇してしまうが、旬が行くと言うのなら、奈津美もそれに乗じて行こうと考えられたのだ。

「あ、そうなんだ。じゃあナツも一緒に替えようよ」

勢いで言ったおかげなのか、旬は何も疑問に思わなかったらしく、明るくそう言ってくれた。

「うん……」

少しほっとしながら奈津美は返事をした。



「んじゃ、明日、うーんと……九時半！ 九時半にナツんちに迎えにいくから」

「うん。分かった」

旬と話したおかげか、明日、携帯を替えたらもう怯えることはないだろうという思いがあったからか、この時には、奈津美はもう安心しきっていた。

## 29 対策

翌日、奈津美は約束の時間を今か今かと待っていた。

約束の時間は九時半で、今は九時十五分である。何だか今日は早く準備が済んでしまった。

髪を短くしたので巻き髪にしたり、ヘアスタイルにこだわる必要がなくなったというのもあるが、早く匂に会いたいという気持ちがそうさせた。

いつも匂が約束の時間より早く家や待ち合わせ場所に来るのは、こういう気持ちなのかと奈津美は思う。……とはいっても、今日の奈津美の気持ちはその匂の気持ちとは全く違うものであるだろうけど。

奈津美は玄関に行き、ドアスコープから外を覗いた。すると、ドアスコープの視界の左端に何かが映った。しかし、すぐに見えない左側に引っ込んで、見えないところに消えた。

多分、隣人が部屋の前を通ったのだろうと、奈津美は何も気にしなかった。

ドアスコープからは誰もいない通路が見える。まだ匂が来る気配もないようだ。

……何やってんだろ。

ドアにくっついてこんなことをしている自分に対し、奈津美は急

に恥ずかしく思った。

いつも時間より早くは来ないでって言っているのに。匂だって、五分以上は早くくることなんてないのに。

そつとドアから離れた時、ドアの向こうで足音がした気がした。

すかさずまたドアスコープを覗くと、匂が右側から視界に入ってきて、ドアの前に立った。

それと同時に、奈津美は玄関を開けた。

「おわ！　びっくりした！」

インターホンを押そうと人差し指を伸ばした状態で匂は肩を震わせた。

「あ……おはよう、匂」

思わず飛び出してしまってから、奈津美は固まった。衝動的に出てきてしまったが、その後のことは考えていなかった。

「おはよ、ナツ。どしたの？」

匂は首を傾げている。

「……えっと、早く支度出来ちゃったから、匂、もうすぐ来るかなって思ってた……」

最後のほうは尻すぼみになって、声が小さくなる。それでドアスコープを覗いて待っていた、とまでは言えない。

「ナツ……可愛いー！！」

匂が思い切り奈津美に抱きついた。

「ちょ……旬っ！」

驚いて腕の中でもがき、力が緩んだと思ったら、唇を塞がれていた。

「……久々のナツだあ……」

唇が離れると、背中と腰に腕を回し、ぴったりと密着するほどに抱き締めて旬が言った。

「旬……」

肺いっぱい旬の匂いが入ってきて、奈津美も落ち着いていた。

無意識に奈津美も旬の背中に腕を伸ばそうとしたが、すぐに今の状況に気付く。

玄関を開けっぱなしの半分外だ。

「旬！ ちょっと離して！ 誰か通るかもしれないから」

「大丈夫だよ。誰もいないから」

そう言って旬は離そうとしない。

「だから！ いつ誰がくるかわからないし……誰が見てるかも分からないんだから……」

そう、どこの誰が見てるかも……

自分が思ったことに、奈津美は固まった。

この状況も。ストーカーに見られてるのかもしれない……？

「ナツ？」

急に動かなくなった奈津美を不思議に思って、旬は腕の中の奈津美を覗く。

「……ちょっと待ってて。今、鞆とってくるから」

奈津美は旬の腕から離れて、部屋の中に入った。

リビングに用意していた鞆を取り、家中の窓の戸締りを確認し、大きな窓のカーテンはしっかりと閉めた。三階で、周りは住宅街なので三階以上の建物はないが、念のためだ。

「ごめんね。お待たせ」

玄関に戻ってきて、すぐにパンプスを履いて外に出る。

「ううん。全然」

玄関の扉を閉め、鍵もしっかりとかけ、ドアノブを回してちゃんとかかっているか確認する。ここまで気にするようになったのは、ストーカーが現れてからだった。

「行こっか」

「うん」

旬が奈津美の左腕の内側に手を入れ、そのままスルッと奈津美の手に滑らせて指を絡めた。

いつもの何気ない仕草だけれど、何だかとても落ち着いた。

コーポを出ると、奈津美は辺りを見回した。

誰かに……ストーカーに見られてるのではないかと、警戒していた。

「ナツ？ どしたの？」

奈津美の様子に旬が首を傾げた。

「ううん！ 何でもない。何でもないの」

奈津美は大きく首を横に振って、笑ってみせた。ちゃんと笑えているかどうかは、分からない。

「そう？」

旬はやはり不思議そうに首を傾げた。

「うん。行こう」

今度は奈津美の方が強く旬の手を握り、歩き始めた。

何があっても、この手を離さなければ、きっと大丈夫だ。

休日ということもあってか、開店直後のはずなのに、そこそこの客が入っていた。

奈津美と旬はそれぞれ整理券を取って順番を待つ。

「ねえ、旬。あたし、携帯どれにするか決めてないの。見ててもいい？」

奈津美は店の真ん中にある携帯端末の見本のディスプレイを指さして言った。

「いいよー。ってか、決めてなかったの？」  
旬は目を丸くしている。

そりゃそうだろう。携帯を変えようとしているくせに、機種を決めていない人なんてそうないだろう。

「うん……ちょっと、急だったから」

奈津美は昨夜衝動的に決めたことだったので、今どんな機種があるのかとか、どれがどんな機能があるのかとかは分からないままだったのだ。

「ふーん。そっかあ。じゃあ早く決めないとな」

「うん」

それぞれの機種を眺めながら、奈津美はどれにするかを考えた。

「ナツ、今のと同じやつにするの？」

旬が言っているのは携帯の機種別のメーカーのことだ。

「どうしようかなあ」

そう言いながら、奈津美は今の機種と同じメーカーのものを探す。

そのメーカーで最新機種を見つけたが、なんだが微妙だった。

スリムではあるが、いかつい感じのデザインで、色も黒と白とオレンジと緑で、どちらかというと男性向きの感じた。

機能は特にこだわらない。今のものでさえ、使わない機能のものが多く、とりあえず最低限の機能さえあればいい。

他の機種を見回し、ふと目についたものを手に取った。

色がピンクで、一目で可愛らしいという印象が持てた。それでもシンプルで軽く、開いてみて、手にフィットする感じで、なんだかしっくりときた。

「ナツ、これにすんの？」

何故か旬が嬉しそうに言った。

「俺、これにすんの。これの黒」

旬は奈津美が持つてる機種の色違いの黒を手にとった。

「そうなの？　これ、いいの？」

どういう機種か分からないので、奈津美は旬に尋ねる。

「うん。なんか見た目がいいじゃん。今のやつ、けっこうゴツイから、次はシンプルなのにしようと思って」



「匂もあんまり機能ってこだわらないの？」

「んー……そこまで細かいのはいらねえかなあ。意外と使わねえじやん。俺はナツとメールと電話ができたならそれでいい」

そう言って、匂はニコツと笑った。

匂も奈津美と同じようなことを思っていた。何だか嬉しいような照れ臭いような……

「あ、でもやっぱウェブと写メもあった方がいいかな。結構使ってるし。それに目覚ましもないと起きらんないし……ワンセグもあったらあったでいいかもな。今はないけど、これはテレビ見られるんだ」

ウキウキとしながら匂は付け足す。

少し前にはいいことを言っただけだった……

「結構こだわってるんじゃない」

「んなことないよー。これくらいは最低条件じゃん」

言うことがコロコロと変わるのは、匂らしいといえ匂らしい。

「まあいっか。あたしもこれにする」

もうめんどくさくなって、奈津美は機種を決めた。

奈津美よりはこだわってる匂がいうのだから、あれば便利な最低限は揃っているのだろう。

「マジで？　じゃあオソロだな」  
旬が嬉しそうに笑った。

やっぱり、この反応は乙女だなあと、奈津美は密かに思った。

「整理番号十九番のお客様いらっしゃいますでしょうか」

女性店員がバインダーとペンを片手に店内を見回している。

「旬じゃない？」

「うん。……はい」

旬が手を上げて店員にアピールする。

すぐに気付いた店員が旬らの近くにやってくる。

「十九番のお客様ですね。申し訳ありません。本日、大変込み合っておりますので、先に御用件だけ伺わせていただきます」

「はい。えっと、機種変更したいんですけど」

「機種変更ですね」

そう言いながら店員はバインダーに挟んである紙に書き込んでいく。

それから、希望の機種や、契約の状態など、必要事項を尋ねていく。

「——かしこまりました。それでは整理番号が呼ばれるまで、少々お待ち下さい」

「はい。あ、次、二十番、彼女です」

旬が気を利かせて、店員に次の奈津美のことを言った。

「はい。では御用件を伺います」

店員が今度は奈津美の方に向く。

「あ……あの、今のを解約して、新規で買いたいんですけど」

奈津美がそれを言うと、旬が小さく『えっ』と言って目を丸くしている。

その様子に気付いてはいたが、気付かないフリをして、奈津美は店員に対して必要事項を答えていった。

「はい……それでは、もう暫くお待ち下さい」

店員はそう言って、二人のそばから離れていき、次の客を探しにいった。

「……ナツ、新規で携帯替えんの？」

予想通りの問いが旬の口から出た。

旬には何も言っていなかったもので、この形でバレてしまうと、なんだか気まずい。

「うん……あのね、最近、イタズラ電話とかひどくて……ちょっと番号変えた方がいいかなって思って」

それがストーリーカーの仕業だということは伏せて、奈津美は言った。本当のことを全て言っているわけではないが、全くの嘘でもない。

「そうなの？　でも携帯替えるほどってことは、そんなひどかったの？　言ってくればよかったのに……つっても何もできなかっただろうけど」

とても心配した様子で匂は奈津美を見る。

「ううん……だって所詮はイタズラだもん。今日携帯変えたら多分おさまるよ」

「うん。まあ、そうだよな。それならいいけど」

本当に、それならいい。もう何もなかったことになってくれれば……

「でも、そういうのってどこから漏れるんだろうな……。俺も何回もメール来たりしたことあったけど、すっげーイライラするし」

「うん……ホント、そうよね」

相槌を打ちながら、奈津美は匂に対して申し訳ない気持ちで一杯だった。

イタズラ電話と聞いただけでこんなに心配してくれる匂に、奈津美は本当のことは言えないままである。

でも、イタズラ電話というだけでこんなに心配してくれるのだから、本当のことを言ってしまったらもっと心配をかけることになるんじゃないだろうか。

罪悪感がありながらも、言い出すことはできなかった。

『整理番号十九番のお客様、二番カウンターまでお越し下さい』

機械の音声アナウンスが流れた。

「あ、呼ばれた。じゃあ、先に行ってくるな」

「うん。後でね」

旬がカウンターに向かうと、奈津美は小さくため息をついた。

もう少ししたら、奈津美も呼ばれる。そしたら、携帯が変わる。

奈津美はそっと今持っている携帯を見た。

幸い、今日はまだメールも電話もきていないようだった。

このまま何もこななければいい。あと、数十分もすれば、この携帯は解約されて、新しい携帯が手元にきているはずだ。そうしたら、もう二度とメールや電話もこなくなるはずだ。

『整理番号二十番のお客様、一番カウンターまでお越し下さい』

奈津美の番号を呼ぶアナウンスがかかったので、奈津美もカウンターに向かった。

携帯ショップを出たのは、十二時過ぎだった。

二人は、昼食を摂るために、今日は洋食のレストランに来了。

「意外と時間かかったなー。早めに行ったのに」  
注文をしてから、旬が一息ついていった。

「うん。でも、休みの日だし、まだあたし達はマシだったんじゃない？ あたし達の後ぐらいの方がもっと混んでたみたいだから」

奈津美達が携帯ショップを出た時は、奈津美達が来た時以上の混み具合になっていた。恐らく、奈津美達はギリギリでピークの少し前に行けたらしい。

「そうだよなあ。待つ時ってかなり待つもんな。よかったよな。丁度昼頃に出れたし。ちゃんと欲しいのゲットできたし」

旬はショップの紙袋に入れた、新しい携帯を取り出した。

「うん」

奈津美も同じように旬とおそろいの携帯を取り出した。

「そうだ、ナツ。携帯変わったってことは、番号もメルアドも変わったんだよな。新しいの教えて」  
携帯を開きながら旬が言った。

「あ……そっか。どうしよう。アドレス、変えようかなあ」

新規で変えたので、携帯番号は勿論、メールアドレスも変わっている。

奈津美は新しい携帯の自局番号とメールアドレスを確認する。メールアドレスは、初期設定のアルファベットと数字がランダムに並んだものだ。

これが一番迷惑メールなど来ないだろうが、これからどこかに記入しないといけないことがある時には難儀だろう。

「ナツ、アド変えんの？」

「……うん。その方がいいよね。でもあたし、こういうの考えるの苦手なんだけどなあ」

そう言いながら奈津美はメールアドレス変更の手順を踏んでいく。新しい機種ではあるが、そこまでの手順は大体の携帯端末に共通しているので、難しいことはない。

「んじゃあ俺が考えてあげよっか」

旬がニコニコして言った。

奈津美は旬のことをチラッと見ると、すぐに携帯画面に視線を戻した。

「別にいい」

「えー！ 何でー？」

旬はあからさまにがっかりした表情になる。

「だって、絶対に変なのにするでしょ」

「そんな人聞きの悪いこと言うなよー。ナツにぴったりのやつだから！ 聞くだけ聞いてみて。よかったらこれにしてよ」

「……じゃあ聞くだけね」

あてにはしていないが、このまま聞きもしないとまた匂がぶーぶーうるさくなるだろう。

匂は嬉しそうに笑った。

「んーと、アイラブシュン、アットマーク……」

「却下」

ニコニコしてる匂を一刀両断するかのように、奈津美はすっぱりと言いつづけた。

「えー！ 何でー？」

匂はまた不服そうに口を尖らせた。

「何でもなにも、そんなアドレスにできるわけないでしょ！」

「いいじゃん。分かりやすくて。アドレス交換した瞬間に彼氏いるっていうのもすぐに分かるし。あ、じゃあシンプルに、シュンアットマーク……」

「却下！ そういう分かりやすさは求めてないの！ そんな恥ずかしいアドレスにできるわけないでしょ！」

まだ若いとか、そういうことができるキャラならメールアドレスにはつきりと入れられるかもしれないが、奈津美のキャラではどうしてもできないことだ。

「何で恥ずかしいの？ 俺の名前なのに……」

そう言いつづけて頬を膨らませる。女の子でもそうしないことであるの



に、何故か旬がやっても違和感がなかった。

「旬の名前っていうか、彼氏の名前だから恥ずかしいの！……もういい。もう変えたから」

奈津美は携帯の選択ボタンを押した。

旬とのやり取りをしながら奈津美の指はもうアドレス変更を行っていたのだ。

「えー。じゃあ何で聞いたの？」

「旬が言いたそうにしてたからでしょ。それに聞くだけって言ったから」

つれなく言うと、旬はまだ不服そうだった。

「……まあいいや。じゃあ新しい番号とアド教えて」

「うん。ちょっと待って。今メールで送るから」

「あれ？でも新規で買ったんだったら、今まで登録してたのって写されないんじゃないの？」

「うん。でも、メモリーカードに入れたから、大丈夫。それに、手帳にも控えてるから。――送ったよ」

「へー。ナツってマメだなあ。あ、来た」

旬の携帯から、初期設定の味気ない着信音が鳴って、旬は携帯を開いた。すぐにメールを確認し、奈津美の新しい番号とメールアドレスを見る。

「……あれ？ ナツ、前とアドそんなに変わらくない？」

旬は登録してあった奈津美のアドレスと、変更した奈津美のアドレスを見比べて言った。

奈津美のメールアドレスは至ってシンプルで、名前と誕生日の数字が並んでいるだけで、シンプルなまま、目立った変化は見られない。

「……ん？」

じっと見て、違うところがあるのに気付いた。

前の奈津美のアドレスは、奈津美の誕生日の1030のあとにすぐアットマークがきていたのに、新しいアドレスには、さらにドットで続いて、1122の数字がくっついている。

「ナツ……これって、俺の誕生日？」

旬が目を丸くして奈津美を見ると、奈津美はすぐに真っ赤になった。

「そっ……それはっ……名前は流石に入れられないけど……誕生日くらいなら入れてもいいかなって思ってた……」

目を泳がせながらしどろもどろになって奈津美は言い訳する。

旬の視線がものすごく痛い。

「嫌なら変える！ すぐ変えるから！」

奈津美は再び携帯を開いて操作しようとする。

「ダメダメ！ 変えなくていい！ 変えたらダメ！」  
旬は慌てて奈津美の携帯を押さえた。

「もー……ナツってばやることなすこと全っ部可愛いんだからなあ」  
旬はデレデレと鼻の下を伸ばしながら言う。

「よし！ 俺もアド変ーえよ」  
旬はニンマリと笑って自分の携帯を開いた。

何となく、嫌な予感がしたが、奈津美は旬が慣れた手つきで携帯のボタン操作をしていくのを見ていた。

「よし！ オッケー。ナツに送ったから」

「早……」

三分もしないうちに終えた旬に、奈津美は小さくもらした。それと同時に奈津美の携帯が鳴った。

開くと、予告通りの旬からメールがきていた。注目すべきなのは、新しい旬のメールアドレスだ。

「ちよっ……何よこれ！」

奈津美は目を丸くして旬に訴えた。

旬の新しいメールアドレスは、このようなものだった。

『ナツミ・ラブ・シュン・フォーエバー』

「何で勝手にあたしの名前入れてるのよ！ しかもなんであたしが主語になってるの!？」

旬のメールアドレスを直訳すると『奈津美は旬を永遠に愛する』となり、旬のメールアドレスなのに、奈津美が主体になっている。

「いいじゃん。俺でもナツでもそんなに変わんないよ」

「だったら旬が先でもいいでしょ」

「あ、じゃあ、ナツが変えたらいいんじゃない？ 『シュン・ラブ・ナツミ』って。そしたらプラマイゼロじゃん？」

「どこがよ。そんなアドレスに出来るわけないでしょ！」

お互いがお互いを主語にしたメールアドレスにするなんて、そんなバカカップルみたいなことが出来るはずがない。

「じゃ、俺も変えなーい」

旬は明らかに面白がって言っている。

「お待たせいたしましたー。きのこのハンバーグとライスのお客様」  
店員が二人のテーブルにやってきた。

「はい」

奈津美の注文したもので奈津美が返事をする。

店員は「失礼いたします」と言いながら、奈津美の前にハンバーグの乗った皿とライスが盛られた皿を置き、軽く頭を下げて下がっていった。

「あたし先食べるね」

「うん。いーよー」

旬の方はハンバーグとミックスフライのプレートというものと頼んだので、まだ時間がかかるらしい。

奈津美は携帯をテーブルの端に置いて、ナイフとフォークを手にとった。

旬は暇なようで、テーブルに両肘をついて身を乗り出すようにすると、何も言わずに、奈津美の携帯に手を伸ばし、自分の方に引き寄せる。

「何？」

旬の行動が分からず、奈津美は首を傾げた。

「んー。お揃いだなーって思っ」

片手に旬の携帯、反対の手に奈津美の携帯を持って、ニコニコしている。

何が面白いのか、今度はテーブルに綺麗に並べて置いて、それを眺めてご機嫌である。

飽きることなく、旬は自分の料理が運ばれてくるまで、その様子だった。

それを見て、奈津美も頬を緩めながら、料理を食べていた。

### 30 恐怖

携帯を変えて以来、もうストーカーからメールも電話もくることはなかった。

「よかったじゃない。ちゃんと対策になったみたいで」

奈津美がそのことを伝えようと、カオルがそう言ってくれた。

「うん……でも、まだ一昨日と昨日と……今日もまだきてないだけだから、分かんないんだけどね」

「何？ 奈津美、浮かない顔して……」

奈津美の心は、まだ落ち着いてなかった。

「なんか……まだ安心できないんだよね。メールも電話もなくなればもう一安心だと思ってたはずなのに……」

携帯を変える前は、番号もメールアドレスも変わってしまえばこっちのものだと思っていた。

しかし、実際に携帯を変えて、番号もメールアドレスも変えて、電話もメールもなくなったはずなのに、不安はなくならない。

まだ、そんなに時間が経っていないというのもあるかもしれない。どうしても、嫌な予感がしてならない。神経が過敏になってしまっ

たのだろうか。

「奈津美にしては慎重ね。まあ、それくらい警戒しておいた方がいいかもしれないわね。ストーカーがいなくなったってわけじゃないし」

「……どういう意味よ、私にしてはって」

しかし、一言多いにしてもカオルの言うことはもったものであることには違いない。

これではまだストーカーを撃退したとはいえないのだ。

「用心するのに越したことないってことよ。だって奈津美、家の場所とかストーカーに知られてるんでしょ？」

「あ……」

カオルに言われて、奈津美は思い出したようにポカンと口を開けた。

「あ、って……忘れてたの？」

「わっ……忘れてたっていうか、そこまで頭が回ってなかったっていうか……」

しどろもどろになる奈津美に、カオルは大きなため息をついた。

「慎重なのかどうなのか、分かんないわね」

カオルが呆れたように呟く。奈津美は返す言葉がない。

でも、実際、頭が回ってなかったのだ。たった二日とはいえ、ストーカーからの音沙汰が全くなかったせいで、そっちに意識がむかなかったのかもしれない。

「絶対に大丈夫って確証が出るまで、それなりの対策しといたら？  
一人で歩く時とか特に」

「うん……」

奈津美は小さく頷いた。

その日、奈津美は残業で七時を過ぎてから会社を出た。

カオルはああ言っていたけれど、絶対に大丈夫という確証は、どのタイミングで分かるのだろうか。

ストーカーの方がやめると言ってくるわけなんかないし、音沙汰がないからといって安心できるものなのだろうか……

とにかく、何もなくなってからまだ一週間も経っていない。とにかく、今は警戒しながら過ごすしかないだろう。

奈津美はふと振り返った。

何だか、視線を感じた気がする。しかし、そこには誰も居なかった。

気のせいだろうか。



しかし、ここは人通りが少なく、夏ではあるが、今日は曇り空のせいで七時過ぎでも薄暗い。

急に気味が悪くなって、奈津美は足を速めて歩いた。

コーポが見えるところまで辿り着き、奈津美はここまでくればとほっとする。

カオルが言うから、必要以上に意識してしまった。

ストーカーは、まだこの場所を知っている。

奈津美がここを立ち退かない限りは、完全にストーカーを振り切ることはできないだろう。

だからといって、引越なんてすぐに出来るわけではないし、それに、何回引っ越しても、しつこいストーカーはどこからか嗅ぎ付けてついてくるのだと聞いたことがある。

そうすると、八方塞がりだ。

奈津美はコーポのエントランスに入ると、郵便受けを開けて中を確認する。

必要な郵便物が入っていることは少なく、ダイレクトメールや、広告チラシが入っているだけ……ではなかった。

何通かの郵便の下に、茶色い封筒が入っていた。大きめの封筒はパンパンに膨れていて、宛名も差出人の名も何も明記していなかった。

明らかに不審な郵便物だ。誰かが直接郵便受けに入れたのだろうか。

きちんとした封はしていなかったので、奈津美は折ってあるだけの封を開けて、封筒を逆さにした。

中身は、重さによって全て奈津美の手の上に出てきた。

「何……これ」

出てきたものを見て、奈津美は目を丸くした。

封筒の中には、大量の写真が入っていた。それも、全て奈津美が写っていた。

奈津美がこのコーポから出てくる姿や、そこからどこかへ歩き出す後姿。その反対に、どこから帰ってくる姿。それに、会社に入っている奈津美の姿もあった。奈津美の覚えのない、隠し撮りであろうという、そんな写真ばかりが入っている。

奈津美は、背筋が凍る思いをしながら、写真を更に見ていった。最後の方には、奈津美の部屋の前の風景が写っているものがあった。しかも、匂と一緒に写っていた。

同じアングルで匂と抱き合っているとところや、キスをしているところも撮られている。

これは、この間旬と会った日だ。奈津美が携帯を変えて、その日以来メールも電話もなくなった日……

こんなところまで見られて、撮られていた。羞恥で顔が熱くなるのが分かった。

奈津美は最後の写真を見た。その瞬間、奈津美は写真を取り落とした。

「嫌っ……」

最後の写真は、奈津美ではなく、男性の裸の下半身が写っていた。それも、興奮状態にある時の男性シンボルを、存在を主張するかのように写真の真ん中にピントを合わせているものだった。

正気じゃない。

ストーカーをしてるという時点で分かっていたことだが、それを改めて痛感させられた。

隠し撮りだけではなく、こんな写真を送りつけてくるなんて、まともな精神をした奴なんかじゃない。

怖い……

今まで気味が悪い程度に感じていたが、急にストーカーの存在に恐怖を感じた。

カッン……と、石が地面を転がる音がした。

奈津美は肩を震わせて外の方を見た。音はそっちの方からした。

……誰かいる。直感的にその気配を感じ取った。

ここにいてはいけない。バクバクと心臓が早鐘を打つ。一步後ずさると、奈津美の足音が響く。それと同時に、誰かの足音も聞こえた。

「……いや」

もう一步後ずさると、地面に落ちた写真の一枚を踏んだ。咄嗟に見ると、さっきの男性器の写真だった。

一気に背筋が冷たくなる。

奈津美は、一目散にコーポを飛び出した。

奈津美は走りながら鞆の中を探った。震える手で必死に携帯を探り当て、リダイヤルを押して通話ボタンを押した。

コール音が一つ鳴ったところで匂が出た。

「はい、もしもしー。ナツ……」

「助けて！」

何も知らない、いつも通りの匂の言葉を遮って奈津美は叫んだ。

「え……ナツ？ どうしたの？ 何かあったの？」  
旬は奈津美の反応に困惑した様子だ。

「ストーカーが……」  
声が震えて、うまく喋れない。

「ストーカー!？」  
予想外の言葉に旬は大きな声を出した。

奈津美の目からはどつと涙が溢れた。

「怖いっ……」

奈津美はただそれだけ、旬に訴えた。

「ナツ、今どこにいの？」  
旬の緊迫した声が聞こえる。

「しゅ……旬のマンションに……走って……」  
奈津美は言葉にならないままに伝えた。

それで旬にはなんとか通じたらしい。

「分かった。俺も今からすぐ行くから。一旦切るよ？ 大丈夫？」

「う……うん」

「すぐ行くから！」  
旬がそう言うと、すぐに電話が切れた。

奈津美はその携帯を握りしめながら、旬のマンションへと走り続けた。

### 31 すれ違い

匂は電話を切ると、言った通りにすぐに部屋を飛び出した。

奈津美が何を言おうとしていたのか、はつきりといって、要領を得なかった。

しかし、奈津美の身にただならぬことが起きているのはすぐに分かった。

それに、奈津美の言った『ストーカー』という言葉……

嫌な予感がする。

匂は走る足に焦りを交えて、コーポへと向かった。

匂のマンションから奈津美のコーポへ行く途中に、広い公園がある。匂はそこに差し掛かった。

ここを横切ったら、奈津美のコーポへの近道になる。いつもなら、ここを通っていく。

しかし、今日は少し迷った。

以前に、奈津美とこの辺りを歩いた時に、ここは近道なのだったことがある。それで二人で通ろうとしたのだが、奈津美は怖いから嫌だと言ったのだ。

確かに、この公園は昼間は多くの子供達が遊んでいて、ごく普通の公園なのだが、暗くなると公園自体に電灯が少ないので薄気味悪い感じもする。旬は平気だが、奈津美が怖いと言うのも分かる気がした。

そんなことがあったから、そして、今の奈津美の状況を考えたら、奈津美はきつと一人でこの公園を通らない。

そう思って、旬は奈津美が通るであろう回り道の方に決め、また足を速めた。

旬の電話が切れてすぐに、公園が見えてきた。

そういえば……ここを横切ったら旬のマンションへの近道になると、旬が言っていたような気がする。

奈津美は、この公園は夜には入ったことがない。外から見ると、電灯が少なくて、暗い。中に何があるのか分からないので、旬と一緒に通ったことはない。

今日だって、その様子はいつもと変わらない。

だけど……ここを通れば、旬のマンションへはすぐだ。旬のマンションまで辿り着ければ、何とか助かるはずだ。それに、旬が急いで来るのなら、こっちを通るのかもしれない。

そう思ってもやはり不安でためらった。



だけど……広い公園だけど、横切るの十分もかかるわけではない。  
走って横切ればきつとすぐだ。

奈津美はお守りのようにぐつと携帯を握り直し、公園に入った。

「あれ……!？」

匂は思わず声に出した。

奈津美に会うことなく、奈津美のコーポへ着いてしまった。

何で……まさか部屋出てなかったわけじゃ……

息を整えながら、匂はエントランスに入った。

階段に向かおうとして、ふと郵便受けの方が目に入る。

郵便受けの下から三段目の一つが開いたままになっている。

確か、奈津美の郵便受けもその辺りだったはず。

匂の視線は、地面へと向く。そこには、色々なものが散らばっている。

しゃがんで見ると、最初に目に入ったのはダイレクトメールの宛名だった。

そしてその近くに落ちていたものを見て旬は目を丸くする。

大量の奈津美の写真だ。その中には……旬とキスをしている写真もあった。

どういふことか全く知らなかった旬でも、奈津美が言った『ストーカー』という言葉を経絡めて考えれば、これがどういう写真か分かった。

そして、旬の目は、一枚の猥褻な写真が目に入る。

こんなものがここにありということとは……

「ナツ……！」

旬は立ち上がって、すぐさまコーポを飛び出して今来た道を引き返した。

足が重く感じる。そんなに距離はないはずなのに、なかなか外まで辿りつけない、すぐそこに出入り口は見えているはずなのに……

「あっ……」

靴が足に引っかかって上手く一步が踏み出せず、奈津美はその場に転んでしまった。

「痛……」

顔をしかめながら自分の足を見ると、右のパンプスのストラップが切れてしまっていた。

立たないと……

そう思いながら、地面についた手を見ると、携帯がない。

奈津美は膝をついたまま携帯を探した。

今のこの状態で、携帯なんて気にしたってしょうがない。

奈津美も、あの携帯でなかったら、無くなったことさえ気付かなかったかもしれない。

だけど、あれだけは、無くしたくない。

旬が嬉しそうに手に取っていた、旬とのお揃いの携帯。あれが無くなってしまったら……

必死に探すと、近くの電灯の光の中に携帯があるのを見つけた。

立ち上がることも上手くできないまま、奈津美はフラフラと携帯の元に近付いた。

そして奈津美が携帯に手を伸ばした瞬間、地面に映った奈津美の影が、大きな影に覆われた。

奈津美は反射的に振り返った。逆光によって表情までは判別はできなかったが、そこには、見知らぬ男が立っている。

ただ偶然、通りがかった赤の他人、というわけではないようだ。

男は、肩を上下に動かして息を荒くし、奈津美のことを見ている。そして、ふらりと奈津美の方に近寄ってきた。

恐らく男が、ストーカーだ。

「いや……」

奈津美は立ち上がることが出来ないまま、後ずさった。

男の荒い息遣いが近くなる。

足が震えて力が入らない。

助けて。助けて……

「旬……」

今、頭に浮かんだ名前を、奈津美は呼んだ。

「旬っ！ たすけ……！」

奈津美が大声をあげたと同時に、奈津美は地面に押し付けられてしまった。

## 32 危機

「いやっ！」

奈津美は覆いかぶさってくる男に必死に抵抗した。

しかし、女の奈津美が男の力に敵うはずがなく、男の体はなかなか離れなかった。

奈津美は男に痛いくらいに両手首を捕まれ、無理やり地面に押しつけられた。

男の息は荒かった。奈津美を追いかけて走っていたからなのか、興奮状態であるのかは分からない。その息が顔にかかると、嫌悪感で鳥肌が立った。

「まいみちゃん……」

男の声がそう言った。

奈津美は、自分以外の名前が呼ばれて混乱する。

誰、まいみって……

しかし、最近聞いたことがあるような気がして、奈津美は記憶の糸を辿る。

『夢咲まいみって知ってます？』

……あれだ。後輩の男性社員に聞かれた、奈津美に雰囲気似ているというAV女優の名前だ。

まさか、この男は、奈津美のことをその『夢咲まいみ』と勘違いしているのではないか。

「ち……違っ……私、まいみなんかじゃ……」

「知ってるよ」

震えながら否定しようとした奈津美を、男が遮った。

「え……」

自分の推測を否定されたようで奈津美は困惑する。

でも確かに、ストーカーするほど好きならば、本物と偽者の区別がつかないのはおかしい。だが、それならどうして、分かっていて奈津美をこんな目に遭わせているのだ。

「でもさあ、似てるからまいみちゃんなんだよ。俺にとってはさあ」

狂ってる。言ってることが滅茶苦茶だ。

似ていればいいのか。それが本人でなくても。そして、こんなことをしても。

「まいみちゃんは裏切ったんだよ。俺の方がまいみちゃんのこと分かってるはずなのに、他の男の子供なんか作ってさ」

これは、本物の『まいみ』の方の話だろうか。でも、奈津美にそんなことを言われたって知るわけもないのに。

「おまえも」

男の声が低くなった。ビクツとした瞬間、男の手が奈津美の首に纏わりついた。

生ぬるいような、妙に生々しい体温に、体が強張った。

「うっ……」

奈津美の首が物凄い力で圧迫される。声を出そうとしたけれど、息すらもできない。

「おまえも……裏切っただろ。他の男とイチャつきやがって」

匂のことを言っている。でも、この男には関係ないだろう。裏切ったなんて言われても知らない。

奈津美は抵抗しようとしても、声が出ない。苦しい。意識が遠くなってきた。

急に、男の手が離れた。

気管に一気に空気が入り込み、奈津美は激しく咳き込んだ。咳き込みすぎて、気持ち悪い。意識が朦朧としている。

そのせいで、体に走った嫌悪感への反応が遅れた。

男の手が奈津美の体をまさぐっていた。

「いや……」

叫ぼうとしたはずなのに、声という声にはならなかった。

ぐいつと奈津美が上半身に着ているものを無理矢理胸の上まで上げられた。

露出した肌が夏の夜の空気に触れる。

体が強張ったままで動かない。

男の手が奈津美のスカートの中に潜り込み、内股を撫で上げる。

あまりの危機的状況に、声が出ない。

やだ……助けて……助けて、匂！

「ナツ！」

奈津美が心の中で叫んだのと同時に、待ち望んだ声が聞こえた。

男の体がビクッと動き、手の動きが止まった。

次のことは、一瞬だった。

ゴツと鈍い音がしたと同時に、奈津美に覆い被さっていた男が地面に転がった。

奈津美の体が一気に軽くなる。



「ナツ！」

奈津美の視界に匂が現れ、優しく奈津美の肩を掴んで起こしてくれた。

「しゅ……ん」

奈津美はこの状況が分からなくなって、放心状態だった。

匂は、奈津美の乱れた服を見て、目を見張る。

その視線に気付いて奈津美はとっさに腕で体を隠した。

「ううっ……」

倒れた男が呻き声をあげる。匂は男を見ると形相を変えた。

「……っの野郎！」

匂はそう叫ぶと男に飛び掛った。

体を起こそうとした男の胸倉を掴み、横っ面を拳で殴った。その勢いでまた男が倒れる。それに跨るようにして、何回も男を殴った。

鈍い音が響き、その度に男の低い呻きが聞こえる。

奈津美は震えながらそれを見つめるしか出来なかった。

「おい！ 何してる！」

小さい明かりと共に、また違う男の声が聞こえた。

## 32 危機（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます！

ストーリー編も残るところあと2話になりました。できるだけ早く更新しようと頑張っているので、応援よろしくお願いします！

さて、今回はお知らせです。

別サイトにて新作を公開しました。

タイトルは

「君の手を繋いで」

ブログにリンクがありますので、よかったらこちらもよろしくお  
願います☆

### 33 後悔

奈津美は、椅子に座って下を向いていた。警察署の廊下にある、長椅子だ。

公園に現れたのは、丁度巡回中だった警察官だった。

あの状況で、不利だったのは旬だった。警官は旬と男を引き剥がすと、奈津美の方に気付いた。

奈津美のあられない姿を隠すように、旬が『見るな』と叫んで奈津美のことを抱き締めていたのは覚えてる。

その後のことは、はっきりとは覚えていない。

多分、旬がとても興奮した状態で男のことをストーカーだと言った。

それで、事情聴取のために最寄の警察署まで連れてこられた。

奈津美の聴取は、一番早く終わったようだった。正確に言えば、奈津美からはっきりと言える状況ではなかったので、警察官から聞かれることに頷いたりして答えていただけだった気がする。これも、あまり記憶がなかった。

そして今は、旬を待っている。

さっき、男のことについて警察が話してくれた。

男は、自分のしたことを素直に認め、全て話したと言う。

あの男は、レンタルビデオ店でアルバイトをしているフリーターだった。奈津美が行く、あのレンタルビデオ店だ。

奈津美のことを知ったのは、奈津美がDVDを借りに行ったあの日だった。男は、やはり元AV女優の夢咲まいみの熱狂的なファンで、彼女に似ている奈津美に一目ぼれしたのだという。

奈津美の携帯番号やメールアドレスは、会員カードを作り直すと言って書かされた用紙で知ったのだが、本来、カードを作り直すのには書く必要がなかったのを、奈津美の個人情報を知るためにわざと書かせたらしい。

静かな廊下に足音が聞こえた。

顔を上げると、警察官と一緒に、匂が歩いてくるところだった。

立ち上がると、上手く力が入らずにふらついた。しっかりと踏み張って真っ直ぐ立った。

匂は、一度だけ奈津美を見ると、すぐに視線を下に向けた。

「今日はもう帰っていいですよ」

匂の隣に居る警察官が言った。

「彼のしたことは……まあやり過ぎてところもあるけど、あなたを防衛するためのことだったってことにしておきましょう。犯人の怪

我も大したことないし」

少しめんどくさそうに頭を掻きながらそう告げる。

「また何かあれば連絡いくと思うんで。今日のところは帰ってください。帰りは気をつけて下さいね」

そうばっさりと言うと、奈津美達が何かを言う前に、警察官はさっさと引き上げていった。

「……帰ろう」

ポツンと取り残されたところで、旬が言った。

「うん……」

奈津美が頷くと、旬は黙って奈津美の手を取って、歩き出した。

旬は、奈津美のことは見ず、前だけを向いていた。

奈津美は旬に引っ張られるようにして歩いていた。二人の手の長さの分だけ、旬のほうが前に出ている。

パンプスのストラップが切れてしまったせいで歩きづらい。何度も躓いて、その度に旬は後ろを向いて『大丈夫?』と聞いてくれた。だけど、奈津美と目は合わさなかった。

帰る道がとても長く感じたが、やがて奈津美のコーポに着いた。

エントランスで、郵便受けの下に散らばった写真に、二人同時に気付いた。

匂が何も言わず、奈津美の手を離して、すぐに拾い集めた。しゃがんでそうする匂の背中を、奈津美はただ立ち尽くして見ているしかなかった。

全て拾い終わると、匂はまたちゃんと奈津美の手を繋いでくれて、そのまま奈津美の部屋へと向かった。

「……ナツ、鍵出せる？」

部屋の前でようやく匂がそう言った。

「うん……」

奈津美は頷いて鞆の中に手を入れた。

この時気付いたけれど、手が震えていて、鍵を探すだけで時間がかかってしまった。

鍵を取り出すと匂がそれを手に取ってドアを開けてくれた。

玄関に入ってドアが閉まったと同時に、急に膝の力が抜けて靴を脱ぐ前にそこにへたり込んでしまった。

「ナツ？」

先に部屋へ上がった旬が奈津美を振り返った。

「ナツ、大丈夫？」

旬は奈津美を抱きかかえ、奈津美を玄関の段差に座らせてくれた。

その時に切れたパンプスのストラップが見えて、それと同時に、緊張の糸も切れた。

奈津美の目からはボロボロと涙が溢れ出した。

「こ……こわか……怖かった」

震える声で、やっとそう言葉にした。

言葉にすると、今になってその感情が蘇った。涙と一緒に色々なものが溢れてくるようだった。

「怖かった……」

言葉にすればするほど涙が止まらなくなる。しかし、今まで言えなかった分、口に出さずにはいられなかった。

「ナツ……」

旬が奈津美の横にしゃがんだ。

「何で俺に言ってくれなかったの？」

奈津美は旬の方を見た。旬は真剣な目で真っ直ぐ奈津美を見ていた。

「ストーカーのこと。何で俺に何も言わなかったの？」  
再び旬は言った。今度はさっきより語調が強い。

こんな旬は初めてで、奈津美は戸惑った。質問自体にも、答えづらかった。

「ナツのことだから、俺に心配かけたくないと思ったんだろ」  
奈津美が答える前に旬が言った。

その通りで、奈津美は気まづくなって俯いた。

「ナツの気持ちは分からないことはないよ。男の俺には言いづらかったんだろうし。でも、こんなことになって、もし手遅れだったらどうすんだよ」

旬の声はだんだん責めるように強くなった。

こんな風に言われてもしようがない。

もし、旬にもう少し頼っていたら、こんなことにはならなかったかもしれないのに。こんな恐怖を味わうこともなかったかもしれないのに。

「俺……怖かったんだからな」  
旬の声が震えていた。

予想もしていなかった言葉を聞いて、奈津美は顔を上げて旬を見た。

「ナツから電話あって……俺、何も知らないからわけ分かんなくて、



ナツが危ないってことしか分かんなくて……マジで、ナツになんかあったらどうしようかってすっげえ不安で……」

旬の目には涙が溜まっていく。それがこぼれる前に、旬は手の甲で目元を擦った。

「俺も、気付けなかったけど……言っただけだった。言ってくんねえとわかんねえよ……」

旬の言うことが、旬が泣くのを必死に堪えようとしている姿が、奈津美には突き刺さるように痛かった。

「ごめ……ごめんなさい」

奈津美も涙を流しながら言った。

「ごめんなさい……旬、ごめんなさい」

今更思っても遅いけれど、こうなるならちゃんと旬に言うておけばよかった。

そうすれば、心配はさせても、旬を不安にさせることはなかった。

自分のせいで、旬にまでこんな思いをさせたくなかったのに。

「……謝んなくていい」

旬が強く奈津美を抱き締めた。そのあとすぐに、涙をすすする音がした。

「無事で……無事でよかった。ホントに」

そう言って、更に強く奈津美の体を抱き締めた。

旬の腕の中で、奈津美は更に涙を流した。

本当に、どうして言わなかったんだろう。

今回は運がよかったものの、もしかしたら、もう二度と、この腕の中にいることはできなかったかもしれない。

強い後悔と、ここに戻ってこられてよかったという安心感で、奈津美は小さく声を上げて泣いた。

旬は、たまに涙を啜りながらも、ゆっくりと優しく、奈津美の背中を撫でてくれていた。

### 34 傷跡

翌朝、奈津美はふと目を覚ました。

いつの間にか、眠りについていたらしい。

体を動かそうとすると、上手く動けない。旬の腕がしっかりと奈津美の体に巻きついている。

昨夜はずっと、旬が奈津美の体を抱き締めていてくれた。

なかなか眠れず、何度も寝返りを打ったり、体を振ったりしていると、旬は優しく抱き締めて、背中を撫でてくれていた。そのおかげで、奈津美は眠りにつくことができた。きっと旬が居なかったら、目を閉じることさえできなかっただろう。

奈津美は旬を起こさないようにそっと抜け出そうとした。

しかし、奈津美がそっと体を動かしただけで、旬の瞼がピクッと動いた。

旬の目がうつすらと開く。

「ん……ナツ、起きた？」

寝起きのかすれた声で旬が言った。

「うん……おはよ」

「おはよ………今何時？」

眠そうに目を擦りながら旬は体を起こした。

時計を見ると、七時半を過ぎた頃だった。いつも奈津美が起きる時間とほぼ同じだ。

昨夜あんなことがあったのに、奈津美の体はいつもの習慣通りに起床したらしい。

「旬……今日はバイトあるの？」

「んーと……十二時から。カフェの方……それで、夜は居酒屋」  
よほど瞼が重たいようで、旬は目を閉じながら答えた。

今日は二つとも入っているのか。それなのに、こんな風に寝不足にしまつて……

「……ごめんね。バイトの時間まで寝てていいよ」  
せめて今からでも少し休んでほしくて、奈津美は旬に言った。

「ううん。一旦帰る。着替えてこねえと……それに、財布とか持ってきてないし」

「そっか……」

旬が履いていたジーンパンは、ストーカーと揉み合っていたときに地面について、砂だらけになっていた。寝る時はとりあえず奈津美の部屋に置いてあるスウェットを履いて寝たのだが、それでバイトに行くわけにもいくまい。

「あ」

匂が思い出したように声を出す。

「何？」

「俺、部屋の鍵かけないで出て来ちゃったかも」

「え！？」

奈津美は思わず声を上げて、なんて物騒な、と思ってしまったが、きつと自分のせいだ。

匂は、奈津美が電話をして、文字通りすぐに飛び出して来たに違いない。部屋の鍵のことなんて、考えもしなかったのだろう。

「……ごめんね。あたしのせいだよね」  
憔悴して奈津美は謝った。

「何でナツが謝んの！ ナツのせいじゃないよ！ それに、別にあげっぱにしても何も盗むもんなんてないし。ドロボー入ったってすぐ出てくよ。だって俺のあの部屋だよ？」

奈津美の気持ちを軽くしようと匂はそう言って笑った。奈津美は匂の部屋を思い浮かべて確かに、あの部屋を見て何か悪さをする気は失せるだろうなと思って笑った。

「……よかった」

匂が微笑んだ顔のまま言った。

「え？」

「ナツ、笑ってるから。まだちょっと元気ない感じもするけど」

旬に言われて、奈津美ははっと気付いた。

あたしってば、なに暢気に笑ってるのよ。今回のことは、全部あたしのせいなのに……旬にしなくてもいい苦労かけたのに……

「こら。今何か余計なこと考えてるだろ」

旬が奈津美の頬を両手で包んだ。

「ナツはほっとくとすぐにネガティブに考えて落ち込むからな。ほら、笑ってー」

旬は親指で奈津美の口角を押さえ、ぐいっと上に持ち上げる。

「やっ……ちょっと、あにすんのー!」

無理矢理持ち上げられて上手く口が開かない。必要以上に上げられて、きつと不細工な顔になる。

旬の手から力が抜ける。顔が近付いてきたと思ったら、額にキスをされた。

「……こんな時に笑えってのは無神経かもしれないけど」

額に唇が触れるか触れないかのところで、旬が口を開いた。

「でも、無理して笑わなくてもいいから、少なくともナツのせいだとか思って落ち込んだりしないでほしい」

「……うん」

そうだ。落ち込んでばかりだと、また旬を不安にさせてしまう。

奈津美は旬の体に腕を回した。

大丈夫。何があっても、この場所があるから。

「あ、そろそろ支度しないと」

ずっとこうしていたいけれど、そういうわけにもいかない。

「え……支度って、ナツ、仕事行くの？」

旬は目を丸くして奈津美を見る。

「……今日は、休んだ方がよくない？」

心配そうに奈津美を見て、旬は言う。

奈津美は黙って首を横に振った。

「家に一人でいた方が、落ちつかないそうだから。だから、行ってくる」

旬が心配するのは尤もだ。しかし、家に居た方がふさぎこんでしまいそうな気がする。無理矢理にでも外に出て、いつもと同じことをする方が、昨日のことなんて忘れてしまえそうな気がするのだ。

「大丈夫。無理だと思ったら早退させてもらうから。それにカオルもいるし……」

尚も不安そうな旬に奈津美は言った。

「カオルさんはストーカーのこと知ってるの？」

「うん。カオルには色々話聞いてもらったりとかしてて……あ」

そこまで言ってしまったて、奈津美は口をつぐんだ。

言わない方がよかったことかもしれない。

匂に言えなかったことを、カオルにはあつさりと言ったみたいで、バツが悪い。昨夜、さんざん不安にさせてしまったのに……

「……ごめん」

つい謝った。何も言わないことに耐えられなかった。

「何でまた謝んの？」

匂は少し目を見開いて言った。

「だって……」

続く言葉はない。謝ってしまったら、してはいけないことをしたと認めているような気がして、気まずかった。

「……いいよ。ナツは俺にだから言いにくかったんだろ？ カオルさんなら女の人同士だし、言いやすかったんだろうし」

奈津美の気持ちを察したように言った。口元は微笑んでいた。

「それに……ナツが一人で悩んでたわけじゃなかったんなら、よかった」

そう言って貰えて、奈津美は思わず泣きそうになった。



どうして匂はこんなに優しいのだろう。いつもいつも思う。匂の優しさを知っているつもりでも、匂は、それ以上に優しく温かい。

ぐううゝ……きゆるきゆるる……

この場に不釣合いな、気の抜ける音が響いた。

「あ」

匂が腹を押さえた。

「そーいや俺、昨夜から何も食ってねえや」

少し恥ずかしそうに腹をさすりながら匂が言った。

昨夜から……奈津美も何も食べてはいなかった。きっと匂も、何かを食べるような余裕なんてなかったのだ。

奈津美は今もそんなに食欲はない。でも、匂はそういうわけでもないだろう。

「朝ごはん、作るね」

奈津美はベッドから降りようと匂から体を離れた。

「うん。あ、簡単なのでいいから……」

匂もベッドから移動しようとして体を動かす。

その時、何気なく動かした匂の手が、奈津美の内股に触れた。

それと同時に、奈津美の頭に、昨夜のことがフラッシュバックした。あの時撫でられた、手の感触までも……

「いやっ……」

思わず大きな声を上げた。

旬は驚いて目を丸くしていた。それを見て、奈津美は我に返った。

「あ……違うのっ……何でもないのっ」

奈津美は必死にそう言った。

他に言い訳すらも思い浮かばず、奈津美は自分でもこの反応をしてしまったことに驚いていた。

旬は、いやらしいつもりで触ったわけではない。そもそも、触ろうとして触ったわけでもない。いつもなら、気にもしない。

だけど……ダブってしまった。昨夜の、ストーカーに触られた時の感触と……

旬の手なのに。一番大好きな、安心できる手なのに……奈津美にはそれが一番ショックだった。

「ナツ……大丈夫？ やっぱり今日は仕事休んだ方がよくない？」  
旬は奈津美の顔色を見て心配して言った。

「ううんっ。大丈夫。本当に、大丈夫だから」

奈津美は首を大きく振り、自分自身にも言い聞かせるように言った。

「早くご飯食べないと……ね」

奈津美はそう言って、その場から逃げるように台所に向かった。

旬は、奈津美を会社まで送ってくれた。

奈津美はいいと断ったけれど、旬がそうしないと気が済まないようだったので、送ってもらった。

「……ここまでいいよ」

会社のほぼ正面まで来て、奈津美は立ち止まって言った。

「送ってくれてありがとう」

笑顔を作って旬を見上げたつもりだったけれど、顔が強張って、上手く笑えていないのが奈津美は自分でも分かった。

「……うん。ナツ、本当に大丈夫？」

不安そうに言いながら、旬は今日何度目かの心配の言葉を口にする。

「大丈夫だってば。それより旬も早く帰って少しでも休んで？ 家だって心配だし」

「いや、俺のことはいいから……もし何かあったらすぐ連絡しろよ？ 飛んでくるから」

真っ直ぐに真剣な目をして、力強く旬は言った。

「旬……ありがとう」

旬のその言葉だけで、もう十分心強かった。不安はあるけれど、その不安を優しく包んでくれるような気がした。

「おっはよー」

二人の間に、聞き覚えのある声が聞こえた。

二人が揃って声の方を見ると、カオルが手を振りながら二人に歩み寄ってきた。

「カオル……おはよ」

「おはようございます」

気まずい雰囲気を漂わせながら、二人はカオルに挨拶をした。

「なーに？ 平日の朝っぱらから、おアツいわねー」

カオルはただのいちゃつきだと思っただけ、にんまりと笑いなから冷やかす。

「別に……そんなんじゃ……」

いつも通りを装ってみようとしたが、やはりいつもより力のない声になってしまう。

「……んじゃ、俺行くから。カオルさん、ナツのこと、よろしくお願いします」

旬はカオルに軽く頭を下げた。

「え……あ、うん。任せといて……?」

カオルは戸惑ったような顔色を示した。

流石に、この雰囲気から何かを悟ったようだった。

「じゃあ、ナツ。夜連絡するから」

「うん……ありがとう。バイト、頑張ってね」

「うん。じゃあな」

旬は優しく微笑んで、手を振って奈津美達と別れた。

「……ねえ、何かあったの？」

旬の背中が見えなくなるところまで行った時、カオルが言った。

「……うん」

奈津美は曖昧に頷いて、会社のエントランスに向かう。カオルも奈津美に合わせて歩き出した。

「喧嘩……ってわけでもないわよね。そんなに陰悪ではなかったし」

「うん……実は……昨夜ね」

そこまで言って、言葉に詰まる。昨夜のことが頭の中に蘇っている。

「奈津美？」

カオルが心配そうに奈津美の顔を覗きこんだ。

奈津美は、大きく深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

「……昨夜、ストーカーに襲われそうになったの」

丁度会社の中に入ったところで奈津美は言った。

「えっ!？」

カオルの目が大きく見開かれた。

「ちよっ……本当に？」

「うん……ねえ、階段から行っている？」

奈津美は正面にあるエレベーターでなく、脇のほうにある非常階段のマークがある方を見て言った。

「あ、うん。いいよ」

二人は、階段から、オフィスと更衣室のある三階に向かった。

朝っぱらから階段を使う社員はほとんどおらず、静かな中、二人のパンプスのヒールが鳴る音が響く。

そこで、奈津美は昨夜のことを、ところどころをかいつまんでカオルに話した。

カオルは、最初は驚いて何かを言おうとしていたが、何も言えなかったのだろう。黙って最後まで聞いていた。

二人は更衣室まで辿りつき、各々のロッカーの前に立つ。

「……カオルの言うとおりだったよね。あたし、旬にちゃんと言うべきだった。そしたら、こんなことにならなかったかもしれないに……」

奈津美はまた後悔の念に苛まれる。

カオルは何度も、奈津美が匂に言わないのかと、気にしてくれていた。何度も、言った方がいいのではないかと聞いてくれていた。

それなのに、奈津美の一方的な気持ちだけで、何も言わないまま、昨夜のようなことになってしまった。自分の思っていた以上に、匂を傷つける形に……

奈津美の目からは、涙が流れた。何だか、涙腺が弱くなっているようだ。

「何言ってるのよ！ そんなの言えなくなってるしょうがないし！

そりゃあ、言った方がいいって言ったのは私だけど……でも、奈津美だって色々悩んでたんでしょ？」

カオルが奈津美のことを庇護するように言ってくれる。

奈津美は自分が不甲斐なくて、下を向いた。

「……とにかく、大きな被害にならなくてよかったわよ。犯人も捕まったし……解決してよかった」

カオルが安心したように息をついて、奈津美の頭を撫でてくれた。

カオルも、匂と同じだ。

こんなに自分のことしか考えていなかったのに、心配して、安心してきている。

「ほら、奈津美。泣いてると化粧崩れるわよ！」

カオルが力強く言って奈津美の背中を叩く。

「今日一日……ていうか、気持ちがちやんと落ち着くまで、無理しちゃダメよ？ 今日だって早退したっていいんだからね。私は旬君に奈津美を任されてるんだから、無茶はさせないからね」

「うん……ありがとう」

カオルがいてよかった。

もしカオルがいなかったら、きっとこんな日に、いつものように外に出ようと思わなかった。たとえ出てきたとしても、不安でしゅうがなかったに違いない。そして、そのまま外に出ることが出来なくなっていたかもしれない。

旬の存在と同様に、カオルの存在も大きかった。改めてそのことに気付かされた。

「とりあえず、着替えようか」

「うん」

二人は自分のロッカーを開けて、制服に着替えようとした。

奈津美は鞆を置こうとしたら、携帯のバイブの振動が手に伝わってきた。鞆から携帯を取り出すと、メールを受信していた。

受信ボックスを開くと、旬からだった。

『今部屋着いた！別に何もなっていなかったよ。  
つか、盗まれるものねえし（笑）』



とりあえず、今からちよつと寝るよ。

ナツ、仕事頑張って！無理はすんなよ！』

そのメールを見て、奈津美は少し安心した。

『よかった。

会社まで送ってくれてありがとう。

ゆっくり休んでね。

旬もバイト頑張って！』

そう手早く打って送信し、携帯を閉じた。

携帯の表面に傷ができている。

昨夜、落としてしまったせいだ。まだ新しいのに……

旬とお揃いの大事な携帯なのに、それを見ると少し悲しくなった。

その日は、何の問題もなく過ぎた。

仕事をしていると、気が紛れて余計なことを考えずにすんだ。今日は運よく、あまり周りと接するような仕事は回って来ず、一日ずっとパソコンに向かってデータ入力や、会議の資料作りだったので、それに集中していたら、なんとか乗り切れた感じた。

「奈津美。今日、仕事終わったあと予定ある？ 無かったらご飯行かない？」

昼休みにカオルがそう誘ってくれた。

ミックスサンドを食べながら、奈津美は悩んだ。

「……今日は、やめとく。ちょっと、体休めたいし」

あまり積極的な気持ちになれず、奈津美はそう断った。さすがにまだそんな気力は持てなかった。

「そっか。じゃあまた今度にしようか」

カオルもそれは察していたようで、すぐに引いてくれた。

それでも奈津美が殻に籠もらないようにするためか、次を約束するようなことを言った。

「うん……また今度、週末にでもゆっくり行こうね」

奈津美もカオルの気持ちに答えるために、そしてそれ以上に奈津美自身の気持ちを浮上させるためにそう返した。

「うん」

カオルはホッとした表情で頷いた。

その日は、定時で仕事を終わると真っ直ぐ家に帰った。

カオルが送ろうかと言ってくれたが、断った。同じ女であるカオルに送ってもらうなんて、気が引けたし、もしもカオルにも危険なことがあったら、それこそ取り返しがつかない。

勿論、奈津美自身も不安はあったが、それに周りを巻き込みたく

はなかった。

人通りが多いうちにさっさと帰ってきたので、今日は何事もなくコーポまで帰ってくる事ができた。それに奈津美はほっとしていた。

しかし、コーポのエントランスを通る時、奈津美の体は強張った。昨夜のことが頭に思い浮かぶ。……そうだ、郵便受けの中をみないといけない。

ほんの数歩動くだけのことなのに、ためらった。今朝は匂が一緒だったからあまり意識していなかった。だが、今は、丁度昨夜と同じような状況だ。

……今日は、見なくていいや。大したものなんて来てないだろうし。

そう思って、奈津美は郵便受けの前を通り過ぎて部屋へと向かった。

部屋に着いたら着いたで、不安になってしまった。

一人きりの空間は、寂しすぎる。

奈津美はリビングの座布団の上にへたり込んだ。

部屋の時計を見る。五時四十五分になるところだ。

……旬は、何してるのかな。

やっぱり、こういう時に一番に思い浮かぶのは旬のことだ。

奈津美は鞆から携帯を取り出し、リダイヤルで旬の番号を表示した。

電話して、出るだろうか。夜は居酒屋のバイトだと言っていたけれど、もう行った頃なのだろうか。それとも、まだカフェのバイト中だろうか。

少し悩んだが、奈津美は発話ボタンを押して、携帯を耳に当てた。もし出られなかったのなら、それでいい。

電波の状態が悪いのか、プツツ、プツツという音が何回か続く。ようやくといったところで、呼び出し音に切り替わる。

一回目……いつも、旬が暇な時だったら、もう出てくれる。しかし、旬は出ない。

二回目が鳴り終わっても、旬は出なかった。普通の人なら、これぐらいで出ないのは普通だ。それでも、旬が相手だと、もう出ないのではないかと思ってしまう。今の奈津美の心境もあって尚更だろう。

「――もしもし」

三回目のコールの途中で旬の声が聞こえた。

「あっ……」

落胆しかけていたので、奈津美の心臓の動きが一気に加速する。

「もしもし、ナツ？ どうした？」

不意で何もいえなかった奈津美に、旬は不安そうな声になっていた。

「あ、もしもし、旬？ 今、大丈夫？」

やっとのことで奈津美はそう言った。

「うん。大丈夫だけど……どうした？ 何かあった？」

「ううんっ……そういうわけじゃないんだけど……今、帰ってきたの」

「そっか。何も無かった？」

「うん、大丈夫だったよ」

「そっか。よかった」

旬がほっとしたのが、電話越しでも分かった。

「……旬、今何してるの？」

「ん？ 今、カフェのバイト終わって、着替えるところ。丁度ロッカーを開けたら携帯鳴ったんだ」

「そう……今から、居酒屋の方行くの？」

「うん、そうだよ」

「そう……」

旬の声を聞いてしまったら、会いたくなってしまった。しかし、勿論そんなことは言えない。

「……ナツ？　どうかした？」

黙ってしまった奈津美を窺うような旬の声だった。

「ううん。何もないよ。バイト頑張ってね」

奈津美は明るく振る舞って答えた。旬に気を遣わせるようなことはしてはいけない。

すると今度は旬の方が黙ってしまった。

「ナツ……バイト終わったら、ナツの部屋行こうか？　ていうか、行っている？」

旬の言葉に奈津美の心臓は跳ね上がった。電話だというのに、心の中を読まれたのかと思った。

「えっ……いいよ！　あたしは大丈夫だから……旬、バイト帰りなんだし……」

本当はとても嬉しいが、素直に甘えるわけにはいかなかった。昨夜から、いや、ストーカーの被害があってから、旬にはひどいことしかしていかないのに、これ以上負担になるようなことはさせたくなかった。

「ううん。俺が行きたいんだ。ナツの大丈夫って顔見ないと、まだ安心できない」

「あ……」

そうか。まだ早い時間に電話をしたりして、これが旬に心配をさせてるんだ。

やっぱり我慢すればよかった。旬がバイトを終えて連絡をくれるのを素直に待っていればよかった。

「あ、つうか、ナツの方が嫌？ 今日、平日だもんな……あ、でも、ナツの顔見たらすぐ帰るから……」

旬の方が気をつかってそんなことを言ってくれる。

旬のバイトが終わってから奈津美の家に来るとなると、何だかんだで泊まりになってしまう。

特別な日以外の平日の泊まりは嫌がる奈津美だから、旬は気にしてそう言ったのかもしれない。

「ううん！ そんなことない！ あたしも……旬に会いたいから……」

奈津美は素直に言った。

旬にばかり気を遣わせて、心配させてしまっている自分が情けない。今の奈津美が旬にできることといったら、素直になることだ。

「そっか……やべ。こんな時なのにちよつと嬉しい」

旬の声が笑いを含んだようなものになった。照れている表情の旬が思い浮かぶ。

「じゃあ、バイト終わったら行くな。十時に終わるから……半ごろ

には行けると思う」

「うん……分かった。待ってる」

会うと約束をした瞬間、奈津美の気持ちはとても緩んだ。最初から、素直でいればよかったと思う。

「……旬」

「ん？」

「ありがとう。バイト、頑張ってるね」

だから奈津美は素直な心からの気持ちでそう言った。

「おう。んじゃ、また後でな」

どこか満足そうな声でそう言って、旬は電話を切った。

通話を終えて、奈津美は携帯を閉じた。

携帯についた傷を見て、また少し落ち込んでしまう。

しかし、あと数時間したら、旬に会えるから、もう少し我慢しよう。そう思って、携帯の傷を撫でた。



### 34 傷跡（後書き）

前回、あと二話でストーリーカー編完結としましたが、まだあと一話あります。すみません（汗）

さて、ここでこのサイトの【メッセージを送る】の機能の私の対応について、お伝えしておこうと思います。

ずっと前にブログの方で伝えたこともあると思うのですが、それ以降に私の作品を知っていたいただいた方もいらっしゃると思いますので……

まず言いますと、私はメッセージへの直接のお返事はしておりません。

私自身のウェブ上での操作のほとんどを携帯端末からしており、サブアドレスなども持っていないません。本当に自分勝手なことなのですが、私の個人情報を気安く流布したくないのです。

とはいえ、今までに返信用のアドレスを載せてメッセージを送って下さった方もいました。

せっかくそこまでして頂いて、お返事をしないのはとても心苦しく思っております。

ですが、返信用アドレスの有無に関わらず、メッセージを送って頂いた方へは何らかの形でお返事をしたいということとはとても強く

思っています。

なので、今現在、私のメッセージへの対応は、メッセージを下さった方で、小説家になろうの作者IDを持っている方へは、返信用アドレスの有無に関わらず、メッセージを送って、お返事をさせていただきます。

そして、作者登録をなさっていない方、もしくは不明な方（作者名検索をしてもご本人かどうか特定できないので……）へは、以前はお返事をしていなかったのですが、ブログを持ってから、ブログ上でお返事することにしていました。

ですが、これも悩みどころで、勝手にウェブ上という公の場で、無断でお返事をしていいのかどうか……

一応、前にメッセージについてブログでお知らせしましたが、だいぶ前のことだし、私のブログは見ていない人がいるのかもしれない。

なので、ここで改めて方針を決定し、お知らせしようと思います。

メッセージを下さる方。

「小説家になろう」の作者IDをお持ちの方は、作者IDを載せて頂けると、そちらにメッセージとして返信します。

作者IDをお持ちでない方は、ブログ上でお返事をさせていただこうと思います。勿論、HNなどはインシヤル化して伏せさせていただきますし、メッセージ内容は一切公開しません。私とメッセージを送って頂いた方にしか分からない形にします。

もし、それでもウェブ上に返事をされるのは……という方は、返信不要ということを一言伝えて下されればありがたいです。

ここからは私信です。

以前、メッセージを下さったK様。

作者IDをお持ちなのかどうか（お持ちの場合IDをお教え下さい）、お持ちでない場合、ブログ上でお返事してよいのか、お手数ですがもう一度メッセージを送って下さい。

その上で、改めてお返事の対応をさせて頂こうと思います。

### 35 消毒

何だかお腹がいっぱいだ。

奈津美は箸を止めてため息をついた。

朝も昼も少量しか食べてないので、多少の空腹感はある。

だけど、いざ食べると胃が受け付けない感じで、食べられない。

もういいや。残そう。匂が来たら食べるかもしれないし。

奈津美はもう片づけをしようと思って、食器を盆の上に乗せた。

時計を見してみる。まだ七時過ぎだ。

匂が来るまで、まだ三時間もあるのか。

そう思うだけで気が重かった。

これなら、カオルと一緒にご飯を食べに行った方がよかったかもしれない。そしたら気が紛れていただろうし、無理矢理にでも何かちゃんと食べていたかもしれないのに。

と、思ってから奈津美は自己嫌悪に陥る。

せつかくカオルが誘ってくれたのを断っておきながら、なんて自分に都合のいいことを考えているのだろう。

余裕の無い時ほど自分の嫌なところが見えてくる。一人でいるか

ら尚更だ。

どうしようもない感情に押しつぶされそうになりながら、奈津美は悶々としていた。

奈津美は、食事の片づけをしたり、昨日ほったらかしにしていた洗濯物を畳んだり、風呂に入ったり、比較的いつも通りの過ごし方をした。

それでもしきりに気になるのは時間ばかりだ。今やっと九時を過ぎた。

もうすることをしつくしてしまった奈津美は、ベッドにうつ伏せに倒れこんだ。

今日は、時間が流れるのが遅いように感じる。こういう時は、そういうものだ。

あたしって、こんなに弱かったんだ。前はここまで弱かったわけ。

奈津美は、自分ではそこまで弱いとは思っていなかった。自分ではなんとかすることは何とかしていた。物理的なことも、精神的なことも。

それなのに、今では旬がその一部になっていて、その一部がないと、ほとんどの機能を失ってしまったかのようだ。

旬が居ないと、奈津美も成り立たなくなる。

弱いなあ、本当に。

思わず涙が浮かんで、奈津美はぎゅっと目を閉じた。

ピンポーン……

インターホンの音が鳴って、奈津美はガバツと起き上がった。

時計と見ると、ばやけた涙で視界だったが時計の長針と短針が十時過ぎを差しているのが分かった。

奈津美は慌てて目元を拭いながら、玄関へ向かった。

玄関でドアスコップを覗いて確認すると、そこには待ち望んだ匂の姿があった。

奈津美はドアチェーンを外し、鍵を開けた。

「匂っ……」

ゴンツ！

「イテッ！」

勢いよく開けると、予想外の音と声がした。

「え!?! 匂?」

奈津美は驚いて、ドアの向こうにいるはずの匂と見た。

匂は丁度開いたドアの裏にいて、額を押さえている。

「あ……ナツ。何の音もしなかったから、居ないのかと思った。これ覗こうとしたら開いたからビビッたー」

匂は苦笑混じりに言って、ドアスコープを指さした。

「ごめんね……でも匂、外から覗いても見えないわよ」

「知ってるけどさー。気持ちじゃん?」

そう言って匂はヘラッと笑った。

奈津美もつられて笑った。

「入って。……匂、来るの早かったね。もうちょっと遅いのかと思った」

部屋の中に促しながら、奈津美は言った。

「うん。終わってソッコー来たから。ちょっと走っちゃった」  
靴を脱ぎながら匂は言う。

ふと見て見ると、匂の額から頬にかけて、汗が流れていた。

「匂……そんなに急がなくてもよかったのに……バイトで疲れてたでしょ?」

まして、昨夜から満足に休めたわけではないはずなのに。奈津美は少し罪悪感が生まれる。

「全然！ ナツに会えると思ったら余裕だし。それに、ナツに会いたいって言われたら空だって飛んでこれるよ」

旬のその言葉に、奈津美は思わずふき出す。

「本当に飛べるの？」

「うん。今日はたまたま飛ばなかったけどな。次からはベランダから現れよっか」

旬は楽しそうに言う。

「ふうん？ ……じゃあ今度飛んできてね」

「じゃ、ナツが会いたいたって言ってな。『旬が居ないと体が火照っておさまらないの』って。そしたら一瞬で飛んでこれるよ」

「やだ。そんなの言うわけないでしょ！」

奈津美は旬の肩を軽く叩いた。

旬は、ヘラッとした。それにつられて、奈津美も顔が綻ぶ。

よかった。私、ちゃんと笑えてるよね？

「旬、ご飯食べた？ お腹減ってない？」

「バイト前に軽く食ったけど、腹減ったー」

「じゃあ、ご飯用意するね」

「うん。ありがと。……あ、俺、これ貰ってきたんだ」



旬は思い出したように持っていた袋を上に掲げた。

「唐揚げ。まだ温かいから、一緒に食べ……あ、でも、ナツもう食べたよな」

「ううん。ご飯は食べたけど、でも貰おうかな。ありがとう、旬」

旬から唐揚げを受け取って奈津美は台所に入った。

「ごめんね。ありあわせで作ったやつで、残り物だけど……」

ローテーブルに旬の食事を置いて、奈津美は再び台所に戻った。

「ううん。……でもなんか、たくさん作ったんだな。残り物のわりに多くない？」

並んだ食事を見て、旬は言った。

確かに、普段奈津美が残り物、という時に出す量に比べて、今日は十分一人分としてしっかり食べれるほどの量があった。

「……うん。冷蔵庫の中に残り物あるの忘れてて、作っちゃったから。無理だったら残してもいいからね」

食欲がなくて食べられなかったとは言いづらくて、奈津美はそう言った。またここで旬に偽りを言ってしまった。

「ううん。俺は腹減ってるから大丈夫だよ。丁度いいくらい」

「そう……。ねえ、匂。ビール飲まない？」

奈津美は冷蔵庫から缶ビールを一つ出し、リビングに顔を覗かせて尋ねる。

「え？ 今から飲むの？」

匂は目を丸くしている。

「うん。ちょっと飲みたいの。半分こしよう？」

「うん……。いいよ」

奈津美が何でも無い日に匂に酒を勧めるなんて珍しい。

しかし匂は、その奈津美の珍しい言動に何かを感じて、素直に頷いた。

「ありがとう」

笑顔を匂に向けて、奈津美はグラスを用意しようと食器棚に向かった。

本当は、あまり飲みたいという気分ではなかった。

だけど、アルコールの力を借りたかった。そうしないと、疲れてしまいそうだった。

酒で失敗したことのある奈津美だから、こういうことはしないほうがいいとは分かっていたけれど、今日だけは自分から飲もうという気分になされた。

ローテーブルにグラスを二つ置き、ビールを均等になるように注ぐ。

旬はそれを見ながら先に食事を勧めていた。

「……はい、旬」

奈津美は片方のグラスを旬の前に置き、もう一つを自分の方に引き寄せた。

「うん。あ、ごめん。先食ってるけど」

「ううん。あたしが頼んだんだから、いいよ」

「ん……じゃあ、とりあえず」

旬は自分の分のグラスを持ち上げた。

「うん……」

奈津美もグラスを持ち上げて、グラスを当て、小さく、乾杯、と言った。

そして、旬は食事を続け、奈津美は旬が持ってきてくれた唐揚げをつまみにちびちびとビールを飲んだ。

何故か、お互いが喋りだせずに、静かだった。

「……なんかさ。店長の唐揚げってちよつと独特だよな」

旬が唐揚げを箸で摘んで旬は言った。

「そう？」

奈津美も唐揚げを摘んでみた。

「何か独特じゃない？ 俺んちと違う。それに塩とかついてないし……でもなんかピリツとしてるっていうか……なんだろ、これ」  
もぐもぐと口を動かしながら、旬は首を傾げる。

「……生姜じゃない？」

奈津美も口の中の唐揚げを味わってみて、奈津美は言った。

「あー。生姜か！ 確かにそんな味する！」

納得したように頷いて、旬はもう一つ唐揚げを摘んで口に放り込んだ。

「塩とかつけるのは中華のじゃない？ 和風の居酒屋だったらこんな風に生姜きいてるお店もあるよ。私も実家がそうしてたから生姜使ってるけど……気付かなかった？」

「えー？ マジで？ 全っ然気付いてなかった。普通に美味しいなって思ってたけど」

「私はちょっとしか使ってないけどね。これはしっかりきいてる。だからすごい進んじゃう」

その言葉の通り、奈津美はもう一つ唐揚げに箸を伸ばしていた。

本当にうまく作っているな、と奈津美は思った。ちゃんと居酒屋で出すものだから、色や酒が進みやすい味になっている。

奈津美も、食欲なんてなかったはずなのに、しっかりと食べている。

今日一日を通して、あまり食べていなかったから体が求めていたのかもしれない。そして、今は旬がいるから、食べることができるのかもしれない。

それでも、旬が居るから食べないと、思っている気持ちより、奈津美自身が食べたいと思って食べている気持ちが強いのは違いなかった。

「今度ナツも作ってよ。そんでちゃんと味わってみる」

「何かそれ、いつもは味わってないみたい」

「ち、違うよ！　いつもは……いつも、ナツの作るご飯が美味しいから次から次へと食べてっちゃうつか……」

必死に言い返そうとする旬がおかしくて、奈津美は思わず笑った。

「いいよ。今度作るね」

奈津美が言うと、旬は笑顔で嬉しそうに、うん、と頷いた。

それから何故か、会話が途切れてしまった。

旬は食事を終えて、残ったビールを飲んでいる。

奈津美も、少しずつ飲んだビールを飲み干して、手持ち無沙汰に汗をかいたグラスを指で拭っていた。

やっぱり、今夜はいつも通りにはできない。

昨日の今日で仕方ないといえばそこまでだが、やはり、お互いに  
ぎこちない。特に旬が、気を遣ってくれているのが、何となく伝  
わってくる。

どうしようか、どう接しようか、そんなためらいがあるように感  
じた。

「……旬。ごめんね」

堪らなくなつて奈津美は旬に言った。

「え？」

旬は目を丸くした。

「ごめんって……何が？」

「色々……昨日のことも、今日のことも」

奈津美は膝を立てて、足を抱きかかえるように小さくなつて言っ  
た。

「……昨日のことは、謝んなくてもいいって。今日のことで、  
何でナツが謝ることあんの？」

旬は口元に笑みを浮かべている。

「だって……あたし、旬に自分勝手なことばっかりしてる。ストー  
カーのことも、旬に何も言わなかったくせに、自分が本当にやばく  
なった時だけ旬に助けてもらおうとして……今日だって、旬のこと  
何も考えてないの。私が一人で居たくなかっただけで、旬に電話し  
て、来てもらって……」

旬は奈津美の言葉を遮った。

「何言ってるの！ それのどこが自分勝手なんだよ。ナツは何でも一人で考えてやろうとし過ぎなんだよ。もっと俺を頼ってきてくれていいんだし、今だって足りないぐらいだよ！」  
少し声が大きくなった。

奈津美は目を丸くする。

「……ごめん。言い方きつかったよな？」

旬は今度は小さな声で、下を向きながら言った。

「ナツが俺に頼れないのって、俺に頼りがいがないからだよな。いっつもナツに甘えて、俺のこともやってもらってるくらいだし」

「そんなことっ……」

奈津美はすぐに反論した。

「そんなことないよ！ 甘えてるのはあたしの方で……今日だってそう。旬に甘えて、電話して、来てもらった。旬が頼りなかったら、旬に電話なんかしてない！」

必死に伝えようと、奈津美はじっと旬を見つめた。

「あたしは、旬が側にいてくれたら、それでよかったの」

旬は目を丸くしていた。じっと奈津美の目を見返し、少しすると、下を向いてため息をついた。

「……旬？」

そんな旬の反応に不安になって、奈津美は旬の顔を覗き込もうとした。

「……そんな可愛いこと言うなよ」

「え……？」

「こんな時なのに、我慢できなくなんじゃん」

そう言って、また深くため息をついた。

「我慢……？」

「うん。我慢。ナツのこと……襲いそうになる」

今度は奈津美の方が目を見開いた。

そう言えば、今日は、旬は奈津美に触れていない。

……いや、正確に言えば、朝、奈津美が旬の触れた手に悲鳴をあげてしまってから。奈津美の会社まで送ってくれたときに手を繋いだだけだ。

「……いいよ」

「え？」

旬は顔を上げて奈津美を見た。

奈津美の目は潤んでいる。



「いいよ。旬になら。……ていうか、しょう？」

奈津美は、そっと胡坐をかいている旬の膝に手を触れた。

「え……」

旬の声がかすれていた。

「な、ナツ……酔ってる？」

「酔ってない。あれぐらいで酔うわけじゃない」

「……でも……いつもと違うじゃん」

「違うのは旬じゃない。いつもなら、旬が言うじゃない。私が嫌って言っても、いきなり抱きついたりするじゃない」

まるで責めるような言い方に、旬の方が黙ってしまった。

「旬……もしかして、嫌になった？ 私のこと……」

「えっ……」

「私が……今回のこと黙ってたから？ 旬の信用を失っちゃうようなことしたから？ だから嫌になったの？」

旬の膝に置いた手をギュッと握りしめ、奈津美は下を向いた。

「ちがつ……何でそんな話になるんだよ！」

旬の方が目を見開いて言った。

「じゃあ何でよ……何で、抱き締めてくれないの……？」

奈津美の方から、旬に抱きついた。肩に顔を埋め、背中に腕を回した。

やっぱり、あれだけの量でも、酒が回ってしまったのだろうか。

自分でも驚いていた。こんな風に、すぎるように、旬に抱きつくなんて。

だけど、これが、今の奈津美の本当の姿だ。

みっともないくらいすがっても、旬に抱き締めてほしい。

「ナツ……」

旬は奈津美の肩に手を置いた。

やっぱり、抱き締めてはくれない。

「俺だって、ナツのこと、ぎゅって、抱き締めたいよ」

ゆるく、旬の手に力が入った。そして、そっと奈津美を体から離す。

「でも……俺の気持ち押し付けて、ナツに怖い思いさせたくないんだよ」

少し辛そうな顔をして、旬は奈津美を見た。

「……それって、今朝、私が、叫んじやったから？」

旬の手が、奈津美の内股に当たった瞬間、ストーカーのことがよぎって悲鳴をあげてしまった。

それを、旬はどういう反応なのか、しっかりと見抜いていたよう  
だ。

「……俺、多分、優しくできないよ」

「え……？」

呟くように言ったその旬の言葉に、奈津美は固まった。

どういう、こと？

「ナツ相手だと……最初はナツのことと思ってやってても、途中で自  
分の気持ちの方が勝っちゃって、無理矢理になっちゃうから……自  
分でも分かるんだ」

奈津美は半ばあっけにとられていた。

旬がそんなふうに思っていたなんて、知らなかった。

旬は無理矢理というけれど、勿論合意の上であるし、旬は奈津  
美が本当に嫌がることはしないので、奈津美からしたら、無理矢理  
という感じはしない。

むしろ、今のままで十分優しいのに。

「……旬のバカ」

奈津美は小さく言った。

「旬はいつも優しいよ。いつも……私のことを考えてくれる」

「いや、でも……」

「こんな時だけ、そんなこといわないでよっ！」

奈津美に言い返そうとした旬の言葉を、奈津美が先に遮った。

睨んだつもりでも、目に涙が溜まっているせいで、迫力も何もない。

「不安なの……今、旬に触れてもらわないと、もう二度と触れられない気がして……」

とうとう、奈津美の目から涙が頬に伝った。それを見られないようにするためか、下を向いたら、それが奈津美の太股に落ちた。

「そんな……俺は今はやっぱりやめておいた方がいいって思うだけで……ナツの気持ちが悪く落ち着いたら……」

旬は焦った様子で奈津美に弁解する。

「……そうじゃない」

下を向いたまま、奈津美が首を横に振った。

「私がダメになりそうなの。……今、旬に触れてもらえなかったら、私がもう旬に触れられなくなりそうで、怖いの」

どうしてそう思うのか、奈津美にも分からなかった。だけど、無性にそんな気がしてしょうがなかった。

今一番欲しい感触がないことが、とても不安で、とても怖い。

「ナツ……」

呼ばれたと同時に、奈津美は匂に抱き寄せられた。

「ごめん……ごめんな、そんなこと言わせて……そんな気持ちにさせて……」

背中にしっかりと手が回されて、しっかりと抱き締めてくれた。

そう。これが欲しかった。匂の、匂だけのこの感触が欲しかった。

「匂……」

奈津美も匂の背中に手を回し、力いっぱい匂を抱き締めた。

「あ、ナツ。俺、先シャワー浴びた方がいいかも」

ベッドの上に移動してから、匂がそんなことを言い出した。

「今日、昼からずっとバイトだったし……特に居酒屋で結構汗かいてるし、ここ来るまでも走ったからもっと汗かいてるし」

奈津美はそんなことを言う匂を見上げていた。

「……なんか、今日の匂、空気読めてない」  
キツと匂を睨むように見て、奈津美は言った。

「えっ……」

匂は驚いたように目を見開いた。

「いつも、そんなこと気にしてる？　　いつも、シャワーなんていって言うのは旬でしょ」

「あ……いや、そうだけどさ……今もなんか、変な汗かいてて自分で臭った気がしたから、ナツはもつと嫌かなって思ってた……」

旬はTシャツの首元を自分で嗅ぎながら言った。

「……いい。今日は気にしない」

「えっ……何、今日はってことは……いつもは気にしてるってこと？」

「そういう意味じゃなくて……もう。旬」

こんな話がしたいわけじゃない。ただ、今は旬の感触がほしい。

旬は苦笑いをして、奈津美に覆い被さった。

「絶対……できるだけ優しくするから。もし、無理だったらちゃんと言って。ちゃんと、やめるから」

「うん……」

「……あと、汗くさかったら言って」

付け足すように、旬は言った。それに奈津美の心はほぐれる。

「うん。……耐えられなかったら言う」

笑みを浮かべながら奈津美は答えた。

「……それもなんかなー。言われたらめっちゃショック受けそ

う」

苦笑いの旬の表情が、奈津美の間近にある。

奈津美はじっと旬の目を見つめながら笑った。

「大丈夫。私、旬の匂い、結構好きだから」

「……ナツ」

二人の唇が重なった。

目を閉じて、旬の唇の感触に、気持ちを集中させる。

何度も角度を変えて、旬の舌が奈津美の口の中をまさぐっている。

奈津美も精一杯それに応える。

ほとんどされるがままになりながら、奈津美は手探りに旬の体の手を伸ばし、背中に腕を回した。旬の重みが奈津美の体にかかった。圧迫感はあるけれど、それだけ旬と密着できるから、必死で抱き締めた。

旬の唇が、奈津美の唇から少しずれて、奈津美の頬に触れる。目を開けようとしたら、瞼に唇が触れて、また強く目を閉じた。

こうしていると、まるで旬しか居ない世界に迷い込んだような感覚になった。

目を開けるのが怖い。いっそのこと、目を開けたら旬しかいない世界になっていればいいのに。

そうしたら、もう怖い思いはしない。旬のことだって、もっと大切にできる。

目を開けるのが、怖い。

ぐっと閉じる目に力を入れたら、眉間に旬の唇が触れた。

「ナツ……皺できてるよ、ここ」

唇が離れたら、旬が指でそこを揉み解すように押した。

「そんな顔は、俺好きじゃないよ。ナツのことは、全部好きだけど、でも、そんな苦しそうなのは嫌だよ」

「え……」

奈津美が目を開けると、そこには、悲しそうな顔をした旬がいた。

「ナツ……」

旬の唇がまた奈津美のそれと重なる。

さつきよりは強引で、少し息苦しい口付けだった。

まるで、旬の心を表しているようだった。

旬はきつと、こんな風に、苦しいに違いない。

旬の手が奈津美のTシャツの裾に伸びた。それと同時に、旬の唇が奈津美の唇から顎、首筋の方におりていく。



「んっ」

旬の唇が触れると、奈津美は首を縮ませてしまった。

「……ナツ？」

唇に触れる場所がなくなってしまい、いつもと若干違う反応に、旬が顔を上げて奈津美を見た。

「ううん……何でもない。ちょっとくすぐったかっただけ……」

旬のことは見れずに、奈津美は首を横に振った。

本当のことなんて、言えるわけがない。

「ごめん……続けて？」

「……うん」

旬は一瞬ためらったが、奈津美に言われたので、行為をすすめようとする。

Tシャツの裾に伸びていた手が、奈津美の肌に侵入し、肌を撫でながらTシャツをまくり上げていく。

その瞬間に、奈津美の体がビクンと動いた。

……大丈夫。大丈夫だから。これは、旬の手。旬の手だから。

そう自分に言い聞かせて、奈津美はまた目を硬く閉じた。

旬は、奈津美の様子を見て、グッと拳を握り締めた。

「……ナツ。あいつに、あの男に、何された？」

「……え？」

奈津美は目を開けて、旬を見つめた。

旬の目は、怒りを含んでいるように見えた。

「ナツの体……触ったんだろ？ そのまんまになんかしておけない」  
旬は、奈津美の顔の横で拳を握り締めていた。

その様子が、あまりにも悔しそうで、辛そうで、自分のことそんな顔をさせてしまっているということが、耐えられなかった。

「旬……」

奈津美の目からは、涙がこぼれた。

「くっ……首、絞められて……それで、体触られた。……上半身と……足、触られて……すごく、気持ち悪くて……怖くて……」

言いながら、ボロボロと泣いた。

昨日のことを思い出し、恐怖がよみがえってきたが、なぜかそれと同時に心が軽くなっていくのも感じた。

言葉にするのと、涙を流すのとで、体の中にくすぶっていた感情が放出されるのだろうか。

「ナツ……」

旬が頬を撫でて、指で涙を拭った。

「ごめんな。でも……分かったから」

そう言って、旬は奈津美の首筋に顔を埋めた。

そして旬は、うんと優しく、奈津美の首筋に唇を触れていった。唇で触れて、そして手でも奈津美の首をなぞった。

限なく触れて、その範囲を段々広げてくる。

Tシャツの中に手を入れて、腹の周りを撫で上げながら、Tシャツを捲くり上げていく。そしてそれを追いかけるように、唇でも触れていった。

スムーズにTシャツを脱がされ、上半身を裸にされる。

裸になった胸に旬の手が、その先端に唇が触れた。

「んっ……」

ピリピリとした快感が背中を駆け上がっていく。

いつもと違う感覚だった。いつもの旬と、触れ方が違う。

いつも優しいけれど……それ以上に優しく、奈津美のことを、繊細に扱っているような、そんな触れ方だ。

旬が、いつもは優しくできないと言った意味が分かったような気がした。

いつもは、旬がしたいようにしている気がする。旬は胸が好きだから、そこばかり触るし、秘所への愛撫だって、奈津美の反応を面白がってしているところがある。

勿論、それは嫌なものではない。奈津美にとっては、旬がそ喜んでくれるのなら、それで嬉しい。

結局、それで五分五分になって、うまい具合に釣り合っていたのだ。

だけど今夜は、そうじゃない。

旬は、奈津美のことをとても思いやっていて、奈津美には、そこまでの余裕がない。それで何とか釣り合っている。

奈津美にとっては、あまりいいことではないと思ったけれど、今日だけは、甘えたい。

旬が体を起こして自分のTシャツを脱ぎ、丸まったTシャツをそのままベッドの下に落とした。

そして今度は、旬の手が奈津美の下半身の方に触れる。

奈津美が穿いているルームパンツ越しに、足の付け根から、膝を撫でる。そして、戻る時は、内股に手が滑り込んだ。

その瞬間に、奈津美の肩が震えた。

……大丈夫。この手は、旬のものだから。

奈津美はそう言い聞かせて、目を硬く瞑った。

匂の手が、ルームパンツのウエストを締めている紐を解いた。それに指をかけて抜き取られるのを、奈津美はされるがままになっていた。

「……え？」

次の瞬間、奈津美は目を開けていた。

脚に、先ほど上半身に受けていた感触がした。上半身を起こして見ると、匂が奈津美の開いた脚の間に入って、奈津美の内股に唇を触れていた。

そんなところに口付けられるのは、初めてで、奈津美は羞恥で顔が熱くなる。

しかし、匂の表情は真剣で、また余すことなく触れて、口付ける。

「んっ……」

奈津美は上半身を倒して目を閉じた。

不思議なことに、匂がそうやって触れていくことで、さっきまで克明に覚えていた昨夜の感触が無くなっていくようだった。匂が触れたところから、浄化されていく。もう、匂の感触しか分からない。

匂の手と唇が、奈津美の真ん中に辿りついたときには、もう頭の中が真っ白になっていた。

「ナツ……いくよ」

旬が、自身を奈津美に宛がって言った。

「ん……」

上手く声が出せず、奈津美は大きく頷いた。

それを確認すると、旬は右手を自身に添えて、左手で奈津美の右ひざを押さえ、ゆっくりと奈津美の中へと侵入していく。

「……あっ」

奈津美の一番奥に旬が辿りついたのを感じ、奈津美は高い声をあげた。

それと同時に、奈津美の目から涙が零れ落ちた。

一つ零れると、次から次へと溢れてきて、奈津美はボロボロと涙を流していった。

「ナツ？ どうした？ 大丈夫？ 嫌だった？」

奈津美の様子に気付いた旬は、すぐに前屈みになって奈津美の様子を窺ってくれた。

奈津美は涙を流しながら、首を横に大きく振った。

「旬……」

さすがのように、旬に手を伸ばし、背中に腕を回した。

奈津美の精一杯の力で、旬のことを抱き締めた。旬は奈津美に体重がかからないように、奈津美の体の横に手をついてくれていたが、

それも関係なく奈津美は匂にしがみついた。

「あたし……もう、ダメ……」

匂の耳元で、小さく奈津美は言った。

「え？」

奈津美はグスツと音をたてて涙をすすった。

「あたし……もう、匂じゃないと……嫌……触られるのも、匂じゃないと、ダメなの」

いつの間にか、そんな風になっていた。

今までだって、匂だから許せること、嫌じゃないこと、そんなことはたくさんあった。

だけど、ここまで匂に執着して、依存していたとは思ってもいなかった。

匂と繋がって、やっと無事だったんだと思った。

そう思えたのは、匂だったから。

パズルのピースと同じで、匂じゃないと、奈津美をさせることができる存在はいない。

他の男なんて、考えられなかった。

「ナツ……」

旬は奈津美の頭の下と背中の下に手を入れて、奈津美の体を抱き締め返した。

どちらからともなく互いの唇を探り、噛むように口付けを交わした。

二人は暫くの間、繋がったまま、抱き締めあって、口付ける。それを繰り返していた。

終わった後も、二人はぴったりとくっついて離れなかった。

向かい合うように横向きで寝て、旬は右腕に奈津美の頭を乗せて左手を奈津美の背中に回し、奈津美は左腕を旬の背中に回して抱き合っていた。

「……旬」

奈津美は旬の肩に顔を埋めて呟くように呼んだ。

「ん？」

「……ごめんね。今日、私、わがままばかり言って」

旬はきょとんとして奈津美を見下ろす。密着しているので、奈津美の頭しか見えない。

「わがまま？ 何が？」

そう尋ねると、奈津美が顔を上げた。思った以上に顔が近かった。



それでも気にはしない。

「だって、旬、バイト帰りなのに、うちに寄ってもらって……今だって、無理矢理してもらって……」

そこまで言うのと、なんだが恥ずかしくなって、奈津美はまた顔を下に向けた。

そんな奈津美を見て、旬は口元に笑みを浮かべた。

「わがままじゃないよ、そんなの。そんなの、付き合ってたら当たり前のことじゃん」

そう言って、旬は奈津美を抱き締める腕に力をこめた。

「ていうか。ナツは普段からわがまま言わなさ過ぎ。もっとわがまま言って甘えたっていいんだよ」

旬は優しい声で言ってくれた。前にも、似たようなことを言われたような気がする。

「……でも、わがままばかり言ったら、ウザくない？」

奈津美はまた顔を上げて旬を見る。

奈津美の経験上、男っていうのはそういうものだ。こっちが遠慮していると、もっと頼れとか甘えてとか言うくせに、実際にそうすると厚かましいとかわがままだとか言う。

だからこそ、甘えられなくなってしまった。

「うーん……ナツはあんまり甘えてきたことないからなあ。どうなんだろ」

旬は眉間に皺をよせて考える。

すぐに否定しないってことは、やっぱり、旬だってあんまり甘えてこられたらウザイと思うんだ。

曖昧な旬の返答に奈津美は落ち込んだ。旬なら、即答で『そんなことない』と言ってくれるのかと思っていたのに。

「ごめんね……あたし、もっとしつかりしないとダメだよね。あたしの方が年上なんだし……」

そっと旬の背中にある手を離そうとした。

「……何言ってるの」

旬がそう言った瞬間、奈津美は旬に組み伏せられて、仰向けになっていた。真上には、旬の顔がある。

「ナツ、謝らないといけないほど甘えてわがまま言ったことなんかないじゃん。なのに何で謝るの？」

旬の手が、そっと奈津美の頬を包んだ。

「もっと……もっともっと甘えてわがまま言ったっていいんだよ。確かに、ナツの方が年上で、俺の方がそれに甘えてわがまま言うけるけど……でもナツだって、ナツの方こそ甘えていいんだよ？」  
そこまで言うと、旬は静かに微笑んだ。

「年上だどうこうって言う前に、ナツは俺の彼女だろ？」

その言葉と共に、奈津美の目から大量の涙があふれ出た。

「えっ!？ 何でそこで泣くの？」

旬な驚いて、おろおろと奈津美を見下ろす。

「……旬」

奈津美はなりふり構わず泣いて、旬の背中にしがみついた。

「何？ どうした？」

旬が聞くのにも答えられず、奈津美は必死に旬にしがみついて、泣いた。小さい子供のように、泣いた。

旬はそんな奈津美を抱き締め返し、優しく、ゆっくりと頭を撫でてくれていた。

「ナツって、意外と泣き虫だよなあ」

旬がそう言って小さく笑った。

普段だったら、怒っているところだが、今日はそんなことが出来なかった。

旬と付き合うようになってから、本当に奈津美は涙もろくなった気がする。

どうして、といわれたらはっきりとは分からない。しかし、もし一言で言うのなら、それは、旬のことが好きだから。旬のことが、愛しいから。

そんな理由で、涙がでることなんて、信じられなかった。

それでも今は、そんな理由で泣いている。

涙が出るほど人のことを好きになったのは、愛しいと思うようになったのなんて、初めてだ。

きっと、もうこんな風に人を好きになれることなんてないのだろう。そう思ってしまうほど……

「旬……」

涙声で、奈津美は旬の名を呼んだ。

「ん？」

「旬……好き……大好き……」

泣きながら、訴えるように奈津美は言った。

旬はこれに目を丸くしていた。

いつも、言って欲しくても、恥ずかしがって言ってくれない言葉を、いとも簡単に言ってくれた。嬉しいが、少し戸惑ってしまう。

「……ナツってば……ほんと可愛いんだからな」

旬の顔が自然と緩んだ。

「俺も超好きだよ、ナツのこと」

奈津美の髪を撫でながら額にキスをした。

奈津美がひとしきり泣いて、落ち着くと、旬は奈津美の上から隣に移動する。

奈津美はそれを追いかけるように、匂の方を向いてまた匂の体にしがみついた。

いつもはしないあからさまな甘えの行動に、匂はまた少し驚くが、また自然に顔が綻んでしまう。

「ナツ、もう寝る？」

そっと背中を撫でながら匂は尋ねる。

「うん……匂」

奈津美は顔を上に上げて匂を見た。

「ん？」

「ぎゅって、して？」

一瞬何を言ったのか分からず、匂はきよんとするが、すぐに笑った。

「何で笑うの」

奈津美は不機嫌な声になって言った。

「いや、だってさ。あまりにも真剣な顔でいうから、なにかと違って」

笑いながらそう言うと、奈津美は拗ねたように口をへの字にして下を向いた。

「はい、ぎゅ」

拗ねた奈津美を、旬は力強く抱き締めた。

奈津美は、少し間をあけてから、旬の胸に頬を寄せて、旬を抱き締める腕に力を入れた。

「朝まで、このままでいてね？」

「うん。起きてもずっとこのままでいるよ」

「……それは困る」

「えー、何でー？」

「だって、明日も仕事だもん。離してくれなかったら動けない」

急に現実的になった奈津美に、今度は旬が唇を尖らせる。

「明日が休みだったら……ね。あたしもずっとこうしてたいんだけど……」

上目使いで旬を見て、奈津美はフォローするように言った。  
この上目使いは無意識なのだが、旬には効果覿面だ。

「明日休んじやえばいいじゃん。仮病でも使ってさ」  
つい本音でそう言ってしまう。

「ダメよ。こんな個人的なことで仕事休んだら」  
予想はしてたが、奈津美からはきつちりとした返答だ。

「……それに、今休んだら、甘えてダメになっちゃいそうだから。  
現実逃避しちゃうことになるでしょ？　それだけはいやなの」

今は、匂がいるから落ち着くことができている。今までにあったことが、嘘みたいになくなってきている感覚だ。

しかし、実際はそうじゃない。事実は消えてなくなるわけではないのだ。

このまま匂と長い時間いたら、それこそ匂に依存してしまいそうな気がする。

本当は一緒にいたいけれど、このままじゃいけない。

「……ふうん」

奈津美の思っていることが分かったのか、匂はまだ少し名残惜しそうだが、素直に引き下がった。

「じゃあ、朝まではずっとこうしとこ。俺もナツを充電しとかないと頑張れねえし」

「うん……」

匂の胸に顔を埋める。匂の温もりが心地よくて、段々瞼が重くなってくる。

「匂も、ちゃんと眠ってね？」

うとうとしながら奈津美は言った。

「うん。大丈夫。ナツが寝ちゃったら俺もすぐ寝ると思うから……」  
最後の方は、欠伸をかみ殺したような声で匂は言った。

やっぱり、今日は眠いんだ。

それでも旬は優しく奈津美の背中を叩いてくれた。

ゆっくりとしたリズムで、それが更に眠りを誘う。

「旬……おやすみ」

「うん。おやすみ」

そして奈津美はあっという間に、眠りについた。この世の中で、一番優しく、落ち着けて、安心できる場所で……



### 35 消毒（後書き）

お待たせいたしました。これにて『ストーカー編』完結です。

本当に長いことかかってしまいました（汗）本っ当に申し訳ありませんでした！

自分で考えて作っておきながら、とても難しい題材についての話となってしまうました。

正直、書きながら読者様からのお叱りを受けるのではないかとビクビクしておりました。

ずーっと、この話が終わったら、ちゃんとお話しようと思っていたのですが、思った以上に時間がかかってしまいました。

今回の話では『ストーカー』を扱った（？）わけですが。

最初は、ただ話の中のスパイスとして扱うつもりでした。これを通して奈津美と旬の心が尚近づきました、的な。

でも、そのスパイスとして使うために『ストーカー事件』を起こすのは……という気持ちもありました。

ストーリー上では丸く（完全にというつもりではありません）収まっていますが、実際はそういうわけにはいきません。

そういう意味で、特に女性読者様からのそんなお叱りがあったら……と、思っていたのです。

今のところ、目立ってそういうことはありませんでしたが、この場を借りて、お詫びをさせていただこうと思います。

今回の話で、もし気分を害した方がいらっしやいましたら、本当に申し訳ありませんでした。

所詮はフィクションなので、最終的にいい形で終わってしまうのは、多目に見てやってもらえると有り難いです。

……とまあ、ストーリーについてお詫びをしましたが、何より謝らないといけないのは、更新の遅さですね。

特に最後の方は、早く更新しようとしながら書いていたので、書き方が雑になって読みづらいかもしれません。

それでも最後まで目を通して頂いて、本当に有り難く思います。

次回からはまた別の話が始まりますが、次からは丁寧に、かつ、更新頻度も多くできるように頑張ります。

完結までまだ先は長いですが、これからもよろしくお願いします。

乱文失礼致しました。

### 36 旬の夢

奈津美と旬が街を歩く時、旬は必ず道路側を歩く。

彼氏が道路側を歩くというのは、多くのカップルがそうしていることであろう。そしてその理由のほとんどは『道路側は危ないから』という、彼氏が彼女を守ろうという、小さな心遣いだ。

旬の場合も勿論そうだ。奈津美は、それが自然にされていることで、何も気付いていなかった。

旬のその行動に、奈津美が知らない旬のことが隠れていたなんて、知らなかった。

「あー。美味かった」

旬は満足そうな顔をして言った。

旬と奈津美のデートでは定番となった、ケーキバイキングの帰りだ。

「でも、何でバイキングとか食べ放題って、時間制限あるんだろうな。九十分って、短すぎだし」

「時間制限もなかったら、お店の採算がとれないからでしょ。でも、九十分で千五百円って、安い方でしょ」  
不満そうな旬を奈津美が宥める。

「えー。でもまだぜんぜん食えるのに」

「……あれだけ食べといて、まだ食べれるの？」

旬は、いつものことだが、ケーキを次から次へと食べていったので、かなりの量を食べる。

奈津美に喋りかけながらも食べるので、奈津美からしたら、いつの間にか皿いっぱいのにせたケーキがきれいになくなっているのだ。旬が短いと言う九十分の間に、旬は何回ケーキを取りに行っただろう。そして、あれだけ食べてもの足りないとは、旬の体はどうなっているのだろう。

「本当、旬って甘いもの好きよね」

「うん！ あ、でも、食うのはナツの方が好き」

にっこりと笑顔で言った旬の言葉が一瞬理解できずに奈津美はきょとんとしていたが、すぐに耳まで真っ赤になった。

「ちよっ……何言ってるのよ！」

「えー？ ちゃんとオブラートに包んだ言い方したじゃん。ナツ、深読みしちゃった？」

「なっ……そんなんじゃっ……」

「今更照れることもないって。ナツ、かわいいなあ」 旬はニヤニヤと笑って奈津美の頭に頬を寄せた。

歩きながらだったので、手を繋いだ二人の体がよろめく。

「ちょっと！ 人前だしっ……こんな街中でやめてよ！」  
体勢を整えながら奈津美は匂に怒る。

しかし匂は、ただヘラヘラと笑って反省の色を見せない。

「もう……」

呆れながら、奈津美はため息をついた。

「へへっ……あ」

笑っていた匂の注意が、突然変わった。

道路側に顔を向け、反対方向からくる車を目で追って、後ろを振り返る。

そのまま、しばらく後ろを向いたまま、フラフラと歩いていた。

「……匂？ 前向かないと危ないでしょ」

奈津美が匂の手を引いた。

「うん……なあ、ナツ、今の車見た？」

匂が奈津美の方を向いて言った。その目は何故か輝いている。

「車？ 車って？」

奈津美はきょとんとして聞き返した。

「今通った車、珍しいんだよ」

「そうなの？」

「うん。うわー。トミーカイラって、道で走ってるのは初めて見た」  
旬はまた振り返って、車が消えた方向を見ている。

「え？ トミー……何？」

耳慣れない言葉が旬の口から飛び出てきて、奈津美は旬に聞き返した。

「トミーカイラ。知らない？」

「……うん。外車なの？」

「ううん。会社は日本だけど……あ、さっき通ったのはイギリス生産のやつだったんだけど。まあ、どっちにしてもめったに見ないからなー」

そう説明しながら、旬は興奮状態のようだ。いつも以上に饒舌な気がする。

そのまま、奈津美がよく分からないその車種について蘊蓄さながらに話し始めた。

奈津美は、それについて最初は相槌をうっていたが、そのうち話が分からなくなり、ただポカンと喋る旬を見ていた。

「あー。写メ撮っておけばよかったかも。滅多に生で見れることないんだし」

旬は、もうとっくにさっきの場所を通り過ぎてしまつて、車だつてどこにいったのか分からないのにまた名残惜しそうに後ろを振り返る。

「……匂って、車好きだったのね。知らなかった」

こんな匂を、奈津美は初めて見た。

強いて言うなら、匂が甘いものを食べる時には、こんな風に楽しそうではあるけど、それもまた違う気がする。

何かこう、それ以上のものを感じるのだ。

「うん！ カッコいい車って憧れるし。俺、これでも昔はF1レーサーになりたかったんだよ」

笑顔で匂は言う。

「へえ、そうなの？」

「うん、……つつても、小学生くらいまでの話だけだな。テレビでさ、F1レーサーに密着みたいなのやって、それ見たら何かたいへんそうだなーって思ってやめたけど」

「……なんか匂らしい」

昔から、そうやって単純なのは一緒だなと思うと、奈津美は自然と笑ってしまう。

そう言えば、小さい頃の話とはいえ、匂から『夢』の話を聞くのは初めてだ。

「男の人って、車好きな人多いわよね。知り合いでも好きな人多いから」

たまに、女の知り合いでも、車が好きだという人もいるが、やっぱりそういった嗜好があるのは男の方が多い。

奈津美なんかは、国産の、テレビなどでCMしているものくらいしか分からない。外車だって、本当に誰もが知っているものしか知らない。それに、道を走っているものだって、マークだけを見てやっと分かるぐらいだ。さっきの匂のように、一瞬ですぐにどこのものだと分からない。

「いやー。やっぱ男にとっては車って憧れだよ。どんな車に乗るかで男の品格が問われるっーか」

「ふーん？ そうなの」

「そうだよ。だって、めっちゃ秋葉系の奴でもさ、車がロールスだったら見る目変わるじゃん」

そういわれて、奈津美はその様子を想像してみる。

「……何となく分かるけど。その例えは秋葉系の人に失礼じゃない？」

要は、腕時計や装飾品と同じで、車によってその人の金銭感覚やセンスが分かるということなのだろう。

確かに、それを言われればそうだ。

「俺もいつか自分の車ほしいなー。外車まではいかなくてもさ、カッコいいやつ」

目を輝かせる匂を見て、奈津美は微笑ましく思う。

純粹に、男の子らしい夢だなあと、ほのぼのする。



「でも旬、その前に免許とらないと。運転できないでしょ？」

いつものように夢心地で語る旬に、奈津美はそうやって現実を提示した。……そのつもりだった。

旬は、きょとした表情で奈津美を見ていた。

「……あれ、ナツに言ってなかったっけ。俺、免許持ってるよ？」

あまりにも意外な発言だった。意外すぎて、何も言葉が出てこなかった。

「え……」

奈津美は目を丸くして、旬を見つめるだけだ。

「俺、高三の……十八になってすぐに教習所通って、そんですぐ免許取ったの。……言っていない？」

「……うん」

奈津美が静かに頷くと、今度は旬の方が目を丸くした。

「え、マジで？　ごめん、言ったつもりだった」

「……ううん」

「あー、でも、もうずっと乗ってねえしな。俺も自分の車は持っていないし」

旬の言うとおり、今まで、一度も車でどこに行くという話が出ていなかったし、こんな話になることはなかった。だから、奈津美は知らなかった。

しかし、逆を言えば、旬が何も言わなかったから、奈津美はそんなものと旬は無縁のものだと思い込んでいた。奈津美の興味の対象外だったから、尚更だ。

高校の時に、といえば、まだ奈津美と出会って、付き合う前の話だ。そして、奈津美と旬が付き合い始めて、まだ一年とやっと半年だ。知らなくたって、しょうがない。

しかし、奈津美の胸の中には言いようのない焦れた感情が湧いていた。

「あーあ。俺も自分の車ほしーなー。大学行ってるヤツとかでもさ、もう自分の車持つてる奴いるんだよ。大体は中古で親ローンだけどそれで学校行ったりさ。そういうのはちよつとやってみたかったな  
ー……」

旬が、遠くに視線を向けて嘆くように言った。

こんなことを言う旬は、見たことがなかった。

「……旬は、やっぱり大学に行きたかったの？」  
試しに奈津美は聞いてみた。よく考えたら、このことを聞くことも初めてだった。

「ううん。俺、元々大学志望じゃなかったし」

「え……？」

あっさりと言う旬に、奈津美は言葉を詰まらせた。

「え……だって旬、大学受験したんでしょ？ 滑り止めまで受けて……浪人してたらお金かかるから、だから働くんだって、そう言っ

てたじゃない」

「あー……うん。そうだけどさ」

旬は、言いにくそうに言葉を濁し、奈津美の表情を窺っている。

「……何？」

奈津美がしっかりと見返すと、旬は目を泳がせて咳払いをした。

「その……元々大学はさ、元カノが……ミキが行くって言ったから、行こうと思っただけなんだ」

「え……」

「あつ、ホント昔のことだから！ 気にしないで！」

ミキの名前が出たことに反応したと思ったのか、旬は焦った様子でフォローをするが、そうじゃない。

勿論、予想外にミキの名前が出たことに驚いたのは確かだ。しかし、ミキのことに動揺したわけではない。

「旬……自分で大学行こうと思ってたわけじゃないの？」

「うん……俺、元々は専門学校に行くつもりで……でも、ミキが行く大学に、俺が行きたい方面の学科があつてさ。受けてみて、受かれば行つて、ダメならダメで専門いこうかと思ってたんだ」

『旬のヤツ、浪人じゃないぞ。大学全部落ちて、専門行くつもりだったけど、それもやめたんだと』

奈津美はふと、誰かが言っていたのを思い出した。

誰だったか……記憶の糸を辿って奈津美は思い出すとする。

……そうだ。あの時だ。居酒屋で偶然、旬の知り合いの話を聞いてしまった時。

あの時、そんな話が出ていた。

どうして、その時は何も疑問に思わなかったのだろう。

旬から聞いたことのないその言葉を聞いたのに、何も気付かなかった。

「専門学校って、何の？」

奈津美は頭に浮かんだ質問を投げかけた。

『専門』学校というくらいだから、行くとすれば、はっきりとした目標があるということなんじゃないだろうか。

「そういえば……大学もどういう方面に行こうと思ったの？」

次々と浮かぶ疑問に、つくづく奈津美は何も知らなかったのだということを思い知る。

「んー。専門は機械系のところ。大学も、工学部の機械工学科っていうのところ。信じられないかもしれないけど、俺、実は理系だったんだよ」

「え……ええ!？」

突然の告白に奈津美は目を見開いて驚いた。旬が言った通りに、信じられなかった。

「あー。やっぱそういう反応だと思った」  
旬はそうやって笑っている。

そりゃあ驚くだろう。

奈津美の勝手な想像だが、理系といえば、頭がよくて特に理数系の知識に秀でているという印象しかない。  
そんな雰囲気、旬には皆無だったのだから。

……いや、でも、それは単に奈津美が知らないだけかもしれない。  
もしかしたら、高校までの旬は周りからそういうイメージを持っていたのかも……

「何かさあ、俺が理系ってすごい意外に思われんだ。俺の高校、二年から文系と理系でクラス分かれたんだけど、一年の希望で理系に出してたら、周りのヤツとか、先生まで間違いじゃないのかって言ってさ。失礼な奴らだよな、全く」

旬は口を尖らせて言う。

どうやら、奈津美の思っていたことは違うらしい。旬は、昔からこういう奈津美が思うままの旬だったようだ。

しかし、逆に言えば、それでも旬が理系に進んだのは、何か確固たる理由があったからなのではないのだろうか。

「……それで、何で旬は理系に進んだの？」

奈津美が尋ねると、旬はふっと微笑んで前を見据えた。

「俺さ、車の整備士になるのが夢だったんだ」

また、さっきの表情だった。奈津美がみたことのない、旬の顔……

「さっきの話じゃないけど、俺、やっぱり車が好きでさ。レーサーにはなれなくても、直接車に携わる仕事したいなって思って。それで目指したのが整備士ってわけ」

旬は、奈津美の全く知らない顔で、奈津美の知らない、旬の本当の夢を話した。

「自動車整備士は、その方面のカリキュラムがある学校行ったら、ちゃんとその資格は取れるんだけど、大学はちよつと方法が違ってさ。専門学校だったら大体のところは書類審査と面接だけで試験はないし、最初は専門のつもりだったんだ。受験勉強とかしたくなかったし。でも、入試なくても、物理とか、数学の知識は後で必要になってくるから、理系に進んだの。文系クラスだったら、物理はなし、数学の範囲と進度も違うから」

こんなにちゃんとしたことを話す旬を見るのは、初めてかもしれない。

そしてこんなにちゃんとしたことが旬の頭の中にあっただなんて、信じられなかった。

「……で、大学は、さっきもいったけど、ミキの第一志望の大学に、工学部あるって知ってさ。色々調べたら、レベルで言えば俺でも行けそうだったし、受験科目も、学校でやって受けれそうだったし。せっかく理系に進んだんだから、受けてみるのも悪くないかなーって思っ。落ちたら専門に行けばいいし。……まあ、結局ダメだったんだけどさ」

そう言っ。旬は苦笑した。

「え……」

『大学全部落ちて、専門行くつもりだったけど、それもやめたんだと』

……やめた？ 専門学校に行くのを？

「旬……それでどうして専門学校行かなかったの？」

核心をついた質問に、奈津美の胸がジリジリと焦がされていくような感覚を覚えた。まるで導火線に火をつけられたような、そんな感覚が……

「んー？ だっ、さ……」

途中まで言いかけて、旬はもじもじとして言いよどむ。奈津美にはそれともどかしい。

「何？ 何なの？」

苛立ちもあっ、奈津美はつい声を荒げてしまう。

しかし旬はそれには何も思わなかったらしく、チラッと奈津美の方を見たが、また前を見る。

「だって……ナツの彼氏になるのに、専門行つてのんびり学生してるわけにもいかないじゃん」

「え……？」

「ナツはもう社会人で、ちゃんと自分でお金稼いでるだろ？　なのに俺は、バイトでちまちま稼いでる金しかなくて……全然対等じゃないじゃん。だから、俺は早くナツと同じ社会人になりたいくて、行くのやめたの」

奈津美は、目を丸くするしかなかった。

「……こんなの、すっげーかつこ悪いから言いたくなかったんだけどさ」

旬は苦笑しながら奈津美を見た。しかし、奈津美のひどく驚いた顔を見て、きょとんとした表情に変わる。

「ナツ？　どしたの？」

旬にそう聞かれて、奈津美ははっと我に返った。

「ううん……なんでもない」

奈津美は無理矢理笑顔を作って、旬に言った。

心の中に出来たしこりは、なくなるころはなかった。



### 37 選択

「――ツ……」

このままではいけないということは、ずっとこのままにいるのは無理だということは、ちゃんと分かっているつもりだった。

ただ……

「ナツ……」

ただ、目を逸らしていただけなのかもしれない。

「ナツ―？ おーい」

視界一杯に旬の顔が映った。

「え？ あ、はい！」

奈津美ははっと我に返って返事をした。

背筋を伸ばしてピシッと返事をした奈津美を見て、旬はきょとんとしている。

「ナツ、どしたの？ さっきからぼーっとして。何も食ってないじゃないん」

「え？ あ……」

奈津美は自分の手元を見る。自分の茶碗と箸を持ったままで、止

まっている。

「何か具合悪い？」

旬は心配そうな顔で奈津美を覗き込んでいる。

「ううん！ 何でもないよ」

奈津美は笑顔を作って、ご飯を箸で口に運んだ。

「そう？」

「うん。あ、旬、おかわりする？」

旬の空になった茶碗を見て、奈津美はすかさず言った。

「あ、うん」

「じゃあ、すぐ入れるね」

奈津美は自分の茶碗と箸を置いた。

「うん。ありがとう」

差し出された茶碗を受け取って、奈津美はすぐに台所へと行った。

旬の死角に入っすぐ、奈津美は小さくため息をついた。

ダメだ。旬と一緒になのに、いつも通りに振る舞えない。これだと、旬がおかしいと思うのも無理もないじゃないか。

しかし、いつも通りに振る舞わなくてはと思う反面、本当にそれでいいのかとも思う。

いつも通りに、今までと同じように、これからも……

奈津美は旬のご飯をよそって、すぐにリビングへ戻る。

「あ、ありがと、ナツ」

旬が笑顔で奈津美を見る。

「うん……」

つられて笑いながら、奈津美は旬に茶碗を渡し、自分の場所に座る。

旬は、夢中でパクパクとおかずを摘んでいる。

やっぱり、話すべきなのだろうか。奈津美は旬を見ながら悩む。

「……何？」

旬と目が合った。

「えっ……」

奈津美はピシッと固まってしまった。

「もー。俺のことが好きなのはわかってるから、ご飯中はちゃんとご飯食べようよお」

デレデレと鼻の下を伸ばしながら旬は言った。

「ちよっ……違うわよ！」

前にも似たようなやり取りをした気がする。

あの時も、奈津美が言いたいことを黙っていた時だったような……

旬には、無意識のうちに伝わっているのかもしれない。

そうだ。これをきっかけに旬とちゃんと話そう。

「ねえ、旬」

「ん？」

旬は里芋の煮っ転がしを箸で摘んだまま止まる。が、上手く摘めていなかったらしく、コロンとテーブルに転がった。

「あ」

旬はすぐに箸でおいかけ、箸で刺そうとする。が、それにもげられテーブルを滑る。

「あれ？」

旬はまた同じことを繰り返すが、里芋はつかまらずに箸から逃げる。

「もー」

旬は仕方なくといったように手で摘んで口に運んだ。

「……旬。行儀悪い」

見かねた奈津美は注意をする。

「へへっ」

しかし、いつものことなので旬はヘラヘラと笑っている。

奈津美はため息をつきながら、口元を緩めた。

もう。匂ってばしやうがないんだから。

……おかげで話すタイミングが分からなくなってしまった。何だか毒気を抜かれた漢字で、話すのをためらってしまった。

どうしよう……

「……で？」

「え？」

匂の切り返しに奈津美は虚を突かれた。

「ナツ、何か言おうとしてたじゃん」  
もぐもぐと口は動かしたまま匂は言う。

「えっ……あ……」

言うタイミングというか、その集中力を切らしてしまったせいで、なかなか本題を口に出せない。

「えっと……その、匂に、聞きたいことが……」

「聞きたいこと？」

匂は首を傾げる。当たり前だが、何も心当たりもないという顔をされて、尚更言いづらくなった。

「聞きたいことっていうか……その……」

奈津美は視線を下に向ける。

「ん？」

旬の箸がまた里芋に伸びるのが見えた。今度は、箸で摘まずに最初から指している。

それを見て気を紛らわせながら、奈津美は気持ちを落ち着けようとする。

せーの言おう。……せーの！

「あのね！」

心の中の掛け声と同時に奈津美は顔を上げた。

「うん？」

旬は頬一杯に里芋をほお張っている。

それを見た瞬間、また言えなかった。

「……その里芋、おいしい？」

苦し紛れに出た言葉が、それだった。

「へ？ うん。美味しいよ？ いつもと一緒」

旬にとっても予想外だったらしく、首をかしげながら答えていた。

「そう……」

「でも何で？」

旬が聞くのは尤もだが、奈津美は今度こそ本当に困った。

「えっと……あの、ね？ ……その里芋の煮っ転がし、五日前に作ったやつなの」

「えっ!？」

旬は眉間に皺を寄せて租借する口を止めた。

「その……いっぱい作りすぎちゃって……冷蔵庫に入れっぱなしになってたの忘れてたの」

「ええー……」

「あ、でもちゃんと温め直してるから！ 味に問題なかったら大丈夫よ」

我ながらひどい誤魔化し方だと奈津美は自分でも思っていた。

確かに、里芋を冷蔵庫にいれたまま忘れていたのはそうなのだが、鍋でちゃんと火にかけて温め直したし、味見もして大丈夫だと思うたから出したのだ。

「うーん……まあ、味は美味しいけど……あ、まさかそれで全然食ってなかったの？」

そういうわけではないが、これ以上何かを言うのも苦しかったので曖昧に笑った。多分、旬はそうだと思うだろう。

「ナツがそういうことするのって珍しいな」

そんなことを言いながらも、旬は里芋に箸を伸ばしていた。

……ごめん。わりとしょっちゅうやってたの。

心の中で言いながら、奈津美は何も言わずに笑顔を作っていた。

結局、本題に入ることはできなかった。

今夜は、旬がこの部屋に泊まる。

その間に、何とか話をしないとイケない。そうでないときつと奈津美はこの心の中でモヤモヤとしているものを拭い去ることはできない。

……と、分かっているのに、なかなか切り出せない。矛盾してはいるが、不安でしょうがないのだ。

話すことで明らかになる真実に、怯えているのかもしれない。

「旬、お風呂沸いたから先入っちゃって」

風呂場からリビングに戻って、奈津美は旬に声をかけた。

「んー」

テレビを見ながら旬は生返事をする。

「旬ー。聞してる？」

奈津美は旬の頭に手を置いて軽く揺さぶった。



「聞いてるよー」

顔だけを真上に上げて奈津美を見上げた。

「ナーツ」

旬が甘えた声を出して奈津美にひつついて、腰に手を回してくる。

「何？」

「一緒にはいろ？」

にんまりと笑いながら旬は言う。

予想通りだったので、奈津美はため息をついた。毎回毎回、何度同じことを言われたか。

「嫌よ。ほら、早く入って」

あっさりと断り、奈津美は旬を促す。

「入ろうよー。俺、ナツと入りたいー」

これもいつものことだが、旬はすぐには引き下がらない。

「もー。旬ってばちっちゃい子じゃないんだから一人で入ってよ」  
奈津美はため息をついてそう言った。

「一人で入れないんじゃないもん。一緒に入りたいだけだもん」  
むくれながら旬が言い返す。

これこそ本当に小さい子供のようだ。

「別に一緒に入らなくてもいいじゃない」

「やーだー。入りたいー。体洗いつことかしたいー」

今日はいつもより聞き分けがないというか、しつこい気がする。

旬はいつもこうやって、甘えてくる。それが旬の気質だからか、奈津美が年上で、つい甘えてしまうからなのかは分からない。

奈津美だって、そうやって甘えてこられるのは嫌いじゃない。自分だって、どちらかといえば甘えたいと思うのも本音だが、甘えられるのだっていいと思う。

相手が自分を必要としていると、相手にとって自分は必要なのだと思えるから。

ずっと、そう思っていた。旬は、自分がいないとダメなのだ。旬には奈津美が居ないと何もできないのだと。

そう思っていたせいで、気付けなかった。旬が本当はどう思って、考えているのか。それを知ろうともしていなかった。

「ナツ？」

何も反応を示さない奈津美を不思議に思って、旬は首を傾げた。

「旬。……話しておきたいことがあるの」

奈津美は旬の腕を解きながら言った。

「え……」

きょとんとしている旬を尻目に、奈津美はテレビの電源を切り、旬の正面に正座した。

「旬。……旬は、これからどうするつもりなの？」

真剣な眼差しで旬を見つめ、奈津美は言った。

「どう……って？」

旬は不思議そうに首を傾げるだけだ。

少し、切り口が唐突だったかもしれない。

「将来っていうか……これからのこと。これからもずっと、バイトで生活していくつもりなの？」

すると旬は目を見開いた。

「そんなわけないじゃん。ちゃんと仕事見つけて働くつもりだよ」

「仕事見つけるって、何か当てはあるの？」

「……当てって言われたら、ちょっと厳しいけど……でも、このままのつもりはないよ、絶対」

旬はまっすぐに奈津美を見つめ返した。

「旬がそのつもりでも、高卒で一年フリーターやってた旬が簡単に仕事見つけられるわけないでしょ」

少々きつい言い方だが、奈津美は思ったままを口にした。ずっとそう思っていたけれど、ずっといわないでいたことだ。

しかし、それも事実で、旬も分かっているようだ。何も言い返さずに、ただ口を噤んでいる。

「……どうしてこんな道選んだの？」

責めるような、こんな言い方はしたくなかった。しかし、口から出てしまうと、止まらない。

「整備士になりたいって夢、諦めたわけじゃないんでしょ？」

今日、初めて旬が車が好きだということを知って、整備士という夢を知って、そんな気がした。

車のことを話し、整備士という夢について語る旬は、今までに見たことのないくらい活き活きとして輝いていて……まだ心がそちらに残っているように思えたのだ。

「それは……」

旬は、口をひらいたものの、それ以上の言葉が出てこないらしく、視線を奈津美から逸らした。

その態度が、奈津美の言ったことを肯定したも同然だった。

「旬は……あたしのためだって言ったけど……そんなのちっとも嬉しくない」

奈津美の目には、涙が浮かんでいた。

「あたしのために旬の夢を犠牲にされたって、嬉しくないよ！」

声を荒げて言ったのと同時に、とうとう涙が零れ落ちてしまった。きっと無駄だろうが、奈津美は旬にそれを見られないように下を向いた。

旬は奈津美を見て、何も言えない。今、何を言っているのか、分からなかった。

「……お風呂、あたし先に入る」

奈津美はそう言って立ち上がり、逃げるように脱衣所に向かった。

### 38 責任

「あれ？ 奈津美、何か目、腫れてない？」

朝の挨拶の後にカオルが言ったのが、それだった。

「何？ 今度は何なの？」

まるで奈津美がどんなことで悩んでるか分かっているかのような口調でカオルは言う。

「……ちよつと。今度のはって、何」

まだほとんど口を開いていないのに話を促してくるカオルに奈津美は言い返した。

「だって、何もないのにそんな顔してる奈津美って見たことないし。実際なんかあったんでしょ？ それも旬君絡みで」

そうやって言われると、奈津美は言い返す言葉がない。『何か』があったのは本当だから。

奈津美は観念したようにため息をついた。

「何か……色々情けなくなっちゃって」

「情けないって、何が？」

「うん……色々……」

そう言いながら、奈津美は自分のロッカーを空けて荷物を置いた

はつきりと言わない奈津美に、カオルは首を傾げた。

「匂ってね。自動車整備士になりたかったんだって」

奈津美が言い、カオルはまだ話の論点が分からずに目をぱちくりさせる。

「へえ？ 匂君もやっぱり男の子っぽい夢あったんだ」

「うん……あたしも昨日、初めて知ったの。小さい頃から車が好きで……ああ見えて、高校で理系に進んで、本気で目指してたみたいなの。落ちた大学っていうのも、その方面のところで……落ちたら専門学校に行くつもりだったらしいの」

「え？ 元々働くって言ってたんじゃなかったの？」

前にカオルにも言っていたことなので、それはカオルも疑問に思ったようだ。

「うん……あたし、それも昨日知ったの。そもそも、匂が大学志望じゃなかったっていうのも」

昨日だった。匂の、大事なことを知ったのは。

きっと、奈津美は他にも匂のことで、知らないことはたくさんある。一年以上付き合っているといっても、奈津美は匂が生きてきた十九年を知っているわけではない。

知っているわけではないけれど……どうして知ろうとしなかったのだろう。

「……あたしが、旬のことをダメにしてたのかもしれない」  
思ったことを、そのまま口にした。

「あたしのことさえなかったら、旬は今頃、専門学校に行つて、ちやんと自分の夢に向かつてたと思う。……せめて、あたしがもっと早く気付いてあげられてたら、こんなに長い間、旬に我慢させてなかったのに」

本当に、情けなかった。旬のことを分かったつもりで、全く分かっていなかった。

分かっているにくせに、旬の人となりを決め付けて、自分がいないと何もできないのだと自惚れて、甘やかしていたかもしれない。

あたしは、一体旬の何を見て、何を知っていたのだろう。

それを考えると、恥ずかしくてたまらなかった。

そのまま午前中は仕事をこなし、昼休みにはカオルと社員食堂に向かった。

「……ねえ、奈津美。旬君のことってさあ、旬君が自分で決めたことでしょ？ 別に奈津美が責任感じてなくてもいいんじゃないの？」  
食券を買う列に並びながら、カオルが奈津美に話しかけた。

「うん……」

奈津美が頷いたところで、奈津美に食券を買う順番が回ってきた。



五百円玉を入れて、Aランチのボタンを押し、出てきた食券を取った。

「確かに旬が決めたことだけど……それでも旬は未練があるみたいだから……そんなの、いいわけないじゃない。もし旬がよくても、あたしが嫌なの」

列から外れ、次に食券を買うカオルに答えた。

「……なるほどね」

カオルは千円札を入れて、日替わりランチのボタンを押す。出てきた食券とお釣りを取って、列を外れた。

「確かに奈津美の言うことも尤もね。いくら自分のためでも、そんな一生を左右するかもしれないことを簡単に変えられたらね」

奈津美は、カオルの反応に驚いて目を丸くした。

「何？」

「……ううん。カオルには否定されるんじゃないかと思ってたから……旬のことも考えてあげたらとか、言われるのかと……」

重ねてあるトレイと箸を取りながら奈津美は言った。

いつも、こんな風に奈津美が旬ともめたようなことを愚痴ったりすると、比較的奈津美が悪いと言われることが多い。（実際そうなのだが）

今回も、そんな感じでまたカオルにお叱りを受けるつもりでいたので、奈津美はなんとなく拍子抜けしてしまったのだ。

「まあ、あたしがもうちょっと若かったらそういう風に思うかもね。でも、奈津美と同じ立場だったらって考えたら、さすがにちよつとね……責任感じちゃうかなって思うの」

### 『責任』

その言葉を聞いて、奈津美はこの感情の一部の理由に気付いた気がした。

あの後味の悪いような、ジリジリと焦がされているような感覚は、責任を感じたからだったのか。……いや、責任というよりは、罪悪感に近いかもしれない。

もしも、旬が奈津美に出会っていなかったら、きっと旬は自分の夢を投げ出さずにいたはずだ。

奈津美の存在が、旬の夢の邪魔をした。

もしも、奈津美と旬が出会っていなければ……

「奈津美」

カオルに呼ばれて、奈津美は我に返る。

「え？ 何？」

「もう乗ってるから」

カオルに目で奈津美の手元を示され、奈津美は自分の手元を見る。

トレイの上には、Aランチの一式が全て乗っていた。奈津美が止まっているせいで、受け取り口の列が滞っていた。

「あつ。ごめんなさい」

恐縮しながら、奈津美は慌てて列を外れた。

後から続いたカオルと空いた席を見つけ、向かい合って座った。

「……でもさあ。ちよつと羨ましいとは思うな」

箸を取りながら、カオルが言った。

「え？」

「自分の夢を投げ出してまで、自分のことを想ってくれてるのって、なかなかないと思うよ。そんなことが出来る人も、そんな人に想われることも」

カオルは、いただきます、と言って、ランチに手をつけた。

確かに、そうだと思う。

普通、そこまでできるほど相手のことを想うことなんてない。そして、そんな人が少ないから、そういう相手にめぐり会うことなんて簡単ではない。

だからこそ、奈津美には分かるのだ。旬がどれぐらい自分を想ってくれているのか。今まで出逢った誰よりも、自分を想ってくれているのか。

「……まあ、これもあくまで理想論だけどね。現実を見ると、そう  
そういなくて当たり前っていうか」

カオルがふうっとため息つきながら言った。

「……ねえ、カオル」

「ん？」

「カオルに言ったことあったっけ？ あたし、元々この会社が第一  
希望じゃなかったって話」

話が話なので、声を少し押さえて奈津美は言った。

「ああ、うん。聞いたよ。英語が使えるようなところって言ってたんだっけ」

「うん……」

小さく頷くと、奈津美はしばし、目を閉じた。そして目を開くと同時に、言葉を紡ぐ。

「あたしね、昔から、英語が得意だったから、英語関係の仕事し  
たくなって思ってたの。これっていう、具体的な職業はなかったけど  
……別に通訳とか、翻訳家だとか、そういう英語を主に使うような  
仕事じゃなくても、ホテルだとか、こういう会社でも、受付だとか、  
英語が役にたつような仕事があったの」

結局、その希望は叶わず、今この会社で働いている。……と、言  
ってしまったらこの会社に申し訳ないが。

「あたし、昔から中途半端だったの。具体的な夢とか目標があった

わけじゃなくて、ただ、英語が得意だったから、英語関係の仕事に就きたいって思っただけで……進学だって、推薦で安全牌のところ選んじやって。それも短大だったから、就職の時、四年制の学校に行ってた人に比べたら不利だったし……」

奈津美は、旬の夢を聞いて、初めてそのことに気がついた。

「旬は、あたしなんかとは違うの。ちゃんと、具体的な夢があって、それに向かってちゃんと進もうとした。……でも、あたしがそれを止めた。あたしが旬の夢を邪魔したの」

旬は、奈津美よりもしつかりと目標を持っていたのに。奈津美なんかよりも、ちゃんとした夢があったのに……

それを奪ったのは、奈津美であるということに変わらない。

「奈津美の気持ちは、やっぱり分からなくもないけど……それでも、決めたのは旬君でしょ？ 奈津美は何も知らなかったわけなんだし……仕方ないじゃない」

さっきと同じように、奈津美に非はないということのをカオルは言ってくれる。

「……何も知らなかったから……だからこそなの」  
呟くように奈津美は言った。

「え？」

「あたし……旬のこと、何もできなくて、何もない奴なんだって、勝手に思ってた。でも、全然そんなことなかった」

フリーターという不安定な立場で、一人暮らしでも実際、奈津美がいないと自活は無理なのではないかというくらいひどい。

だから、勝手に何も出来ないと決めつけていた。

でも、そんなことはなかった。

むしろ、芯の部分は奈津美よりもしっかりとしていたのではないだろうか。

「あたしは……多分、旬のこと、ずっと見下してたんだ。旬には、誰かが……あたしがいないとダメなんだって、自惚れてて……ホント情けない」

奈津美は膝の上で両手を握りしめ、下を向いた。

旬は、いつも奈津美のことを思ってくれていて、奈津美に与えてくれたものはたくさんあるのに……そんな旬のことを縛りつけて、殺し続けていたのは、他ならない自分だったのではないのか……

そうやって考えれば考えるほど、悪い考えにいく。今更気付いたって、遅いのにな。

「……それで、奈津美はどうしたいの？」

「え？」

カオルの声に奈津美は顔を上げた。

「奈津美が後悔したって、時間は戻るわけじゃないし。責任感じる

んなら、考えてあげないと。旬君のこれからのこと」

カオルは持っていた箸を置いて、真剣に奈津美のことを見てくれていた。

「奈津美が考えてあげないと、誰が考えるの？」

その言葉に、奈津美ははっとした。

そうだ。ここで奈津美が悩んだって、旬のためになることなんて、一つもない。ただ、自分の考えを旬に押し付けてるだけではないか。

今、考えなければならぬのは、旬のこれから、旬とのこれからだ。

「そうよね……あたしの責任だもん。あたしがちゃんとしないと。あたしがちゃんと向かい合わないといけないのよね」

今までだって、ちゃんと向かい合っていなかった。だから、今度こそ向かい合わなければならぬ。

「うん」

カオルが微笑みながら頷いた。

「あ、そろそろ食べないと。昼休み終わっちゃう」

「えっ、ウソ、ごめん！」

話しこんでいて、いつの間にか昼休みも残り十分になっていた。二人は急いで箸を手にとって、食事を始めた。

「……でもさ、奈津美」

食べながら、カオルが口を開いた。

「なに？」

味噌汁椀を口元に持っていていきながら奈津美は答える。

「旬君は旬君で、ちゃんと考えてると思うよ。見えないところで、色々やってんのかも」

その言葉を聞きながら味噌汁に口をつけていた奈津美の動きが止まった。

「……何でそう思うの？」

ごくりと一口飲んでから、奈津美は聞いた。

「何となく」

「……へ？」

さらにといわれてしまって、奈津美は拍子抜けしてしまった。

「何となくって……カオルの勘？」

「うん。あ、でも、何の根拠もなくってわけじゃないわよ？ 前に、あたしと奈津美と旬君で居酒屋に行ったことあったじゃない？ その時に、ちらっと聞いたのよ。ほら、前に奈津美が旬君との結婚がどうのこうのって言ってた時期」

「ああ、うん」

元同僚の結婚で、旬の口から出る『結婚』という言葉に過敏にな



って、旬との将来について不安になった時。確か、三人で飲みに行ったのはその辺りの時だったか。

「そう言えば、あたしがトイレに行ってる間に旬と話してたわよね。それって、そのことだったの？」

「うん。奈津美には悪いと思ったけど、あたし、気になって聞いたのよね。いつぐらいに奈津美と結婚したいと思ってるの？ って。そしたら、今すぐにでもしたいって。でも、今は無理だって。ちゃんと仕事してるわけじゃないからって。旬君、そう言った」

「え……」

奈津美は目を丸くした。

旬が、そんなことを？ いつも、あんなに暢気に、今のこしか考えていなさそうな、あの旬が？

「奈津美はさ、旬君のこと、年下だからとか、フリーターだからとか、そういう風に言うけどさ。多分、そういうことを一番気にしてるのって、旬君の方だと思うよ。旬君は、一生懸命奈津美に釣り合うようにって、考えてるみたいだから」

その言葉を聞いて、奈津美の胸が痛んだ。

そうやって言われてみたら……なんてひどいことをしてしまっていたのだろう。

年の差だとか、社会的な立場だとか、奈津美が気にするように、旬だって気にしないわけがない。

それどころか、気にして、負い目を感じるのは旬の方ではないのか。

今までずっと、合わせてくれたのは旬の方で、奈津美は何も旬に合わせようという考えはなかった。

「あたしって……ホント最悪」

また新たに自分の怠慢さに気付いてしまった。

言われないと気付けないなんて、子供じゃないのに。

「ねえ」

「ん？」

「旬は、本当は、あたしに見えないところで色んなことしてたってことなのかな？」

「んー。だと思うよ。具体的にどうしてるっていうのは言ってなかったし、あたしも深くは聞かなかったけど」

「そっか……」

旬は、感情の起伏だとか、自分の欲望（主に食欲と性欲）には忠実に分かりやすいのに、どうして肝心なところは見せてくれないのだろうか。奈津美は、そこが一番知りたいのに……

「ていうか、それは奈津美が旬君に直接聞かないといけないことでしょ。旬君は旬君で理由があつてのことだったんだろうし」

「うん……」

今まで、きちんと正面から向き合おうとしなかったから、一番大事なところでこんなことになった。だから、これからは、ちゃんと向き合わないといけない。

「……なんかすごい気が重くなってきた」

奈津美は大きくため息をついた。

「そんなこと言わない。奈津美達にとって重大なことですよ」

「それは分かってるけど……」

分かっているけれど、そう簡単に気持ちを切り替えることもできない。

でも……話すなら早い方がいい。

奈津美は小さく息をつき、密かに気合を入れた。

### 39 未来への道

『今日会える？ 話したいことがあるの』

奈津美は、昼休み終了間際に、旬にそうメールを送った。

『善は急げ』でもないが、奈津美の性格上、先延ばしにしたら何も言えなくなるのは分かっている。

昨日のことをメールでも一言謝るべきかとも思ったが、今はまだしないでおいた。謝るのなら、直接の方がいい。

しかし、旬からのメールは返ってこなかった。

午後六時になって、奈津美はとくに部屋に帰ってきている。うんともすんとも言わない携帯を見て、奈津美はため息をついた。

今って、バイト中なんだっけ。

そうやって考えるが、旬がなんて言っていたのか覚えていない。というか、昨夜と今朝と、気まずくてほとんど会話していない。

少なくとも、バイトに行くとは言っていたと思うが……何時から何時までというのは分からない。

それにしても、何の反応もないのは、いつもの旬からしてもおかしかった。

朝から夕方までカフェでバイトということはしょっちゅうやっていることだが、その間に休憩が挟んでいるはずだ。

メールをした一時からこの時間まで、匂が全く携帯を触っていないなんて考えられない。

でも、また充電がきれかけで電源を切っているのかもしれないし。まだ分からないよね？

喉元まで不安がせりあがってくるのを、必死に押さえながら奈津美は形態を片手にじっと待っていた。

ここで奈津美が変にかんぐったりしたら、また話がややこしくなるだけだ。

いや、でも、昨日の今日で、さすがに今回は匂の方が愛想をつかせたか……

いやいや、匂に限って、愛想をつかせたから無視するなんて、子供っぽいことなんてしない。そりゃあ、それ以外は子供っぽいところはたくさんあるけれど。

もし愛想をつかせたとしても、匂だったらちゃんと区切りをつけるはず……

そこまで考えが及んで、奈津美はローテーブルに突っ伏した。

せっかく避けていたのに、結局嫌な考えの方に辿り着いてしまった。

深くため息をつきながら奈津美は体を起こす。

……とりあえず、晩御飯つくろう。このまま待っててもしょうがないし。

携帯をローテーブルに置き、奈津美は腰を浮かせた。

その瞬間、携帯が振動を始めた。

奈津美は慌てて携帯に飛びついた。画面を見て見ると、旬からのメールだ。

待ちに待っていたので、奈津美はためらいもせずにメールを開いた。

『遅くなってごめん！』

今からでいいなら会えるよ。

つか、俺もナツに話したいことあるんだ。

ナツはもう家にいるの？』

旬からのメールを見た瞬間、奈津美は首を傾げた。

……話したいこと？

旬からそう返ってくるなんて、予想していなかった。

『話したいことって？』

思わずメールに打ち込んでしまったが、すぐに消した。

何だか聞くのが怖い。

メールでそういつてくるということは、メールではできない話なのだろう。それに、電話もしてこないということは、本当に直接話すべきことなのだろう。

何を言われるの？

予想もつかずに、奈津美は不安になった。

あ……でも……

昨夜、奈津美が一方的にまくし立てただけで、旬は何も言わなかった。今日の朝も、ろくに話をしていない。

今、旬が何をいうか分からないのは、奈津美が旬のことを分かっていないからだ。

だから、ちゃんと聞かなくてはならない。もう、似たようなことを繰り返さないために。

『うん。家にいるよ。』

旬は今どこにいるの？』

返信したら、すぐに返ってきた。

『俺、今バイト先出て外にいるよ。』

今からナツんち行くよ。

二十分ぐらいで着けると思うから』

『わかった。待ってるね』

メールのやり取りを終え、奈津美は開いたままの携帯を握りしめた。

旬の話って、何だろう。

いくら考えても想像がつかないのが分かっていても、考えてしま  
う。

……悪いこと、じゃないよね？

いや、たとえよくないことでも、旬が言うことならちゃんと受け  
止めよう。そして、ちゃんとこれからのことを話し合おう。

決心した奈津美は、携帯を閉じてローテーブルに置き、食事の支  
度をするために台所に行った。

……こんなもんだけど、大丈夫かな？

食事の支度は、すぐに済んでしまった。というのは、旬のメール  
の返信のことばかり気にして買い物に行くのを忘れていた。そして、  
今日も旬が来る予定もなかったため、あまり十分な食材もなかった。  
有り合わせ、というか、ほぼ残り物で完成したおらずに、奈津美は  
ため息をついた。

昨日も残り物出したばかりなのに。というか、昨日とほぼ同じ  
になってしまった。



まあ、今日は仕方ないか。旬も気にしないだろうし。そろそろ旬がくるから今から買い物に行くわけにもいかないし。

奈津美は時計を見た。旬からメールが来てから、二十分が過ぎた。もう来る。いよいよ来る。

そのことを意識すると、奈津美の胸の鼓動も早くなる。

先のことから分らないって、こんなに不安なことだったんだ。

今までだって、そういう状況だったことに変わりはないけど……  
考えない方が、幸せではあったけれど……

それでも幸せなのは、今だけでしかない。これからも一緒に居たいなら、不安なこととも向き合っていけないといけない。

ピンポーン

インターホンが鳴った。旬が、来た。

奈津美は意を決して玄関に向かう。

玄関のドアに近づけば近づくほど、鼓動が早く、大きくなる。

ドアの前に立ち、深呼吸をしてから、ドアを開けた。

「あ……ナツ」

ドアの向こうに居た旬が、ニコツと笑った。心なしか、いつもよりぎこちない気がした。

「いらっしやい」

奈津美も笑ってみようとしたが、笑い方が分からなかった。きっと、旬以上にぎこちない表情になっているはずだ。

「あ、上がって」

「うん。お邪魔します」

中に促す奈津美と、それに従って中に入る旬。何十回もやったやりとりであるはずなのに、今までにないくらい重苦しくぎこちない雰囲気だった。

旬は靴を脱ぐ時も、部屋に上がってリビングに行く時も、何も言わない。その沈黙が奈津美は怖い。

旬も話があると言ったけれど、もしかしたらかなり重い話なのだろうか。

「……旬っ。ご飯食べた？」

この雰囲気には耐えられずに奈津美の方が先に口を開いた。

「あ、ううん。まだ」

「そう。じゃあちょっと待っててね。後少しでご飯炊けるから」  
自分の声が必要以上に明るくなっているのが分かる。この場には

そぐわず、空回りしているような気がする。

「そっか。ありがと。……じゃあさ、ナツ」

軽く微笑んだ後、旬の顔が真剣なものに変わった。

「先に、話。していい？」

真っ直ぐに奈津美を見ながら旬は言った。

その旬の表情に、奈津美の体は強張ってしまった。

ついにきた。この時が。

衝動的に、逃げ出したいという気持ちも湧き上がってしまった。

だけど、そんなわけにはいかない。ちゃんと向き合わなければ。

「うん」

奈津美は覚悟したように頷いた。

ローテーブルのいつもの場所に、二人はそれぞれ腰を下ろした。

しかし、旬は暫くの間何も言わなかった。二人の間には、妙な沈黙の時間が流れる。

旬は何を話すのだろうか。静かな空間が奈津美の心を不安にさせる。

この場を誤魔化そうと、何度も言葉を発しようとしてしまう。それでも、旬からの言葉をじっと待った。

「……何から言ったらいいのか分かんないんだけどさ」

ようやく旬が口を開いた。

「……うん」

奈津美は自分でも驚くほど冷静に頷いていた。

「俺……カフェのバイト辞めた」

「……えっ」

奈津美は目を見開いた。

何をいうか分からなくても、予測すらできないことだった。

「何で！？ 何でいきなり……」

奈津美は狼狽しながら旬に聞いた。

理由が全く分からない。

カフェのバイトは、旬の生活費の半分以上となる主な財源だった。高校の時からしていたらしく、もう二年ほど働いていて、仕事ぶりだっけしっけりしていたはずなのに……

「あ、辞めたっていても、正確に言ったら今月いっぱいまでってことなんだけどな。シフトとかもう組んであるし。今日、店長に話してきたところだから」

「そうじゃなくて……何で辞めることにしたの!？」  
なかなか聞きたいことを言ってくれない旬がもどかしく、奈津美

はローテーブルに手について体を乗り出そうとした。

そこでふと気付いた。

「もしかして……またあたしのせい？　昨日、あたしが旬に色々言ったから……」

もしそうだったとしたら、自分はまた何をしてしまったのだろうか。いつもいつも、旬の人生をダメにするようなことばかりして……

「違うよ」

下を向いた奈津美に旬が言った。

「え？」

奈津美が顔を上げると、旬は真剣な顔で奈津美を見ていた。

「ナツが言ったのは関係ないよ。そりゃあ、ナツが影響してたところは大きいけど……でも、それは俺が全部決めたことだから」

旬の目はあまりにも真っ直ぐで、奈津美は何も言い返せなかった。旬は、奈津美に微笑んで、続けた。

「カフェのバイト辞めたっていうのは、昼間のバイト先を変えたってことなんだ。カフェを辞めて、新しいところでバイトすることになったから」

旬の言葉に、奈津美は僅かに目を見開く。

「新しいところ……？」

「うん」

旬は晴れやかな顔で頷いた。

「どこで……何の？」

奈津美が尋ねると、旬は少し照れたようにはにかんで、それでもやっぱり目を輝かせて、言った。

「車の、整備工場。そこで、雇ってくれることになったから」

「え……」

言葉が、出なかった。

車の、整備工場？ バイトで？ ……どういうこと？

奈津美の頭の中は、新しく、耳慣れない情報が一杯で渦を巻いている。

言いたいことも、聞きたいことも一杯なのに、何も言えなかった。

「ごめんな。いきなりこんな話して、わからねえよな。んーと……何からどう話せば分かるだろ……」

奈津美の様子を見て察したのか、旬は申し訳なさそうに言う。旬自身も、整理がついていないらしい。

「……旬。整備工場でバイトって、どういうこと？ 整備工場っていつても、旬は……」

旬は、高卒で、専門学校すら行っておらず、整備士ではないのに……

奈津美はそれについて、やっとの思いで尋ねた。

「あ、うん。それから話そっか」

旬は思いついたように言い、奈津美に分かりやすいように、ゆっくりと離す、

「自動車整備士っていうのはさ、別に、絶対に専門学校とか、その方面の大学とか短大に行かないといけないわけじゃないんだ。整備士になるのに、まずは受験資格っていうのが必要で……それを取るために、学校行くなって感じなんだけど、学校行かなくても、受験資格を手に入れる方法っていうのがいくつかあって、それが実務経験っていうので……」

「実務……？」

またもや耳慣れない言葉に、奈津美は首を傾げる。

「そう。実際に車の整備に関わる現場で働いたらいいんだ。バイトでもなんでも。あ、もちろん、そういうのをちゃんとしてるところでだけど。……で、そこで、決められた期間働いて受験資格もらって……受験して受かったら整備士になれるってわけ」

旬はきつとかなり分かりやすく省略して言ってくれている。しかし、専門外の話に奈津美はついていくのに精一杯だ。

しかし、話を聞いていて、ふと気付いた。

「旬……それじゃあ……整備工場でバイトするってことは……」

奈津美が言い切る前に、匂は大きく頷いた。とても晴れやかで、すっきりとした笑顔で……

「俺、もう一度ちゃんと目指すことにした。整備士になること……」

奈津美の目が、更に大きく見開かれた。

「ホントのこと言うとき。また目指そうって決めたのは、少し前……二ヶ月ぐらい前からなんだけどさ」

「え……？」

二ヶ月前……？

奈津美はここ二ヶ月の記憶を呼び起こす。この二ヶ月の間に、匂に変化があっただろうか。

必死に考えてみるが、奈津美の記憶の中には、いつものように、暢気にヘラヘラと笑っている匂のことだけで、分からない。

「俺、こう見えても、今までずっと仕事探しててさ。でも、いまいちピンとくる仕事ないし、でも高卒で出来る仕事って限られてくるし……どうしようかなって思ってた……そんな時に、カオルさんに言われてさ。ほら、前に三人で居酒屋行った時」

「あ、うん……」

そういえば、カオルも今日、その時のことを言っていた。その時に、匂にとっても何かあったのか。



「カオルさんがさ……『奈津美は甲斐性とか……そんなの求めてないと思うよ。旬君が奈津美のために頑張ってくれてるんなら』って、そう言ってたから……だから、見栄ばっかはらないで頑張ろうって、改めて思っ。ナツに見合うような仕事じゃなくても、俺がしたいことでもいいんじゃないかって思っ……」

カオルがそんなことを？

昼は旬の言ったことに驚いて、今はカオルの言ったことに驚いている。

「俺、そのことあってから、もう一度整備士目指そうと思って、学校とか、資格の取得方法とか、もう一度調べ直してたんだ。そして、実務をかねて働きながら目指すっていう方法があるのに気付いてさ」

旬はそこまで言っ。苦笑した。

「よく考えたら、俺、本当バカだよなあ。専門行くのやめた時にさっさと気付いたらよかった。同じバイトだったら、こっちの方が資格取れるし、後々ちゃんと就職できたかもしれないのに……変に意地張り過ぎた」

旬の話を聞きながら、奈津美の目には涙が溜まっていた。

「え……ナツ？」

名前を呼ばれたのと同時に、堰を切ったように、涙が溢れ出した。

「え！？　どうしたの！？」

旬が慌てて奈津美の隣に寄る。

「ナツ、どうした？ 何でいきなり泣くの？」

おろおろしながら旬は奈津美の頭に触れる。

奈津美の涙は止まらない。奈津美は泣き顔をみられまいと下を向いた。

「ナツ……？」

「……んで」

「え？」

「なんで……」

うまく声が出ない。言いたいことはたくさんあるのに……

奈津美はぐっと手を握りしめた。

「……なんでっ……あたしに何も言ってくれなかったのっ？」

無理矢理声を出したら、まるでヒステリックに叫ぶようになってしまった。

旬は目をまるくして、奈津美を見ている。

「あたしじゃ……何も出来ないし、言えないかもしれないけど……しゅっ……旬が悩んだり、頑張ってるんだら……話きいたり、ちゃ

んと応援したかったっ」

旬が悪いように言ってしまったけれど、本当は情けなかったただけだ。

一番旬の身近にいたのは自分のはずなのに、旬の変化に気付けなかった。気付こうとしなかった。

旬の変化のきっかけとなったのも、奈津美ではなく、カオルの言葉だった。

奈津美は、何も知らず、何も言えず、ずっと旬を見下していただけだ。

「あたし……旬に嫌なことばかり……」

昨日のこともだし、今までのことも……

「ごめん……ごめんね……」

今更謝ったって、どうにもならないことだ。

それでも、他に言葉が浮かばない。

「ナツ……」

旬の手が、そっと奈津美の頭を撫でた。

「ナツ、ごめんな」

旬は奈津美の頭を、優しく自分の胸へと押し付ける。

「ナツに何も言わなかったのは……ナツに言ってもどうしようもないとか、そんな風に思ったんじゃないかって……俺が、ナツにかっこ悪いところ見せたくなかったんだよ」

旬の話し方は、落ち着いている。しかし、旬の胸から伝わってくる振動は、とても力強くて、速かった。

「俺……ナツより年下だし、ナツがいないとともに生活できないから……その上で、ちゃんとした仕事してないとか情けなくて……自分の仕事くらい、自分だけの力で見つけたかったんだ。そしたら、ナツも見直してくれるかなって」

情けないなんて、そんな風に思っているながら、旬は何であんな風に、いつも笑っていられたのだろう。奈津美の前ではいつも笑顔で、何も考えてないように振る舞えたのだろう。

旬にそうさせていたのは、紛れもなく奈津美に対する劣等感なのに。

「でも、それがナツを悩ませてたんだよな。ごめんな……」

どうして、謝れるの？

旬に対して何も、むしろ、邪魔になるようなことしかしていないのに……

「謝らないで……」

奈津美は震える声で小さく言った。

「え？」

旬は胸元の奈津美を見た。

「謝らないで……旬に謝られたら……あたし、どうしたらいいのか分からなくなる」

旬に謝られたら、こっちは謝るところじゃすまない。旬の何倍謝ったって、足りない。

旬は奈津美の頭を見て、上を見上げて考えた。

「んーと……じゃあ……ありがとう」

「……え？」

奈津美が顔を上げたら、旬は奈津美のことを見下ろして、笑っていた。

「俺がナツに何も言わなかったのは、ナツは、俺のそばにいただけで十分だったからだよ。俺、ずっとナツのためにとって思ってた。きただけだ。何でもできるような気がするんだ。ナツがいるって思うだけで」

旬はそつと奈津美の濡れた頬を撫でた。

「ナツが居なかったら、俺は頑張ろうって思えなかった。今だってそうだよ？俺はこれから、絶対に頑張れる。ナツがいるから、頑張れる」

旬の額を奈津美の額にあてて、旬は目を瞑る。とっても、穏やか

な顔で……

「だから、ありがとう」

……困るのに。……そうやって礼を言われたって、困るのに。

「あ、そういえば、俺、一方的に話しちゃったけど、ナツの話ってなんだったの？」

旬は思い出したように言い、額を離して首を傾げる。

そういえば、奈津美も旬に言おうとしていたのだ。旬の未来に対する、奈津美の気持ちを……

でも、それはもう……

「そんなの……忘れちゃったわよっ」

強く言い放ち、奈津美の目からはまた大粒の涙が零れた。

「え……ええっ!？」

目を丸くしながら、おろおろしている。

本当は、言いたかったことがある。

旬が、もし今からでも、学校に行き直したり、ちゃんとやりたいことがあるのなら、それに向かって進めばいいと。

奈津美のことは気にしなくていいから、自分のことだけ考えてほしいと。

もし、匂が進みたい道ならば、進んでほしいから。もしも、奈津美が邪魔ならば、いなくなったっていい。そんなこと、本当は身が裂けるほど辛いけど、それで匂の背中を押すことになるのなら、奈津美はどんなことでもする。

そのつもりだったのに……匂は、奈津美が何かを言う前に、もう自分一人で進んでいる。

それはそれで十分だし、うれしいのに。

「もう……何で……何で匂はあたしがどうしたらいいか分かんなくなることばかりするのよっ」

そんなつもりはないのに、思わず強く言ってしまう。

ただのやつあたりなのに。

匂に何もできなかったことが、これからも何もできないことがないことが悔しいだけなのに……

「……じゃあ、ナツは待ってて」

匂が落ち着いた声で言った。

「……え？」

匂の顔を見ると、匂は一際真剣な顔をして奈津美を見つめていた。

「ナツは、何もしなくていいから。待ってて。……つうか、待って欲しいんだ」

そう言いながら、匂は膝の上で硬く握られた奈津美の手に、自分の手を重ねた。

「俺……やっとスタートラインに立てたっていうか……スタートライン見つけたってところだから……一人前になるまで、まだまだ、何年も時間がかかると思う。だから……」

奈津美の手に重なった旬の手に力が込められた。

「だから、それまで待ってほしい。できるだけ早く、一日でも早く、一人前の男になって、ナツの側にいられるようになるから」

奈津美は唇を噛み締めて頷いた。

「うん……」

泣いてはいけない。旬の門出なのだから、旬が待っていてくれと言っているのだから、ここで泣いてはいけない。

それなのに、涙が止まらない。

嬉しいからなのか、寂しいからなのか、分からないけれど、ひどく涙が溢れて、止まらなかった。

「旬っ……」

奈津美は、旬に抱きついた。

「あたし……待ってるから……」

旬の首に腕を回して、強く抱き締めて奈津美は言った。

「旬が、夢かなえるの待ってるから……あたしは、いくらでも待てるから……だから……」



こんなことしか言えないけれど。言葉にすると、安っぽいけれど……

「頑張って」

本当は、もっと、この言葉以上の気持ちがあるのに、形にできない。

こんなので、伝わるだろうか……

「……うん」

匂も、奈津美の体を抱き締め返した。

「ナツにそうやって言われたら、俺、百人力。なーんも怖いものない」

奈津美の頭に頬を寄せて、奈津美の耳に唇を近づけて、囁いた。

「ありがと。ナツ」

奈津美は何も言えなかった。

言いたいことも、伝えたいことも、たくさんあるはずなのに、胸につつかえて出てこない。

それでも、何か一つだけでも、ほんの少しだけでも伝わって欲しいと、奈津美は匂を力いっぱい抱き締めた。

これから、やっと前に進める。匂との、未来への道を。

奈津美には、待つしかできないけれど、今までだって、ずっと待っていたのだ。

ここまできたら、きっと、これからも待てる。それに、旬に言われたら、待たないわけにはいかない。

「……なあ、ナツ？」

旬が奈津美の様子を窺うように声をかける。

「何？」

「……あのさ……こんな時に言うのはなんだけど」

奈津美はそっと腕の力を緩めて体を離し、旬の顔を見る。

「その……今日は、してもいい、かな？　って……」

「え……？」

何のことか分からず、奈津美は首を傾げる。

「昨日は……しなかったじゃん？　まあ、俺が悪かったんだけど」

それを聞いて、昨日のことを思い出す。そして、旬が言っている意味がすぐに分かって赤くなる。

「ちよっ……もう！　なんでこういう時にそんなこと言うのよ！」

少し前までは、旬に感動すらしていたのに。それが旬の言葉で台

無しだ。

「いや、だって……俺にとってはめっちゃ大事なことだし……」  
旬は口の中でもごもごと呟く。

奈津美は哑然としている。

大事って……そりゃあ、恋人同士としては大事なこともかもしれないけど……

普通、この話の流れでする？

「もう……信じられない」

奈津美はため息をついて旬の肩に額を当てた。

「ナツ？ ……ダメ？」

それでも心配そうに旬が尋ねる。

「……もう好きにしたら？」

投げやりな言い方で奈津美は返す。

「よかったー。ナツー」

旬は本当に嬉しそうに言い、奈津美のことを抱き締めた。

いくら旬が未来に向けて歩き出しても、こういうところは全く変わらない。

奈津美は、ほんの少し呆れたけれど、本当はそれがとても嬉しかった。

この先、どんなことがあっても、きっと、旬は旬のままだから……

予想もできない不安はあるけれど、旬と二人なら、大丈夫。

奈津美は、旬に見えないところで微笑みながら、旬のことを抱き締め返した。

### 39 未来への道（後書き）

お知らせです！

ただいまブログで、ダメ男番外編（別サイトにて掲載中）のネタについてアンケートをしています。

よろしかったらご協力下さい☆

## 40 モーニングコール

八月の三十一日。

明日から九月になる。

そして、明日から、旬の自動車整備工場でのバイトが始まる。

「あー。いよいよ明日なんだよなあ」

電話の向こうで、旬が興奮した様子で言う。

「今日、寝れるかなあ……つか、明日起きれるかなあ」  
心配そうに言う旬に、奈津美は思わず笑ってしまう。

「旬、遠足前の小学生みたい」

次の日が気になってしまうのも、起きれるか心配になるのも、まるでそれだった。

「だってさあ……俺、マジで不安なんだけど。今までずっとその日によって違う時間に起きてたのに、毎日朝早く同じ時間に起きないといけないんだよ?」

「あー……そっか」

旬は、これまでずっと、毎日違う時間に起きていたのだ。

朝は、早くても八時半ぐらいに起きていたし、居酒屋しかない時や休みの日は昼過ぎまで寝ていたり、その周期も定期的ではなく、まちまちだ。

整備工場でのバイトは、朝から夕方のシフトで、平日の五日間に同じ時間に入るようになるらしい。

「旬、仕事は何時からなの？」

「九時から。だけど、八時半すぎには向こうに着くくらいに来てくれて。んで、うちから向こうまで三十分くらいかかるから、八時には出ないといけない感じになるなあ」

「そう……それじゃあ、七時半くらいに起きないとね」

「だよなあ……起きれるかなー。自分一人で七時台に起きるのって、めっちゃくちゃ久々な気がする」

自分でいいながら、旬はどんどん不安そうになっている。

確かに、滅多に早く起きることがないのに、いきなり一時間も早く起きるのは、慣れるまでが大変だろう。

「ねえ、旬」

「ん？」

「あたしが朝、電話してあげようか」

「えっ……いいの？」

奈津美の提案を聞くと、旬は驚いた声を出す。

「うん。あたしはいつもそれくらいには起きてるから」

奈津美の出勤は八時を過ぎてからだだが、朝は洗濯をしたり、身支度にも時間をかけたいので、七時半前には起きています。

余裕を持って起きているので、旬を起こすための電話をする時間くらいならある。

「えー。んー。……マジでいいの？」

旬は珍しく迷っているようだ。

「いいよ。七時半頃に電話したらいいんでしょ？」

「うん……じゃあ、頼もうかな」

迷った末に旬はそう返事をした。

「わかった。あ、でもあたしが寝坊しちゃったらごめんね？」

「ナツは寝坊なんかしないだろー」

旬はそう言って電話の向こうで笑っている。

こう言われると、本当に寝坊するわけにはいかない。

「んじゃあ、よろしくな、ナツ」

「うん。分かった……あ、もうそろそろ寝たほうがいいんじゃない？」



時計を見ると、十二時を過ぎたところだったので、奈津美は言った。

「あ、うん。そうだな。……でも、寝れるかどうか心配だなあ」

奈津美は、いつになくネガティブな匂を意外に思った。

その様子に、真剣なのだという感じ、そんなところを垣間見れたことに、口元が緩んでしまう。

本当は笑っていいことではないけれど、匂が奈津美に弱みを見せてくれたようで嬉しいのだ。

「ダメよ？　ちゃんと寝ないと。明日から頑張れないでしょ？」

「うん……」

「大丈夫。ちゃんと電話するから。明日はあたしも寝坊しないようにする」

「うん……それは心配してないけど……フゥー……」

匂は大きなため息をつき、その後は無音の状態が続いた。

「……よし！　明日から頑張る！　つーか、俺なら余裕で頑張れる！」

突然大きな声を出したので、奈津美は肩を震わせる。

気合を入れるような言い方に、奈津美は目をぱちくりさせるが、すぐに微笑んだ。

「うん。頑張って」

「おう！ んじゃ、そろそろ電話切るな。まだ話したいけど、ナツが寝坊したらダメだから」

「はいはい」

旬の言い方がなんだかおかしくて、奈津美は笑いながら返事をした。

「じゃあ、また明日ね。おやすみ」

「おやすみー」

電話を切ると、奈津美は時間を確認する。

えっと。七時半ごろに電話しないといけないのよね。

目覚ましかけといた方がいいだろうか。

いつも、目覚ましはなくても体が勝手に七時半前に起きているのだが、明日もちゃんと起きられるかは分からない。

旬には、いいように言っておいて、内心は不安だ。

自分だけなら、八時前くらいまでの寝坊なら、洗濯を諦めて朝食の片付けを諦めて、何とかギリギリで会社には間に合う。

しかし、明日それをやってしまったら、旬がアウトだ。旬のバイト初日から、それだけは避けたい。

……って。なんであたしが神経質になってるのよ。

これでは旬とあまり変わらない。

そうだ。あたしも早く寝ないと。

奈津美は、念のため携帯のアラームをセットして、枕元に置き、部屋の戸締りを確認してから電気を消して、ベッドに向かった。

布団の中に入り、目を瞑るが、なんだか落ち着かず、寝返りをうつ。

……これじゃ旬と本当に旬と同じじゃないか。遠足前の子供……いや、奈津美の場合は、その母親といったところだろうか。それかなり親バカの。

あーもう。余計なこと考えないでさっさと寝ないと！

硬く目を瞑り、また何度も寝返りを繰り返す。

しかし、そうしているうちに、いつの間にか、深い眠りに就いていた。

翌朝、奈津美は自然に目を覚ました。

えっと……今日は、火曜日……仕事だ。

寝ぼけてぼんやりした頭で今日のことを考える。

……あ！ 匂に電話！

思い出して、奈津美は慌てて体を起こした。

今何時？

うっかり寝過ごしてないかと、枕元の携帯を見る。

七時十八分。なんだ。大体いつも通りの時間に起きてる。しかも、アラームをセットした七時二十分よりも先に起きてしまった。

目覚ましより早く起きると損した気分になるから嫌なのよね。

小さくため息をつきながら、奈津美はアラームをオフにした。

半までちょっと時間あるし、先に洗濯機回すか。

奈津美は伸びをしてベッドから降り、脱衣所に向かおうとした。

……ブーン、ブーン

ベッドの上からくぐもった低い音がする。

この音は、携帯？

奈津美はベッドの上に置いたままの携帯を見た。やはり、携帯のライトが着信の色で点滅している。

携帯を手にとって開くと、そこには匂の名前と携帯の番号が表示されていた。

「えっ。何で……」

奈津美は思わず声に出してしまった。

奈津美の方から電話するはずだったのに、何で匂から電話がきているのか。しかも、匂ならまだ寝ている時間だろうに。

とりあえず、奈津美は電話に出た。

「もしもし？」

「もしもし。ナツ、おはよー」

いつもと同じような明るい匂の声が聞こえる。

「おはよう。匂、もう起きてたの？」

いつもと何の変わりもない匂の声をこの時間帯に聞くのは珍しかったので、奈津美は驚きながら聞いた。

「うん。いやー。ナツからモーニングラブコールがかかってくると思うと楽しみでさー。何か早く目え覚めちゃったから、電話したの」  
うきうきと匂は話す。

「何それ。それじゃあ、あたしが電話するって言った意味ないじゃない」

奈津美は思わず笑いながらも、呆れて言った。

「へへっ。そうだよなー」

「もう。……今起きたの？」

「うん。今日は目覚めサイコー。超すっきりしてる。ナツは？もう起きてた？」

「うん。さっき起きて……半頃になったら電話しようかなーって思ってたから。でも、もう必要なかったんじゃないの？」

せっかく起きたのに。いや、せっかくといっても、いつもと同じように起きたただけけれど。

「いやっ、そんなことはないし！ ナツが電話してくれるって言うてなかったら絶対起きてねえし！」

「そう？」

「うん！ 絶対そう！」

必死な旬の声を聞いて、奈津美は小さく笑った。

「でもさあ。多分、最初で最後かもだよな。俺がナツにモーニングラブコールするのって」

「そうかもね」

旬が奈津美より早く起きることなんて、滅多にないだろう。明日以降は流石に自分で早くに目を覚ますなんてことほぼないはずだ。

「俺はナツがして欲しかったら毎日でもするけどな」

「えー？ 何か信用できない……」

奈津美は笑いながらそう返した。

「信用できないって……！　愛する彼氏からのモーニングラブコールなのに！」

「勝手に愛するとか言わないでよ。それよりさっきから思ってたけど、モーニングラブコールってなんなのよ」

「そのまんまじゃん。朝一のラブコール。間違ってるないだろ？」

「間違ってるかっていうか……めんどくさい」

「ええっ！？　そんなばつさり！？」

シヨックを受けているようだが、その声が大きすぎて奈津美は受話器を耳から離れた。

こんな朝早くから、何でこんなにテンションが高いんだ。しかも、今日は旬の新しいバイト初日だというのに。

……ああ、そうか。だからこんなにテンションが高いのか。

「あ、旬。もう半過ぎてるよ？　大丈夫なの？」

ふと時計を見ると、もう十分近く話していたらしい。

「あ、ホントだ」

「そろそろ準備しなくて大丈夫？」

「うん、そろそろ朝飯食うよ」

「そう……」

突然、会話が切れる。

電話の向こうから、旬の緊迫した空気が伝わってくるようだった。

「旬、緊張してる？」

「……うん、ちょっとな」

旬が力なく笑うのが聞こえる。

やっぱりそうだ。

いつも能天気に見えて、それでもちゃんと考えることは考えていて、繊細な部分もあるのだ。そして、繊細な部分は、奈津美の前ではなかなか見せないようにしている。

気持ちとは分かんなくはないけれど、それでも、旬はなかなか奈津美を頼ろうとはしないから。

「……旬」

「ん？」

「……もし、何かあったら、すぐに言ってね？ あたしじゃ何もできないかもしれないけど……話きくくらいならできると思うから」

こう言いながら、それでも、旬はよっぽどのことがない限り、奈津美には弱みを見せないだろうと思っていた。



それでも、言うのと言わないのでは、きっと違う。

「うん、ありがとう」

旬は落ち着いた声で言った。

「俺、頑張ってくるから」

「うん」

「大丈夫だから」

「うん」

「……多分」

旬が小声で付け足したのに、奈津美は思わず噴出してしまった。

「ちょっと、何それ」

奈津美は笑いながら言うと、旬は必死になって返してきた。

「だっ……だって、ずっと夢見てたことっていうか……目指してたものに向かっていくんだなって思ったら……なんか、ちょっとビビッちゃって……」

あ……そっか。

奈津美の緩んでいた頬がもとに戻った。

「旬は旬なりに一生懸命なんだ。色々と、プレッシャーや不安などもあるに決まってる。」

「……ごめんね、笑っちゃって……」

「えっ、あ、ううん！ そんなのいいよ。つうか、むしろ笑い飛ばしちゃって」

旬の慌てた言い方に、奈津美はまた笑ってしまった。

「もう……旬ってば」

落ち着いた口調で、奈津美はいつもの口癖をこぼした。

「へへっ……あ。そろそろメシ食わないとホントにやばい」

旬の言葉に時計を見ると、また五分ほど経っていた。

たいして話していないはずなのに、朝のせいか、時間が流れるのが早い。

「そうね。……それじゃあ、旬」

「うん」

「何回も言うけど、無理はしないでね」

「うん」

「あと、仕事場の人に失礼のないようにね」

「分かってるよー。俺、一年半もフリーターだったんだから。仕事

上での身のわきまえ方みたいなんはちゃんと知ってるから」

「あ、それもそうね」

あまり威張れることでもないが、旬が堂々と言ったことに奈津美は納得してしまった。

自由奔放にしているように見えて、しっかりすべきところはちゃんとしている。

何の根拠もないから口に出しては言えないが、旬なら大丈夫な気がする。奈津美が心配している間に、また知らないところで驚かせるようなことをするんじゃないかと、不安なところもあるけれど。

「それじゃあ旬」

とりあえず、今の奈津美が旬にできることは、一つだけだ。

「いってらっしゃい」

前に進む旬の背中を、見送ることだ。背中を押すなんて大それたことは出来ないが、見送るのは、奈津美がしなければならなかった。

「うん。行ってきます」

旬は、落ち着いて、それでもしつかりと力強く言った。

見送った後は、必ず待っていよう。

旬が、奈津美の方を向いて、笑顔で帰ってくるのを。

そして、その時には、奈津美も笑顔で出迎えよう。

旬の出発と共に、奈津美も改めて心に決めた。

## 41 心境の変化

「奈津美、今日匂君とデートでしょ」

朝っぱらから、ロッカールームでカオルにそう指摘された。

「え……」

奈津美は制服のブラウスのボタンを留める手を止める。

「当たり前でしょ」

カオルはにんまりと笑いながら言う。

「ちっ……違うわよっ……デートっていうか……匂の部屋に晩御飯作りにいっただけ！」

奈津美は顔を赤くしながら言い返した。

「デートと変わらないじゃない。ていうか、それって泊まりなんですよ？」

カオルが言うと、奈津美は耳まで赤くする。

「……何で分かったの？」 奈津美は観念して、顔を赤くしながらも聞き返す。

「んー。何となく。いつつも奈津美がデートの日に出してる雰囲気があるから」

「で……出てる？ そんなの……」

「うん。でも、朝っぱらからっていうのはなかったけど。いつもは、帰りとかにする雰囲気があるから」

「うそ……」

いつも、帰り支度をしていたらカオルに言い当てられるなあと思っ  
てはいたが……

それは、奈津美が急いだ仕草をするからだと思っていた。それだ  
けではなかったのか。

「なーに？ そんな楽しみなの？ 朝っぱらから浮かれるほど」

「だ……だって……」 奈津美の赤らみは首の方まで広がって  
いく。

「旬がバイト変えてから、メールとか電話の時間が少なくなっちゃ  
って……べっ、別に寂しいとかじゃないけど、やっぱりこれからは  
会えるときに会わないといけないから……」

自分でも支離滅裂で何を言いたいのがよく分からない。しかも言  
い訳にもなっていない気がする。

「……なんか奈津美、可愛い」

ニヤッと笑った顔のまま、カオルは言った。

「なっ……何、その顔っ！ ていうか、何言ってるの、いきなり……  
」

四年来の友人に突然そんなことを言われ、奈津美はたじろいだ。

「だって今までだったら素直に認めたりしなかったじゃない。絶対に違うって否定して」

「そんなこと……」

奈津美は言いかけて、辞める。確かにそうだったかも……いや、そうだった。

前は、そうやって冷やかされるのが嫌だったというか、素直に喜ぶところを見せられなかったというか……とにかくひねくれたところがあった。

しかし、今は全くそんな気にはならない。

「やっと素直になってくれたのねー。っていうか、奈津美はもともと可愛いやつだったのよね」

カオルがうれしそうに、一人で頷いている。

「……ちょっと、どういう意味？」

そんな言い方をされたら、釈然としない。今も昔も、素直で可愛いつもりはないのだが。

「だって、奈津美。初めて会った時、すごい可愛かったもん。雰囲気からしてほわーっとしてるっていうか。それが少しずつ意地っ張りなところか出てきて……」

「悪かったわね。最初は猫かぶってて」

褒めてくれているのかと思ったら、それじゃあ軽い悪口じゃない

か。奈津美は口を尖らせて言い返す。

「そうじゃなくて。何て言うの？ んー……余裕がなかった感じ？ 旬君と付き合ってて、楽しそうではあったけど……うん。今思うと、そんなに余裕がなかったのかもね」

カオルは喋りながら考えを整理して、そう結論付けた。

「今は……っていうか、旬君がバイト変わってから？ ここ暫くのところ、余裕が出てきたように見えるから」

余裕……その言葉を聞いてみると、何となく、カオルの言うことが正しい気がする。

「確かに、そうかも」

今までは、それが普通となっていたから気付かなかったけれど、余裕がなかったのかもしれない。

自分は旬より年上だからしっかりしなくては。旬がフラフラしているのも、奈津美が何とかしなくてはと、無意識に思っていたのかもしれない。

それが、旬は奈津美が思った以上にしっかりしていて、一人でもちゃんと真っ直ぐ歩いているということが分かって、奈津美の肩の荷が下りたのかもしれない。

一人で勝手に背負い込んでいたものが、本当は何てことのない重さだと分かっただけで、全く違うものだ。

「うん。奈津美、何かすごい嬉しそう。やっぱり嬉しいもん？ 旬



君の独り立ちは」

「そんな、独り立ちってほどのものじゃないわよ。やっと本来行くべき道に進んだってだけだから」

それも、まだバイトだから、いつどうなるかも保障できないのだ。そんな状態で、暢気に喜んでばかりもられない。

「……でも、安心はしたかな」

喜んでいられないというのは分かっているけれど、それが奈津美の正直な気持ちだった。

旬が本当に進みたい方へと歩き出せたのは、本当に大きな一歩であるし、それができて本当によかった。

「……ホント、そんな感じするわ」

カオルは奈津美を見て微笑んだ。

「これじゃあ暫くは奈津美の惚気を聞くはめになるのねー。何かつまんない」

「……ちよつと。つまんないってどういう意味よ」

奈津美は不服そうに口を尖らせているが、そこまδειやな感じはしていなかった。

「別にー？」

「あ、カオルの方こそどうなの？ 塚田さんと」

仕返しをしてやろうと、奈津美はカオルの方に話を変える。

「別に普通よー。あ、今日会うけどね」

「え！？　なんでそれ言わないのよっ。人のことばかり言っておいて！」

「それは奈津美が分かりやすいからでしょー？」  
カオルはクスクスと笑いながら答えた。

「もー！　そんなことないってば！」

そうやってムキになりながらも、奈津美は幸せたっぷりの雰囲気  
を醸し出していた。

仕事が終わってから、奈津美はスーパーで食材を買いだしてから、  
旬のマンションへ向かった。

六時か……今仕事終わったくらいかな。

奈津美は携帯で時間を確認しながらマンションのエントランスを  
くぐった。

旬のバイトは、一応午後五時までとなっているが、残業がある時  
は、六時から七時まで延びることがあるらしい。

そして、今日はその残業の日になってしまったらしい。昼間に旬  
からそうメールがあった。

そんなに遅くはならないだろうということだったのできつとそろそろ終わっているだろう。

奈津美は匂の部屋の前で靴から鍵を探す。

……そういえば、こういうの、初めてかも。

鍵を探り出し、奈津美はふと思った。

こうやって、仕事帰りに匂の部屋に行くこと自体、久しぶりのことだった。

以前から、奈津美が匂の部屋に行くことより、匂が奈津美の部屋に行くことの方が多かった。匂が奈津美の部屋に行きたがるが多く、それだったら奈津美の方も楽なので、つい、そうやってしまふのだ。

だから、奈津美は匂の部屋の合鍵を持っていながらも、ほとんど使っていない。

奈津美が匂の部屋に行くことがあっても、匂が部屋にいたり、匂と一緒にいくことがほとんどだったのだ。

そう意識すると、妙に緊張してきた。

部屋自体には何度も来たことがあるのに、今更になって緊張するなんて……

深呼吸してから、奈津美は鍵穴に鍵を差込み、ゆっくりと回した。

ガチャンと重い音がして鍵が開く。

ゆっくりとドアを開け、中に入る。

「……お邪魔します」

匂は居ないと分かっているのだが、つい風に言ってしまう。

誰もいない薄暗い部屋に緊張感は更に強くなる。

靴を脱ぎ、部屋に上がる。

久しぶりの匂の部屋。部屋の中に充満する、匂の匂い……

「くさっ」

奈津美は顔をしかめた。

「ちょっと、何これ。汗くさ……」

奈津美は口元と鼻を手で押さえて窓の方に向かった。

その瞬間、奈津美の足に何かが絡まった。

「きゃっ……」

奈津美はその場で躓いて転んだ。

……何だか嫌な予感がする。

奈津美は立ち上がり、すぐに部屋の電気をつけた。

「……やっぱり」

現実にあってほしくなかった予想通りの光景が目の前にあり、奈津美はため息をついた。

部屋の中は、床が見えないほど、旬の衣類や雑貨類が散乱している。

いつも来る時はそれなりに散らかっているのだが、ここまでひどいのは久しぶりだ。

いや、でも思ったよりゴミは散らかっていない。これは「ゴミはゴミ箱に」という奈津美の言いつけをまだちゃんと守っているからだろうか。……その、部屋の片隅のゴミ箱の周りがひどいことになっているのは置いてといて。

奈津美はまたため息をつく、窓を全開にして空気の入れ替えをする。

もうっ。旬ったらまたこんなに洗濯物溜め込んで……

この旬の衣類を拾い集めていると、そこから臭いがまた発生する。

まだ夏の暑さが残るこの時期に、旬の部屋に来なかったのがまずかったかもしれない。旬がここまで自分で洗濯をしないとは思ってなかった。

それとも、新しいバイトで忙しくてそんな余裕がないのか。

その考えにたどり着くと、奈津美はぎゅっと旬の服を抱き締めた。  
仕方ない。やってやらないとダメか。

奈津美は気合を入れなおして部屋の掃除にとりかかった。

部屋の掃除があらかた終わったところで、玄関の扉が開く音がした。

「たっだいまー！ ナツー？ 来てるー？」

近所迷惑になるのではないかというほどの旬の声が聞こえてくる。

バタバタと足音が聞こえて、旬がやってきた。

旬の顔を、久しぶりに見た気がする。

「おかえり、旬」

奈津美は自然と笑顔になっていた。

旬は、奈津美の姿を見ると、より一層表情を明るくした。

「ナツー！」

予想していたことだが、旬は勢いよく奈津美に抱きついた。

「ナツう、会いたかったよー」

旬は力一杯、奈津美のことを抱き締め、奈津美の頭に頬を擦り付ける。

奈津美の顔は、旬の胸元に押し当てられて、少し息苦しい。しかし、旬の匂いと温もりがしっかりと感じられた。

ほんの少し汗の匂いもするけれど、それすらも奈津美の気持ちを落ち着かせた。

「……旬、また部屋散らかしてたでしょ。ゴミも洗濯物も溜め込んで」

旬の胸に顔を当てたまま奈津美は言った。

「んー……へへっ。あ、そういえば部屋、キレイになってる」  
笑って誤魔化してから、旬は部屋の様子に気付いたらしい。

「そういえばじゃないわよ。もう……」

奈津美が顔を上げると、奈津美を見下ろす旬と目が合った。目が会うと同時に、お互いに笑みをこぼしてしまう。

「旬。お風呂沸いてるよ。先に入る？ あたし、今からご飯作るから」

「え？ マジで？ 沸かしてくれたの？」

「うん。掃除のついでにね」

「あー……ハハ。んじゃ、入ろうかな」

遠まわしに風呂場も掃除していないことを言ったので、旬は苦笑いで誤魔化す。

「そう。じゃあ、私はご飯作るから。……あ、ちゃんとうがいしてね」

「へーい」

奈津美の注意も嬉しそうに聞いて、旬は奈津美の体から腕を解いて、風呂場の方へ向かった。

旬の体温が離れてしまったことが、すこし寂しかった。

……て、大丈夫？ 私。

自分が感じた寂しさに、奈津美は一人で焦る。

今までは、こんなことなかった。デートの別れ際だとか、泊まりでどちらかが帰るときだとか、これからまた暫く会えないという時には、少しだけ寂しいと感ずることはあった。

それなのに、今、ほんの少し離れたただけなのに、今日は泊まりで明日もまた夜まで一緒にいる予定なのに……どうして寂しいなんて思ってしまったんだろうか。

暫く声も聞けない日が続いたせいなのだろうか。たったそれだけで、こうも違うのか。

奈津美は、自分の心の変化が信じられなかった。



## 42 オンナの欲求(1)

奈津美はまな板に向かい、キャベツを千切りにしていく。

風呂場の方から物音がしたので、旬がもうそろそろ上がってきたのだろうか。

そんなことを気にしながら奈津美は手を動かす。

「はー。さっぱりしたー」

旬の声が後ろから聞こえ、奈津美は振り返った。

Tシャツにスウェットという格好の旬が、まだ濡れた頭をタオルで拭きながら台所に入ってきた。

「久々に湯船に浸かったけど、やっぱりシャワーだけより全然いいな。すっげー気持ちいいし」

そう言いながら旬は冷蔵庫を開け、ミネラルウォーターのペットボトルを取り出す。

「やっぱり。旬、全然お風呂使っていないのね」

奈津美はため息をついて言った。

奈津美が風呂場を掃除した時に、浴槽がほとんど使われた様子になかったので、何となく予想はしていた。やはりその通りだったのか。

「だって一人だったらめんどくさいし。一人で入るのに水道代がもつたじゃないじゃん」

そう言って旬は喉を鳴らしながら水を飲む。本当に予想通りの反応だ。

「お風呂の水は洗濯に使えばいいでしょ？」

「俺が洗濯すると思う？」

飲み口から口を離し、旬がさも当然という風に言った。

「思わない」

奈津美は即答で返す。

「でもこの際だからやり方覚えたら？ 旬、いつも洗濯物溜め込んでるし。覚えたらそんなこともなくなるでしょ」

「えー……俺が出来ると思う？」

旬は嫌そうな声で言った。

「できるかどうかじゃなくて、やるの。旬がちょっとでもやっといってくれなかったら、あたしが来てやらないといけないじゃない」  
ため息混じりに言い、奈津美は止まっていた作業を再開する。

「んじゃそれでいいじゃん」

「何よそれ……ひゃっ!？」

背中に触れられた感触に奈津美は肩を震わせた。

「ちょっと、旬!？」

奈津美が顔を後ろに向けると、そこに旬の顔があった。

「へへっ。お約束ー。料理してるところに後ろから抱きつくの」

奈津美の体に腕を巻きつけながら、旬は嬉しそうに笑って言う。

「もうっ！ 何よ、それ。危ないでしょ。包丁持ってるのに」

包丁を持った手を見て、ヒヤツとする。もし、少しでもタイミン  
グが悪かったら、手を切っていたかもしれない。

「だって、ギュってしたくなっただもん」

「だもんって……何でいきなり。……あ、話はぐらかそうとしてる  
んでしょ」

旬の苦手な家事の話をしていたから、無理矢理にでもその話を終  
わらそうとしたんじゃないだろうか。旬のやりそうなことだ。

「違うよー。だって、久しぶりじゃん。こうやってすぐに抱き締め  
られるところにナツがいるのって」

旬の腕に力がこもった。

「なんか……ちょっとしか会ってなかったはずなのに、もうずっと  
会ってなかったような気がする」

奈津美の頭に頬を寄せながら旬は言った。

その言葉と、この腕の中のぬくもりに、奈津美は胸をときめかせ  
る。

旬も、同じように思ってたんだ。

奈津美は静かに包丁を置いて、体に巻きついている旬の腕に触れ  
た。

「……うん。あたしも」

奈津美が答えると、旬は、抱き締める力を強くした。

「ナツ……」

奈津美の耳元で旬が囁く。

旬の息がかかったところに、旬の唇が触れる。奈津美の肩が震えた。

旬は奈津美の体の向きを変え、正面から奈津美のことを抱き締める。

そして、奈津美の顔を上げ、その唇にキスをした。

最初は、優しく触れるだけ。それから、何度も角度を変えて、唇を押し当てる。旬の舌が奈津美の口内に入ってくる頃には、奈津美はされるがままになっていた。

奈津美は、自然と旬の背中に両手を回していた。そしてしがみつくように、旬のTシャツを握りしめた。

「ン……旬っ……」

時折離れる唇から、奈津美は旬の名前を呼んでいた。無意識に、旬のことを求めている。

「ナツ……」

旬も、熱い声で奈津美の名前を呼び、今度は奈津美の首筋に舌を這わせた。

「あっ……」

奈津美の体が思わず反応してしまう。

旬の唇は、そのまま胸元に降りていった。

その時、奈津美の首に、旬の濡れた髪が触れた。その冷たさに、奈津美は我に返った。

「しゅ……旬！ ちょっと、ストップ！」

奈津美は旬の肩を押した。

抵抗されると思っていなかったからか、旬は簡単に奈津美の体から離れた。

「ナツ……？」

旬からすれば突然の奈津美の行動に、不安そうな顔をする。

「えっと……旬、髪乾かさないと、風邪ひくよ？」

苦し紛れに出た言葉は、今更なことだった。

「それに……まだご飯食べる前だし……旬、お腹空いてるでしょ？ 今日のおかずは生姜焼きだよ」

奈津美は笑顔を作って、何とか誤魔化そうとする。

「え？ マジで？」

「どうやら、今の食欲は性欲に劣っていなかったらしい。旬は素直に食いついてくれた。」

「うん。すぐ作っちゃうから、旬はその間に髪乾かしてね」

「うん！」

旬は満面の笑みで頷いた。

「んじゃあ、続きは後でな？」

ニンマリと笑って旬は言った。何のことかすぐ分かってしまった自分が恥ずかしい。

「もう……旬ってば」

いつもの奈津美の口癖に満足したのか、旬は御機嫌で台所を出て行った。

旬がいなくなってから、奈津美はうなだれた。

やばい……あたしってば、何しようとしてた？

数分前の自分を思い起こし、奈津美は赤面する。

あそこでもし、旬の髪が濡れていなかったら、旬の髪の冷たさに気付かなかったら、どうしていたんだろう。

きっと、そのまま「続き」をしていたに違いない。

まだ、夕食の支度をしているのに。しかも、台所で。

奈津美は頭を抱えた。

ちよつと何それ……変態じゃない！

頭に浮かんだその言葉に、奈津美は更に焦った。自分で思い浮かべた言葉ではあるが、勿論それは、奈津美自身に向けた言葉だ。

これだったら、自分でそうであると認めたようなものではないか。  
やばい。本当にやばい。

以前までなら、ちゃんと理性がきいていた。旬が抱きついてきた時点で、きっと怒って旬を突き放す。

今日はそれができなかった。むしろ、旬の行動を受け入れてしまった。そして、最後までいってしまふところだった。

ちょっと環境が変わって、ちょっと会えなくなっただけで、こうも変わってしまうなんて、思いもしなかった。

手の甲で頬を触ると、熱い。手で扇いでその熱を誤魔化して、奈津美は深呼吸した。

このままじゃダメだ。いつも通り。今まで通り。

そう何回も自分に言い聞かせて、奈津美は包丁を握った。

「はい、おまたせー」

奈津美は生姜焼きと付け合せのキャベツを載せた大皿を持ってリビングに行く。

「おおー。待ってました」

テレビを見ていた旬が振り返ってすぐにローテーブルの定位置につく。

「んー。いいにおい」

旬は、ローテーブルの中心に置かれた生姜焼きのにおいを、目を瞑って嗅いでいる。

それを笑顔で見ながら、奈津美は他のおかずを取りに台所へ行った。

「……あれ？」

奈津美が食卓の準備を整えた時、ローテーブルの下に何かがあるのに気付いた。

よく見ると、書店の袋だった。

「旬、本買ったの？」

「え？」

早速箸を持って生姜焼きを摘もうとしていた旬の動きが止まった。

「ほら、これ」

奈津美は袋を拾い上げて旬に見せた。そこまで重くはないが、B5判ほどの大きさで、一、二センチほどの厚さがある。

「ああ、うん。忘れるとこだった。……あ！ 別にエロ本じゃねえからな！？」

「別に何も言っていないでしょ」

勝手に焦る旬を奈津美は冷ややかに見る。



こんなに焦るのは、もしかしてやましいことがるんじゃないだろうか。

「違うよ？ マジでちがうよ？」

窺うように旬が奈津美を見ながら、おずおずと手を伸ばした。

奈津美は、無表情のまま袋を旬に渡した。

旬は受け取ると、テープで留められた袋をあけ、中身を出した。

「これ。これ買ったの」

そう言って旬は奈津美に本の表紙を見せた。

旬が見せたその本は『3級 自動車整備士問題解説 よく分かる  
図説つき』と書かれていた。

「……それって？」

奈津美は首を傾げた。

「なんていうか、専門書っていうか、問題集っていうか。とりあえず勉強しとこうと思ってさ。実際俺が試験受けるのはまだ先だけど、早いうちからやるのにこしたことはないし。独学でも仕事するのに少しでも知識あったらいいかなーって思って」  
パラパラと本をめくりながら旬は言う。

「へえ……」

奈津美は相槌をうちながら驚いていた。

旬が自分から、こういうものを買って意欲的に勉強に取り組む姿という姿が、あまり想像できない。奈津美は、高校時代までの旬が、

勉強している姿を全く知らないから尚更だ。

「まあ、買うだけ買ってもいざやるかはわかんねえけどな」  
笑いながらそう言っ、旬は本を傍らに置いた。

「……買ったんならちゃんと勉強しないとダメよ？」  
笑みを浮かべながらそう言ったが、奈津美は、旬なら何だかんだでちゃんとするのではないかという気がしていた。

意外と行動力があるということとはしっかりと分かったし、特に自分の興味のあることならもっとそれが発揮されるのではないだろうか。

「うーん。まあ、ぼちぼちな」

旬は誤魔化すように言っ、箸を手にとって「いただきます」と言っ。

「ねえ。仕事楽しい？」

食べ初めてから奈津美が旬に言っ。

「うん。楽しいよ！」

口いっばいに生姜焼きとキャベツを詰め込んで旬は頷いた。

「やっぱり現場で見ると全然違っさ。何から何まで、予想以上にカッコいいし」

口に入れたものを租借し、飲み込むと、旬は目を輝かせて続ける。

「でもまあ、一番カッコいいのは、プロの整備士かな。車の下に入っ、ぱっと見ただけで、どこがおかしいとか、どうしたら直るっの、分かるんだ。俺なんかには全然わかんないのに。目の前で

てみると、めっちゃうちゃ憧れる。俺も早くあんな風になりたい」

「そう」

奈津美は微笑んで匂を見つめた。

「でも、無理はしないでね。体壊したら元も子もないんだから」

「大丈夫。今はまだ大したことはしてないし」

「でも、居酒屋の方のバイトは続けてるんでしょ？」

「うん。でもそっちはほとんど入ってないから。週に一日あるかな  
いかにくらい。時間も短くしてくれてるし」

匂は、カフェの方のバイトは辞めたが、居酒屋の方は、まだ籍を  
置いている状態だ。

本当は居酒屋も辞めるつもりだったが、他にも数人辞めたところ  
だったので、人手が足りないからと引き留められたらしい。

それで匂は、夜なら体自体は空いているので、辞めずに留まった  
のだ。

それでも配慮してくれて、本当に人手が足りない時だけ入るとい  
うことになったのだ。

「大丈夫だって。俺、頑丈だし。それに言っただろ？ 俺はナツが居  
るから頑張れるって」

匂が満面の笑みを奈津美に向けた。

そんな旬に、奈津美は思わず顔を赤くする。

「……また調子のいいこと言って」

「そんなんじゃないよ」

旬は目を大きく見開いて首を横に振る。

「俺さ。今やっとナツのために働いてんだって気がするようになったんだ。そう思えると思うごく楽しくなるし……自然と力も沸いてくるっていうかさ」

旬は真面目な顔をして言った。

「なんていうか、愛の力ってやつ？」

最後には照れくさそうに笑って、冗談めかして言う。

それにつられて、奈津美も照れた。

「もう……何言ってるのよ」

そう言っても、奈津美の語気には力がなく、顔も緩んでいた。

「へへっ。だよなあ」

旬も顔を緩ませながら、生姜焼きに箸を伸ばした。

少しの間、二人は特に何も言わずに笑いあっていた。

### 43 オンナの欲求(2)

奈津美が風呂から出てくると、旬はリビングの床に寝転がって眠っていた。

すぐ隣にベッドがあるのに、何でここで寝ているんだろう。

「旬ー。起きてー」

奈津美は旬の傍らに座って旬を揺する。

「んー……」

唸り声を上げて体を振るが、旬は目を開けない。

「おーきーてー。風邪ひいちゃうよー」

更に強く揺すったが、それでも反応はない。

「もう……」

奈津美はため息をついた。

……何が続きは後で、よ。

……って！ 別に期待とかしてたわけじゃないし！

ふと浮かんだ怒りに、奈津美は自分で首を横に振って否定する。  
何だか今日は思考回路が変な方向に向かっている。

旬から視線を離しふとローテーブルの上を見ると、そこには本が置いてある。食事の時に言っていた、今日旬が買ってきた自動車整備士の教本だ。

奈津美は何気なくそれを手に取った。

あ、もう読んでるんだ。

本の真ん中のページの方まで、本を折った跡があった。

パラパラとページを捲ってみると、聞いたことのない単語や、奈津美が見てもちんぷんかんぷんな車の図が載っている。

これが、旬には分かるのか。いや、今は分からないことでも、これから理解していくものなのか。

奈津美と旬の興味の対象の違いということが大きいのだろうか、奈津美にとっては、旬がすごいことをしているように思える。

実際に、大変なことをしているはずだ。

本当なら、今、学校できちんと勉強しているはずのことなのだから。一年半もその道のことを何もしていなかったのに、今は現場で仕事と同時に勉強している。

精神的にも体力的にも、辛くないはずはない。

そりゃあ、眠くもなるよね。

本を閉じてローテーブルに置き、奈津美は旬を見る。

それなのに、今日は変なことばかり考えてしまった自分が恥ずかしい。

「匂い。寝るんならベッドで寝て。ここで寝たら風邪ひくから」  
奈津美はまた匂の体を揺すった。

「んんっ」

匂の眉間に皺が寄る。そして、うつすらと、眩しそうに目が開いた。

「匂。ベッド行こう？　ね？」

奈津美は匂の視界に入るように顔を近づけて言った。

「……ん」

返事なのか、匂は小さく声を漏らしてもぞりと動く。

少し体を動かし、奈津美の体に近付いた。頭を浮かせたので、起き上がるのかと思ったら、奈津美の膝を探して、頭を乗せた。

「ちよっ……やだ、匂ってば」

膝枕状態になると、更に顔を奈津美の下腹部に近付け、グリグリと顔を押し付ける。

「ちよっ……匂……」

するりと手がパジャマの裾から入ってくる。そして匂はむくりと体を起こすと、奈津美の胸元に顔を埋めた。

「待って……匂っ」

匂は手際よくパジャマのボタンを真ん中まで外すと、肩から下に

脱がせていく。

「やだ……ちょっと……」

奈津美は下着を着けていなかったなので、あっという間に裸の上半身が部屋の電気に照らされる。

「待って……旬……電気……じゃなくて、ベッドで……あっ」

胸の先端を銜えられ、奈津美は思わず声を漏らした。電気が点いているということも、ここが床の上ということも、対応としてはどちらも違うのだが、そんなことすら気付かない。

「旬……」

熱い息と共に旬の名前を漏らした瞬間、旬の動きがピタリと止まった。

ややあってまた旬が動いて、奈津美の胸元から顔が離れた。

「……あれ？」

まるで寝起きのように薄目を開けて旬は奈津美のことを見る。

「うおっ、やべえ。超寝てたし」

両手で両目を擦りながら旬が言った。

「……え」

奈津美の口の端が引きつった。

「寝てたの？」



「……みたい。んー。ベッドで横になったら絶対寝るからと思って  
床で横になったのに……」

首を回しながら旬は欠伸をした。

奈津美は呆然とする。

寝てたって……何なのよ。

いかにも、これからコトを始めますという風に触ってきて、服を  
脱がして。それは全部寝ぼけていたというのか。

一人で勝手に盛り上がってしまった自分が恥ずかしい。

「もー。せっかくナツが誘ってきてくれてんのに覚えてねえし」  
旬は残念そうにため息をついた。

「……は！？ 何言ってるの？」  
奈津美の声が上ずった。

「だってナツ、そんな格好してるし」

旬に言われて、奈津美は自分の今の姿を思い出す。

上半身を露出したままだということを忘れていた。

「これはっ……旬がやったの！」  
奈津美は顔を赤くしながら、ウエストの辺りまで下ろされたパジ  
ヤマを肩まで上げて体を隠した。

「えー？ 俺？ 全然覚えてねえし……超無意識」

首を傾げている旬に、奈津美はカチンときた。

「……あつそ。じゃあもういい。もう寝る」

奈津美はそう言い放って立ち上がり、ベッドに上がる。

「え？　ちょっと待って」

旬はよく分からないまま奈津美のことを目で追う。

「こっちは来ないで」

旬に向けて背中を向け、ベッドの上で横になりながら奈津美は言う。

「来ないでって……俺のベッドなんだけど……」

困り顔になりながら旬はとりあえず立ち上がり、部屋の電気を消した。オレンジ色の電灯だけで、部屋は薄暗くなる。

「ナーツー」

旬はベッドの上に滑り込み、奈津美を背中から抱き締める。

「来ないでって言ったのに」

奈津美はそっけなく言った。

「そんな寂しいこと言うなよう。何で急にご機嫌斜めになってんの？」

旬に言われると、奈津美は口ごもる。

こんな態度は子供っぽいと、自分でも分かっている。しかし、恥ずかしかったのだ。

旬が触れてきただけで、状況も関係なく反応して、盛り上がって

しまった。夕飯の支度の時もそうだし、さっきの旬の行動にもだ。特に、さっきのことなんて、旬は寝ぼけて覚えていない。自分一人だけ盛り上がってしまったのだと思うと、恥ずかしくてたまらなかったのだ。

「ナツがそんなだと俺はどうしたらいいんだよお」  
旬は奈津美を抱き締める力を強くし、奈津美の頭に頬ずりする。

「……だって旬、疲れてるんでしょ？」

「疲れてねえよー。元気有り余ってるし。……ほら」  
旬は奈津美の腰と尻のあたりに下半身を押し付ける。  
布越しではあるが、旬の「硬さ」が伝わってくる。

「ちょっと……何してんのよ」

「ん。元気な印をナツに知ってもらいたくて」

「そんなのいいから。……もう」  
奈津美は寝返りをうって旬の方に向いた。

「あ、その気になってくれた？」  
奈津美のことを見て、旬はニッと笑った。

「……そんなじゃないわよ」  
奈津美が言った時には、旬の顔が、奈津美の顔のすぐ間近にあった。

「さっきの続き、しよっか」

「さっき」というのは、やっぱり夕飯の支度をしていた時のことだというのは、言うまでもない。

「……うん」

奈津美は小さく頷いた。

奈津美が素直に返事をしたことに驚いたのか、旬は眼を丸くする。しかしすぐに笑った。

「ナツ、可愛い」

そう耳元で囁き、頬に口付ける。短い口付けを何度も何度も繰り返す。それが段々と唇に近付いて、やっとのことで唇に到達した。

唇にも、最初は短く触れるだけだったが、徐々に押し付けるように長く触れてきた。旬が口を開けて、奈津美の唇を舐めたり吸ったり、甘噛みしたりする。そのうちに、旬の舌が奈津美の唇の中に入りたがったので、奈津美は素直に口を開いた。

旬の舌は、奈津美の口内に侵入すると、じつくりとそこを撫で回してくる。

奈津美は旬の背中に腕を回して、その感触に集中した。

だんだんと旬の動きが激しくなってきた、奈津美は必死にそれについていこうとする。

「あっ……はっ……」

口付けは続いたまま、旬の手が奈津美の胸を掴んだ。奈津美の唇の隙間から声を漏れた。

力強いけれど優しい刺激に、奈津美の体はいつも以上に敏感になる。

匂の手は、奈津美が閉めなおしたパジャマのボタンにかかり、真ん中の辺りまでスムーズに外される。そしてさっきのように肩の方から脱がされる。

今度は、もうためらう必要もなかった。奈津美は体を少しずつ浮かせて、匂が脱がしやすいようにした。

パジャマが腰までおりて、両腕も抜いた。そこで匂はやっと奈津美の唇を解放した。

奈津美は息も絶え絶えになり、不足していた酸素を求めて呼吸する。

匂は、腰まできたパジャマを、脱がそうとしていた。

布がずれる感覚に、奈津美は目を丸くした。

「ちょっと匂……待っ……」

奈津美が体を起こして静止しようとする間もなく、匂は一気に足のほうに引き抜いた。

「やっ……」

奈津美は横を向いて体を丸めた。

「何で隠すの？ 今更じゃん」

匂は奈津美の行動が意外だったようで首を傾げている。

「今更っていうか……何で一気に脱がすのよっ」

奈津美は、何も身につけていない状態になっていた。匂が、パジャマを脱がす時に、腰からズボンも下着も全と一緒に脱がされたのだ。こんなことは初めてで、奈津美は心の準備ができていなかった。

「前から研究してたんだよな。ナツの服の脱がし方」  
匂はニヤツと笑いながら言った。

「何よ、それ」

「いかにスムーズにナツをすっぽんぽんにするかっていうの。やっぱりパジャマが一番脱がしやすいな。ナツ、ノーブラだし、一発で脱がせられるから」

奈津美の顔が一瞬で真っ赤になった。

「へへっ。ナツ可愛い。ナツ、キレイ」

匂はそう言って奈津美の上に覆いかぶさった。そして、また、唇を合わせる。

結局そうされると、奈津美の方が弱かった。

奈津美は匂の背中に腕を回す。Tシャツ越しに匂の熱が伝わる。

「匂は、服着たままなの？」

唇が離れた時、奈津美は匂に言った。

「え？ 何？ 見たいの？」

「違うわよっ！ 見たいっていうか……」

触れたい。旬の素肌に。

思わず出かかった言葉を、奈津美は慌てて引っ込めた。

何考えてんの、あたしってば！ 本当に変態じゃないの。

恥ずかしさのあまり、顔だけではなく、全身が熱くなっていた。

「……旬だけ服着たままなんて、ずるい」  
必死に誤魔化してそう言った。

しかし、その恥らう態度が、旬の何かを刺激した。

「可愛いー！」

旬は奈津美のことを力強く抱き締めた。

「んもー。ナツこそずるい！ 何でそんな可愛いの。ナツに言われたら脱ぐつきやないでしょ」

旬はデレデレとしながら体を起こし、奈津美の体を跨いだまま、Tシャツを脱いだ。

「もー。我慢できねえし」

旬はそう言って奈津美の上に覆いかぶさった。

奈津美の唇を塞ぎ、手は奈津美の胸をしっかりと掴む。

「あっ……」

旬の唇が首筋にすべり、胸に顔を埋めてくる。

「ん……匂っ……」

奈津美は匂の頭をそっと抱き締めた。

腕の中で、匂は奈津美に甘く痺れるような刺激を与えてくる。右手が奈津美の胸を包み、唇がその先をくわえる。そして左手は、胸以外のところをじわじわと撫でていく。

腹からわき腹、尻の方へいき、太股に滑っていく。触れているところが移動するたびに、奈津美は深いため息をもらした。

左手が膝の方へ滑ると、その手は内股を辿って足の付け根へと戻ってくる。匂の手は、そのままつきあたりまで触れていった。

「あっ」

奈津美の声と同時に、匂の動きも止まった。

「ナツ……」

匂は奈津美の胸元から顔を上げた。その表情は、驚いたものになっていた。

「ナツ、すげーことになってる」

奈津美は赤面した。奈津美も触れられて気付いた。そこが、どれほど匂を待ちわびていたのかを……

「ナツも、寂しかった？ 俺と会えなくて」  
匂がじっと奈津美の目を見て言った。



ここで奈津美は、いつものように意地を張って「そんなことないなんて言えなかった。本当のこと過ぎて、意地を張ってでも嘘はつかなかった。」

「うん……」

奈津美は小さく頷いた。そして奈津美は聞き返す。

「……旬は？ 寂しかった？」

旬は、目を細めて優しく笑った。

「寂しくないわけじゃないじゃん」

そう言って、奈津美の体を抱き締めた。

「でも、一緒だって思ったら、寂しいの、どっかいつちゃった」

「一緒？」

「うん。寂しいのは嫌だけど。でも、ナツも同じこと思ってたんならそれでいいや。みたいな？」

「……うん」

奈津美も旬を抱き締め返した。

離れていても、口に出して言わなくても、思っていることが同じだった。そんな些細なことなのに、一緒というだけで、嬉しい。今もそうだ。自分以外の別のところに、自分と同じ気持ちがあることが、こんなにも嬉しく感じる。

今までのように会えなくなつて、毎日の電話がなくなつても、繋がっている何かがあることが、奈津美の強みになる。

自由な時間が減つたことで、初めてそれを実感した。

## 44 オンナの欲求(3)

旬の指がジワジワと動いた。

「あっ……」

そこから全身に快感が走っていき、奈津美は思わず艶っぽい声を出した。

不意だったために出てしまった声に、奈津美は慌てて手で口を押さえる。

「ナツ、今の声めちゃくちゃエロい」

旬はニヤツと笑った。

奈津美は顔を真っ赤にして旬から視線を外す。

「もっと……声出して」

旬の指が再び奈津美の全体をなぞる。

「んっ……やっ」

奈津美は必死にせりあがってくる快感に耐えて、理性を手放すまいとする。しかし、旬の指は、奈津美の弱点に集中しつつある。

「あっ……ん！」

そこに指が触れただけで、奈津美の体は小さく震えた。

「ナツ、ここが弱いよな」

旬が奈津美の耳に唇を寄せて囁いた。耳に当たる息さえも、今の奈津美には効果的だった。

「ダメ……旬……」

奈津美の声はそうやって訴えるが、奈津美の体はそうではなかった。むしろ、旬のことを求めているも同然だった。いや、実際求めている。心も、体も、全部。

旬が体を浮かせ、下の方へ頭を移動させる。奈津美の両脚の間に体を割り込ませ、何のためらいもなくそこに唇を寄せた。

「あっ……」

久々の感覚に奈津美は仰け反った。

それを見てか、旬の舌が集中的に動き出す。

「しゅっ……んっ……はあっ」

絶え間なく与えられる刺激に、奈津美は必死に声が出ないように耐える。

ほんの少しでも唇を開くと、そこから堪えているものが出てしまいうそうで、奈津美は唇を噛み締める。

ぬるりと、奈津美の中に旬の指が入ってきた。十分に潤っているそこは、すんなりと旬の指を受け入れる。ピリピリと、電気のような快感が湧き上がってくる。

旬は、奈津美の弱点を口と指で攻めてくる。慣れ親しんだ快感のはずなのに、もう頭が真っ白になっていた。

奈津美の手は旬の頭へと伸び、旬の髪をかき乱すように撫でた。

「んっ……あっ」

奈津美の快感は一気に頂上までのぼりつめ、下半身の筋肉が収縮した。そして、それが過ぎたあとは、脱力する。たった一度の絶頂感で、奈津美の意識は既に朦朧としていた。

旬は、今唇をつけていたところから頭を起こし、奈津美の上半身に覆い被さった。

「ナツ……」

愛おしそうにその名を呼ぶと、唇を合わせる。

奈津美は、ぼんやりとした意識でも、旬の背中に腕を回し、懸命に口付けを交わした。

「アッ……」

触れた唇の隙間から、奈津美は息を漏らした。

さっきまで旬の指が入っていたところに、旬自身が入ってくる。久々の質量感に、奈津美は背中を仰け反らせる。

「ナツ……」

ほとんど吐息のような声で旬が奈津美の名を呼んだ。

そして、奈津美は快感の中に理性を手放した。

「ナツ、今日はエロかったね」  
奈津美の頭を撫でながら旬が言った。

「え……」

まだ乱れた息を整えられないまま、奈津美は旬を見た。

「いつもより声出てたし。めちゃくちゃ腰動いてたし」

旬の言葉に奈津美は顔を真っ赤にする。

「うそ！ 勝手なこと言わないでよ」

奈津美は拳で旬の胸を叩いた。

「ホントだって。ナツが俺の顔に×××押し付けてきた時はどうしようかと思ったもん」

旬は真顔で普通には言えない言葉を口にした。

奈津美は更に顔を赤くした。

「……バカ！」

「って！」

奈津美はさっきよりも強い力で旬の胸を叩き、背中を向けた。大した力ではなかったが、不意に思った以上の衝撃を受けて旬はむせた。

「ゴホッ……ナツ、何でそんな怒んの」

旬は奈津美の顔を覗こうと体を起こす。しかし、奈津美はそれを避けるようにうつ伏せになって顔をベッドに押し付ける。

「ナーツー。んな恥ずかしがることでもないじゃん」

旬は奈津美にくつついて、背中を撫でた。

「俺、むしろ嬉しかったよ？ ナツが俺のこと求めてくれてるんだって分かったし。ナツが気持ちいいんだっていうのもわかったし？」

旬は冗談ばく笑いながら言ったが、奈津美は顔を上げなかった。

「……ナーツー！」

旬は背中を撫でる手の動きを変え、奈津美の背中をくすぐった。

「ひゃっ!？」

奈津美の体が跳ね上がり、奈津美は勢いよく顔を上げた。

「もうっ……旬！」

奈津美が顔を上げると同時に、旬は奈津美の唇に口付けた。

「へへっ」

唇を離すと、旬はいつものようにいたずらっぽく笑う。

「もう……」

すっかり毒気を抜かれ、奈津美も口元を緩めた。そして、旬の方に向いて、素直に腕の中に納まった。

旬が奈津美を抱き締めると、奈津美も旬の背中に腕を回し、抱き締め返す。

「もー……ナツってば可愛すぎー」

旬は奈津美の頭に頬ずりし、更に強く抱き締めた。

旬の「可愛い」という言葉を肯定するつもりではないが、奈津美は素直にその言葉に甘えた。

好きな人に「可愛い」と言われたのなら、自分で今の自分は可愛いのだ、と、思ってみたっていいだろう。

「何で可愛いのか？ 俺、興奮しちゃうじゃん」

そう言って、旬の手は奈津美の背中を撫で回し、どんどん腰や尻の方に下がっていく。

このまま、二回目に突入しそうな雰囲気だった。

奈津美は旬の体を強く抱き締めて、胸板に頬を寄せて目を閉じた。

少し高めで汗ばんでいるけれど、他人の、それも旬の体温は心地いい。鼻から息を吸うと、旬の肌のおいがする。頬に伝わってくる旬の心音は、少し速い。

いつもここまでじっくりと感じたことはないけれど、今日は久しぶりだからか、何気ないことに旬を感じて、愛しい気持ちになる。

この肌の感触も、においも、心音の速さも、奈津美にとって大切な、必要な栄養分のようなものだったのか。

「ナツ？」

いつもと違い、強くしがみついてくるので、旬は様子を窺うように名を呼んだ。

奈津美は顔を上げると旬の顔をじっと見つめた。



「ん？」

奈津美が考えていることは分からず、旬はニコツと笑って奈津美を見る。

そんな旬が、たまらなく愛しい。

奈津美は何も言わず、旬の顔に自分の顔を寄せた。お互いの息がかかるほどの距離で見つめ合うと、奈津美の方から旬に口付けた。

それに対して、旬は少し驚いて目を見開いたが、すぐに目を閉じて、奈津美の唇を味わった。

唇を離すと、奈津美は今度は旬の顎の辺りに口付ける。普段味わうことないの感覚に、旬はくすぐったさを覚えた。

そして奈津美の唇は、そのまま旬の首筋、鎖骨、胸元に滑っていく。

「ちょ……ナツ？」

今まで見たことのない奈津美の行動に旬はぎょっとしている。

奈津美は今、いつも旬が奈津美の体に施すことと同じことをしている。旬の体に唇で触れて、手で撫でて……旬の体に、愛しいと思うままに触れていく。

そして、布団の中にもぐり込み、手と唇が、旬の体を下りていく。

奈津美の手は、何の躊躇いもなく、むしろ、大切なものをに触れるかのように、そこに伸びた。

「えっ……ちよっ……」

奈津美の指先がほんの少し触れただけで、旬は驚いたように体を起こした。

「ストップ！」

旬は布団を捲り、奈津美の手を掴んだ。

「え……」

奈津美の方も戸惑っていた。まさか止められるとは思わなかったのだ。

「ナツ、別にそこまでしなくていいから」

旬は何故か慌てたような様子でそう言った。

その言葉が、奈津美にとっては意外だった。

「……何で？」

思ったままに、奈津美は口にした。

「何でって……」

旬は、まさに鳩が豆鉄砲を食ったような顔をして、何か言おうとしている。

「だってナツ、いつもは絶対こんなことしないじゃん」

やっと言葉を見つけたといったふうな、旬は奈津美をじっと見て言った。その目には明らかな戸惑いの色が見える。

確かに、いつもの奈津美なら、自分から、旬の体に口付けることはない。まして、いつも旬が奈津美にしていることと同じような場所に、同じような触れ方をする事なんて、いままでなかった。

奈津美も、自分がいつもとは違うということは自覚している。どうして突然こんなことをするのかと聞かれたとしても、明確な答えはない。

「……ダメなの？」

奈津美も同じように旬の目をじっと見て言った。

「あたしも、旬に、旬がいつもあたしがしてくれることしたいって思ったら、ダメなの？」

そう言ったあとに、顔が熱くなるのが分かった。自分でも、恥ずかしいことを言ったと思う。

それでも、これが奈津美の心なのだ。

旬に触れたいと、旬の身体を愛したいという欲求が強く出てしまっ  
って、抑えられない。

女にだって性欲というものはあるわけで、突然身体が『男』を欲  
してしまうことがある。それが奈津美にとっては、今だった。

この姿は、旬にはどう映るのだろうか。今まで見せたことのない  
この姿を見て、旬は……

「ナツ……」

旬は、奈津美の身体を抱き締めた。

「ありがと。そういう風に思ってくれて。俺、めっちゃくちゃ嬉しい」

「旬……」

奈津美の胸に、じんわりと温かいものが染み渡っていくような感じがした。

よかった。旬は、こんな自分も受け入れてくれた。そして、喜んでくれた。

「……でも、ナツはそんなことしないでいいんだよ」

ほっとした瞬間に、奈津美は固まった。

ゆっくりと旬の顔を見る。

「しちゃダメなの？」

奈津美の反応にまたもや旬は困惑した顔になる。

「いや、ダメっていうか……ナツにそんなことさせらんねえし」

「何で？」

「……何でって……ナツだって、嫌だろ？ わざわざそんなことするの」

「嫌じゃないよ。嫌だったら自分からこんなことしないもん」

いつもと違い、何を言っても強気で返ってくることに、旬は圧さ

れ気味だ。

「……いや、だってさ。ナツ、今までそんなことしたことがなかったし」

それを言われて、奈津美は黙ってしまった。そう言われると、何だか引かれてしまったように思ってしまう。

「……たまにはいいじゃない。いつも、あたしが、その……旬にしてもらってばかりだったから」

顔を真っ赤にして旬から目を逸らしながら言った。さすがに、こんなことを言うのは恥ずかしい。

「でも、それは俺がしたくてしてることだし……」

旬ははっきりしない言い方で、奈津美のしようとしていることは断ろうとしている。

「あたしだってそうだもん。あたしだって、旬にしたいから……」

そう言って、奈津美は旬の胸元に頬を寄せた。さっきより、心臓の鼓動が早くなったように感じた。

「旬……」

奈津美はゆっくりと旬の身体を撫でていく。そして、さっきと同じように、右手が旬の下半身へ伸びていった。

「ちよっ……ダメだって!」

旬は奈津美の手を掴んだ。

「何でダメなのよ」

奈津美はキッと旬を見上げた。

「だからその……きたねーよ？ さっき一回したあとだから臭いとかやばいかも」

潔癖な奈津美が嫌がるだろうと、旬はそういう生々しい話もしてみる。

「……それでもいいもん」

一瞬考えたが、奈津美は今度は左手を伸ばす。

「ちよー！ ダメだって！」

旬ももう片方の手で奈津美の手を押さえた。

なぜか必死にすらなっている旬に、奈津美も意地になった。

「なーんーでーよー！」

捉まえている手に抵抗して、奈津美は力を込めて逃れようとした。

「だから俺は別にしてもらわなくてもいいんだって」

旬も力を込めて奈津美の手を阻止する。

奈津美と旬の力では、明らかに旬の力の方が強い。しかし、奈津美も粘り強く、二人の力が反発し合ってブルブルと震えている。

「いや……旬、痛い……」

奈津美は顔をしかめて旬に訴えた。

「あ、ごめんっ」

旬ははっとして手の力を緩めた。

その瞬間を逃さずに、奈津美は旬の手を振りほどき、布団にもぐりこんだ。

せこい手だとは思ったが、それしか旬を油断させる方法を思いつかなかった。

「だー！ ちょっと、ナツ！」

旬も追いかけるように布団にもぐり込み、すぐにまた奈津美の手首を掴んだ。

「ナツってば、いつの間にこんな恐ろしい手を使うようになったの」  
旬が目を丸くして言う。

「……旬が悪いんじゃない」

奈津美はむっとして頬を唇を尖らせる。

「俺が悪いって……あっ、こら！」

無理矢理旬の手を振りほどこうとした奈津美の手首を、旬はベッドに押さえつけた。

「おいたはダメ！ 分かった？」

旬はまるで小さい子供に諭すように言う。

力では、旬には敵わない。さっきのようなせこい手も、通用しないだろうし、他に思い浮かばない。

奈津美は、悔しさと、聞き分けのない子供のような扱いをされた

腹立たしさから何も言わず、旬から顔をそらした。

「ナツ―？」

旬が奈津美の顔を覗き込もうとすると、奈津美はまた違う方に顔を向けた。

「……ナァーツうー？」

少し怒ったような（といっても本気ではないが）声色を出して旬はまた奈津美の顔を覗き込もうとする。

しかし、奈津美はまた同じように顔を背けた。

その動作が、旬に火を点けた。

旬は黙って奈津美の手首を奈津美の頭上へと持ち上げる。そして、左手で両手首を持ちかえる。

「え……やだ、ちょっと、旬……」

「わがまま言う子にはおしおきます」

「あたしわがままなんか……やっ」

何かが奈津美の目を覆った。

「やだ……何っ……」

手が塞がっているので、奈津美は頭を前後左右に振って振り払おうとする。

しかし、大きな布を目から上に乗せられているので、なかなか外すことができない。ほんの少し光が見えたと思ったら、旬によって



また元に戻る。

「ナツ」

不意に耳元で囁かれ、奈津美の肩が震えた。

「今のカッコ。めっちゃくちやエロいから」

耳に息があたり、ゾクツと、背筋が震える。そして、言われた内容に、全身が熱くなる。

今、自分はどのような状態だ。旬に両手を頭上に持ち上げられ、自由を奪われている。そして、目隠しをされ、視界も奪われて……

「やだ、旬……やめて……」

考えるだけで恥ずかしい。いくら彼氏とはいえ、年下相手に何をされているのだ。

「えー？ どうしよっかなー。やめたらナツ、またイタズラするだろう？」

「そんな、あたし、イタズラなんか……あつ」

旬の指が奈津美の太股をなぞった。

何も見えないところに不意に刺激され、奈津美の腰が震えた。

「見えないところで障られるって、どんな感じ？」

耳元の旬の声は、余裕を持っていて、奈津美との温度差が感じられた。

「どんなって……」

「やっぱりいつもより感じる？」

「なっ……あっ」

旬の指が、奈津美の中心に触れた。

「うわ……ナツ、ここヤバイことになってるよ。一回目の時より……」

旬が指を動かすことで、奈津美のそこからは淫らな水音がした。

「やだ……」

恥ずかしさで全身が熱くなる。

しかし、旬から刺激を受けたそのも、旬の指の動きが早くなるにつれて、どんどん熱を帯びていく。

「旬……おねがい……離して……恥ずかしいよ……」

奈津美は見えないながらも旬の存在を探して声をかけた。

「えー？ どうしょっかなー？」

旬の声が弾んでいる。この様子は絶対に楽しんでいる。

「たまには、いつもと違うことしてみよっか」

旬が言い終わると同時に、旬の指が奈津美の中に進入した。

## 45 嫌がる理由

奈津美はふと目を覚ました。

……あれ？ あたし、いつ寝たんだった……

まだはっきりしない頭で昨夜のことを思い出そうとする。

身体を動かそうとすると、気だるい感じがする。そして、実際に何かに乗っているような重みもあった。

よく見てみると、旬が奈津美のことを抱き締めて眠っていた。

旬は落ち着いた表情で、寝息をたてていた。

なぜだか、旬の顔を久しぶりに見たような感覚だった。

どうしてそういう風に思うのか……

ぼんやりと考えていると、段々頭も覚醒してきて、昨夜のこととも思い出してくる。

昨夜は、奈津美が取った行動が発端で、旬に、今までにないような攻められ方をした。

手首を押さえつけられて、目隠しをされて……それだけではなかった。

何度も奈津美の弱点を的確に攻めてきて、もう少しまで頂上に達す

る、というところまでくると、その手を止めたり、緩めたり、また違うところを刺激したりする。かと思えば、頂上まで上り詰めて、こうこれ以上はないというのに、執拗に攻めてきて、それどころかより強い刺激を与え続けた。

もう、気が狂ってしまおうかと思った。いや、実際狂っていたかもしれない。

旬が指での刺激をやめて、奈津美は息も絶え絶えという時に、旬自身が奈津美の中に入ってきた。その時も、旬は緩急をつけ、時間をかけて奈津美を攻めてきた。その時点で奈津美は意識が朦朧としていたせいで、あまり覚えていない。確か、最後の瞬間を迎えると同時に、奈津美は意識を手放したのだ。

……恥ずかしい。

昨夜の顛末を大体思い出して、奈津美は赤面した。

もしかしたら、今までで一番感じてしまったかもしれない。それも、あんな状態で……

視界はずっと真っ暗で統一だったはずなのに、体が覚えている。

まだ余韻が残っているのか、思い出しただけでそこは疼く。

……ちょっと待って。なんであたしだけこういう気分になってんの？

甘い気分とは一転して、奈津美は冷静に昨夜のことを振り返る。

昨夜は、あんなことになるつもりはなかった。

ちよつと奈津美が積極的になっただけだ。

ちよつと気分が盛り上がって、恥を忍んでの行動だったのに……  
旬は断った。それどころか、嫌がるようでもあった。

自分は嫌がっておいて、奈津美には好き勝手して……

それが奈津美には納得いかなかった。

そもそも旬が嫌がるということが、予想外のことではあった。

あの手の行為は、旬は喜ぶのではないかと思った。今までの旬の  
言動から考えても、奈津美がそういうことをするのを、旬は望んで  
いるのだと思っていた。

……ていうか。何で今更嫌がるのよ。

旬は、そういう雰囲気になった時に、奈津美の腰や太股に、元氣  
になったソレをわざと押し当ててくる時がある。それに怒ったり、  
恥ずかしがったりすると、旬は楽しそうにしていたりするのだ。（  
こういうとまるで変態だが）

それに、お泊りの翌日は、裸のままベッドからおりて、明るい  
ところで奈津美に見られても、平氣そうにしている。むしろ見て欲し  
いようなアピールをすることだってある。（こういうとますます変  
態だが）

それに、前に旬が風邪をひいた時に、奈津美が旬のズボンを履き  
替えるのをためらった時に……

『恥ずかしがらなくてもいつも見てるし好き放題してるのに』

そうやって言っていたが、実際に奈津美が好き勝手にしたことはない。そして更にこう言っていた。

『いいよ。俺、ナツになら犯されても。それなら本望だし』

あそこまで言っておいて実際に触るのはダメなのか。

それから、寝言で何か言っていると思ったら、夢の中で奈津美が匂に、昨夜していたことをしようとしていたらしい。

夢の中ではまんざらでもなさそうなのに、現実ではダメなのか。意味が分からない。

熱のせいもあったのかもしれないし、ただ寝ぼけていただけなのかもしれない。しかし熱がある時のうわ言や寝言なんて、普段隠してる本音なのではないのか。

いつものことではあるが、匂が考えていることが分からない。

「ん……」

匂がもぞりと動いた。起きるのかと思ったら、少し身じろぎしただけでまた寝息をたて始めた。

その時、奈津美は太股に当たる感触に気付いた。

その感触には、身に覚えがある。ちょうど昨夜、奈津美の体の中

に感じていた硬さだった。

……旬ってば。

男性特有の生理現象ではあるが、昨日の今日で、まだ元気があるというのか。それとも、何かソレらしい夢でも見てるのか。

……そうだ。

奈津美はふと思いつき、旬のことを見た。

旬はまだ起きる様子はない。

旬が起きる前に、コトを始めてしまえばいいのではないか。

ひょっとしたらまた寝ぼけて、夢の中のことだと思ってくれるかもしれない。

奈津美は布団の中で手を動かし、旬の身体をなでた。

最初に触れたのは旬の胸板だった。最近、仕事が変わったからだろうか。今までよりもっと体が締まってきたように思う。そのことに関係なくとも、出会った頃に比べたら、だいぶ体型が男らしくなったような気がする。

もともと背は高い方だったし、旬と同年代の男に比べたらしっかりした体型だったのではないかと思う。しかし、やはり若さというか幼い雰囲気が残っていた。

ずっと側にいたら気付かなかったが、昔のことを思い出して比べてみると、少年らしさは薄れていた。

成長したなあ、旬は。

奈津美は旬の胸に頬を寄せて目を閉じた。

……って。そうじゃない！

奈津美は閉じた目を見開いた。

ついしみじみしてしまって、本来の目的を忘れるところだった。

「んー……」

旬が眉間に皺を寄せてごそりと動いた。

奈津美はピタッと動きを止めた。

旬、今度こそ起きてしまったか……

うつすらと旬の目が開いた。

視線が奈津美と合うが、ぼんやりした様子なので、起きたかどうかは判断がつかない。

「……ナツ」

かすれた声で奈津美のことを呼び、身体を抱き締めた。

そして頭を優しく撫でられた。

無意識なのかどうか何なのか分からない行動だが、そうされたことに奈津美はときめいてしまった。

こんなことで、なんだか負けてしまったような気分だ。



「旬……」

奈津美は小さく旬の名を呼んで抱き締め返す。

「んんっ」

旬がきゅっと目を瞑り、ゆっくりと目を開いた。

何度も瞬きをして、奈津美のことを目に映す。

「おはよ」

「おはよ、ナツ」

奈津美が先に挨拶をすると、旬は微笑んで奈津美の頭に唇を寄せた。

「昨夜、よく寝れた？」

旬が囁くように言った。

「……うん」

奈津美は小さく頷く。

寝れた、というか、気を失ってそのまま、という感じだったので、よく分からなかった。

「……ごめんな？」

「え？」

旬の突然の謝罪に、奈津美は驚いて顔を上げる。

「昨夜、何か気分盛り上がっちゃって……ちよつと無理矢理っぽくなっちゃって……」

……まさか、昨夜のことを謝られるとは思ひもしなかった。

しかも、昨夜のアレは、気分が盛り上がってのことだったのか。奈津美はそのことにも驚いた。

「手……痛くなかった？」

旬は奈津美の手首を優しく手に取って聞いた。

昨夜、旬が奈津美の動きを封じ込めようと掴んだ場所だ。

「……うん。大丈夫」

昨夜はあんなに強気だったのに。この変化に、奈津美は拍子抜けしてしまう。

「怒ってる？」

「……少し」

怒っていることの内容については言わないが、奈津美は素直に頷いた。

恐らく旬は、昨夜奈津美に対してしてしまったことを怒っていると思っているだろう。

もちろん、それについても、怒っていないわけではない。しかし

それよりも、自分はあるな風に好き勝手にしておいて、奈津美には何もさせないということに怒っている。

実際にそんなことを言うなんてできないが。

「……ごめんな」

奈津美が考えていることなんて知る由もなく、旬は落ち込んで謝った。

そこまで落ち込まれると、却って拍子抜けしてしまう。

「でも……ナツ、めちゃくちゃ可愛くてやばかった」

「なっ……!」

前言撤回だ。やっぱり旬はいつもの旬でしかなかった。

「なんつーかさ。やっぱりいつもと違うことをするってのも大事だなーって。いつもも体位変えたりしてるけど。そういうのとはまた別なことをしてみるってのもさ。新しい魅力の発見っつーか」

旬の発言の一つ一つに奈津美はどんどん赤くなっていく。

「……旬のバカ!」

たまらず奈津美は叫んだ。思ったより大きな声が出た。

「えっ?」

旬も奈津美の声の音量に驚いたようで、目を丸くする。

奈津美は、じっと視線を下に向け、口を引き結んだ。

人の気も知らないで何でそんな風に考えられるのか。

「ナツ……やっぱり怒ってる……?」

旬が奈津美の様子を窺うように顔を覗きこむ。

奈津美は何も言わず、旬の体に擦り寄った。旬の胸に耳をあて、心臓の音を聞いた。

「……え……ナツ……?」

言葉と裏腹な行動に、旬は対応できなかった。

「ナツ、何、どうしたの?」

「旬。あたしも旬にしたい」

奈津美は手を旬の腰に回した。旬の心音が早くなる。

「え……」

「あたしも旬にしてあげたい」

繰り返し奈津美が言うと、旬は黙ってしまった。

「……いや、さ」

ちよつと逡巡した後でしゅんが 口を開いた。

「昨夜も言ったけど、ナツが別にそんなことしなくてもいいんだよ。俺はナツにそんなことして欲しいわけじゃないし……」

「嘘」

奈津美はキツと鋭く匂を見た。

「匂、そういう夢見てるんでしょ？ あたしが匂にする夢」

「それは……」

「夢に見るってことはして欲しいんじゃないの？ 何で夢ならよくて、実際にするのはダメなの？」

匂の反論を遮って、奈津美はたたみかけるように言った。

すると、匂の方は口をつぐんで、目を泳がせた。

「……それは、その……やっぱり夢は夢だし……夢の中だったら都合のいい展開のままになるっていうか……」

匂はしどろもどろになりながら言葉を紡ぐ。

「現実だったら都合よくないの？」

「いや、そういう意味じゃなくて……」

「じゃあどういう意味？」

「……ていうか、ナツ、やっぱりおかしいって」  
会話の流れを切るように匂が言った。

「昨日もだけど……いきなりそんなこと言い出して……何回も言うけど、俺は別にナツにそういうこととしてほしいわけじゃないよ？」

「夢の中ではいいのに？」

逸らそうとした話に戻され、旬は口をつぐんだ。

「……俺は！　されるよりする方が好きなの！」

半ばなげやりに言っ、旬は奈津美の身体を抱き締めた。

「……あたしだってそうだもん」

奈津美は小さく言っ、旬の胸を押した。体重をかけられ、旬の体は仰向けになった。

「あたしだって、する方が好きだもん」

旬の身体をまたいで奈津美は旬を見下ろした。

旬は驚いたようであっただけ、特に抵抗はしなかった。

「……今までしてなかったのに？」

「……今好きになったの」

「ふうん？」

まだ余裕のある表情の旬に対して、奈津美は何だか悔しくなった。

奈津美は旬に覆い被さるように唇を重ねた。

最初は触れるだけで、ゆっくりと唇を舐めたり、吸ったりして、そのうちに奈津美の舌が旬の唇に割って入った。

しかし、旬は昨夜やさっきのように慌てたり抵抗する様子があった。

もしかしてこの雰囲気のままいけるかもしれない。

頭の片隅でぼんやりとそう思った。

「……あっ」

不意に、体の中心に痺れた感覚が走った。

「や……」

旬の右手が、奈津美の中心に触れていた。

「……やっぱり、昨夜ので敏感になってる？」

「ちが……あっ」

指の先で撫でられただけで、肩が震えた。

「やだ、何して……んっ」

「ん？ 俺はする方が好きだから」

「あっ……旬は、しなくていいのっ」

旬の指の動きに感じながら奈津美は言い返した。

「ナツも好きならしたらいいじゃん」

旬はそう言って、奈津美の中に指を入れた。

「あっ」

旬の体の脇についている両膝の力が抜ける。

旬の顔の横に手を付き、何とかバランスを保とうとするが、それ  
もなんとかギリギリのところだ。

「すげえ……ナツが感じてるところ、下から見るの初めてだ」  
吐息を漏らしながら旬が言った。

「何言って……んんっ」

奈津美は唇を噛み、眉間に皺を寄せた。

また、昨夜と同じだ。

口を開いてしまったら、声が出てしまう。それを必死に堪える。

「ナツ……エロい」

旬が左手で奈津美の胸の先端を摘みながら言った。

「はっ……あっ」

「ナツ……可愛い」

旬の言葉を聞いたのと同時に、奈津美は旬の上で絶頂を迎えた。

そのあとは、旬に体勢を組み替えられ、旬に優位な状態で二人は  
交わった。



気付いたら、もう十一時を回っていた。

奈津美はキッチンでスクランブルエッグを作っている。

結局、また旬のしたい通りになってしまった。奈津美の言ったことなんてまるでなかったみたいだ。

自分はしたいようにするくせに、何で自分だけ……

当の本人は今、シャワーを浴びている。

朝一で奈津美と交わったことが満足の様子だった。

しかし、奈津美は不機嫌だった。

行為そのものが嫌だったというわけではない。奈津美が思っていた展開にならなかったのがまたもや許せない。

ここまで頑なに嫌がるとなると……一体何が原因なのか、分からない。

奈津美には、旬がなくていい、という理由がやっぱり見当もつかない。

夢のことをネタに問いただしても、しなくていいという一点張りだ。理由らしい理由もない。

奈津美の経験上だが、男というのは、女から愛撫されるのを嫌がらないのではないかと思う。旬のように、若くて好奇心や性欲が旺盛なら尚更だ。

ある程度経験があつて落ち着いた男だったり、女性に対する理想があつたりする男は、積極的な女の行動に引いたりもするが……しかし、旬の場合はそれとは違うように思う。

やはり、されることが嫌いというわけではなく、されたいという欲求の方が強い筈だ。

大体、いい雰囲気であそこまで嫌がるなんて、ムードがぶち壊してはないか。ああいう場合は、流れのままにされてしまえばいいのに。

旬はその辺りのこともよく分かっていない。

「ナーツ」

「きゃあ！」

後ろから急に抱き締められ、奈津美は思わず叫んでしまった。

「えっ、何。今のそんなにびびるとこだった？」

旬は目を丸くしながら聞いてくる。

「ちょっと、もう！ 火使つてるときにふざけないでっていつも言ってるじゃない！」

奈津美は怒って旬に言った。

「ごめんって。俺、別にコソコソしてたわけじゃないし、ナツも気付いてるかなーって思っ」

いつもならヘラヘラしている旬だが、奈津美の驚きように旬も素直に謝ってきた。

普通に近づいてきてたのか。

ぼーっと考えていたせいで、全然気付かなかった。奈津美も驚くほどに心臓が大きく振動していた。

「……朝ごはん何かなーって思って近づいたんだけど……」  
旬は奈津美の表情を窺いながら控えめに聞いてくる。

奈津美は、そこまで驚かせてしまったのかと反省し、もういつも通りにすることを努めた。

「朝ごはんっていうか、もう遅いからランチにしちゃうね。ピザトーストにしようかなって」

「おっ。いいねー。俺、ナツのピザトーストめっちゃ好き」  
旬は笑顔になって上機嫌になる。

「そう。じゃあ、今から焼くからちょっと待っててね」

「うん！」

無邪気な旬の笑顔に、奈津美の気持ちも和んでいだ。

……って！ 何和んでるのよ！

普段の匂の顔を見ると、戦意喪失してしまう。もちろん、それはいいことなのだが、今日はなんだか許せなかった。

## 45 嫌がる理由（後書き）

小説トップページにもリンクを貼ってますが、「ダメ男」シリーズのアンケートを作りました。

もう答えて頂けたでしょうか？ 答えてくださった方ありがとうございます！

まだまだ回答数が少ないので、まだ答えてない方は是非ご協力下さい！

## 46 大切なこと

さっきはつい、和んだやりとりをしてしまったが……これはどうしてやろうか。

奈津美は旬がピザトーストを頬張るのを見ながら考えた。

旬は、奈津美がこんなことを考えているなんて思いもしていないだろう。

ただ、休日の朝から奈津美と『仲良く』できて、その『運動』の後の食事だからさぞおいしく感じているに違いない。

自分だけ満足して……いい気なもんよね。

……て、これじゃあまるで欲求不満の女みたいじゃない！

よく考えたら、今日起きてからずっとそのことについて思考している。

別に、そういうわけじゃないし……ていうか、やっぱり旬が悪いのよ！ 年中発情期のくせに彼女からしようとしてやった時は嫌がるんだら！

あーもう！ 考え出したらイライラしてきた！

「ナツ？」

「……えっ？」

匂の声に奈津美はハッと我に返った。

「どしたの？　ボーっとして。食べないの？」

そう言って匂はピザトーストの最後の一口を放り込んだ。

「うんっ。何でもないよ？　それで、何？」

奈津美は首を横に振って、笑顔を作った。

「今日どうする？　って聞いたんだけど」

「え……どうって？」

「別にどっか出かける予定とかなかったじゃん？　だからどっか行く？」

「……あー。どうしょっか」

匂に言われてぼんやりと考える。

いつも、デートの予定もなく泊まりの時は、二人でランチに行ったり、目的もなく買い物に行ったり、また、面白そうな映画がやっていたら映画を見に行くこともある。

しかし、今日はもうブランチにしているからランチに行くということはないし、買い物は先週カオルと行ったばかりだし、映画も特にみたいと思うものがない。

「今日は別に出かけなくてもいいかなあ」

特に何も思い浮かばなかったので奈津美はそう言った。

「あ、でも、スーパーには買い物に行こうかな。晩御飯の買い出しとか」

今日もまた、奈津美は旬の部屋に泊まる予定だ。昨日、食材はいくらか買ってあるが、予想以上に旬の部屋に何もなかったので、今日も買出しにいかないと今日の分は足りないだろう。

「んじゃ俺も行く！」

「そう？　じゃあ、お昼過ぎに行こうか」

「うん！」

そういうわけで、奈津美が洗濯物をしたり、昨日やり残した掃除をした後に、二人で近所のスーパーに出かけることにした。

玄関で、旬が先に靴を履く。奈津美は、ストラップのついたパンプスだったので、上がり框に腰をかけて靴を履いた。

ふと顔を上げると、そこに立っていた旬の股間が目線の高さにあった。無意識に凝視してしまった。

……って！　何、気にしてんのよ！

いつも、旬が見せてきても避けてたのに、つい目が行ってしまった。

絶対旬のせいよ！　いつもはこんなじゃないんだから！



「ナツ、履けた？」

「あ、うん！」

旬の声に、奈津美は慌てて立ち上がった。

「じゃあ出るよ」

旬が玄関のドアを開けて先に外に出て、奈津美もそれについて外に出た。旬が部屋の戸じまりをして、奈津美の方を向く。

「んじゃ、いこっか」

そう言って奈津美の手を取った。

「うん」

繋いだ手の感触に、奈津美はなんだか懐かしさを感じた。

そう言えば、目的は何にせよ、二人で外を歩くのも久しぶりなのだ。必然的に、旬と手を繋ぐのも、久しいことになる。

なんだかくすぐったい。でも、嬉しい。

「なあ、ナツ。今日の晩ご飯なに？」

旬が繋いだ手をブラブラと振りながら聞いてきた。

「うーん。何にしようかな。旬は何食べたい？」

「んー。がつつりしたのが食べたいなー。……あ、丼系がいい！」

「丼？ 何丼でもいいの？」

「肉が乗ってるのがいい」

「お肉ね。じゃあスーパーで決めよ。何があるかなあ」

こんなたわいもない会話をしてたら、昨夜や今朝のことが嘘のようだ。

それでも、これが普通だったなと思う。

旬が将来へ向けての仕事を始めてからは、なかなかこんな時間がなかった。前までは当たり前だったのに……

「あ、ナツ！　たい焼き売ってる！」

スーパーに着き、外にある出店を指さして言った。

「俺食いたい！　おやつあれにしょ！」

「はいはい。じゃあ帰りに買おうね」

「うん！」

子どものようにおねだりをして、満面の笑みでうなづく旬を奈津美は微笑ましく見ていた。

こういうところは前から変わらないのよね。

気は抜けるが、休みの日なら丁度いいくらいだ。

買い物の最中も、旬は自由だった。

「あ、なんか珍しいお菓子ある」

菓子類の陳列棚が目に入ると一目散にそこに向かう。

「期間限定だってー。これ買おうよ」

スナック菓子の袋を奈津美に見せて旬が言った。

「たい焼き買うんでしょ？ それならいらないわよ」

「えー。じゃあ晩御飯のあとのおやつ」

「そんなのいらない」

「んじゃ、晩酌のつまみにしようよ」

「おつまみならあたしが作るわよ？」

「んーじゃあ明日のおやつってことで」

勝手に決めて、最終的には旬が持つ買い物かごの中に入っていた。  
た。

「ああ、もう……」

「ナツが食べなかったら俺が食べるもーん」

旬は何食わぬ様子でまた違う棚をみていた。

旬は、奈津美がいない時はお菓子ばかり食べている。

昨日掃除をして、ゴミがその残骸ばかりだった。

いつものことといえばいつものことだが、今回はいつもより多いように思えた。

旬の部屋に行くことが少なかったからなのか、それとも実際に量が増えているのか。どちらにせよ、その分偏った食生活をしていたのには変わりない。

旬は肉がいいと言ったが、それも本当にいいのか悩むところだ。

食生活には気をつけようと思いながら、つい、旬に聞いてしまう。考える手間が省けるし、旬が食べたいと思うものを作りたいと思うからだ。

旬の希望通りで、かつバランスもよく、と考えるところが結構骨が折れる。旬が好き嫌いなく、何でもおいしいと言ってくれるのが救いだ。

「ほら、旬。お菓子はあとで。先に晩御飯の材料買うよ」

奈津美は旬の腕を引っ張ってそのエリアから旬を遠ざける。

「えー」

「えー、じゃないの」

不服そうな旬の声は無視して奈津美は生鮮売り場へと向かう。

なんだか、こんな感じも久しぶりな気がする。

旬は意外にも物事をしっかりと考えているが、子供っぽいところ

もあるのだ。手を焼くけれども、そういうところもやっぱり好きなのだ。

買い物を終えて、たい焼きを買って、二人は家路につく。

「なー。たい焼き食べながら帰ろーよー」

スーパーを離れて少しのところで旬が言った。

「すぐ家に着くじゃない」

「えー。俺、腹減ったのに……」

「もうちょっと我慢して」

口をとがらす旬を、奈津美はなだめる。

「いいじゃん。できたて食べた方が美味いって」

そう言いながら、旬は奈津美が持っていたタイ焼きの袋を取った。

「あ、旬！」

「いいのいいの」

旬は構わずに袋を開けて、手を突っ込む。

「えっと。ナツはあんこだったよな。はい」

「……もう」

笑顔でたい焼きを渡してきた旬に、奈津美はあきれながら、結局

たい焼きを受け取った。

「俺、カスタードー。いっただっきまーす」  
旬はウキウキしながら自分の分を取り出し、さっそくかぶりついた。

「……いただきます」  
奈津美も仕方なく、たい焼きをかじった。

「……ナツってたい焼きは頭から食べる派？」  
モグモグと口を動かしながら旬が聞いてきた。

「え？ 普通そうじゃないの？」

「俺、しっぽから食べる派」  
そう言って旬は自分が食べていたたい焼きを見せる。確かに、旬のたい焼きは、しっぽのほうからかじられている。

「へえ……みんな頭から食べるんだと思ってた」

別にどこから食べようが大差ないことだが、奈津美は今まで何も考えずに当たり前のように頭から食べていたので、何となく意外に思った。

「だいたいみんなそうだよな。俺、珍しがられるもん」

「じゃあなんでしっぽから食べるの？」  
これこそどうでもいいことだが、何となく気になって奈津美は聞いた。

「だってさ。しっぽの方って、何も入ってないこと多いじゃん」

「うん」

頷きながら、奈津美は不思議に思う。旬は基本的には、好きなものから食べる。それなら確実に中身の入っている頭の方から食べるのではないのか。

「頭から食べたなら、最後にしっぽが残るだろ？　最後になんも入ってないのって、何か嫌じゃん」

奈津美は、なるほど、と思いながらも、そういうものなのか？とも思った。最初に何も入ってない方が嫌だと思うが。

「でもたまーに、しっぽまでちゃんと詰まってるのもあるだろ？しっぽから食べた時に、それが分ったら、何かラッキーな感じがしない？」

旬はそう言って笑い、たい焼きをかじった。

「ふーん……じゃあ、このたい焼きはどうなの？」

「んー。まあまあラッキーかな。一口目でクリーム見えたくらいだから」

「そっか」

奈津美は笑いながら自分のたい焼きをかじった。

「ん。一口食べる？」

旬が自分のたい焼きを奈津美に差し出す。

「……旬はあたしのも食べたいんでしょ？」

「へへっ。 バレた？」

「いいけどね、別に」

奈津美はあきれたように言いながら旬とたい焼きを交換する。

「やっぱりたい焼きはあんこも捨てがたいっていうかさー。たまにカスタードとか見つけるとそっち選んじゃうけど」

旬は奈津美のたい焼きをかじって満足そうにうなずいた。

「うん。何となく分かるけどね」

奈津美も旬のたい焼きを一口かじった。あんことは違う甘さが口に広がる。

その甘さに、奈津美はなんだか満たされていた。

こうやって、手をつないで歩いたり、どうでもいいことで話ができて、それが楽しいと思える。そんな相手は、なかなかいないのではないか。そういう相手との、そういう時間は、大切なものではないだろうか。

体を重ねたり、愛し合う行為も大切なものかもしれない。しかし、それだけが大切なのではない。もっと他のことでも、十分補える。

なんか、どうでもよくなってきたかな。

旬の横顔を見ながら、奈津美はそう思った。



## 47 嫌がる理由(2)

「あー。美味かった。ごちそうさま」

匂は両手を合わせてきちんと言った。

「はい。おそまつさま」

奈津美も笑顔で返した。

今晩は、鶏のもも肉が安かったので、それを使って唐揚げ丼を作ってみた。前に店で食べたことがあるメニューで、自分なりのレシピで作ってみたのだが、匂も気に入ったようだ。きれいに食べてくれた。それ以外のサラダやおひたしなども、残さず食べている。作る側としては、匂の食べっぷりは気持ちいい。

「ふー」

匂は一息ついて、ゴロンと床に横になった。Tシャツの中に手を突っ込んで腹を掻いている。

「もー。匂ってばだらしない」

「いいじゃん。家だし。食休みだし」

そう言いながら匂は寝ころんだまま体を動かす。

そして、奈津美の膝の上に頭を乗せてくる。

「ちょっと……匂」

「気にしない、気にしない。今更じゃん」

「もう……」

いつものように寛いでいっている。奈津美の膝の上も、匂にとってはプライベートの場と化している。

「あー。ナツの膝ってなんでこんなに気持ちいいんだろ」

匂はそう言って奈津美の太ももに頬ずりをする。

「ジーパンでも気持ちいいの？」

奈津美は今、細身のシーパンを穿いていて、正座を少し崩した座り方をしているので、あまり柔らかさを感じないだろうに。

「ナツの太ももってだけで気持ちいいの。まあ、生が一番気持ちいいってことには変わらないけど」

「もう……何言ってるのよ」

「へへっ」

いつものように笑いながら匂は顔を奈津美の腹に押し付けてくる。

「ちょっと、やだ、何してるの」

「んー。ナツの匂い……」

匂は鼻で息を吸いこみ、奈津美の匂いを嗅いでいる。

「やだ、匂……」

匂の手が、奈津美の服の中に入ってきた。

背中の方から手を入れて、直に腰を撫でてくる。

「匂ってば、何してんのよ」  
これくらいの触り方ならしょっちゅうなので、奈津美もう慣れている。

「触るだけー」  
そう言いながら匂の手は奈津美の背中を上って行き、ブラジャーのホックに手がかかる。

「え……ちよつと……」  
匂の手の感触に焦ったと同時に、ホックが外された。そしてもう片方の手で、ジープンのボタンをはずして、ジッパーまで下ろされた。

「えっ、何!? やだ、匂!」

「触るだけでもーん」

匂は体を起こし、奈津美のことを抱きしめた。右手を背中の方に入れ、左手をゆとりのできたジープンの尻の部分に入れる。

「やだ……ダメだってば……」  
奈津美は体を振って抵抗するが、匂の手は離れない。

「触るだけだから、ナツは気にしないで」  
そう言いながら匂は奈津美の尻を下着越しに揉んだ。

「それとも、ナツが気持ちよくなりたいんなら、そうするけど?」  
耳元で囁かれ、奈津美は顔を赤くする。

「匂っ!」

奈津美が体で繋がるよりも一緒の時間の方が大切、と思ったのにも関わらず、匂の方は明らかに下心を見せている。なんてタイミン  
グが合わないんだ。

しかし、ふと奈津美の頭にある考えが浮かぶ。

「……じゃあ、匂」

「ん？」

「あたしも触っていい？」

上機嫌で奈津美の体を触っていた匂の手が止まる。

「……何を？」

「匂の……その、えっと……」

聞き返されると、その単語を言えるはずもなく、奈津美は、そつ  
と匂のジューパンのジッパーのあたりに手を置いた。

「……だっダメ！ 何やってんの、ナツ！」

一瞬だけ固まって、匂はすぐに奈津美の体を離し、奈津美の手を  
掴んでそこから離す。

やはり、こんな反応だ。

「……何で？」

奈津美はじっと匂の目を見つめた。

「何でそこまで嫌がるの？ 何で自分はよくて、あたしがするのはダメなの？」

また昨夜と同じように奈津美は匂に言った。

「何でって……だって、やっぱりナツがするようなことじゃないし」

「どうして？」

これではまた同じような問答の繰り返しだ。

「だから、その……ナツにはさせらんないっていうか……」

昨夜から、匂は同じことを言っている。奈津美はしなくていい。奈津美がするようなことじゃない。奈津美にしてほしいわけじゃない……

何一つ、納得できない言い方だ。

匂は、観念したように溜息をついた。

「わかった。正直に言うよ」

そう言って、匂は奈津美の両肩に両手を置いた。

「確かに、俺、妄想とか夢の中では、ナツにそういうことしてもらってるよ。ていうか、それ以上に、あんなことも、こんなことも、そーんなこともさせてるよ。たぶん、これ言ったらナツに嫌われるんじゃないかってくらい……って、ナツ！ 早速引かないで！」

話を聞いて早速顔が引きつっている奈津美に、匂は慌てる。

「ナツがそういう反応するだろうなって思ったから言いたくなかったわけで……その、さ。そういう風に勝手に妄想してるけど、実際そういうことになる……」

最後の方の語尾が尻すぼみになっている。実際そうなる、奈津美が、匂に触れようとすると、どうなのだろう。

「……引いた？」

奈津美は恐る恐る聞いた。積極的な奈津美の姿を見て、いつもと違う奈津美にマイナスのギャップを感じたのか。

「ううん！ そんなわけじゃないじゃん！」

匂は思い切り首を横に振った。

「俺、嬉しかったんだよ？ 本当に。夢にまで見たことが、現実につて、思ったんだ。でも……実際にしようとすると……」

匂がチラッと奈津美を見た。じっと匂を見ている奈津美と目が合うと、気まずそうに視線をそらす。

「その……なんていうか……汚しちゃうような気がして……」

「え？」

予想すらしていなかった言葉に、奈津美は固まる。匂はなぜか赤くなっている。

「汚すって……何を？」

「……ナツを」

「……え？」

奈津美はきょとんと旬を見た。

「どういうこと？」

旬の考えに、もうついていけていなかった。

「だって、ナツ、きれいだから。妄想の中ではできても、実際そんなことさせようとすると、すごく、恐れ多くなるっていうか」

旬はがりがりと頭をかいた。

「あーもー！ 全然うまく言えないけど！ なんていうか、ナツのこと目の前にするとビビっちゃうの！ 俺なんかいいのかって、そう思っちゃうの！」

「旬……」

奈津美は目を丸くした。まさか旬が、そんな風に思っていたなんて……

「今更何を言ってるの？」

旬の思いには驚いた。しかし、旬がそれを言うには、本当に今更だった。

もう一年以上も付き合っていて、それも、付き合っすぐ（むしろ付き合う前から）体の関係も持つようになっていた。その行為自体は、旬に優位な形でされることが多かった。つまり、旬は奈津美のことを好き放題することの方が多いのだ。

それを今更、恐れ多いなど、どの口が言えたことなのか。

「そうなんだけど！ 俺も言いながら思ったけど！ でも、なんか、

ダメな気がして……」

「ダメって……あたしがいいって言ってるのに？」

「ダメっていうか……その……例えば、食べたくて食べたくて仕方なかった高級なケーキがあったとして、それを目の前に置かれて、食べていいよって言われるとするだろ？　でも、実際に食べようとする、生クリームが綺麗すぎてフォーク入れるのもためらうわけ。んで、こんな一般庶民の俺が本当に食べていいもんなのかと本気で悩んでなかなか食べられない時の気持ちっていうか……分かる？」

奈津美はぼかんと口を開けている。

「旬が言いたいことは分かるけど……旬にそんな感覚あったの？」  
思ったことを素直に口にした。

いろいろ突っ込み所はあるのだが、一番の疑問はそれだった。

旬が言っていることは分かる。旬の例えはケーキだったが、他にも、新品の、それも気に入ってそれなりの値段だった服や靴だったら、ためらって身につけることができない。そういう気持ちは奈津美も共感できる。

しかし、旬がそう思うのは、意外でしかなかった。何でもかんでも質より量という旬が、品質を気にして何もできないなんて……そんなことあるのか。

「あるよ！　俺だって、それくらい思うよ！　ていうか……ナツに對しては、特に……思うよ」

旬が顔を赤くして下を向いた。



「俺は、ナツのこと大好きだから、ずっと大切にしたいって思うんだよ。だから、俺のなんか、汚いし、ナツのこと汚すようなことしたくないっていうか……ナツにそんなことさせたらもったいないっていうか……」

旬が奈津美に触られるのを嫌がっていた理由がやっとわかった気がした。

「……何言ってるのよ」

奈津美は旬のことをじっと見てつぶやいた。

「あたし、旬が言うみたいにきれいなんかじゃないからねっ」

旬はさっきから、奈津美のことをきれいなもの扱いする。しかし、そんなはずはないと、奈津美は誰よりも知っている。

「きれいだよ！ 実際めっちゃいい匂いするし美味しいし！だから俺、ナツのは見るのも触るのも舐めるのも好きなんだし！」  
旬が真剣な顔で言った。

「そっ……そんなこと言わないでよ！」

奈津美は顔を真っ赤にした。

一応、ほめられていることになるのだろうが、そんな生々しいことを言われると文字どおりに顔から火が出るほど恥ずかしい。

「俺は、ナツが俺の彼女だってだけで嬉しいし、何もしないでそこにいるだけでもいいのに、ご飯作ったり、掃除したり、洗濯してくれるし……俺が返せることって、何もないから……だから、エッチ

の時くらい、俺がリードしてたいし……」  
一つ一つ、言葉を探るように旬は言った。

「俺にとっては全然苦じゃないことだし、好きでやってることだけ  
どさ……ナツにも、同じように返されちゃったら、俺の立場がない  
っていうか……」

そんな旬を、奈津美はじっと見つめる。

「旬のバカ……そんなの、あたしだって一緒なのに」  
奈津美はそっと旬の膝の上に、手を置いた。そして、顔を旬にう  
んと近づける。

「あたしだって、旬があたしなんかのことを好きでいてくれて、大  
切にしてくれるから、あたしができることをしてるの。それで旬が  
喜んでくれるから、あたしがしたくてしてるの。そりゃあ家のこと  
くらい、ちょっとはできるようになってほしいけどね」

最後の方は小さく笑って奈津美は言った。

「それに……あたしだって、好きでしたいと思ってるのよ？ 旬が、  
あたしにしてくれてることと同じこと……あたしもしたいって思っ  
てるから……」

こんなこと、恥ずかしすぎて真面目に言えることではない。しか  
し、知ってもらいたかった。奈津美は、旬と同じ気持ちでいるとい  
うことを。

「前に、あたしが旬に触らないでって言った時の旬の気持ち……な  
んとなくわかった気がするの」

以前、奈津美がダイエットをして、太ったことがバレたくないという下らない理由で、旬に「触らないで！」と言った。その時の旬の気持ちと一緒にどうかは分からないが、一番、近い気持ちにはなっただと思う。

「だから、ごめんね」

今更謝ることでもないかもしれないが、あの時、奈津美は旬の気持ちこそそれほど分かっていなかった。だから、今度はちゃんと謝りたい。

「ナツ……」

旬は目を丸くしている。

奈津美は、旬の体に腕を回し、そっと抱きしめた。

「あたし、旬のこと大好きよ。だから、そのこと、表現させて？」

旬の胸に耳を当てる。奈津美が言い終わったと同時に、心臓の鼓動が早くなった。

## 48 してほしいと

奈津美が旬に、自分からはっきりと好きと言ったのは、初めてだったかもしれない。

今まで、旬に聞かれて、頷くだけでも恥ずかしかったのに、あの時はすんなりと口から出てきた。やはり、旬に対する心境の変化があったのだ。前以上に、旬のことを大切にしたいと思うようになった。

「……んじゃあ、どうする？」

ベッドの上で、旬が聞いた。

二人ともシャワーを浴びて、部屋の電気を落として、もうすることは一つ、という状況だ。

「あ、いや、こんなん聞くことじゃねえよな。ごめん。ちょっと……いつもと違うから……」

旬が慌てて自分が言ったことについて謝る。

こんな場面で、普通、男の方から「どうする？」なんて聞いてはいけない。しかし、旬にはこういう時にどうすればいいのか分からないのだ。

奈津美に「表現させて」と言われて、どちらともつかない返事をした。それでも少なくとも拒否はしていない。しかし、奈津美がどうしてくるか分からないので緊張していた。

「……最初は、いつもみたいな感じがいい」

奈津美は、匂の体に触れながら小さな声で言った。

「いつもみたいなの？」

「うん」

「……いつもって、ちゅーして服の上からナツのこと触って、んでちよっとずつ服を脱がしていただきます、って感じ？」

「そんな言い方しないでよ！」

奈津美は顔を真赤にして匂を睨んだ。

「だって、ナツがいつもみたいになっていうからじゃん」

匂は口を尖らせて言い返す。

「言ったけど……それは、自然にっていう意味で……」

「この流れで今更自然にってこともなくね？」

「それは……そうだけど……」

もっともなことを匂に言われ、奈津美は言葉が出ない。

確かに、今日は奈津美が匂を誘ったようなもので、その時点でもと違う。お互いに緊張していて、二人の雰囲気も、いつも通りというわけにはいかなかった。

「……俺、ナツと初めての時もこんなに緊張しなかったんだけど」  
匂はそう言って、気持ちを落ち着けるために深呼吸をした。

「……あたしは、初めての時と同じくらい緊張してるよ？」

「え、ナツ、あんなに酔っぱらってたのに？」

「ちがっ……その時じゃなくてっ」

奈津美は、初めての旬が奈津美の部屋に泊まりに来た時のことを言っているのだと思って言ったら、旬は、奈津美と初めて出会ってホテルに言った時のことを言っているらしい。

あの時のことは、記憶になくても恥ずかしい。というか、記憶にないからこそ、何をしていたかが分からなくて恥ずかしい。

「もうっ、旬！」

奈津美は顔を赤くしてむくれる。その様子を見て、旬はクスッと笑った。

「そういうところは、変わんないなあ」

そう言いながら、旬は奈津美の頬を撫でた。

「何？ 直せっていうの？」

こういう、すぐにムキになるところ。奈津美自身も直した方がいいと思っている。それでも、なかなか直らないからたちが悪い。

「ううん。可愛いよ」

そう言って、旬は奈津美の額に短く唇をあてた。

あまりの素早さに、奈津美はきょとんと旬を見つめる。

「その顔も可愛い」

「……もう」

奈津美は照れくささから顔を下に向けた。匂はその体を抱きしめると、胸元にある奈津美の頭に頬ずりをした。すると奈津美が顔を上げ、その頬に唇をつける。

そうしたら、どちらからともなく顔を近づける。先に目をつぶったのは、奈津美だった。

唇が触れると、互いに背中に手を回して抱きしめあう。

「……自然って、こんな感じ？」

ほんの少し唇が離れたところで匂が言った。

「そんなこと聞かなくていいの」

「そだな」

匂はクスツと笑うと、また奈津美の唇を塞いだ。今度は唇の間に舌を割って入れて奈津美の口内を舐めた。

奈津美もそれに応えて、匂の舌と自分の舌を絡め匂の口内を舐めつくす。

口づけを交わしながら、匂は奈津美のパジャマの裾から手を入れる。いつもと同じような行動だ。

しかし、今日は少し違った。いつもは匂のするままに身を委ねる奈津美だったが、今日は、奈津美も、匂と同じように、匂が着ているTシャツの裾から手を入れて、匂の背中を直に触る。

いつもと違う行動に、匂は面喰ったが、それでも奈津美がするままに従っておく。奈津美が、匂への思いを表現させてと言ったのだ。きっと、これもその一つだ。

匂はいつも通りに、奈津美の肌を堪能し、胸の膨らみを少し強めに掴んだ。

「ん……」

奈津美が眉間に皺を寄せ、唇の間から声を漏らした。

「ごめん、痛かった？」

唇を離し、匂は誤った。

「ううん。ちょっと、びっくりしただけ」

そう言って、奈津美は恥ずかしそうに笑った。

こんな奈津美の表情に匂は弱い。そのまま奈津美の体を倒し、奈津美の首筋に顔を埋め、唇を這わす。

「ふふっ……匂、くすぐりたい」

奈津美は首をすくめた。いつもされることではあるが、今日は匂も興奮しているのか鼻息が荒い。その息が首にあたるのがくすぐりたい。でも、それすらも愛おしい。

首筋に埋まっている匂の頭に腕を回し、匂の髪に指を入れた。ちゃんと髪を乾かさなかったのか、まだ少し湿っぽい。

匂は奈津美の腕からすり抜けるように首筋から奈津美の胸元に顔を移動させる。パジャマ越しに奈津美の胸に顔をうずめ、鼻から思い切り息を吸った。奈津美が使っているボディソープの匂いがする。匂もさつき使ったが、奈津美の体からする匂いは、また格別ないい気がする。

「あー。落ち着く」



目をつぶって匂は言った。

「……落ち着いちゃうの？」

そのまま眠りに落ちてしまいそうな雰囲気さえする匂に奈津美は尋ねた。

すると匂は奈津美の胸元から顔を上げた。

「そんなわけないじゃん。ちょっと和んだだけ」

そう言って奈津美はへへっと笑うと、奈津美の唇に口づける。

そして、さっそく奈津美のパジャマのボタンに手をかけた。

キスをどんどん深くしながら、ボタンをはずし、白く、豊かな二つの膨らみをあらわにしていく。すると、奈津美も匂のTシャツの裾を上にかくし上げていく。こんな行動も、今までになかった。

胸元まであげられると、匂は自分でTシャツを脱いで、ベッドの下に落とす。それから、奈津美のパジャマの袖から腕を抜いた。奈津美は自由をもらったかのように匂の背中に腕を回し、強く抱き締めた。しがみつくようにしてくる奈津美の体を浮かせ、匂はパジャマも床に落とした。

奈津美は匂に抱きつき、また顔に唇を寄せてきた。唇を重ねると、奈津美の方から匂の唇をむさばるように合わせてくる。

二人は密着して、じつくりと肌と肌を重ね合わせた。触れていない部分がじれったいくらいに、肌をこすり合わせ、両手で背中を撫でます。

まだ身に着いている下半身の布地も今は邪魔でしようがない。

「ナツ……」

旬は奈津美から唇を離し、手を奈津美のパジャマのズボンにかけた。

「あ……」

下にすらされる感覚に、奈津美は目を丸くした。そして、奈津美もまた、旬のスウェットのズボンの尻のあたりを掴んでわずかに下に引っ張る。

「旬も……」

下からじいっと旬の目を見つめた。

奈津美と目が合うと、旬は深くため息をついた。

旬の態度に、奈津美は不安げな顔をする。

「もう、ナツ、どうしたいの？」

「え？」

「襲いたいのか？ 襲われたいの？」

いまだかつてなかった、積極的な奈津美の様子と、なおかつ、甘えた表情の奈津美。この組み合わせは、旬が今まで見たくて、しょうがなかったシチュエーションの組み合わせだ。旬の理性もぶつとぶ寸前だ。

「ホント……可愛すぎる」 旬は言い終わると同時に奈津美の首筋

に顔を埋めた。そして、右手で奈津美の胸の先端を強めにつまむ。

「はっ……」

鋭い刺激に奈津美の肩が上がる。

「気持ちいい？」

耳元で匂が囁いた。

「……やっぱり匂ばかりずるい」

瞳をうるませて奈津美は匂を見る。

「あたしも同じことする」

そう言って奈津美は匂の胸板に手を置いた。そして手探りでソレを探す。

「……あった」

胸の突起を探り当て奈津美はつぶやいた。奈津美のものより小ぶりで、目立っていない。

「うおっ。くすぐってえ！」

いつもは感じない刺激に、匂は体を大きくよじった。

「男のなんて触っても面白くないでしょ。俺、そこはセーカンタイじゃないし」

「せっ」

奈津美は顔を赤くした。

「ナツのここは立派なセーカンタイだけど」  
そう言って指先でそれを押し込んだ。

「んっ……」

素直に反応を示す奈津美に、匂はクスリと笑う。

「可愛い……」

奈津美の耳元で囁いた。

奈津美は耳まで赤くして、悔しくて対抗意識から奈津美も同じように匂の胸の突起を指で押した。

「……俺のは押しても何にもないよ？」

匂は勝ち誇ったようにニヤリと口元をゆるめた。

「……意地悪」

唇を尖らせ、奈津美はすねたように上目づかいで匂を見る。目が潤んでいて、艶っぽい表情になっている。

「……わかった。ナツは俺に襲ってほしいんだ」

奈津美の表情に煽られ、匂は奈津美の体を下に組敷いた。

「ちがっ……なんでそういうことになるのっ」

奈津美は動揺して首を大きく横に振った。

「だって誘ってくるようになっつか、襲われたってしょうがないような顔してるし。めちゃくちゃフェロモン出てるから」

「フェロモンって……」

「超出てるよ。このへんかな……」

匂は奈津美の首筋に鼻を近づける。

「やだ……」

「こっちな」

そう言って奈津美の胸に顔をうずめて匂いを嗅ぐ。

「ちょっと……」

「あ、もしかして……」

胸元から顔を上げ、匂はニヤリと笑った。

「こっちなー？」

奈津美のパジャマ越しに身体の中心核に触れた。

「……今、そっちは関係ないじゃない」

奈津美は顔を赤くなりながらも、強気で言った。

「じゃあ、確かめていい？」

「……ダメ」

「何で？」

「何でも！」

奈津美は、自分がどういう状態になっているのか分かっていて、匂に触れられるだけで、そこは条件反射で期待してしまうということも……

「えー？ 確かめないとさあ。最終的にデキナイでしょ？ 色々」と

「……じゃあ、あたしもしていいの？」

奈津美はじつと旬のことを見上げた。

奈津美の発言に、旬はきよんとしている。

「あたしも、旬の……確かめていい？」

「……え？」

旬はぽかんと口を開けて、奈津美の言っていることが理解できていないようだ。

「今日は、あたしもする日だもん」

旬の胸元に頬をよせ、奈津美は言った。

「そういえば、そういう話だったっけ？」

とぼけた様子で旬が言った。うっかり夢中になってしまっていたが、もとはそういう話だったような……

これでも十分満足なだけだな。

いつもよりも積極的で、旬のことを求めていると分かる奈津美の様子は、旬にとっては新鮮で、ひそかに夢見ていたものだ。もともと、男の欲望としてはあっても、奈津美に対しての希望は（ほとんど）なかった。今更しくたたって、何の不満もない。

「もういいじゃん。今日はこのままいつも通りでも」

旬が笑顔で流そうとすると、奈津美は口を引き結んで視線を下に向けた。

「……ナツ？」

「……いつも通りって、飽きちゃわない？」

「え？」

旬は思わず聞き返した。

「だから、いつも通りだったら、飽きないの？」

奈津美の顔は真剣だった。

「……いや、俺は、そんなことは……」

どうしてそんなことを聞くのかと思いながら答えると、旬ははつとする。

「も、もしかして、ナツは飽きてきたの？ 俺とのエッチ……」

「ううん！ そんなことないよ！ あたしはいつも……って、そうじゃなくて」

慌てて首を振って、またさらに慌てて言葉を切った。

「……いつも、どうなんだろう。」

旬はその先の言葉の方が気になったが、タイミングを逃して聞けなかった。

「今日は、あたしも旬にしたいから……ダメ？」

もう何回目にもなるおねだりに、旬は胸を射抜かれた。

「なんかもう、その言葉だけでダメかも」

そう言って、旬は奈津美の体を抱きしめた。

二人は向かい合って横になり、互いの背中に手を回す。

「……よく考えたらさ。今更だよな」

旬が小さく笑いながら言った。

「何が？」

奈津美はきょとんとしながら答える。

「風呂入ったらやることは一つなのに、着るもん着てるのとか。特に今日はやる気満々だったのに。それもナツが」

「なっ……」

奈津美は顔を真っ赤にして旬に言い返そうとする。しかし、今日に限っては旬が言っていることが間違いとは言えないので口をつぐんだ。

「だって……着てないのも、恥ずかしいもん」

旬から視線をそらし、小さな声で奈津美は言った。

「……なんか、ナツって恥ずかしがるポイントがよくわかんねえよな」

奈津美の方から大胆に言うておきながら、待ち構える姿はいつもと同じだ。



「まあ、めっちゃくちゃ可愛いからいいんだけどな」

そう言って、匂は奈津美の額に唇をつけた。

そして、体を抱きよせながら、パジャマのズボンごと下着に手をかける。

「ナツ……俺の上くる？」

「ん……」

奈津美が上半身を起こし腰を浮かせて下半身に着けていたものを外していく。

それから奈津美が匂のスウェットのズボンに手を掛けると、匂はその手の上に自分の手を重ねて、自分で脱ぐ。

互いに、隠すものは何もなくなった。

奈津美は匂にの唇に自分の唇を寄せた。

匂の胸元に手を置いて匂に覆いかぶさるように口づけを交わす。

奈津美の後頭部に左手を回し、匂も奈津美の唇を優しく吸った。

そして匂の右手は、奈津美の腰を撫でる。

唇が離れると、匂は右手で奈津美の下半身を誘導し、膝立ちで匂の顔を跨らせる。奈津美がそのまま体を前に倒すと、すぐ目の前に匂の股間がある。

互いに目の前に自分の最も敏感な部分をさらけ出す。この姿勢になるのは初めてだ。

先に匂が指先で奈津美に触れた。

「あっ……」

反射的に奈津美の太股の内側に力が入る。そこはもう十分すぎるほどに潤っている。

匂は頭を少し浮かせて直接口づけた。また小さな喘ぎ声を洩らし腰を浮かせたが、匂は奈津美の腰に腕を回し、動かないように固定する。

「んんっ……」

いつもと違う姿勢で受ける刺激に、奈津美は、歯がゆいくらいの快感を覚える。

しかし、奈津美もいつまでもされてばかりというわけにもいかない。奈津美は目の前の匂に触れた。

そこはすでに興奮状態にあったが、まだ匂の最高値ではない。上下に摩るように触れると、それはピクリと脈打った。

その刺激に、匂は息をつめた。

自分で触れるのと、まるで感覚が違う。それも、匂が誰よりも思う奈津美の手だ。奈津美によって触れられていると思うだけで感じてしまう。

だが、男として、素直に感じているだけでは情けない。匂は今唇が触れているところにさらに吸いついた。

「ンアッ……」

奈津美への刺激が強くなり、奈津美は思わず手を握り締めてしま

った。

「あ……ごめん、匂……大丈夫？」

奈津美は今の行為に対して謝った。男のデリケートな部分だ。下手なことはしてはいけない。

「全然大丈夫」

匂は余裕ぶってそう言ったが、本当は奈津美が思っている別の意味でヤバイ。

下手に奈津美のことを刺激するわけにはいかない。しかし、自分の限界を気にしてしまうのは、彼氏としての沽券にかかわるというものだ。

匂が色々と考えていると、急に生暖かいものに包まれる感覚があった。反射的に足の方もピクリと動いた。

この感触は……

目には見えないが、頭の中に、奈津美が今しているであろう光景がリアルに思い浮かぶ。

一気にそこに血液が集中していくのが分かる。その上、更に奈津美が柔らかい刺激を与える。

……ヤバイ！

「ナツツ……ちょっと、ストツ……」

奈津美から唇を離し、奈津美の行為を制止させようとする。しかし、匂が下になっているこの体制では、叶わなかった。

「ナツ……くっ」

匂のそれが大きく脈打った。

間に合わなかった。

自分の手で放出したわけでも、奈津美との交わりで放出したわけでもないのに、けだるい感覚があって匂は深く息をついた。

出しちまった。しかも、こんなに早く……

解放感があるはずなのに、匂は自分でしたとき以上の恥ずかしさや自責感があった。

何もできずに天井を見つめていると、奈津美がゆっくりと体を起こし、匂の上から下りた。それに慌てて匂も体を起こす。

「ナツ、ごめん！ ……その、我慢できなくて……」 奈津美に謝罪するも、情けない言い訳しか出てこない。

奈津美は口元を手で押さえて黙って首を横に振った。眉間に皺を寄せて、視線を下に向けている。

「うっ……」

奈津美が小さくえづいた。

「わー！ ごめんっナツ！ そんなの飲まなくていいから！」

旬は慌ててティッシュを数枚取り、奈津美の口元に持っていく。

奈津美はそれを受け取り、ティッシュの上に口の中のものを出した。

「……ごめんね？」

奈津美は上目づかいで旬を見て奈津美は旬に謝った。まだ少し、渋い表情が残っている。

「ううん！　つうか何でナツが謝んの！　俺、ナツにそこまでしてほしいとか思っていないし！」

旬は思い切り首を横に振った。

「……あたしも、そのつもりはなかったんだけど……こんなにすぐ出てくるなんて思わなくて……」

旬の言葉が旬の胸に突き刺さった。

「……うん。それは、ホントにごめん」

目に見えて落ち込んだ様子で旬がまた謝った。

それを見て奈津美は自分の発言のひどさに気付いた。こんなこと、本人にはつきり言っていないものではない。

「ちがうのっ……そういう意味じゃなくて……タイミングが分からなかったっていうか……」

慌ててフォローするが、うまい言い方ができず、旬はどんどん下を向いてしまう。

「いいよ、もう……」

旬の半ばなげやりな言い方に、奈津美は口をつぐんだ。

「つうか、こうなるだろうって分かってたから、嫌だったんだ」

「……え？」

奈津美は首をかしげた。

「さっきは、ナツにそんなことさせらんないとか、ナツのこと、汚しちゃうみたいだからって言ったけど……つうか、それも嘘じゃないけど……ホントは、ナツにされたら、絶対に我慢できなくて……こんなみつともないところ見せると思ったから……」

下を向いたまま、恥ずかしいのを誤魔化すようにぶっきらぼうな言い方で旬は言った。

「もー！ 絶対言うつもりじゃなかったのにー！」

旬は頭をガシガシかいて喚いた。

「ナツ」

旬が顔をあげて奈津美のことをじっと見た。

「はい」

奈津美は思わずピシッと背筋を伸ばして返事をした。

「次はそんなことねえから」

「え？」

「男として、されっばなしじゃ悔しいから」

そう言って、旬は奈津美のことを押し倒した。

その後は、心なしかいつもより濃厚に体を重ねた。

「……旬。これじゃあ結局いつもと変わらないと思うんだけど」  
旬に腕枕をされながら、奈津美は言った。

「え？ 何が？」

「何がじゃなくて。……今日はあたしがするって言ってたのに」  
少しむくれて奈津美は言った。

「あー……そういえばそういう話だったような……でもいいじゃん。  
気持よさそうにして色っぽいナツを見れたら俺は満足だし」  
旬は笑いながら誤魔化した。

奈津美は顔を赤くする。

「やっぱりずるい……」  
口を尖らせ、奈津美はつぶやいた。

「ねえ。何かない？ 旬があたしにしてほしいこと」  
奈津美は真剣な目で旬を見つめて言った。

じっと一途に見つめられ、旬は固まった。

してほしいこと……と言われて、奈津美によってされる様々な行為（あくまで妄想だが）が頭を過った。

「だー！ ダメだ！」

旬は奈津美から目をそらし、首を横に振った。

「ナツ、その顔とセリフはやばいって！」

旬は顔を真赤にして言った。

突然の旬の慌てぶりが、奈津美には理解できなかった。

「正直……いっぱいあるよ？ でも、言ったら絶対に引かれると思うし……ていうか、現実離れしてるから無理だし」

「そうなの？ どんな？」

「いや、それは勘弁して！ これは男として入られたらやばい領域っていうか……ナツにも男の俺には言えないことってあるだろ？

それと同じで言えないっていうか……あ、そんなやましいことじゃない……こともないけど……」

言い繕ううちに、何がなんだか分からないようになってきた。これでは尚更あやしいではないか。

しかし、言うわけにもいかない。たとえば、今の奈津美になら何言っても受け入れてもらえそうで、あわよくば実践してもらえそうな気がしても、それはあくまで気のせいであり、なけなしの理性により踏みとどまっている。

「……それじゃあ、あたしにできることって、ないの？ 少しでもいなら、我慢してできるよ？」

奈津美の発言に、旬のなけなしの理性がぐらりと揺らぐ。しかし、あと少しのことで、なんとか踏みとどまった。

「ナツ。俺はナツに我慢させてまでしてほしいことなんかないよ？」  
微笑んで、旬は奈津美の頬を撫でた。体のいいことを言っている



が、心の中では男としての欲望が暴れ出そうとしている。

「でも……」

旬の本心には気づかず、奈津美は俯いた。旬のために、旬が喜ぶ何かをしたい。料理や洗濯など、いつもしていることはまた別のことを……

奈津美の様子を見て、旬は考え込んだ。ここまで悩まれると、どうしたらいいのかわからない。確かに、してほしいことはたくさんある。しかし、それを言ってしまうと、奈津美に嫌われる可能性がかなり高い。何か、言える範囲でしてほしいことを考える。

「えっと……じゃあさ、ナツ」

「何？」

奈津美の目が嬉しそうに輝く。その表情に、旬の胸がときめいた。

「……俺から言うの、恥ずかしいんだけど……」

奈津美から目をそらし、本当に恥ずかしそうに声の大きさを抑える。

「……その、腕枕……してほしいなって……思ったことがあって……」

奈津美がきょとんとして旬を見ている。

「腕枕？」

奈津美は思わず聞き返した。正直、もったときわどいことを言われるのかと思っていたから、拍子抜けした。

「別にいいけど、それくらい」

拍子抜けしたまま奈津美は許可を出した。

「うん、じゃあ……お願いします」

ぎこちなく言って、旬はもぞもぞと動いた。

そして体制を変え、奈津美が伸ばした腕の上に、旬の頭が乗る。

「重くない？」

「うん。大丈夫」

「ん……」

旬は奈津美に頭を預け、奈津美の胸元に顔を寄せる。

「……ねえ。これが言うのはずかしかったこと？」

奈津美は思った疑問を素直に旬にぶつけた。

この程度のこととて、言うのをためらう理由が分からなかった。男として言えないとか、奈津美に引かれるとか言っていたから、相当のことなのだろうと思っていた。それが腕枕だったのなら、何を照れる必要があったのかが分からない。

「こういうの、男から言うのは恥ずかしいんだよ」

恥ずかしいのを隠すためか、ぶっきらぼうに旬は言った。

「ふうん……でも、意外。旬、こういうこととして欲しかったんだ」

「こういうことっていうか……どちらかというとこっち……」

そう言って、旬は奈津美の胸の谷間に顔をうずめ、奈津美の胸に

触れる。

そこで初めて気付いた。奈津美が腕枕をすると、旬の顔が丁度よく奈津美の胸の前にくるのだ。旬はそれを分かって腕枕をして欲しかったのか。

恥ずかしいけれど、自分の胸元で気持ちよさそうにしている旬に愛しさが湧いた。

奈津美は旬の頭に腕を回し、やんわりと包み込むように抱いた。

「なんかかなり、いい感じ」

旬はさらに奈津美の胸に密着して、気持ちよさそうに目を閉じた。

「これくらいのことだったら……言ってくればするからね？」

旬の頭に頬を寄せて奈津美は言った。

初めて、奈津美の方から、旬が心から喜んでくれることをしたように思えた。旬を満たしたいと思っしていることなのに、何故か奈津美の方も満たされているような感じがして、じんわりと心が温まっていく。

「……もし。ナツがそんなこと言ったら、また元気になっちゃうじゃん」

ぐりぐりと顔を胸に押し付けて旬が言った。胸に伝わる旬の顔の熱が、少し高くなったように感じた。

これは照れているな。それを感じ取った奈津美は、少し気分がよかった。いつもは逆の立場だ、この機会に、からかってやろう。

「それだったらまたあたしがすぐに鎮めてあげる」  
これは少し挑発的かな？　と思ったが、今を逃したらきつと言え  
ることがなくなってしまうだろう。

「ナツってばもー！」

旬が奈津美の脇腹をくすぐった。

「ひゃっ……ヤダ、くすぐったいっ……あははっ」

奈津美は身をよじながら、笑い声をあげた。

「旬、やめてっ……あはっ……くるしっ……」

笑いすぎて呼吸困難になっている。それを見て旬はピタッと手を  
止めた。

「ナツが悪いんだからな。次そんなこと言ったら、もっとすんごい  
ことするから。というか、してほしいんだってみなすから」

じつと奈津美を見つめて旬は言った。

「もう……わかったから……」

まだくすぐったさの余韻を残しながら、奈津美は旬の頭を胸に抱  
いて頭を撫でた。

何となく、上手を行かれている感じがしたが、旬は黙って奈津美  
の胸に顔をうずめる。

旬の頭を撫でながら、心がじんわりと温かくなっていた。

今までだって、旬に対して愛しさは感じていたはずなのに、それ  
とはまた違う感情が芽生えていた。それにより、今、とても満たさ  
れていると実感できる。

温かい気持ちのままに、奈津美は旬の額に唇を寄せた。

## 49 思わぬ再会

それは、いつもと同じような休日のことだった。

「なっちゃん？」

突然後ろから呼ばれた。

「……え？」

一瞬反応が遅れて、奈津美は振り返った。一緒に歩いていた旬も、同じように立ち止まって振り返った。

「やっぱり。なっちゃんでしょ。柏原奈津美ちゃん」

そこに居たのは、あまり見覚えのない女性だった。

齢は、奈津美の一つか二つ上といったところだろうか。

目鼻立ちのはっきりしている顔で、体型はスラッとしていて、膝上の白のタイトスカートと、黒の高いピンヒールのパンプスを履きこなしている。

「はい……そうですけど……」

奈津美は返事をしながら、困惑していた。そして記憶の糸を辿る。

誰だっけ……会ったことあるような、ないような……

思い出せそうな気がするけど、何だか思い出さない方がいいような気もして……

「やだ。忘れちゃった？」

奈津美の困惑している表情を見てなのか、先に彼女の方がクスクスと笑いながら言った。

「桃華よ。安西桃華」

モモカ。アンザイモモカ。

その名前を聞いて、奈津美の脳裏に、ぼんやりと人物のシルエットが浮かんできた。

「高校のバスケット部で、二年上の先輩だった、って言った方が分かる？」

そう言って、彼女は極上とも言える笑みを浮かべる。

その言葉を聞いて、その表情を見て、頭の中で一本の糸が繋がった。

「あっ……桃華先輩？」

やっと記憶にはっきりと思い出し、奈津美はその当時と同じ呼び方をした。

「そう。やっと思い出してくれた？」

ふふっと、彼女、桃華は笑う。

「いえっ……そういうわけじゃなくて……一瞬、先輩だって分からなくて……」

奈津美は慌ててフォローする。

「私、そんなに変わった？」

「変わったって言うか……すごくお久しぶりだったので……」

「ああ、もう……七年ぐらい前になるものね。私が卒業してからは全然会ってなかったから」

「はい……先輩はよく私だって分かりましたね」

「何となくね。そうじゃないかなって思って。声かけてみたらやっぱりなっちゃんだった」

二人のやり取りを、旬は黙って見ていた。

今までにも何回もあったことだ。

というか、何回も二人で街中を歩いていたら、お互いの知り合いに出くわすなんてよくあることだ。

その相手が男で、奈津美に変な視線を送るようなヤツだったら、すぐに割って入るものだが（幸い、今のところそういうことになったことはないが）、今日の相手は女性で、しかも話を聞く限り、奈津美の先輩らしいので、黙って見ている。下手に割って入って変なことを言ったりすると、奈津美に怒られる。

しかし、不意に安西桃華のほうで旬を見た。

旬と目が合うと、ニコリと微笑む。

その瞬間、旬の背中にわずかな悪寒が走った。

「なっちゃん、デート中？」

すぐに桃華は奈津美の方を見て言った。



その時の表情は、同じ笑顔でもまるで冷やかすようなものだったので、旬は気のせいかと思い直した。

「え……あ、はい。一応……」

「一応ってなんだよ、一応って。ちゃんとデートじゃん」  
旬は奈津美の言葉の方に引っかかって、口を挟んだ。

「もうっ、旬は黙ってて」

奈津美は少し慌てた様子でそう言い返す。

それに引っかかって旬が言い返そうとした。

「へえ。旬君っていうの」 旬の前に、桃華の方が先に口を開いていた。

「へ……？ あ、はい」

きょとんとしながらも旬は頷いた。

桃華は旬に向かって微笑みかける。

「私、安西桃華。よろしくね」

「あ、はい。沖田旬です」  
名乗った桃華に倣って、旬も名乗った。

しかし、ふとおかしなことに気付く。

果たして、ここでお互いに自己紹介する必要なんてあったのか。

別にこれから付き合いがあるわけではないだろうに。

「じゃあ、二人の邪魔したらダメだから、行くわね」

桃華は奈津美に目を向けて言った。

「じゃあね。なっちゃん」

「はい。さよなら……」

桃華の去り際、匂と目が合い、桃華はまた微笑んだ。

匂は軽く会釈をし、奈津美と二人で、颯爽と去っていく桃華を見送った。

桃華が見えなくなったところで匂が奈津美を見下ろすと、目があった。

いつの間にか、匂のことを見ていたようだ。

「……匂、先輩に見惚れてた？」

真剣な顔をして、奈津美は匂に言った。

「……は！？ 見惚れてなんかねえよ！？」

目を見開き、必死に首を横に振って否定する。

「本当に？」

じっと匂を見つめ、奈津美は真剣に聞く。

「当たり前じゃん！ 俺、ナツ以外の人になんか見惚れねえし……」  
心外なことを言われ、何となく焦ってしまったが、匂はふとあることに気付く。

奈津美がこんなことを言うなんて珍しい。

いつもは、旬が他の女を見ていることにさえ気付かないことだっ  
てあるのに。（それ以前に、旬が奈津美以外の女性を見ていること  
もあまりないのだが）

「なーに？ ナツ、ヤキモチ妬いてんの？」

ニヤニヤと笑い、どこか嬉しそうに旬が言った。

「違うわよ！ ……そういうんじゃないよ……」

奈津美は力強く否定し、そのあとの言葉は尻すぼみになって、俯  
いていた。

「ナツ？ どしたの？」

この反応も意外で、旬は首を傾げた。

奈津美は何の反応も示さない。

「ナツ……とりあえず、腹減ったからどっか入らない？」

「うん……」

暢気な旬の発言に、奈津美は少し不安そうに頷いた。

「……さっきの人ね、先輩だったの。同じ高校の二つ上で……」

カフェに入り、店員に注文して一息ついたころ、奈津美は口を開  
いた。

「ああ、うん。言ってたな。バスケットのってことは、あの人もマネ  
ージャーってこと？」

「そう……旬に言ってたんだっけ。私が、高一の時、少しでもバスケット部のマネージャーしてたって」

「うん。聞いたよ」

何かの話の流れで、確か雑談をしている時だったが、そんなことを言っていた。

奈津美は、中学の時は三年間、陸上部に所属していたが、高校では陸上部にはいかず、友達に誘われてバスケット部のマネージャーをしていたのだ。

「でも、すぐ辞めたんだろ？」

「うん……」

頷くと、奈津美は押し黙ってしまった。何かを言おうとして、黙ってしまう。

「ナツ、何？」

「やっぱりいい」

「は？ 何で？」

旬は素っ頓狂な声で言った。

しかし、奈津美は答えなかった。

「何、ナツ。そんな途中でやめられると気になるじゃん」

旬の言うことはもつともで、言い出した手前、こんな中途半端なところでやめるのはよくない。それはわかっている。

しかし、奈津美にはなかなか言いにくかった。

「……あんまり、こういうのって陰口みたいで言いたくないんだけど……」

少し悩んだ結果、奈津美はそう切り出した。

「桃華先輩ってね。一部ではあんまり評判がよくなかったっていうか……」

「評判？」

旬は首を傾げる。

「うん。部活の先輩としてはすごく優しくていい先輩なの。私もすごくよくしてもらってたから。……だから、他の先輩から聞いた時、すぐには信じられなかったんだけど……」

言い訳のような前置きが長くなってしまった。奈津美は決心して、本題を切り出す。

「なんかね、桃華先輩は、人の彼氏を取るんだって。桃華先輩が原因で、別れるカップルが多いんだって」

旬はただあっけにとられた。

女同士のそんな話で、どういうリアクションをすればいいのか分からない。

「言い訳みたいだけど、私は、実際にそれが本当だって知ってたわ

けじゃないから、信じてなかったよ。ただの噂だって思ってたの。……でも」

そこまででまた奈津美は言いよどむ。

「あのね、旬。これ、本当に高校生の時の話で、今は関係ないことだからね」

「……うん」

旬は話が見えないまま、ただ頷いた。

「私、バスケット部に入ってちょっとしてから、一個上の男バスの先輩と付き合ってたの」

旬の表情を窺うと、ほんの少し、嫌そうな顔をしていた。

「本当に、今は関係ないからね！ その先輩とだって、三ヶ月ももたなかったから！」

奈津美は一生懸命になって弁明する。

「……うん。分かってるよ。それで、その先輩がどうかしたの？ わざわざ話に出すってことは、なんかあるんだろ？」

過去のことだとわかっていても、嫉妬してしまうのはしてしまうものだ。

旬だって、嫉妬したってしょうがないということはわかっている。

「あ、うん……その……あたしが付き合ってた先輩が、桃華先輩と浮気したって……そんな噂が出て……」

「……は？ 最悪じゃん、そいつ。別れて正解だよ」

ここぞとばかりに、匂は見たこともない奈津美の元彼のことを厳しく言った。

「本当かどうかは分からないの。それに、はっきり浮気っていうか……本当に変な噂が流れて……」

「変な噂？」

「うん……その、元彼と、桃華先輩が……ホテルに入っていたのを見たって人がいるって……」

「うっわ。最低じゃん」

眉間に皺を寄せて、匂はあからさまに嫌な顔をした。

「でもそれは本当に微妙だったの。その噂の日は、私も会った日でもあったから。時間が違えば有りえないことはなかったけど……でも、ただの噂だから、真に受けるのも嫌だったから、ほっといたのでもしたら、また違う噂で……今度は、二人が……」

それから先は、奈津美は言いにくそうに黙った。

「何？　今度は？」

「……二人が、体育館倉庫で……やってたって」　最後の方はとても小さな声で奈津美は言った。

「やってた？　ヤツてたって……セツ」

「合ってるからおっきい声で言わないで！」

奈津美は匂の言葉を途中で遮り、慌てて辺りを見回した。

幸い、人の多い店内はざわついていて、うまく遮ったので、二人の会話は周りにはもれていないようだ。

「……えー。ホントにあるんだ、そういうのって。AVとかエロ小説でしかないと思ってた」

「ちよつとっ……そういうのも普通に言わないでよ！ 第一、本当かは分からないんだし……」

「本当なんじゃないの？ 煙のないここにはなんとかって言うし」  
旬の中では、完全に奈津美の元彼が悪いということになっている。

「火のないところに煙はたたない、ね。……でも、本当に分からないし」

奈津美はそう言って、水を一口飲んで、ため息をついた。

「流石にそんな噂が流れたから、聞いたのよ。でも、違うって言うし……でも、何かあるんじゃないのって、疑ったのね。そしたら、逆ギレするし……それで気まづくなって別れて、私は部活もやめて……その時にはもう桃華先輩は引退してただけだね」

「お待たせいたしました。アイスロイヤルミルクティーとチョコレートタルトと、アイスレモンティーとフルーツタルトになります」

店員がやってきて、二人の前に、それぞれ注文の品を置いた。

『『ごゆっくりどうぞ』と頭を下げて店員がいなくなると、旬はさっそくフォークを取った。』

「いっただっきまーす」



話は中断したが、旬は目の前のケーキに夢中らしい。

それを微笑ましく見ながら、奈津美はストローをくわえてレモンティーを一口飲んだ。

「あ。んで、それはそこまで終わっちゃったってこと？　噂がホントか分からないまま？」

二口目を食べて、旬は思い出したように話を戻した。

「……うん。あれ以上こじれて変な噂がたつのも嫌だったし。先輩と別れてからは、もうパツタリ」

「ふうん？」

「……でも、桃華先輩は……あたしが部活やめたのに、学校で顔を合わせたら何も無かったみたいで声かけてくれてたし……普通、人の彼氏となんかあって、何食わぬ顔でその彼女に声かけられるかなって。あたしだったら絶対にしないもん」

「あー。なるほどな」

頷きながら旬はストローでミルクティーを一口飲んだ。

「それを他の人は、計算なんじゃないの？　とか言うんだけど……なんか、そう言われるとそういう気がするし。だから半信半疑なの……でも、やっぱり、本当だったら嫌だなんていうのは、正直思うし……」

そこまで言って、奈津美は言葉を切り、旬を見た。

「……何？」

旬はきょとんとして、首を傾げた。

「何でもない」

奈津美はすぐに視線を逸らし、フォークを手にとった。

「何だよー。気になんじゃん」

「何でもないの！ 気にしないで」

「えー。そこまで言っただけ？ 気になるー」

旬はそんな感じでしつこく気になる気になるとうるさい。

だけど、確かに中途半端なところまで言っておいてやめるのも、いいことではないと思って観念した。

「……もし、昔のこととか、桃華先輩の噂が本当だったら、どうしようって思ったの」

奈津美が視線を下に向けながら言うのと、旬はきょとんとしていた。

「……ん？ 何で？」

「だって……旬のこと……」

最後の方は、奈津美の顔が下を向いたこともあって、小さく聞き取りにくかった。

しかし、そこまでで、旬は奈津美が言いたかったことが何となく分かった。

「何？ てことは、ナツ。俺がさっきの先輩に取られたら嫌って思ったのー？」

ニヤニヤと笑いながら旬は言った。

そうやってはつきりといわれて、奈津美は耳まで真っ赤になる。

「もー。ナツってば、かーわーいーいー！ 食べちゃいたい」  
デレツと鼻の下を伸ばして、匂は悶絶している。

「ちょっと……あたしはこれでも真剣だったんだからっ……」

奈津美は顔を上げてキツと匂を睨んだ。それでも匂は気にする様子もなく、にこにこしている。

「大丈夫だって。俺、ナツのことしか見てないし。俺が好きなのはナツだけだよ」

恥ずかしげもなく匂が言うので、奈津美の顔はまた真っ赤になる。

「ちよっ……」

「それに、もう俺とその先輩が顔を合わせるなんてないよ。今日だって、偶然会ったんだろ？」

奈津美が言い返そうとしたら、匂が現実的なことを言ったので、奈津美は口をつぐみ「うん」と頷いた。

「じゃあ別に問題ないじゃん。会ったところで、俺はナツ以外の人には誘惑されたってついてかないから」  
自信満々な様子で匂は言う。

これを他の男が言ったら、きっと半信半疑だったと思う。  
こんなことを言っておきながら、結局浮気をしたり、心変わりを  
する男なんて、何人も見てきたからだ。

しかし、旬のことは信じられる。

そうだ。旬の言うとおり、これからまた桃華と出くわす可能性なんて、ほとんどないに等しいではないか。

それなのに必要以上に気を揉むことなんてない。

何も気にすることもなく構えていたらいい。

そう思って、奈津美は気にしないことにした。

この時は、これから起きることなんて、予想すらできていなかった。

## 50 まさかの再会

翌週のことだった。

この日の旬は、平日だけれど、シフトの関係で整備工場のバイトもなく、休みだった。とはいえ、平日に休みでも、やることはない。

昼間は奈津美も仕事だし、友人だって学校だったり、仕事だったり、ほとんどは忙しい。

旬はダラダラと過ごし、寝るだけ寝まくっていた。

……腹減ったな……

ベッドの上でボーっとしながら、旬は空腹感に気付く。

十一時ぐらいに起き、朝昼兼用の食事をしてから横になったら、また眠ってしまったようだ。

時計を見たら、もう四時半を過ぎていた。

何か買いにいこ。まだ早いけど。

そう思って、財布を持って、旬は部屋をでる準備をした。

今日は何食べよっかなー。

街をブラブラしながら旬は今夜のメニューを考えた。

メニューを考えるとと言っても、ただ買ってすぐ食べるものを選ぶだけだ。

それはコンビニ弁当であったり、スーパーの惣菜であったり、ただのインスタントや冷凍食品であったり、ファーストフードであったり、さまざまだ。

自炊を全くしない、というか、できない旬にとっては、飽きないように、財布の中身と相談しながらメニューを少しずつ考えるのが、日課である。

昨日はコンビニだったから、今日はほか弁かなー。今日の日替わりはなんだろう。

旬のマンションからは少し離れているが、手作りの弁当やがあるということ、割と最近知った。

コンビニ弁当に比べれば少し値段はするが、その分できたてで温かく量も多くて、さらに野菜などのバランスも考えてあって美味しい。

前に、奈津美も食べた時に『これならいいね』と言っていた。

だが、その店の弁当も毎日食べていたら食費がかさむので、あまり食べてはいないが。

今日は、居酒屋のバイトの給料日後で財布には少し余裕がある。前に食べてから少し間があいてるし、今日はほか弁にしようかな。

そう決めて、旬は店のある方へと歩き出した。

弁当屋は、歩いて十五分ほどのところにある。

街の中心からは離れた、住宅街よりのところにぽつんとある。

その住宅街というのも、アパートやマンションも多いので、一人暮らしをしている人がよく利用するらしい。その界限ではやはり人気があるらしく、前に七時半ごろに来たらもうほとんどなくなっていた。

店が近くなって、旬は、携帯で時間を見る。

まだ六時前。今日は大丈夫だろう。

あ、でも、こんな早くに買って食ったらまたすぐ腹減るかもなー。  
弁当以外にも何か買ってこうかなあ……

そんなことを考えていた時だった。

「……旬君？」

後ろから名前を呼ばれた。

「え？」

聞こえてきた自分の名前に反応して旬は振り返った。

「あ、やっぱり。旬君よね」

そこに居たのは、旬よりは年上であろうという女性だった。

見覚えがある、というか……

「あっ……えっと……『桃華先輩』！」

すぐに思い出して、旬はその名を口にした。

そこにいたのは、一週間ほど前に出会った、桃華だった。

「あ、覚えててくれた？」

名前を言われた桃華は、にっこりと旬に微笑みかける。

忘れるわけがない。少し悩んだものの、奈津美にあんな話を聞いたのだ。すぐに思い出す。

「桃華先輩こそ、俺のことよく分かりましたね。前に一回会っただけなのに」

しかも、今日は前に会ったときのようなちゃんと外に出かける格好ではなく、下が某スポーツブランドのジャージ（それも高校の時から穿いている）と、上が黒のトレーナー（部屋着で色あせてきている）という、だらしない格好だ。それでよく後ろから見ただけで分かったものだ。

「私、人の顔とか雰囲気とか覚えるの得意なの。ちょっと自信なかったけど、もしかしてそうかな、って思ったから」

「そうなんですか」

「旬君、もしかしてこの辺りに住んでるの？」

桃華が話を変えて聞いてきた。

「イエ。住んでるとこは少し離れてるんですけど……今日は弁当買いに」



「ああ、そこのお弁当屋さん？ 私もたまに買いに行くけど、美味しいわよね」

「えっ？ 桃華先輩も食べるんですか？」

旬は驚いて目を丸くした。

旬の反応に、桃華は目をぱちくりさせる。そしてすぐにクスツと笑った。

「そりゃあ食べるわよ。人間なんだから」

桃華は笑いながらそう答えた。

「えっ、あ、スミマセン。そういう意味じゃなくて……」

旬は慌てて手を横に振って弁明する。

「なんていうか、えっと……あんまり弁当とか買って食べるようには見えないなって思って……」

旬が言いたかったのは、桃華は弁当屋だとか、あまり庶民的なところで買った食事をしなさそうな印象だったからだ。

桃華は、スマートなOLで、食事なら高そうなところで外食だとか、そっちの方が似合いそうなのだ。

「そう？ でも、たまーにだけどね。作る時間が無い時とか、疲れてて作るのが面倒くさいなーって思った時とか」

「そうなんですか」

何だか色々と意外だ。

今の話だと、桃華は一人暮らしのようだし、それならそういうこ

とがあっても普通だ。

しかし、何も知らない旬が思うのもなんだが、桃華にはそういったことを感じさせない。

一言で言えば、ミステリアスなのだ。

「あ、そうだ。もしよかったら、今からご飯食べに行かない？ 私、御馳走するわよ」

突然、桃華が笑顔でそう言った。

「……へ？」

唐突な誘いに、旬はぽかんとするしかなかった。

「え……えっと……それって、どういう……？」

困惑しながら旬は桃華に尋ねた。

「どうって、そのままの意味よ。もしよかったらこれから一緒に食事しましょうって、お誘いしてるの」

桃華は笑顔を絶やさずに言った。

旬は絶句した。

これは、どういうつもりなのだ。

普通、たった一度顔を合わせたぐらいの男を食事に誘うか？

それも、相手は昔の後輩の彼氏だ。それを知らないのならともかく、もろに知っているだろう。

『桃華先輩は、人の彼氏を取るんだって』

ふと、奈津美が言っていたことを思い出す。

まさか、あの話は本当に本当だったのだろうか。

そして今、旬はその罠にはまりつつあるというのか。

これはヤバイ。

「えっと……せつかくですけど、遠慮しておきます。俺、今こんな  
かっこで食事なんか行けないですし」

食事でつられたからといって、ホイホイついていくわけにはいかない。旬は遠まわしな理由をつけて断ろうとした。

すると、桃華はきょんととして、すぐに噴出した。

「やだ、別にドレスコードのあるようなお店に行こうとしてたわけ  
じゃないのよ？ 普通の庶民的なところよ」

口元に手をあて、クスクスと笑いながら桃華は言う。

少し、断り方が悪かったようだ。やっぱりこういうことは、きっぱりと断った方がいい。

「えっと……そういうんじゃない……その……いくらナツの先輩  
とはいえ、会ってすぐの女の人と一緒に食事なんてできないです。  
俺にはナツがいるんで」

意外にこういうことは言い辛い。

これが一番の事実であるが、その分、厳しい言い方になるのがや

むを得ない。この場合、暗に「彼女いるって分かってるくせに誘うな」と言っているも同然だ。

旬は桃華の反応を窺った。

気を悪くしていないだろうか。今は接点が全くないとはいえ、奈津美の先輩なのだ。逆に「そういうつもりは全く無い」と怒らせたかどうか。

しかし、桃華の反応は意外だった。

「あ……そうよね。ごめんなさい。そういうつもりはなかったんだけど……」

あっさりとそう返され、旬は困惑した。

奈津美が言ったことが本当だとしたら、しつこく誘われるのではないかと思ったのだ。

なんだ。別に変な意味があって誘ってきたわけじゃなかったのか？  
ていうか、俺が弁当買いにきたって言ったから、かわいそうに思われただけか？

「本当にごめんなさい。気を悪くさせちゃったかな？」

こんなに謝っているわけだし、奈津美が言っていたことなんて本当に噂だったのだろうか。

あとでナツに電話して言っというてやろ。先輩は、ナツが思ってたようにいい人だったよって。

「いいえ。そんなことないです」

旬は笑顔で首を横に振った。

「……それじゃあ、私、帰るから」

「はい。さよなら」

そう言って、二人は別れた。

……そのはずだった。

約十分後……

旬は、桃華の住むマンションの、桃華の部屋にいた。

……ちよつと待って。俺、いつの間にこんなことに……

旬自身、困惑していた。

さっき、桃華と別れようとした、その瞬間……

「きゃっ……!?!」

方向転換しようとした旬は、桃華のその声でまた向き直った。

見ると、桃華の体がぐらついて、転びそうになっていた。

「わっ!」

旬は慌てて桃華の側に寄り、腕を掴んで桃華の体を支えた。

「あ、ごめんなさい」

転ぶのを免れた桃華は、目を丸くしながら匂に謝る。

「いえ。大丈夫ですか？」

「うん……でも、ヒールが……」

桃華の視線にあわせて匂が桃華の足元に目をやると、桃華が履いていたパンプスの左足のヒールが折れてしまっていた。

「やだ、恥ずかしい……ごめんね、こんなみっともないところ……」  
耳まで真っ赤にして桃華は苦笑した。

「いえ……大丈夫ですか？ 歩けます？」

「うん、何とか……」

それを聞いて、匂はそっと桃華の腕を離した。

桃華はふらつきながらバランスをとって立つ。

「じゃあ……今度こそ……ごめんね、匂君。ありがとう」

「あ、はい……」

桃華は、再び匂に背中を向けて歩き出した。

・ 足を引きずるような、ぎこちない歩き方をする桃華の後ろ姿を見て、匂はなんだか良心が痛んだ。

男として、あんな状態の女性を一人で帰すとは、少し非情じゃないだろうか。

いや、それでも、誤解を招くようなことをするのはちょっと……

歩くペースが遅くなっているため、なかなか離れていかない桃華を見ながら、旬は迷った。

そして、迷いに迷った結果だ。

「あの……送っていきます」

旬は桃華を追いかけて言った。

「え……」

桃華は目を丸くしていた。

「えっ……いいわよ！ そんな、悪いし」

桃華はとんでもないという風に手を左右に振る。

「いや、やっぱり危ないですし……」

「でも……なっちゃんが……」

「大丈夫です。ていうか、ここで桃華先輩をほって帰った方が、ナツは怒ると思うんで」

そうやって奈津美が思うか、正直なところ微妙ではある。

桃華のことを見ていたというだけで、不安になる奈津美だ。

こんなところを見たら、もしかしたら怒るかもしれない。

それでも、奈津美ならちゃんと話せは分かってくれると思う。  
そう信じている。

「……それじゃあ、お言葉に甘えて……」  
桃華は今度は素直に応じた。

「じゃあ、つかまって下さい」

旬は桃華の隣に立って桃華がつかまりやすいように腕を出す。

「え……？」

「それじゃ歩きにくいでしょ？ いいですよ、俺を支えに使って下さい」

旬がそう言うと、桃華は一瞬ためらったが、

「じゃあ……ありがとう」

と、控えめに旬の腕に手をかけた。

「はい。んじゃ、行きましようか。桃華先輩の家ってどこなんですか？」

「ここ……まっすぐ行ったところのマンションなの」

二人は、桃華の住むマンションへ向かって歩き出した。

傍から見たら、腕を組んで歩く男女。



この光景を、彼女が見ていたとは、知る由もなく……

## 51 誘惑

旬はこれまでの経緯を思い出し、整理する。

桃華先輩のマンションに着いて……桃華さんの部屋が五階だっというから、部屋の前まで送ってくことにして……

桃華のマンションは、新しく、エレベーターは勿論、オートロックスまでついているようなところだった。

マンションの前まで、というつもりだったが、何となく流れで部屋の前までできてしまった。

旬が帰ろうとしたら、桃華が

「お茶だけでも飲んで言って」  
と言ったのだ。

「いや、いいですよ。もう帰りますから」  
そう旬は断ったのだが、桃華は今度は引かなかった。

「何かお礼したいの。今度会うつてことはないだろうし……そうじゃないと私の気が済まないの」

桃華がそう言って、半ば強引に押し切られる形で、旬は桃華の部屋の中に足を踏み入れてしまったのだ。

部屋に上げられ、旬はリビングにあるソファに腰を下ろしていた。

桃華はキッチンでお茶を淹れてくれているので、大人しく待つ。

お茶飲んだら帰る。お茶飲んだら帰るから！

旬は何度も頭の中でそう繰り返していた。

どうせなら、もうこのまま帰ったほうがいい。それは分かっているのだが、何となく、帰れない。

傍からみればきつと何をしてるのだと言われそうなものだが、実際、こんな状況をうまく切り抜けることはとても難しい。

色々と悩むうちに、あっさりと桃華に流されてしまった。

カチャン、と食器のぶつかる小さな音がした。桃華がトレイにティーカップを置いて運んできた。

「お待たせ」

旬と目が合うと、にっこりと微笑んだ。

「え、あっいえ！　どうぞお構いなく！」

旬は混乱しながらもそう言った。

……今のはおかしいな。

お茶を飲むということで家の中に上がったのだから、お構いなくという対応はおかしいだろう。

しかし、今の旬には他に考える余裕などなかった。桃華は、旬

の前にソーサーに載ったティーカップを置き、その隣に桃華の分のティーカップを置いた。

「旬君、お砂糖とミルクいる？」

シュガーポットを開けながら桃華は尋ねた。

「あ、はい」

とりあえず、旬は頷いた。

「何杯くらい？」

「えっと、三杯で……」

「三杯？」

桃華は目を丸くして旬を見た。

「へへっ。俺、甘党なんで」

口元を緩めて旬は言った。

「ナツにはいつも入れすぎて怒られるんですけど」

「そう……」

桃華は微笑みながら砂糖を旬のカップに三杯、自分のカップに一杯入れてそれぞれをまぜる。

「ミルクはどれくらい？」

「あ、適当でいいです」

桃華はやんわりと微笑みながら、ミルクを旬のカップと自分のカップに入れて、再びかき混ぜた。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

旬はいれてもらったミルクティーのカップをソーサーごと手にとった。

一口だけ口をつけるつもりが、思った以上に喉が渴いていて、カップのほとんどを飲み干してしまった。

桃華は、カップを持って、旬の隣に座った。

このソファは一応二人掛けのものだが、実際座ってみると、旬が大柄なこともあって二人の距離が近い。

居心地が悪く、カップとソーサーをテーブルに置くために腰を浮かせ、ソファの淵ギリギリに座り直した。

……ていうか、もうすぐにでも帰った方がいいよな。

今更のことに気付いて、旬はタイミングを見計らいながら、小さく咳払いした。

「あ……」

「旬君」

旬が口を開いたのと同時に、桃華が旬を呼んだ。

「……はい」

旬は開いた口を、返事するのと同時に閉めた。

「旬君は、なっちゃんのことを好きなのよね」

とても神妙にそれを聞いてきた。旬は、予想外の質問に一瞬動きが止まる。

「……はい。そうです、けど」

そういえば、さっきここに来るまでの間にも同じようなことを聞かれたような……

「……羨ましいな」

桃華はポツリと呟いた。

「え？」

「なっちゃん、旬君みたいな人が彼氏で……」

「……え？」

旬はぽかんとするしかない。

「私ね、昔から、男運が悪いみたいなの」

そう言いながら、桃華は腰を浮かせて自分のカップをテーブルに置いた。

座り直した時、心なしか旬との距離が近くなったような気がする。

「好きな人がいても、なかなかその人に対しては積極的になれなく

て。何もできないうちにその人は誰か他の人の彼氏になっちゃって……後ですごく後悔するの」

「そうなんですか」

どこことなく寂しい雰囲気醸し出している桃華を、旬は心底驚きながら見ていた。

奈津美の話信じるのなら、誰彼かまわず男には迫りまくって……ということ想像する。それが目の前の桃華は、なんともネガティブで、寂しげなのだろう。

たぶん、誤解されやすい人なんだろうなあ……

旬は桃華のことをそう分析し、紅茶のカップに手を伸ばした。もうほとんど残っていなかったので、全部飲みほし、テーブルに置いた。

「ねえ、旬君」

桃華がじっと旬を見つめる。

「はい……え？」

旬が桃華の方に顔を向けると、思った以上に近くに桃華の顔があった。

「私みたいなの、どう思う？」

そう言って、桃華はさらに顔を近づけてくる。

「え……桃華さん？」

旬は後ろに体を引いた。しかし、背もたれにぶつかり、これ以上下がれなかった。

桃華の顔がどんどん近付いてきて、すぐ近くに、桃華の吐息が感じられるようにまでの距離になる。

旬は困惑して、固まってしまった。

奈津美は家に帰ってきて、鞆から携帯やハンカチなどを取り出した。

ちょうどその時、携帯が震えた。

開いて画面を見ると、カオルからの着信だった。奈津美は通話ボタンを押し、電話に出た。

「もしもし」

「もしもし、奈津美？　今大丈夫？」

「うん。どうしたの？」

つい三十分ほど前まで一緒の会社について、別れてきたばかりなのに何か急用でもあったのか。奈津美には心当たりはなかった。

「うん……ちょっとね……」

いつもは何事もはっきりと言うカオルの口調は、何故か歯切れが悪かった。



「何？ 何かあったの？」

不思議に思っただけ。奈津美はカオルに聞く。

「……いきなり聞くようで悪いんだけど」

少し間をあけて、カオルはそう前置きをした。

「匂君って、奈津美の家の近くに住んでるのよね？」

「うん。そうだけど……何で？」

カオルが言うとおりの唐突な質問に奈津美は聞き返した。しかし、カオルの反応がない。

「カオル？」

「……あたし、帰りに家の近くで匂君らしき人を見ただけだよ。やあって、カオルが神妙に言った。」

「え？ そうなの？」

カオルは、奈津美や匂が住んでいる界隈から、歩いて一五分ほどのところに住んでいる。しかし、実家暮らしのカオルは、住宅街に住んでいるので、誰かの家に訪ねるといふ目的がない限り、匂が赴く理由なんてあるだろうか。

「……あ」

思考を巡らせて、奈津美はひらめいた。

「カオルの家の近くにお弁当屋さんあるでしょ？ 手作りのほか弁の」

「……ああ。うん。あるわね。近くって言っても、あまり通らない筋にあるから行ったことないけど」

「そこのお弁当屋さんね、旬が気に入ってるからたまに行くのよ。今日も買いに行ってたんじゃない？」

「……じゃあ、あれはホントに旬君だったのかも……」

カオルが深刻な声になって言った。

「カオル……？」

何をそんなに深刻になることがあるのだろうか。別に旬だってその辺をうろつくことだってあるだろうし、今日の場合は目的も大体見当がつくから、何の問題もないだろうに。

「……あたしが見たのが旬君だったら、ちょっとヤバいかも」

カオルが深刻な声の調子のまま言った。

「何が？」

奈津美が何の意味も分らず聞いた。

「旬君、女といったわよ」

カオルの言葉に奈津美は固まった。

「……え？」

突然すぎて思考もうまく働かない。

女とって……いや、浮気だとかと決めつけるのは早い。

「知り合いなんじゃない？ 旬、顔広いし、女友達も多いから」  
とりあえず、冷静に考えて奈津美はそう言った。

「でも、腕組んで歩いてたわよ？」  
奈津美の考えを否定するかのようにはカオルは言った。

その言葉に、奈津美の思考は停止する。

「あっ、でも！ 本当に、旬君か分からないし！」  
カオルも自分で言っておきながら、フォローするように言った。

しかし、その時には既に遅く、奈津美の頭の中には不安の色が立ち込め始める。

「……カオル」

「な、何？」

一気に声のトーンが下がった奈津美の様子を、カオルは恐る恐る伺う。

「それって、どんな人だった？」

奈津美は思考を巡らせ、旬の身の回りに現れそうな女の姿を思い浮かべる。

街中で何回か会ったことのある女友達なのか。腕を組む可能性はないだろうが、加奈なのか。まさか、前カノのミキか、奈津美の知らない旬の元カノにまで考えが及んだ。

「えーっと……あたし、その女の方も後ろ姿しか見えてなかったんだけど」

そう前置きして、カオルは思い出すかのように考えながら口を開く。

「身長は、奈津美より少し高いくらいかな。もしかしたらヒール履いてたのかもしれないけど。それで、暗めの茶髪で……ゆるまき髪で……」

カオルの説明を聞きながら、奈津美は頭の中にその女のシルエットを思い浮かべる。

「雰囲気はOLって感じだったけど……なんかやたら色気がムンムン出てるっていうか……フェロモン垂れ流しな感じだったわ」

その言葉を聞いて、奈津美の頭には、直感的にある人物の姿が思い浮かんだ。

もしかして……

「なんか心当たりあるの？」

黙り込んだ奈津美に対し、カオルが聞いてきた。

「ううん、何でもない。とりあえず、旬に連絡してみる」  
できるだけ平静ということを装って、奈津美は明るい声で言った。

「そう……わかった。あたしの勘違いだったらごめんね」

「ううん。教えてくれてありがとう。じゃあ、また明日」

「うん。またね」

カオルとの電話を切って、奈津美は携帯を握りしめた。

まさか、とは思う。しかし、そのまさかということもあつたら……

奈津美は、いてもたってもいられずに、携帯を持って、部屋を出て行った。

## 52 旬VS魔性の女

電話のむこうでは、無機質なコール音が繰り返されていた。

もう！ 何で出ないのよ！

奈津美は苛立たしく携帯の電源ボタンを押した。

さつきから、三回も電話をしている。それも、一回ごとに十回以上コールを鳴らしているのに、電話の相手は全く出る気配がなかった。

今日は仕事休みで何もないんでしょ？ さつきと出なさいよ！

電話を何度もかけているうちに、先に旬のマンションに着いてしまった。

百歩譲って寝ているとしても、何回も電話して出ないというのはおかしい。いくら旬でも、こんな時間まで寝ているというのもあり得ないだろう。部屋にいるかどうか確認するつもりだったが、部屋に居ないという可能性も見えてきた。

しかし、念のため部屋まで行ってみることにする。

旬の部屋の前で、奈津美はインターホンを押した。数秒待つか、何の反応もない。もう一度押し、ドアに耳を近づけてみるが、ドアの向こうは静かで、何の物音もしない。それどころか、何の気配もしなかった。

もう、中に入ってしまったおうか。そう思ったが、鍵は持ってきていないことに気がついて、断念せざるを得なかった。

休みだったから、どこかに出かけているのだろうか。

時間帯を考えると、夕食を買いに行っているか、または食べに出かけているか、だ。

そうすると、カオルが見たという匂らしき人物は……

『匂君、女といたわよ』

カオルの言っていた言葉が頭をよぎり、急に嫌な予感がした。

奈津美は踵を返し、匂のマンションを後にした。

「も……桃華、先輩？」

なぜ今のような状況になったのか、匂には理解できなかった。

桃華の顔がどんどん近付いてくると思ったら、桃華は匂の体をまたいで、匂の上に覆いかぶさるような体制になっていた。

足を大きく開いているせいで、スカートが上まで上がり、ストッキングに纏われた太股が半分ほど見えている。

しかも、パンティーストッキングではなく、ガーターストッキングであったらしく、そのガーターベルトまで見えてしまっている。

どこを見ていいのか分からず、匂の視線は泳いだ。そして、さっ

きから何回も携帯が震えているのだが、ジャージのポケットの中に入っているそれを取り出そうと手を動かそうとすると、桃華の膝に触れてしまう。

結果、旬は動けなかった。

「あ……あ、あのっ！ 何やってんですか！ んな格好……俺、男ですよ？」

かなり狼狽しながら旬は言った。

目の前で、無防備というか、挑発的な姿勢がとられている。部屋に男女がふたりきりで、こんな体制になっていたら、相手が相手なら、ひどい目に遭うのは女の方ではないか。

いくら後輩の彼氏であっても、この体制はあらゆる意味で非常に危険だ。

「ええ。だからこうしてるの。女の子相手にはしないわよ」

桃華はにっこりと、妖艶に笑った。

「い、いや、そういうことではなくてっ！ ていうか、俺、ナツと付き合ってるんですよ？ そんなことされたって……」

全て分かりきったことだというように話す桃華に、旬は激しく困惑していた。

「分かってるわよ？ だから聞きたいの」

桃華は旬の言葉を遮った。

「彼女がいる人にとっても、私は女としての魅力があるのかなって。もし旬君があるって感じてくれたら、自信が持てそうな気がするし」

桃華の理屈が、旬には理解できなかった。いや、世間一般的に、



受け入れられる考えなのだろうか。

桃華先輩って、そんな常識外れな考え方する人だったのか？ 確かにちよつとずれた（？）人だなとは思ったけど……

軽いパニックを起こして旬は必死に頭を回転させているが、大したことは思い浮かんでいない。

旬の身体に、桃華の体重がかかる。旬は本気で、貞操の危機を感じた。

背筋に悪寒が走り、奈津美は思わず肩を震わせた。嫌なものを感じ、キヨロキヨロと周りを見回すが、誰もいない。

気のせい……？ にしても、すっごい嫌な感じ……

奈津美は、旬のマンションを後にして、カオルが旬を見たという弁当屋の近所まで来ていた。

一度だけ旬と来たことがあるだけで、この辺りの地理についてはあまりよく知らない。とりあえず弁当屋の周辺をうろつくが、旬らしき姿は見当たらない。

そもそも、カオルが旬らしき人物と女を見たという時間から、もう何十分も経っているだろう。それでこの辺りをまだうろついているということも考えにくい。とっくにこの場から離れているかもしれないし、ひよつとしたら……一緒に居たという女と……

そこまで考えが至り、奈津美は首を横に振った。

まだそこまで考えるのは早い。カオルが見たのが匂だという確証だってないし、一緒に居た女が、桃華だという根拠もない。

カオルにその女の特徴を聞いた時に、何故か直感的に浮かんでは、桃華の姿だった。

最近会ったからだろうか。それとも女の勘なのだろうか。理由や根拠はないが、奈津美にはそう感じられた。

奈津美の記憶では、高校の時の桃華の家はこの辺りではなかった。しかし、とつくに実家を出て一人暮らしなんて、奈津美もしていることだから十分に考えられる。

それが都合よく、この辺りということはあるのかないのか。だが、この間街中で会ったので、そう遠くに住んでいるわけではないとは思うが……

あれ？ 何について考えてたんだっけ？

様々な思考が交錯し、何を考えていたのか分からなくなる。

ていうか。匂らしき人と一緒に居たのが桃華先輩かどうかじゃなくて。カオルが見たのが匂かどうかでことよ、大事なのは。

奈津美の予想通り、カオルが見たのが桃華でも、それは大した問題ではない。本当に問題なのは、匂が女と腕を組んで歩いていたということが事実だった場合だ。カオルが見たのが匂だったら、女が桃華だろうがそうでなかろうが、修羅場になりかねないことになる。

だから今は、一刻も早く旬の所在と、真実を知りたいのだが……

何で電話すらも出れないのよ！

もう何度目かになる旬への電話は、またもやコール音だけが響くだけだった。これが奈津美の不安をさらに煽る。

まさか、あたしからの電話に出られない場所で、あたしからの電話に出られないことしてるんじゃないでしょうね……？

奈津美は静かに怒りの炎を上げていた。

もう少しで唇が触れる、というところで桃華は顔を止めた。そして体を起こし、じっと旬を見下ろした。

旬は、ギュッと目を閉じて、唇にもぐっと力を入れて固く閉じていた。よほど力を込めているのか、目の周りにも、口の周りにも皺が寄って、おかしい顔になっている。それを見て、桃華はフツと笑った。

「冗談よ」

「……へ？」

旬は目をうつすらと開けた。

そこに映ったのはいつの間にかブラウスのボタンが外され、谷間と下着のチラリズム付きの桃華の胸元だった。旬は慌ててさっきよ

り自由になった両手で自分の目を塞いだ。

「じょっ……冗談って何がですか！」

奈津美のもの以外、見てはいけないものを目の前に見せられて何がどう冗談だというのか分からずに、旬はさらに困惑する。

「何がって、全部よ」

桃華のその言葉と同時に、旬の体の上にあった気配が遠のいた。

旬が恐る恐る目を開けると、桃華は旬の体から離れ、いつの間にかソファアから離れたところに立っていた。そして服装も、いつの間にならきちんと直されて、そこに乱れはなかった。

「何？ 残念だった？」

にんまりと笑って桃華が言った。

「いい、いえっ！ そんなことは……」

旬は首を思い切り横に振って否定した。

「なんか、そういう風に即答されると、ちょっと傷つくなあ」

「えっ、あ、いや……すみません」

「嘘よ。これも冗談」

桃華はクスリと笑った。

さっきまでと全く違う桃華の対応に、旬は茫然とするしかなかった。

「とりあえず、旬君がなっちゃん一筋なのは分かったわ。本当……うらやましいくらいに……」

桃華はそう言っとうつむいた。その表情が、なんだか寂しそうに旬には見えた。

「なっちゃんのこと、ちゃんと大事にしてね」

顔を上げた桃華は笑っていて、さっきまでの表情は気のせいだったのかと、旬に思わせた。

### 53 謎の真相（前書き）

霧谷香住です。

どうやら投稿し忘れになっていたようで、この話が飛んだまま次話を投稿していたようです。

なので、九月二十二日、割り込み投稿をさせていただきました。こちらの不手際で、申し訳ありませんでした。

以後このようなことがないように気をつけますので、これからもよろしく願います。

## 53 謎の真相

あれ？ さっきもここ通ったっけ……

見覚えのあるマンションを見上げ、奈津美は立ち上がった。

何の当てもなく、奈津美は匂を探していた。やみくもに歩いていくうちに同じところを歩いてしまったらしい。

もともと詳しくない土地なので、どこに何があるかなんて分からない。それも住宅街なので、目印にするものもほとんどない。あまり広範囲を探し歩いて迷っても困るので、知らないうちに歩く範囲が狭まっていたようだ。

しかし、それで匂のことを見つけれられるのかどうか。

匂がこのあたりにいるという証拠なんてない。カオルが見たのも匂かどうかは分からない。だが、匂と連絡がつかない。

頭でいくら考えようとしても、結局何も解決しない。

そうだ。もう一回連絡しよう！

奈津美は携帯を開いて、リダイヤルで匂に電話をかけた。

匂はマンションの一階まで降りてきていた。

あの後、まるで何事もなかったように、桃華は旬のことを解放した。

帰ると言った旬に、桃華は笑顔で「なっちゃんによろしくね」と言っただけで、玄関先への見送りもなかった。

旬を部屋に上がりこませ、旬に迫った時のことを考えると、あまりにもあっさりしていて、拍子ぬけたほどだ。

何だったんだろう、あれは……

旬自身も、桃華が何をしたかったのか、よく分からなかった。

その時、ジャージのポケットで携帯が振動しているのに気がついた。

そういや、さっきから何回も鳴ってたな。

旬は携帯を取り出し、着信画面をみた。

そこに表示された名前を見て、旬はすぐに通話ボタンを押して耳に当てた。

「もしもし、ナ……」

「旬！？ 今どこにいるの!？」

旬の言葉を遮って奈津美の叫ぶような声がした。

「え……ナツ？」

奈津美の剣幕に旬は驚きながら聞き返す。



「もうっ……さっきから連絡してるのに何の反応もないし……今どこで何してるの？」

奈津美の怒りを孕んだ声を聞きながら、そういえばさっき何回も携帯が鳴っていたということを思い出した。あれは奈津美からだっただということか。

「ごめん、何か……電話に出られる状況じゃなくて……」

何せ、さっきまで桃華に迫られていたところなのだから。とは、もちろん言えない。言ったら、奈津美は一体どんな反応をするのか……

「それで？」

「へ？」

「今どこにいるの？」

「えーっと……」

ここはどこだろうかと考えながら、匂はマンションのエントランスから外に出た。

「あ……」

「え……？」

匂が外に出た瞬間、その目に飛び込んできたのは目の前を通り過ぎる奈津美の姿だった。

思わず漏らした声が、奈津美の携帯からと、それ以外から聞こえ

て、奈津美は顔を動かした。その先に居たのが、携帯を耳に当て、マンションから出てきた旬だった。

「ナ……」

「旬！」

またもや旬を遮って奈津美の方が大きな声で旬を呼んだ。

「ちょっと、今までどこにいたのよ！」

目を丸くし、つかつかと奈津美が歩み寄ってくる。

「えーっと……その……」

旬が言葉を選びながら奈津美の顔を見る。久しぶりに近くに奈津美がいることに安心し、旬の表情が情けなく緩んだ。

「ナツー！」

そして旬は奈津美に力強く抱きついた。

「えっ！ 何、旬？」

突然抱きつかれ、奈津美はただ目を白黒させる。旬が突然抱きついてくるのは日常茶飯事ではあるが、この状況で抱きつかれるのは意味が分からない。

「ナツー！ 怖かったよー！」

「え？ 何が？」

泣きごとを言いながら奈津美を強く抱き締め、頭に頬をこすりつ

ける。ますます意味が分からない。

そんな中、奈津美の鼻を、甘い匂いをかすめた。

「……匂」

「ううー……何？」

「女の人の匂いがする」

いつもよりワントーン低い奈津美の声に、匂は固まった。そして、恐る恐る奈津美のことを体から離れた。

奈津美は、明らかに怒った目で匂のことを見上げていた。

「今までどこで何してたの？」

明らかに匂を疑っている言い方だ。これにはさすがの匂も焦った。

「何って、何も！　つうか、そんな匂いなんてする？」

慌てながらごまかすように匂は自分のトレーナーの二の腕あたりに鼻をつけて匂いを嗅いだ。すると、わずかではあったが、甘い、明らかに女性のものだという匂いが、自分でも分かった。それも、奈津美のものではない。香水だったのか、シャンプーか何かだったのか、気づかないうちに匂いがついていたようだ。

自分でも分かったということが、匂の様子ではっきりと分かった。

「どうということ？」

奈津美の冷たい一言をきいて、旬は体中の毛穴から汗が噴き出すのを感じた。

「ちっ違う！ ナツ！ そんな、ナツが思ってることは全然なかったし！」

旬は必死に首を横に振り、身の潔白を主張する。

しかし、奈津美は疑りきった目で旬のことを見ている。

「ナツうゝ……」

旬は半泣き状態で奈津美を見ている。しかしそうしたところで奈津美の疑いが晴れるわけではない。

「ホントのことというから……つうか、マジでやましいことなんかなんもないんだって！」

そして、旬は奈津美にこれまでの経緯を説明した。いつもの弁当屋に弁当を買いに行ったら、偶然桃華に会ったこと、桃華が偶然このマンションに住んでいたこと、偶然桃華のパンプスのヒールが折れてしまい、桃華の部屋まで送っていったこと、流れで桃華の部屋で紅茶を御馳走になったこと、なぜか桃華に迫られたこと、しかし、旬には奈津美がいるので桃華には指一本触れなかったこと、結局何もなかったということ……全部話した。

旬は、話し終えて改めて考えてみると、説得力のない話だということに気付いた。あまりにも偶然が重なり過ぎだし、途中から旬が流されている形になっているし、これで最終的には何もなかったなんて、何の根拠もないではないか。

そしてこの話を、奈津美は険しい顔をしたまま聞いていた。

やっぱり、信じて貰えないのだろうか……

しかし、言えることは言った。全て事実だ。これに何か言い足した方が、言い訳のようになってしまいう気がする。

そう思って、旬は黙っていた。本当は、信じて貰えるまで色々いたい。しかし、奈津美が納得するようなことが言える自信もない。

「……それ、信じていいの？」  
ぽつりと奈津美が言った。

「……へ？」

予想外の言葉に旬は耳を疑った。一瞬、聞き間違いかと思う。

「だから、旬が言ってること、信じていいのね？」  
険しい表情のままだったが、奈津美ははっきりとそう言った。

旬は目を見開いて、大きく首を縦に振った。

「うん！ つうか、ホントのことだし！」  
旬は力強く言った。

奈津美はじいっと旬の目を見る。旬は奈津美から視線を逸らさずに見つめ返した。

少しの間、二人は見つめあっていた。そして、小さくため息をついた。その様子に旬は怯えてしまった。

「分かった」

「……へ？」

旬は思わず間拔けな顔をしていた。

「分かった、って……？」

「だから、今言ったこと、信じていいんでしょう？ 旬と桃華先輩は、何もなかったんでしょう？」

あまりにもあっさりと言われ、旬はぽかんとしている。そして、思いだしたように口を開いた。

「信じて、くれるの？」

「何？ 嘘なの？」

「ううん！ 違うけど！ あ、違うってのは嘘じゃないって意味で……」

「うん。それは分かってるから」  
かなり必至に首を横に振る旬を、奈津美は冷静に言う。

「……本当に……信じてくれるの？」

「うん」

奈津美がはっきりと頷くと、旬の方が信じられないという顔をした。

確かに、信じられないだろう。奈津美自身も、自分の判断が甘いと思う。

カオルから匂の目撃情報を聞いて、家を飛び出して必死に匂を探した。全く連絡が取れず、イライラしていたのに。

匂を見つけた瞬間、込みあがってきたのは確かに怒りだった。しかし、急に抱きついてきて、わけが分からず、一瞬、怒りなんて忘れかけた。匂の服から、女の匂いがするまでは。

それでも、匂の話を聞いて……普通なら、こんな話、信じられるわけがないだろう。話が事実だとして、何もなかったなんて、あり得ないだろう。そう思うはずだ。

でも、奈津美は、匂が言っていることは本当だと感じた。はつきりとした理由はないが、あえて言うなら女の勘だろうか。疑わしい状況になってしまったとしても、何もなかったのだと思う。

そもそも、匂は嘘がつけない性格だ。もし、浮気のような、何か間違ってもあれば、奈津美を見た瞬間抱きついてくるなんてことはないだろう。それに、無実を証明するにしても、普通ならもっと誤魔化そうとするはずだ。信じてもらえそうにないことを言う必要なんてない。それをあえて言ったのは、真実に違いないからではないか。もし嘘で言ったとしたら、もっと態度に出るだろう。今だって、嘘だとバレていないかどうかよりも、本当に自分が言ったことを奈津美に信じてもらえているかを気にしているようだ。

だから、奈津美は匂のことを信じようと思った。……とりあえずは、だが。

「言っとくけど、今回だけだからね。もし今度、同じようなことがあれば、絶対に信じないから」

奈津美が言うと、少しぼかんとしてからはっきりと頷いた。

「うん！」

その時も、旬はじつと奈津美の目を見ていたので、恐らくは大丈夫だろう。

「じゃあ、帰ろっか」

「うん！」

二人は手を繋いで、マンションを後にした。

「そーいやさ、ナツ」

歩きながら、旬が口を開いた。

「何？」

「その……この流れでナツに言うのもおかしいかもしれないけど……」

「何が？」

旬の言い方は歯切れが悪い。奈津美は先を促した。

「……ナツさ、言ってたじゃん？ 桃華先輩のこと、他人の彼氏を取るような人だと思わないみたいなこと。噂以外ではいい先輩だったとかさ」

「ああ……うん」



桃華に再会した日のことを言っているのか。

確かに、そう言った。その時は、桃華に対し、噂はあるものの実際に信じることができなかった。しかし、今はどうだろうか。

旬の話を聞くと、どうも桃華の方が旬を誘ったようだ。迫ったなんて完全に桃華に桃華にその気があったということだろう。これで、桃華のことをまだ信じるということは難しい。

「それがどうしたの？」

思っていることは口に出さずに、奈津美は旬に話の先を促す。

「うん……桃華先輩ってさ、やっぱりナツが言うとおりそんな嫌な人じゃないんじゃないかなーって思ってた」

「……え？」

旬の発言に、奈津美の声は上ずってしまった。奈津美の考えと裏腹に、旬からそんな言葉が出てくるとは思っていなかった。

「……なんで、そう思うの？」

はつきり言って、旬の発言が信じられない。

さっき、旬が桃華に迫られて、怖かったと言っていたのではないのか。というか、迫られといて、桃華は奈津美の言うとおりであったなんて、説得力がない。

「んー……別に理由っていう理由はないけど……何となく。桃華先輩って、誤解されやすいんじゃないかなーって。もし、本気で他人の彼氏取るんなら、俺、とっくに食われてるだろうし」

旬の言うことに、奈津美は少し考える。

旬の「食われる」という発言はともかく、桃華が旬に迫っておい  
て何もしなかったというのも謎だ。旬だって、女相手には力ずくの  
抵抗はできないだろうし、その気があればそのまま行きつくところま  
で行ってしまうことも有り得るのに……

といっても、それが旬の言う「誤解されやすい」という言葉の根  
拠にはならない。旬が言ったことが本当だとしたら、桃華の方に下  
心があったと考えるのが普通だ。それで桃華の方が何もしなかった  
というのもおかしい。そうすると、旬が嘘をついたということなの  
か。

「ナツ？」

何の反応もない奈津美の様子をうかがうように旬は奈津美の顔を  
覗き込む。

「ちょっと待って。頭の中が混乱してるから」

旬のことをあっさりと信じてしまったが、やはり旬の言うことを  
信じてしまうという方がおかしいのか。今更そう思ってしまう。

奈津美は旬の顔をじっと見た。

「ん？」

旬は不思議そうに首を傾げる。

「私……旬のこと、信じていいのよね？」

奈津美の言葉を聞いて、旬は目に見えてショックを受けた顔をした。

「当たり前じゃん！　ていうか、何で急に疑うの！？　さっきは信じるって言ったのに！」

「あー。うん。そうよね。ごめんね」

「何、その適当な感じの返事！」

やっぱり余計なことを言うんじゃないかった。旬の反応がめんどくさい。

これだけ必死になって中途半端な言い訳をするくらいだから、たぶん嘘ではない……と思いたい。いや、思うことしておこう、今回だけは。

分からないことは分からないままだ。例え桃華に聞いたところで、それが本当かもわからないのだから。そもそも、したくもないし。

「ナツは俺が浮気したっていうの？」

「そういうんじゃないけど……なんか頭の中が整理しきれてないっていうか……でも、旬がしてないって言うんなら信じるわよ、とりあえず」

「とりあえずって！」

「だってなんかこれ以上考えたら旬のこと疑いたくなるんだもん」

「何で!?!」

いちいちリアクションが大きい旬を見て、奈津美は少しむっとする。

「それはこっちのセリフよ。何で桃華先輩のことかばうようなこと言うの?」

もとはといえば、旬のややこしい発言が悪い。せっかく奈津美が素直に旬のことを信じようとしていたのに、桃華のことを嫌な人じゃないとフォローしている。これを何もならないなんて思えるはずがないじゃないか。

すると、旬は決まりの悪い顔をした。

「だって……なんとなくそう思ったんだもん。桃華先輩、俺に結局何もしなかったし。だから、もともと俺に興味とかあったわけじゃないんじゃないかな」

奈津美は言葉を失った。

何となくって……何となくで不安を煽るような言い方しないよね!

「それにさ、ナツのこと、大事にしてって言われたんだ。何でかは分からないけど……でも、言われなくても大事にするし」

そう言って、旬は奈津美を見て微笑んだ。その表情に奈津美は不覚にもキュンとしてしまった。

……て、何誤魔化されようとしてるのよ、私!

「つうか腹減ったなあ……あ、弁当！ 早く弁当買いにいかないと、いいのがなくなっちゃうんだ！」 旬は思い出したように言った。

このタイミングでお弁当！？

旬の発言に奈津美は驚く。

この話題は、旬にとってはもうウエイトの軽いものになっているのか。彼女に浮気を疑われているところだというのに。まさか、これで話をうやむやにしようっていうんじゃない……

奈津美は旬の横顔をキツと睨んだ。しかし、その顔を見て、一気に力がなくなる。

これは……別に誤魔化そうとしているわけじゃない……みたい？ というか、もうすでに頭の中はお弁当のことではいっぱいになっているらしい。

奈津美は深くため息をついた。

「どしたの、ナツ？」

何も考えていないような顔で旬が聞いてきた。

「……何でもないわよ」

何かを言い返す気力も失せ、再びため息をつく。

「……あたしもお腹すいた」

一気に脱力したせいなのか、旬につられたのか、奈津美も急に空腹を感じた。

「んじゃナツもお弁当買う？ あ、それともどっかに食いに行く？」

「ううん。あたしもお弁当にする」

何だか一気に疲れて、帰ってから何かを作ろうという気持ちも、どこかへ食べに行くというのもめんどくさくなった。一日くらい、サボったっていいだろう。

「あ、でもあたし財布持ってきてないんだった」  
ふと思い出して奈津美は言った。

財布が必要になるようなことなんて考えてもいなかったの、というか、考える余裕もなかったの、今の奈津美は携帯しか持っていなかった。

「いいよ。俺が出すから」

「でも……」

未だにデートの時に匂に奢ってもらうということが少ない奈津美は、ほか弁とはいえ、匂にお金をださせるということに躊躇いがある。

「いいのいいの。俺がなんか心配かけちゃったみたいだし」  
匂は奈津美の言いたいことを察してそう言った。

「べっ別に、心配してたわけじゃ……」  
奈津美は少し赤くなって顔を匂から逸らした。

「……あれ？　そういえば、ナツ、何でタイミングよくここにいたの？」

今更ながら旬はそのことに気付いた。

いくら旬と連絡がつかなくて、それで不安に思っただけで探しに来たとしても、旬のマンションから離れたこの場所に丁度よく奈津美が現れるのは、そうありえない。

「それは……カオルがこの辺りに住んで……帰りに旬らしき人が女の人と腕組んで歩いてるのを見たって教えてくれたのよ。桃華先輩のマンションの前を通ったのは偶然だったけど……」

「あー……多分、あの時か……カオルさん、見てたのか……」

旬が桃華の支えとなつて歩いていた時のことを思い出しながら旬は言った。

「……てことは。ナツはそれを聞いて慌てて家を飛び出したってとか」

そう言っ旬は笑った。

「なっ……」

奈津美は顔を真赤にした。

「と、飛び出したって……言っとくけど！　旬の浮気を疑ってただけだからね！　もし本当に浮気してたら、本気でひっぱたくつもりだったんだから！」

何となく、旬のために必死になって動いたと思われたくはなくて、奈津美は必死に言い訳をした。

「てことは、ナツ、俺が浮気するのがそんなに嫌なんですよ？」

「当たり前でしょ！ 彼氏の浮気を容認するわけないでしょ！」

「それが嬉しいんじゃない」

俊は本当に嬉しそうにニヤニヤと笑っている。その顔が、何故か奈津美の羞恥を煽る。

「ナツ可愛い……」

旬は奈津美の様子を見ながらニヤニヤと笑う。

「意味がわかんない！ 何で浮気疑われて嬉しそうにしてるのよ！」

「だって、ナツが俺のために必死になることって滅多に見られないし。そりゃ疑われんのは嫌だけどさ。でも、今日はナツの可愛いとこ見れたし、得したかも」

旬の発言を聞いて、奈津美のこめかみが引き攣った。

「へへ……」

いつもよりワントーン低い奈津美の声に、旬はピクリと反応した。

「こっちは旬が浮気したんじゃないかって本当に不安だったし、心配してたっていうのに、旬にはそうじゃなかったのね？」 奈津美はニコツと笑顔を旬に向ける。しかし目はちっとも笑っていない。旬は背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

「い、いや、ナツ……そういうわけじゃ……」

「そうよね。何にもなかったとはいえ、桃華先輩みたいな色っぽい人に迫られたんだもんね。何にもなかったとはいえ、いいお思



たわよね。その上、普通なら信じて貰えなくても仕方ないのに、何もなかったってことになったものね」

流暢な口調でに奈津美は言った。しかも「何もなかった」ということを皮肉っているのか、何回も口にする。

「よかったわね。いい思いできて」

優しいが、かなりの棘が含まれた言い方に、旬は更に焦った。

「ごめん、ナツ……俺、そういうつもりじゃなくて……」

「帰る」

今度は明らかに不機嫌な表情と声で奈津美は言い、繋いでいた旬の手を離してスタスタと早歩きになった。

「ちょっと……ナツ、待って！」

旬は慌てて奈津美を追いかける。しかし、奈津美は歩くスピードを速めてしまう。

「ナツっ！ 待ってってば！」

旬は駆け足になって、奈津美に後ろから強く抱き締めた。

「きゃっ！」

奈津美は旬の体重の分前によろけた。

「ちょっと……旬！ 外でこういうことはやめてって言ってるでしょ！」

奈津美は慌てて回りを見渡す。運よく誰もいないが、ここは住宅街だ。いつ誰が通ってもおかしくない。

「旬！ 放して！」

「やだ！ 許してくれるまで放さない！」

そう言って旬は奈津美を抱きしめる力を強めた。

「……ごめん。俺、あんまり深く考えてなかった。ナツがどう思ってるかって、分かってなかった」

真剣な声で旬が言った。

「でも、何もなかったのは本当だし、絶対に信じてほしいし……それにもうこんなことないように気をつけるから……だから、許して下さい」

奈津美を抱きしめる腕の強さから、旬の必死さが伝わってきた。

「……うん」

奈津美は小さく頷き、旬の腕にそっと触れた。

「絶対……約束ね」

「うん」

奈津美はそっと旬の腕を解いた。

「じゃあいいよ。あたしも怒ってごめんね？」  
旬の方を向いて、奈津美は言った。

じっと見上げる奈津美を見て、旬はまた奈津美のことを抱きしめたい衝動に駆られる。

しかし、ここでまた鼻の下を伸ばしてしまつては、同じことを繰り返してしまう。

「ナツってば……反則過ぎる……」  
ボソツと旬は呟いた。

「え？」

「いや、こつちの話」

旬は奈津美の手を取った。

「じゃあ、行こう。弁当屋」

「うん」

奈津美は素直に頷いて、旬の横に並んだ。

結局、奈津美に真相は分からず仕舞いだったが、それでも、旬のことを信じることでしか、全てをなかったことにしかできない。

本当に、今回だけだからね。

心の中で、奈津美は強く旬に念じた。

## 54 初めての悩み

旬は更衣室で、じっとあるものを見ていた。

出勤日数、就労時間、基本給など、項目ごとに様々な数字が並んでいる。そう、給料明細だ。

「お、お疲れー」

更衣室のドアが開いて、青年が一人入ってくる。

「お疲れ様です」

旬は彼の方を向いて挨拶を返す。そして、持っていた明細を給料袋に戻した。

「あれ。沖田、給料振込じゃねえの？」

旬の給料袋が目に入り、彼はそう言った。

「はい。俺、中途半端な時期に入ったから、手続きが間に合わなかったみたいで。今月は手渡しなんです」

「あー。なるほどな」

今日は、旬が自動車整備工場でアルバイトを始めてから、初めての給料日だ。この会社の給料の支払いは、基本的には銀行振込なのだが、今回の旬のような場合などは手渡しとなるらしいのだ。それで、旬は今日の仕事が終わってから、事務所で受け取ってきたばかりだ。

「そうか。今日、給料日か」

思いだしたように言いながら、彼、麻生大樹は自分のロッカーを開けた。

「んじゃ、給料も入ったことだし、沖田に晩飯奢ってもらうか」

「え！？ 何ですか！ 普通、先輩が奢ってくれるもんでしょ！」  
旬は慌てて麻生に言い返した。

「お前、先輩に対してよくそんな口が叩けるなあ」  
怒っているというよりは呆れた口調で麻生は言う。

「麻生さんが後輩にたかろうとするからじゃないですか」

麻生は、この工場の正社員で、二級整備士の資格を持つ立派な整備士だ。旬にとって、尊敬に値する人物ではあるのだが、年齢が三つ上で彼の気さくな性格もあって、どちらかというと身近な先輩というか、兄のような感覚だ。

「たかるとか人聞き悪い言い方すんなよ。……んで？ その記念すべき初給料は何に使うんだ？ あ、初つつつてもあれか。沖田、前も何かバイトしてたんだよな。別に思い入れとかねえよな」

作業着を脱ぎながら喋る麻生の話を、旬は給料袋を見つめながら聞いていた。

「いや……そんなことないです。この金は……今までのバイト代とはまた少し違うっていうか……」

「へえ？ じゃあ大事に貯金とか？ 何かお前っぽくねえな」

ハハッと麻生は笑った。

「いや、そういうんでもなくて……彼女に……」

「彼女？ ああ。そういや彼女いるっていつてたっけな」

「はい。来月、彼女の誕生日なんで、これでプレゼント買おうかなって思ってた」

旬の口元が自然と緩んだ。

来月の末、十月三十日は、奈津美の二十四歳の誕生日だ。当日、具体的にどうするかということはまだ話していないが、旬は今年の奈津美の誕生日には、プレゼントを贈ろうと決めていた。

「俺、今まで色々心配かけたし、苦労もさせたし……ちゃんとしたプレゼントってあげたことなかったから、今回はちゃんとあげたくて」

奈津美と旬が付き合ってから長い間、旬がフラフラとしていたせいで、奈津美には、旬が思っている以上の負担を与えていた。プレゼントをあげようとしたって、旬の金銭面のことを気にして、心から嬉しそうにはしてくれない。だから、旬もプレゼントを渡すことができなかった。

でも、今回は違う。これまでずっと小遣い稼ぎで始め、生活のために稼いでいたアルバイトとは違って、ちゃんと目標を持って、将来のために稼いだ金。これで、奈津美に何かをプレゼントしたいのだ。

「へー？ いいんじゃない？ 彼女、喜ぶんじゃないの？」

そう言いながら麻生は作業着の上半身を脱ぐ。

「そうだったらいいんですけど」

奈津美の喜んだ顔を想像すると、旬の顔は更に緩んだ。しかし、すぐにその表情が曇る。

「でも……少し問題があって……」

「問題？」

「彼女に何をあげたらいいのかわかんないんです」

「ああ、そういう」

問題というにはあまりにも些細だったので、麻生は小さく笑った。

「俺、今の彼女にはプレゼントっていうプレゼントしたことないんです。だから、いざあげようと思うと、何をあげていいものなのか……」

「え、プレゼントしたことないって、マジで？」

麻生はTシャツを脱ぎかけたところで目を丸くして固まった。

「はい。俺、バイト代で結構ギリギリの生活してるんで」

「ああ。金なくてプレゼント用意できなかったのか」

「いや、そういうわけじゃなくて、プレゼント買おうとすると彼女が怒るんです」

「……は？ 何だそりゃ」 旬が言っていることが意味不明で麻生

は首を傾げる。

「あ、怒るっていうんでもないですけど。無理してまでプレゼント用意されても全然嬉しくないってはっきり言われてて、だから、逆にあげたらダメみたいなの雰囲気で……流石に何もなしじゃ嫌だし、バイト先でケーキ買ってたんですけど」

これまでの二人の誕生日やイベントの時は、奈津美と旬は特にプレゼントのやりとりをしたことがなかった。奈津美の誕生日やクリスマスやホワイトデーなど、奈津美に何かを贈る時は、前のバイト先のカフェでケーキや焼き菓子を定価より安く買って贈っていたし、奈津美も旬に気を遣わせないために、イベントの時はケーキを焼いたり御馳走をつくったりしただけで、特別な品物を旬に渡すことはなかった。

会ってお祝い事として何かはするが、プレゼントに関しては自然と何もしないようになっていたのだ。勿論、旬の方はそれを気にしないことはなかったのだが。

「へー。そんな女もいるんだなあ。俺なんか、昔付き合ってた彼女にはそういうのもめっちゃくちや気にしてたぞ？ あげくにやった品物にケチつけて愛情がないとか言ってくるし」

麻生はその時のことを思い出したのか、うんざりした口調で言い、更に深くため息をついた。

「正直、男側からしたら結構いい彼女じゃねえの？」

「そーなんですよ！」

麻生の賛辞に、旬の顔は一気にでれっと緩む。



「ケーキだって、別に買ってこなくていいんだよって言うし。別にプレゼントとなくても、あたしは匂がわざわざ時間作ってくれて一緒に過ごせるだけで十分嬉しいんだよって、めちゃくちゃ可愛いこと言うし平日はお泊りダメって言うって、やっぱりイベントだからって許してくれるし。最っ高なんですよ、俺の彼女」

目に見えてテンションが上がり、デレデレと惚気る。

「……あつそ。じゃあ別にプレゼントなくてもいいじゃん」

匂とは反対に、麻生のテンションは目に見えて下がっていた。

「いやいや！ それじゃ当初の目的が果たせないんですって！」

「目的？」

「だから、今まで迷惑かけてきた彼女に、お礼も兼ねて今までの俺とは違うっていうところを見せたいんです！」

「あー……そんな目的だったか？」

前半は確かにさっきも言っていたような気もするが、後半は今初めて聞いた気がする。

「ていうか、今までと違うところ見せたいって、それじゃ沖田の自己満じゃん。彼女がいいって言うんのにプレゼント用意しても意味あるか？」

「自己満じゃないです！ ある意味自己満かもしれないですけど、俺は彼女が喜んだ顔を見たいんです！」

必死になって言う匂を見て、麻生は面食らった。

「……沖田。お前、可愛いやつだなあ。そんなこと恥じらいもなく言う奴なんて初めて見たぞ」

「男に言われても嬉しくないんですけど」  
匂はムツとして言った。

「俺だってまさか男に言うとは思わなかったっての。自分の彼女にも言うことねえのに」

その発言に、匂は目をパチクリさせる。

「あれ。麻生さんって彼女いたんですか？」

「いるよ。言ったことなかったか？」

「多分初耳です。ちなみに彼女っていくつなんですか？」

「同い年。だから二十三だな」

「二十三……」

それを聞いて匂は少し考える。

ということは、ナツと近い。

「麻生さんって、彼女へのプレゼントって、どんなのをあげてるんですか？」

「どんなのって……まあ、色々だけど。彼女が欲しがりそうなもん。」

大体は光りもんか……」

「光りものかあ……」

旬は腕組をしてうーん考える。

「つうかさ。沖田って、今まで彼女居たことあるんじゃないの？」

「ありますよ？」

思案顔のまま旬は答えた。

「昔の彼女にもプレゼントしたことねえの？」

「それはありますよ。その時は実家に住んでたから金銭面で困っていることがあったし」

「じゃあ俺の聞くより、普通に今まで付き合った彼女にやってたみたいなんでもいいんじゃないの？」

旬は、別に奈津美が初めての彼女というわけではないし、昔からずっと金銭面に余裕がないわけではない。プレゼントなしの習慣は、奈津美と付き合い始めてからのことだ。

「いやー。それでよさげなら悩まないんですけど……」

旬は腕組をして首を傾げ、難しい顔をする。

「何だよ？」

「確かに、俺だって彼女居たことあるし、プレゼントあげたことだってありますけど。でも、それって中学とか高校の時の話なんです

よ。だから、その時の身の丈に合ったものしかあげてないっていうか……おそろのストラップとか、彼女が好きなキャラのぬいぐるみとか」

「いいじゃん、それで。結構女が喜びそうなチョイスしてんじゃないか」

麻生は意外そうに言った。

旬が悩むくらいだから、よっぽどプレゼント選びのセンスがないのかと思いきや、無難なところについて、大体の女子高生なら喜びそうなものを贈っている。

「でもそれって、やっぱり昔のことだし。その時の同い年の子にあげたんですよ。今の彼女、年上だから、そういうのをあげるのは何か違う気がして」

「え、年上？」

麻生は目を丸くした。

「……何でそんな意外そうな顔をしてるんですか？」 明らかに驚いた顔をした麻生に、旬は口を尖らせた。

「いや、本当に意外だから。いくつ離れてんだ？」

「四つです。だから、誕生日で二十四になるんです」

「へー……」

麻生はまだ啞然としている様子だ。

「……そんな意外ですか？」

「いや……まあ、意外っちゃ意外だけど……ああ、だからお前の生活面とかかしつかりと心配してくれてるわけだな」

旬がさっき言った彼女のことを思い出し、麻生は妙に納得した。それと同時に、旬と彼女がどのような立場で付き合っているのかも容易に想像できた。

「とにかく、俺、年上の人と付き合うの彼女が初めてだし、何をあげていいのか全然分からないんです。今までみたいな感じであげたらすごい子供っぽくなるし」

旬の悩みの種はそこなのだ。

奈津美との年齢差は四つ。ジェネレーションギャップというものはほとんどないだろうが、十九歳（あと二カ月で二十歳になるが）の旬が、奈津美の二十四歳の誕生日に何をあげれば喜ばれるのかというのは、いまいちピンとこない。これまで物品でのプレゼントのやりとりをしたことがないからなおさらだ。

「だから彼女と年が近い麻生さんに意見を聞いたんです。麻生さんの彼女も俺の彼女と年近いし」

「なるほどな」

麻生は納得したように鼻を鳴らした。

「つつても、別に参考になるようなことってないと思うぞ。俺から見る二十四歳と沖田から見る二十四歳ってまた違うもんだし」

「分かってますよ。だからより近い麻生さんに聞いてるんですってば」

「いや、そういう意味じゃなくて。ここで沖田が、俺が考えるようなプレゼントしたって、それは俺が思う二十四の女が喜ぶものってだけで、沖田の彼女が喜ぶもんか分からないだろ？　それよりは沖田が考えたものの方が彼女も喜ぶと思うけど？」

他人の意見を参考にするのは悪いことではない。しかし、旬が誰かの意見を鵜呑みにしてそのまま奈津美へのプレゼントを考えるのは、本当に旬から奈津美に対するプレゼントになるのか。麻生はそのことを言っている。

「……それは確かにそうかもしれないですけど……でも、何あげていいか全然ピンとこないし、あまりにも的外れなプレゼントして喜んで貰えなかったらショックだし……」

旬はウジウジとロッカーにへばりつき、指で「の」の字を書いている。

それを見て麻生は困った表情を浮かべる。旬の気持ちは分からなくもないのだが、これ以上、麻生がアドバイスできるようなことなんてないのだ。

しかし、すぐに何か思い浮かんだような顔をする。

「沖田。明日シフト入ってるよな？」

「へ？」

突然今の話題と関係ないことを言われ、旬は間抜けな顔で麻生を見る。そして、ゆっくりと麻生の質問に対する返事を考える。

「えっと、入ってますけど」

「五時上がりか？」

「はい」

「その後暇か？」

「はい。なんも予定はないですけど……何ですか？」

急に全く違うことに話が飛んで、旬は首を傾げる。その旬に対し、麻生はニッと笑った。

「明日、プレゼント選ぶの付き合ってやるよ」

旬は、ただポカンとするだけだった。

## 55 プレゼント選び

翌日、旬と麻生は終業後、着替えて一緒に外に出た。

「……あのう、麻生さん」

「何?」

「今日、これから俺の彼女の誕生日プレゼント買いに行くって言ってきましたよね?」

旬は確認するように言った。

「言ったよ?」

それが何? とでもいうように麻生は頷いた。

「俺、何買うか悩んでる上に、麻生さんもロクなこと言ってくれませんでしたよね?」

「おいコラ。言葉は選んで使えよ」

旬の言い方に、麻生は少し眉間に皺を寄せた。

「だって麻生さんが俺に聞くより自分で考える方がいいみたいに言っただし。そのあとに誘われて意味分かんないんですけど。何かいいアイデアとかあるんですか?」

「んー。まあアイデアっちゃアイデアだな。正確には俺が出すわけじゃないけど」

「え?」



「ちょっと待ってろよ」

麻生は立ち止まると携帯を取り出し、誰かに電話をかけ始めた。

相手はすぐ出たらしく、俺らはもう出たけど、とか、もう来んの？  
と言って、相手の言っていることに頷いている。何が何やら分からず旬はそれを見ていた。

「……誰か来るんですか？」

電話を切った麻生に、旬は尋ねた。今の麻生の電話によると、そんな雰囲気だった。

「ああ。俺の彼女」

携帯をポケットにしまいながら麻生は答える。

「はっ!？」

旬は目を丸くした。

「かつ彼女って……俺、聞いてないんですけど……」 流石の旬も、麻生の言動に驚きが隠せない。

「おお。今言ったから」

悪びれる様子もなく麻生は言い放つ。

「いやいや、そのつもりならそのつもりで言って下さいよ。俺、麻生さんと二人で行くもんだとばかり……」

「昨日の時点ではどうか分らなかったしな。もし彼女が無理ならなんか意見だけ聞こうと思ってたから」

旬も割と自由人でマイペースだが、麻生はもしかしたらそれ以上にゴーイングマイウェイな人間かもしれない。旬でさえも哑然としている。

「彼女へのプレゼントなんだから、男の考えより、女の意見の方がいいだろ？ 俺の彼女だから、沖田が望むように二十四の彼女が貰って嬉しいものとか分かるだろうしな」

「あ、そっか」

旬も単純なもので、麻生の考えにあっさりと納得する。

確かに、男の意見より、麻生の彼女の意見が役に立つだろうということははっきりとしている。

「でも麻生さん。俺、麻生さんの彼女に会ったことないんですけど……」

ここでの問題はそれだ。いくらよきアドバイザーだろうとはいえ、旬は麻生の彼女のことをよく知らないし、それは向こうも同じはずだ。そんな相手に、自分の彼女の誕生日プレゼントの相談なんてしてもいいのだろうか。

「いや、沖田も顔くらいは知ってるはずだぞ。少なくとも向こうは知ってるし」

「へ？」

麻生の言葉に旬はぽかんと口を開ける。

「お、来た」

麻生の思考についていけないでいると、麻生が遠くに視線をやる。

彼の視線は、工場の方に向いている。そして、その先には、こちらに早足で向かってくる女性がいた。

「ごめーん。おまたせー」

そう言ってこちらにくる彼女に、旬は見覚えがあった。

「あ……えっと……奥村さん？ 事務の……」

「そうです」

彼女は二人の前に立ち止まるとニコツと笑った。

彼女、奥村沙織は旬や麻生が働く工場の事務職員だ。旬は挨拶以外でほとんど話したことはないのだが、工場にもともと女性が少ないということや、その中でも一番旬と年が近そうなのが彼女なので、顔と名前は自然と覚えていた。

「え……てことは、麻生さんの彼女って……」

旬は麻生と沙織のことを見比べた。

「そう。これ」

麻生は沙織を指さして言った。

「ちょっと、これ呼ばわりやめてくれる？」

沙織はキッと麻生のことを睨んだ。しかし、猫目の上に垂れ目でもあるので、あまり迫力がない。

「えー……全然気づかなかった……何で教えてくれなかったんですか？　ここって、職場内恋愛禁止みたいなのあったんですか？」

「いや、別にないし、隠してたわけでもないけど……でも、特別言う必要なかったっていうか。仕事中は話すこともないしな？」

「うん。他の人も黙認って感じだしね」

「へえ……」

確かに、整備士と事務員なんて、それこそ事務的な用件がないと接することがないし、実際に職場も離れているので、普通にしていたら、二人の関係なんて誰かから聞かないと分からないだろう。

「まあ、そういうわけだし、聞きたいことは遠慮なく沙織に聞けよ」

「何で大樹が偉そうなのよ」

旬ははっと当初の目的を思い出した。つまり、沙織が奈津美への誕生日プレゼント選びに付き合ってくれるというわけなのだ。

「あ、何かすみません。いきなりこんなこと頼んじゃって……」

旬は恐縮して謝った。

もともと旬とも交流があったのならともかく、まともに対面して話すのは今日が初めてだ。そんな相手に、自分の彼女の誕生日プレゼント選びになんて付き合わせてもいいのだろうか。

「ああ、ううん。そもそも言い出したのは大樹の方なんだし。それに私、こういうの大好きだから、まかせて！」

そう言って沙織はピースサインを作った。

「つうことで本人は乗り気だから気にすんな」

なるほど。どうやら沙織は麻生同様に気さくな人柄らしく、自然体に接していても大丈夫らしい。

「じゃあ、お言葉に甘えて……よろしくお願いします」

旬は笑顔で軽く頭を下げた。

「うん。じゃあ、どこ行こうか？」

沙織は早速本題に入る。

「具体的にどんなのにしようっていうのはないのよね？」

「はい」

「じゃあ、駅前のデパートにでも行ってみよっか。あそこ、結構いろいろあるし」

沙織の意見に異論はなく、三人はそこに向かうことに決めた。

デパートに着くと、入口のところにある案内板を眺めた。

「とりあえず、レディースの階とか、行ってみよっか」

「はい」

まずは一階にジュエルブランドの店があったので、そこも覗いて

みることにした。

ショーケースに飾っている商品の一つ一つ見ていく。

ピアス、ネックレス、指輪などのアクセサリが、様々な宝石や貴金属で様々なデザインのものがある。普段入りなれないような店なので、目がチカチカする。

「あ」

思わず声が出た。

「何？ いいのあった？」

隣に沙織がやってきて匂の視線の先のものを見る。

「いえ、決めたわけじゃないんですけど……これ」

匂が指さしたのは、ピンクゴールドのハートの右側のラインに小さな宝石が三つ並んで埋め込まれたペンダントトップにハートと同じピンクゴールドチェーンのネックレスだった。

「あ、可愛いね」

沙織が素直に感想を言う。シンプルなデザインで、ほとんどの女性がそう思うような、当たりさわりのないものだろう。

「俺の彼女、こんな雰囲気のを一つつけてることが多いんですよ」

全く同じというわけではないが、匂が見る奈津美のアクセサリというのは、目の前にあるものが近いと思う。派手すぎず、華奢でありながら、しっかりと存在感があるもの。

「なるほどね。じゃあ、このお店、こういう系統の多いから、いいのあるかもね」

「はい」

頷きながら、旬は何気なくそのネックレスの値段を見た。並んだ数字を見て、桁を数える。

一、十、百、千、二万……

旬の目が大きく見開いた。

二万九千円!?

旬は隣の商品を見る。また違うデザインのネックレスが三万八千円、そのまた隣のものが五万三千円だった。

旬はそっとショーケースから離れた。

「奥村さん」

小声になって、沙織を手招きした。

「何？」

沙織は首を傾げながら旬の近くに行く。

「この店って、結構値段するんですか？」

店員に聞かれないように気をつけながら旬は言った。

「え？ 結構っていうか……まあ、安くて一万円台かな」

旬の基準は分からないが、沙織はとりあえずそう伝える。

すると旬は顔を引きつらせた。

「……奥村さん」

「何？」

「ほとんど予算オーバーなんですけど、どうしたらいいですか？」

その店を出ると、麻生がいた。いないと思っていたら、外で待っていたらしい。

「おお。決まったのか？」

麻生が言うのと、旬は黙って首を横に振った。

「予算オーバーだって」

沙織が旬の代わりに言った。

「予算？　いくらだ？」

「一万五千円です」

旬が小さな声で答えた。

「何で一万五千円？」

麻生が不思議そうに聞いた。

「家賃とか、生活費とか、携帯代とか、色々引いてったら、何とかそれくらいにしかならなかったんです」

言いながら、なんだか情けなくなってきた、旬の声はどんどん小



さくなっていく。

奈津美のために奮発して、といたいところなのだが、実際はそんなもんだ。

「ふーん。でも、そんだけあればいいんじゃない？ 物によっちゃいいもん買えるじゃん」

「そうだよ。お店変えて色々見てみよう」

「はい……」

樂觀的に言う麻生と、フォローするように言う沙織に、旬は不安げに頷いた。

## 56 こだわり

三人は各階のさまざまな店舗を回り、プレゼントになりそうな品物を探した。

アクセサリー、時計、雑貨、鞆など……目に入った店を覗いてみた。

しかし、約一時間ほど探し回っても見つけることができなかった。

「んー。ないねえ」

休憩がてら、エレベーターホールにある長椅子に座って沙織がため息をつく。

「すみません……こんなに探してるのに決められなくて……」  
旬は肩を落とし、うなだれる。

「ていうか、いいなって思ったもんが全部三万越えてある意味すごいですよね」  
旬は自嘲気味に言って乾いた笑いを浮かべた。

一時間、色んな店を見て、いい品物がなかったわけではない。最初に入った店以外でも、奈津美に似合いそうなアクセサリーや、奈津美が気に入りそうな雑貨は見つけた。

しかし、値札をみると、悉く予算オーバーで断念してきたのだ。

予算内に収まる品もちろんあったが、それは奈津美が気に入るかどうか、旬には判断しかねるものだった。奈津美のことはよく見ているから、奈津美が気に入るようなものや、使いそうなものは分かっているつもりだ。そうになると、奈津美が持っているものは、ほとんど値の張るのもだということなのだろうか。

「うーん……デパートだから全体的に高めだしね。ショッピングモールに行ったら多分もっと安いけど……でもここからだといからなあ」

沙織は恐らく、職場から一番近いからという理由でこのデパートに行こうという提案をしたのだろう。

品物が豊富にそろっているのは確かだが、全体的にお高めなのは確かだ。予算のことまでは聞いていなかったのも、失敗したかもしれない。

「すみません……」

真剣に考えている沙織に申し訳なくなって旬は誤った。

「いいよ。選ぶんならちゃんとしたもの選んで欲しいし。ていうか、沖田君がこんなに真剣に選んでるって知ったら、彼女からしたら絶対に嬉しいから」

そう言って、沙織はチラッとタバコを吸っている麻生を見た。

「……なんで俺を見るんだよ。お前、俺が選んでるとこなんか知らねえだろ」

「別にー」

何か二人の間に、プレゼントに関するトラブルでもあったのだろうか。旬には、なんとなく聞いてはいけない気がして聞けなかった。

沙織は立ち上がって近くの案内板を見た。

「あ、化粧品とか、香水は？ さっきは見てなかったけど」  
沙織はフロアの化粧品と書かれたところを指さして言った。

「俺の彼女、香水はつけないんです。それに、化粧品は一応あげたことがあるし」

「え？ 沖田、彼女にプレゼントあげたことないって言ってたじゃねえかよ」

今、あっさりとあげたことがあると言っていたのを聞いて、麻生が口を挟んだ。

「ああ、誕生日とか、クリスマスとか、イベントであげたことがないってだけで、一回だけ口紅プレゼントしたことあるんです。でも、それはプレゼントっていうか、弁償っていうか……お詫びみたいなもので、プレゼントって感じじゃないんですよね」

口紅は、旬が唯一、奈津美へ贈ったものだ。しかしそれは、旬が奈津美の口紅を折ってしまったから、口紅を贈ろうと決めたのだ。旬が特別に選んで買ったわけではない。

「それに、化粧品とかって消耗品だし……できれば半永久的に置いておけるものがいいいんですよね」

「へえ？ なんでまた？」

「それは……」

麻生に聞かれて、旬はそのきっかけとなったことを思い出す。

旬が奈津美に口紅をあげてから、一か月ほどしてからのことだ。

その日、旬がアルバイトを終えて帰っている時に、偶然、歩く奈津美を見かけた。

旬はすぐさまいつものように奈津美に抱きついた。

「ナーツ！」

「ひゃあ！」

奈津美もいつものように悲鳴をあげて後ろを振り向いた。

「旬！」

こんなことをするのは一人しかいないので奈津美はいつものように怒っていた。

「えへへ」

奈津美に怒られても、会えたことの方がうれしくて、ついヘラヘラしてしまう。

「……あれ？」

奈津美の顔を見て、旬はあることに気付いた。

体を屈めて奈津美の顔をじっと眺める。

「なっ……何？」

急に旬の顔が近づいてきて、奈津美は反射的に後ろに仰け反った。

「……つけてない」

「え？」

「俺があげた口紅。つけてない」

旬がそう言った瞬間、奈津美は思わず口元を押さえた。

「え、何で？ 何でつけてないの？ 前会った時はつけてたのに……」

旬が奈津美に口紅をあげてから何回かデートで会ったのだが、その時は旬があげたものを塗っていた。だから、ちゃんと気に入ってくれて使ってくれているものだと思っていた。

しかし、旬と会う予定のない日に会ったら……つけていない。

「……もしかして、本当は気に入ってない？」  
不安になって、旬はストレートに聞いた。

それしか理由は考えられない。旬にもらったものだから、とりあえずデートの時にはつけているが、実はそこまで気に入っていないのではないか。だから、旬に会わない日には違うものをつけているのではないか。

「ち、違うよ！ そんなわけないじゃない！」  
奈津美が必死になって否定している。

「つけてないのは……旬にもらう前に買った分もあるし、その……  
日によって使い分けようかなって思っただけで……」

「……毎日使おうとは思わないってこと？」

「違うってば！ そういうことじゃなくて……」  
すっかり落ち込んでいる旬を見て、奈津美は下を向いた。

「その……気に入ってないとか、そういうことじゃなくて……あの  
口紅、旬に初めてもらったものだから……」

旬は、奈津美の耳が赤くなっているのに気付いた。

「使ったら、すぐなくなっちゃうでしょ？ だから、大事に使いた  
くて……」

だんだん声が小さくなってくる。

それは、照れて、恥ずかしがっているのだと、旬には分かった。

「……そっか。へへっ。そんならいいや」

旬も自然と頬を緩ませ、最初に思ったことなんてどうでもよくな  
っていた。

「……沖田？ おーい」 麻生は旬の目の前で手をヒラヒラと振っ  
た。

旬は何かを言いかけたかと思ったら、遠くを見て意識を飛ばした。そして、麻生の呼びかけにも目の前の手にも反応しない。

「確実にどっか行ってるね。目の焦点も合っていないし」

沙織も旬の様子を見て言った。

「うへへっ」

突然旬が笑い出したので、麻生と沙織はそろって肩を震わせた。

「沖田？」

麻生はおっかなびっくりと旬に声をかけた。

すると、旬ははっと我に返った。

「と、とにかく、そういうわけで、ちゃんとしたものをあげたいんです。今回はまた違うものあげたいっていうのもあるし」

「そういうわけってどういうわけだよ……」

肝心の内容を省かれたので、麻生と沙織には一体何のことか分からない。

奈津美は、旬があげた口紅を、旬が思っている以上に大切にしてくれている。せっかく使えるものをあげたのだから、しっかりと使ってくれてもいいと旬は思うのだが、奈津美のようになくなるのが嫌だからと少しずつしか使わないというのも、十分嬉しかったのだ。奈津美がそんな風にすると思っていなかったからなおさらだ。

今回のプレゼントも、よっぽどのことがない限り、きっと奈津美



は大切にしてくれる。それを思うと、やはり消耗品よりも、なにかきちんとした形で置いておけるものをあげたいのだ。

「まあよくわからんけど……つまり、食いもんとか消えものもダメってことだな？」

「はい……あ、いや、ケーキはケーキでちゃんと用意するつもりですよ。それは毎回してるんで」

「は？　じゃあ、ケーキとはまた別にプレゼントを用意するってことか？」

これまではプレゼント代わりにケーキをあげていたという話は聞いていたので、麻生はケーキに代わる何かをあげようとしているのかと思っていた。

「はい。これにはちょっとした計画がありました」

「計画？」

沙織が首をかしげた。

「計画ってほどじゃないんですけど……彼女には、いつも通り、ケーキは俺が買うって言うておいて、普通にしとくんです。で、当日、勿論ケーキも用意するんですけど、ケーキのあとに、今年はプレゼントもありまーす！　みたいな感じで、渡したいんです」

旬は、はにかみながらその計画を話した。

まだ奈津美との間には、誕生日当日の話は出ていないが、今年もできれば奈津美の部屋でささやかなパーティーをしたいと思っているし、奈津美も恐らく、どこかに出かけるよりはそっちを考えてい

るだろう。

そうしていつも通りのささやかなパーティーを装って、いつもと違うことをして、少しでもいいから奈津美のことを驚かせたいのだ。

「イイ！」

沙織が目を輝かせて頷いた。

「沖田君！ いいよ、それ！」

沙織は興奮気味に言っ て右手の親指を立てた。

「ホントですか？」

旬も目を輝かせて沙織に聞いた。

「いいのか？ それ」

沙織が興奮する理由が分からず、麻生はポカンとしている。

「いいのよ！ だって、これまで特別なプレゼントのやり取りがなくて、今年もいつも通りにいくのかなーって思ってたらプレゼント登場でしょ？ こんなサプライズが効かない女の子なんていないわよ！」

沙織がうつとりとして話す。

「いやー。そんな、サプライズってほどのものでは……」

旬が照れながら頭を掻く。自分としては、まだまだ稚拙な考えだったと思うが、女の立場からの意見で褒められたので、嬉しくないはずがない。

ただ、麻生はそれがよく分からないという顔をしている。

「どんな些細でもサプライズって、された方がぐつとくるものなのよ。男ってそこんとこよく分かってないからさあ。誕生日にいつも行く居酒屋でご飯済ましたりするのよ。それで何もないから、プレゼントは？　って聞くと『飯食いに行ったじゃん』とか言ってるムードも何もなかったりするし」

「俺の話じゃねえかよ」

沙織の実感の込められた話に、すかさず麻生が口を挟んだ。

「お前、まだそのこと根にもってんのかよ。後でちゃんとプレゼントやっただろ」

麻生が沙織に言い返すと、沙織はため息をついた。

「それが分かってないのよ。そんな義務みたいな感じで渡されても嬉しくないの！　ちゃんと気持ちがこもってないとプレゼントって言わないでしょ！」

「はあ？　そんなこと言いながらちゃんと受け取ってたじゃねえかよ。それも文句言いながら！」

ここで麻生と沙織の口げんかが始まってしまった。まさかこんなことになるとは思わず、旬はオロオロと二人を見る。

「お、落ち着いてください……今はその話じゃないですし……」  
とりあえず、旬は戸惑いながら、仲裁に入った。

「……何の話だったっけか」  
旬の一言であっさりと二人の言い争いは治まった。

「沖田君の彼女へのプレゼント。何がいいかって話だったでしょ。元々は」

まるで今までのやりとりがなかったかのようだ。

二人の関係は、喧嘩するほど仲がいいというやつで、さっきの言い合いも、二人にとっては何でもないことだったのか。

沙織は再び案内板を眺める。

「あ、下着とかは？」

沙織が思いついたように言った。

「……へ？」

旬はポカンと口を開けた。

「下着ー？」

麻生が眉間に皺を寄せて沙織に聞き返した。どうやら旬の聞き間違いではなかったようだ。

「男から女にそんなん渡して、引かねえのか？」

「今時、男からのプレゼントで下着なんて珍しくないよ。そりゃあ、男の趣味で渡されてそれがドギツイのだったら別れを決意するくらい引くけど」

「へえ……」

「お前、よく俺の前でそれを言えるな」

沙織のその口ぶりはまるで今までに貰った経験があるかのようだった。しかし、麻生はそんなプレゼントをした例がないので、あるとしたら今までの彼氏だろう。

「別に私がもらったことあるわけじゃないからね。友達に聞いた話と、あたしの感想」

「ああ、そうかい」

「で、どう？ 彼女へのプレゼントとしては……沖田君？」

沙織が匂に話を向けると、匂はポーツと宙を見つめ、沙織達の声が聞こえていないようだった。

下着……なんだか、妙にナツに馴染みがあるような……

匂の頭の中には、ベッドの上で、下着姿の奈津美が横たわり、寝返りを打っている。

そして、匂の方に向いて微笑み、口を開く。

「匂……脱がして？」

ちなみに、実際に奈津美はそんなことを言ったことはない。

「決めました！」

急に拳を握りしめ大声を出した匂に、麻生と沙織はまたもや肩を震わせる。

「俺、下着にします！」

邪なことが頭によぎりながらも、旬は力強く宣言した。

## 57 男のロマン

三人は、下着の専門店に足を踏み入れた。

「ていうか、なんで大樹も来てんのよ。さっきまで興味なさそうだったのに」

沙織が麻生を訝しげに見た。

さっきまでさまざまな店を回っている間は、店の外で待っていたのに、今回に限っては麻生も一緒についてきている。

「いや、こういうとこって男一人で来れないし。今後のためにも思っ  
つて」

麻生はしれっと言った。

「何が今後のためよ。下心見え見えだから」

「別に否定はしねえけど。それと同じことあいつにも言ってやれよ」  
そう言って麻生は顎でそっちをしゃくった。

「え？」

沙織がその先を見ると、匂がいつの間にか二人から離れたところに立っていて、きよろきよろと店内を見回している。

「……沖田君」

沙織はそっと匂に近寄っていき、恥ずかしそうに声をかける。

「こういうところで、あんまりそういうことしないで。店員さんにも疑われるから」

「いやー。俺、こういう店初めてなもんで、ちょっとどうなのか気になって」

旬の目は、あくまで純粹だ。純粹な目で、下着売り場を眺めている

「……沖田君がイケメンなのがせめてもの救いよね」  
沙織が苦笑いで言った。

「え？　そうですか？」

沙織が言っている意味が分かっていないが、とりあえず褒められたと思って旬は照れる。

「幸せな奴だな。色んな意味で」  
麻生が呆れ気味に呟いた。

「とりあえず、彼女のプレゼントでしょ。沖田君」

「あ、そうだった」

「忘れてんのかよ」

本来の目的があっってきているのに、こういう場に来ると、男として妙にテンションが上がってしまった。

ここにある下着のうち、どれかを奈津美が着る……そう思うと更に妄想が膨らむ。

「おい……またどっか行ってんな？」

「だ、大丈夫です」



飛びかけた意識を、麻生の声が何とか引き留めてくれた。

「そういえば、沖田君、彼女の下着のサイズってちゃんとわかってるの？」

沙織がふと思いついて言った。ここでプレゼントを買うのならば重要なことだ。

「あ、はい。バッチシです。七十のFです」

はっきりと即答した旬に、沙織と麻生は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をする。

「お前、何でそんなん即答できんの？」

「え？ 普通知りませんか？」

「AとかBは知っててもその前の数字はなかなか聞かねえっての」

「ていうかさっき、彼女の指輪のサイズ知らないって言ってたのに……何でそれは分かるの？」

さっきまでアクセサリショップで見ていた時に、沙織は、やはり恋人へのプレゼントの定番ではないかという話をしたのだ。

それに対し、旬は彼女の指輪のサイズが分からないと答えた。結局、予算内で買えるようなものがなかったので、選ばずじまいになったが。

「いや、だって俺、指輪って自分でもしないから、サイズがあんまりよく分からなくて……」

「女もんの下着の方がしないだろうがよ」  
麻生が尤もなツツコミを入れた。

「いや、そりゃそうですけど……でも、女の人のお胸はこう……」  
旬は説明すべく考えながら、両手を前にかざし、お椀型を作る。

「……触感？」

「沖田君、その手やめて」

「お前、マジでシャレなんねえぞ」

そこには何かを掴んでいる旬の手の形は、妙にリアリティーがあり、店員も客も女性が多いようなこんな場所ではあまりふさわしくなかった。

「でもまあ……Fつつたな」

それを呟いて、麻生は少し考える。

「どんな感じ？」

「最っ高です」

二人は顔を見合わせてニヤツと笑った。

「ちょっと。その会話もシャレになってないから」  
沙織が鋭く二人をにらみつけた。

「とりあえず、サイズ分かってるんなら問題ないわよね。でも下着って言っても、ブラとパンツだけじゃなくて、キャミソールとかナイトウェアとかもあるけど、何あげる？」

気を取り直して沙織が言った。

「あー。そうなんですか……」  
旬はうーんと考える。

女性の下着といえばブラジャーとショーツと考えがちだが、店によつてはそれだけではないのだ。そしてこの店は品揃えが多いらしい。

「とりあえず見てから決めます」

「そっか。まあそうだよね」

そして三人は、やっとプレゼント選びに取り掛かった。

「沖田君の彼女って、どんな雰囲気の人？」  
商品を眺めながら沙織が言った。

「へ？　どんなんて？」

「キレイ系とか、可愛い系とか……お姉系とか、ギャル系とか？  
なんていうか、そういう系統がどんな感じの人かなって思ってる。それで好みとか変わるし」

「ああ、なるほど……そうですね……んー、まあ、一言でいえば」  
旬は腕を組んで奈津美を頭に思い浮かべる。

「キレイで可愛くてセクシーで家庭的な感じです」

「一言で言えてねえじゃん。しかも最後のはあんまり関係なくない

か？」

「ていうか、結局どれなの」

麻生と沙織は冷静に言い返す。

「だって一言で言い表せないんですもん。ぱっと見た感じは普通にキレイなんですけど、いじっぱりだったり、たまーに、本当にたまーにですけど、おねだりとかしてきたりわがまま言ってくるところは可愛いんです。かと思ったら、ちょっとエロく迫ってくる時もあるし。そういう次の日の朝には、爽やかに朝ごはん作ってくれてるし。なんか、そういうギャップ満載のところがたまらないんですね」

奈津美のことを考え、だんだんとヒートアップしてくる旬に対し、麻生と沙織は急激に冷めた目で旬を見ている。

「本当にごめん。聞き方間違えたよね。服の趣味とか、どんな感じなの？」

沙織は旬の言葉に対しては何も言わず、言い方だけを変えてもう一度聞いた。

「服の趣味ですか？」

きょとんとして旬は答える。

「そう。好きな色とか形とか……ていうか、下着って見たことある？」

「それはもうバッチシです！」

旬はまた鼻息荒くなってガッツポーズをする。

「あ、ちょっと待ってね。一つずつ聞くから」

ほっといたらまた一人で白熱して話しかねないので、沙織は右手を出して匂を制する。そして、言った通りに一つずつ聞いていく。

「色は？　どんなのが好きなの？」

「えーっと……結構色んなの持ってますけど……ピンクとか、水色とか、緑とか……あ、でも濃い色っていうか、派手な感じのはあんまり見たことないです。黒いのは確か持っていましたけど」

いくら奈津美へのプレゼントの相談だからと言って、知らない人間相手に、それも男の麻生も聞いているのに、言っていることなのか。しかし、匂はそんなことに気が回っていない。

「なるほどね。それで、どんなデザイン？」

「えーっと……あんまり珍しい感じではないです。あんな感じの……刺繍みたいのが入っていたり、リボンがついてたり」

ちようどよく周りに現物があるので、匂はそれらを指さしながら言った。それらは本当に、下着のデザインとしてよく見る花や蝶やハートなどの刺繍入りのものだった。

「彼女いわく、探すのが大変らしいんですね。彼女のサイズだとあんまり好きなデザインのがないって」

「あー。そうだろうね。サイズが大きいやつはなんでか知らないけど、デザインがいまいちなものが多いから」

「そうなんすか……じゃあ、彼女が好きそうなのってないんですか

ね」

旬は肩を落とす。せっかく何にするか品物は決まったのに、今度は彼女が好きそうなもの、もらって喜んでもらえるものを選ばなければならぬという課題ができた。本当に、プレゼント選びは簡単ではない。

「とりあえず探そう。じゃないと何とも言えないしね」

「はい」

そして、やっとのことで、旬は商品選びに入った。

「あ、このへんだよ。彼女さんのサイズ」

沙織が探して目の前に向かったのは、デザインがよく分かるようにブラジャーが通路側に向いて並んでいる陳列棚だった。

「おお……」

旬は思わず声に出してしまった。

目の前にさまざまな色形の女性ものの下着が並んでいるのだ。嫌いなわけではないのだが（むしろ大好きなのだが）実際にこれだけの数が目の前に並ぶと威圧感さえ感じ、居心地が悪くなってくる。

「なあ、沖田」

隣で麻生に肘でつつかれた。

「はい？」

「あれ、見てみ」

麻生が顎でしゃくった方を見てみると、そこには商品の下着を着たマネキンが立っていた。頭から足先まであるが、顔はついていない白いマネキンだ。

そのマネキンは、黒いレースとフリルのあしらわれたブラジャーに、同デザインの少し面積の小さなショーツが着せられている。さらに、それに合わせたような黒色の編み目の大きいガーターネットッキングにガーターベルト。そして、頭部には、黒の大きなところが魔女帽子がかぶせられていた。

この帽子は、よく見ると安っぽい生地と作りなので、商品ではないだろう。それでもハロウィンの時期に合わせて、遊び心を持たせたディスプレイなのだろう。

「ガーターってなんか憧れるよな。それ着てるってだけで何かエロいっつうか……」

麻生が言う言葉は、旬の耳には全く入っていなかった。

旬の脳内では、妄想劇場が繰り広げられている。

奈津美が、このマネキンが着けているもの一式と同じものを身に着けて、旬の方を向きながら、魔女帽子のつばを持って微笑みかける。

そして、奈津美が得意な流暢な発音の英語で、旬に言うのだ。

「トリック・オア・トリート（お菓子をくれなきゃイタズラするぞ）」

「あ、そう。じゃあ今度着てあげようか？」  
沙織がさめた目で麻生を見ながら言った。

「いや、それはいいわ」  
あっさりと引いて麻生が答える。

「何だよ。懂れてるんでしょ？」

「そうだけど、前もって予告されててもあんまりグツとこないって  
いうか……服を脱いだら実は着けてましたって方がいいんだよな。  
しかもそれが普段そういうのを着てなさそうな奴だったら尚良し」

「は？ キモ！」

麻生のこだわりに、沙織は眉間に皺を寄せた。

「ていうか、男ってそういうのに夢持ちすぎ。ガーターイコールエ  
ロいって考え方間違ってるし。女は別にそれだけのために着けてる  
んじゃないんだからね」

「夢ぐらい見たっていいじゃねえかよ。そんな男のロマンぶっ潰す  
ようなこと言うなよ」

「何がロマンよ。AVの見すぎ……」

沙織はふと匂の方に目をやり、言い合っていた言葉が止まった。  
それに続いて麻生も匂に目をやって、固まった。



「イタズラ……」

旬はマネキンの方を見ながらまだ妄想劇場の劇中にした。

しかも、妄想はグレードアップし、イタズラするぞ、と言っていたのは奈津美の方のはずなのに、なぜか旬の方がイタズラをしかけていた。言うまでもなく、魔女風の下着の奈津美に、だ。

「うへへ……」

「ちよっ……沖田君！ 鼻血！ 鼻血ー！」

沙織の慌てる声に気付いたのは、十秒ほど後だった。

## 58 慎重に

「……すみません。マジですみません」

「お前、マネキンに発情すんなよ。こんなところでシャレになんねえから」

「……はい」

マネキンに発情したわけではなく、奈津美を想像して、なのだが、それは言わなかった。

「どう？ 止まった？」

沙織に聞かれ、匂は鼻を押さえたティッシュを離し、そこに血がついていないかを見た。

「大丈夫です。ティッシュありますがございました」

「もう鼻の穴に詰めとけよ。また出るかしんねえぞ」

「……そうします」

麻生に言われた通り、匂はティッシュをちぎって丸め、鼻血が出た右の鼻の穴に詰めた。

「沖田……お前って意外と純情な奴だったりするのか？ 下着見て興奮して鼻血って」

「いや、決してそんなことは……」

興奮した本当の理由は、純情とはかけ離れている。コスプレした彼女を想像して、あれやこれやと妄想していた、なんて言えるわけもないが。

まさか、それで鼻血まで出るとは思いもしなかったが、こういう場所で、やっぱり気持ちが高ぶってしまったているのか。

「大丈夫？ やっぱりやめようか？」

沙織が心配した顔で旬に聞いた。

「いえ！ 大丈夫ですから！ ここまできて、変えるなんてできませんから！」

旬は慌てて首を横に振った。

せっかく奈津美へ贈るものの方向性を見つけたのに、ここでやめてしまったらまた悩まなくてはならない。それに、これ以上沙織達をつき合わせるのも悪い。一応旬もそこまで考えている。

「そう？ ……じゃあ、もう鼻血出したりとかやめてね？ 正直、そんな人と一緒に居たくない」

「だな。同じ男でも、俺はフォローできねえし」  
はつきりと言い放った沙織に、麻生がうんうんと頷いた。

「はい……気をつけます」  
旬には何も言い返せなかった。

「そもそも、プレゼントに自分の趣味押し付けるってあんまりよく

ないからね。あげる側と一緒に趣味だったらまだいいけど、全くの逆だったらもう側もどうしたらいいのか分かんないのよ。ていうか、正直迷惑でしかないし」

沙織が憎々しげに言った。

「なんかまた……実感もってますね」

「何だよ、また遠回しに俺に対する嫌味か？」

「違うわよ。前の彼氏」

「言うのか、それを俺の前で」

「だって本っ当に最悪でしかないのよ！」

沙織が声を大きくし、旬と麻生は目を丸くする。

「こっちが大して欲しくない上に趣味じゃないもんを自信ありげに渡されるもんだから、こっちも喜ばないわけにはいかないし。そこまではまだいいけど、その後もらったものを目に見えるところにおいてないと『あれどうしたの?』とか言ってくるし。アクセサリーなんかは会う度に着けてないといけないし、偶然会った時に着けてないのも目ざとく気付いて言ってくるのよ。本っ当うざいったらない」

沙織は、二人に言うでもなく、それでも自分の中の毒を吐きだす。

旬と麻生は、啞然とそれを見ているしかなかった。

「女って怖えな」

麻生が呟いた。旬も頷きはしなかったが、麻生が言っている意味がものすごく分かる。

これまでに彼女にプレゼントをあげた時、これまでの彼女は、表面上は喜んでいたが、陰では何を思われているのか分からないのだ。それを考えると、恐ろしくて仕方ない。

「ていうか俺……今さらだけど、彼女にプレゼントをあげて大丈夫なんだろうか……」

旬は急に不安になった。

今までイベントでのプレゼントをしたことがないので、奈津美にプレゼントをあげるのはこれが初めてだ。奈津美がプレゼントを受け取った時の反応なんて、旬は知らない。

ひょっとして、前に唯一あげた口紅も、本当はうれしくなかったんじゃない……

無くなるのが嫌だから使っていないと言っていたけれど、それは言い訳だったんじゃない……

そんな不安も出てくる。

「俺……やっぱり、彼女にプレゼントあげるのやめようかな……もう、いつも通り、ケーキ買ってささやかなパーティーにしたほうが……」

「えー！ 何で？ サプライズいいのに」

急に弱気になった旬に対して、沙織は反対意見を出す。

「お前……あんだだけ不安をあおっというてよく言うな」

そして麻生は沙織に対し、呆れた口調になる。

「沖田君。別に私が言ったこととか気にしないでよ？ 私が言ったのは、あくまで彼女の好みを一切無視して、自分の欲望を押し付けるようなプレゼントをあげた場合だから。沖田君は、彼女を喜ばせたくて、プレゼントをあげるんでしょ？」

「はい……でも、それもかなり独りよがりな考え方ですよ。彼女が欲しいって本当に思ってるかも分からないのに俺があげたいからあげるって……」

旬は既にマイナス思考になって、うつむいてしまっている。

「欲しいっていうか、多分貰えるとは思ってないんだよ、彼女さんは！ それで貰って嬉しくない人なんていないって！」

「それでも渡すものによっては喜べないじゃないですか」

「そ……それはそうだけど……」

沙織は、そんなことない！ と言いそうになったが、たった今、昔の彼氏にもらったプレゼントに対しての不満を漏らしてしまったばかりだ。だから、素直に聞き入れる言い方になってしまった。

「でも、沖田君。沖田君は、彼女さんのこと大好きなのよね？」

「はい。それはもう」

急に、旬の姿勢がよくなった。

「じゃあ、彼女さんのことはよく見て、ちゃんとわかってるのよね？」

「はい。いっつも嘗め回すように見えますから。ていうか、實際嘗め回してますから」

余計なことまで言ってしまう旬は、どこか誇らしげでもある。

「それなら大丈夫！ 彼女さんのこと分かってるなら、そんな的外れなもの選ぶわけないって！ ていうか、好みど真ん中なはず！」

「ホントですか？」

何の根拠もない沙織の言い方に対しても、旬はぱあっと表情を明るくする。

「ていうか、初めてのプレゼントで株上がっちゃうかも？ やっぱ私のこと一番分かってくれてるのね！ って」

株が上がるという言葉聞いて、旬は俄然やる気を出した。

「俺、選んで見せますとも！ 彼女にぴったりなプレゼントを！」

「頑張ってー！」

何やら盛り上がっている旬と沙織を見て、麻生は冷静に思った。

結局は、彼女にあげるまでは彼女の反応は分からないのだし、博打のような状況は変わらないのではないかと。

……つうか、悩むんなら下着じゃない方が無難じゃねえのか。って思うのは俺だけか？

麻生は静かに思うだけで、口には出さなかった。

「というわけで、張り切っていこー」

「おー！」

勢いに任せ、二人は盛り上がっていた。

「これは？」

沙織は薄い黄色にオレンジ色の花が刺繍された上下セットを匂に見せた。

「それはちよつと……派手ですかね」

デザインとしては悪くはないのだが、単体だけを見ると、色の組み合わせがチカチカして見えてしまう。匂は首をかしげた。

「じゃあこれは？ 可愛くない？」

今度は、薄いピンクにショッキングピンクの大きなドット柄のものを手に取る。

「んー……俺的には可愛いと思いますけど……彼女の下着でこういうのってあんまり見たことがない気が……」

色も柄も無難なように思うが、なんだか子供っぽすぎる印象がある。奈津美も嫌いではないだろうが、△といったところか。

「あ、これ……は、Eか」 沙織は手を伸ばしかけて、サイズを見てその手を止めた。

「やーっぱり難しいね、サイズ大きいと。なんで派手なのか微妙なのしかないんだろ」



いくつか手に取ってみて、沙織はため息をついた。

「ねえ。大樹はどう思う？」

選ぶ時は黙って見ている麻生に、沙織は意見を求める。

「いや、俺に聞かれても。俺が選んだってどうしようもないし」

「分かってるわよ。ただボーっと突っ立って見てるだけじゃなくて何か意見出してって言ってるの」

「あー？ んな無茶言うなよ」

「男目線でどれがいいかっていうのを教えてくれたらいいのよ。参考にするかどうかは別だけど」

「あっそ。……んじゃこれ」

麻生はざっとみて、豹柄の下着を指さした。

ワイヤー入りの四分の三カップに、ビキニタイプのショーツという、形としては、ごくありふれたものだ。だが、その柄のせいで、少々派手な印象だ。

「えー？ これはちよつと違うんじゃない？」

麻生の意見に沙織は首を傾げた。

「俺目線だったらいいと思うけど？ 沙織だって持ってるじゃん、こういうの」

「そうだけど……アニマル柄って好き嫌いあるし。ねえ。沖田君……」

一応旬の意見も聞こうと沙織は旬の方を見た。

「沖田君？」

しかし、旬はポーツとした様子でその豹柄の下着を見ていた。

豹柄などのアニマル柄は、奈津美の印象にはない。それでも何となく、旬の脳内で奈津美にこの豹柄下着を着せてみた。

すると、沙織や麻生の声なんて耳に入らないまでの妄想劇場が繰り広げられてしまっている。

奈津美のイメージとはかけ離れている豹柄の下着。しかし、奈津美のグラマラスな体型は、旬の脳内で見事にそれを着こなしている。

更に、イメージにない下着を身に着けている奈津美は、イメージにない仕草やポーズをとっている。腰をくねらせたり、胸を突きだしたり、腕で寄せたり……とっても官能的だ。

そして、四つん這いになった奈津美は、肘を床につけ、腰をつきあげて、いわゆる『女豹のポーズ』をとった。

その奈津美は、上目使いでどこか挑戦的な目で旬を見つめ、口を開く。

「旬……あたしに、ついてこれる？」

「あつたりまえじゃん！」

またもや何の脈略のない発言に、麻生と沙織は驚いた。

「今度はどうした……」

「って、沖田君！ 鼻血！ また出てる！」

沙織の慌てた声に、旬はハッと我に返った。

「えっ……ああっ！」

ティッシュを詰めている方とは反対の左の鼻の穴から、血が流れ出ていた。

「今度は何を想像したんだよ」

二度目の鼻血を出す旬に、麻生は呆れている。

「すみません……ちょっと」

旬はティッシュで鼻を押さえながら答えた。さっき沙織にももらったティッシュが、また予想外に役に立った。

「なんだ、お前。欲求不満か？」

「そんなことはないんですけど……」

そう言いながら、今度は左の鼻の穴にティッシュを詰める。

本当に、こんなに鼻血を出してしまうほど欲求不満なつもりはない。それなのに、下着一つ見てこんなに想像力を掻き立てられてしまうのは、その証拠なのだろうか。確かに奈津美に対する（おおっぴらに言えない）欲求は計り知れないが、恋人として、することは

十分すぎるほどしている。

ナツとのエッチは今のままでも十分好きだけど……やっぱ色々やりたいことはあるしなあ……

ついつい、邪な方へ考えが及んでしまう。

「何、余計なこと話してんのよ」

「いや、だって、こいつの反応の仕方が過剰だから」

「それは大樹が余計なことを言うからでしょ」

「何でだよ。俺は沙織に言われたから俺の意見言っただけじゃん」

沙織と麻生の言い合いが始まり、旬はオロオロと二人を見る。旬がつい妄想の世界へ飛び立ってしまったばかりに、二人の雰囲気陰険にしてしまうことになったらどうしようかと、本気で悩んでしまっている。

麻生はちらっとみた商品の陳列から一つ下着のセットを取ってみせた。

「別にこういうの選んだわけじゃないのに」

「何、これ……って!」

麻生が手にしたそれを見て、沙織は目を見開いた。

「何ふざけてんのよ、あんたは!」

沙織は眉間に皺を寄せ、麻生の頭にチョップをかました。

「いって！ ふざけてないし。たとえばの話しただけじゃん。なあ、  
沖田」

「え、あ、は……」

麻生に急に話を振られ、旬はわけも分からず驚いた。そしてそれと同時に、麻生が手をすべらせ、商品が落ちた。

それを何気なく拾おうとしゃがみ、マジマジと見てしまった。

赤の総レースで、更に、ブラジャーのカップのトップと、ショーツの股の部分にスリットが入っていた。

つまり、本来、隠れるはずの部分が全て透けていて、一番隠したい所が簡単に露出できてしまうデザインなのだ。

そしてもれなく、この下着を身に着けている奈津美の姿も旬の脳内では簡単に登場する。

そしてその奈津美は……（以下表現不能）

「沖田君……どうしたの？」

「おい、沖田？」

しゃがんだまま固まっている旬に気づき、沙織と麻生は体を屈め

た。

その瞬間、床に赤い液体が落ちた。

「…………え？」

「沖田、どうし……」

麻生は匂の顔を覗き込み、肩を震わせた。

「お、沖田君!？」

匂は、再び鼻血をだしていた。両方の鼻の穴にティッシュを詰めているというのに、それで吸収しきれず、両方の穴から、筋となつて出てきていた。

「おい、沖田。しっかりしろ」

麻生が匂の顔を軽く叩いた。

すると、匂の口元が緩んだ。

「へ……へへ……」

次の瞬間、匂は白目をむいて意識を遠くへ飛ばしてしまった。

「ちよっ……おい! 沖田!」

「沖田君!」

果たして、この調子で奈津美へのプレゼントを選ぶことができるのだろうか。

## 59 お楽しみ

「あ、おはよ。奈津美」

朝、奈津美が出社し、更衣室に入ったら、そこにはすでに制服に着替えたカオルがいた。

「おはよう」

奈津美は挨拶し返して、自分のロッカーをあけて鞆を置いた。

カオルはいじっていた携帯を仕舞い、ロッカーから何か荷物を取り出した。

「はい。奈津美。誕生日おめでとう。これ、プレゼント」  
突然そう言われて目の前に小さな紙袋を差し出され、奈津美は一瞬きよんとした。

「あ、ありがとー！」  
すぐに把握して、奈津美はそれを受け取った。

今日は、十月三十日。奈津美の二十四歳の誕生日なのだ。

「何？ 忘れてたの？」

奈津美の反応を見て、カオルは笑った。

「ううん。寝る前まではちゃんと分かってたんだけど、朝起きたら特に意識してなくて」

昨日の夜から今日の日付に変わるまでは、匂と電話をしていた。

そして、日付の変わった瞬間に、旬から「おめでとう」という言葉を貰った。

その時までには幸せいっぱい、今日も仕事が終わってから会う予定なのだが、朝起きてここに来るまでは、特にいつもと変わらない日常だったので、つい、今日が自分の誕生日だという認識が薄くなってしまうていたのだ。

「まあ、意識したって、もう嬉しいもんじゃないもんね。誕生日なんて、年とっただけだし」

九月にすでに誕生日を迎えたカオルが小さくため息をついた。

「まあね」

誕生日が嬉しいのは、せいぜい十代のころまでではないだろうか。特に女性にとっては、年々その存在が不要に思えてくるのだ。

「ね。開けていい？」

気を取り直して、奈津美はカオルにプレゼントを掲げて見せた。

「うん。どうぞ」

カオルがにこっと笑って頷いたので、奈津美は紙袋を開けた。

「わ。可愛い」

透明のプラスチックの箱を取り出して、奈津美は顔をほころばせた。

「何これ。石鹸？」



「そう。ソープケースとボディータオルのセット」

カオルがくれたのは、いわゆるお風呂セットだった。薔薇の形をしたローズピンクの石鹸と、淡いクリアピンクで、蓋のほうに石鹸と同じような薔薇の花びらの装飾がされているソープケース、そして、淡いローズピンクのボディータオルが入っていた。

「その石鹸、あたしも使ったことあるんだけど、すっごくいいのよ。肌がしっとりするし、いい匂いだし」

「へえ……あ、ホントだ。いい匂い」

箱に鼻を近づけるとほんのりと薔薇のにおいが混ざった石鹸特有の匂いがした。

「ありがとう。使わせてもらうね」

笑顔で言って、奈津美は丁寧になそれを紙袋にしまった。

「そういえば、奈津美、今日はどうすんの？」

プレゼントをロッカーにしまい、着替え始めた奈津美を見ながらカオルが聞いた。

「今日？」

漠然とした聞き方に、奈津美は聞き返す。

「旬君とデート？」

そう言われて、聞かれた方向性が分かって奈津美は、ああ、と頷いた。

「デートっていうか、旬が仕事終わったらうちにくるって。あんまり特別なことはしないけど」

「へえ。じゃあ、プレゼントを楽しみに待つだけなのね」

「うん。プレゼントはないわよ。あたし達、そういうやりとりはしてないから」

「え……って、そういえば言ってたわね」

奈津美と旬は、お互いの誕生日やクリスマスのプレゼントの贈り合いはしない。カオルは、その話を奈津美から何度か聞いたことがあることを思い出した。

「でも、それって結構淋しくない？ プレゼントって、誕生日の唯一の楽しみだったりしない？」

「んー……もう慣れたっていうか、それが当たり前になってるから、何ともないかなあ。でも、何にもないわけじゃなくて、ケーキは用意してくれるみたいだから」

「ああ、旬君のバイト先の？ あ、でももう辞めたんだっけ」

「うん。だからだろう。分かんないけど、ケーキは持ってくるって言ってたから」

旬と今日の予定を話していた時「ケーキは俺が用意するから」と言われたので、いつものようにそれを素直に受け入れた。

しかし、いままで旬がケーキを用意してくれていたのは、旬がバイトをしていたカフェで、ケーキが定価より安く買えるからだ。旬は整備工場でのバイトを始めるのをきっかけにカフェのバイトを辞めてしまったので、もう買うとしたら定価になるのではないのか。そうしたら、もしかしたらまた違うところで買って来るのかもしれない。

「……確かに、イベントでプレゼントのやりとりがないのって、淋しいかもしれないけど……でも旬はお金ないからね」

奈津美はため息混じりに言った。

「プレゼントも……むしろ旬は何かしらしたいみたいなのよね。だけど、旬がお金ないっていうの分かってて、そういうのに気を遣わせるのって心苦しいし」

奈津美が旬と付き合い始めて最初のイベントは、奈津美の誕生日だった。その時は、あらかじめ、プレゼントはいらないと旬に言った。

旬は案の定というか、不服そうだった。だから、プレゼントとかではなく、旬のバイト先のケーキが何か一つだけでもいいから食べてみたいと言ったのだ。それ以前に、何かの話の拍子に、カフェのケーキは定価より安く買わせてもらえるのだと聞いたことがあったので、あえて言ったのだ。

実際にそのケーキは美味しいし、旬はたいがい何種類かを持ってきてくれて、それを一口ずつ食べるという贅沢食いもさせてもらっているのだ、奈津美としては不満はない。だが、一種類でいいと言ったのに毎回いくつか持ってきてくれるのを見ると、ケーキだけではプレゼントとしては物足りなさを感じているのではないかと

思う。

だから、奈津美の方からもプレゼントはなしで、ケーキを作ったり、ごちそうを作ったりするだけにして、プレゼントのやり取りはしないことにしているのだ。

……あれ？　よく考えたら、なんか、質素っていうか、地味？

「……ねえ。カオルの誕生日の時は、どうしてたの？　デートしたんだっけ？」

「うん。デートっていつでも、ホテルのレストランで食事して、丁度週末だったから、そのままホテルに泊まって……かな」

それを聞いて想像して、奈津美は自分たちの過ごし方との差を感じた。

「何かいいな……大人のデートって感じで」

奈津美の口から、つい、ぽろっと気持ちが漏れた。

「大人のって……あたし達同年でしょ」

カオルが呆れたように言った。

「あたしからしたら、奈津美達のほうがいいと思うけど？　まったりお家デートって感じで。あたしらは、お互いに実家だし、会うってなったら外でしかないんだもん」

「そっかあ……」

確かに、奈津美と旬もお互いに一人暮らしだから今のようなささ

やかなパーティーができるわけだが、もしもお互いに実家となれば、外で会うしかないのだ。

今の状態でも、十分満足している。しかし、カオルや世の中の一般的な恋人達のことを考えて比べてしまうと、なんとなく羨ましいのだ。

「隣の芝は青いってやつかなあ」

「そうじゃない？　ていうかね。奈津美が今までそれで大した文句なくやってこれてんだから、問題ないんじゃない？　むしろ、旬君にベタ惚れな証拠」

「なっ……」

カオルにビシツと言われ、顔を赤くして言い返そうとしたが、カオルの言葉に、そう……かな？　と認める自分がいて、言葉が止まってしまった。

むしろそれが、はっきとした肯定になってしまった。

「今夜が楽しみね」

カオルがニヤツと笑って言った。

「べっ……別にいつも通りよ！」

奈津美は耳まで赤くして、今度ははっきりと言い返した。

この時点では、奈津美は本当にいつも通りの、去年と同じような誕生日だと思っていて、もしかして、という期待も、全くしていなかった。

## 60 緊張感

旬はもうそろそろ来るだろうか。

奈津美は時計を見て思った。

もうすぐ七時になる。

旬からは六時過ぎに今仕事が終わったとメールが来た。それから、ケーキを買っていくから、大体七時頃には行けると思うと書いてあった。

奈津美の方は、定時に仕事を終えて帰ってきて、軽く部屋の掃除をして、晩御飯の支度をしていたところだ。

今日はとんかつにした。一応、奈津美の誕生日を祝うという名目で旬が来るのだが、食事を用意するのは奈津美なので、パーティー風の食事は作りにくい。

もちろん作ったっていいのだが、奈津美は自分のためにご馳走をつくるというのは、何だか気が引けるのだ。旬の誕生日だったらしつかりと気合を入れて作るが、自分の誕生日と思うと、なかなかしにくいのだ。だからといって、いつも通りの質素な食事も味気ない。

それで、今日は、ボリュームのあるとんかつを作ることにしたのだ。

そのとんかつも、パン粉までつけて、あとは揚げるだけだ。他のおかずもほぼ完成だ。

旬には出来立てを食べてほしいので、旬が来てから、揚げようと思っ  
て待っている。

もう来るかなあ……

奈津美はまた時計を見て、旬が来るのを待ち焦がれていた。

……どうしよう。

奈津美が旬が来るのを今か今かと待っているのに対して、旬は実はもう奈津美の部屋の前まで来ていた。

旬はバイトを終えて、ケーキを買って、足取りも軽く奈津美のもとへ向かっていた。いつもなら、一秒でも早く奈津美に会いたいため  
に走ってでも来て、奈津美の部屋に入るのに、今日はそれは躊躇  
われた。

その原因は、旬の持つ鞆の中に眠る、ピンク色の可愛い包みにある。  
る。

そう。奈津美への誕生日プレゼントだ。

旬は、厳選に厳選を重ねて、なんとかあの下着のショップで奈津  
美のプレゼントを決めた。

沙織も太鼓判を押してくれたし、今日、仕事が終わってから、麻  
生にも「頑張れよ」と応援の言葉を貰った。

それで意気揚々と、ここへやって来たのだが、道中に色々と考えてしまったことにより、その足はだんだんと重くなっていったのだ。

旬は、ケーキを買って、何気なく考えていたのだ。奈津美にプレゼントを渡すタイミングと、その時のシュミレーションをだ。

奈津美に会ったら、とりあえず、ケーキを渡す。そして予定通り「今年はまだプレゼントがありません！」とでも言って、鞆からプレゼントを出して渡す。恐らくここで、奈津美は驚いたり、ありがとうと言ってくれたりするだろう。そして、奈津美はすぐにプレゼントを開けるだろう。

問題はここからだ。

プレゼントの中身である下着を見て、奈津美はどのようなリアクションをするだろうか。今さらになって、そこが予想がつかないのだ。プレゼントを渡すこと自体については、奈津美がどのような反応を示すか、大体予想はつく。しかし、旬は肝心のその先については何も考えていなかった。

プレゼントを選んでいた時に、奈津美が喜びそうなもの、と考えていたのは確かだ。そして、奈津美が喜ぶのだったら、奈津美が使えるものかいいと思った。下着だって、十分使えるものに入る。だからつい、思慮に欠けたのかもしれない。

奈津美に下着なんてあげてしまったら……

「ちょっと、何よこれ！ まさかこれをあたしに着けろっていうの



？ 旬の変態！ 最っ低！」

顔を真っ赤にして言う奈津美の顔が、とても簡単に想像できた。

何でこんなに簡単に想像できることが分からなかったのか。

プレゼントは、これまでの感謝や詫びなども込めて、奈津美に喜んでもらいたくて用意しようとしたはずなのに、肝心のプレゼントの中身は奈津美が喜ぶかどうか分からない。

どうしよう……

旬はかれこれ五分ほど、奈津美の部屋の前で悩んでいた。

しかし、もうそろそろ入らなければならない。奈津美も待っているはずだ。

旬は深呼吸してインターホンを押した。

ピンポーン、と小さな音がして、少し待つ。

するとドアの鍵が開く音がして、奈津美が出てきた。

「旬。いらっしやい」

久々に見た奈津美の笑顔の眩しさに、旬は眩暈がしそうになった。

「どうぞ、上がって」

「うん」

色んな意味でドギマギしながら、匂は部屋の中に入った。

「あ、ナツ」

靴を脱いでから奈津美に声をかけ手に持っていたケーキの箱を奈津美に差し出した。

「これ。ケーキ。改めて、誕生日おめでと」

奈津美は差し出されたケーキを受け取った。

「ありがとう。あ、前のバイト先のケーキ買ってきてくれたんだ」  
渡された箱がいつもと同じで、店名もそのまま書いてあるものだったのを見て奈津美は言った。

「うん。帰りに行けるところで味が確かなところって思い浮かぶの  
ここくらいだったから。久々にバイトの人と会ってきたよ。向こう  
は仕事でだったけど」

「そっかあ。わざわざありがとね」

「ううん。こんくらいなんでもないし」

そう言いながら、奈津美と匂はとても和やかに笑い合った。

その時の奈津美の表情に、和やかだったはずなのに匂はつい欲情  
してしまう。無意識のうちに、奈津美へ手が伸び、腕の中に奈津美  
を納めていた。

「匂？ ケーキが……」

奈津美と旬の体の間にケーキの箱が挟まれた状態になってしまい、奈津美は心配しながら旬を見上げる。

見上げてくる奈津美を見下ろして、旬は微笑んだ。

「誕生日、おめでと」

「さっきも聞いたよ？」

突然流れた甘い雰囲気、奈津美は照れ笑いを浮かべた。

「うん。また言いたくなったの」

「なにそれ」

奈津美が小さく笑うと、旬は奈津美の額に唇をつけた。奈津美がそれを上目づかいで見つめていると、唇を離れた旬と目が合う。ゆっくりと旬の顔がおりてきて、奈津美は目をつぶった。

旬の唇が奈津美の唇に優しく触れた。口づけは、すぐに終わったけれど、旬の顔は奈津美の顔から離れなかった。

「ナツの二十四歳、初キッス。しちゃった」

旬がニツと笑うと奈津美の頬が赤く染まった。

「もう。何言ってるのよ。ほら、手、洗ってうがいしてきて。すぐご飯の支度するから」

奈津美が旬の胸を押し、そっと体を離す。まるで子供に言うようなことを旬に言うが、旬はそれが嫌ではない。奈津美が照れ隠しで言っているということが分かっているからだ。

「はいはい」

素直に頷きながら匂はリビングへ向かった。奈津美はキッチンへ戻る。

ナツってば、可愛いなあ……

冷蔵庫にケーキをしまう奈津美を見ながら、匂は頬を緩め、鞆を置いた。

そしてその瞬間、鞆に入ったプレゼントの存在を思い出した。

わ、すれてた。

鞆を置いた格好のまま匂は固まった。そしてそのまま床に膝をつき、頭を抱える。

俺ってばつい忘れてた！ ナツが可愛くて忘れてた！

あんなに不安がたくさんあったというのに、奈津美の顔を見た途端、それを忘れて目の前の奈津美のこと以外は忘れ去ってしまったのだ。プレゼントだって、奈津美に渡すものだということに。

つうか、どうしよう……渡すタイミング……

悩みだす瞬間まで考えついていたシチュエーションは、ケーキを渡したそのあとすぐに、だ。喜びに喜びを重ねる、と考えていたのだが、それがうまくいか分からず保留にしたまま奈津美に会ったので、渡すというところまで至らなかった。

渡していいのか、このまま……

今、きっと奈津美は機嫌がいい。何事もなければ、今日はこのままでいるのではないかと思う。そこに、ひよっとしたら奈津美の機嫌を損ねかねないものを渡してもいいのだろうか。

渡した場合のリアクションが最悪だった場合のことだけ簡単に思  
い浮かぶ。

ダメだ！ そんなことになったら、絶対に「最低」って思われる  
！ 「大嫌い」って言われる！ いや、それくらいなら耐えられる。  
でも！ 絶対エッチさせてもらえねえ！ そんなだけは嫌だあ！

いや、むしろそれくらい耐えられないのか。所詮、旬が考える最  
悪なこととはその程度のことだ。

今さら、プレゼントの中身で、別れ話に発展してしまいそうなほ  
ど奈津美が怒ると思わない。というより、思いたくないというの  
が旬の気持ちだ。と言っても、無視されたり、近寄るなどと言わ  
れるのは、旬には耐え難い仕打ちなのだ。

だからと言って、せっかく用意したプレゼントを渡さずに終える  
というわけにはいかない。せっかく旬の初給料で買ったものだ。し  
かも、置いてあっても旬が使えるわけもない。代わりに誰かにあげ  
られるようなものでもない。

本当にもう……どうしたら……

「旬？」

台所の方から聞こえた声に、旬は肩を大きく震わせる。

「な、何？」

奈津美の方を見ると、料理を乗せたトレイを持った奈津美が立っていた。

「もうできたよ。……どうかしたの？」

明らかに落ち着きのない匂を見て、奈津美は小首を傾げる。

「な、何もないよ！ あ、そうだ。手、洗ってないや」

自分の狼狽えを誤魔化そうと、匂は洗面所に向かった。

その後は何事もなく二人でご飯を食べたりテレビを見ていたりした。

奈津美の誕生日でも、本当に何事もなく、いつも通りだ。

しかし、やはり匂だけはプレゼントのことが気になって落ち着かない。

「……ねえ。匂。どうかしたの？」

流石に奈津美にも気付くれた。

「えっ……どうかって？」

「さっきからそわそわしてるっていうか……心ここにあらずって感じだから」

奈津美は匂のことを訝しげに見ている。分かりやすい匂のことだ。気付かれるのも無理もない。

「あ……と、その……」

ここで「何もない」というのは、無理があるということは、匂にも分かっていた。むしろ、そう言うことでぼろが出てしまいそうだ。

「ケ、ケーキ！ ケーキ、早く食べたいなって思ってた」

つい口から出た言葉がそれだった。奈津美がきょとして匂を見る。

「何？ そんなに楽しみにしてたの？」

奈津美が小さく吹き出した。

「ケーキはあたしのために買って来てくれたんじゃないの？」

「いや……俺もしばらくケーキは食べてないから……」

からかうような奈津美に、匂は苦し紛れに言った。

「もう……じゃあ、用意するね。飲み物、紅茶でいいよね？」

奈津美はテーブルの上の食器を重ねる。そのまま腰を上げて、台所へ行ってしまおうようだ。

しかし、このまま誤魔化すようなことでいいのか。これでは問題は何も解決しない。

「ナツ」

匂は意を決して奈津美に声をかけた。

「ちょっといい？」

「何？ 改まって」

首を傾げながら奈津美は手を止めた。

「えっと……今日、ナツの誕生日だから、その……あの……」

いざ言おうとしたら全く言葉が出てこない。いつもの匂らしくない様子を見て、奈津美は不思議に思う。

匂は何かを言うのをあきらめ、自分の鞆に手を伸ばした。その中から、ピンク色の袋を取り出し、奈津美に差し出した。

「誕生日プレゼント！」

匂は思い切って言った。これを言えば、伝わるはずだ。

「え……」

奈津美は差し出されたものを見て、目を丸くする。とりあえず、ゆっくりとそれを受け取った。

「これ……あたしに？」

目を大きくさせたまま、奈津美は匂を見た。匂は黙って頷く。

「え……だって、ケーキ……それに、プレゼントって……え？」

奈津美は、匂が思っていた通りのリアクションを見せる。

勿論、奈津美は予想もしていなかったのだ。いつの間にか、二人の間にプレゼントのやりとりはしないものとなっていたし、今回もいつも通り匂がケーキを用意してくれたので、プレゼントを貰えるなんて思ってもいなかった。

「そんな……気を遣わなくてもよかったのに……」



この言葉も、旬はある程度予想していた。プレゼントを渡したら、奈津美は喜ぶよりも先に、旬のことを気にするであろうことは、分かっていたのだ。

「これ……俺の、工場での初めての給料で買ったんだ」  
旬は真剣な顔で奈津美を見た。

「これまでずっと、迷惑かけたり、心配させたり、不安にさせたりしてたから……だから、少しでも、ナツに何か返せたらって思ってた……」

真剣に言ったが、ふと中身のことを思い出した。今の言い方だったら、まるで大奮発したようだが、実際はそうではない。

「……大したもんじゃないし、喜んでもらえるか分からないけど……」

小さな声になって、旬は奈津美から目を逸らした。

奈津美は、プレゼントの袋を胸に抱きしめた。

「……ありがとう」

その声に、旬は奈津美に視線を戻した。

「ありがとう。本当に、嬉しい」

奈津美は泣いてしまいそうな顔をしながら笑っていた。その表情は、今日ケーキを渡した時よりも、お祝いの言葉を貰ったときよりも、一番嬉しそうだった。

奈津美を見て、旬の表情も緩んだ。

「開けていい？」

目をキラキラさせて奈津美は言った。旬は半笑いの状態で固まる。急に体中の毛穴から汗がふきだす感じを覚えた。

「う……うん」

旬は思い切り目を逸らしながら頷いた。今、奈津美の目が見れない。渡したプレゼントに対して、純粋に喜んでもらえる自信がないのだ。

奈津美は笑顔を崩さないまま、袋を閉じる赤いリボンを解く。

「あ、あの、マジで、大したもんじゃないから……」

だから、そんなに期待しないでほしいんだけど……

奈津美の機嫌が良ければ良いほど、それが崩壊するのは一瞬であり、凄まじい。それを想像すると、旬の心臓の鼓動が早くなる。

奈津美が袋を開けて、中身を覗く。旬には、その時の表情が、一瞬固まったように見えた。

「え……？ 下着？」

奈津美は目をぱちくりさせながら旬を見た。目が合って、より一層旬の緊張が増した。

「いやっ……それはその……そうなんだけど……えっと……職場の人と、その彼女の人がプレゼント選ぶのについてきてくれて……色々見てて、でも何がいいのか分かんなくて……下着はどう？ って言われたから、一緒に見て選んだんだけど……」

旬は必死になりながら、プレゼント選びの経緯を話す。話したと

ところでどうにもならないが、それ以外に言うことがなかった。

「そうなんだ」

奈津美の視線がまた袋の中に戻る。奈津美の一挙一動が、匂に焦りと恐怖を与える。奈津美の反応がどうなのか、いまいちわからない。

奈津美はまだじっと袋の中を見ている。そして、ふっと奈津美の表情が緩んだ。

「可愛い」

「……へ？」

奈津美の言葉に、匂は間拔けな声を出してしまった。

「これ、すごく可愛い」

奈津美は笑顔を匂に向けた。そして、袋の口の方まで中身を出す。いくら部屋の中には二人きりとはいえ、全てを出すのは気が引けたので、その状態で奈津美はそれを膝に置いた。

匂が選んだのは、三分の二カップの白地に淡いピンクのレースがカップ全体を覆い、そこに白やピンクの糸で手書き調の花やリボンの形が刺繍されている。ショーツも同デザインのセットだ。

特に凝っているわけでもないが、派手すぎず、地味すぎず、くどくもなく、万人受けするようなデザインだ。

「ほ……ホント？ 気に入ってくれた？」

旬は目を丸くして身を乗り出す勢いで奈津美に聞いた。

「うん。ちょうど、新しいの欲しいなって思ってたんだけど、いいのがなくて。だから、すっごく嬉しい」

奈津美は何の偽りのない笑顔を旬に向けた。それを見た瞬間、旬はその場に倒れ込んだ。

「よかったあ……」

体の力が一気に抜けた。あんなに緊張して気張っていたのに、奈津美の反応があっさりとしていて、しかも、かなりの好感触だ。安心感でいっぱいだ。

「何？　なんでそんなにホッとしてるの？」

旬の心情を知らない奈津美は首を傾げて旬を見下ろす。

「いや、だって、気に入ってくれるか分かんなかったし。下着あげて変に勘違いされたらなって」

ホッとしたついでに、旬の口は簡単に滑ってしまった。

「勘違い？」

わずかに眉を寄せた奈津美を見て、旬ははっとして口をつぐむ。

「いや……その……」これ着せて、あたしに何をさせようっていうの！？」みたいな……」

「……何か考えてたの？」

奈津美の眉間に、グッと皺が寄った。

「そんなわけないじゃん！」

旬は慌てて首を横に振った。ここで機嫌を損ねてしまえば、せっかくうまくいっていたのが全て台無しだ。

じっと旬を見て、奈津美は小さくため息をついた。

「別に、何も思わないわよ。そりゃあ、男の人に下着もらったのなんて初めてだけど。でも、最近じゃプレゼントに下着って珍しくないみたいだし。あたしの友達ももらったことあるって」

「あ。そうなんだ」

沙織も同じようなことを言っていた。やっぱり、巷では普通だったのか。

「友達に聞いた時、あたしはどうなんだろうなって思ったけど……こうやってもらってみると……嬉しいもん。旬があたしのために選んでくれたんだって思うだけで」

奈津美の顔が照れくさそうに緩んだ。

「それに、何となく、旬からのプレゼントが下着って、しっくりきたのよね。アクセサリー貰うより、イメージに合ったっていうか」

「え……そうなの？」

「何となくね」

そう言われてしまい、旬は複雑な気持ちだ。ある意味ぴったりのプレゼントをしたということなのか。胸フェチの旬としては当たり前のことなのだろうか。喜ぼうにも喜べない。

まあ。いつか。ナツが喜んでくれたから。

終わりよければ全てよし。ということで、旬の初めてのプレゼント計画は、上手くいったのだ。

「でも、もし旬がコスプレっぽいのか、普段絶対に着けられないようなのをくれようとしてたら、あたしも流石に許せなかったけどね」

奈津美がプレゼントを丁寧に袋にしまいながら、笑顔で言った。

「……ははっ。そうだよなー」

旬も笑いながら、心の中ではものすごく安心していた。

よかった。チョイス間違えないで。本っ当によかった。

しかし、旬が下着を選ぶ段階で、かなり妄想していたことは、旬の脳内で奈津美にさせていたことは、絶対に奈津美に知れないようにしなければならぬ。

このことは、墓場まで持っていこうと誓う旬であった。

## 61 お楽しみ(2)

奈津美が風呂から上がってくると、旬は先にベッドに横になって、テレビを見ていた。

「あ、ナツ！」

奈津美を見て、旬は体を起こし、すぐにテレビを消した。

「ナツ！ おいで！」

両手を広げて、旬は奈津美を呼ぶ。

この時の旬は、何をしようとしているのか、何がしたいのか、下心が見え見えで、奈津美は思わず苦笑いしてしまう。

と言っても、付き合って一年半以上経つ男女が、夜に二人とも入浴を済ませて……となると、文字通り、やることは一つしかない。

奈津美は部屋の電気を消し、オレンジ色の薄暗い電灯の中、ベッドに向かう。

「電気なんか消さなくてもいいのに」

薄暗い中でも、旬が口を尖らせたのが何となく分かる。

「だって恥ずかしいもん」

そう言いながら、奈津美は旬の腕の中に入る。

「今さらなのに。あ、でも違うな。俺、明るいところで、恥ずかしがるナツをはっきり見たい」

ニコニコと笑いながら旬は奈津美の体に腕を巻きつける。

「……エッチ」

「うん。俺、エッチだから」

いつもと同じ会話の流れで、二人は自然と笑い合う。傍から見れば下らなくて何が楽しいのか分からなくても、二人の間でよければ全てよし、となるのだ。

「あれ？ ナツ、なんかいつもと違う匂いがする」  
奈津美の首筋に顔を埋めて匂が言った。

「あ、カオルに貰った石鹸を使ってみたの。肌がしっとりするっていうから」

「ふーん。どれどれ」

匂の右手がするりと奈津美のパジャマの裾から入り込む。そして、なんの迷いもなく、奈津美の胸の膨らみに辿りつく。

「あ、やだ、匂……どこ触ってんの」

「だって、いつもと違うのかなーって思って」

「そこじゃなくても分かるでしょ」

「でも、こっちがいいんだもん」

匂は、掌全体で奈津美の胸を堪能する。



「カオルさんに貰ったのって、誕生日プレゼントで？」

「うん……今日行ったら、くれたの」

「ふーん……」

旬は奈津美の胸に触りながら、いつも通りのテンションで会話を  
する。

会話と違って、旬の手の動きだけはいやらしく、奈津美は声が乱  
れそうになるのを必死に堪える。旬はまだ普通にしているのに、自  
分だけ乱れてしまうのは嫌なのだ。

「じゃあ、何で俺があげたのはつけてないの？」

旬の指が、奈津美の固くなった胸の先端を撫でた。

奈津美は、パジャマの下は、何も身につけていなかった。それは  
いつも通りなのだが、カオルの誕生日プレゼントは早速使って、旬  
のプレゼントは使わないということに引かかったのだろうか。

「んっ……だって、新しいから、一回洗濯しないと」

敏感になったところを触られて、奈津美の肩は小さく震えた。そ  
れに気づかれないように、平静を装う。

「ふーん」

淡々と相槌を打ち、旬は指でいじっていたところを、少し痛いく  
らいの力でつまんだ。

「あっ……何？ 怒ってるの？」

思わずはつきりとした声が出てしまい、奈津美は顔を赤くしながらも旬の顔を見た。この会話の流れでこんなことをするのは、奈津美のしたことに少しむっとしているのだろうか。

しかし、旬は奈津美の顔を見てニッと笑った。

「ううん。ナツの反応が可愛いだけ」

確信犯の顔を見て、奈津美は耳まで真っ赤にした。

旬は、奈津美が旬のしていることに耐えているのだということを知っているのだ。だから、あえて自分は普通を装っていたのだ。

「もう、旬……やだ、あつ」

キュウツと指に力を入れられ、奈津美はもうその反応しかできなかった。

「気持ちいい？」

撮んだまま、旬は親指と人差し指を擦りあわせるように動かす。奈津美は声が出ないように口を引き結んだ。

「気持ちよくないんなら、やめよっかなあ」

旬は指を離し、人差し指の先で、今まで摘んでいたところを弾いた。奈津美はグツと旬のスウェットの袖を掴んだ。

「……旬はやめられるの？」

少し目を潤ませて、熱い吐息とともに奈津美は言った。

「無理」

笑顔で言いながら、匂は奈津美を押し倒した。

「さすがナツ。俺のことよく分かってる」  
なぜだか匂は嬉しそうにしている。

「でも、やめられないのは俺だけじゃないでしょ？」  
顔をうんと近づけて、匂の息が唇にあたるほどの近さだった。

あまりにも近すぎて、顔を背けることもかなわなかった。

「……うん」

観念して、奈津美は小さく頷いた。

「へへっ。可愛い」

そのまま唇が重なった。

「……よし。今日はナツの誕生日だし、ナツが好きなことしょっか」  
唇を離し、匂が思い出したように言った。

奈津美は匂を見上げて目をぱちくりさせる。

「え……好きなことって……」

「カエルと犬と馬、どれが好き？」

「は？」

一人でどんどん話を進められ、更にその脈絡のなさに奈津美はついていけない。

どうしてここで好きな動物を聞かれるのか。しかも、どういう組

み合わせの三択なのか。

「何で、いきなり……」

「いいから。どれが好き？」

分からないから聞こうとしても、旬は笑顔でまた勝手に話を進めようとする。

「じゃあ……犬？」

奈津美は促されるままに答えた。その三択ならば、犬だろう。

「分かった」

何が分かったなのか、奈津美には分からない。

奈津美の反応はお構いなしに、旬は右手で奈津美の左肩を掴んで浮かせ、右脚を奈津美の体の下に入れ込んだ。すると、特に抵抗しなかった奈津美は、簡単にうつ伏せにされてしまう。

「え……ちよつと、何？」

奈津美が仰向けになろうとすると、旬は上半身を奈津美の背中に重ね、ベッドに押し付ける。

「やだ……重いっ」

奈津美が旬の下で体を振って抵抗する。

「ナツが言ったんでしょ？ 犬が好きって」

旬が奈津美の耳元に唇を寄せて言った。耳に旬の息が当たって、奈津美は思わず肩を震わせた。

「それとこれとどういう関係が……」

「分かんない？ この体勢で」

「え……やっ！」

旬は後ろから奈津美の腰回りに腕を回し、上に持ち上げる、上半身はうつ伏せでベッドに押し付けられているため、尻だけを上に突き上げる体勢を取らされる。

そして、突き出したそこには、少し硬くなった旬が当たっている。

「なんつーの？ わんわんスタイル？」

「なっ！」

奈津美の顔が一瞬で真っ赤になった。

「何言ってるのよ！」

奈津美は顔だけ後ろを振り返って旬に言った。

「え？ 可愛く言ってみただけど。普通にバックって言った方がいい？」

「そうじゃなくて……もう！ そんなことはつきり言わないでよ！」

「いいじゃん。今は二人きりなんだし。何したって、問題ないし」  
そう言いながら、旬の手は奈津美の胸の下に入り込む。

「あ……旬……」

後ろからギュッと掴まれて持ち上げられ、奈津美は腕を伸ばして体を起こし、四つん這いの姿勢にさせられた。

旬の左手は胸を掴んだまま、右手は奈津美のパジャマを裾からたくし上げる。肩の辺りまであげて、今度は両手で奈津美の胸を掴み、力強く揉みこんだ。

「やつ……ダメ」

次第に奈津美の息が絶え絶えになってくる。

「ダメって、何が？」

旬が背中に唇をつける。それに反応して、奈津美は肩を縮こまらせた。

旬の問いに、答えることができない。何がダメなのかなんて、言えるはずがない。自分はこんなに旬の刺激に感じているのだ。それに、口を開けば、問いに対する答えではなく、ただ旬に溺れる時の声が出てしまいそうになるからだ。

奈津美の返事がないことは気にせずに、旬は左手を離し、奈津美のパジャマのズボンに指をかける。そしてそのまま、ショーツと一緒に膝までずり下げた。

全てを脱いだわけではないが、敏感な部分は全て晒された。恥ずかしくて、奈津美は唇を噛んだ。

力強く奈津美の胸に触れていた手が離れた。奈津美の背中の上にあった旬の体も離れていく。それと同時に奈津美は力が抜けて、肘をついた。

布が荒々しく擦れる音が聞こえた。ベッドの下に、何かが落ちるのが、視界の片隅にうつった。

それが何か確認する前に、奈津美の背中に旬が覆いかぶさってくる。背中に感じる旬のぬくもりで、旬が裸になっていることを知った。

「ナツ……」

旬がうなじに唇をつけて、またさつきと同じように胸を触ってくる。

「あ……」

背中に触れる旬の素肌の感触が、さつきよりも気持ちいい。二人を隔てるものが何もない。それだけで、より幸福感に包まれる。

左手は奈津美の胸の上で荒々しく動いたまま、右手だけが胸から腹を伝って下へ滑っていく。足の付け根をなぞりながら、閉じられている脚の間に入り込む。

「ふっ……」

奈津美の声が鼻から抜ける。

「やばい……」

旬が奈津美の耳元で囁いた。

「俺、今日はまだ触ってないけど、ここ、どうしたの？」

旬は中指の先で、奈津美の潤みを帯びている部分を撫でる。

「すごいことになってるけど……?」

旬は奈津美に答えを促しているのか。話し方が疑問調になっているが、奈津美は羞恥に耐えるばかりで答えられない。  
そんな奈津美の様子を見て、旬の悪戯心は煽られる。

旬は濡れた指を今触れているところから、少し上に動かした。

「あっ……」

奈津美の全身がビクッと震えた。

その反応を見ながら、旬はそこをゆっくりと撫でさする。

「やっ……ん……」

奈津美の下半身が疼きだす。

この体勢では、何をいっどうされるのか、旬の動きが確認できない。確認しようとする前に、旬が奈津美の意識を違うところへ持っていく。

いつも以上に、されるがままで、恥ずかしくて、悔しいのに、それから逃げることはできない。

「あぁっ……」

奈津美の中に、ぬるりと細いものが入ってきた。旬の、指だった。

「旬……」



奈津美がうわ言のように呟いた。その先に続く言葉が「やめて」なのか「もっと」なのか、奈津美は自分でも分かっていなかった。しかし、奈津美の体は恐らく、後者の方だ。

「ちょっと、ナツ、可愛すぎ。もう俺ダメだ。我慢できない」

旬は入れた指をすぐに抜いた。そして、体勢をかえて、また奈津美に重なる。もうとっくに硬度を持ったそれを、奈津美の中に埋め込みながら。

「んっあっ……」

奈津美は両手を力強く握りしめた。そうすることで、旬の重量感に耐える。

旬は、その奈津美の手に自分の手を重ね、解きほぐすように優しく握る。そして緩んだ指と指の間に、自分の指を絡める。

それをされただけで、奈津美はまた気分がおかしくなってしまうそうだった。

普段は意識することなんてないのに、手の感触というものは、こんなにいやらしいものだっただろうか。

「ナツ……」

旬がうなじに唇をつけ、吸い付いた。そこから全身に甘い痺れが全身に走った。

「あっ……」

「……くっ」

旬は息をつめた。奈津美の中で、旬がより一層窮屈さを感じる。

この感覚は、今までに何度も味わったことがある。

「……ナツ？」

旬は顔を上げて奈津美を見下ろす。

奈津美は、ベッドに顔を押し付けて、肩を小さく震わせながら大きく息をしている。この様子も、今までに何度も見たことがある。

「……もしかして、イッちゃった？」

旬の言葉に、奈津美の返事はない。その代わりに奈津美の耳が赤くなる。

「えっ！ マジで？ 何で？ どこでイッたの？」

旬は驚きのあまり、奈津美に疑問を畳み掛ける。

いつもなら、奈津美のこの反応は嬉しい限りのもので、思い切り可愛がるなり、恥ずかしがる奈津美をからかうなりするところだが、今回に限っては違った。

旬としては、今までの奈津美とのまぐわいを通じて、奈津美の体やその反応については、十分に分かっているつもりだった。どこが弱いとか、どうされることがイイとか、その加減も知っているつもりだった。

しかし、今は奈津美が快感の大きな波にさらわれてしまうほどのことをしたつもりはなかったのだ。旬としては、まだほとんど動いていないし、軽く触れただけだった。

「……そんなの、聞かないで。あたしだって、分かんない」

奈津美がぐもった声で言った。羞恥で、顔を上げることができない。

奈津美にも、自分の体に何が起きたのか分からなかった。ただ、抑えることができないまま、波にのまれてしまったのだ。

必死に小さくならうとしている奈津美の背中を見て、旬は思い切りその背中に抱きついた。

「ナツ、可愛いー！」

もう頭に浮かんだ疑問なんてどうでもいい。旬はデレデレと鼻の下を伸ばしきっている。

「ナツってば、いつからそんなに敏感な身体になっちゃったのー？」  
旬はあっという間にいつものからかいモードに切り替わる。いや、正確にはいつも以上の、だ。

「知らなかったなー。ココとココ以外にナツの弱点があったなんて」  
旬は緩く腰を動かし、指で奈津美の「弱点」に触れる。

「やっ……ダメ」

「ああ、イッたあとだからもっと敏感になってる？」

「も……旬っ」

奈津美はいつものように怒りたいのだが、息が切れているので、旬にとってはさらなる興奮剤にしかない。

「でもナツ、後ろからされるの、そんなに弱かったっけ？」

旬が本格的に腰を動かし始めた。

「……知らないっ」

奈津美は顔を真っ赤にさせながら旬の動きを受け止める。それでも口だけは必死に自我を保とうとする。

その様子もまた、旬にはたまらない。

「俺はー。正直言うと、そこまで好きじゃないんだよな」

「え……あっ」

旬の意外な発言に、奈津美は驚くが、一瞬でそれどころじゃなくなった。

「まあ、この感触はめっちゃくちゃ好きなんだけど。ナツともぴったりくつつけるし」

旬は両手で奈津美の両胸を掴み、自分の体に引き付ける。

「ナツのこと、いじり放題だし？」

そして指先でその先端を摘む。

「ん……」

「ナツはこっちの方が感じやすいかも？　って発見もあったし」

確かに、後ろから、というこの体勢は、お互いの体の凹凸がフィットしやすいのか、密着度が高い。それに、後ろから手が伸びてくるので、旬が触れてくるタイミングが分からない。不意に触れられ

ることと、いつもと感触が違うせいかな、奈津美の反応も違ってくるのだ。

「でも、一個だけ嫌なんだよなー」

旬はそう言いながら、奈津美と一緒に横向きに寝返りを打った。

「なに……？」

奈津美は息を乱しながら聞いた。

旬が、こういうことに不満を持つことなんてあるのか。言い方は悪いが、旬は出来れば何でもいいのだと思っていた。それを、嫌ななんて言うことがあるなんて、意外すぎる。

「ナツとチューできない」

旬は奈津美の肩に顎を乗せる。

「それと、絶対可愛い表情してるのに、それが見れない。もう、それだけが悔しくて悔しくて」

それを言ったあと、旬はすぐに奈津美から離れ、体を起こす。それと同時に、奈津美の中に入ってた旬もゆっくりと抜けた。

「つうわけで、ナツ。今度はカエルさんね」

「え……ひゃっ」

旬の言うことが分からないまま、奈津美は仰向けにされた。

「旬……何、カエルって……」

そういえば、最初に言っていた選択肢の中の一つだった。さっき

は奈津美が犬と言ったから、さっきまでの体勢だったのだ。

「だって、カエルっぽいでしょ？」

匂はニツと笑いながら、あつという間に奈津美の体にひっかかっただけのパジャマと下着を取り除く。

そして、奈津美の両ひざの裏に両手をあてて、足を左右に開かせた。

確かに、この足はカエルの足の形と似ていると言えなくもない。

「やつ……それは匂がさせてるんでしょ！」

膝から下をバタバタさせて奈津美は抵抗した。

「いいじゃん。可愛いから」

「カエルのどこが、あつ」

言葉の途中で匂が腰を推し進め、奈津美の中に入ってきた。

そして匂は、手を離して体を倒し、奈津美の上に覆いかぶさる。

「可愛いのは、ナツが、だよ？ 分かってる？」

それを見つめながら言われて、奈津美は顔を逸らした。恥ずかしすぎて、匂の顔が見れない。奈津美の反応に、匂はクスツと笑った。

「ほら、可愛い」

そう言って、奈津美の頬に口づけた。

奈津美はゆっくりと顔を匂の方に向けた。また匂の顔がおりてき

て、今度は唇が重なった。

「やっぱ、こっちからの方がいい」

旬が満足そうに笑って言った。

「こっちの方が、ナツの顔見放題だし、チューもし放題だし、おっぱいも見えて触って好き放題だし」

旬は奈津美の胸に触り、胸元に顔を埋めた。やはり、旬はそこがお気に入りらしい。

「もう……旬ったら……んっ」

旬が緩やかに腰を動かし始めた。少しずつ、力強く、速くなってくる。

「ナツ……」

旬は息を荒くしながら胸元に唇を滑らせる。そして、首筋にも吸い付いていく。

「あ……旬っ」

奈津美は旬の背中に腕を回した。旬の背中に触れて、ものすごく安心することに気が付いた。それと同時に、旬がこの体勢が一番好きという理由が、何となく分かった。

この体勢が、一番、旬と正面から向き合える。

旬の素肌の感触や温度、旬の匂いが一番近くに感じられて、ほっとする。

あまり見つめられるのは苦手だが、その分、旬が奈津美を見ていてくれているのだと分かるし、奈津美も旬だけを見ることができ

今まで特に考えたことはなかったが、奈津美にとっても、こうしてすることが、一番なのだと気付いた瞬間だった。



## 62 次への期待

奈津美と旬はベッドの中で向かい合う形で横になり、先ほどまでの余韻に浸っていた。

「なんかもう、今日も濃厚だったな」

旬が奈津美の腰に手を回しながら言った。

「なに、それ」

奈津美はそう聞きながらも、何となく旬が言う意味が分かるので顔を赤くなる。その濃厚さを受けたのは、奈津美自身の身体なのだ。

「ナツが誕生日を迎えての初エッチとしては、十分すぎるくらいだったよなってこと」

そう言って、旬は奈津美に口づけた。

互いの舌と舌を絡ませて、吸い付いて、これもまた、濃厚な口づけだった。短い時間でそれを終わらせ、旬はゆっくり唇を離す。

「俺の誕生日の時は、もっとすごいことしような」

唇が触れるか触れないかのところで、旬が言った。

「もう……何言ってるのよ」

奈津美は恥ずかしそうに視線を逸らした。

「あ」

しかし奈津美が何か思いついたように旬を見た。

「ねえ、旬。今、欲しいものある？」

唐突な質問に、旬はきよんとする。

「欲しいもの？ 何で？」

「旬の誕生日。あたしも何かあげたいから……旬は何か欲しいものあるの？」

旬の誕生日まで、一か月を切っている。奈津美は、こんな風にプレゼントをもらうなんて思っていなかったので、旬への誕生日プレゼントも用意していない。それでも、まだ三週間ほどはあるので、大体のものなら、用意できるはずだ。

奈津美は、旬にプレゼントをあげたことは、一度もない。バレンタインの贈り物はあるが、それもチョコプレート菓子なので、何を贈るかということ考えたことがない。

旬が具体的に何が欲しいのかといことは、思い浮かばなかった。

奈津美の真剣なまなざしを見て、旬は微笑んだ。

「いいよ。そんな気遣わなくても。俺はナツにあげたいからあげたんだし」

旬は優しく奈津美の頬を撫でた。すると、その頬が少しむくれる。

「あたしだって、あげたいんだもん。旬が喜ぶもの」

「……可愛いなあ、ナツは。襲いたくなるじゃん」

本気で襲いそうになるのを堪えながら、旬は言った。

「もうっ。はぐらかさないでよ」

「別にそんなつもりないって。んー。欲しいのっていったら、ナツともっと一緒にいられる時間かな」

言い様によったら、かなりキザになる台詞を旬は言った。しかし、今の旬にとっては本音だ。ただし、旬の場合は「もっとナツとエッチできる時間」という意味だが。

「そんなんじゃないくて、ちゃんとした物で。何かない？」

照れると思ったら、奈津美はあっさりと旬の言ったことを流した。これには旬も調子を狂わされる。

「えー……そうだなあ」

旬はゴロンと仰向けになって、天井を見つめながら考える。

正直、欲しいものと言われて具体的に欲しいと言えるものが、思い浮かばなかった。旬はもともと、性欲は強くとも、そこまで物欲は強くないのだ。必要な物、と考えても、自分で手に入れられるものばかりだから自分で手に入れるし、そうでなければ、金や車など、今の旬には手の届かないところにある、本当に手に入れるものが困難なものばかりだ。奈津美に言っても困るだろうし、第一、奈津美にプレゼントしてほしいものではない。

「別にないかなあ……」

じっくり考えても、これというものは出てこなかった。

「本当に？」

奈津美は旬の胸元に手を置いて、上半身だけ、旬の上に重なる。

「遠慮とか、しなくていいのよ？　ちょっとでもいいなって思うものとか、ない？」

上に重なってくる奈津美を旬はじっと見つめた。

寝転がっていたせいで乱れた髪、濃厚な口づけのせいで濡れた唇、そして、旬の胸板の上に乗る、重量感がありながらも柔らかな、胸の膨らみ。

そんな奈津美に、欲しい物はないかと聞かれたら。

「ナツ」

ポロリと口から出てしまい、旬ははっとした。

「何？」

ただ名前を呼ばただけだと思ったらしく、奈津美は首を傾げた。それを見て、旬はホッとする。

つうか、エロいことしか思いうかばねえ。

旬の視線は、奈津美の胸の谷間に釘づけた。

「マジで何もないよ。欲しい物とかは、全然」

頭の中では、奈津美にしてほしいことがたくさん思い浮かんでいるが、それらはもちろん、口に出して言えるようなことではない。言ってしまったが最後、奈津美にどんな反応をされるか分からない。

「つうか、ナツが今日俺があげたヤツつけて甘えてきてくれれば、十分なプレゼントなんだけど」

思い浮かんだことをかなり遠回しな表現で言った。これくらいなら、大したことではないだろう。

「もう！　そういうのじゃなくて！　ふざけないでちゃんと考えてよ」

「いや、むしろ本気だったんだけど」

まるで本心だったのだが、奈津美はまた旬がふざけたように思っ  
たらしい。旬は苦笑した。

「やっぱ、俺が一番欲しいのはナツだな。つうか、ナツでしかない」  
旬はそう言いながら、奈津美の旬に近い方の太ももを撫でた。そ  
してその足を持ち上げて引っ張り、旬の身体をまたぐように促す。

「……もう。またそんなこと言って」  
促されるままの体勢になりながら、奈津美は恥ずかしそうに言っ  
た。

「大体、あたしは物じゃないのよ。あげられるものなんてないじゃ  
ない」

「……そうだなあ」

本当は色々な妄想が旬の頭を駆け巡ったが、旬は適当な相槌を打  
つことにとどめた。

「だからやっぱり、ナツと一緒にいらればそれでいいってこと」  
そう言って、この話を断ち切るために、旬は奈津美の背中を撫で  
た。手の平全体で撫で上げ、中指で、奈津美の背骨の線をなぞって  
いく。

「ん……」

「くすぐったい？」

肩を震わせた奈津美を見て、旬はクスッと笑った。

旬の指が背中から腰を伝い、そのまま下へ降りていく。すると、二つの柔らかい山の谷間にたどり着く。一瞬手の動きが止まったが、その指は、ねじ込むように谷間の中に入っていく。

「あっ」

奈津美の口から、少し大きな声がでる。

初めて見る反応だった。それもそうだろう。旬の指が、旬も初めて触れるところにたどり着いた。

「何？ ナツ、感じるの？ ココ」

旬は指先でそこをつついた。そこは、いつも旬が触れたり、口づけたり、旬自身が入る場所ではなく、本来、そういうことのためにない場所だった。

「やっ……違う」

奈津美は肩を縮こまらせ、旬の肩を掴んだ。

「そう？」

「やだ……やめて」

旬の指が触れるたびに、それを堪えるように奈津美の手に力が入る。

その反応を見て、旬はニヤッと笑った。

「なあ、ナツこっちでしたことある？」

「あ、あるわけないでしょ！」

奈津美の手に、旬が痛みを感じるほどの力が入る。だが、その反応が旬にとっては面白い。

「ふうん。じゃあ、俺の誕生日、ココ、ちょうだい？」

旬は指にグッと力を入れた。

「あっ……や！ 何言ってるの！」

奈津美が体を振り、片手を旬の手に伸ばす。

「だって、ナツの初めて、ほしいから。俺もしたことないし」

「やだ！ 冗談やめてよ！ 旬の変態！ そんなことしたら、嫌いになるから！」

奈津美の言葉は、旬がプレゼントを渡す際に恐れていたものと同じだ。しかし、旬の刺激に対して、奈津美がイイ反応をするので、旬の口元は緩むだけだ。

「んじゃ、一回試してみよっか？ 意外といいかもしれないし」  
旬はじわじわと指に力を入れる。

「ダメ！」

奈津美の背筋がピンと伸びる。

「やだ……旬、お願いだから、やめて……」

奈津美は眉間に皺を寄せ、涙目になって旬に訴える。

その表情は、なかなか旬のサディスティックな面を刺激するものだった。しかし、そんな目で見つめられると、段々とそんな気持ちが薄らいでいく。

「……冗談だよ。ナツがあんまりにも可愛いから、ふざけちゃいましたー」

旬は奈津美の背中を撫でながら穏やかに言った。

「旬のバカ」

奈津美は旬の胸に顔を伏せ、小さく言った。

「うん。ごめんな」

「……本当に思ってる？」

軽くあしらわれているように感じ、奈津美は目だけで旬を見た。

「思ってるよ。つうか、そんな目でみないでよー。また発情しちゃうじゃん」

旬はニヤリと笑った。

「発情したって知らないから」

奈津美は視線を旬から離しながら言った。

「えー。それは困るよー。ナツじゃないと鎮まらないのに」

「あたしが見ると発情するんでしょ」

「そうだけどー。でも仕方ないじゃん。俺、ナツにしか発情しない



し、ナツでしか鎮められないから」

「……調子のいいことばかり言って」

「ホントのことだから、他に言い様ないじゃん？」

旬はそう言って、奈津美の頭に口づけた。

「ナツ、もっかいしょ？ 今度は馬で」

「馬……？」

旬が最初に言った選択肢の中の、最後の一つだ。

しかし、今までの流れと、今の奈津美の体勢で、何のことなのか、すぐにピンときた。

「あっ……」

奈津美が何か言うよりも、旬の手の方が早かった。

「うわ。ナツ、もうこんなになってる」  
指で上下に擦りながら旬がにやつく。

「やっぱさっきので興奮した？」

「してない！ もう！ そんなことばかり言うんだったらもうしないから！」

奈津美は真っ赤になって体を起こし、腰を浮かせた。

「あー、待って、ナツ」

「あ……」

腰を浮かせた姿勢のところ、奈津美の入り口に、匂自身が宛がわれた。

「ほら、こんなになっちゃったしさ、めちゃくちゃ入りたがってるから……な？」

匂は切ないまなざしで奈津美を見上げている。

その目を直視できずに、奈津美はうつむいた。そして、そのままゆっくり腰を下ろした。

「ん……あ……あぁっ」

腰が下りると同時に、奈津美の声が大きくなっていく。匂の口からも、ため息が漏れた。

「ナツ、動ける？」

奈津美があまりにも苦しげな表情をしているので、匂は聞いた。

「ん……」

小さく頷き、奈津美はゆっくりと腰を動かす。

「あ……はぁ……」

動くたびに、奈津美が声を漏らす。それと同時に、匂の口からもため息が出る。

「すごい……絶景」

匂は下から奈津美を見上げて呟いた。

悩ましげな表情をして、肩を震わせて、じわじわと腰を動かしている。部屋は間接照明だけで、奈津美の腰のあたりから布団が掛けられているが、すっかり暗さに慣れた匂の目には、ちゃんと見えて

いる。特に、匂のすぐ目の前で揺れる、奈津美の胸の膨らみからは、目が離せない。

匂は、誘われるままに両手を伸ばし、掌全体でそっと胸を包み込む。何もしていなくても綺麗な形を保っているのに、触れてみるとそれが信じられないくらい柔らかい。少し力を入れると、簡単に形を変える。

「あ……」

見えないところで、奈津美が匂を締め付けてくる。

「……ナツ。動いてもいい？」

我慢できずに、匂は聞いた。

「なんかもう、破裂しそうなんだけど」

「……何でそんな真面目な顔して言うのよ」

奈津美は顔を赤くしながら言った。

「いや、マジで。このままパーンと×××破裂しそう」

「も……もう！ そんなのはつきり言わないで」

普通に口にはし辛い言葉を聞いて、奈津美はこぶしを作って匂の胸板を叩いた。

「いて！ 別にいいじゃん。二人きりだし、今、ナツの中に入ってるヤツの名前なんだし」

「だ、だからって！ はっきり言っていないものじゃないでしょ！」

「えー？ ナツって、たまに恥ずかしがって怒るポイントよくわかんねえよな」

「何よそれ」

「だって、大胆なことするかと思ったら、めっちゃくちゃ今さらなことで恥ずかしがるし。まあ、それもまたいじめがいがあるから可愛いんだけどー」

旬はそう言って、デレツと鼻の下を伸ばした。

「な。だから動いていい？」

「何が、だから、なのよ」

「可愛すぎるナツに焦らされると、マジで破裂しそうだから」

「……動いたら破裂するんじゃないの？」

「ううん。動いたら、発射するの」

旬はにっこりと笑って言った。奈津美は耳や首の方も真っ赤にして言葉を失った。

「もう勝手にして」

奈津美は恥ずかしくて上半身を旬の上に倒し、旬の顔の横に自分の顔を伏せた。

「うん。そうする。でも、ナツも気持ちよくなってるな」

旬は奈津美の背中に腕を回し、腰を上へ突き上げた。

「アッ……」

奈津美は旬の動きと同時に声を漏らした。

「気持ちいい？」

「……そんなの聞かないで」

「否定しないってことは気持ちいいんだ？」

「……知らない」

「ナツ可愛い」

一見かみ合っていない会話だが、それでも二人の間では十分通じている。旬については、都合のいい解釈をしているとも言えるが、それが間違っているようだが、今の二人には何の問題もなく進むことがある。

「ナツ……」

旬は奈津美の後頭部に手を回し、自分の唇に、奈津美の唇を重ねた。

もう片方の手は腰に回され、二人の体は隙間ができないほど密着する。

「俺、この体勢が一番興奮するかも」  
わずかにあいた唇の隙間から旬が言った。

「ナツの方が、俺にくっついてきてくれるみたいで。ナツの重みがぐっとくるっていうか」

「やだ……重いのか？」

奈津美は手について体を浮かせようとする。しかし、匂がそれをさせない。

「ダメ。つか、そういう意味じゃねえし」

匂が奈津美の体を抱きしめる。二人の体が密着して、奈津美の体は匂の体に重なるような形になっている。

「ナツの全部を、しっかり感じられるって意味」  
そう言っ、匂は腰を突き上げた。

「んんっ……」

「へへっ。ナツ、可愛い」

匂は奈津美の顎に口づけて、腰を動かした。

奈津美の方が優位になるはずの体勢で、奈津美はされるがままになっってしまった。

「あ……」

再び横に並んで寝ていた匂が、何かに気付いたように首を上げた。

「え？ 何？」

奈津美は匂が向いた方に顔を向ける。しかし、いつもと何ら変わらない部屋の光景だ。

「そっか。鏡」

納得したように匂が呟いた。

「鏡？」

旬が見ていたのは、部屋の片隅に置いてある姿見だということには分かった。だが、なぜ急にそれに注目したのかは分からない。

「ナツ。後ろからするときには、鏡の前でしたらいいんだ。そしたら、ナツの顔もおっぱいも見える」 心なしか、旬の目が輝いている。それに反して、奈津美は顔を真っ赤にした。

「なっ……何言ってるのよ！ そんなの、するわけないでしょ！」

「えー。ナツも俺の顔とか、何されるかとか、見えた方が安心するだろう？」

「しないわよ！ そんなの見たくもない！」  
奈津美ははっきりと言い切った。

「そんな……ナツは俺の顔見たくないっていうの」  
旬は露骨に傷ついた顔を見せた。これには、奈津美の方が焦る。

「ちがっ……そういう意味じゃなくて……」

確かに、旬の顔は見えた方が安心する。しかし、問題はそれ以外だ。旬が自分の後ろから何をするのか、そして、それに対する自分の反応……鏡に映る自分の姿を想像するだけで、ものすごい羞恥に駆られる。

「じゃあ、一回やってみる？」

「や、嫌！ やだ！」

必死になって奈津美は首を横に振って拒否した。

「そんなことするんだったら、もう二度と匂とエッチしないから！  
真っ赤になって、目を潤ませて奈津美は言った。

その様子を見て、匂はデレッと鼻の下を伸ばす。

「うん。分かった。ナツがそこまでいうんなら、しないよ」  
匂はデレデレと顔を緩めながら奈津美の頭を撫でた。

奈津美の必死な顔に、匂は弱い。どんな内容にせよ、お願いされたら聞いてしまう。

奈津美の方は、何となく子供扱いされたような感じでしっくりこないが、とりあえず、引いてくれたことにホッとする。

「まあ、今日は、だけど」  
奈津美がホッとした瞬間に、匂が言った。

「俺の誕生日の時に、今日できなかったことできたら、最高のプレゼントなんだけどなあ」

匂は奈津美を見て、にんまりと笑った。

「鏡の前ですかー。それか、こっち」  
匂の指が奈津美の尻の谷間を撫でた。

「やっ……どっちも嫌！」

「俺、楽しみにしてるから」



奈津美の拒否も気にせず、旬は眩しいほどの笑顔を奈津美に向けた。その笑顔の前で、旬はつい、何も言えなくなってしまった。

旬の誕生日まで、約三週間。

奈津美は、何かを失ってしまいそうな予感がした。

### 63 大人の仲間入り

「あー美味かった」

旬は満足した様子で言った。

「あの釜飯、めちゃくちゃ美味かったな。鶏五目だっけ？ 温泉卵入ったのって初めて食べた」

「うん。前に行った時も頼んで、すごく美味しかったから。よかった、気に入ってもらえて」

奈津美も嬉しそうに返す。

「前から思ってたけど、ナツって食べ物のお店よく知ってるな。カオルさんとかとよく行くの？」

奈津美は、二人でデートする時のランチや、ちょっと小腹が空いた時に行くカフェなどをよく知っている。どこに何料理の店があるとか、ここのケーキが美味しいとか、そういう情報を豊富に持っている。

「うん。あたしもカオルも、色んなお店行くの好きだし。でも、カオルの方が情報多いかな。最近、カオルに教えて貰う店の方が多いから」

「へー。今から行くところも、カオルさんに教えてもらったんだっけ？」

「そう……あ、カオルがね、旬に、誕生日おめでとうって伝えって、だって」

奈津美は思い出して、そのまま言った。

「おお。んじゃ、ありがとうございます、って伝えといて」

「うん。分かった」

何となくおかしな会話に、奈津美と旬は顔を見合わせて笑った。

今日は、十一月二十二日。旬の二十歳の誕生日だ。

去年の旬の誕生日には、旬の家で奈津美が手料理とケーキを振る舞い、ささやかなパーティーをした。しかし、今年は、お互いの仕事が終わってから待ち合わせて、鶏料理の専門店へ行った。そこで食事を済ませ、今はまた別のところへ向かっている。

「あ、ここ。この地下」

奈津美が指さしたのは、飲食店がいくつか入っているビルだった。外から地下へ通じる階段があり、奈津美と旬はそこへ入っていく。

「ナツは来たことあるの？」

階段を下りながら旬が聞いた。

「ううん。あたしも初めて。カオルはよく来るらしいけど。雰囲気もいいし、お酒の種類もたくさんあるんだって」

「へえー。楽しみ」

目的の店は、階段を下りてすぐのところにあった。

奈津美がドアを引いて開けると、カラン、と高い音がして、ベルが鳴った。

「いらっしやいませ」

カウンターの店の員が静かに声を掛けてきた。

「好きな席へどうぞ」

落ち着いた、品のある口調でそう続ける。

奈津美と旬は、店の真ん中のあたりの、空いているテーブル席に座った。

「なんか……すげー。オトナの雰囲気」

旬はきよろきよろと店内を見回しながら呟いた。

店内は、他にも客がいる様子だったが、小さくジャズが流れているのが聞こえる程度で静かだった。だから自然と旬の声のトーンも落ちていく。

「俺、こういう雰囲気初めて。いっつも居酒屋だったし」

今日、二十歳になったはずの旬がいつも居酒屋に行っていた、というのはおかしいが、それについて、奈津美は目をつぶることにする。今日からは、堂々と外で一緒に酒を飲むことができるのだ。

それに、今までと違ってイベントの日には外食だったのは、そのことがあるからだ。

旬の誕生日に、プレゼントなどをどうしようかとカオルに話したら、せっかくだから成人祝いにちゃんとした店で堂々と酒でも飲みに行ったらどうかと提案されたのだ。そしてその時に、このバーのことを教えてもらった。

ついでに「これで犯罪臭さもなく堂々と付き合えるようになるわね」と言われた。

色々と言い返したいところだったが、安心していることについて、嘘はないので、特に何も言えなかった。

旬のことは勿論好きだし、それだからこれまでずっと付き合ってきた。しかし、旬は未成年だった。しかも、付き合い始めた時は、卒業間際の高校生だったのだ。年下だとか、四歳差だとかいうことよりも、そのことは奈津美の中で引っかかっていた。だから、誰かしらと話していて、彼氏の年齢をきかれると、それに答えるのに抵抗があった。

しかし、これからはもう、それはない。旬が年下ということと、その差が四歳であることは、今までもこれから代わりはないが、同じ二十代になったというだけで、その気持ちは全く違う。

旬の中身だって大して変わりはないが、これでもう、何も気にしないで旬と付き合える。

「ナツ、何飲む？」

テーブルに置かれたメニューを見ながら旬が言った。

「うわ。英語ばっかだ。つうか、カクテルってこんなに種類あんの？」

メニューは、小さくカタカナでふり仮名はついているが、英語で表記されていた。そして、ビールや洋酒なども勿論数多くあるが、こういったバーならではの、その場で作るカクテルというものの種

類が多い。旬のバイト先のような居酒屋では見ない酒の名前があった。

「何にしようかな。せっかくだから、飲んだことないのにしようかな」

奈津美は、バーという場所には何度か来たことがある。それでも、全ての酒を飲んだことがあるわけではないし、こんなに種類が豊富なところに来たのだ。新しい味を求めてみたい。

「あ、ナツ、見て」

旬はメニューの中に何かを見つけ、指さした。

「セックス オン ザ ビーチだって。あ、これは、ビトウィーンザ シーツだって。カクテルって、エロい名前のヤツあるんだな」  
なんだか嬉しそうに旬は言う。奈津美は顔を赤くした。

「何でそんなのばかり見つけるのよ」

「え。何か、本能的に？ ナツ、どっちな飲んだことある？」

「ないけど……」

「んじゃ、これとこれにしよ。んで、ナツが頼んで」

「何であたしが……それに、勝手に決めないでよ！」

声は抑え気味にしながらも、奈津美は強めの口調で言った。

セクシヤルなイメージを持たせるその名前のカクテルは、わりと有名なので、奈津美も知っている。今まで行ったことのあるバーに

もそれはあった。

しかし、いざ頼むとなると、女性がさらっと言えるような名前ではない。気にする方が恥ずかしいのかもしれないが、それでも、変な勘繰りをされたら嫌なので、実際に頼んだことはないのだ。

「だって、今日は俺の誕生日だしー」

「自分で言う？ 大体、関係ないじゃない」

「なくないよ。今日は、ナツが俺のために色々してくれる日だろ？」

「何それ。誕生日の認識間違えてるわよ。大体、それも自分で言うことじゃないし」

「じゃあ、何もしてくんないの？」

旬が奈津美の顔をじっと見つめる。じっと見つめられると、奈津美は本当に弱い。見つめられるだけで、恥ずかしくて、胸がときめいて、嘘も強がりも言えなくなってしまう。

「大したことじゃなかったら、するわよ？ でも、これをあたしが頼むのは嫌」

少し旬から目をそらして、奈津美は言った。

「……可愛いなあ、ナツってば」  
深いため息と共に旬は言った。

「もう……」

奈津美は、小さく呟くだけだった。

旬は奈津美を見て微笑み、小さく手を上げて店員を呼んだ。

「セックス オン ザ ビーチと、ビトウィーン ザ シーツ。お願いします」

「かしこまりました」

店員は静かに言って、カウンターへ入っていった。

「……だから。何で勝手に決めるの」

奈津美は顔を赤くして、恨みがましく旬を見た。

「俺が頼んだんじゃないからいいじゃん」

旬はニヤツと笑って言った。

「それでも……あたしはいいって言ってない」

奈津美が注文することはなくても、男女が二人、性的なことを連想させる名前のカクテルを二つ頼むなんて、相手にどのような思われるか。もちろん、顔には出していなかったが、何か思われたのは違うだろう。

「ホントは、ナツに頼んでほしかったけど。ナツが俺以外の相手にエロい言葉言うの嫌だったから」

「そ……そんな話してるんじゃない……」

奈津美が耳まで赤くして言うのと、旬がその耳に唇を寄せた。

「あとで、俺しか聞いてないところで言うって」

これで奈津美の首まで真っ赤になった。



「だから……そんなこと言っていないっ」

奈津美は、完全に旬のペースに巻き込まれていた。

「お待たせ致しました」

店員が、二人の前にカクテルを置いた。

鮮やかな黄色のセックス オン ザ ビーチと、透き通った茶色のビトウィーン ザ シーツ。

「旬はどっちにするの？」

どちらが誰のとは決めずに頼んだので、奈津美は旬に聞いた。

「ん。俺こっちでいいよ」

旬は旬の近くに置かれた、セックス オン ザ ビーチのグラスを取り上げた。

「そう。じゃあ、旬」

奈津美はビトウィーン ザ シーツの方を手に取り、旬の方に向けた。

「改めて、誕生日おめでとう」

「ありがとう」

二人は、お互いのグラスを軽く合わせた。

小さく音がなって、二人はそれぞれのグラスに口をつける。

「あ、甘い」

匂は目を丸くしてグラスを見る。

「ホント？」

「うん。どちらかっていうと、ジュースっぽい。ナツのは？」

「んー。これはちょっと、きつめかな。美味しいけど……飲んでみる？」

「うん。じゃあ、ナツも、はい」

二人はグラスを交換し、お互いのものを一口ずつ飲んだ。

「ほんとだ。甘い」

「おお。何か濃い」

奈津美と匂がそれぞれ感想を言い、グラスを返した。

「ジュース感覚でこっち飲んだあとだと余計ぐわってくるな」

「そう？ 確かに、こっちの方がアルコールが強く感じるけど」

話しながらまた自分のグラスに口をつけていると、店のドアが開いた。

奈津美は何気なく視線を向け、入ってきた人物に目を丸くした。

「あ」

「どしたの？」

「塚田さんだ」

「え？ 誰？」

聞いたことのない名前に旬は首を傾げた。

「カオルの彼氏」

店に入ってきたのは、奈津美が知った顔だった。久しぶりだが、見間違えるはずはない。

「え？ マジで？ あの人？」

旬はピンと背筋を伸ばして入ってきた客を見た。男が二人だったので、旬にはどちらがそうなのかは分からない。

「ほら、あの背が高い……」

そこまで言って、奈津美は固まった。

「どっちとも高いじゃん。……ナツ？」

旬は、奈津美の方を見て、異変に気付いた。

奈津美の表情が、とても驚いたものになっていた。

「なんで……」

か細い声で、奈津美は呟いた。もうそれ以上の声は出ない。

カオルの彼氏、塚田と一緒に入ってきた男……それは、奈津美が旬の前に付き合っていた男だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7764c/>

---

続・ダメ男依存症候群 ～二人で一つの愛のカタチ～

2011年10月12日17時13分発行